樽本照雄　著

清末小説二談

清末小説研究会

清末小説二談

樽本照雄 著

清末小説研究会

清末小説二談

目　次

1　茅盾の「童話」……*13*

「童話」叢書目 *21*

2　「老残遊記」紀行……*46*

1　済南篇 *47*

2　鄭州篇 *81*

3　劉鉄雲死去の新聞報道……*95*

4　清末民初における定期刊行物の時空……*97*

1　はじめに *98*

2　定期刊行物の時間――ウルル山を確認 *99*

3　定期刊行物の空間――雑誌トライアングル *101*

4　おわりに *104*

附：清末民初の定期刊行物一覧 *105*

5　電脳化資料庫日記……*119*

6　電脳を利用した漢字文献整理……*124*

1　はじめに *124*

2　いままで *125*

3　ハードウェアの選択 *127*

4　ソフトウエアの選択 *128*

5　作業内容の明確化 *130*

6　データベースの設計 *131*

7　データベースの構築 *138*

8　書籍の形に *139*

9　今後解決すべき問題点 *141*

10　おわりに――電脳の可能性 *142*

7　清末民初小説の種類……*144*

その１　準備篇 *144*

その２　実践篇 *152*

8　「函髻記」をめぐって……*166*

9　『清末民初小説目録』の現在……*170*
1　出版をめぐって *170*
2　目録に対する反響 *171*
3　中国から出版の申し入れ *172*
4　機器の変更 *173*
5　増補訂正作業 *173*
6　目録の未来 *175*
10　『清末民初小説目録』それから（初稿）……*177*
11　劉鉄雲の写真をめぐって……*181*
1　劉鉄雲の肖像 *181*
2　それぞれの肖像 *181*
12　『清末民初小説目録』に「新編」とつける理由……*196*
13　清末小説研究ガイド９７序説……*198*
1　論文の条件 *198*
2　研究者の型 *201*
3　イモヅル方式と原本主義――私のやり方 *203*
4　最先端を知る *212*
5　清末小説という分野 *213*
14　阿英「晩清小説目」の構造……*217*
1　はじめに *218*
2　阿英「晩清小説目」の現在 *218*
3　阿英「晩清小説目」以前の目録 *219*
4　阿英「晩清小説目」の編集方針、特徴 *222*
5　阿英「晩清小説目」の実際 *224*
6　阿英「晩清小説目」の規模 *230*
7　おわりに *237*
資料1：阿英「晩清小説目」正誤表 *238*
資料2：雑誌初出作品一覧 *243*

15　阿英説「翻訳は創作より多い」は事実か……*253*
1　阿英説のはじまりとその根拠 *253*
2　阿英説の検討 *254*
3　「翻訳は創作より多い」は事実か
——『新編増補清末民初小説目録』による再検討 *258*
4　結論——阿英説の誤り *259*
16　小説目録の新暦旧暦問題……*261*
17　阿英「晩清小説目」の新暦旧暦問題
——竺慶麟への反論をかねて……*269*
1　はじめに *269*
2　新暦旧暦の混用表示 *270*
3　樽本の指摘 *271*
4　竺慶麟の指摘 *272*
5　新暦旧暦の換算 *273*
6　事実と阿英の書き方 *274*
7　各研究者の記述方法 *275*
8　結　論 *276*
18　小説雑誌の重版問題……*278*
1　『繍像小説』のばあい *279*
2　『新小説』のばあい *292*
3　『月月小説』のばあい *302*
4　『小説林』のばあい *304*
19　「救劫伝」の作者艮廬居士は、胡思敬か……*309*
1　「救劫伝」の版本について *310*
2　阿英説の基本、変化から決定へ *314*
3　阿英以後の趨勢——圧倒的に胡思敬説 *318*
4　新説提起 *320*
5　胡思敬説 *321*

6　阿英「胡思敬（艮(ママ)廬居士）」説の謎 *323*
7　張仲清説 *324*
附：「救劫伝」第12-16回 *327*
20　『游戯報』の周樹人……*360*
21　呉趼人の手紙２通……*365*
22　雑誌の黄帝紀年――新暦旧暦問題……*370*
1　『清末民初小説目録』の編集方針 *371*
2　『中国近代期刊篇目彙録』のこと *373*
3　陳大康『中国近代小説編年』のこと *375*
4　新暦旧暦問題 *379*
5　編年の処理 *385*
23　「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く……*387*
1　魏紹昌論文 *389*
2　謎を解く *391*
3　誤りをさかのぼる *397*
附：『繍像小説』刊行一覧（論文47と同一） *398*
24　研究雑誌の最先端――『清末小説』など……*401*
25　『清末小説研究論』を語る……*406*
26　中国の研究者と討論をする
――『清末小説研究集稿』に関連して……*411*
27　『清末小説研究集稿』日本語前言と後記……*420*
1　前　言 *420*
2　後　記 *421*
28　潘建国「近代小説的研究現状与学術空間」を読む……*424*
29　出版社の図書目録
――周振鶴編『晩清営業書目』のことなど……*430*
1　文明書局、中華書局のばあい *430*
2　三聯書店のばあい *432*

3　商務印書館のばあい *433*
4　『晩清営業書目』のばあい *440*
5　『上海古籍出版社五十年図書総目』のばあい *442*
30　林訳シェイクスピア冤罪事件（要旨）……*445*
31　樽本論文補遺３題……*447*
1　阿英『晩清小説史』台湾版について *447*
2　林紓「論古文之不宜廃」について *448*
3　アラビアン・ナイトの翻訳者奚若 *450*
32　中国翻訳家　冤罪一百年……*451*
33　『繍像小説』研究の現在……*453*
1　『繍像小説』をめぐる問題 *454*
2　文迎霞論文について *458*
3　文迎霞に対する期待 *461*
34　「官場現形記」裁判の真相
——日本を装った海賊版……*464*
1　はじめに *464*
2　海賊版『官場現形記』はどれか *466*
3　新聞広告 *467*
4　新聞広告の検討 *471*
5　調査研究を再開する *475*
6　新聞報道——日本人を装った中国人 *482*
35　『劉鶚集』はよろしい……*488*
1　劉鉄雲という存在 *488*
2　老残遊記資料２種 *490*
3　『劉鶚集』の全体 *496*
4　『劉鶚集』の「老残遊記」関係部分 *498*
5　「老残遊記」の原稿！？ *504*

36　「老残遊記」執筆経過の謎

——書簡集『滬榕書札』に見る……*508*

1　『滬榕書札』という書簡集　*510*

2　『資料』の編集と刊行　*513*

3　執筆経過、またその謎　*519*

4　二集執筆1905年説の根拠　*528*

5　謎の解明——「乙巳日記」の第11回は初集　*531*

6　謎の解明に挑んだ人々　*531*

37　『繍像小説』問題……*538*

38　『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』序……*549*

39　小説目録はたのしい

——『清末民初小説版本経眼録』紹介……*553*

附１：日語小説巻疑問表　*559*

附２：俄国小説巻疑問表　*564*

40　夏瑞芳暗殺事件の犯人……*567*

41　小説目録に見る『繍像小説』の刊行年月日……*573*

42　清末小説目録の最新成果（初稿）

——劉永文編『晩清小説目録』について……*579*

43　『清末民初小説目録』第４版問答……*591*

1　第４版ＣＤは自動的に起動する　*591*

2　検索は自由自在　*594*

3　索引の問題　*595*

4　本文の変更点など　*597*

5　研究の流れ　*599*

6　劉永文目録など　*602*

7　劉目録の問題点　*603*

8　劉目録の単行本小説　*608*

9　阿英説をめぐって　*610*

10　電字版の問題 *615*
11　文字化けについて *616*
12　複写、配布自由のこと *618*

44　貴重な出版史料のひとつ
——『繍像小説』主編を示す商務印書館の新聞広告……*621*

45　李伯元研究で留意すべきいくつかの要点
——陸克寒、譚坤著『李伯元評伝』について……*626*
1　主編問題 *627*
2　発行遅延問題 *630*
3　死去と作品 *631*
4　海賊版裁判問題 *632*
5　改竄没書事件と盗用事件 *636*
6　李伯元と欧陽鉅源の関係 *638*

46　アメリカ人宣教師の暦……*641*
1　旧暦と新暦 *641*
2　上海の出版社のばあい *642*
3　日本滞在中のヘプバーンのばあい *644*
4　ふたつのこよみ *646*
5　中国のアメリカ人宣教師のばあい *648*

47　『繍像小説』発行遅延について
——王文君氏へ……*651*
1　問題の所在 *651*
2　王文君の指摘 *653*
3　反論する *653*
附：『繍像小説』刊行一覧（論文23と同一） *663*

48　中国近代小説年表の最新成果（初稿）
——陳大康『中国近代小説編年史』について……*666*
1　全体の構成 *667*

2　注目点をいくつか *669*

49　注目点４：『官場現形記』の海賊版……*679*

50　上海のシャーロック・ホームズ（初稿）……*693*

1　はじめに *693*

2　天津図書館にて *696*

3　中国人研究者は無視する *697*

4　中国における探偵小説研究 *699*

5　贋作ホームズ *703*

6　おわりに *705*

あとがき *707*

凡　例

1　書名の角書、副題は、本書での初出のみ記し、以下は省略する。

2　旧暦は漢数字で、新暦はアラビア数字でしめす。

例：宣統二年九月十九日（1910.10.21）

ただし、引用文はこの限りではない。

3　記号は以下のとおり。

『 』　雑誌、新聞、単行本（書名）、全集

「 」　論文、雑誌掲載、あるいは単行本中の個別作品、作品名一般、叢書名

［ ］　原文と翻訳文の区別がつきにくいばあい、使用することがある。また筆者の注

4　漢語文献に使用される記号は、そのままを引用する。ただし、簡化字は使わない。日本語漢字にかえる。

5　カッコ類は、引用文のなかでも原文のままである。例：「○○「○」○」とし、「○○『○』○」と書き換えない。

茅盾の「童話」

『中国文芸研究会会報』第27号（1981.4.1）に掲載。商務印書館発行の童話叢書は、京都の中国専門書店でその一部を発掘した。古い書籍の山に分散していたのだ。気のついたかぎりを入手したが、それで全部というわけではなかった。中国児童文学研究の書籍、論文に童話叢書の名前を見るが、実際に手にした研究者は多くないらしい。小冊子で紙質もよくなく保存がむつかしい種類のものだ。それらのなかで茅盾（沈徳鴻）が執筆した作品を解説する。文末に参考文献を掲げた。専論は少ないことがわかるだろう。今回、語句を修正した。また、「童話」叢書目録を作成した。架蔵のものは［樽本］で示した。なお、入手した「童話」全部を故新村轍氏にお貸ししたことがある。喜んでもらえた。

茅盾は、自らが参加した商務印書館発行の「童話」叢書について、彼の回憶録では何ほどのことも述べてはいない。

……《中国寓言》続編のために材料を収集するのと同時に（中略）、若干の童話と少年叢書をも編訳した。童話と少年叢書はふたつとも孫毓修が早くから商務編訳所で創刊した児童と少年の読み物で……（茅盾「革新《小説月報》的前後」回憶録３『新華月報』(文摘版）４、1979、136頁）

以上のような具合で、わずか数行の記述である。素っ気ない、とも言える。
日本ではやくから「童話」と孫毓修に言及されているのは中村忠行氏である。

……覚我に続いて、児童文学興隆の先鋒となつたのは、孫毓修であつた。彼は、江蘇省無錫の人で、留菴と号し、永く商務印書館編訳所に在つた人である。『中国彫版源流考』(民国七年刊）の著者として、その名を記憶してゐる人も尠くないであらうが、一面児童文学にも関心を有ち、はやくから一見識を持してゐた。彼が、世に問うた最初の作品は、「無猫国」と「三問答」(何れも、グリム童話らしい）で、それぞれ『童話第一集』第一編・第二編として、この年（注：1908年）の冬商務印書館から出版され、価格は各冊五分であつた。（中略）

かうして、編輯出版された『童話』が、何集まで出たかは、目下のところ、資料が十分でないので詳らかではない。しかし、当初の計画では、神話の類はこれを除き、寓言・述事・科学の三類にわたつて、ほぼ均等に編輯する肚であつたらしい。（中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学」二『山辺道』第10号1964.1.25、78-79頁）

たしかに、上海図書館編『中国近代現代叢書目録』(香港商務印書館1980.2）にも「童話」叢書は収録されていない。その輪郭もさだかではないといっていいだろう。

そういう状態のなかで、松井博光氏の次の文章は注目される。

その後、茅盾は孫毓修の翻案童話シリーズのうちの一部を、おそらく孫の指示で、孫の方式をまねて担当した。この孫毓修の童話はのちに中国最初の近代童話として見なおされたようだが、当時も相当の人気を博し、数万の子供達が夢中になったろう、といわれている。西欧の神話（ギリシャ神話)、説話（アンデルセン、グリム等)、および少年向けの小説（ガリバー旅行記等）を翻案したものと、中国の歴史物語（史記、漢書、唐代伝奇その他）をやはり子供向けに書きなおしたものとがあり、第一、二集合わせて九十八種(ママ)中、茅盾の手になるものは十七種二(マ)十七(マ)篇で、一九一八、九(ママ)年に刊行されている（すべて(マ)(マ)編纂者・桐郷沈徳鴻、校訂者・無錫孫毓修としている)。その後版を重ねているから、この商務印書館の童話シリーズは、＜五・四＞文化革命の早い時期から相当

長期間、息の長い生命を保ったといえそうだ。おそらく葉紹鈞らが童話の秀作を発表するようになるまで続いたと思われる。（松井博光『薄明の文学』東方書店1979.10.15、106-107頁）

比較的詳細な紹介である。冊数、奥付など現物を目にしていなければ書けないように見うけられる。しかし、私の手元にあるいく冊かの「童話」を見ると、松井氏の書かれていることがすべて正確というわけではない点がいささかふに落ちない。

この「童話」叢書、奥付には“Lilliput Library Series”と英文の表示がある。子供用書物に英文を添えるのは、なにか特別な理由があったのだろうか。そこはよくわからない。リリパットとは言うまでもなくガリバー旅行記の小人国のことだ。小型で手軽という意味をこめたものだろう。判型は日本でいう四六判（188mm×130mm）に近い。活版印刷、１頁20字９行、３号大の活字で組んでありかなりゆったりとした印象を受ける。表紙を多色刷りにし、本文用紙にノリ付けしてある。商務印書館が別に刊行している「説部叢書」と同じ製本方法だ。本文に収録された絵図は白黒印刷。

童話第○集第△編と番号をつける。広告を手がかりにすると第１集は89編ある。編は冊としてもよい。上下に分冊されているものを１種と数えると86種になる。第２集は９編（同じく８種）だ。第１、２集を合わせて98編（98種ではなく94種）が発行されている。1920年代には鄭振鐸の編集する第３集が第４編まで刊行された。

ことわっておくが、私は「童話」叢書のすべてを見ているわけではない。

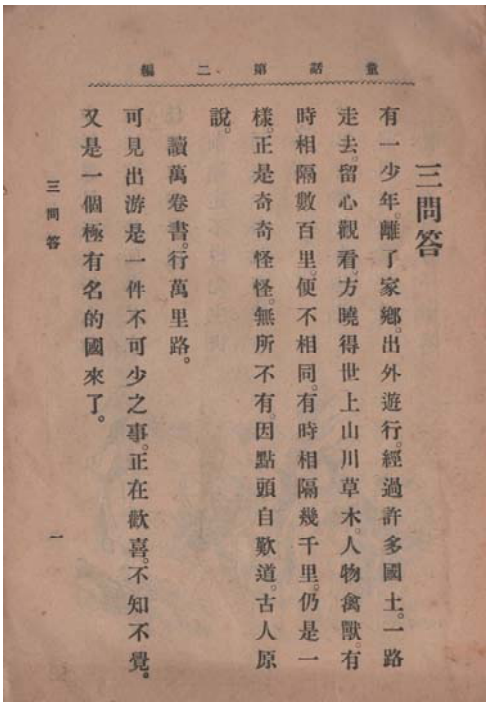
茅盾（沈徳鴻）が担当したものは第１集に多い。手元のものから要点だけ抽出して次に掲げる。＊印は編訳。それ以外はすべて編纂。英文は奥付に記載してあるものを示す。

第70編　千 疋 絹　A THOUSAND PIECES OF SILK　1921.8／1923.1五版

第71編　負骨報恩　A RETURN OF KINDNESS　1918.7／1922.9五版

第75編＊平和会議　A PEACE-ASSEMBLEY　1918.9／1922.9四版

第76編＊尋 快 楽　SEARCH OF HAPPINESS　1918.11／1923.1五版○沈徳鴻編訳



童話第二編

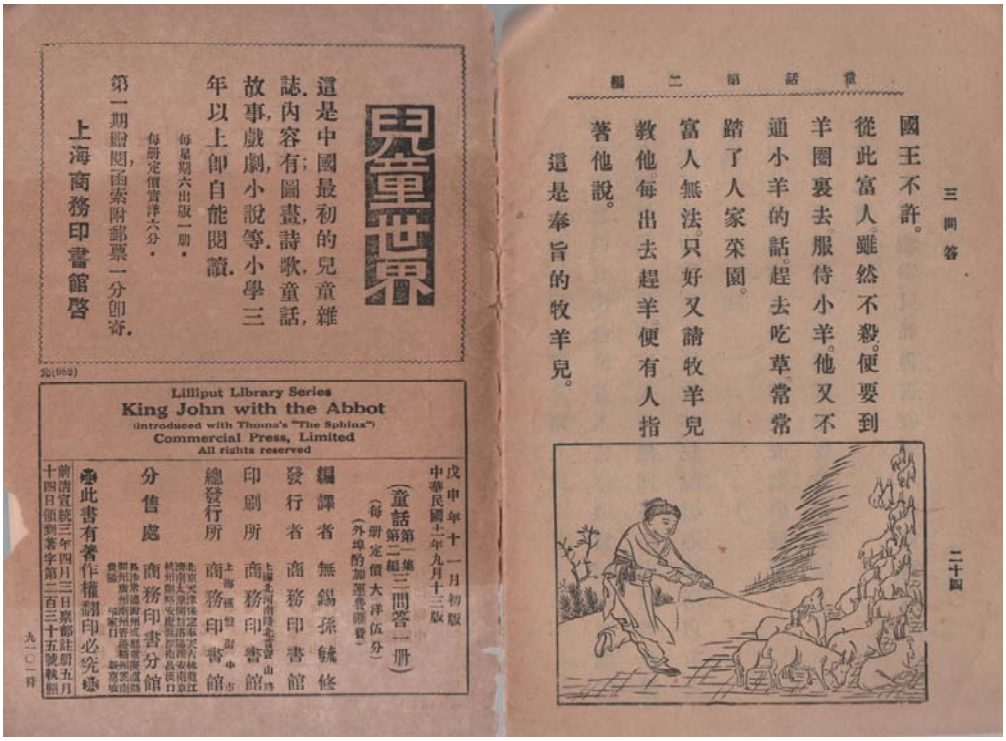
三問答

有一少年。離了家鄉。出外遊行。經過許多國土。一路走去。留心觀看。方曉得世上山川草木。人物禽獸。有時相隔數百里。便不相同。有時相隔幾千里。仍是一樣。正是奇奇怪怪。無所不有。因點頭自歎道。古人原說。

讀萬卷書。行萬里路。

可見出游是一件不可少之事。正在歡喜。不知不覺。又是一個極有名的國來了。

三問答　一



兒童世界

這是中國最初的兒童雜誌。內容有圖畫，詩歌，童話，故事，戲劇，小說等。小學三年以上即自能閱讀。

每星期六出版一册。

每册定價實洋六分。

第一期贈閱，函索附郵票一分即寄。

上海商務印書館啓

(962)

Lilliput Library Series
King John with the Abbot
(introduced with Thoma's "The Sphinx")
Commercial Press, Limited
All rights reserved

戊申年十一月初版
中華民國十一年九月十三版
(童話第一集第二編三問答一册)
(每册定價大洋伍分)
(外埠酌加運費匯費)

編譯者　無錫孫毓修
發行者　商務印書館
印刷所　商務印書館
總發行所　商務印書館
分售處　商務印書分館

此書有著作權翻印必究

前清宣統三年四月三日票部註册五月十四日領到著字第二百三十五號執照

九一〇一件

童話第二編

三問答

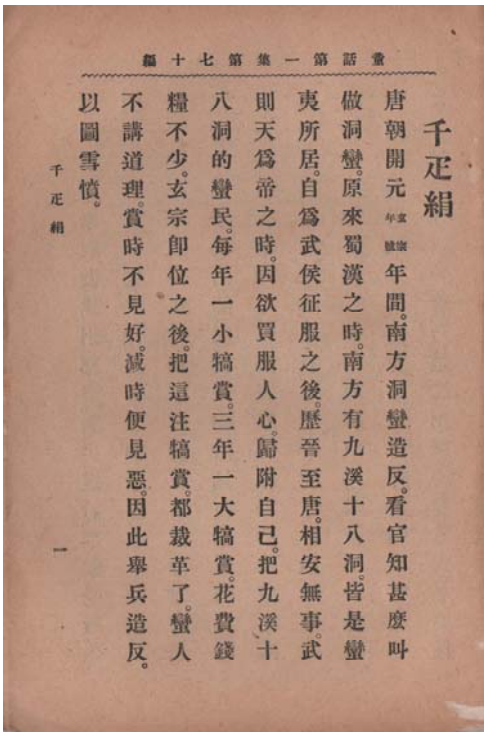
國王不許。

從此富人。雖然不殺。便要到羊圈裏去。服侍小羊。他又不通小羊的話。趕去吃草。常常踏了人家菜園。

富人無法。只好又請牧羊兒教他。每出去趕羊。便有人指著他說。

這是奉旨的牧羊兒。

二十四



千疋絹

唐朝開元（玄宗年號）年間。南方洞蠻造反。看官知甚麼叫做洞蠻。原來蜀漢之時。南方有九溪十八洞。皆是蠻夷所居。自爲武侯征服之後。歷晉至唐。相安無事。武則天爲帝之時。因欲買服人心。歸附自己。把九溪十八洞的蠻民。每年一小犒賞。三年一大犒賞。花費錢糧不少。玄宗卽位之後。把這注犒賞。都裁革了。蠻人不講道理。賞時不見好。減時便見惡。因此舉兵造反。以圖雪憤。

力替他張羅。送了許多錢帛。又寫信給長安的貴人。稱贊他棄家贖友之事。力請放個好缺。姚州一府的官吏。見都督如此。也各有幫助。保安把各人送的。分一半與仲翔。仲翔不受。保安苦苦留下。二人灑淚而別。保安仍帶妻子。到遂州住下。自己逕往長安。得了四川眉州彭山丞之職。

在下說到此處。已把吳保安棄家贖友的一段故事。交代明白。若問二人的下落。並郭仲翔讓官報恩之事。在下暫且停一停。要把他另做一本童話了。

教育部審定
共和國教科書
公民須知
本書對於公民之定義。法令上所定公民之資格。共和國家公民應享之權利。應盡之職務。地方自治應爲之事。共和國體之組織等。皆就本國情形法令立論。材料分量文字適合國民學校之用。
一冊定價一角
教授法一冊定價二角
商務印書館發行
元(1071)

Lilliput Library Series
A Thousand Pieces of Silk
Commercial Press, Limited
All rights reserved

中華民國十三年八月初版
（童話第一集第七十編千疋絹一冊）
（每冊定價大洋伍分）
（外埠酌加運費匯費）
編纂者 桐鄉沈德鴻
校訂者 無錫孫毓修
發行者 商務印書館
印刷所 商務印書館 上海北河南路北首寶山路
總發行所 商務印書館 上海棋盤街中市
分售處 商務印書分館 北京天津保定奉天吉林龍江濟南太原開封洛陽西安南京杭州蘇州安慶蕪湖南昌漢口長沙常德衡州成都重慶福州廣州潮州香港梧州雲南貴陽張家口新嘉坡
此書有著作權翻印必究
一二四四

第81編＊兎 娶 婦　THE MARRIAGE OF MR. RABBIT　1919.1／(1922)9四版

第82編＊怪 花 園　THE BEAUTY AND THE BEAST　1919.1／1922.9四版○沈徳鴻編訳

第83編　書 呆 子　THE BOOKWORM　1919.3／1922.9四版

第85編　樹 中 餓　STARVED IN A TREE　1919.4／1922.9四版

第86編　牧羊郎官　THE RESPECTABLE SHEPHERD　1919.4／1920.9四版

第87編＊海斯交運　HANS IN LUCK　1919.7／1922.9三版○沈徳鴻編訳

第88編＊金　　亀　THE TORTOISE WHO TALKED　1919.12／1921.9再版○沈徳鴻編訳

以上のほか、葉子銘『論茅盾四十年的文学道路』(上海文藝出版社1989.8第二版／1978.10第八次印刷、24頁）を参考にして以下を掲げる。

第69編　大 槐 国　1918.6

第74編＊獅驟訪猪　1918.8

第79編＊驢 大 哥　1918.11

第80編＊蛙 公 主　（1919.1）

第89編＊飛 行 鞋　（1920.10）

いずれもが茅盾のものだという。さらに次の１編も茅盾の執筆だ。

第84編　一 段 麻　（1919.5）

以上、現物で茅盾のものだと確認できるのが11編、葉による書名のみのもの５編、別に１編を加えて全部で17編になる。

松井氏が書いている「茅盾の手になるものは十七種二十七篇」の箇所は、「十七種」を「十七編」とする方が事実に近いのではないかと考える。「二十七篇」とは各作品をばらして数えたものだろうか。私は全部を見たわけではない。未確認とする。

再版の奥付に見える初版についての記述が信用できるかどうかはわからない。商務印書館の管理は厳密ではないからだ。茅盾担当部分の発行は、1918、19年だ

けではなく1921年のものもある。

そもそも、孫はこの「童話」叢書の材料を多くはロンドンで出版されていた月刊雑誌『児童百科全書 Children's Encyclopaedia』『児童雑誌』から得ていたらしい（謝菊曾「涵芬楼往事」『随筆』６広東人民出版者1980.2、86頁。『随筆』７、1980.4、62頁）。だから「童話」叢書では「編纂」のほかに「編訳」というものがあり、両者は区別して使用されている。

中国の故事を下敷きにして書き直したものを「編纂」とする。英文雑誌に掲載された外国童話を翻訳して「編訳」と称する。

翻訳ものでも１話で１冊に満たないばあいがある。たとえば、第81編「兎娶婦」のように、ねずみの嫁入り（ねずみのムコ取り）のほか、短いもの２話を収録するものにも「編纂」をあてる。第75編「平和会議」も同様だ。

ただし、編訳者を名前に冠するものもある。第76編「尋快楽」など（上記一覧に「〇沈徳鴻編訳」と注した）だ。

ゆえに、松井氏の書かれている「すべて編纂者・桐郷沈徳鴻……」というのは正しくはない。

「童話」叢書を広告してその惹句のひとつは「読むのに最適、まじりけなしの口語です［純用白話最便閲看］」というのがある。裏表紙の広告に見える。

外国童話の翻訳は口語である。しかし、中国もの、および翻訳ものでも編者がところどころに口をはさんだ部分がある。「さて［話説］」「わたくし［在下］」「読者のみなさん［看官］」といった旧白話小説の言葉を引きずっている。

編者の口出し部分は言葉の面からも興味深いが、同時に注意を引くのはその内容である。

第87編「海斯交運」は、グリム「かほうにくるまったハンス」(金田鬼一訳岩波文庫による）の翻訳だ。

７年の年季があけたハンスが給金としてもらった金塊（茅盾の翻訳では銀。原文がそうなっていたか）を、それが重いという理由で馬と交換し、馬にふりおとされめ牛ととりかえ、乳がでないからといって子豚と、ぬすまれたものかも知れぬというのでがちょうと、さらにと石と交換してゆき、最後に、そのと石すら池に落としてしまう。ところがハンスにしてみれば自らのぞんで交換していったので、す

べては自分の思い通りに事がすすんで、幸運のハンス、「かほうにくるまったハンス」というわけなのだ。

常識からすれば、続々と低価値なものと取りかえていった彼は「バカなハンス」ということになる。しかし、反対に、物欲にとらわれぬハンスのあり方に真の幸福を得る道を見いだすという見方も存在する（金田鬼一解説)。

茅盾は後記において次のようにいう。

> ハンスの物語はこれでおしまいです。編者にはいくらかの感想がありますが読者のみなさんはどうでしょう。話しますからちょっと聞いてください。第一に、編者はハンスのバカさかげんには驚きはしませんが、彼の貪欲できりがなく、出てくるものに目移りがするところに驚くばかりです。第二に、世の中で完全無欠のものなどありはしません。自分に見識があり根気がありさえすれば、何事もできないことはないのです。このふたつの考え、みなさんはどのように思われるでしょうか。

茅盾は、ここで第３の見方を示している。童話を教訓にしてしまった。なせばなる、人間しんぼうだ、といった修身めいたにおいがして、この部分だけがわざとらしい。

友情の貴さを賛美したもの（第70、71、85編)、読書の効用を述べたもの（第83編)、国家、社会に有用たれととくもの（第86編)、これらのなかにハンスの後記を置くと、それらの基底に修身臭が一連のものとしてあることがわかる。茅盾の責任もさることながら、孫毓修の編集方針がそうなっていたと考えるべきであろうか。それを知るためには孫毓修編集の童話を見なければならない。

また、孫毓修には卑屈なところがある、と茅盾の目にはうつったらしい（前出『新華月報』１、143頁)。だが、はたして孫毓修はそんな人物であったのかどうかも検討を要するところだ。茅盾の一方的な記述を無批判に受容することにはもう少し慎重であってもいいのではないか。と疑問を呈するだけですでに２次元空間が残されておりませぬ。

【参考】

R「商務館史――（孫毓修編的《無猫国》）」『商務印書館館史資料』之七　北京・商務印書館総編室編印1981.3.20

陳　　江「中国童話的開山祖師孫毓修先生」『商務印書館館史資料』之二十三　北京・商務印書館総編室編印1983.10.20

柳　和城『孫毓修評伝』世紀出版集団、上海人民出版社2011.10

成實朋子「近代中国における「童話」――「童話」叢書と『無猫国』をめぐって」（大阪教育大学）『学大国文』第51号　2008.3.31

附：「童話」叢書目録

叢書の番号順に配列、重複するものもある。作品色を創作と翻訳に分ける。『清末民初小説目録X』より抜粋。文献略号については樽目録Xを参照してほしい。ウェブで公開している。

第１集

W1052＊

無猫国

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=1

1909年3月版という（成實朋子）“WITTINGTON AN HIS CAT”（JAMES BALDWIN “FIFTY FAMOUS　STORIES　RETOLD”）[『東方雑誌』8:1広告]第一集[中村64-78]童話第一集第一編、1908年の項目に収録[系目52]刊年不記、童話1輯1。（孫建江）泰西五十軼事。盧潤祥「我国第一篇童話「無猫国」」(「鄭振鐸曾在「児童世界」一刊上撰文作過介紹，説它的故事是孫毓修根據「泰西五十軼事」創作的」)[商目89][涵著90]孫毓修、童話、光緒三十四年[版補下316]孫毓修、童話、光緒三十四年（柳和城72頁）[児童3]小引の3頁、1909.10初版[童話233]泰西五十軼事[文文257]童話第一集、商務印書館「年假奨品」広告、『時報』宣統二年正月四日(1910.2.13)[編年④1677]光緒三十四年（1908）出版、童話第一集[編年④1739]『時報』1909.4.23商務印書館広告[編年④1791]『神州日報』1909.6.25商務印書館童話広告[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告

S0272＊

三問答　(KING JOHN WITH[ママ] THE ABBOT)

孫毓修編訳

上海・商務印書館　戊申11(1908)／1922.9十三版　童話1=2

INTRODUCED WITH THOMA'S “THE SPHINX” [『東方雑誌』8:1広告]第一集[中村64-78]童話第一集第二編[現代908]1908、童話叢書第1集第2冊[大典170]著者不詳、1908.12刊とする。(孫建江）希臘神話、泰西五十軼事[樽本][商目89][編年227]十一月、童話不記[編年④1662]光緒三十四年（1908）十一月出版、童話第一集第二編[編年④1739]『時報』1909.4.23商務印書館広告[編年④1791]『神州日報』1909.6.25商務印書館童話広告[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告[編年⑥2945]光緒三十四年版[劉晩320]童話1集2編[慧敏484]十一月。(成實朋子）“KING JOHN WITH[AND] THE ABBOT” (JAMES BALDWIN “FIFTY FAMOUS STORIES RETOLD”) [涵著89]孫毓修、童話、光緒三十四年[版補下316]孫毓修、童話、光緒三十四年（柳和城72頁）[童話233]希臘神話、泰西五十軼事[文文257]童話第一集、商務印書館「年假奨品」広告、『時報』宣統二年正月四日(1910.2.13)[現史②53]1908.十二月、児童読物

D0166＊

大拇指　(THE WONDERFUL ADVENTURES OF TOM THUMB)

孫毓修編訳

上海・商務印書館　己酉1(1909)／1922.9十四版　童話1=3

TRANSLATED FROM THE “BOOKS FOR BAIRNS” [営業266]童話第三冊[『東方雑誌』8:1広告]第一集[現代910]1909、童話第1集第3冊[大典191]著者不詳。(孫建江）格林童話（GRIMM）[樽本][商目89][編年236]正月、童話不記[編年④1698]宣統元年（1909）正月出版、童話不記[編年④1739]童話第三編、『時報』1909.4.23商務印書館広告[編年④1791]『神州日報』1909.6.25商務印書館童話広告[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告[劉晩231]童話1集3編[慧敏488]正月、童話1=3[涵著89]孫毓修、童話、宣統元年[版補下316]孫毓修、童話、宣統元年（柳和城72頁）[張治A67]「童話叢書」收入了8篇格林童話，其中有3篇是茅盾翻訳的[童話233]格林童話[文文257]童話第一集、商務印書館「年假奨品」広告、『時報』宣統二年正月四日(1910.2.13)（鄭志明)「格林童話」[現史②57]1909.二月

J2139＊

絶島飄流

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話1=4

[営業266]童話第四冊[『東方雑誌』8:1広告]第一集（孫建江）笛福小説DANIEL DEFOE[商目89]（李今09-13）據筆者查閲，此両種均非笛福所作[文東98]応是発行於1909年。白話訳本改編自瑞士作家 JOHANN DAVID WYSS 的小説 “DER SCHWEIZERISCHE ROBINSON” 1812（崔文東）訂正あり。DANIEL DEFOE “LIFE AND STRANGE SURPRISING ADVENTURES OF ROBINSON CRUSOE” 1719[涵訳64]孫毓修訳、童話、宣統元年[版補下315]「絶島漂〻流」、孫毓修訳、童話、宣統元年[童話234]笛福小説[文文257]「絶島漂〻流」童話第一集、商務印書館「年假奨品」広告、『時報』宣統二年正月四日(1910.2.13)[編年④1739]童話第四編、『時報』1909.4.23商務印書館広告[編年④1756]「絶島漂流」、宣統元年（1909）三月出版、童話第一集[編年④1791]『神州日報』1909.6.25商務印書館童話広告[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告

X1086＊

小王子　(THE LION'S EDUCATION)

孫毓修編訳

上海・商務印書館　己酉2(1909)／1922.9十三版　童話1=5

TRANSLATED FROM KRILOE'S〻 FABLE[営業266]童話第五冊[『東方雑誌』8:1広告]第一集[現代910]1909初版、童話第1集第5冊[大典189]は著者不詳、1909.2刊、中国商務印書館とする[樽本][商目89][編年237]二月、童話不記[編年④1716]宣統元年（1909）二月出版、童話不記[編年④1739]童話第五編、『時報』1909.4.23商務印書館広告[編年④1791]『神州日報』1909.6.25商務印書館童話広告[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告[劉晩351]童話1集5編[慧敏489]二月[涵訳64]孫毓修訳、童話、宣統元年[版補下315]孫毓修訳、童話、宣統元年（柳和城72頁）

Y0623

夜光璧　(THE CHINA'S KOHINOOR)

孫毓修編纂

上海・商務印書館　己酉5(1909)／1922.9十二版　童話1=6

[営業267]童話第六冊[『東方雑誌』8:1広告]第一集[大典185]は「夜光璧〻」とする（孫建江）改編自『史記』藺相如入秦献璧故事[樽本][商目89][編年④1791]『神州日報』1909.6.25商務印書館童話広告[編年243]五月、童話不記[編年④1802]宣統元年（1909）五月出版、童話第一集第六編

[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告[劉晩369]童話1集6編[涵著89]「夜光壁ママ」、孫毓修、童話、宣統元年[版補下316]孫毓修、童話、宣統元年（柳和城72頁）[文文257]童話第一集、商務印書館「年假奨品」広告、『時報』宣統二年正月四日(1910.2.13)

H1302

紅線領

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=7

[営業267]童話第七冊[『東方雑誌』8:1広告]第一集[系目172]刊年不記、童話1輯7[商目89][涵著89]孫毓修、童話、宣統元年[版補下316]孫毓修、童話、宣統元年[編年④1791]『神州日報』1909.6.25商務印書館童話広告[編年④1802]宣統元年（1909）五月ころ出版、童話第一集[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告

Y0039＊

唖口会　(THE SOCIETY OF THE SPEECHLESS)

孫毓修編訳

上海・商務印書館　己酉5(1909)／1922.9十三版　童話1=8

AN ABRIDGES EDITOION OF “HEART CULTURE” [『東方雑誌』8:1広告]第一集[現代910]1909、童話第1集第8冊[大典189]は1909.6刊とする。童話[樽本][商目89][編年243]五月、童話不記[編年④1802]宣統元年（1909）五月出版、童話不記[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告[劉晩367]童話1集8編[慧敏490]五月[涵訳64]孫毓修訳、童話、宣統二年[版補下315]孫毓修訳、童話、宣統二年（柳和城72頁）

R0126

人外之友

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=9

[『東方雑誌』8:1広告]第一集[系目14]刊年不記、童話1輯9[商目89][涵著90]孫毓修、童話、宣統二年[版補下316]孫毓修、童話、宣統二年（柳和城72頁）1909.10／1924.9十二版[文文257]童話第一集、商務印書館「年假奨品」広告、『時報』宣統二年正月四日(1910.2.13)[編年④1925]童話第一集、『時報』1910.1.18商務印書館広告[編年④1934]童話第一集、宣統元年（1909）十二月出版

N0821

女軍人　(A HEROINE)

孫毓修編纂

上海・商務印書館　庚戌9(1910)／1922.6十版　童話1=10

[『東方雑誌』8:1広告]第一集[大典202]は1910.10〃／1922.6十版。童話1集10冊[系目36]庚戌年九月（1910）-1922.6十版、童話1輯10（孫建江）見於「楽府詩」中「木蘭辞」[樽本][商目89][編年④1840][編年273]九月、童話不記[編年⑤2081]宣統二年（1910）九月出版、童話第一集第十編[編年⑤2101]童話第一集第十編、『時報』1910.12.10商務印書館広告[編年⑥2942]宣統二年版[仁敏14-792][涵著89]孫毓修、童話、宣統二年[涵著90]重複つまり復本のこと[版補下316]孫毓修、童話、宣統二年（柳和城72頁）

Y1503＊

義狗伝　(ROVER AND HIS FRIENDS)

孫毓修編訳

上海・商務印書館　庚戌9(1910)／1922.9十版　童話1=11

TRANSLATED FROM “FRIENDS AND HELPERS” [『東方雑誌』8:1広告]第一集[現代912]1910初版、童話叢書第1集第11冊[大典208]著者不詳[樽本][商目89][編年273]九月、童話不記[編年⑤2081]宣統二年（1910）九月出版、童話第一集第十一編[編年⑤2117]童話第一集第十一編『時報』1911.1.3商務印書館広告[編年⑥2958]宣統二年版[劉晩374]童話1集11編[慧敏497]九月[涵著86]民国元年二月[版補下]未収録（柳和城72頁）は1=1〃とする

F0288

非力子

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=12

[系目244]刊年不記、童話1輯12[商目89][涵著86]宣統三年正月[版補下]未収録[編年⑤2173]童話第一集第十二編、『神州日報』1911.4.19商務印書館広告[編年⑤2179]童話第一集中之一種宣統三年（1911）三月出版[編年⑥2927]宣統三年版

L1908＊

驢史　(THE STORY OF A DONKEY)

孫毓修編訳

上海・商務印書館　辛亥5(1911)／1923.1九版　童話1=13

TRANSLATED FROM A RETOLD ENGLISH EDITION [現代912]1911、童話叢書第1集第13冊[大典224]著者不詳、1911.6、童話[樽本][商目89][編年286]五月、童話不記[編年⑤2215]童話第一集第十三編、『時報』1911.6.21商務印書館広告[編年⑤2218]童話第一集第十三編、宣統三年（1911）五月[編年⑥2939]宣統三年版[慧敏501]五月[涵著86]宣統三月五月[版補下]未収録（柳和城72頁）

B1033

玻璃鞋

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1＝14

[系目287]刊年不記、童話1輯14（孫建江）貝洛爾童話[商目89][涵著87]第一集第十四編、民国二年五月[版補下]未収録[童話233]貝洛爾童話

B0656

笨哥哥

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1＝15

[系目407]刊年不記、童話1輯15[樽本]封面と1、 2頁のみ[商目89][涵著87]第一集第十五編、民国二年五月[版補下]未収録

S1334＊

獅子報恩　(ANDROCLES AND THE LION)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1913.8／1922.9八版　童話1＝16

[現代913]1913.8初版、童話叢書第1集第16冊[大典267]著者不詳、1913.7刊（孫建江）泰西五十軼事[樽本][商目89][涵著87]第一集第十六編、民国二年七月[版補下]未収録[劉民718]「山〻獅子報恩」、童話1集16編（柳和城72頁）[童話233]泰西五十軼事

Y2387

有眼与無眼

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1＝17

[系目136]刊年不記、童話1輯17[商目89][涵著87]民国二年十一月[版補下]未収録

F0654＊

風箱狗　(THE STORY OF A DOG)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1913.11／1923.1八版　童話1=18

[現代913]1913.11初版／1913ママ.1八版、童話叢書第1集第18冊[大典268]著者不詳[樽本][商目89][涵著87]第一集第十八編、民国二年九月[版補下]未収録[劉民656]童話1集18編（柳和城72頁）

M1159

秘密児　(A CHILD'S REVENGE)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1913.11／1923.1七版　童話1=19

[大典262]（孫建江）改編自『史記』程嬰救孤故事[樽本][商目89][涵著87]第一集第十九編、民国二年十一月[版補下]未収録[劉民695]童話1集19編（柳和城72頁）

M1812＊

木馬兵

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話1=20

（孫建江）希臘神話[商目89][涵著87]第一集第廿編、民国三年七月[版補下]未収録[童話233]希臘神話

S1459

十年帰

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=21

[系目11]刊年不記、童話1輯21（孫建江）希臘神話[商目89][涵著88]第一集第廿一編、民国三年二月[版補下]未収録（柳和城73頁）1914.3／1923.1七版、1=2とする[童話233]希臘神話

E0041＊

俄国寓言　上下

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話1=22, 23

[商目89][涵著88]第一集第廿二編、民国三年一月[版補下]未収録

Z1185

中山狼

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=24

[系目67]刊年不記、童話1輯24[商目89]

G0776＊

怪石洞　(FORTY ROBBERS KILLED BY ONE SLAVE)

高真長編訳　孫毓修校訂

上海・商務印書館1914.8／1922.9八版　童話1=25

“THE ARABIAN NIGHTS.” Ali Baba, and the Forty Robbers killed by One Slave. [現代913][大典309]阿拉伯民間故事、1914.8[樽本]1914.8初版、童話叢書第1集第25冊[商目89][劉民662]R〻ORTY ROBBERS KILLED BY ONE SLAVE、童話1集25編（柳和城72頁）未収録[張治A67]「天方夜譚」とする、作品名不記

Y2054＊

鸚鵡螺　(TWENTY THOUSAND LEAGUES UNDER THE SEA)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1914.8／1922.9七版　童話1=26

JULES VERNE 著[現代913][大典309]は UERNE と誤る。1914.8[樽本]童話叢書第1集第26冊[商目89][韓08-326][劉民750]（柳和城73頁）

J0062

鶏黍約

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館1914／1922　童話1=27

[実藤1606][系目224]刊年不記、童話1輯27[商目89][劉民675]童話1集27編（柳和城72頁）未収録

S0027

賽皋陶

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=28

[系目507]刊年不記、童話1輯28[商目89]

Q0446

気英布　(THE OFFENDED GENERAL)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1914.9／1923.1七版　童話1=29

[大典293]1914.9／1923.1七版[系目72]1914.9、童話1輯29[樽本][商目89]は「気呂布」とする[劉民707]童話1集29編（柳和城72頁）

Z0252

湛盧剣　(THE FLYING DAGGER)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1914.10／1922.6六版　童話1=30

[系目459]は「諶〻廬〻剣」とする。1914.10、童話1=30[樽本][商目89][劉民756]「湛廬〻剣」、童話1集30編（柳和城73頁）

H0503＊

好少年　(THE PRINCESS' ADVENTURE)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1914.12／1922.9六版　童話1=31

[現代914]1914.12初版、童話叢書第1集第31冊[大典312]著者不詳、1914.12[樽本][商目89][劉民665]童話1集31編（柳和城73頁）

K0524＊

快楽種子　(THE SEED OF HAPPINESS)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1914.12／1923.1六版　童話1=32

[大典312]著者不詳、1914.12[樽本][商目89][劉民683]童話1集32編（柳和城73頁）

H2871

火牛陣

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=33

[系目84]刊年不記、童話1輯33（孫建江）改編自『史記』斉将田単破燕復国故事[商目89]は

「水牛陣」とする（柳和城73頁）1915.1／1924.9七版

T0978

銅柱劫　(A DAGGER IN A MAP)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1915.1／1922.6六版　童話1=34

[大典323]1915.1（孫建江）改編自『史記』荊軻刺秦王故事[樽本][商目89][劉民727]童話1集34編（柳和城73頁）

D0752＊

点金術　(THE GOLDEN TOUCH)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1915.4／1923.1七版　童話1=35

[現代914]1915.4初版、童話叢書第1集第35冊。（孫建江）希臘神話[樽本][商目89][劉民650]童話1集35編（柳和城73頁）[童話233]希臘神話

S0271＊

三王子　(THE THREE PRINCES)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1915.5／1922.6六版　童話1=36

[現代915]1915.5初版、童話叢書第1集第36冊[大典374]著者不詳（孫建江）格林童話（GRIMM）[樽本][商目89][劉民714]童話1集36編（柳和城72頁）1924.9七版[張治A67]「童話叢書」收入了8篇格林童話，其中有3篇是茅盾翻訳的[童話233]格林童話（鄭志明)「格林童話」

J0994

教子杯

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=37

[系目392]刊年不記、童話1輯37[商目89]

F0519

風塵三達　(THE TREE NOBLE MINDED)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1915.5／1923.1六版　童話1=38

[系目79]1915.5-1923.1六版、童話1輯38[樽本][商目89][劉民656]童話1集38編（柳和城72頁）

L0092

蘭亭会　(THE TASTE FOR COLLECTING AUTOGRAPHS)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1915.6／1922.9六版　童話1=39

[系目124]1915.6、童話不記（孫建江）見於「唐人小説」[樽本]封面なし[商目89][劉民684]童話1集39編（柳和城72頁）

M0102

馬上談　(THE ELOQUENT PEACE-ADVOCATE OF THE HAN DYNASTY)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1915.6／1922.9六版　童話1=40

[大典375]著者不詳[系目46]1915.6-1922.9六版、童話1輯40[樽本][商目89][劉民691]童話1集40編（柳和城72頁）

Y3310

雲雪争競

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=41

[系目50]は「雲雲〻争競」、刊年不記、童話1輯41とする[商目89]

Y2015＊

鷹雀認母　(THE EAGLE AND THE RICE BIRDS)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1915.12／1922.9五版　童話1=42

[現代916]1915.12初版、童話叢書第1集第42冊[大典378]著者不詳[樽本][商目89][劉民750]（柳和城72頁）

M0014

麻雀勧和

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=43

[系目414]刊年不記、童話1輯43[商目89]

X0660

献西施　(HSI SHIH, OR THE PRESENT OF A BEAUTY)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1915.12／1922.9五版　童話1＝44

[系目469]1915.12、童話不記[樽本][商目89][劉民735]HIS〻 SHIH……童話1集44編（柳和城72頁）

N0227＊

能言鳥　(THE THREE SISTERS)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1915.12／1922.9五版　童話1＝45

“THE ARABIAN NIGHTS.” The Two Sisters, who were Jealous of their Younger Sister. [現代916]1915.12、童話叢書第1集第45冊（孫建江）天方夜譚[樽本][商目89][劉民699]童話1集45編（柳和城72頁）[張治A67]「天方夜譚」とする、作品名不記[童話233]天方夜譚

G0091＊

橄欖案

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1＝46

“THE ARABIAN NIGHTS.” Ali Cogia, a Merchant of Bagdad. [系目511]刊年不記、童話1輯46。「天方夜譚」[商目89][張治A67]「天方夜譚」とする、作品名不記

S0538＊

山中人　(THE MAN OF THE HILL)

謝寿長、孫毓修編訳

上海・商務印書館1916.12／1923.1五版　童話1＝47

[現代918]1916.12初版、童話叢書第1集第47冊[大典423]は著者不詳、謝長寿〻とする[樽本]謝寿長は謝菊曾のこと。謝菊曾「商務編訳所与我的習作生活」[商目89][劉民715]童話1集47編（柳和城72頁）未収録

H0578

河梁怨　(THE UNFAILING HONOR OF AN AMBASSADOR)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1916.12／1922.9四版　童話1=48

[系目270]1916.12／1922.9四版、童話1=48[樽本][商目89][劉民666]童話1集48編（柳和城72頁）

S0326＊

三姉妹　(THE LITTLE ONE EYE, LITTLE TWO EYES, LITTLE THREE EYES)

謝寿長、孫毓修編訳

上海・商務印書館1917.1／1922.9四版　童話1=49

GRIMM「一つ目、二つ目、三つ目」[現代675]童話叢書第1集（孫建江）格林童話（GRIMM）[樽本]謝寿長は謝菊曾のこと。謝菊曾「商務編訳所与我的習作生活」[商目89][劉民714]童話1集49編（柳和城72頁）未収録[張治A67]「童話叢書」收入了8篇格林童話，其中有3篇是茅盾翻訳的[童話233]格林童話（鄭志明)「格林童話」

Y2249＊

勇王子

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話1=50

（孫建江）希臘神話[商目89]（柳和城72頁）1917.2／1921.9四版[童話233]希臘神話

S2407＊

睡王　(THE SLEEPING KING)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1917.3／1922.9四版　童話1=51

[現代676]童話叢書第1集[樽本][商目89][劉民722]童話1集51編（柳和城72頁）

J1976

救季布

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=52

[系目402]刊年不記、童話1輯52[樽本][商目89]

F0516

風波亭　(THE FENG-PO PAVILION)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1917.5／1922.9四版　童話1=53

[実藤1607][系目79]1917.5、童話1輯53（孫建江）見於「説岳全伝」[樽本][商目89][劉民655]童話1集53編（柳和城72頁）

W0141＊

万年竈　(A MIRACULOUS FOOD SUPPLIER)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1917.6／1922.9四版　童話1=54

[現代676]は「万年亀〻」とする。童話叢書第1集[樽本][商目89][劉民728]「万年亀〻」、童話1集54編（柳和城72頁）

H1225＊

紅帽児　(LITTLE RED RIDING=HOOD)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1917.6／1922.9四版　童話1=55

[現代676]童話叢書第1集（孫建江）貝洛爾童話[樽本][商目89][衛229]格林（GRIMM）とする、童話1集55編[劉民669]童話1集55編（柳和城72頁）[張治A67]「童話叢書」收入了8篇格林童話，其中有3篇是茅盾翻訳的[童話233]貝洛爾童話

H0055＊

海公主　(THE SEA PRINCESS)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1917.6／1922.9四版　童話1=56

ANDERSEN著[現代676]1917.6初版、童話叢書第1集（孫建江）安徒生童話[樽本][商目89]（王蕾）ANDERSEN 著[劉民664]童話1集56編（柳和城72頁）[童話193]刊年不記[従経336]刊年不記[広告2-458]安徒生

Z0396

丈人女婿　(THE FATHER-IN-LAW AND THE SON-IN-LAW)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1917.8／1922.9四版　童話1=57

[系目26]陳〻毓修、1917.8-1922.9四版、童話1輯57[樽本][商目89][劉民756]「女〻人女婿」、童話1集57編（柳和城72頁）

S2399＊

睡公主

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話1=58

（孫建江）貝洛爾童話[商目89][童話233]貝洛爾童話

G0172

哥哥弟弟

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=59

[商目89]

R0258＊

如意灯　(THE WONDERFUL LAMP)　上下

孫毓修編訳

上海・商務印書館1918.1／1922.9五版　童話1=60,61

“THE ARABIAN NIGHTS.” Aladdin, or the Wonderful Lamp.（孫建江）天方夜譚[樽本][商目89][劉民713]童話1集60,61編（柳和城73頁）[張治A67]「天方夜譚」とする、作品名不記[童話233]天方夜譚

S0495＊

傻男爵遊記

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話1=62

[商目89]

P0153

皮匠奇遇

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1=63

[系目127]刊年不記、童話1輯63（孫建江）格林童話（GRIMM）[商目89]童話1輯63[張治A67]「童話叢書」收入了8篇格林童話，其中有3篇是茅盾翻訳的[童話233]格林童話（鄭志明)「格林童話」

X1019＊

小鉛兵　(THE LITTLE TIN SOLDIER)

孫毓修編訳

上海・商務印書館1918.3／1923.1五版　童話1=64

ANDERSEN著（孫建江）安徒生童話[樽本][商目89]（王蕾）ANDERSEN著[劉民737]童話1集64編（柳和城73頁）[童話193]1917年8月初版[従経336]1927ママ年8月初版[広告2-458]安徒生

F0925

扶餘王　(THE KING OF FU YU)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1918.5／1923.1五版　童話1=65

[系目194]1918.5、童話不記（孫建江）見於「唐人小説」[樽本][商目89][劉民658]童話1集65編（柳和城73頁）

X0168＊

西蔵寓言　(FOLK TALES FROM TIBET)　上下

孫毓修編纂

上海・商務印書館1918.5／1922.9五版　童話1=66, 67

[樽本][商目89][劉民733]童話1集66, 67編（柳和城73頁）

Z1605

姉弟捉妖

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館1918.5／1922.9五版　童話1=68

[系目222]刊年不記、童話1輯68[中村]（孫建江）格林童話（GRIMM）[商目89]（柳和城73頁）[張治A67]「童話叢書」收入了8篇格林童話，其中有3篇是茅盾翻訳的[童話233]格林童話（鄭志明)「格林童話」

D0114

大槐国

沈徳鴻（雁冰）編纂

上海・商務印書館1918.6　童話1=69

[系目26]童話1輯69（孫建江）改編自『唐人伝奇』南柯太守故事[商目89][劉民648]童話1集69

編[茅全附7]童話第一集第六十九編（柳和城73頁）未収録[童話232]唐李公佐所撰伝奇「南柯太守伝」改編[紀編211]童話[鄭編375][史索記100]

Q0494

千疋絹　(A THOUSAND PIECES OF SILK)

沈徳鴻（雁冰）編纂

上海・商務印書館1918.8　童話1＝70

[系目29]童話1輯70（孫建江）改編自『太平広記』第166巻[商目89][劉民707]「千匹絹」、童話1集70編[茅全附7]童話第一集第七十編（柳和城73頁）未収録[童話232]「千匹絹」、1918.6

Q0495

千疋絹　(A THOUSAND PIECES OF SILK)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1921.8／1923.1五版　童話1＝70

（孫建江）改編自『太平広記』第166巻[樽本][商目89]（柳和城73頁）未収録

F0995

負骨報恩　(A RETURN OF KINDNESS)

沈徳鴻（雁冰）編纂

上海・商務印書館1918.8　童話1＝71

[系目158]童話1輯71（孫建江）改編自『古今小説』呉保安棄家贖友故事[商目89][劉民658]A RETURN OF KIND〻ESS、童話1集71編[茅全附7]童話第一第七十一編（柳和城73頁）未収録[鄭編375][史索記100]「負国〻報恩」

F0996

負骨報恩　(A RETURN OF KINDNESS)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1918.7／1922.9五版　童話1＝71

（孫建江）改編自『古今小説』呉保安棄家贖友故事[樽本][商目89][劉民658]A RETURN OF KIND〻ESS、孫毓修不記、童話1集71編（柳和城73頁）未収録[童話232]

W0808

我知道

（孫毓修編纂）

上海・商務印書館　童話1＝72

[系目203]刊年不記、童話1輯72[商目89]

B1170

伯牙琴　(PAI YA'S LUTE)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1918.7／1922.9四版　童話1＝73

[系目204]1918.7、童話不記（孫建江）見於馮夢龍「今古奇観」[樽本][商目89][劉民643]童話1集73編（柳和城73頁）

S1251＊

獅騾訪猪

沈徳鴻（雁冰）編訳

上海・商務印書館1918.8　童話1＝74

ほかに「獅受蚊欺」「傲狐辱蟹」「学由瓜得」「風雪雲」と合冊[現代679]童話叢書第1集[大典452][商目89]孫毓修編訳[劉民717]童話1集74編[茅全附7]童話第一集第七十四編（柳和城73頁）未収録[童話232]「伊索寓言」[紀編211]題名のみ[鄭編375][史索記100]

P0341＊

平和会議　(A PEACE-ASSEMBLEY)

沈徳鴻（雁冰）編纂

上海・商務印書館1918.9　童話1＝75

ほかに「蜂蝸之争」「鶏鼈之争」「金盞花与松樹」「以鏡為鑑」と合冊[大典452]は「和平〻会議」とする[商目89]は「和平会議」とする[劉民705]童話1集75編[茅全附8]童話第一集第七十五編（柳和城73頁）未収録[童話232][鄭編375][史索記100]

P0342＊

平和会議　(A PEACE-ASSEMBLEY)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1918.9／1922.9四版　童話1＝75

ほかに「蜂蝸之争」「鶏鼈之争」「金盞花与松樹」「以鏡為鑑」と合冊[樽本][商目89][劉民705]童話1集75編（柳和城73頁）未収録

X3134＊

尋快楽　(SEARCH OF HAPPINESS)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1918.11／1923.1五版　童話1＝76

[樽本][現代679]童話叢書第1集[商目89][劉民744]童話1集76編[茅全附8]童話第一集第七十六編（柳和城73頁）未収録[童話232]似乎是茅盾的創作[鄭編375]

C0890

除三害　(THE THREE EVILS)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1918.11／1922.9四版　童話1＝77

[系目332]1918.11、童話不記[樽本][商目89][劉民646]童話1集77編（柳和城73頁）

H0535

河伯娶婦　(THE BRIDE OF THE RIVER GOD)

孫毓修編纂

上海・商務印書館1918.11／1922.9四版　童話1＝78

[系目270]1918.11／1922年四版、童話1輯78（孫建江）改編自『史記』西門豹治鄴故事[樽本][商目89][劉民666]童話1集78編（柳和城73頁）

L1898＊

驢大哥

沈徳鴻（雁冰）編訳

上海・商務印書館1918.11　童話1＝79

[現代679]叢話叢書第1集[商目89][劉民690]童話1集79編[茅全附8]童話第一集第七十九編（柳和城73頁）未収録[童話232][鄭編375]（鄭志明)「格林童話」

W0002＊

蛙公主

（孫毓修編訳）（沈徳鴻（雁冰））

上海・商務印書館（1919.1）　童話1＝80

（孫建江）格林童話（GRIMM）[商目89][劉民728]童話1集80編[茅全附8]童話第一集第八十一〻編とする（柳和城73頁）未収録[張治A67]「童話叢書」收入了8篇格林童話，其中有3篇是茅盾翻訳的[童話232]1919.1、「格林童話」（鄭志明)「格林童話」

T1143＊

兎娶婦　(THE MARRIAGE OF MR. RABᵛᵛIT)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1919.1／(1922)9四版　童話1=81

「鼠択婿」「狐兎入井」と合冊[現代679]童話叢書第1集[大典464][樽本][商目89][劉民728]THE MAGGᵛᵛIAGE OF MR. RABᵛᵛIT。童話1集81編[茅全附8]童話第一集第八十一編（柳和城73頁）未収録[童話232]

G0753＊

怪花園　(THE BEAUTY AND THE BEAST)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1919.1／1922.9四版　童話1=82

[樽本][現代679]1919.1初版。童話叢書第1集[商目89][茅全附8]童話第一集第八十二編[劉民662]童話1集82編（柳和城73頁）未収録

S1906

書呆子　(THE BOOKWORM)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1919.3／1922.9四版　童話1=83

[系目94]1913.3、童話1輯83[樽本][商目89][劉民720]童話1集83編[茅全附9]童話第一集第八十三編（柳和城73頁）未収録[童話232]似乎是茅盾的創作[紀編211]題名のみ

Y0740

一段麻

（孫毓修編纂）（沈徳鴻（雁冰））

上海・商務印書館（1919.5）　童話1=84

[大典467]は沈徳鴻編、1919.5刊とする[系目5]刊年不記、童話1輯84[商目89][劉民747]童話1集84編。『二十世紀中国文学大典』469ᵛᵛ頁：沈徳鴻編、出版時期是1919年5月[茅全附9]童話第一集第八十四編（柳和城73頁）未収録[童話232]1919.5

S2014

樹中餓　(STARVED IN A TREE)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1919.4／1922.9四版　童話1=85

[大典466]1919.4[系目291]1919.4、童話1輯85（孫建江）改編自『古今小説』羊角哀舎命全交故事[樽本][商目89][童話232]胡従経は1919.6とする、明馮夢龍「三言」的「羊角哀棄家贖友」写成[劉民720]童話1集85編[茅全附9]童話第一集第八十五編（柳和城73頁）未収録

M1851

牧羊郎官　(THE RESPECTABLE SHEPHERD)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編纂

上海・商務印書館1919.4／1920.9四版　童話1=86

[大典466]1919.4[系目251]1919.4、童話1輯86。（孫建江）改編自『史記』平淮書故事[樽本][商目89][童話232]胡従経は1919.7とする[劉民698]童話1集86編[茅全附9]童話第一集第八十六編（柳和城73頁）未収録

H0220＊

海斯交運　(HANS IN LUCK)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編訳

上海・商務印書館1919.7／1922.9三版　童話1=87

[樽本][現代680]1919.7初版。童話叢書第1集[商目89][劉民664]童話1集87編[茅全附9]童話第一集第八十七編（柳和城73頁）未収録[童話232]（鄭志明）「格林童話」

J1275＊

金亀　(THE TORTOISE WHO TALKED)

沈徳鴻（雁冰）、孫毓修編訳

上海・商務印書館1919.12／1921.9再版　童話1=88

[樽本][現代681]1919.12初版。童話叢書第1集[大典469]は1919.10刊とする[商目89]孫建江「「金亀」訳自『天方夜譚』」[劉民678]童話1集88編[茅全附9]1919.7刊とする。童話第一集第八十八編（柳和城73頁）未収録

F0363＊

飛行鞋

（孫毓修編訳）（沈徳鴻（雁冰））

上海・商務印書館（1920.10）　童話1=89

[大典469]は沈徳鴻編、1919.10刊とする[商目89][劉民655]童話1集89編。『二十世紀中国文学

大典』469頁：沈徳鴻編、出版時間是1919年10月[茅全附19]童話第一集第八十九編（柳和城73頁）未収録（柳和城72頁）「最後一種」とする[童話232]

第２集

X1026＊

小人国

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話2=1

SWIFT著（孫建江）[樽本]不完全本[『東方雑誌』8:1広告]第二集[商目89][涵著90]孫毓修、童話、宣統元年[版補下316]孫毓修、童話、宣統元年[張治A10]1910年ママ、児童読物[童話234]斯威仏特小説[文文257]童話第二集、商務印書館「年假奨品」広告、『時報』宣統二年正月四日(1910.2.13)[編年④1925]童話第二集、『時報』1910.1.18商務印書館広告[編年④1934]童話第二集、宣統元年（1909）十二月出版[編年④1968]童話第二集第一編、『神州日報』1910.3.29商務印書館広告[編年④1974]童話第二集第一編、『杭州商業雑誌』第2期宣統2.2(1910)商務(印)書館広告[仁敏14-501]『杭州商業雑誌』第2期宣統2.2(1910)商務印書館広告

D0197＊

大人国　(SWIFT'S TRAVELS (A VOYAGE OF BROBDINGNAG))

孫毓修編訳

上海・商務印書館　庚戌1(1910)／1923.9十版　童話2=2

SWIFT著[『東方雑誌』8:1広告]第二集[現代911]童話叢書第2集第2冊[大典208]（孫建江）[樽本][商目89][編年236]正月、童話不記[編年④1698]宣統元年（1909）正月出版、童話不記[編年④1925]童話第二集、『時報』1910.1.18商務印書館広告[編年④1960]童話第二集第二編、『神州日報』1910.3.14商務印書館広告[編年④1968]童話第二集第二編、『神州日報』1910.3.29商務印書館広告[編年⑥2925]宣統元年版[劉晩232]童話2集2編[慧敏488]正月、童話2=2[涵著90]孫毓修、童話、宣統二年[版補下316][版補下316]（重複）孫毓修、童話、宣統二年（柳和城72頁）[張治A10]児童読物[童話234]斯威仏特小説[文文257]童話第二集、商務印書館「年假奨品」広告、『時報』宣統二年正月四日(1910.2.13)[現史②57]1909.二月

M0993＊

夢遊地球　(A WONDERFUL VOYAGE PART I)　上冊

孫毓修編訳

上海・商務印書館　辛亥2(1911.3)／1922.6六版　童話2=4

[『東方雑誌』8:1広告]第二集、上冊[現代912]上冊1911[大典224]著者不詳、1911.3刊とする[樽本][商目89][編年282]二月、童話不記[編年⑤2164]上冊、宣統三年二月（1911.3）出版、童話第二輯第四編[編年⑤2173]上冊、童話第二集四編、『神州日報』1911.4.19商務印書館広告[編年⑥2940]上冊、宣統三年版[慧敏500]二月[涵著86]宣統三年正月[版補下]未収録（柳和城72頁）

M0994＊

夢遊地球　(A WONDERFUL VOYAGE PART Ⅱ)　下冊

孫毓修編訳

上海・商務印書館1913.4／1922.6六版　童話2=5

[現代912]下冊1913.4、童話叢書第2集第5冊[樽本][商目89][編年282]1913.4、童話不記[編年⑤2164]下冊1913.4出版[劉民695]童話2集5編（柳和城72頁）

W1185

無瑕璧　(TWO SPOTLESS JADES)

孫毓修編纂

上海・商務印書館　1918.5／1922.6三版　童話2=7

[系目52]「無瑕壁〻」、1918.5、童話2輯7[樽本][商目89][劉民731]童話2集7編（柳和城73頁）未収録

L1756

蘆中人　(A MAN IN THE RUSHES)

孫毓修編纂

上海・商務印書館　1918.7／1922.6三版　童話2=8

[系目185]1918.7、童話不記（孫建江）改編自『史記』伍子胥為父兄復仇故事[樽本][商目89][劉民689]A MAN IN THE RUSHES、童話2集8編（柳和城73頁）

S1038＊

審狐狸

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話2=?

[商目89]

J2079＊

巨人島

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話2=?

[商目89]

F0658＊

風雪英雄

（孫毓修編訳）

上海・商務印書館　童話2=?

[『東方雑誌』8:1広告]第二集[商目89][涵著86]民国元年正月[版補下]未収録[編年⑤2099]童話第二集、『新聞報』1910.12.3商務印書館広告[編年⑤2108]童話第二集中一種、宣統二年（1910）十一月

第３集

H1454

猴児的故事

鄭振鐸編

上海・商務印書館1923.1　童話3=1

前有鄭振鐸出「編者的話」[商目89]（柳和城73頁）未収録

N0354

鳥獣賽球

鄭振鐸編

上海・商務印書館1923.1　童話3=2

前有鄭振鐸出「編者的話」[商目89]（柳和城73頁）未収録

B0268

白鬚小児

鄭振鐸編

上海・商務印書館1923.1　童話3=3

前有鄭振鐸出「編者的話」[商目89]は「白髪小児」とする（柳和城73頁）未収録

C0365

長鼻矮子

鄭振鐸編

上海・商務印書館1923.1　童話3=4

前有鄭振鐸出「編者的話」[商目89]は「長鼻的矮子」とする（柳和城73頁）未収録

「老残遊記」紀行

「老残遊記」は劉鉄雲が書いた清末の小説だ。主人公は、老残という放浪の医者。小説の舞台は山東省に設定されている。黄河流域を移動しながら当時の世情を描写し、事件に遭遇する。劉鉄雲自身の思想と実経験を色濃く反映した作品である。実在する場所を老残が「遊記」するのがひとつの特徴になっている。作品に登場する済南市内の大明湖、泉および黄河の渡し、また鄭州を訪問して劉鉄雲作品に出てくる場所をたどった。

「１　済南篇」は、『野草』第38号（中国文芸研究会1986.9.10）に掲載。1984年、天津に長期滞在したおり、済南から泰山を個人旅行した。『老残遊記』を片手にしながら済南市内を散策した時の報告書である。ある研究者から、私のこの文章を読みながら自分も済南市内を歩いた、と聞かされた。私の説明におかしなところがあるとの指摘はなかった。少しはお役に立ったのだろう。済南篇は、変化の激しい現代中国においては、一昔も二昔も前のことになる。そういう時代もあった、という意味で内容には手を加えていない。劉鉄雲は泰山にも足をのばしている。私もそのあとを追った。しかし、その報告書を作るにはいたらなかった。

「２　鄭州篇」は、原題「黄河、鄭州に決壊す――「老残遊記」紀行」という。『大阪経済大学教養部紀要』第17号（1999.12.31）に掲載。鄭州紀行は、済南訪問から15年後のことだ。黄河は、1887-88年に鄭州で決壊した。その治水工事に参加したのが、のち「老残遊記」の執筆で有名になる劉鉄雲である。長期間にわたる治水工事を経て、ようやく決壊箇所の修復に成功する。直接の責任者であった河東河道総督の呉大澂は、重責を果たした喜びを「鄭工合龍」と文字を刻んだ印を作ることによって表わしたほどだ。本稿は、111年後、鄭州に当時の黄河決壊箇所を訪問した報告書である。泥砂が堆積しやすい黄河の性情からして、河の流れが変化しており、砂州が農耕地になるなど往事の面影はない。ただ、

その下流に比較して何倍もの河幅の広さが、氾濫防止策の困難さを見る者に容易に理解させる。また、収穫のひとつは、河の流れに突き出す形の堤防が、黄河独特の方式であるのを確認したことだ。「老残遊記」に触れて済南市内を説明する研究者は昔から多い。しかし、鄭州の黄河決壊場所まで行って検証した人はいなかったように思う。別に「劉鉄雲「老残遊記」と黄河」(『清末小説叢考』2003収録）を書いた。

1　済 南 篇

出　発

真夜中、午前零時07分を10分遅れで済南行き列車が天津駅に到着した。後方、寝台車の乗降口に立つ担当車掌は、乗車しようとした私に対して、もっと前の５号車でまず手続きをしろ、という。どこから乗ろうが同じじゃないか、少々ムッとするが、おお、そうじゃ、中国の鉄道では客車１両につきひとりの車掌がついている事を思い出す。

私から見れば、ぜいたくな人の使い方をしているとしか思えない。しかし、殺気さえ漂わせて押し合う乗客をさばくには、これくらいの車掌を配置しなくてはならないだろう、と妙に納得の行く中国式人の使い方だ。乗車時にそれぞれの車両でキップを点検する。乗ってしまえばもう検札はない。

タラップを登ると、まず人いきれと着重ねた衣服を通してにじみ出る汗の分子、およびタバコの臭いが私をつつみこんで歓迎してくれる。薄暗い白燭光に照らされて、すでに座席はつまっている。あふれている。半数は眠り、タバコの煙が電灯の光を弱めるのに効力を発揮している。

夜行列車には乗ったわ、寝台が確保できるかどうかわからないわ、座席は満席だわ、という情況に置かれると、私は眼にウロがくる。降りるか。出直して明日の便に変更するか。ややっ、汽車が動きだしたではないか。日本国内ならいざ知らず、国内でも夜行などに乗ったことはない私が、中国でなんでこんな目に会わねばならぬのか、いやいや中国だからこそなのだ、と脇の下に汗をしたたらせつつ荷物を抱えてまわりの人をかきわける。

動　機

「老残遊記」に描かれた場所を訪れてみたいというのが、中国長期出張の目的のひとつである。1984年メーデーをはさんで安徽省黄山に天津外語学院から団体で旅行をした。自由はきかないが、汽車、ホテル、バス、食事の手配がすべてあなた任せ、というのが団体旅行の便利な点だ。ことに電脳の普及していない現代（注：1984年当時）中国において、宿と交通手段の確保が困難なこと、個人旅行の限界をさりげなく、かつ極めて日常的に、おまけに懇切丁寧に教えてくれる。わずか137キロの北京－天津間を片道２時間半かけて往復するたびに思いしらされたことだ。30数年ぶりの暑さという北京・天津の夏は、旅行をする気力を私から奪った。10月になり１日１度の天津市内徒歩旅行を復活させはした。しかし、日本で浴びていたテレビ、新聞、雑誌からの刺激がなくなると、中国では好奇心が減退するのは不思議な体験だった。テレビは中央と天津の２チャンネルのみ。午前９時頃から教育番組があるが、画面には原稿を読む講師と、黒板しか映らない。昼のニュースが30分間、午後は放送休止。午後５時頃、昼のニュースを再放送して、夜10時半には終了する。10時半！そりゃ、朝食７時ですからね、学校も職場も８時に開始ですから、数少ない娯楽であるテレビ放送を夜中までやれば、翌日の仕事にさしつかえるでありましょう。お上のご配慮ですか。新聞は４ページ。情報の収集に多大の労力がかかる。その割りに成果が上がらない。旅行をしたいともあまり思わなくなっていた。明日も今日と同じだろう、次の日も、その又翌日も、永遠にこういう状態が続くのではないか……気がつくと、はや、11月である。寒くなると動きが取れない。劉鉄雲『老残遊記』１冊をバッグにいれ、ようよう腰をあげたのだった。

済南へ

５号車には列車長の席がある。どうやら、ここでキップの変更、寝台の手続き、その他もろもろを行なうらしい。昨日、済南行き191号列車のキップを買ったとき、販売員はここ天津駅では寝台券は売らないと言った。天津は通過駅で、寝台券の発売は始発駅でしか行なわないからだ。10人ばかりの乗客が、手続きをしよ

うと案内席を取り巻いているのに肝心の列車長がいない。慣れているのか、あせるわけでもなく、ただじっと待っているだけだ。

そもそも、済南着が早朝の６時半という列車をなぜ選んだかと言えば、これもやはり中国の情報網の不備に原因する。遠距離から宿の予約ができない。行き当たりばったりにならざるをえない。日本からの団体旅行者が現地に着くまでホテルを知らされないのも、同じ理由だ。知ろうにもその術がない。済南に夕方到着したのでは宿なしになるおそれがあり、不安だ。余裕を見たい私の性格から導きだされる答えは、午前中に済南に着きたい、ということになる。必然的に夜行である。その結果が満員列車のなかで立ちつくす、わ・た・し。きどっている場合ではない。

列車長は来るにはきたが、のんびりと書類に記入を始める。ひとりにたっぷり10分はかかっておる。これではいつになるのか見当もつかない。暑い。ひとまず食堂車に避難する。大人はテーブルにうつぶし、子供は机の上に寝る。食堂車は臨時の寝台車に早変わりしている。白い服装からコックとわかる男が、もうなにも売っていないと言うのに対し、いや、人が多すぎるので手続きをするまでここで待つけんネ、と答える。彼らはきかない。列にならべ。いやじゃ。ここで一休みする。隣の若者が、それじゃ紹介状を書いてやる。見れば、外国の友人を優先してくれ、とあるではないか。この列車の関係者らしい。ていよく食堂車を追い出され、荷物を持って（食堂車に置いていっていいかと聞くと、危ないから持っていけとのお言葉）引き返せば手続きを待つ人はかなり減っている。

意外なことにコンパートメントの寝台車は連結されていない。硬臥とよばれる三段ベッドの10番下段を振りあてられ5.70元を支払う。番号を捜し当てると床は食べもののカスでよごれ、毛布、シーツは寝乱れたままである。さすがに床は掃除してくれたが、大柄な女性係員はそのまま「おやすみ（休息)」とむこうに行こうとする。レレレッ、ベッドは寝乱れたそのままではありませんか。シーツの新しいのはないの？かえてちょうだい。言ってみるものだ。シーツの小山を運びだしてきてそのなかから１枚を抜き取ってくれる。お前は何国人だ、そのヒゲからは推測ができない、などといういつもの詮索もされず、かろうじてベッドに就いたのが１時、ウツラとすれば、もう済南である。

劉鉄雲「老残遊記」

劉鉄雲（1857-1909）の「老残遊記」（1903-07年に断続執筆）は、おもに山東省を舞台に物語が展開される。作者の分身である主人公・老残が名所見物をしながら、その過程で見聞した事を述べる。名付けて「老残遊記」という。1891年当時の中国が描かれるばかりではない。作品は劉鉄雲の自伝的要素を濃く反映しているし、実在の地名が織り込まれて観光ガイドの側面も持つ。

初集20回は、書中では東部の千乗に始まる。千乗より登州・蓬莱へむかい長山島、大竹島、大黒島をながめる。しかし、この部分は夢落ちになっている。夢から醒めた老残は、千乗をたつ。西に移動し済南府で大明湖を見物し、名泉をめぐる。玉賢の酷吏ぶりをたしかめるために黄河沿いに斉河、平陰、寿張、董家口とさかのぼり曹州に至る。殺人事件に巻き込まれ、事件解決のため斉東と斉河を行ったり来たりする。

二集の６回までは山東省泰山が舞台だ。７回から９回は江蘇省淮安であるが、その内容は冥府のことである。

「老残遊記」に出てくる地名を図示しておく。劉鉄雲の太谷学派の思想は桃花山の山中で陳開される（第8-11回）。桃花山は平陰県を出て西南に向けて30里行けばその麓につくという（第7回）。桃花山は太谷学派ゆかりの地、すなわち黄崖山のことであろうと私は考えている。地図によれば、黄崖山は平陰県の東にあたる。「老残遊記」に書かれている桃花山は平陰県の西南となっていて、実際の黄崖山とは方角が異なる。劉鉄雲が故意に書き改めた可能性が高い。太谷学派については、はばかるところがあり、関連する黄崖山は桃花山に変更した。ついでに、推測される手掛かりになる方角をも書き換えたのではないか。黄崖山を記入しておく。

略図を見れば黄河沿いにかなり広く関連地が散らばっていることがわかる。持ち時間ではとても全部の土地をまわることはできない。「老残遊記」では通過地点としてだけあげられている地名もある。おまけに、外国人には開放していない場所であったりする。許可証もなしにフラフラとひとりで行くわけにもいかない。済南と泰山に的を絞ることにした。

「老残遊記」が書かれた1903-07年というのは、日本でいえば明治36-40年になる。私が訪れた1984年から数えて77-81年前のことだ。小説の時間設定は1891年だから、これは明治24年である。93年前。おおよそ百年以前の場所をこれからたずねようというのだ。

済南・大明湖

千乗を出発した老残は、車上より山の紅葉、畑の菊花をめでながら済南府に到着した（「老残遊記」第2回）。

> 済南府について城内に入れば、家家に泉の水があり（家家泉水）、戸戸に枝垂れ柳がある（戸戸垂楊）。あの江南の風景よりもさらにおもしろく感じた。小布政司街に行き、宿屋を見つけた。高昇店という。荷物をおろし、車代と酒代を支払うと、間にあわせに夕食をすませ、さっさと寝てしまった。

布政司というのは各省に置かれる民政兼財政長官（布政使）の役所をさす。市

毛承霖纂修『総修歴城県志』1924年県志局排印本

地番1　布政司小街　地番2　英武廟街　地番3　鵲華橋　地番4　歴下亭
地番5　鉄公祠　地番6　明湖居　地番7　趵突泉　地番8　黒虎泉

街図*1によると、藩署（現在は省政府になっているらしい）がそれに当たる。そこを

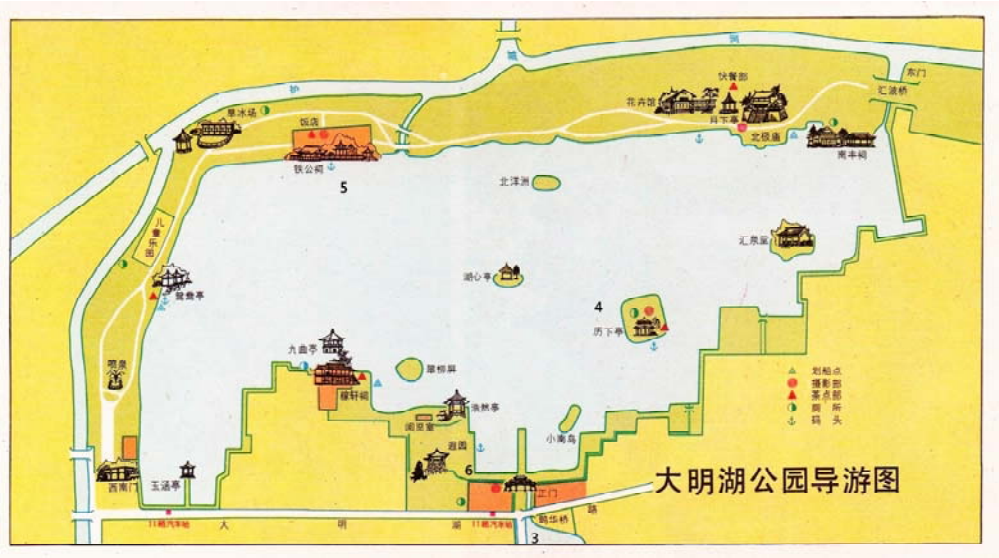
南北に通るのが布政司大街だ。東西をＴ字に交叉するのが布政司小街（地番1）である。「老残遊記」に出てくる「小布政司街」とは「小」の置きぐあいが異なる。大街、小街というのがわかりやすいが、昔は小布政司街と言っていたのか。劉鉄雲が済南にいたころ、最初に住んだのがこの小布政司街だという*2。さらに鸚鵡廟街に転居した。劉鉄雲の息子・大紳も触れるように英武廟街（地番2）のことだろう。両者は通音する。済南在住の研究者・厳微青によると、布政司小街は、現在、省府東街といい、鸚鵡廟街は英武街と改名しているという*3。

高昇店という宿屋はどこにでもあった。「官位が上がる」という意味の、めでたい命名だ。こちらの名前が役人向けならば、商人が喜びそうな、「日々に繁盛する」という日昌店もある。外国人である私でさえ現地探訪を思いつく。「老残遊記」が発表されてから、本を片手に、現地を訪れる人も多かった。作品がもつ魅力のひとつだ。劉大紳に宿屋の写真を示す友人もいた。「老残遊記」の英訳者ハロルド・シャディックもそのひとりだったらしい*4。大紳は、それに対して、「老残遊記」に便乗し利のために高昇店を造った人があるやも知れぬ、と懐疑的である*5。ありそうな事だ。

翌日、明け方に起きだすと朝食を簡単にすませ、鈴を振りながら申し訳に街じゅうを一回りした。午後、歩いて鵲華橋のちかくに行き、小舟を雇うと二本の櫂で漕ぎでる。北に向け少し行くと、歴下亭の前に着いた。舟をおり進んでいって、大門を入ると、亭である。漆は、すでに大半が剥げ落ちている。亭には一幅の対聯がかかっており、書かれているのは、

歴下此亭古　　歴下にこの亭古く
済南名士多　　済南に名士は多い

という句だ。上には「杜工部句」、下に「道州何紹基書」と書いてある。亭のそばにはいくつかの建物があるが、べつにどうということもない。ふたたび舟に乗り、西に向かって漕ぎゆけば、それほど遠くなく、鉄公祠のほとりについた。

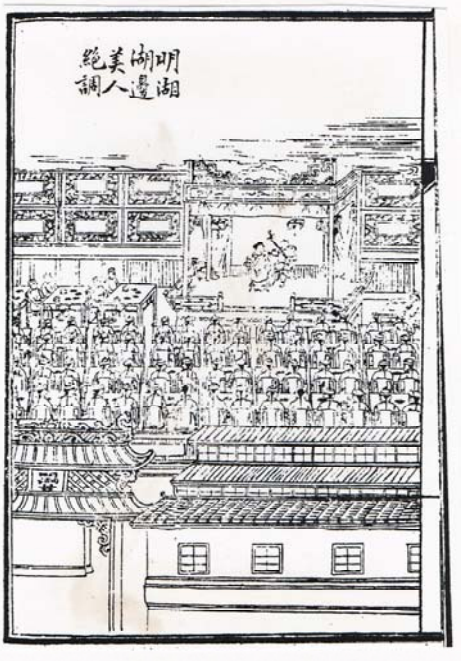


繍像1「老残遊記」『繍像小説』所載

老残は道士から医術を伝授してもらい、20年近く病人をなおして口を糊している、という設定になっている。「鈴を振りながら」街を流す、いわば「流しの医者」である。官吏でもなく、商人でもない。浮き世を離れた自由人なのだ。才能があって、しかも俗世間に対する欲望がない。どこに行くのも、何をするのも自由だ。遊記の主人公としては、これほど好都合な存在もない。老残が済南に来たのは、物見遊山のためである。だから、「申し訳に街じゅうを一回りした」だけで、商売に身をいれるつもりはないのだ。

鵲華橋（地番3）は、あとから調べると大明湖公園の正門――朱、青、緑と金色で鮮やかに、枝垂れ柳にかこまれて、くすんだまわりの風景に活力を与えている屋根付き鳥居型の門（写真1）のすぐ近くにあったはずだ。11番のバスを待っていた停留所の附近だ。なにかの本で、現存していない、と読んだ気がしたし、駅で

写真1 大明湖正面（南門）



繍像2 明湖居「老残遊記」

買い求めた交通図は簡単すぎて記載がなかった。あんなところにあったとは。昔はアーチ式の石橋（繍像1「老残遊記」）だったらしいが、今ではコンクリート橋だそうだ。

旧時、中国の知識人は肉体労働はしないものだった。老残が自ら櫂をあやつったとは思えない。ハロルド・シャディックの英訳本『老残遊記』に添えられた1930年代のものらしき写真には、屋根付き小舟に客待ち顔の船頭の姿が見える（写真2）。現在は、貸しボートのほかにそれらしい小舟はいない。遊覧船があるら

Fig. 6. Looking toward Thousand Buddha Hill from the north of Ming Lake.

写真2 1930年代のアシとハスにおおわれた大明湖。北岸より南の千仏山をのぞむ

写真3 大明湖の岸辺より湖心亭を見る。歴下亭はそのうしろ。薄曇りで千仏山は見えない

しいが、どこから出ているのかわからない。私ひとりで漕ぎだすしかない。１時間１元、「押金（保証金のこと。あとで返してくれる）」５元を支払いボートを借りる。両方のオールをこげば、どういうわけか右旋回してしまうオンボロ鉄製ボートを操り、湖心の歴下亭をめざして30分。着いてみると、なにやらおかしい。目当ての建物がない。どうやら後に造られた湖心亭という小島だ。私は湖の北岸から乗り出したのでこういう間違いをおかしたらしい。それにしても勝手に小島を造るなんて、文化財保護をどう考えているのだろう、などというのは余計なお世話か。まわりの小舟は中国人のアベックばかり。私は上着を脱ぎ捨て、カメラを首からぶらさげ、たったひとりでお勉強だ。楽しくなんかないッ。

あちらに樹木の中から建物が見える。左のオールに力をいれる。近づく。石畳で護岸してある。湖面より50センチくらいか。増水すれば湖面下に没するのではないかと思われるほどの低さだ。思われるだけで、そういう事態にはならないという。石面に鉄の環っかが埋めこまれ、これにボートをもやうのだろう。立ち上がり、片足を岸に置く。ボートに残った左足が、私を股裂きにしようとする。おーとぉット。ブワンズワイ。アベックが笑う。小石を投げつけてやろうか、とトッサに考えるのは阿Ｑである。阿Ｑに変身している自分に気付く。

上陸すれば歴下亭（地番4、写真4）も枝垂れ柳に囲まれている。済南の南に千仏山がある。古名を歴山という。ゆえに、歴山の下にある済南をふるくは歴下または歴城と称する。中の亭には「歴下亭」と額がかかっている。しかし、杜工部すなわち杜甫の句、何紹基書の対聯は、老残の記述とは違い、亭ではなく外の大門にはめこまれている（写真6）。しかも、何紹基の名前は見えるが、杜工部の方は、ない。さらに、その文句が異なる。「歴下に此の亭古く」のはずが、杜甫の原句の「海右に此の亭古く」のままなのだ。南面して右は、西である。海の西は、陸地だ。歴下と陸地をくらべれば、その規模が違う。なによりも、歴下は済南と同義であるから、原句のもつ対照の妙がなくなる。順を追ってみようか。まず、原句の「海右(海内という説あり)」が「歴下」に改められた。老残は、これを見た。その後、いつかわからぬが、原句にもどして作りなおされ、場所も移動させられたらしい。大門には、もうひとつ大きな額「海右古亭」が掲げられる。鉄公祠（地番5）の前、小滄浪（写真10）に戻ってみるとたっぷり１時間かかっておる。

写真4 歴下亭の西側。ボートをもやい上陸

Fig. 5. A view of the Lihsia Pavilion.

写真5 1930年代の歴下亭

写真6 大門をとおして歴下亭を見る

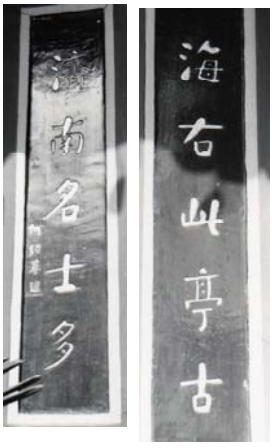


写真7 大門の対聯

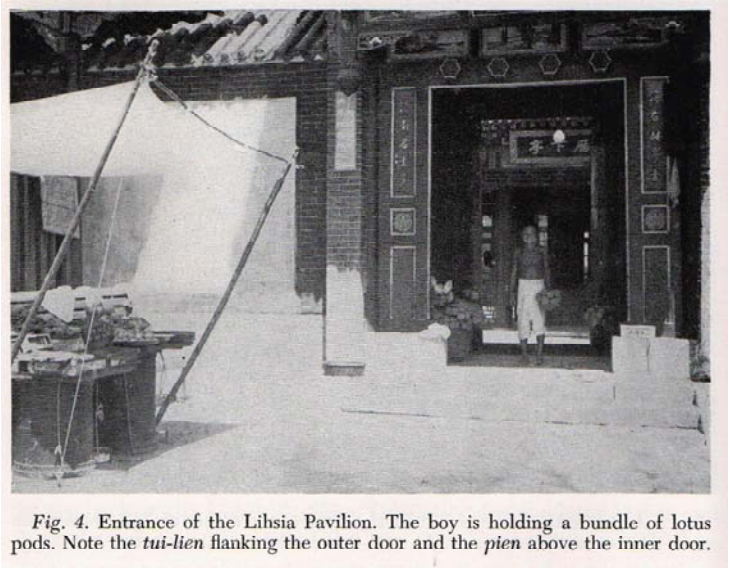


Fig. 4. Entrance of the Lihsia Pavilion. The boy is holding a bundle of lotus pods. Note the *tui-lien* flanking the outer door and the *pien* above the inner door.

写真8 1930年代の歴下亭。大門に対聯

写真9 湖心より鉄公祠を見る。正面の建物はボート貸し場。祭堂か

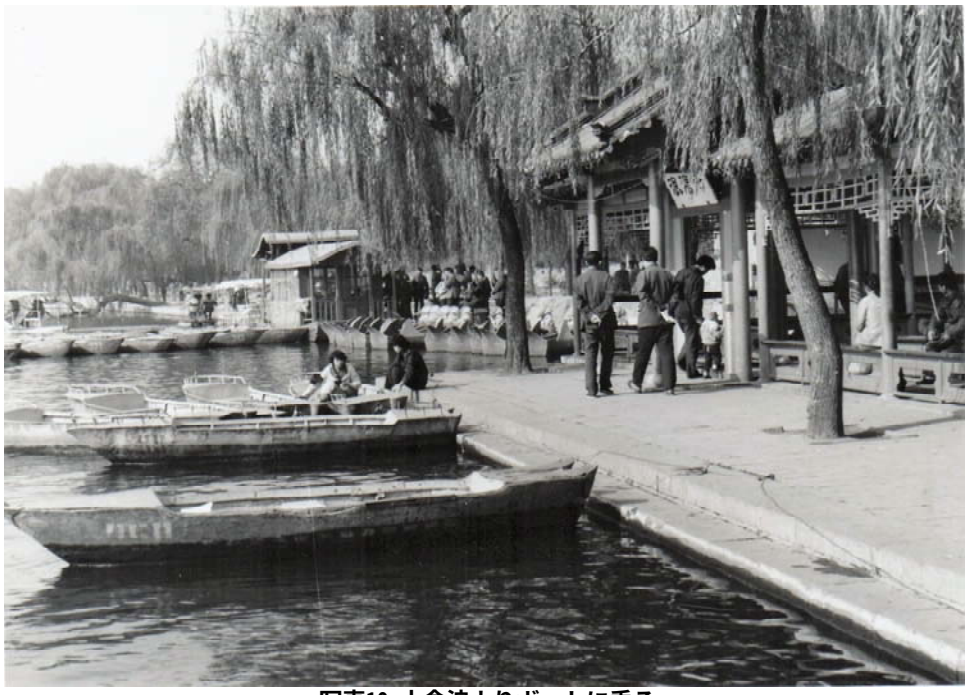


写真10 小倉浪よりボートに乗る

鉄公祠の前に行き、南の方を眺めると、真向かいの千仏山に、寺院僧楼が深緑の松、緑の柏と高くなり低くなりお互いに見え隠れし、赤いのは火の赤さ、白いのは雪の白さ、青いのは藍の青さ、緑のは玉の緑で、さらにその間に紅葉が点々とはさまっているのが見える。まるで宋人趙千里の一幅の大画のようで、長さ数十里の衝立となっている。しきりに賞嘆しているところへ、ふと、漁夫の歌声が聞こえた。頭を垂れて見ると、明湖は、すでに澄みきって鏡とかわらず、千仏山のさかさまの影が湖に映って、はっきりと見えているのだ。その高楼と樹木は、ことのほか鮮やかで、上方の千仏山よりもさらに美しく、もっとはっきりしているように思われた。この湖の南岸は、そのまま行けば街であるが、アシによってびっしりと遮られている。今はちょうど開花の頃で、見渡すかぎりの白い花が、うるおいを含んだ夕日に映え、まるで薄桃色のジュウタンのように、上下ふたつの山の敷きものとなっており、まことに珍しい。

これがのちに有名になった「仏山の倒影」である。では、百年後の私が「仏山の倒影」を見たかというと、否である。倒影どころか、千仏山そのものがみえない。晴れてはいるが薄曇り。南を望んで湖水の向こうに市街のビルがあるくらいで、あとは何も見えりゃせん（写真3）。

「仏山の倒影」は、はたして見えるのか、みえないのか。中国では長らく論議の的となっている。蔡元培の娘が済南にいたころ、「老残遊記」を携えて大明湖に遊んだという。実際に見て、思わず笑ったそうだ。たとえ30年前、明湖がアシでおおわれていなかったとしても、千仏山の倒影が大明湖に映ることなど出来はしない。胡適は、蔡元培からこう聞かされて、「おおよそ作者が、ちょとばかり誤記をしたのだろう」と書いている[*6]。胡適のこの文章には、1925年11月７日の日付がある。1920年代には、大明湖はアシでおおわれていたらしい。アシと蓮と樹木でおおわれた大明湖の写真を見ると、確かに千仏山の映る湖面の余裕はない。ただし、この写真が鉄公祠の前から撮ったものであるかどうかは、わからない（写真2）。

私のみた大明湖にアシはなかった。その意味では、老残の遊んだ湖の状態にやや近いかも知れない。しかし、千仏山そのものが見えないのだから、どうしようもない。済南で買い求めた済南市出版弁公室編『済南風情』(山東人民出版社1982.12)、陶良喜編著『済南的泉水』(北京地質出版社1982.8)は、いずれも「老残遊記」から引用して、「仏山の倒影」の有名化に協力を惜しまない。

前者『済南風情』には面白いことが書いてある。「老残遊記」の記述をまにうけて、読者が湖畔を眺めようとも、水中の倒影はおろか、千仏山さえもボンヤリとしか見えないかも知れない。

これを読んで、私は、まず、うン？と思う。千仏山は、普段はっきりと見えないものなのか。作者はそこで三つの条件を提示する。季節は秋、時間は夕方、天候は無風。この三条件がそろったところで千仏山がくっきりと見えるのだ、と作者は保証する。ところが、いくども足を運んだこの作者でさえ、「仏山の倒影」は見たことがない。私はふきだしてしまった。さらに先輩の言として、現在の湖のまわりは清朝のころとは違っているから、小舟で南行し、岸から50歩くらいのところで舟を止めれば見ることができる、というのを紹介している。こんな煩雑な条件なのだから、いままで試したことはないし、湖から遠く離れているうえに高くもない千仏山がどうして湖北の岸に倒影を映すのか、わたしゃ物理学者じゃないけんワカリマセン、というにいたっては、私は二度笑ってしまった。済南在住の研究者が、この問題でどれくらい質問責めにあっているのかが想像できる。

変わるのは人ばかりではない。風景も時とともにかわっていく。1900年前後、大明湖にはアシがあった。1920，30年代はアシが繁茂していた。1984年、アシなどほとんど眼にはいらない。昔は見えて、今はみえないこともあろう。老残、すなわち劉鉄雲がしょっちゅう「仏山の倒影」を眺めていたとも思えない。だからこそ「まことに珍しい（実在奇絶）」と表現したのだ。見ることが出来ないから、かえって有名になることもあるのだ。

> こんなに素晴らしい景色なのに、なぜ、遊覧客というものがいないのだろう、と老残は思った。しばらくながめていたが、向きを変えて大門の内側にある円柱を見ると、対聯があり、

四面荷花三面柳　　あたり一面蓮の花、さん方は柳の木
一城山色半城湖　　街じゅうは山模様、半分を占める湖

と書いてある。いやはや、まったく、とそれとなくうなずいた。大門を入ると正面は鉄公の祭堂で、東は蓮池である。曲がりくねった回廊をめぐって蓮池の東に着くと円門である。円門の東に三間のふるい建物があり、壊れた額に「古水仙祠」の四字が書かれている。祠の前の古びた対聯には、

一盞寒泉薦秋菊　　玉杯一杯の冷たい泉水に秋の菊をささげ
三更画船穿藕花　　真夜中に彩られた舟が蓮の花をつききる

と書いてある。水仙祠を過ぎて、もとどおり舟に乗ると歴下亭のうしろに漕ぎいたる。両側から蓮の葉と花が舟をはさみ込み、枯れはじめた蓮の葉は舟にこすれてカサコソと音をたてる。水鳥は人に驚きコッコッと飛ぶ。熟した蓮の実がたえまなく舟の窓から飛び込んでくる。老残はさっそくそのいくつかをつまんで、食べているうちに、舟はすでに鵲華橋のほとりに着いていた。

蓮の花と柳をよみこんだ対聯は、現在は、鉄公祠の西の入口の壁に埋めこまれている。私が訪れていたときちょうど菊花展が開催されており、片方の聯は、菊花にかくれていた。蓮池はある。緑の水面に八割がたは枯れている。手で触れば、さぞかしカサコソと音をたてることだろう（写真11）。蓮池を前にして菊花の鉢をならべた二階建ての建物がある。金魚の展覧会をやっていたが、見物する気にはなれなかった。鉄公の祭堂というのが、あったかどうか。水仙祠もすでに存在しないということだし、鉄公の祭堂も同様ではなかろうか。まさかボートのオールを保管してあった建物（写真9）が祭堂だったのではあるまいな。表示が何もないのだもの、わかりません。

南門にまわると、すでに12時半である。まわりに食堂らしきものは見当らない。道端に食いものの屋台が出ている。見れば醤油で煮染めた色をしている薫製の鶏

写真11 鉄公祠の中庭。ハスに柳。対聯のとおり

写真12 鉄公祠の東門

写真13 鉄公祠の看板

である。天津で毎日のように酒のさかなにむしっているやつだ。あとでのどが渇くんですよネ。となりはマントウ、包子を白い上着を着たおばさんが売っている。ホテルとちがって、一般の店で主食類を買う際には食糧キップが必要だ。留学生は大学の事務所に要求すれば手続きを経たうえで全国共通のキップをもらえる。私には、その用意がない。またその気も、ない。団体旅行であれば、バスで済南飯店までもどって昼食という段取りだ。しかし、私は、自由で不自由な個人旅行である。小さな椅子に腰をおろし、左手にマントウを３個、右手にドンブリ９分目までいれられたお茶を慎重に持ち、口の方からお迎えに行っている口ヒゲのお兄さんを横目で見ながら、このまま泉見物をすることにする。

オーとッ。明湖居を忘れていた。山東の民間伝統芸能「かたりもの(説鼓書)」が演じられる演芸場である。これも「老残遊記」に書かれて一躍有名になった。明湖居は、南門を入って西にある、ということだ。ところが、ボートをこいだ疲労と、食堂が見当らない結果から来る空腹が、名泉めぐりを敢行するのだという気のあせりをともなって、私にその事をすっかり忘れさせてしまったのだ。『繍像小説』の繍像2をかかげ、地番6を振っておいて、再訪の機会を待ちたい。

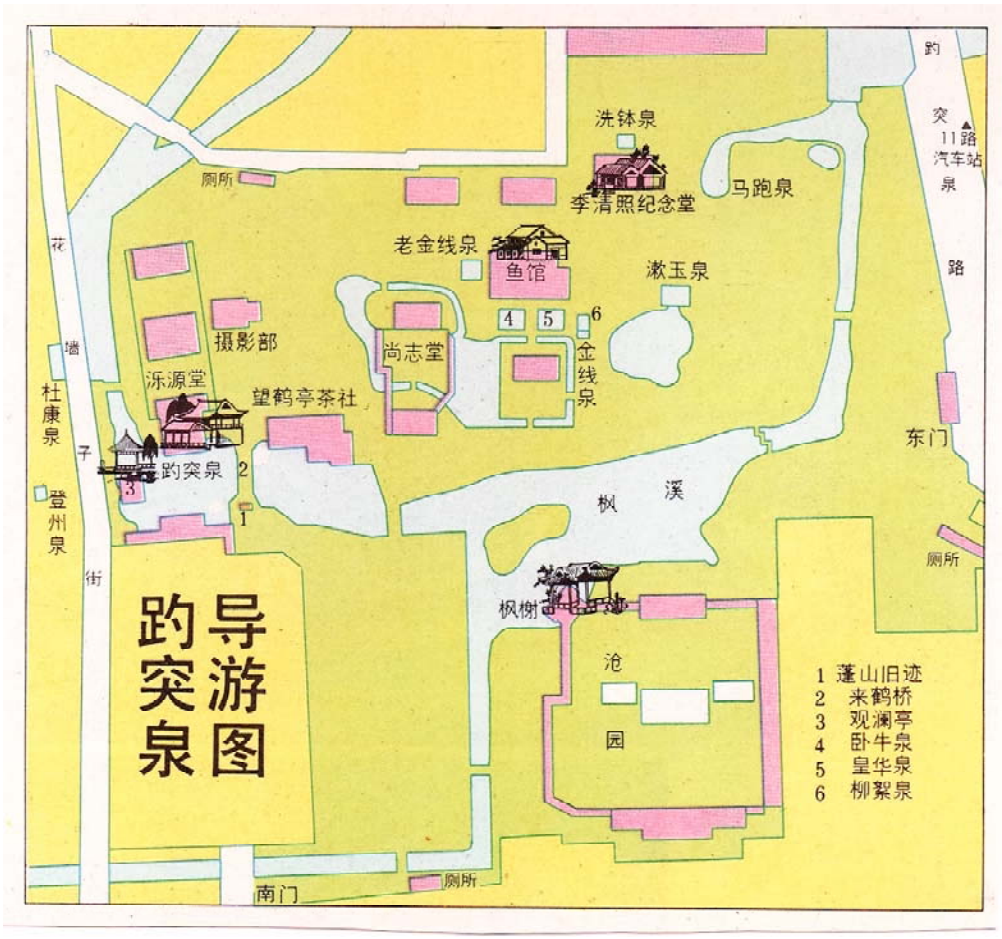
趵突泉

「済南の七十二泉」と俗に称される。「七十二」というのは、数が多いということだ。実際には、これをはるかにうわまわる泉がある。現在、済南市内だけで、108の泉を数えていて「老残遊記」にいう「家家泉水」も誇張ではない。

市内の泉を分けて、四大泉群という。すなわち、趵突泉群、黒虎泉群、珍珠泉群、五龍潭泉群である。「老残遊記」では、主として趵突泉と黒虎泉について述べられる。私もそれにしたがう。

> （老残は）昼食をおえると、西門を出て先ず趵突泉に赴き、そこで茶を飲んだ。この趵突泉は、済南府七十二泉中第一の泉で、大きな池の中にある。池は、四、五畝の広さがあり、両端はいずれも川に通じる。池の中に水が流れてサラサラと音をたてている。池の真ん中にはみっつの大きな泉があり、底から湧き出て水面から二、三尺の高さに噴き上がっている。土地の

人の言うところによれば、昔は五、六尺の高さに湧き上がっていたが、後に池を修理すると、どういうわけか低くなってしまったという。このみっつの水柱は、どれもツルベよりまだ太い。池の北側は、呂祖殿である。遊覧客が休めるように、建物の前には日除けがかけてあり、四、五脚の机と、十幾つの長い腰掛を置いて茶を売っている。(第3回)



趵突泉案内図

趵突泉公園の案内図を掲げておく。旧時、趵突泉の面積は4畝に足らなかった。約2400平米だ。地図を見てもらえばわかるが、確かに趵突泉だけで独立している。池そのものの東西は30メートル、南北は20メートル。線香の煙と、大道芸人、語りもの、占い、さらに露店がひしめきあっていた。解放後、約12倍の面積に拡大

し、ということはまわりの泉も囲い込んで公園とする。東門を新設し横額の文字「趵突泉」（写真14）は、郭沫若の筆だそうだ。

写真14 趵突泉公園東門。郭沫若筆。
1980年代には解放軍の制服を普通に見かけた

趵突泉の特色は、なんといっても池底から突き上げてくる三つの「水柱」だ。「趵bao」は、跳び上がる、という意味だし、「突tu」は、高く突き出たさまをいう。こじつけ説明としても、わかりやすい。往時は、150-180センチも噴き上げていた。さぞかし見物だったろう。老残が見たのは、それでも60-90センチあった。1959年、陶良喜が初めて済南に遊んだとき、趵突泉の泉水は60センチあまりも盛り上がっていたという。そして1984年現在は、遠目に見て、せいぜい20センチ（写真15左下）である。勢いが弱ったのは、工農業用水の使用が激増したのが原因らしい。昔の勢いはなくなったとはいえ、見ればやはり不思議の感を抱く。緑濃い水面を一見すると濁っているのではないかと思う。違うのだ。水草が繁茂しているので水底が見通せないだけなのだ。噴きあがる泉水に長い水草が左右に揺れて、ゆれる。ムグオグオグォグォォォ。鼓膜を震わすことをしない音が、私の聴覚神経を、直接、刺激する。

池の南、蓬山旧跡から北の濼源堂――「老残遊記」に出てくる呂祖殿を望んだのが写真15である。水面に三つの盛り上がりが見て取れるだろうか。ハロルド・シャディックの写真16と比べると、周りのゴチャゴチャがないくらいだ。

さすがに疲れる。趵突の水でいれたお茶はおいしいらしい。「趵突の水を飲まずば、済南に遊んだかいなし」ということだ。うまい具合に、隣には、元の名前

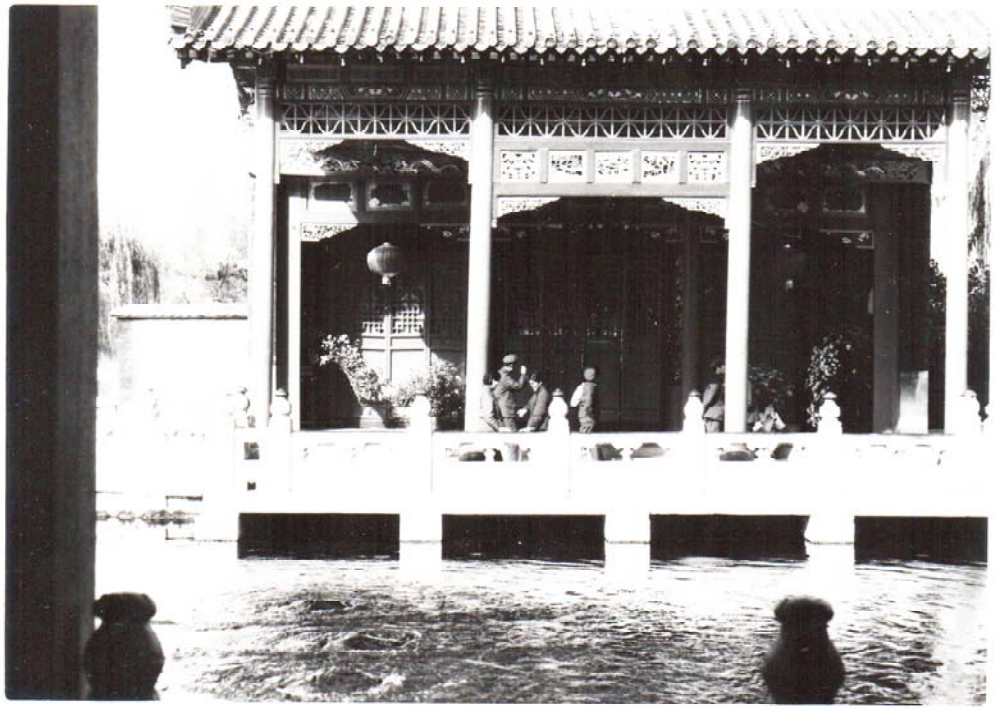


写真15 左下の水面が波立つ。趵突泉の三つの噴出口が見えるか見えないくらいの勢い

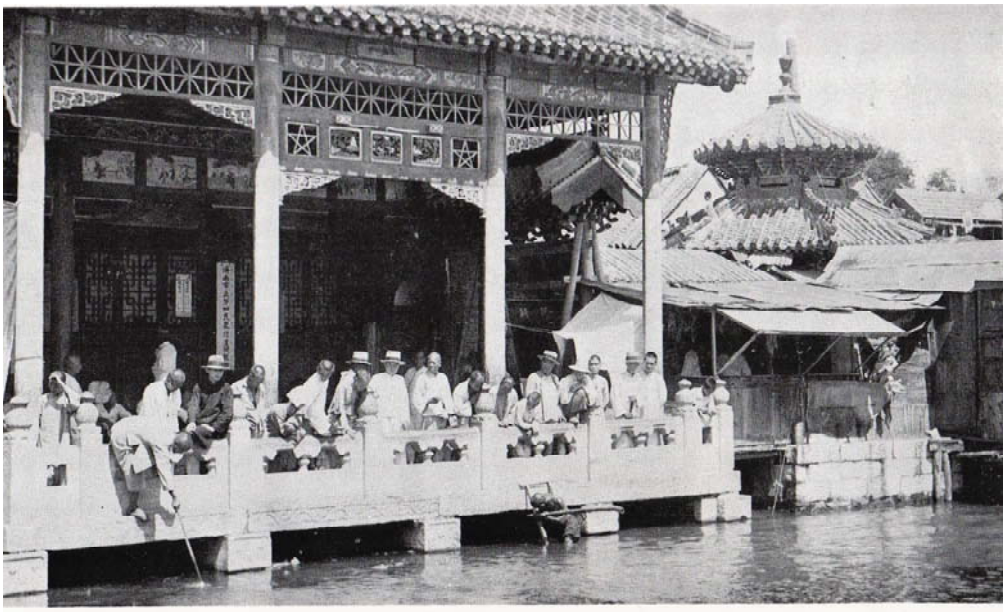


Fig. 7. The Temple of Patriarch Lü by the Leaping Spring.

写真16 1930年代の趵突泉。

を漱玉亭、後に改め望鶴亭、あるいは蓬莱茶社という望鶴亭茶社がある。覗いてみれば、どのテーブルも客でふさがっている。やれやれ。休む場所もないのかネ。茶社の北側を回って東にいたると、ゆったりとした肘掛椅子が並べられ、ガラス窓を通して陽の光が差し込んだ部屋がある。かなり広い。人はいない、いや、紺の上衣を着込んだ老人が、ひとり新聞を読んでいる。入る。むこうの部屋と通路でつながっているではないか。あちらは一般席、こちらは特別席らしい。ゆでタマゴ、アメなどを売る売店がある。座るとフタつき茶碗にいれたジャスミン茶を持ってきてくれた。５毛である。茶の葉そのものがよくないから趵突の水も効果がない。窓越しに、青年と老人が口ゲンカを始めたのが見える。こちらでは、テニス・ボール大のゆでタマゴを取りだし、客と何やら話しこんでいた女服務員が、突然、客と口論を開始する。ゲンキだなぁ。

> 老残は、茶を飲みおわると趵突泉の後門をでた。東に向かって幾つか曲がって金泉書院を探し当てた。二の門をはいると、投轄井である。陳遵が客を留めたところだと伝えられる。さらに西に向けて進み、門を一つ過ぎると蝴蝶庁で、庁の前も後ろもみな泉水で囲まれている。庁の後ろには多くの芭蕉があり、いくつかの枯れ葉はあるとはいえ、まだ青々している。西北角の芭蕉が群がったところに四角な池がある。二丈四方にすぎないが、これが金線泉だ。金線は四大名泉の二である。四大名泉とは、どの四つかといえば、さきほど述べた趵突泉、この金線泉、南門外の黒虎泉、撫台役所の中の珍珠泉のことで、これを四大名泉という。

陳遵は西漢の人。来客を好み自宅で痛飲するために客の車の部品を井戸に投げ入れた（投轄井）と伝えられる。

金泉書院は、清代の学者が書を講じた場所。今の尚志堂だという。厳薇青によると、金線泉の側に「金泉精舎」という横額がかかっていたことに由来する。蝴蝶庁とは、同じく厳薇青によるとチョウが羽をひろげた様子に似た造りの建物のこと*7。位置からいうと、今の観魚室（案内図では魚館）あたりだ。劉鉄雲のいう四大名泉の内訳が、現在のと異なる。解放後、趵突泉を中心に付近の金線泉など

写真17 老金線泉。以前はこちらに金線が出現していた

写真18 そしてこちらの金線泉に移動。金線は、今、消滅

をひとまとめにしたことはすでに述べた。その違いだろう。

金線泉がなぜそうよばれるかといえば、池の中に金線が太陽光線の加減で浮かび出るからだ。金線泉には二つある。「老」がついたもの（写真17）と、そうでないもの（写真18）。老残が訪れたのは、「老金線

泉」の方である。金線は移動するものらしい。以前見えていた泉に「老」を冠して残している。

　この金線泉は、水中に一本の金線があると伝えられている。老残はあちこち長いこと見ていたが、金線はいうにおよばず、鉄線すらもありはしない。うまい具合に学生が通りかかったので、老残は挨拶をして、この金線という二字はどういうことになっているのかと教えを請うた。その学生は、老残をひっぱって池の西につれていくと、身体をまげて首を傾け水面を見ていった。
「ほら、水面に一本の糸が、まるでクモの糸のように揺れ動いているのが、見えましたか」
　老残も真似をして首を傾けて見た。しばらくみていたが、
「見えた、見えた、これはどういうわけでしょう」
というと、ちょっと考えて、
「おそらくは、底にふたつの泉があって、力が釣り合っている。それで間にこういう線を引き起こすのでしょう」といった。
「この泉は何百年も書物に見えていますが、まさか二つの泉の力がそれほど長い間かわらないというわけでもないでしょう」とその学生。
　老残がいう。
「ほら。この線は、いつも左右に動いています。これこそ両方の泉の力が平均していない道理です」
　学生もうなずき納得する。話しおわってお互いにわかれた。

　見えるはずのものが見えないというのはイライラするものだ。金線泉もその部類である。私もサンザンのぞきこんだ。石の欄干が高いうえに水面は低い。とても透かしてみえるようなものではない。あとでわかったことだが、なんのことはない、この金線は消滅していたのだ。

　「老残遊記」の中でいうように「両方の泉の力が平均していない道理（両辺泉力不勻的道理）」のため、たえず移動しているらしい。池の中だけでなく、池そのものを外れることが「老金線泉」「金線泉」という名称に表われている。前出

『済南風情』には、1960年代に別の小さな池に移動し、数年後また見えなくなったことが書いてある。いくら覗いても見えないはずだ。

余談ながら、「これこそ両方の泉の力が平均していない道理です」という箇所を、「これこそ両方の泉の力が同じ証拠ですよ」と訳す本がある。原文の否定型を、わざわざ肯定型に訳したのは、その方が理解しやすいと考えたのだろう。しかし、泉の両方の力が釣り合っていれば、金線は揺れ動くはずはない。ところが実際には動いている。そこを問題にしているのだ。ここはどうしても否定型でなくてはならぬ。さらにいえば、この部分は、老残、すなわち劉鉄雲の思考方法に関連する。均衡しているようで力に差があり、差がありそうで均衡している。こういう描写から思い当たるものがないか。そう、第９回でくりひろげられる上帝と阿修羅の戦いである。阿修羅は上帝と戦い、阿修羅は敗れる。しかし、滅ぼされはしない。何年かたつと、また出てきて戦う。これは両者が平等の国であるからだ、という論理だ。思考の根は、ひとつである。

趵突泉をあとにして、川沿いに東にむかう。

> 老残は金泉書院を出ると、西城に沿って南に行く。城壁の角を過ぎるとやはり市街で、まっすぐ東に向かっている。この南門の城外は、それは大きな堀である。川の泉水は澄み、底がはっきりと見える。川の水草は一丈あまりの長さで、水に流されユラユラと、まことに美しい。歩きながら眺めていたが、川岸の南側に、いくつもの長方形の池があり、大勢の女性が池の辺の石の上で衣を叩いて洗濯している。

老残の歩いた道順が、おかしい。趵突泉は、城外西南方向にある。趵突泉から堀に行くには、北に向かわなければならない。

城壁は、すでに取り払われている。その一部が、黒虎泉と向かいあわせで保存され、解放閣と名付けられる。趵突泉ちかくの川は、よどんでいる。「老残遊記」の記述とえらく違うではないかと思ったものだ。しかし、それは住宅建築と護岸工事とで一部が堰き止められていたためであった。旧城壁の南門を過ぎるあたりから、たしかに水草のゆれる清流だ。道端にドラムカンを置き、焼き芋を売

写真19 堀で洗濯をする人々

Fig. 8. Women pounding clothes by the moat in Tsinan.

写真20 1930年代の洗濯風景

っている。

岸辺には、長方形の池もある。ただし、流れぬ池での洗濯はどうか。ここは、川での洗濯でなければならないところだろう。まるでヤラセのように洗濯をしているのですネ（写真19）。日常で当たり前の情景であることがわかる。中程の水面が波だっているようになっているが見えるだろう。これは、水草が揺れ動いているのだ。シャディックの写真20と併置する。大昔から変わらぬ生活様式というところか。各家庭に電気洗濯機が普及するまで、この風景は続くだろう。

黒虎泉

老残のあとを忠実に追っている形になっている。しかし、道順からいえば、自然とそうなるのだ。

> さらに行くと、大きな池がある。池の南はいくつかのワラぶき家だ。行ってみると茶館であった。入って北側の窓のそばに座ると、給仕が急須に茶をいれてきた。その急須は、宜興物のようだが、しかし、ここの模倣焼きである。老残は、給仕にたずねた。
> 「ここらあたりに黒虎泉というのがあるということだが、どこか知らんか」
> その給仕は笑って、
> 「旦那、その窓から外をご覧なさい。ついそこが黒虎泉で」
> というものだから、老残がはたして外を眺めると、なるほど、自分の足元に石で彫った虎の頭がある。およそ二尺あまりの長さで、幅は一尺五六寸ある。虎の口から噴出する泉は、力が強く、池のこちらから直接向こうまで注いでいるが、それから両方に転じ、堀に流れ込んでいる。しばらく座って、夕日が次第に沈む様子を眺めていたが、ようやく茶代を払って、ゆっくりと南門から入り、宿にもどった。

黒虎泉のまわりは石畳だ。南は断崖になっていて、その上に平屋の建物がある。もとは明代に建てられた黒虎廟だという。今は茶室に使われているということだが、私が見たときにはしまっていた。どっちみち老残が座った茶館など残ってい

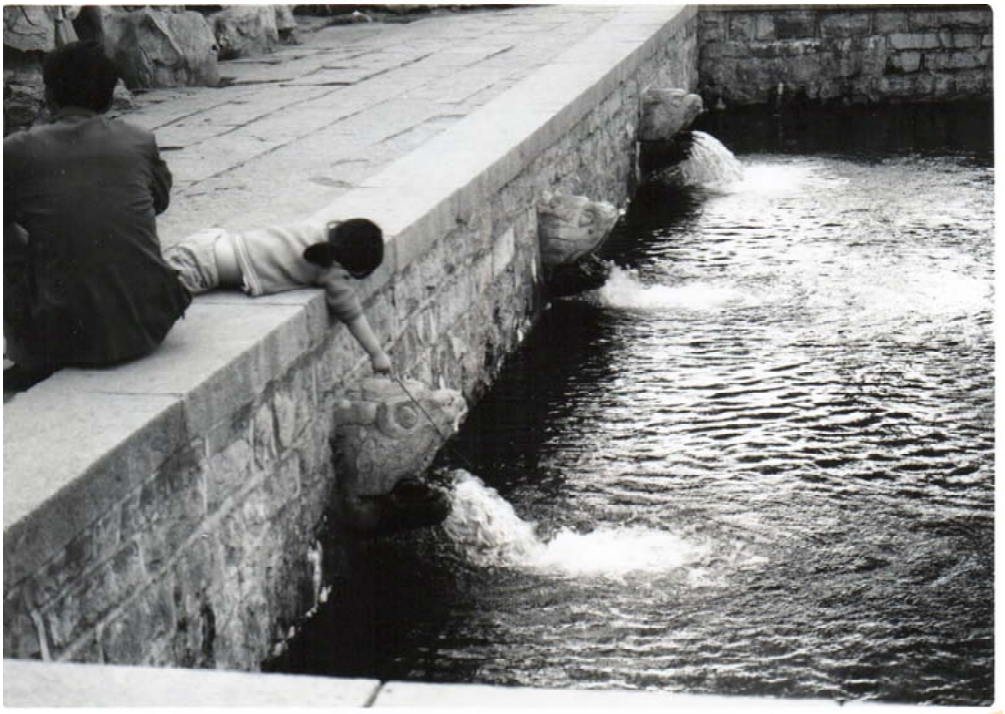


写真21 噴き出す黒虎泉

るわけがない。おまけに、泉を口から噴き出す石の虎頭の数が増えている。三つもあるのだ（写真21）。泉の力は、ここでも往時の勢いは、ない。『繍像小説』に掲げられた繍像３には、まさに虎の姿をした石像が描かれる。これは、違うだろう。劉鉄雲の原稿を読んだ絵師が、勝手に想像してかいたのではないか。そうなると、今まで挙げた絵も、怪しくなるな。

繍像3 黒虎泉「老残遊記」

バスを待って、済南飯店にもどる。フロに入り疲れをいやす。よく歩いた。

６時、満を持して夕食のため食堂に入ると、意外や、広い食堂がすでに８割がた埋まっている。中国人が宴会をしているのだった。エビ、魚、ニワトリの丸焼きを、盛大に口に運んでいる。ビールと白酒をあおり、顔を紅潮させて乾杯、カンパイだ。個人客は、その勢いに呑まれたごとく肩をすぼませ、ただジッと、料理が出てくるまで30分待たされる。

昼食を逃したという意識が、料理の品数を増やす。ひとりで食べることのできる量など知れてはいるのだが。白菜の酢漬け、魚の切り身アンかけ、ブタ肉ミンチのメリケン粉はさみフライパン焼き（鍋貼肉）、包子２コ、スープ、ビールで8.10元。エビさえ食べなければ、安い。

黄　河

済南での探訪で大きいものは、あと黄河が残っている。

> 済南府の西門をでて、北に十八里行くと町がある。名を雒口と言う。黄河が大清河と合流していないころ、城内の七十二の泉水はすべてこの地を通って河に注いでおり、もともとは極めて繁盛していた場所だった。黄河と合流してから、貨物船の往来は依然としてありはするが、一、二割にすぎず、程遠いものになってしまった。（第４回）

黄河が大清河と合流するのは、1855年のことだ。この部分は、「老残遊記」の年代を解明するための重要な材料のひとつである。これを基礎に、他の要素を加味して、「老残遊記」の年代は、1891年というのが私の結論だ*8。

私から配偶者にあてた手紙の中から一通（1984.11.8付）を掲げる。＜＞は、今回、私がつけた注。この手紙を示すことによって、黄河の様子についての説明にかえたい。

> 済南二日目は、マントウで始まりました。別に街で食べたというのでなく、食堂ですが。中華定食で、マントウ１コ、スポンジケーキ、ツケモノ（キャ

ベツ、搾菜の醤油漬け。塩辛くおまけに油がまぶしてある)、目玉焼き、今日はどういうわけか粥が２碗＜前日は１碗だった。服務員によって変わるのは、よく経験する＞、ホットミルクで２元。粥にツケモノをまぜこんでたべるのが中華風です＜中国粥には塩が加えられていない。まぜこめばちょうどいい加減になる＞。

バス停まで10分歩いて、黄河見物をしてきました。あいかわらず＜バスは＞満員で、押し合うのはどこも同じです。道路そのものは広いのです。建物も新しいビルなどあるのですが、それを上回るレンガ建ての平屋がゴチャゴチャと印象をぼやけさせます。やはりホコリッぽいのでしょう。人々の着ている服装にしても、中国どこでも見かける藍の上下ですから、あまり天津とかわらない。いや、もっと田舎じみておりますが。

北に向かって30分以上もかかって、洛口という終点で下車。近くには工場などあり、路端には物売りのオバサンたちが集まっています。歩いて５分。堤防、それもかなり高い立派なやつが見えてきました。それにつれて、どんどんこっちにやってくる自転車の群れとか、トラックなども出てきて、渡し場のあることを想像させる。立派な堤防のこちら側では、あたり一帯、レンガ造りの民家を取り壊している最中です。昨日、趵突泉から黒虎泉まで歩いたとき、旧城を川が取り囲むようにして流れていましたが、その片方も工事をしており、民家をとりこぼしているらしい。環境整備ということろでしょうか。まあ、その方がよろしいでしょう。

土手をのぼると、見えました。泥水が、かなりの速度で流れている黄河です＜写真22＞。川幅は、それほどありません。やはり渡し場になっており、２隻のフェリー（中型か。トラック、バスなど３，４台は乗りそうです）が船首を上流＜向かって左＞にむけて岸についています。ちょうど到着したばかりらしく、自転車を押した人々がドッと降り、トラック、トラクター、最後にロバ車といった具合。急流ですから、両岸に着いたフェリーは汽笛で合図をし、横スベリといった感じで岸を離れます。１隻は、少し下流に流されるようにして、一方は、エンジンをふかして黒煙をあげながら流れに逆らい、２隻はすれちがいます。＜すれちがうや、下流の船は猛然とエンジンを加速し、此

写真22 黄河をわたるフェリーボート

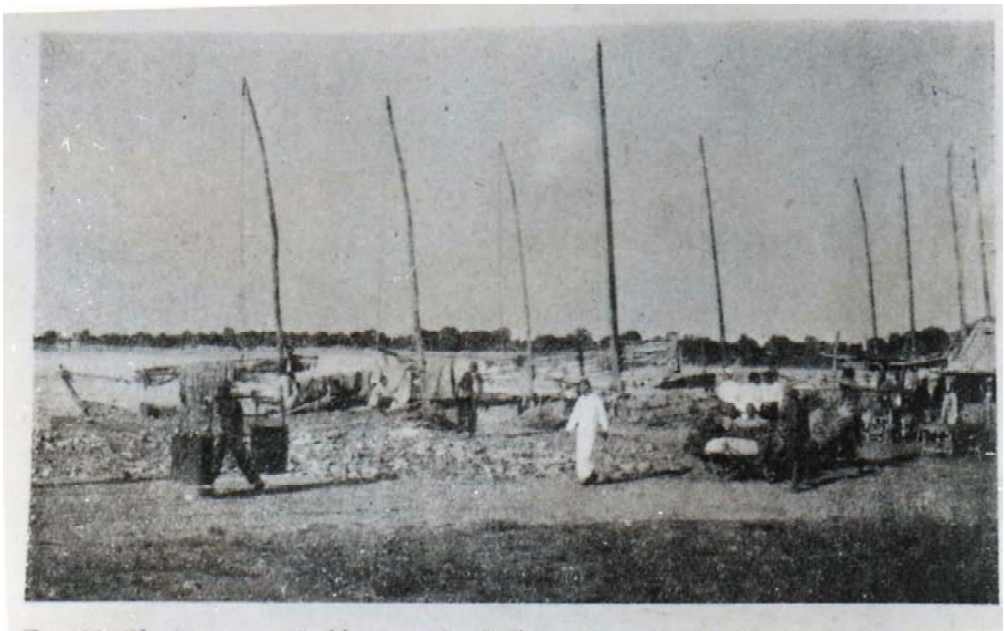


Fig. 11. The harbor at Lok'ou, on the Yellow River north of Tsinan. Two wheelbarrows in the foreground.

写真23 1930年代の洛口

岸にたどり着くという段取り＞その間、５分もあったか。とにかく、あっという間のことで、それくらいの距離しかないということでしょう。それなら橋をかければいいようなものの、今のままで充分間にあっている交通量なのでしょうか。10分おきくらいに往復していますから、便利です。ここにも観光客は来るらしい。昨日、ホテルの103号室＜私が割り当てられた部屋。バス付き、ツイン＞ですれちがった――というのは、先客は夕方５時まで荷物を置いていたので、取りに来たその時、顔を会わせた、香港人の青年も、ここまで黄河を見に来たといっていました。いま、中国人老人の団体、約20名がフェリーに乗るため観光バスを降りたのですが、皆といっていいほどヒマワリの種を食べ＜殻の固いスイカのタネよりも、ヒマワリが主流。私も、口寂しいときによく摘んだものだ＞、カスをプッと吐きだしている。10分ばかりもいれば、あとは何も見るものがありません。よく眠ったはずなのに疲れが残っており、早々にホテルに帰り、休みました。ヒルは食堂で、エビのテンプラ（ここまでは済南駅で書く）、トリ肉とピーマンのいためもの、三鮮スープと米飯にビール缶＜アルミ缶の中国ビールは青島ビールのみが製造されている＞。ひさしぶりのエビがおいしかった。会計のミスで、14元くらいするはずが、７元８毛だった。エビだけでも７元５毛したのにネ＜その時は、得した気になっていた。しかし、よく考えてみると、エビの大きさで値段がずいぶん違うから、小さい奴だったかも知れない。多く取られることはあっても、その逆はほとんどなかったな＞。昼寝して、３時半にチェックアウトすると１日半分を取られ合計36元の宿泊費＜留学生料金で、やや割引＞。しかたなかろう＜サイナンじゃ＞。泰山のふもと、泰安行きのキップを頼んでいて、それがクルクル出発便が変わる。自分でやっても、ないキップは買えない。なすがまま。駅についてから、１時間半あとの５時45分発普通列車があったというわけ。ホテルの服務員が、気を利かせて軟臥客用の待合室＜中国では、一等客用の待合室が、一般とは別にある＞に案内してくれたので、この手紙を書きだしたのです。係員が、早めに列車に乗るよう指示してくれ、悠々と座れました。そのうち、乗客がドッと押し寄せてくるや、みるまに満席。タバコの煙と、タン、ツバで充満＜あのカッァーァ、ペッッ、というの

には、とうとう馴れることができなかった＞。２時間ちょっとで泰安着。外は、真っ暗。タクシーはない（黒い車がいるのでタクシーかと思って聞くと、顔を出した男は解放軍のおじさんでした)。バスはない。しょうがない、歩くか。といっても、どのホテルかわからん。留学生が、たしか、泰山賓館とかいっていた、と歩きだすと、車はどうかと声がかかってくる。見ると三輪車。近代化してエンジン付きが並んでいる。プスンプスンと不調のエンジンをなだめながら＜坂道ではペダルを踏んばって＞、風を切るぐらい飛ばすのです＜思わずオーバーのエリを合わせたョ＞。３元。立派なホテル＜泰山賓館＞です。８時を過ぎていたので、食堂はすでにしまっているはず。あせって聞くと、フロントで、電話をしておくからといわれ、とりあえず食堂へ＜こんなに親切なのは珍しい＞。アメリカ人の青年の団体らしいのが食事を終ったところ。よく見ると日本人の女子学生風の団体もおる。今、たったひとりで、ビール（北氷洋）を飲みながら食事をしているところです。8時40分

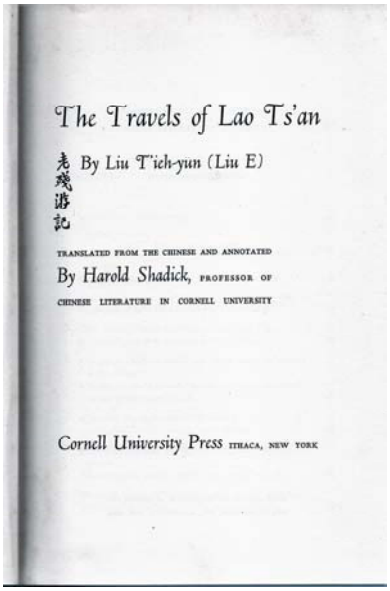
済南から黄河をさかのぼって鄭州に足をのばすのは、15年後に実現した。済南の名泉巡りと黄河見物は、劉鉄雲「老残遊記」の描写に関連するものだ。一方の鄭州は、劉鉄雲自身が黄河治水活動において直接かかわった場所である。

写真、挿絵出典

繍像1-3 『繍像小説』　原本は、澤田瑞穂氏所蔵。現在は早稲田大学風陵文庫所蔵

写真2、5、8、16、20、23　Harold Shadick “The Travels of Lao Ts'an”Cornell University Press 1952　台湾文星書店影印本あり。のちに入手した初版による

その他　樽本撮影


The Travels of Lao Ts'an

老殘游記

By Liu T'ieh-yun (Liu E)

TRANSLATED FROM THE CHINESE AND ANNOTATED

By Harold Shadick, PROFESSOR OF CHINESE LITERATURE IN CORNELL UNIVERSITY

Cornell University Press ITHACA, NEW YORK

2　鄭 州 篇

鄭州決壊

光緒十三（1887）年八月、黄河は鄭州において決壊し、賈魯河に入り淮河に注いだ。黄河主流は、それまでの方向を大きく変え、ふたたび東流から南流に転じた。

関係者の必死の努力にもかかわらず、決壊箇所は、なかなかふさがらない。治水責任者である河東河道総督は、成孚から李鶴年（1887）をへて呉大澂（1888）へとめまぐるしく交替した。責任を取らされたのである。

光緒十四年七月十日、呉大澂は、河東河道総督に任命された*9。

同年八月五日、呉大澂は、開封に到着する。開封の西が鄭州だ。決壊箇所を視察したうえで、情況判断、工事の方法、進捗情況の報告とたびたび上奏文を提出することになる。それほど工事は長引いた

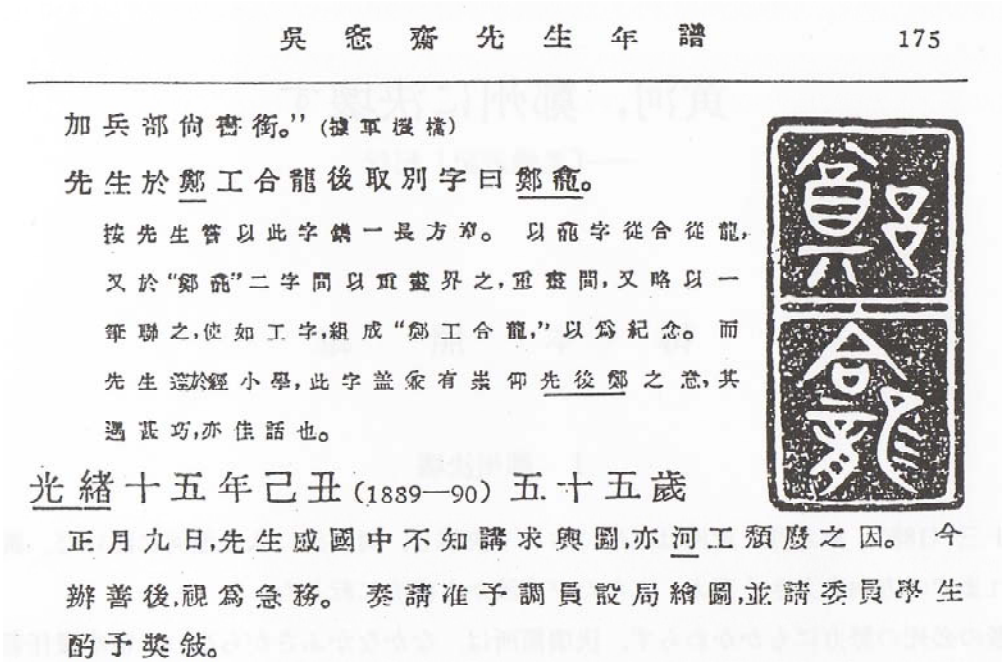
なかなか工事がはかどらず、十一月には、呉大澂みずからが決壊の現場に駐在することにした。心労で肝臓病と胃病を患ってもいる*10。

呉大澂のもとに駆けつけたのが、劉鉄雲だった。劉鉄雲は、決壊箇所の修復に技術的な提案を行なう。土砂運搬車、電燈、汽船さらにはセメントなどの西洋機器資材を利用し、昼夜を分かたぬ工事の結果、十二月になって修復見通しが、ようやくにして、たつ。

十二月十六日、玉を沈めて河の神に祭り、十七、十八日で決壊箇所（金門または龍口）を繋いだ（合龍という）。翌十九日、水が漏れないのを確認し（閉気）、これが工事完成日となった。決壊から修復まで十六ヵ月かかった計算になる。

こんなことがあった。呉大澂は、官衣をぬぎ労働者の服装で人夫にまじって稽料（堤防工事用資材。高粱の茎など）を取りによく材料置き場へ行った。そうして賃金を受け取り、ピンハネしていないか調査するのだ。小役人は、呉大澂がためしているのを知らず、はたしてピンハネをする。呉大澂が皆について争うと、小役

人は怒り、怒鳴ってつかまえ棒打ちをくらわそうとする。おつきの者が、この方をどなたと心得る、親方様であるぞ（水戸黄門だね）、と叱る。小役人は驚き恐れ、



吳 愙 齋 先 生 年 譜 175

加兵部尚書銜。"（援軍援糧）

先生於鄭工合龍後取別字曰鄭龕。

按先生嘗以此字鐫一長方印。以龍字從合從龍，又於"鄭龍"二字間以重圍界之，重圍間，又略以一筆聯之，使如工字，組成"鄭工合龍，"以爲紀念。而先生遊於經小學，此字蓋衆有崇仰先後鄭之意，其遇甚巧，亦佳話也。

光緒十五年己丑（1889—90）五十五歲

正月九日，先生咸國中不知講求興圖，亦河工積廢之因。今辦善後，視爲急務。奏請准予調員設局繪圖，並請委員學生酌予奬敍。

図1 「鄭龕」印。印形について、楕円だの円形だのといわれている。だが、上に示すように長方形が正しい

呉大澂は立ち上がって小役人をつかまえさせて棒打ち首かせの刑に処した*11。

そこまでやるか？と思わないでもない。この部分を書いた銭基博は、呉大澂が心配りのある人物で、マメであったことを言いたかったのだろう。

人夫にまじって働く、というのは、劉鉄雲について今までよく引用されてきた文章がある。劉鉄雲の息子劉大紳が、書き残す。劉鉄雲が、労働者の服装で人夫の間を歩き回り、みずから指揮してむちうち励ました、という例のものだ*12。

それぞれの目的は異なっているが、同じような行動をとっているのがおもしろい。

全身全霊を打ち込んだ黄河治水工事だった。呉大澂は、その労苦を思い成功を記念して別の字「鄭龕」を使用することにする。龕は、合と龍の組み合わせで、その意味は、いうまでもなく鄭州で合龍した、ということだ。長方形の印（図1）

を作ったのも有名だろう*13。

黄河治水における堤防については、ふたつの側面がある。ひとつは、堤防決壊の修復工事であり、もうひとつは堤防の決壊を防止する保守工事である。

劉鉄雲にとって、鄭州では黄河決壊の修復工事に参加する経験を得たことが貴重だった。もうひとつの保守工事は、のちに利津と蒲台の斜堤建設で体験することになる。

百年をこえて、今、鄭州に当時の黄河決壊箇所を訪問するのが今回の旅行の目的である。劉鉄雲と「老残遊記」をめぐる中国紀行のひとつだ*14。

決壊箇所を訪れる目的

実際に鄭州決壊箇所を訪問する目的は、みっつある。

１．決壊箇所はどのような地形をしているのか

決壊箇所修復に十六ヵ月もの時間がかかった理由を理解するために、現地の地形を見ておきたい。

２．黄河と防波堤はどのようになっているのか

約百年前とは地形が変化している可能性がある。河幅の増減、洲が耕地になる、人が住むなどなど。また、治水について技術的な面での進歩もあるだろう。こまかな部分は変わっているかもしれない。だが、黄河の流れとその防波堤には、基本的に変わらぬものがあるのではないか。これが、予想だ。堤の構築情況を確認しておきたい。地形の変化があれば、それも見たい。

３．記念物があるのではないか

鄭州工事は、難工事だけあって、その成功にはひとしおの感激があったであろう。呉大澂は、工事成功を記念して特に「鄭龕」と名のり、印までも作成している。その場所に関係のあるところで、現地に記念の祠、あるいは寺院のような建造物を残しているのではないか。記念碑でもいい。これまた約百年前の建物、記念碑が残っているかどうかは疑問ではある。「文化大革命」を経ているから保存されている可能性はきわめて少ない。だが、一応、捜してみたい。

手ぶらで現地に行って、収穫があると思う方がおかしい。それ相応の下準備が必要だ。この場合、当時の地図を入手することからはじめなければならない。

鄭州決壊の場所

呉大澂の光緒十四年九月二十九日の上奏文に「北岸花園口、東路王屋荘、西路趙荘、平皐灘等處」*15などと書かれている。黄河決壊場所は、それらとは離れていないだろうと予想をたてる。

ただし、問題は、こまかな地名を記載した古地図を見ることができるかどうかだ。

さいわい、『山東直隷河南三省黄河全図』（上海・鴻文書局　光緒十六年孟冬＜旧暦十月＞　石印）大冊（縦横34×30cm）５冊を入手することができた。これこそ鄭州工事完成後、劉鉄雲も参加して、黄河流域を調査した地図集なのである。

この地図に、「鄭工合龍処」と明示した箇所がある。さらに説明文が添えられている。

> 光緒十三年八月、鄭州で増水し、十堡にて溢れて決壊した。幅547丈。地名は石橋という。尚書李鴻藻、河督呉大澂、豫撫倪文蔚らが処理し、十四年十二月合龍する。公費1200万両。

花園口（図2a）の東、河辺に沿って十堡、十一堡に「金門口」（図2b）がある。これが決壊箇所を意味する。そこから少し南に石橋という村の名がある。

この地図だけを頼りに現地へ行って調査するのは、むつかしい。なぜなら、黄河沿岸の記載はあるにしても、この決壊箇所から賈魯河へ繋がっていたはずなのに、肝心の賈魯河が記載されていない。位置関係がアイマイなのだ。

さらに事情を困難にしているのが、現在の鄭州近郊の詳しい地図が、日本では入手できないことだ。

それでも昔に比較すると、情況が変わったと思うのは、日本で『鄭州生活地図冊』（中国地図出版社1993？）を購入できたからだ。だが、これは鄭州市内の地図で、近郊の黄河となると、簡略した地図にわずかに花園口くらいしか記載がない。

というわけで、鄭州において詳しい近郊地図を探しながらの現地調査となった。

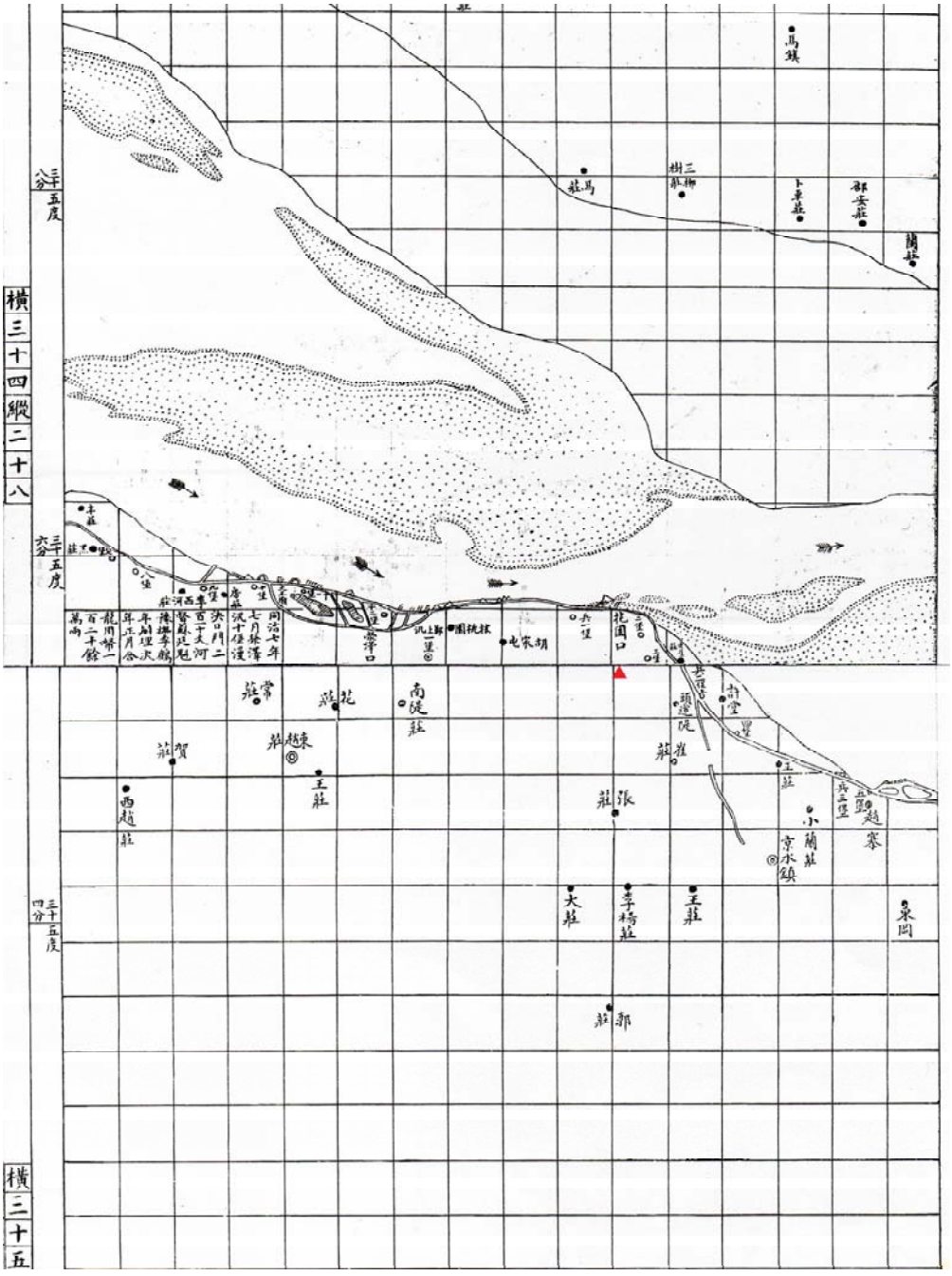


図２a：『山東直隷河南三省黄河全図』花園口

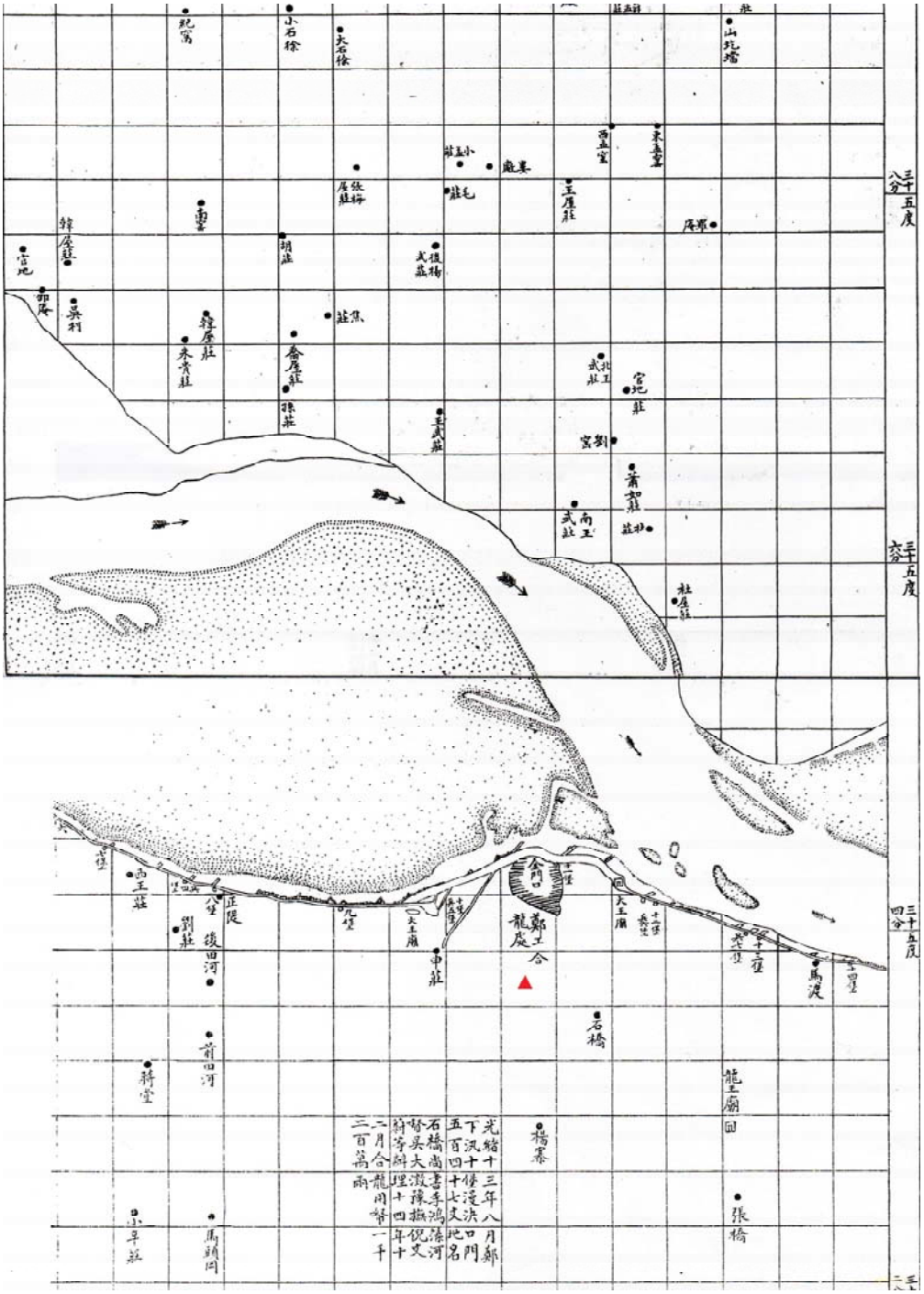


図２b：『山東直隷河南三省黄河全図』鄭工合龍処

現地調査

ここであらためて考える。光緒十四（1888）年の鄭州決壊に興味を持っているのは私くらいのものだ。複数の文献を見ても、私の興味と一致する記述は、ない。誰もやらないからこそ調べてみたい。だが、中国で入手した『中国汽車司機地図冊』（北京・中国地図出版社1998.3／1999.2　第４次印刷）を見ても、鄭州市から黄河付近に記入されている地名は、花園口と馬渡の２か所があるのみ。その他、複数の地図を購入したが大同小異でしかない。悪い予感がするのは、今の地図に見える黄河の形態と古地図に描かれた同一箇所の形が異なっているからだ。

過ぎ去った111年の年月は、黄河の流れを変化させても不思議ではない。特に泥砂が蓄積しやすい性質が、本来、黄河にはある。古地図にも決壊箇所の前面に砂州がひろがっており、河の流れはずっと北側に移動している。この形は、今の地図に見える流れと一致する。ということは、鄭州決壊箇所は、現在の水流からずっと離れてすでに陸地の一部分になってしまっていることを意味する。

鄭州での決壊で、今にいたるまで話題にされるのは、光緒十四（1888）年ではなく、1938年の国民党軍による花園口での黄河堤防破壊だ。日本軍の侵攻を阻止することを目的とした。黄河は、南に氾濫して賈魯河に流入し、潁河、渦河より淮河を経て長江に注ぎ海に入る。鄭州決壊の場所は、1938年の花園口堤防破壊箇所にちょうど重なることが地図を見ただけで理解できる。

花園口は、今も昔もその場所にある。鄭州市内から車でゆっくり走って約40分くらいの距離だ。20キロメートルにも満たないか。

「黄河花園口旅遊区」と名付けられた大門がある。入場券を買って堤防に出ると、そこは水門が建設されている場所だ。黄濁色の水面が見えると、すぐ先に広がるのは雑草の生えた砂州である。堤防のまわりは水が淀んでいる。はるか遠くは対岸らしいが、遠すぎて肉眼では確認できない。９月としては普通の水量だそうで、堤防の底付近をわずかに濡らしているくらいに見える。場所にもよるが、中央部の水流の速さは相当なものだ。黄濁した水面が太陽光線に反射して複雑な形状を示していてそれがわかる。昨年も断流現象は頻発したという。だが、今は、表面上は穏やかに流れている。右手に黄河大橋が見える。真っ直ぐに対岸に延びたまま、その先は霞むほどに距離がある。

1984年、済南近郊で黄河を訪問した時のことを思い出す。比較すれば、その河幅の広さで花園口は済南を圧倒する。向こう岸が見えないくらいの広さから、下流の方が河幅が狭くなっていることになる。西の河南で広く、東の山東で狭いならば、同じ水量であれば水はけがよほど順調でなければ河南で氾濫するはずだ。

自分が立っている堤防は、河の流れに突き出す形で構築されている。

今、堤防と書いたが、漢語でいえば、正しくは「壩」と称する。大堤から流れに突き出す枝のように建築される。黄河に建築された特有の構造物で、その形状により、また、突き出す角度により名称が分かれている。丁壩、挑水壩、人字壩、順水壩などがそれで、形状は異なってはいるがその作用はほぼ同じだ。流れを狭くして黄河中央に蓄積しがちな泥砂を押し流そうとする。流れが、直接、大堤に当たれば堤防崩壊の危険性が高くなる。それを予防するための役割もはたす。現在の壩は、以前と違い側面全体が石で覆われている。そうでなければ壩の効果も著しく減少するのは当然だ。

壩を石で覆うという工法は、現在であれば普通の発想かもしれない。だが、以前の壩の白黒写真（図3）を見れば、高粱などの植物繊維をまぜた土を打ち固めている情景を写し出している。壩を石で補強するという考えは、それほど普及していなかったことがわかる。

図3 旧時の壩。増水した黄河から堤防を守るため壩を構築する。植物をまぜた土を打ち固めている。鄭州・黄河博物館の展示写真より

すぐ連想するのは、劉鉄雲が黄河治水について書いた「治河七説」のなかの「善後説」である。

内容は、黄河の日常の保守についての提案だ。

その提案のひとつは、「頂のぶつかりから救うことだ」。頂とは、縷堤、すなわち黄河の水流にむかってでっぱった形で建設した堤防のその先端箇所を指す。流れの中に突き出す堤防だから、当然、その頂がある。その昔は、ただの土を固めただけだから、水流に洗われて崩壊しやすい。頂部分を砕石で覆い崩壊から防ぐことを提案する。石を切り出して運搬する必要があるのは、考えればわかる。それが、当時は、難しかったのだ。

現在、堤防全体および壩も、石で舗装されている。ここには長い時間の経過が反映されているといっていいだろう。

頭の中では、壩の役割を以上のように理解していた。だが、古地図でみる壩と実際の壩は、印象が異なる。比較の問題だろうが、花園口のように河幅の広い場

図4 花園口附近の壩。手前と上流向うの壩の中間に泥砂が堆積し、そこには、すでに植物が生えている

所では、壩といっても、その長さは十分でないように思える。短すぎると言ってもいいのではなかろうか。いくつか斜めに平行させて壩が流れに突き出す。壩の間には、当然のように泥砂が溜まっている（図4）。手前の壩と向うの壩の間に、泥砂が堆積している様子が、肉眼で確認できる。

定期的に浚渫しなければ、壩の役割を果たさなくなるだろう。これだけ河幅が広い場所における壩の効果は、流れを束ねて水流を速くするためではなかろう。護岸を目的したものだと推測する。特に水門が設けられている箇所に設置されている壩、直接にはこの水門を保護するためだと理解できる。水流を水門の先に逃し、流れに影響されないように水を堤内に導く働きをする。だから同じ壩でもその建設される場所によって、黄河の状況によって、その期待される働きは異なる。

壩の形状は、空から見たほうがわかりやすい（図5）。今、写真集『河頌――殷

図5 黄河に突き出す壩の形状と浚渫船。壩と壩の間には、泥砂が堆積しているのがよりはっきり見える。『河頌――殷鶴仙黄河撮影作品集』より

図6 鄭州・花園口附近。壩の根元に水門が設置されている。『河頌――殷鶴仙黄河撮影作品集』より

鶴仙黄河撮影作品集』（鄭州・黄河水利出版社1998.6）から引用する。

写真に見えるのは、渇水期の黄河らしい。壩の底に盛り上がるかたちに砂利を敷きつめ土台を補強し、その周りに泥砂がすでに沈殿して露出している状況が目視できる。その沖は、これまた泥砂の中州ができている。浚渫船が、岸からのパイプで繋がっており、泥砂を吸い出している作業中だとわかる。広がる中州に比較して浚渫船の影が小さいことが、黄河の河幅の広さと泥砂の堆積が大きいことを際立たせている。堤防の内側は、耕作地が広がり、植物の姿が見えない部分は、増水期の遊水池として考えられているのだろう。

もう一枚の空中写真は、花園口の水門を画面に収めている（図6）。手前の三角形に突き出した壩の右側に水門がある。見えるのは、見張り小屋の四角い建物だ。柵では、囲まれていない。昔は、ここを見せるのに入場料は取らなかったらしい。

今は、どこに行くにも、特に観光地は、あれやこれやと料金を科せられる。写真の上方に橋梁が建設中でクレーンが見える。これが、現在は完成している黄河大橋である。大堤の内側にはすでに家屋が建設されていることがわかるだろう。

以上、２枚ともに水量の少ない季節の写真である。沈殿して堆積した泥砂は、肥沃な耕地になる。

堤防の上は、車両が通行できるように道路が作られている。私が訪れた時はアスファルト舗装の工事中であった。東にしばらく行くと、1938年の花園口決壊の東箇所に記念碑「界碑」（図7）がある。御影石のプレートが張られた台石のうえに黄河の水を意匠化して人物の顔と組み合わせた塑像だ。説明文を刻んで同じものが西にもひとつ設置されており、東西で一対になる。花園口での決壊幅をそれによって示す。黄河大橋は、この東西の「界碑」の真ん中に建設されている。言うまでもなく、相応の意味を持たせてあるのだろう。

図7 1938年の花園口決壊を記念する「界碑」。東西に一対が配置される

堤防の上を花園口から東に向かって歩きながら、やはり地形が古地図で見ているのとは違うことを確認する。河幅がやや狭くなっている。つまり、今、私が立っている場所は、黄河の中にせり出している。古地図に見えた砂州が、砂州でなくなっているのだ。今では、広大な耕作地に変化している。これでは、あの鄭州決壊修復箇所を探ることは不可能である。残念だがしかたがない。

結　論

まず、黄河流域の地形の変化があった。これが光緒十四（1888）年の鄭州合龍場所を特定することを困難にさせている最大の理由である。さらに、戦乱があり、花園口での堤防破壊が発生し、「文化大革命」を経て、現在にいたるまで関係の建築物あるいは記念物が存在していると考える方がおかしいのだろう。

同じ花園口附近での黄河決壊といっても、光緒十四（1888）年と1938年を比較すれば、意味が異なる。どちらを重視するかは、為政者の意識による。1938年を記念して碑を建立するのは、そのためだ。

決壊箇所はどのような地形をしているのかを探るのが、今回の鄭州黄河訪問の目的のひとつだった。その河幅の広さを確認したことにより、増水期の水位の上昇が圧倒的であったことが容易に想像できる。さらに堤防の側面が土のままであったのではないかとの推測もある。これに加えて、泥砂の堆積のため河底があがり、一部は古地図に見るような中州となっていた。黄河氾濫の要素がここらあたりに集中していたと思われる。決壊箇所の大きさを考えれば、修復に時間がかかるはずだ。

黄河と防波堤の関係は、地形が変化しているから111年前とは、当然、形が異なる。花園口の水門と、その防御を目的とした壩を確認したのは、予期せぬ収穫のひとつだということができる。

鄭州篇は、大阪経済大学1998、1999年度特別研究費による研究成果である。

【注】

1）毛承霖纂修『総修歴城県志』1924年県志局排印本。京都大学人文科学研究所所蔵

2）劉大紳「関於老残遊記」『文苑』第１輯1939.4.15。いま、魏紹昌編『老残遊記資料』北京中華書局1962.4。采華書林影印による。「注二」66頁。以下『資料』と略す

3）厳薇青「《老残遊記》的作者劉鶚」『済南名士多』 山東人民出版社1982.10。314頁

4）劉蕙孫『鉄雲先生年譜長編』済南斉魯書社1982.8。28頁

5）注２に同じ。「注三」『資料』66頁

6）胡適「老残遊記序」（1925.11.7）『老残遊記』上海亜東図書館1925.12・1934.10十版。『資料』

209頁

７）厳薇青注『老残遊記』済南斉魯書社1981.2。33頁

８）樽本照雄「『老残遊記』の年代を考える」『野草』第37号1986.3.20。『清末小説論集』収録

９）朱寿朋編、張静廬等校点『光緒朝東華録』総2474頁

10）顧廷龍『呉憙斎先生年譜』燕京学報専号　哈仏燕京社1935／東方文化書局影印。172頁

11）顧廷龍『呉憙斎先生年譜』173頁

12）劉大紳「関於老残遊記」86頁

13）顧廷龍『呉憙斎先生年譜』175頁。また、郭長海「劉鉄雲事跡拾零」『明清小説研究』1994年第４期（総第34期）1994.12.1。94-95頁

14）樽本照雄「「老残遊記」紀行――済南篇」『野草』第38号1986.9.10

15）朱寿朋編、張静廬等校点『光緒朝東華録』総2508頁

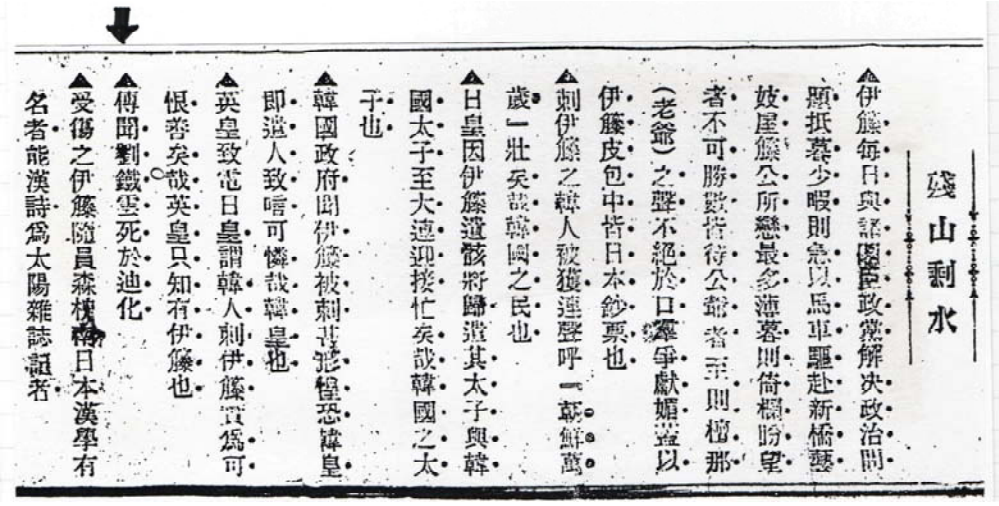
劉鉄雲死去の新聞報道

『清末小説から』第15号（1989.10.1）に掲載。無署名。国立国会図書館所蔵の『民吁日報』影印本を閲覧していて見つけた。当時、『民吁日報』に掲載されている小説を追跡していた。『清末民初小説目録』編集に役立つと考えたからだ。作業の途中でほかにも興味深い記事を見つけた。当時の上海に居住する３世帯の収入と支出の具体的金額を記録している。店員、教員、役人の家計を単純に平均して月約65元の収入だと判明した。なんでもなさそうな新聞記事だ。しかし、細かな数字が書かれていて信憑性が高い。これはひとつのモデルあるいは基準にすることができる。そこから当時の作家の原稿料を比較することが可能になるという意味だ。原稿料は、作家の経済を支える重要な手段になった。知識人たちは、官吏登用試験を経て役人になるのがそれまで決まっていたコースだ。だが、清末民初においては、それ以外の選択肢ができた。役人にならずとも生活の糧を得ることのできる社会状況に変化している。次の原稿を書いた。「清末民初作家の原稿料」『清末小説論集』1992所収

下に掲げたのは、劉鉄雲の死去を報じる新聞記事である。「劉鉄雲がウルムチで死去したと伝え聞く［伝聞劉鉄雲死於迪化］」というただ一行の報道にすぎない。掲載したのは、『民吁日報』己酉九月十七日（1909.10.30）だ。

『民吁日報』は、于右任が『民呼日報』の停刊を命ぜられたあと、談善吾をまねいて上海で創刊した新聞だ。清朝政府と日本を攻撃したため、わずか50日前後で発行停止になる。

1909年10月26日、伊藤博文がハルピン駅で安重根に射殺された。劉鉄雲の記事



殘山剩水

▲伊籐每日與諸閣臣政黨解決政治問題抵暮少暇則急以馬車驅赴新橋藝妓屋籐公所戀最多薄暮則倚欄盼望者不可勝數皆待公爺者至則檀那（老爺）之聲不絕於口羣爭獻媚蓋以伊籐皮包中皆日本鈔票也

▲刺伊籐之韓人被獲連聲呼一朝鮮萬歲一壯矣哉韓國之民也

▲日皇因伊籐遺骸將歸遣其太子與韓國太子至大連迎接忙矣哉韓國之太子也

▲韓國政府聞伊籐被刺甚形惶恐韓皇即遣人致唁可憐哉韓皇也

▲英皇致電日皇謂韓人刺伊籐實爲可恨善矣哉英皇只知有伊籐也

▲傳聞劉鐵雲死於迪化

▲受傷之伊籐隨員森槐南日本漢學有名者能漢詩爲太陽雜誌記者

『民吁日報』1909.10.30

をはさむかたちで「伊藤」についての文章がある。ほかはこの伊藤博文暗殺に関連する事柄だ。

劉鉄雲がウルムチで死亡したのは、同年七月初八日（8.23）というから、ほぼ２ヵ月後のニュースということになる。新聞で報道されるくらい当時の中国においては著名な人物であったと考えていいだろう。

ただし、伊藤博文関係の記事にまざって、なぜ一行だけ劉鉄雲の報道かよくわからない。同時代の資料としてめずらしいので紹介しておく。

清末民初における定期刊行物の時空

——附：清末民初の定期刊行物一覧

『清末小説』第13号（1990.12.1）に掲載。清末民初に発行された雑誌を発行順、地域別に整理した。雑誌刊行の中心地が基本として上海にあったこと、清末時期には日本が、民初時期には北京が重要な役割をはたしたことを述べる。地理的関係を雑誌発行の三角形（トライアングル）と名付ける。附録として定期刊行物一覧を収録した。

定期刊行物について全体の流れを時間と空間にわたり数量的に把握するという発想と試みは、それ以前にはなかった。雑誌トライアングル、ウルル山と簡単に表現している。それができたのは、十分に資料を把握していたからだ。本稿に定期刊行物一覧を収録したのはそのことを示すためだ。清末における日本の重要さは、もっと見なおされてよい。陳江「辛亥革命前我国中文期刊的空間分布及其解釈」『編輯学刊』1994年第４期（総第36期1994.8.25）がある。にているだけで同一ではない。

本稿で示した量的に把握するという方法は、最近の刊行物では林分份、黄育聡主編『中国現代文学編年史』第2巻1906-1915（北京・文化藝術出版社2015）の一部に見える。1907年を総括して、阿英『晩清戯曲小説目』(刊年不記［1954、増補版1957］）から創作小説は60（ママ）［77］種、翻訳小説130（ママ）［167］種以上と記す（37頁。数字が異なるのは増補版ではなく初版を使用したためか)。注目したのはよい。だが、阿英目録ではあまりにも古すぎる。現在では、阿英目録の数倍を収録する樽本『清末民初小説目録』(1988-2015)、劉永文『晩清小説目録』(2008)、陳大康『中国近代小説編年史』(2014）などいくらでも参照目録は刊行されている。それらを資料にしてあらためて独自に集計しなおすという意識はないらしい。残念なことだった。参考までに私が把握している1907年に刊行された作品数を提示しておく。創作小説420種、翻訳小説279種である。あの有名な「清末小説は翻訳のほうが創作よりも多い」という阿英説は否定される。

1　はじめに

清末民初に発行された定期刊行物の、時間的、空間的変遷をさぐるのが、本稿の目的である。

今回の調査に使用した資料、およびそれにもとづいて作成した「清末民初の定期刊行物一覧」について説明する。

典拠資料

主として、以下のふたつから材料を得ている。

資料１――『辛亥革命時期期刊介紹』全５冊　中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編　北京・人民出版社1982.7-1987.11

「説明」によると、辛亥革命前後、1900年から1918年までに出版された定期刊行物は、700種から800種あるという。そのなかより比較的重要で代表的な刊行物200種あまりを選択し、詳細に紹介したものが該書である。 第５冊が出版され、完結した。数えると、本シリーズでは、重複して紹介してあるのを除き、248種の刊行物が解説されている。

資料２――『中国近代期刊篇目彙録』全６冊　上海図書館編　上海人民出版社1980.7-1984.8

1857-1918年の約60年間に発行された雑誌の細目を集成する。 採録対象は、哲学、社会科学方面の重要雑誌である。「編例」によると、495種約1100余期の定期刊行物を掲げているという。

以上の基礎資料に、つぎのものをおぎなう。

阮恒輝「我国近代文学期刊編目」『文献』第２輯1979.12

胡継武「晩清文藝報刊拾零」『文献』第３輯1980.10

胡継武「晩清時期的文藝報刊」『文献』第15輯1983.3

資料１、２と重複するところはあるが、文芸関係の重要新聞を追加することができる。

これらの資料を総合すると、1857-1920年の64年間に出版された定期刊行物(新

聞、雑誌）は、621種（異名同誌は、１種と数える）となった。 遺漏があるのは免れない。しかし、おおよその傾向を知るための材料とすることはできるだろう。

この621種を基礎資料として作成したのが、附録の一覧表である。

「清末民初の定期刊行物一覧」

凡例風に説明する。

１．定期刊行物の創刊年順に配列してある。創刊年が同一のものは、発行地別にまとめた。

２．「発行地」は、創刊号が発行された都市（地域）を記入する。まぎらわしい例もある。たとえば、『訳林』である。発行地が杭州、印刷は上海の商務印書館が請け負った。このような場合は、杭州に発行地を指定する。

３．「90-20」の数字は、1890-1920年を示す。

４．★印は、発行されていることを意味する。ただし、年刊、季刊、隔月刊、月刊、隔週刊、週刊、日刊また不定期刊にかかわらず、該当年に発行されたものは、すべて★印ひとつで表示した。

５．「備考」のⅠ－Ⅴは、上述『辛亥革命時期期刊介紹』の巻数を、数字はページ数をそれぞれ示している。「文献」とは、雑誌『文献』である。数字は号数を指す。

「清末民初の定期刊行物一覧」から、なにが見えてくるか。

まず、時間の変遷から述べよう。

2　定期刊行物の時間――ウルル山を確認

1890年から1920年までに創刊された定期刊行物をグラフで示す（図1）。

1890年代、1900年代、1910年代の３期に分けてみると、創刊の最初の高まりは、1897年に現われている。第２の頂が1907年、第３は1913年と、各年代にそれぞれ山がある。定期刊行物創刊ブームといってよい。

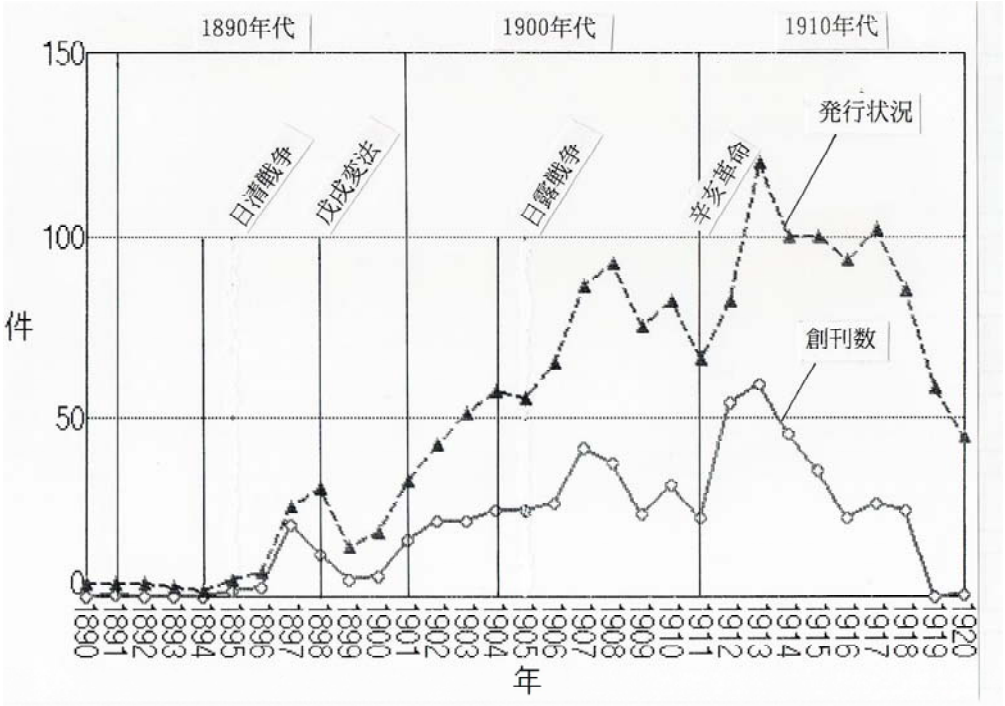


図1 定期刊行物の創刊数と発行状況

それぞれの社会的背景を考えると、第１次創刊ブームは、日清戦争後の戊戌維新時期にあたる。第２次創刊ブームは、日露戦争後であるし、第３次創刊ブームは、辛亥革命後に出現したことになる。

同じ図の上方に示したのが、発行状況をあらわすグラフである。

発行状況とは、該当年次に発行されている刊行物の合計数をいう。「清末民初の定期刊行物一覧」の★印を、１年毎に縦に集計したものだ。創刊号のみを数えるのに比較して、刊行物の発行状況を、より実情に近い形であらわしていると言うことができる。

発行状況のほうも、ほぼ、創刊数の動向と重なっていることがわかるだろう。

以前、私は、定期刊行物の発行状況を、その形状からの印象でオーストラリアの「ウルル山（エアーズロックともいう）」と表現したことがある。 当時、205種類の刊行物を集計して、その結論を得た。今回、約３倍の材料を手にして、再度、もりあがる刊行物を確認する（清末民初の小説、および出版社の動態については、樽本

「清末民初小説のふたこぶラクダ」(『清末小説論集』所収)を見られたい)。

では、定期刊行物のウルル山は、どこに存在しているのだろうか。この問いかけは、奇妙に思われるかもしれない。清末民初の呼称からして中国にきまっている、というのが常識だろう。しかし、私はあえて問いたい。清末民初における刊行物の発信地は、はたして、中国にのみ限定されるものであろうか。

3　定期刊行物の空間――雑誌トライアングル

「清末民初の定期刊行物一覧」を一見すれば、発行地を上海とするものが圧倒的に多い、という事実に気づく。近代印刷業の中心が上海であったことを考えれば、当然のことであろう。

しかし、よく見れば、発行地が中国以外になっている刊行物があることもわかるのだ。

アメリカ、シンガポール、ジャワ、フィリピン、フランス、ペナン、マカオ、さらに日本だ。

発行地は、中国以外の地域を含めて全体で58箇所をかぞえる。そのうち５件以上の刊行物が創刊された都市（地域）を、多い順に書き出してみよう。

都市（地域）別創刊数（1857-1920年。ただし、５件以上に限る）

上海 251	成都 16	福州 7
日本 84	杭州 14	紹興 5
北京 74	長沙 14	昆明 5
広州 29	武昌 10	香港 5
天津 19	南京 9	その他79

上位３箇所（全体の５％である）、すなわち、上海、日本、北京だけで、新聞、雑誌の約66％を創刊している計算になる。

対象を上海、日本、北京にしぼり、変遷をたどることにする。

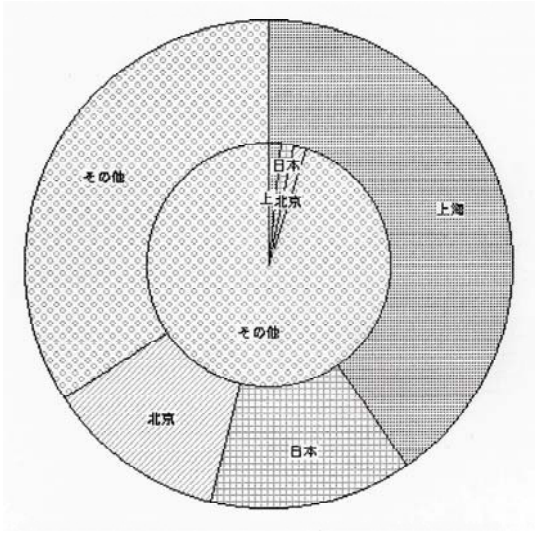


図2 5%の地域で66%の新聞、雑誌を創刊する

創刊数について見ると、1890年代は、上海が圧倒的に多く、山は、1897年だ。1900年代は、上海が恒常的に多数をしめながら、日本での創刊が目を引く。1907年が頂となる。1910年代も、上海が創刊数の上でも他の２箇所を大きく引き離しているなかで、北京での創刊が増加する。高みは、1913年である。

都市別発行状況の図2を見ると、さらにはっきりと出版界全体の動向を読み取ることができる。

基本的には、都市別創刊数の変化をなぞるような動きを示している。1980年代の山が1898年に１年ズレているくらいで、1907年、1913年の頂は、同じだ。

上海での定期刊行物が、図で見る通り、他の地域を圧倒している。清末民初における出版界の中心は、上海であることがここからも明らかであろう。

見逃してならないのは、1900年代における日本の存在である。この間、日本で創刊された、あるいは継続発行された定期刊行物は、数のうえで北京のものをうわまわっている。梁啓超の『清議報』、『新民叢報』、さらに中国最初の文芸専門誌『新小説』は、いずれも日本で創刊発行されている事実がある。清末民初の出版界に言及する場合、日本を無視しては、状況説明はできない。

1910年代は、日本での創刊が減少し、北京で急増する。北京が日本に取ってかわった時代だ。

清末民初における定期刊行物の動向は、次のようにまとめることができるだろう。上海を中心に創刊、発行が継続されるのが基調だ。辛亥革命以前は、それに日本での発行が加わり、辛亥革命以後は、日本から北京に交替する、ということになる。

上海―日本―北京という三角形を形成している点に注目してほしい。私は、こ

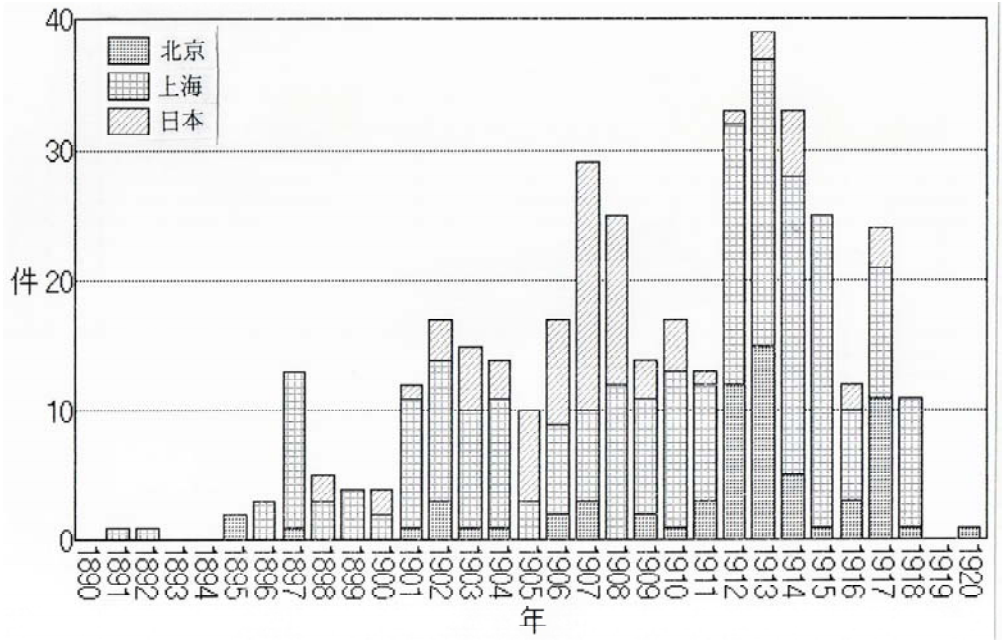


図3 都市（地域）別創刊数

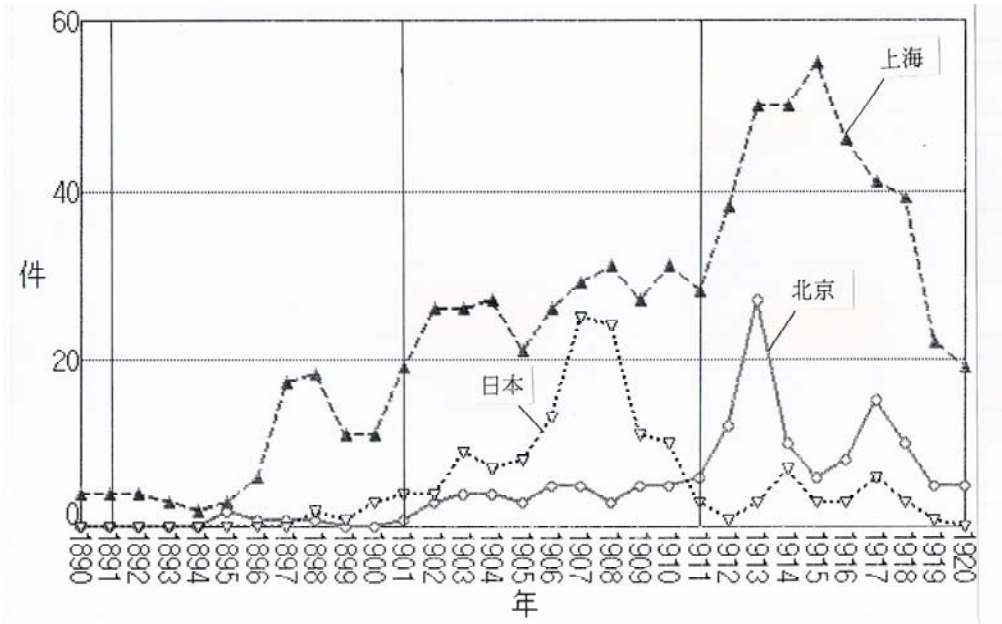


図4 都市（地域）別発行状況

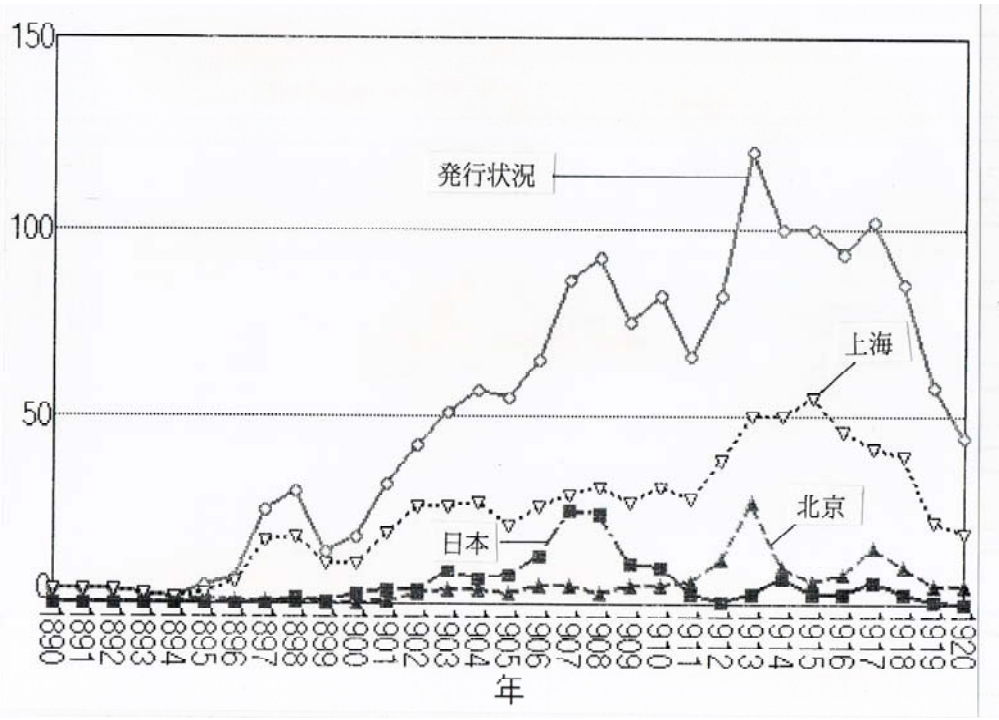


図5 全発行状況においける都市（地域）

れを「清末民初：雑誌トライアングル」と呼ぶことにする。

4　おわりに

もう一度、最初の全刊行物の発行状況に話をもどそう。

1890年から1920年まで発行された定期刊行物の全体図（ウルル山だ）に、さきほどの都市（地域）別発行状況のグラフを重ねる（図3）。

1890年代の山は、上海そのものが創出した。1900年代は、上海プラス日本が中心となる。1910年代は、上海プラス北京が出版界を担っているのがわかるだろう（図4 図5）。言葉をかえれば、出版の基盤に上海が存在しており、その時代における新思潮の発信地から情報が流入するという構造になっているのだ。

清末民初の定期刊行物は、時間から見ればウルル山、地理からいえばトライアングルである、というのが今回の調査結果である。

附：清末民初の定期刊行物一覧

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1857	六合叢談	上海																																
1864	字林西報	上海	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	II 654
1872	瀛寰瑣記	上海																																
1872	中西聞見録	北京																																
1874	［上海］万国公報	上海	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★												I 606
1875	四溟瑣紀	上海																																
1876	格致彙編	上海	★	★	★																													
1876	寰宇瑣紀	上海																																文献15
1876	侯鯖新録	上海																																文献15
1891	中西教会報	上海	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★												
1892	海上奇書	上海																																文献15
1895	［北京］万国公報	北京					★																											
1895	中外紀聞	北京					★	★																										
1896	強学報	上海						★																										
1896	蘇報	上海						★	★	★	★	★	★	★	★	★																		I 360
1896	時務報	上海						★	★	★																								
1897	奇聞報								★																									文献15
1897	知新報	マカオ							★	★	★	★	★																					
1897	湘学新報・湘学報	長沙							★	★																								
1897	渝報	重慶							★	★																								
1897	農学報	上海							★	★	★	★	★	★	★	★	★	★																
1897	集成報	上海							★	★																								
1897	富強報	上海							★																									
1897	萃報	上海							★	★																								
1897	実学報	上海							★	★																								
1897	新学報	上海							★	★																								
1897	求是報	上海							★	★																								
1897	訳書公会報	上海							★	★																								
1897	游戯報	上海							★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	文献15
1897	笑報	上海							★																									文献15
1897	演義白話報	上海							★																									文献15
1897	消閑報	上海							★																									文献15
1897	国聞彙編	天津							★	★																								
1897	尚賢堂月報・新学月報	北京							★	★																								
1897	利済学堂報	温州							★																									
1897	経世報	杭州							★	★																								
1898	湘報	長沙								★																								
1898	嶺学報	広州								★																								
1898	嘻笑報	広州																																文献15

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1898	無錫白話報・中国官音白話報	無錫					★																											
1898	蜀学報	成都					★																											
1898	亜東時報	上海					★★★																											I 643
1898	工商学報	上海					★																											
1898	昌言報	上海					★																											
1898	采風報	上海					★★★★★★★★★★★★																											文献15
1898	趣報	上海					★																											文献15
1898	清議報	日本					★★★★																											I 1
1898	東亜報	日本					★																											
1899	湖北商務報	武昌						★★★★★★																										
1899	中外大事報	上海						★																										
1899	五洲時事彙報	上海						★																										
1899	江南商務報	上海						★★																										II 34
1899	通俗報	上海						★																										文献15
1900	中国旬報	香港							★★																									I 31
1900	中国日報	香港							★★★★★★★★★★★★★																									II 1
1900	亜泉雑誌	上海							★★																									I 77
1900	海上文社日報	上海							★																									文献15
1900	開智録	日本							★★																									I 87
1900	訳書彙編・政法学報	日本							★★★★★																									I 55, III 99
1901	蘇州白話報	蘇州								★																								II 81
1901	勵学訳編	蘇州								★★																								
1901	教育世界	上海								★★★★★★★★																								I 114
1901	集成報	上海								★★																								I 69
1901	南洋七日報	上海								★★																								
1901	選報	上海								★★★																								II 88
1901	普通学報	上海								★★																								III 1
1901	世界繁華報	上海								★★★★★★★★★★																								文献15
1901	笑林報	上海								★★★★★★★★★★																								文献15
1901	寓言報	上海								★★★																								文献15
1901	春江花月報	上海								★																								文献15
1901	及時行楽報	上海								★																								文献15
1901	国民報	日本								★																								I 98
1901	京話報	北京								★																								
1901	訳林	杭州								★★																								I 91
1901	杭州白話報	杭州								★★★★																								II 63
1902	啓蒙通俗報	四川									★★★																							II 145
1902	女報・女学報	上海									★★																							III 75
1902	新世界学報	上海									★★																							II 101
1902	大陸報	上海									★★★★★																							II 115
1902	政藝通報	上海									★★★★★★★																							III 47
1902	翻訳世界	上海									★★																							III 43
1902	外交報	上海									★★★★★★★★★★																							III 5
1902	方言報	上海									★																							文献15
1902	飛報	上海									★																							文献15
1902	支那小報	上海									★																							文献15

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1902	蘇州白話報	上海												★																				文献15
1902	花天日報	上海												★																				文献15
1902	大公報	天津												★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	V1
1902	遊学訳編	日本												★	★																			I 225
1902	新民叢報	日本												★	★	★	★	★	★															I 141
1902	新小説	日本												★	★	★	★	★	★															I 196
1902	鷺江報	厦門												★	★	★	★																	
1902	啓蒙画報	北京												★	★																			I 189
1902	華北訳著編	北京												★	★	★																		
1902	経済叢編・北京雑誌	北京												★	★	★																		
1902	浙江五日報	杭州												★																				
1903	湖南学報	長沙													★																			
1903	湖南通俗演説報	長沙？													★																			
1903	湖北学報	湖北													★	★																		II 152
1903	覚民	江蘇													★	★																		I 415
1903	広益叢報	重慶													★	★	★	★	★	★	★	★	★											I 303
1903	蜀報	成都													★																			I 346
1903	中国白話報	上海													★	★																		I 441
1903	寧波白話報	上海													★	★																		I 431
1903	科学世界	上海													★	★																		I 288
1903	国民日日報	上海													★																			I 392
1903	童子世界	上海													★																			III 79
1903	経世文潮	上海													★	★																		III 142
1903	俄事警聞	上海																																III 158
1903	繍像小説	上海													★	★	★	★																III 115
1903	花世界	上海													★																			文献15
1903	江蘇	日本													★	★																		I 329
1903	浙江潮	日本													★																			I 269
1903	湖北学生界・漢声	日本													★																			I 239
1903	直説	日本													★																			I 259
1903	新白話報	日本													★	★																		II 226
1903	商務報	北京													★	★	★	★																III 165
1904	安徽俗話報	安徽														★	★																	II 163
1904	江蘇白話報	江蘇														★	★																	
1904	呉郡白話報	蘇州														★																		
1904	四川官報	四川														★	★	★	★	★	★	★	★											III 220
1904	崇実報	重慶														★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	III 726
1904	成都日報	成都														★	★	★	★	★	★	★	★											IV 94
1904	時報	上海														★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★						II 243, IV 247
1904	二十世紀大舞台	上海														★																		I 482
1904	揚子江	上海														★																		II 203
1904	揚子江白話報	上海														★	★	★	★	★	★	★	★											II 210
1904	東方雑誌	上海														★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	III 178, IV 106
1904	女子世界	上海														★	★	★	★															I 461
1904	新新小説	上海														★	★	★	★															III 227
1904	警鐘日報	上海														★	★																	V 42

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1904	潮州白話報	上海																★																
1904	捷影報	上海																★																文献15
1904	白話	日本																★																II 220
1904	政法学報	日本																																
1904	海外叢学録	日本																★																III 240
1904	福建白話報	福州																★																
1904	武備雑誌	保定																★★★																II 190
1904	京話日報	北京																★★★																V 57
1904	東浙雑誌	浙江																★																
1904	萃新報	金華																★																I 474
1905	美洲学報：実業界	ｱﾒﾘｶ																	★															
1905	美禁華工拒約報	広州																	★															I 537
1905	広州旬報	広州																	★															
1905	游藝報	広州																	★															文献3
1905	女界灯学報	仏山																	★															
1905	唯一趣報有所謂	香港																	★★															文献3
1905	之罘報	山東？																	★															
1905	重慶商会公報	重慶																	★★★★★															
1905	四川学報・四川教育官報	成都																	★★★★★★★															II 300
1905	国粋学報	上海																	★★★★★★★															II 314
1905	娯閑日報	上海																	★															文献15
1905	小説世界日報	上海																	★															文献15
1905	直隷教育雑誌・直隷教育官報	天津																	★★★★★★★															
1905	醒獅	日本																	★★															II 367
1905	民報	日本																	★★★★★★															I 504
1905	二十世紀之支那	日本																	★															I 499
1905	第一晋話報	日本																	★★															III 249
1905	日新学報	日本																																III 720
1905	鵑声	日本																	★															I 555
1905	東京留学界紀実	日本																	★															
1905	直隷白話報	保定																	★															II 286
1905	北直農話報	保定																	★★															
1905	華北雑誌・北新雑誌	北京？																	★★															
1905	浙源彙報	金華																	★															II 234
1906	祖国文明報・孔聖会旬報・孔聖会星期報	広州																		★★★★★★														
1906	潮声	潮州																		★★														
1906	勧学報	江西																		★														I 594
1906	雁来紅叢報	蘇州																		★★														III 256
1906	南洋商務報	南京																		★★★★														
1906	南洋兵事雑誌	南京																		★★★★★★														
1906	予備立憲官話報	上海																		★★														III 315
1906	競業旬報	上海																		★★★★														III 272
1906	新世界小説社報	上海																		★★														III 263
1906	月月小説	上海																		★★★★★★														I 578
1906	寰球中国学生報	上海																		★★														

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1906	［上海書業商会］図書月報	上海																		★														
1906	憲政雑誌	上海																		★★														
1906	北洋学報	天津																		★														
1906	北洋法政学報	天津																		★★★★★														
1906	教育	日本																		★														II 427
1906	復報	日本																		★★														II 405
1906	雲南	日本																		★★★★★														II 378
1906	洞庭波	日本																		★														I 542
1906	革命評論	日本																		★★														IV56
1906	新訳界	日本																		★★														III303
1906	［東京］法政雑誌	日本																		★														I 489
1906	農桑学雑誌	日本																		★														
1906	地方白話報	保定																		★★														
1906	商務官報	北京																		★★★★★★														
1906	学部官報	北京																		★★★★★★														
1907	中興日報	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ																			★★★★													IV1
1907	新世紀	ﾌﾗﾝｽﾊﾟﾘ																			★★★★													III359
1907	吉林白話報	吉林																			★★													II 548
1907	中外小説林	広州																			★★													
1907	広東戒烟新小説	広州																			★													
1907	広東白話報	広州																			★													
1907	商工旬報・農工商報・広東勧業報	広州																			★★★★													
1907	振華五日大事記	広州																			★★													
1907	江西農報	南昌																			★★★													
1907	四川教育官報	四川																																
1907	科学一斑	上海																			★													II 544
1907	神州日報	上海																			★★★★★★★★★★★★★★													II 490, III 386
1907	中国女報	上海																			★													II 446
1907	神州女報	上海																			★													III 402
1907	競立社小説月報	上海																			★													III 325
1907	小説林	上海																			★★													II 472
1907	振群叢報	上海																			★★													
1907	醒華	天津																			★★★★													III 483
1907	豫報	日本																			★													I 599
1907	大江七日報	日本																			★													II 482
1907	漢幟	日本																			★													I 549
1907	中国新報	日本																			★★													II 454
1907	中国新女界	日本																			★													I 565
1907	晋乗	日本																			★													II 563
1907	政論	日本																			★★													II 571
1907	河南	日本																			★★													II 587
1907	粤西	日本																			★★													V 70
1907	漢風	日本																			★													III 331
1907	滇話報	日本																			★★★													
1907	法政学交通社雑誌	日本																			★													

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1907	学報	日本																		★★														
1907	[東京] 法政学報	日本																		★														
1907	臚報	日本																		★★														
1907	天義	日本																		★★														III334
1907	[東京] 大同報	日本																		★★														
1907	遠東聞見録	日本																		★														
1907	秦隴報	日本																		★														
1907	暮鼓晨鐘	北京																		★★★														II534
1907	大同報	北京																		★														II518
1907	震旦学報	北京																		★														
1907	著作林	杭州																		★★														II442
1908	江漢日報	漢口																		★														III446
1908	広東地方自治研究録	広州																		★★														
1908	嶺南白話雑誌	広州																		★														
1908	実業報	広州																		★														
1908	半星期報	広州																		★														
1908	現世史	広州																		★★														
1908	東莞旬報	広州																		★														
1908	半星期報	広州																		★														II634
1908	香山旬報	香山																		★★★★														IV41
1908	新小説叢	香港																		★														
1908	予備立憲公会報	上海																		★★★														III427
1908	安徽白話報	上海																		★★														III494
1908	聖教会報	上海																		★														IV654
1908	新朔望報	上海																		★														
1908	万国商業月報	上海																		★★														
1908	国華報	上海																		★														
1908	法政介聞	上海																		★														
1908	軍学季刊	上海																		★														
1908	琴報	上海																		★★★★★★★												★★★★★		IV72
1908	白話小説	上海																		★														文献3
1908	国魂報	上海																		★														文献15
1908	琅嬛雑誌	上海																		★														文献15
1908	衡報	日本																		★														III334
1908	関隘	日本																		★														III411
1908	夏声	日本																		★★														III416
1908	武学	日本																		★★★														III461
1908	支那革命叢報	日本																		★														III478
1908	四川	日本																		★														II612
1908	江西	日本																		★★														III243
1908	梅州	日本																		★ ★														II629
1908	国報	日本																		★														
1908	学海 (甲編)	日本																		★														
1908	教育新報	日本																		★★														
1908	湖北地方自治研究会雑誌	日本																		★★★														
1908	滇話	日本																		★														II622
1908	福建法政雑誌	福州																		★★														

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1908	浙江教育官報	杭州																					★	★	★	★								
1909	湖南自治報	長沙																					★	★										III573
1909	湘路新誌	長沙																					★	★	★									III554
1909	揚子江小説報	漢口																					★											
1909	砭群叢報	広州																					★	★										
1909	天鐸	広州																					★	★										
1909	勧業会旬報	南京																					★	★										
1909	越報	上海																					★											III567
1909	女報	上海																					★											III501
1909	民吁日報	上海																					★											III534
1909	民呼日報	上海																					★											III522
1909	華商聯合報	上海																					★	★										III511
1909	女学生	上海																					★											IV67
1909	小説時報	上海																					★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		IV80
1909	[商務] 教育雑誌	上海																					★	★	★	★	★	★	★	★	★	★		
1909	十日小説	上海																					★	★	★									
1909	憲政新誌	日本																					★	★										III559
1909	湘路警鐘	日本																					★											III548
1909	海軍	日本																					★											
1909	広西雑誌	北京																					★	★										V78
1909	交通官報	北京																					★	★	★									
1909	農工雑誌	杭州																					★											
1909	杭州商業雑誌	杭州																					★											
1909	陝西	陝西																					★											
1910	湖南地方自治白話報	長沙																						★										
1910	湖北農会報	武昌																						★	★									
1910	南報	桂林																						★										III650
1910	広西軍国指南	桂林																						★										
1910	天趣報	広州																						★										文献3
1910	南洋商報	南京																						★										
1910	江寧実業雑誌	南京																						★	★									
1910	蜀報	成都																						★	★									
1910	小説月報	上海																						★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	V82
1910	民声叢報	上海																						★										III639
1910	国風報	上海																						★	★									III585
1910	尚賢堂晨鶏録・尚賢堂紀事	上海																						★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	IV629
1910	協和報	上海																						★	★	★								IV645
1910	南社	上海																						★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	V110
1910	民立報	上海																						★	★	★	★							V120
1910	中国商業雑誌	上海																						★										
1910	中国商業研究会月報・中国商業月報	上海																						★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	
1910	民声叢報	上海																						★										
1910	上海白話報	上海																						★										文献15
1910	鶴立報	上海																						★										文献15
1910	地学雑誌	天津																						★	★	★	★	★	★	★	★	★		
1910	北洋兵事雑誌	天津																						★										

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1910	北洋政学旬報	天津																					★	★	★									
1910	教育今語雑誌	日本																					★	★										III630
1910	鉄路界	日本																					★											III578
1910	南洋群島商業研究会雑誌	日本																					★	★										
1910	熱誠	日本																					★											
1910	福建農工商官報	福州																					★											
1910	奉天勧業報	奉天																					★	★										
1910	華商聯合会報	北京																					★											
1910	麗沢随筆	西安																					★	★										
1911	中華民国公報	湖北																						★	★	★								IV156
1911	大漢報	漢口																						★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	IV142
1911	南風報	広西																						★										III658
1911	斉魯公報	山東																						★	★									IV172
1911	四川保路同志会報告	四川																						★										III689
1911	民国報	上海																						★	★									III711
1911	克復学報	上海																						★										IV100
1911	進歩雑誌	上海																						★	★	★	★	★	★	★	★			IV179
1911	婦女時報	上海																						★	★	★	★	★	★	★	★			V150
1911	〔上海〕法政雑誌	上海																						★	★	★	★	★	★					
1911	時事新報月刊	上海																						★										
1911	社会星	上海																						★										
1911	留美学生年報	上海																						★	★	★	★							
1911	陽秋報	上海																						★										文献15
1911	留日女学会雑誌	日本																						★										III682
1911	民心	福州																						★										III667
1911	左海公道報	福州																						★	★									
1911	軍華	北京																						★										III704
1911	法学会雑誌	北京																						★	★	★								
1911	北京法政学雑誌	北京																						★										
1911	朔望報	寧波																						★										
1911	敬社学譚	西安																						★										
1912	軍声																								★									IV352
1912	安徽実業雑誌	安慶																							★	★				★	★	★		
1912	雲南教育雑誌	昆明																							★	★	★	★	★	★	★	★	★	
1912	湖南実業雑誌	長沙																							★	★	★	★	★	★				
1912	湖南教育雑誌	長沙																							★	★	★	★	★					
1912	〔武昌〕経済雑誌	武昌																							★									
1912	民国経済雑誌	武昌																							★	★								
1912	湖北教育会報	武昌？																							★									
1912	中国同盟会雑誌	広州																							★									
1912	民誼	広州																							★	★								
1912	臨時政府公報	南京																							★									
1912	黒竜江実業月報	哈爾濱																							★	★								
1912	山西実業報	太原																							★	★								
1912	西蜀新聞	四川																							★	★	★	★						IV320
1912	四川政報	成都																							★	★	★	★						IV289
1912	四川国学雑誌・国学	成都																							★	★	★	★	★	★				

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
	蓄積																																	
1912	民権報	上海																								★	★	★						IV211
1912	社会世界	上海																								★								IV228
1912	群学会雑俎	上海																								★								IV273
1912	生活	上海																								★	★							IV280
1912	独立周報	上海																								★	★							IV298
1912	文藝倶楽部	上海																								★								IV315
1912	仏学叢報	上海																								★	★							IV328
1912	学藝雑誌	上海																								★								IV349
1912	真相画報	上海																								★	★							V159
1912	中華教育界	上海																								★	★	★	★	★	★	★	★	
1912	共和言論報	上海																								★								
1912	女権	上海																								★								
1912	通俗教育研究録	上海																								★								
1912	古学彙刊	上海																								★	★							
1912	生活雑誌	上海																								★	★							
1912	独立周報	上海																								★	★							
1912	鉄道	上海																								★	★							
1912	国学叢選	上海																								★	★	★	★	★	★	★	★	
1912	神州女報	上海																								★	★							
1912	新世界	上海																								★								IV233
1912	庸言	天津																								★	★	★						IV355
1912	直隷実業雑誌	天津																								★	★	★	★					
1912	中国実業雑誌	日本→天津																								★	★	★	★	★	★	★	★	V188
1912	女子白話報	北京																								★	★							IV333
1912	西北雑誌	北京																								★	★							IV341
1912	中国学報	北京																								★	★	★						V174
1912	少年中国	北京																								★	★							V180
1912	[北京]経済雑誌	北京																								★	★							
1912	農林公報	北京																								★	★							
1912	海軍雑誌	北京																								★	★							
1912	新紀元星期報	北京																								★	★							
1912	軍事月報	北京																								★	★	★						
1912	民鐸雑誌	北京																								★								
1912	生計	北京																								★	★							
1912	亜東叢報	北京																								★	★							
1912	農友会報	杭州																								★								
1912	越鐸日報	紹興																								★	★	★	★	★	★	★	★	IV191
1912	越社叢刊	紹興																								★								IV207
1913	国会叢報																										★							
1913	雲南実業雑誌	昆明																									★	★	★					
1913	貴州実業雑誌	貴陽																									★							
1913	実業叢報	長沙																									★	★	★					
1913	楚学雑誌	武昌																									★							
1913	文史雑誌	武昌																									★							
1913	晦鳴録・民声	広州																									★	★	★	★				IV458
1913	宗聖彙誌・宗聖学報	太原																									★	★	★	★	★	★	★	
1913	山東実業報	済南																									★							

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1913	四川訊学報	成都																													★			Ⅳ370
1913	蜀風報	成都																													★★			Ⅳ469
1913	四川鉱業雑誌	成都																													★			
1913	人道周報	上海																													★			Ⅳ374
1913	民国彙報	上海																													★			Ⅳ378
1913	不忍雑誌	上海																													★★★★★★			Ⅳ383
1913	孔教会雑誌	上海																													★★★			Ⅳ399
1913	万国女子参政会旬報・月刊	上海																													★			Ⅳ413
1913	教育研究	上海																													★★★★			Ⅳ434
1913	良心	上海																													★			Ⅳ446
1913	神州叢報	上海																													★★			Ⅳ452
1913	自由雑誌	上海																													★			Ⅳ466
1913	雅言	上海																													★★★			Ⅳ478
1913	中華実業叢報	上海																													★★			Ⅴ209
1913	星期彙報	上海																													★			
1913	平論報	上海																													★			
1913	［上海］雲南	上海																													★			
1913	［上海］中華実業叢報	上海																													★★			
1913	大同周報	上海																													★			
1913	教育研究	上海																													★★★★			
1913	国民月刊	上海																													★			
1913	［上海］中華雑誌	上海																													★			
1913	歌場新月	上海																													★			
1913	［上海］華僑雑誌	上海																													★★			
1913	雲南雑誌	上海																													★			Ⅳ474
1913	言治	天津																													★	★		
1913	讕報	日本																													★★			Ⅳ419
1913	国民雑誌	日本																													★			Ⅳ423
1913	実報	奉天																													★			
1913	大陸国報	北京																													★			Ⅳ408
1913	論衡	北京																													★			Ⅳ428
1913	大中華民国日報	北京																													★			Ⅴ196
1913	中華全国商会連合会会報・中華全国商会連合会会報	北京																													★★★★			Ⅴ221
1913	武徳	北京																													★★			
1913	中央商学会雑誌	北京																													★			
1913	震旦	北京																													★			
1913	今聞類鈔	北京																													★			
1913	教育部編纂処月刊	北京																													★			
1913	大陸国報	北京																													★			
1913	憲法新聞	北京																													★			
1913	国是	北京																													★			
1913	公論	北京																													★			
1913	中華	北京																													★			
1913	［北京法政同志研究会］法政学報	北京																													★★			

年	誌名	発行地	9091929394959697989900010203040506070809101112131415161718192O	備考
1913	[杭州]教育周報	杭州	★★★★★★★	
1913	新神州雑誌	杭州	★	
1913	白陽	杭州	★	
1913	浙江省農会報	杭州	★★★★★★★★	
1913	紹興県教育会月刊	紹興	★★	
1913	商学協会雑誌	寧波	★	
1914	民口雑誌	ｱﾒﾘｶ	★★★	
1914	滇声報	昆明	★★★★★★★	V293
1914	公言	長沙	★★	
1914	農林月報	広州	★	
1914	超然	常熟	★	
1914	婦女鑑	四川	★	IV563
1914	娯閑録	成都	★★	
1914	共和雑誌	成都	★	
1914	中華実業界	上海	★★★	IV500
1914	民権素	上海	★★★	IV509
1914	小説叢報	上海	★★★★	IV548
1914	夏星雑誌	上海	★	IV555
1914	欧州戦事彙報	上海	★	IV559
1914	江東雑誌	上海	★	IV566
1914	留美学生季報	上海	★★★★★	IV571
1914	礼拝六	上海	★★★	V266
1914	[中華図書館]女子世界	上海	★★	V302
1914	中華小説界	上海	★★★	
1914	小説旬報	上海	★	
1914	正誼雑誌	上海	★★	IV491
1914	新劇雑誌	上海	★	V281
1914	財政経済雑誌	上海	★	
1914	文藝雑誌	上海	★★★★★	
1914	学生雑誌	上海	★★★★★	
1914	欧州風雲周刊	上海	★	
1914	俳優雑誌	上海	★	
1914	繊雲雑誌	上海	★	
1914	世界雑誌	上海	★	
1914	劇場月報	上海	★★	
1914	七襄	上海	★★	
1914	扶風月報	上海	★	
1914	南開校風	天津	★★	V243
1914	敬業学報	天津	★★★★	V257
1914	甲寅	日本	★★	IV529
1914	民国	日本	★	IV542
1914	甲寅雑誌	日本	★★	
1914	国学	日本	★	
1914	人籟	日本	★	
1914	中華雑誌	北京	★★	IV518
1914	清華周刊	北京	★★★★★	
1914	[北京]中華雑誌	北京	★★	

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1914	国学叢刊	北京																									★							
1914	農商公報	北京																									★	★	★	★	★	★	★	
1914	浙江兵事雑誌	杭州																									★	★	★	★	★	★	★	
1914	紹興教育雑誌	紹興																									★	★	★	★	★	★		
1915	新中華																												★	★				V379
1915	科学	アメリカ																											★	★	★	★	★	★	V326
1915	安徽教育雑誌	安慶																											★	★				
1915	船山学報	長沙																											★	★				
1915	光華学報	武昌																											★	★	★			
1915	崇徳公報	武昌																											★	★				
1915	光華学報	武昌																											★	★	★			IV591
1915	世界観	成都																											★					V370
1915	世界観雑誌	成都																											★					
1915	小説新報	上海																																
1915	大中華雑誌	上海																											★	★				V310
1915	中華学生界	上海																											★	★				V335
1915	国学雑誌	上海																											★	★	★			V347
1915	[商務]婦女雑誌	上海																											★	★	★	★		V351
1915	国貨月報	上海																											★					V362
1915	大夏	上海																											★					V389
1915	小説海	上海																											★	★	★			
1915	小説大観	上海																											★	★	★	★	★	★	
1915	中国銀行業務会計通信録・中国銀行通信録	上海																											★	★	★	★	★	★	
1915	中華婦女界	上海																											★	★				
1915	学生会会報	上海																											★					
1915	女子雑誌	上海																											★					
1915	双星雑誌	上海																											★					
1915	戯劇叢報	上海																											★					
1915	正志	上海																											★					
1915	中国白話報	上海																											★					
1915	通俗雑誌	上海																											★					
1915	日本潮	上海																											★					
1915	文星雑誌	上海																											★	★				
1915	中華国貨月報	上海																											★	★				
1915	英商公会華文報	上海																											★	★	★	★	★	★	
1915	復旦	上海																											★	★	★	★	★	★	
1915	青年雑誌・新青年	上海																											★	★	★	★	★	★	
1915	清華学報	北京																											★	★	★	★	★	★	
1915	桑社	紹興																											★	★	★			
1916	義声報																													★	★	★	★	★	V393
1916	旅欧雑誌	フランス																												★	★	★	★	★	
1916	雲南実業周刊・雲南実業要聞周刊	昆明																												★	★	★			
1916	民声雑誌	長沙																												★				
1916	広東農林月報	広州																												★	★	★	★	★	
1916	国防報	南京																												★				
1916	護国軍紀事	上海																												★				V404

年	誌名	発行地	9091929394959697989900010203040506070809101112131415161718192	0	備考
1916	春声	上海	★		
1916	実業彙報	上海	★		
1916	環球	上海	★★		
1916	新民徳	上海	★★★★		
1916	公民雑誌	上海	★★		
1916	丙辰雑誌	上海	★★		
1916	商学雑誌	天津	★★★★★		
1916	直隷商品陳列所月報	天津	★★		
1916	民鐸	日本	★★★		V420
1916	民弊雑誌	日本	★★		
1916	福建勧業雑誌	福州	★		V415
1916	大公論	北京	★		
1916	憲法公言	北京	★★		
1916	政治学報	北京	★		
1916	甌海潮	温州	★★		
1917	国立北京農業専門学校校友会雑誌	北京	★		
1917	工読雑誌	アメリカ	★		
1917	新華僑雑誌	シンガポール	★		
1917	菲律濱華僑教育叢刊	フィリピン	★★★		
1917	華工雑誌	フランス	★★★★		
1917	南洋華僑雑誌	ペナン	★		
1917	尚志	昆明	★★★★		
1917	鉱業雑誌	長沙	★★★★		
1917	【広州】実業雑誌	広州	★		
1917	江蘇省農会雑誌（季刊）	南京	★		
1917	中論雑誌	成都	★		V438
1917	太平洋	上海	★★★★		V445
1917	広倉学会雑誌	上海	★★★		V470
1917	澄衷学報	上海	★★★		
1917	斯覚	上海	★		
1917	新国民雑誌	上海	★		
1917	通俗周報	上海	★		
1917	青年進歩	上海	★★		
1917	平和報	上海	★★		
1917	教育与職業	上海	★★		
1917	南開思潮	天津	★★★★		
1917	山東実業学会会誌	日本	★		
1917	神州学叢	日本	★		
1917	学藝	日本→上海	★★		V461
1917	財政経済周報	福州	★		
1917	甲寅日刊	北京	★		IV602
1917	丁巳雑誌	北京	★		V432
1917	寸心雑誌	北京	★		
1917	楚宝	北京	★★		
1917	政法学会雑誌	北京	★		
1917	霜鐘雑誌	北京	★		

年	誌名	発行地	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	備考
1917	説叢	北京																													★		
1917	同徳雑誌	北京																													★		
1917	交通月刊	北京																													★★		
1917	実社自由録	北京																													★★		
1917	公民周刊	西安																													★		
1918	教育報	ジャワ																														★★	
1918	華鐸	フィリピン																														★★	
1918	安徽教育月刊	安慶																														★★★	
1918	新城端風団年刊・端風	湖南																														★★	
1918	嶺南農学会年報	広州																														★	
1918	広東省会学生連合会月報	広州																														★	
1918	中国与南洋	南京																														★★★	
1918	梨影雑誌	香港																														★★	
1918	戊午周報	成都																														★★	V484
1918	霊学叢誌	上海																														★★★	Ⅳ613
1918	戊午雑誌	上海																														★	V479
1918	小説倶楽部	上海																														★	
1918	小説季報	上海																														★★★	
1918	大戦事報	上海																														★	
1918	中華美術報	上海																														★	
1918	遐江月	上海																														★	
1918	日新雑誌	上海																														★	
1918	美術	上海																														★★★	
1918	労働雑誌	上海																														★	
1918	春柳	天津																														★★	
1918	楽群雑誌	北京																														★	
1918	[北京法政学校]法政学報	北京																														★★★	
1918	微言	北京																														★★★	
1918	毎周評論	北京																														★★	
1920	霊学叢誌	北京																															★Ⅳ624	

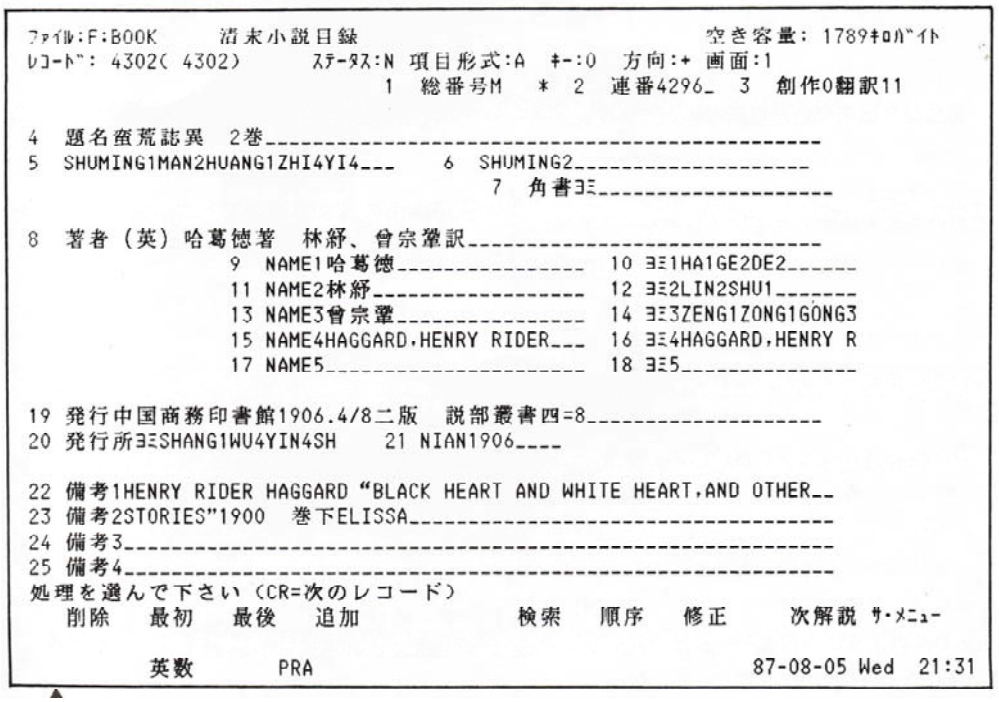
Ⅰ－Ⅴは、『辛亥革命時期期刊介紹』の巻数を、数字はページ数を示す。
文献は、『文献』を、数字は号数を指す。

電脳化資料庫日記

『中国文芸研究会会報』第69号（1987.8.30）に掲載。個人電脳を使用した清末民初書籍資料庫（データベース）構築について、その経過、問題点を指摘する。現在では、普通に利用している電脳化データベースだ。しかし、1980年代にまわりを見ても、電脳を利用して資料庫を作成利用する中国文学研究者はいなかった。個人用電脳の初期段階では、今では考えられないくらいの不自由さがあった。しかし、比較するものがない。そういうものだと思っていた。インターネットもまだ普及していない時代のことだ。そういいそえれば、少しは理解してもらえるだろうか。学生が「インターネットがなくてどうやって研究していたんですか？」と質問してきたという。いかにもありそうなことだ。ただし、インターネットが普通に使える環境であれば、あることを意識しない。ない状態など想像もしないだろう。清末小説研究とは直接の関係がなさそうに見えるかもしれない。しかし、研究の基盤は電脳化と切り離せない。2016年現在、『清末民初小説目録X』を増補訂正する作業を続けている。もう30年近くになるのだ。過去が現在につながっている。そう考えて本稿を本書に収録する。

清末民初小説目録を作成中。個人用電脳を利用しようとしたときからトラブルがはじまった。

★月★日　訂正したい個所が出てくる。検索で該当画面を呼び出す。訂正キーを押すやいなや画面が乱れ、符号、記号、数字の大騒ぎ。暴走と称することも知らなかった。暴走とは言い得て妙。20、30秒くらいのものだろうが、その間、鍵盤は何も受けつけない。見守る自分にとっては４、５分に感じる。こうたびたび



TIMSIIの入力画面

だと、こんなものかと思ってすますわけにはいかない。うわさに聞くプログラムの誤り＝虫喰い（バグ）ではないか。商品名TIMS（ティムス）IIの発売元であるエー・エム・アールに直接電話した。昨年、８月末に（大枚を投じて）購入したことを告げると、やはりそうなりますか、という返事。不良品であったのだ。すぐさま代わりのものを送るという。４ヵ月間、不自由な思いを強いられたというわけだ。利用者が言わなければ、知らん顔ということらしい。

★月★日　中国小説の目録だから、日本で決められた漢字第１、２水準6,353字にはない漢字が必要になってくる（注：漢字水準は現在ではほとんど死語）。趼紓孽龐蕙襲盦蓀蘧盦などだ。ないものは、一字一字作るほかない。外字作成用ソフトを別に購入する（電脳は金喰い虫とはよくいった）。1,500字ほど作成できるそうだから、これで十分まにあうだろう。明朝体に似せてドットを埋める作業は、私にとってそれほど苦痛ではない。作った外字をフロッピーディスクに待避する。できない。説明書の通りにやっているのに、出来ない。日立テクニカルサポートセン

ター（注：勤務校が電脳の日立2020を選択した。教員も利用できるというので個人で導入したもの）に問い合わせる。長く待たせたあげく、複雑な操作をさせようとする。説明書に書いてないことを素人の私にさせるんじゃないよ（注：結局約800字を作成した）。

★月★日　『東方』３月号（注：中国専門書店の広報誌）に、平井博氏が電脳を使って目録を作成しているとの報告が掲載されている。早速、教えを請う。氏が利用しているのは、dBASEⅡというソフトらしい。私も、一時期、購入を検討したことがある。結局TIMSⅡに決めたのは、日立2020で使えることと、こちらのほうが素人私向けではないかと判断したからだ。図書カードと同じ画面だし、それを推奨する関連本を読んだことも理由のひとつだ（注：この図書カードが後の不具合の原因になろうとは思いもしなかった）。平井氏が作成した『動向』『七月』『希望』の作者別索引を送ってもらうことにする。

★月★日　共同で採取した清末小説関係カード約3,000枚の入力がほぼ終わる。ヤレヤレ、大変だった。小説月報総目録など自作の目録複数と照合し不足を補う。『中国近代期刊篇目彙録』と照合する。採取もれが大量にある。なんと、該彙録第５、６巻の全部がぬけている。あとで担当者に聞くと、カードに取っていないという。『礼拝六』など量が多すぎてカードに記入する気にならなかったらしい。しかたがないから自分で補うことにする。総量はせいぜい4,000-5,000件と最初に踏んでいた目論見は簡単にこわれた。電脳のハードディスクのＥドライブにTIMSⅡのプログラムを収納し、Ｆドライブに5MB（メガバイト。ギガバイトではない）を割り当ててデータを入力している。だが、これに収まり切れなくなる可能性が大きい。念のためＦドライブを7MBに変更することにした。空き領域がない、と電脳に表示が出る。しかたがない、作業中止を指示する。な、なんと。Ｆドライブのデータが、きれいさっぱり消失しているではないか。事前にデータ消失の警告を出さない仕様だ。８ヵ月の努力が文字通り一瞬でパァ……などということには、私のばあいはならない。そんなこともあろうかと大事なデータは、フロッピーディスクに退避させてある。市販のソフトは別に入手ができる。だが、自作のデータだけは、どこにも存在しない。バックアップの重要性は、それまでワープロ専用機で複数回痛い目にあっているから理解している。再度セットアッ

プ。これで約9,500件のデータが収納可能になる（注：最終的には電脳の機種とソフトを交換して全３万件を超えることになった)。

★月★日　過日の例もある。どんな事故が発生するかも知れず、データの退避はこまめにやりたい。しかし、フローッピー・デスク１枚につき40分も時間がかかるのはどういうわけか。６枚の分散退避に６×40＝240分、４時間だ。エー・エム・アールに電話する。答えていわく、おかしいですね、NECのPC9800では、１枚につきせいぜい５、６分ですが、日立2020は値段が高い割に速度が遅いです、と。早速、日立テクニカルサポートセンターに電話する。ソフトが悪いんじゃないですか、とこちらはソフトのせいにする。それでは、ハードディスクのデータをフロッピーに退避するソフトは日立2020にないのか、と質問。新しいシステムプログラムにはある、との答え。買うから送って欲しい。ハイハイ承知しました、と言ったきり再三再四催促すれどもナシのつぶて。会社が大きいとやることが違う。大学に導入されたのが日立の電脳で、2020はその端末だ。なにかと便利ではなかろうかと購入したのに、この仕打ちだ。対応するソフトは、ごく少ない。インクリボンは街のどこにも売っていない。質問はたらい回しする。しかしながら、すでに相当の手間ヒマをかけているため、いまさらやめるわけにはいかない（注：その後、外付けのハードディスク40MB［GBではない］を購入した。しばらく使用していたら突然故障して動かなくなった。それ以来日立製品は信用していない)。

★月★日　7,000件近くになった。印刷をしておく。１頁に10件を配置して印字するから、これだけで700頁になる。手差し給紙で休み休み作業をすると印刷しおわるのに３日かかってしまった。

★月★日　印字を見ると、字と字の間があきすぎ、行と行のあいだが詰まりすぎている。見にくいことこのうえない。日立に聞くとソフトのほうで指示するよりほかないという。エー・エム・アールに言うと、１インチにつき６行（注：約2.5センチに６行はないだろう）というのが基準で、ワープロ専用機のようにはいかない、と答えた。なんのための基準かと思う。日本で使うソフトにアメリカの基準を押しつけてどうする。検討してみます、くらいの柔軟性がない（注：現在、ウェブで検索したが該当する会社そのものがなくなっている。あるいは業種換えしたか)。

★月★日　電脳に漢字データを入力する際、不便を感じる。同一画面上におい

て語句の移動、複写ができない。しかも単語登録もできない。電脳本体かソフトか、どちらに原因があるのか知らない。ワープロ専用機では、どんな機種にも装備されている基本機能である。それがない。おまけに学習機能もない――と思っていた。ところが、学習機能は電脳本体で設定できたのだった。わざわざ指定しなければならないとは驚く。利用者自らが学習するしかないということか。設定したからこれで一度使った漢字は、次から自動的に前の方に出てくるようになった。入力の効率が格段によくなる。１年間いらぬ労力を使った。

★月★日　日立2020の基本システムが更新されたので、またもやセットアップ。あわてぬように重要データはすべてフロッピーに退避させておく。使用感は、以前と変わりがない。データの退避時間が、１枚につき30分に短縮されている。以前は40分だったから25％のスピードアップとなる。処理速度が遅いのは、やはり日立のせいだったのだ。別に、20MB分のデータを21枚のフロッピーに複写する方法を大学の電算機事務室から教えてもらう。こちらは、１枚につき２分間。21枚で42分間。ただし、つきっきりでなくたはならない。機械まかせの６枚３時間か、つきっきりの21枚42分間か、時に応じて使い分けることにしよう。

あと、『小説新報』『小説叢報』『遊戯雑誌』の民国初期雑誌から約1,000種の小説を入力して基本作業が終了する。この夏一杯かかりそうだ。（注：清末小説研究会編『清末民初小説目録』[初版]中国文芸研究会1988.3.1として刊行）

電脳を利用した漢字文献整理

『大阪経大論集』第183号（1988.5.15）に掲載。個人電脳を使用して中国文献データベースを構築するばあいの問題点を指摘する。当時最後まで残った障碍が日本のJISで定められた漢字数の少なさである（2016年現在、基本的に解決している）。かといって中国語FEP（かな漢字変換を行なう入力システム）を使用しないのは、データの共有ができないからだ。1980年代の電脳はその程度の能力だった。制約のあるそれを使用して『清末民初小説目録』を編集作成した。アドビのPDFファイルが出現したのは1990年代のこと。紙媒体に印刷するしかなかった時代というのもなつかしい。

1　はじめに

コンピュータのことを漢語では「電子計算機」、あるいは「電脳」という。現在のコンピュータは、計算しかしないわけではない。文字をあつかうことができる。機械内部では、計算しているのかもしれないが、私の目にはすでに「電子計算機」の概念を離れているように見える。そこで、電脳という単語を使うことにする。個人が利用できるパーソナルコンピュータ（以前は、マイコンと称していたのではないか）、略してパソコンは、「個人電脳」ということになる。

はじめに言っておかなくてはならないのは、私は、電脳に関しての専門知識を持たないということだ。中国近代文学を研究するまったくの文化系の人間である。専用のプログラムを書くことなど考えたことはない。電脳用の言語を学習したことがないからやろうにもできないのだ。

必要にせまられて、中国文学の文献整理に個人電脳を利用することにした。約１万件の文献を整理し、それを書籍の形にするのが当面の目標である。

電脳についての素人が、個人電脳を使用してどれくらいの仕事ができるのか。その経過報告をする。また、将来の可能性を考える。

個人電脳は、万年筆、鉛筆などの筆記用具の一種にすぎない。数万円の万年筆で書いた文章がすばらしく、百円の鉛筆でかいたものがつまらない、ということはない。同じく、万年筆でつづった論文がダメで、電脳の言語処理機能を使っての作文がスバラシイということもない。要は、内容だ。書く人間次第。道具には、使い勝手のよしあしと使う人間との相性がいいか悪いかの違いがあるだけだ。将来はいざしらず、少なくとも現在のところは、このように私は考えている。

文具としての電脳は、はたして漢字文献整理の役に立つのか。

2　いままで

本論にはいる前に、私が今までに行なってきた文献整理について簡単に述べておく。

中国近代文学研究に欠かせないのは、雑誌の総目録と研究資料目録である。目録類を中国では「工具書」という。「工具」つまり研究のための道具という意味である。

文献の整理には、今まで図書カードを使ってきた。カード１枚につき１件の文献を記入する。書名、論文名、著者名、訳者名、掲載雑誌、巻号、発行年月日、注記、必要ならばそれらの漢語音を記入する。基本カードを用途別に並べ替え、原稿におこす。これが基本作業だ。

『繍像小説』『月月小説』『小説林』『競立社小説月報』『新小説』『遊戯世界』『小説時報』『小説月報』などの総目録は、この図書カードで作成した。

手順は以下のとおり。

雑誌の本文に出てくる作品名を作者名とともにカードに採取する。その時、目次を参照する。両者が一致しないばあい、本文の記述を優先する。中国で刊行された雑誌目録を見ると本文にもとづかずに目次だけを採取しているものがある。

不正確だといわざるをえない。

共著あるいは翻訳作品のばあいは、個人名のある分だけカードが増える。著訳者名索引を作るときに必要となるからだ。

本文の目録部分を原稿にする。人名索引は、現代漢語音のabc順に配列しなおし、これも原稿にする。

研究資料目録も同様の作業順序である。

「劉鉄雲研究資料目録」「曾孟樸研究資料目録」「李伯元研究資料目録」「四作家研究資料目録補遺１」などを編纂した時もカードをとった。内容別に発表順で並べる。

書いてしまえば、これだけのことだ。しかし、実際にやってみると判断に迷う事例に出くわす。

上述のように本文と目次の記載が異なることがある。筆名で発表された作品は、著名人を除くとその本名を確定するのがむつかしい。また、２次資料に収録されるだけで現物で確認できないものをどう扱うか。ひとつひとつの点検作業に手間がかかる。これらに加えて書き間違う、勘違いをしてカードの配列順序がくるってしまうなど、整理上の不注意を避けることができない。

図書カードが便利なところは、携帯が容易で経費が比較的少なくてすむことだろう。不便なのは、千枚単位の大規模なものになると整理するのに手間がかかることだ。人間がやる作業には、どうしても誤りがついてまわる。

さて、私が作成するのは中国で刊行された小説の総目録である。中国近代小説、もうすこし詳しくいえば清朝末期から1912年後の中華民国初期にかけて発表された小説群を、雑誌初出から単行本まで網羅するのが目標だ。

清末部分だけだが、中国の阿英が「晩清小説目」(『晩清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954ほか）にまとめている。収録されている小説は約1,100件である。私が作ろうとしてるのは、清末に連続する民初をつなげる、中国では存在していない新しいものだ。自分で言うのもどうかと思うが、完成すれば画期的な小説目録になるはず。収録小説数は、当初の予想では阿英の３倍約3,000件だ。作業を進めると最終的には約１万件にふくれあがった。従来ならば手元に集まったその図書カードを手作業で原稿に書き起こす。今回は、それとは別の方法をさがす。

１万件の小説作品データを個人電脳を使ってどのように整理するのか。まず、個人電脳そのものから述べていこう。

3　ハードウェアの選択

使用した個人電脳は、日立2020である。20メガバイト（MB。ギガバイトGBではない）のハードディスク内蔵型だ。併用するプリンタは、ドットインパクト式、単票を手で差し込む。

この日立2020は、大型電脳の端末として使われるらしく一般の販売店で見かけることはない。その意味で、私の使用例はやや特殊なものといえるかもしれない。しかし、機械そのものの機能を見る限り、普通に使われている個人電脳とさして変わりはない。それどころか、値段が高い割に、使い勝手が悪い点もある。たとえば、ハードディスクである。

20メガバイトのハードディスクを内部に装着している。20メガといえば、フロッピー・デスク20枚分の情報が記録できるほどの大容量だ（注：1980年代はそうだった）。20メガとうたっているのだから、当然20メガをまるまる使用できると思う。ところが、それが出来ない。いろいろに食い込まれて実際に使えるのは、ふたつに割った7.7メガずつにすぎない。これにはヨワッタ。なにしろカード１万枚分を電脳によって一括管理しようというのである。7.7メガに収まりきるか。一括管理できないようでは、カードで整理するのと手間はそう違わなくなる。

はじめから7.7メガしか利用できないとわかっていれば、対応のしかたもあったかもしれない。しかし、実際に動かしてみてそういう設定になっていることがわかった。解説書を購入して事前に学習したが、こまかい部分は使用してみなければ理解できない。案の定、7.7メガでは容量不足になった。

40メガバイトの外付けハードディスクを増設せざるをえない。これも同様にまるまる40メガは利用できない。15.5メガふたつに7.7メガがひとつだ。つまりみっつに分割して管理することになっている。なんのための大容量ハードディスクか、といいたい。20メガ全部を使うことのできる市販のものがある。これに比べると、日立の電脳は能力不足といわれてもしかたがない。機械の問題ではない、システ

ムが原因である。そういうならシステムを迅速に（ここを強調したい）変更してもらいたいものだ（注：ハードディスクが突然死亡するまで不便なままだった）。

ついつい愚痴調子になる。文献整理を、それもやや規模が大きくなるものを個人電脳を使って実行しようとすれば、ハードディスクが不可欠の装置だ。そこで、要求を満たさない機械を使用せざるをえない分だけ不満がたまるのだ。

機械としては使い勝手の悪い日立2020でなんとか作業を続ける。一般のエプソン、ＮＥＣその他であれば、文句なく仕事をはかどらせることが可能だろう。

4　ソフトウエアの選択

日立2020に関するかぎり、ソフトの選択は容易である。迷わなければならないほど利用できるソフトの数が多くない。選択の余地がないとはこのことだ。電脳にはじめから文書作成、表計算、作図のソフトが組み込まれるのは、だいぶあとになってからだ。当時は、目的に合わせたソフトを選び別に購入しなければならない。

1986年７月ごろ、日立2020で使用できるデータベース・ソフトは、それでも数種類はあった。そのうち雑誌などで名前を見たことがあり、かつ使えそうなソフトは、dBASEⅡ、R:BASE4000、5000、TIMSⅡなどと名前からしてアメリカ産のソフトだ。

参考書をいくつか読んだ。素人でも動かせる、つまり特別な命令語などを必要としない対話形式で作業を進めることができるソフトはないか。私は、TIMSⅡ（ティムスⅡ）を選択した。個人で負担できる価格というのも、当然考慮にいれてある。それにしても高価なものだ。割り引きなしの13万８千円だった。高い分、それだけ高機能だろうと無理やり自分を納得させる。使用に耐えるものであれば、正統な価格を支払うのにやぶさかではない。

TIMSⅡを購入するだんになって、またもや困難にぶつかる。日立2020用だと近くの販売店に注文した。しばらくして日立のものは、特別なルートがあるらしく扱わせてくれないと返事があった。販売店で買うことができなければ、どこへ行けばいいのか。勤務先の電算事務室にたのむと、個人で直接注文して欲しいと

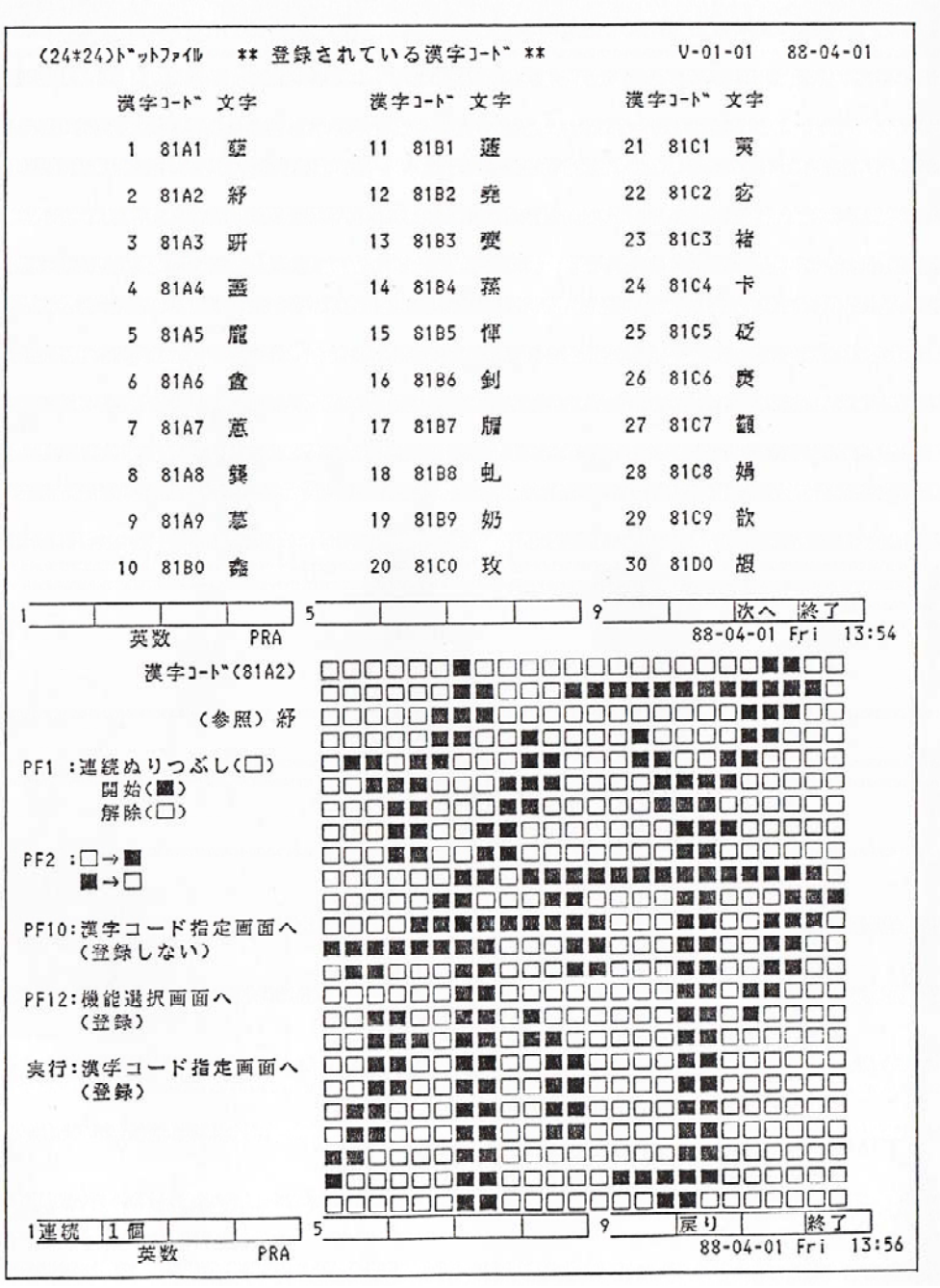


図1　フォント保守で作字　上　作字した漢字の一部　下　作字画面

いわれる。いくらかの支援があるのではないかと日立2020に決めた。しかし、不親切なものだ。なるほど、そういう体制にはなっていないらしい。発売元に電話連絡してようやく入手した。主流の機械をはずれると、これほど不自由を強いられる。いまさらながら個人電脳の世界の厳しさを知る。アゼンとする思いだった。

さて、もうひとつ乗り越えなければならない垣根が存在する。漢字である。

JISでは、第１水準と第２水準を合わせて6,353字の漢字が定められている。漢語文献をあつかうばあい、これでは不足する。清末小説には書かせない「孽」「跰」「紓」などはJISには含まれていないのだ。日本語用に制定したJISだから当然なのだろう。そこに漢語文献を押し込みたい。それなりの工夫が要求される。使用者が特別に作字し、電脳で使えるように登録するのだ。

日立には作字用「フォント保守」というソフトが別売されている。これを使ってまず約400字を作った（図1)。ついでに言うと、1988年現在、エプソンPC-286Vを使って日立2020で作成したデータを再利用しようとしている。ところが、作字用のソフトなどない、という返事だ。これは、困った。トロンTRONを待っていたほうがよかったかなとも思う（結局トロンは見送った)。

5　作業内容の明確化

清末民初小説目録を作る作業にはいる。

どういう目録にしたいのか。これを明確にしておかなければならない。

私自らが作業担当者であり最初の利用者だ。利用する側からいえば、以下の項目は必要となる。

＊作品名に現代漢語音ふり、abc順に配列する

＊作品は、初出の雑誌からのちの単行本、再版、最近の復刻本にいたるまで網羅する

＊発表されたままを記述し、必要に応じて注をつける

＊翻訳作品には、原作者と原作名を可能なかぎり明示する

＊編著訳者名索引が必要。索引のない目録は、学術書籍ではない（注：紙媒体で

の刊行を考えている。のちのPDFファイルをウェブ上に公開するのは別）

＊索引は現代漢語音のabc順配列

＊一目で該当項目を探し当てることができるように総番号をふる

おおまかに言えば以上のようになる。あくまでも研究のための基礎資料になることを目指した。

6　データベースの設計

ここではTIMSⅡ（のち高速化したTIMSⅡ TURBOになる）を使用して説明する。どんなソフトであってもいい。操作に違いがあろうとも基本構造、言葉をかえれば考え方は共通しているはずである。

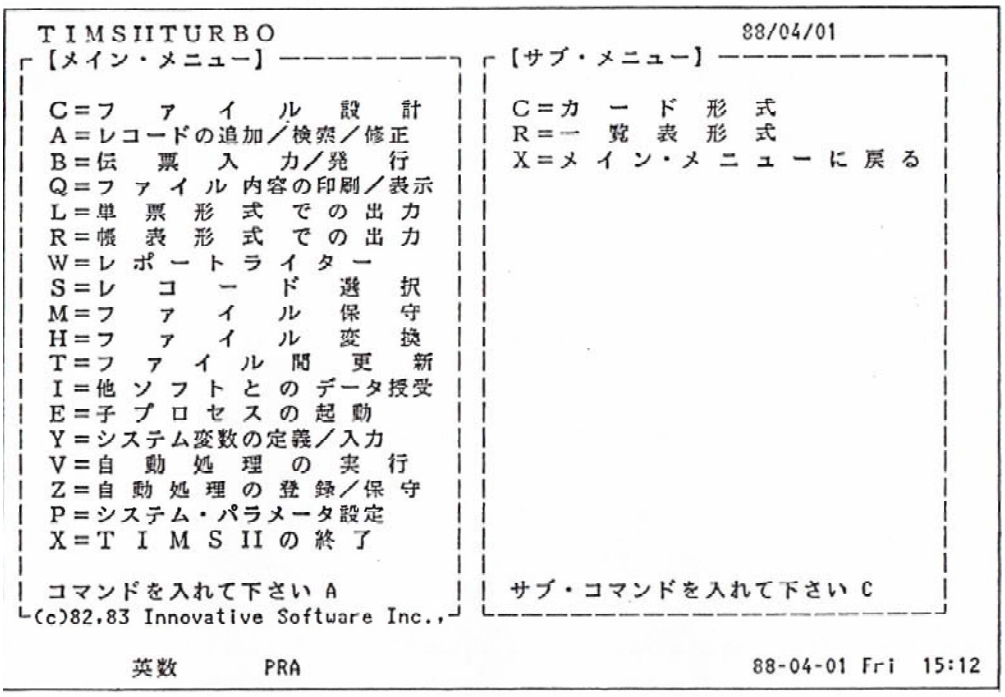


図2 TIMSⅡの初期画面　左のいずれかを選択すると右が開く

初期画面

TIMSⅡの初期画面（図2）は、メイン・メニューとサブ・メニューに分かれる。「Ａ＝レコードの追加／検索／修正」を選べば、サブ・メニューがそれに応じて開き、Ｃ、Ｒ、Ｘのみっつの中からさらに選択する。

ファイル設計

ファイル設計から始まる。

小説目録の最終的な形を想像しながら、まずファイル設計を行なわなければならない。全体の入れ物を作って、ようやく仕事が始まる。使用しながら理解したのは、電脳は、まず何をやらせるか自分が命令しなければ動かない。そういう仕組みになっている。最初からこまかい部分まできっちりと設計するのは、かなりむつかしい。試行錯誤をする必要がある。TIMSⅡは、データを入れてしまうと設計変更ができなくなる。その時は、一般にそういうものだと思っていた。２、３回作り直し図3のようにまとめた。

まず横欄から説明する。

「項目名」は、どういう内容のものを記入するかの目印だ。

「型」は、形式ということ。文字ならA、数値ならNとなる。給料計算するわけではないから、雑誌、単行本の発行年が数字であっても文字型を選択した。数値型に指定すると、発行年など不明のものを空欄にしたくても自動的に「0」を振ってしまう。それを避けたかった。

「長」は、長さ。融通のきかないのがここである。題名が何文字になるかなど書いてみなければわからない。１字だけの題名もあるし、「福爾摩斯最後之奇案」など９字である。また、「政治小説」「艶情小説」といった角書（つのがき）も採録する必要がある。また、別名を併記することもある。それを最初から何文字と決めてしまえ、と要求している。まず、ムッとする。文化系の人間にしてみれば、電脳ともあろうものがもっと柔軟にできないのかと思う。しかし、TIMSⅡはそういう仕様なのだ。ほかのソフトでは厳密に指定する必要のない「可変長型データベース」というのがあるらしい（注：後に利用するソフトの「桐」がそれに該当する）。それに当たらなかった、あるいは事前準備の不足していた自分

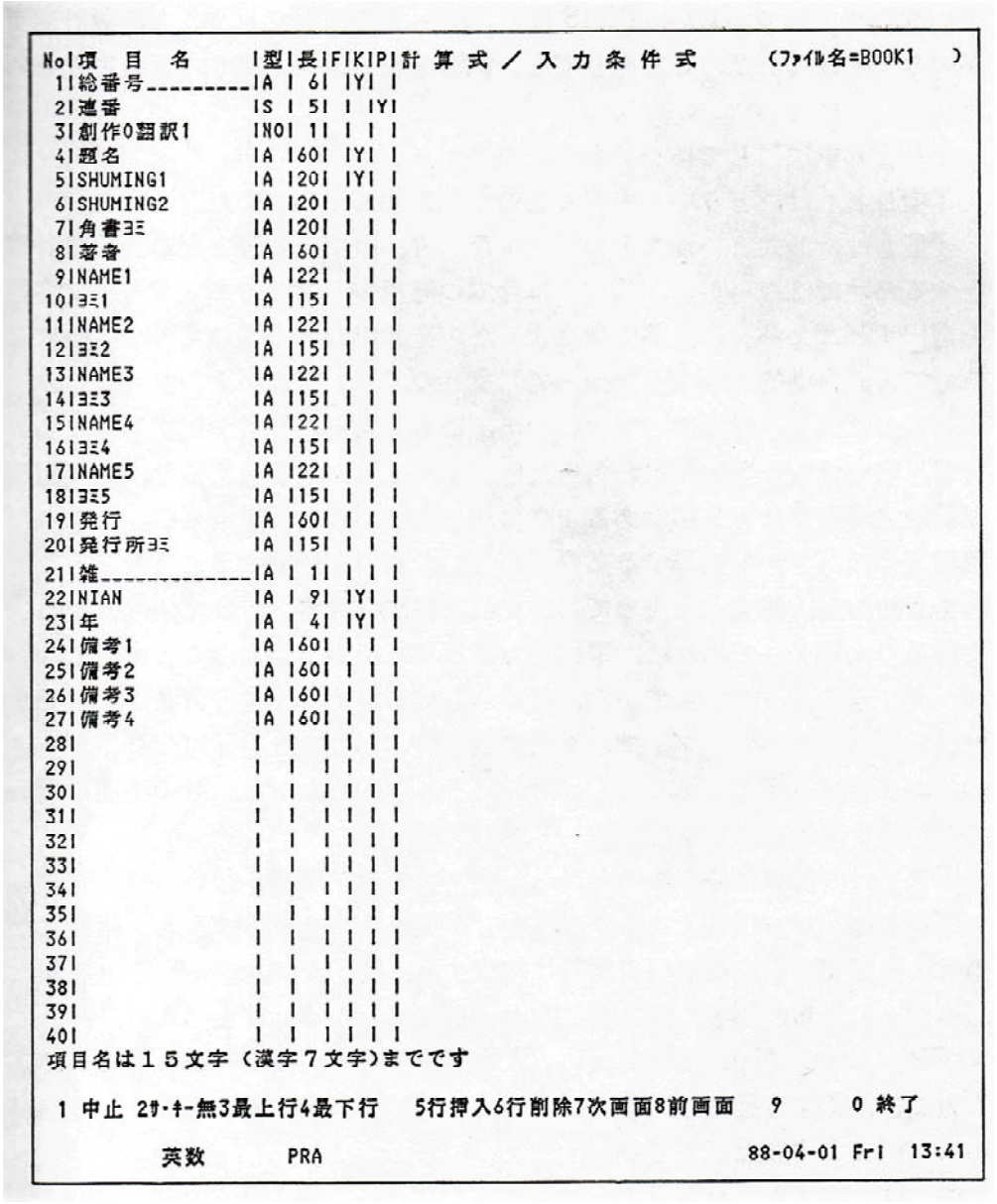


図3 ファイルの設計　計算する必要がないので右側の計算式は空白

の不運を嘆いて作業を続ける。

「F」は、計算に使うものだから、目録には関係がない。

「K」は、キー項目となる。これを「Y（イエス）」にすると指定した項目の検索

用索引を電脳が自動的に作成する。題名をabc順に並べたいのなら、題名の読みをこのキー項目にする。

「P」もこの際、関係がない。入力禁止項目といって鍵盤から入力できなくする指定である。ひとつだけ「Y」になっている。電脳が勝手に入力する「連番」項目だ。

つぎは縦欄を上から見ていこう。

項目１：総番号　著訳編者索引から作品を検索するためのもの。全作品の通し番号でも作品名の冒頭１字の読み、たとえばAならばAのブロック内での通し番号をつける。アルファベットを使うので文字型にしておく。長さは６文字。TIMSⅡで作成できるのは１ファイルで約32,000件だ。

項目２：連番　入力順に電脳が自動的に振るように指定した。全体の規模を知るばあいとか、カードをさかのぼって訂正するときに連番を手がかりに検索できる。キー項目に指定すれば高速で探すことが可能。

項目３：創作0翻訳1　作品には、創作小説と翻訳小説の２種類がある。創作と翻訳を区別しておけば、それぞれの目録を作ることができる。数字の0を入力すると創作作品だけを抽出する。

ちなみに阿英目録は、創作と翻訳にわけている。それを意識して設定した。ただし、紙媒体で刊行したとき、２分すればそれぞれを検索しなければならない。２度手間だ。阿英目録と同じになる。それは避けたい。なぜなら、検索が１度ですむにこしたことはないからだ。数字の0と1は、創作と翻訳に判別できる記号をつける手がかりになる。

項目４：題名　書名、別名、角書、回数などを記入する。TIMSⅡは、１項目当たり最大字数は60だ。60というのはアルファベットでの勘定数。英語を基準に設定している。漢字はアルファベットの２文字分を使う。漢字を使用すると30字が上限になる。

項目５：SHUMING1　題名の漢語音読みである。中国では読みを表現するのにローマ字を使っている。学生が中国語を第２外国語として選択する理由のひとつに、もうローマ字を見たくなかったからというのがある。中国語ならば漢字だからローマ字に悩まされることはない。そう考えるらしい。残念ながら最初に学

ばなくてはならないのは、中国式ローマ字表記である。たとえば、「八十日環遊記」であるならば、BA1SHI2RI4HUAN2YOU2JI4となる。アルファベットにはさまれた数字の1-4は、漢語の声調を表わしている。長さは20だからそれが入力できる上限になる。作品をabc順にならべるキー項目だ。

項目６：SHUMING2　作品に別名があるばあい、その漢語音読みを記入する。

項目７：角書ヨミ　ローマ字で入力。角書で作品内容が表わされている。これを集計すれば、当時の小説界の傾向がわかるかもしれない。そう予想して設けた。

項目８：著者　現代ならば著者はひとり、翻訳でも訳者が１名というのが普通だろう。ところが、清末の中国では、それほど簡単ではない。まず小説を発表するのに本名を使うことは、ほとんどなかった。筆名が複数あったりする。翻訳ならば、原作者の漢訳がバラバラで、ギョーテを笑うことはできない。おまけに訳者がひとりとは限らない。共訳もあれば、口訳を筆述したものものある。さらに、翻訳の経路が複雑だ。欧米の作品を日本語翻訳経由で漢訳する。三重訳ということになる。欧米原作→日本語訳→漢語翻訳のそれぞれを記入する。それで最大の60文字を指定した。ひとことつけ加える。当時の翻訳作品を見れば欧米原作、日本語訳を明記する作品は多くない。翻訳でありながら創作と見間違う作品も多い。そこを明らかにするのも研究である。

著者の項目８に名前を羅列するだけでは、著訳編者索引をつくることができない。そこで索引用に次の項目９-18がある。

項目９：NAME1　ここには漢字（中国人、日本人用）かローマ字（欧米人用）を入力する。22文字（漢字11文字）と多くとった。筆名が長い、あるいは欧米人名を漢訳すると普通は３文字では収まらないからだ。実際に入力してみると、漢字10文字のものがあった。筆名で「二十世紀小新民愛東氏」など。

項目10：ヨミ1　漢字の現代漢語音を入れる。題名と同じ。声調をアラビア数字で表わせば、著訳編者索引は同一漢字がほぼ同じ場所に集まる。日本人であろうとも漢字で表記してあるかぎり、すべて漢語音で読む。私が編集刊行しようとしているのは、専門書である。利用者は、中国文学研究者、大学院生クラスであり現代漢語を習得している人たちに限られる。さらには、中国を含んだ外国の研究者の利用も想定している。日本語の読みを知らなくても検索できるように配慮

した。

NAMEとヨミは５人分を設定した。前述したように著者はひとりとは限らない。訳者、さらに原著者が含まれるとなると５人分ではおさまりきれなくなることもある。その時は、NAMEとヨミの箇所だけのファイルを別に作成する。索引を作るとき、NAMEとヨミに項目１の総番号を対応させてこの部分のみを引き抜く。さらに別ファイルに連結し索引ファイルとして新規に独立させるのだ。カードを使うとすると、人物別に１枚ずつ転写するのがわずらわしい。電脳の便利な点は、一度書き込んだデータを再利用できるところだ。そのためには、あらかじめそうできるように設計する必要がある。

項目19：発行　雑誌名の巻号、発行年、単行本ならば出版社、発行年を入れる。清末民初でややこしいのは、旧暦と新暦の混用があることだ。重要な問題だが、これを意識する研究者は多くない。

1911年の辛亥革命後、中華民国が成立してから新暦の使用が始まった。1912年１月１日である。旧暦でいえば辛亥十一月十三日だ。

清末に発行された雑誌は、当然ながら旧暦を使用する。ただし、民国になってからも旧暦を使用する雑誌もある。また、発行表示が月止まりで日にちまで明示していないものが多い。実際に雑誌を手にすれば、日本と異なることがすぐにわかる。月止まりでは正確な新暦換算ができない。なにしろ旧暦月の途中で新暦月に変わることなど普通のことだからだ。正確さを求めるならば、もとのままに表記するしかない。

実物を見ることができるものは、まだいい。中国で編集刊行された書目を２次資料として利用するばあい、旧暦と新暦を混用するものを普通に見かける。注意を要する。

項目20：発行所ヨミ　単行本のばあい、出版社の漢語音読みを記入する。出版社別発行書目をつくることができる。また、発行年と組み合わせて特定出版社の発行点数を時系列で追跡することが可能となる。将来の仕事を予想した設定だ。

項目21：雑　雑誌の略だ。雑誌に掲載された作品に印をつける。そうすれば雑誌のみを抽出することができる。ただし、現在、入力はしていない。

項目22：NIAN　「年」の漢語読みがnianだ。発行年月日を入れる。キー項目

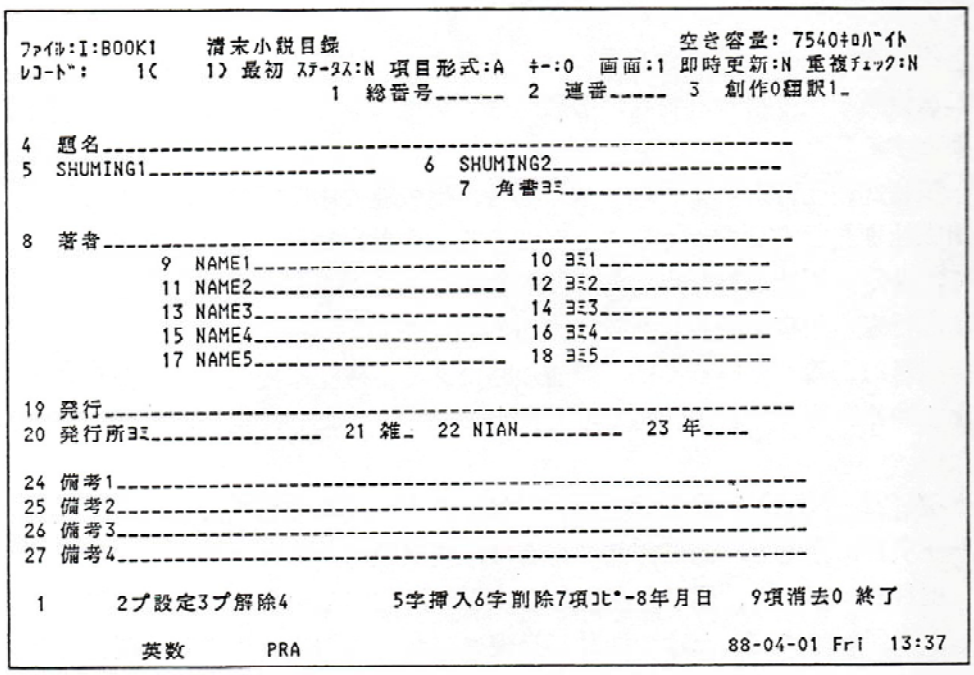


図4 画面設計　下線部に入力する

図5 入力画面　漢字、ローマ字が混在する

に指定し、同名作品のばあいは発表順にならべる基準とする。

項目23：年　同じく発行年をいう。月日を省略した年のみにした。同一年にどれだけの作品が発表されたかを知るためのキー項目となる。発行数の推移をグラフにするとき、引き抜いて基礎資料にすることができる。

項目24-27：備考　たとえば翻訳作品について、のちの研究によって不明であった原作、原作者が判明することがある。それをこの備考欄に注記する。60文字が４行で合計240文字、すなわち漢字で120文字である。備考欄として増やすこともできる。しかし、データ入力を容易にするために画面を常に一覧しておきたい。画面設計のつごうで４行におさえた。

以上、各項目を合計すると706文字＝漢字353文字である。くりかえせば１枚について353文字を記入することのできる電子カードの書式ができた。

これでデータを入力すればいい。もうひとつ、TIMSⅡでも入力画面を自由に設計することができる。

画面設計

画面構成は、こうでなければならないという基準はない。好みの問題だ。自分が入力しやすければいい。私は図4のようにした。データを入力した状態が図5である。図書カードを考えている。

7　データベースの構築

あとはひたすらデータを入力するだけ。漢語音をあつかい外字を作成し、注釈をつける。日立2020が一般に普及していないため、数人で作業を分担することはできなかった。ひとりだけの入力作業になる。協力者には、図書カードでの手伝いをお願いした。

自分のことは自分で、というのが原則だ。研究所で大型電脳を使い、専用のプログラムで動くようになっていて自分はアイデアを出すだけ、実際に入力するのは専門の人にまかせる、などという状況ははじめから想定していない。また、漢語、日本語、部分的に英語を使用する複雑な入力作業を引き受けてくれる専門業

者などいるわけがない。仮にいるとしても、入力代行にどれくらいの費用がかかるだろうか。試算してみよう。1988年当時、聞いたところ住所録などの入力代行は、一般に１文字１円が相場だそうだ。私が直面している小説総目録は、専門知識が必要なだけ特別になる。少なくとも１文字２円とする。電子カードは１枚が約350字で700円となる。全部を文字で埋めるわけではない。１万枚だから上限は700万円はかかる。自分で入力することに当然おちつく。自分の研究に役立つ作業だから苦にはならない。

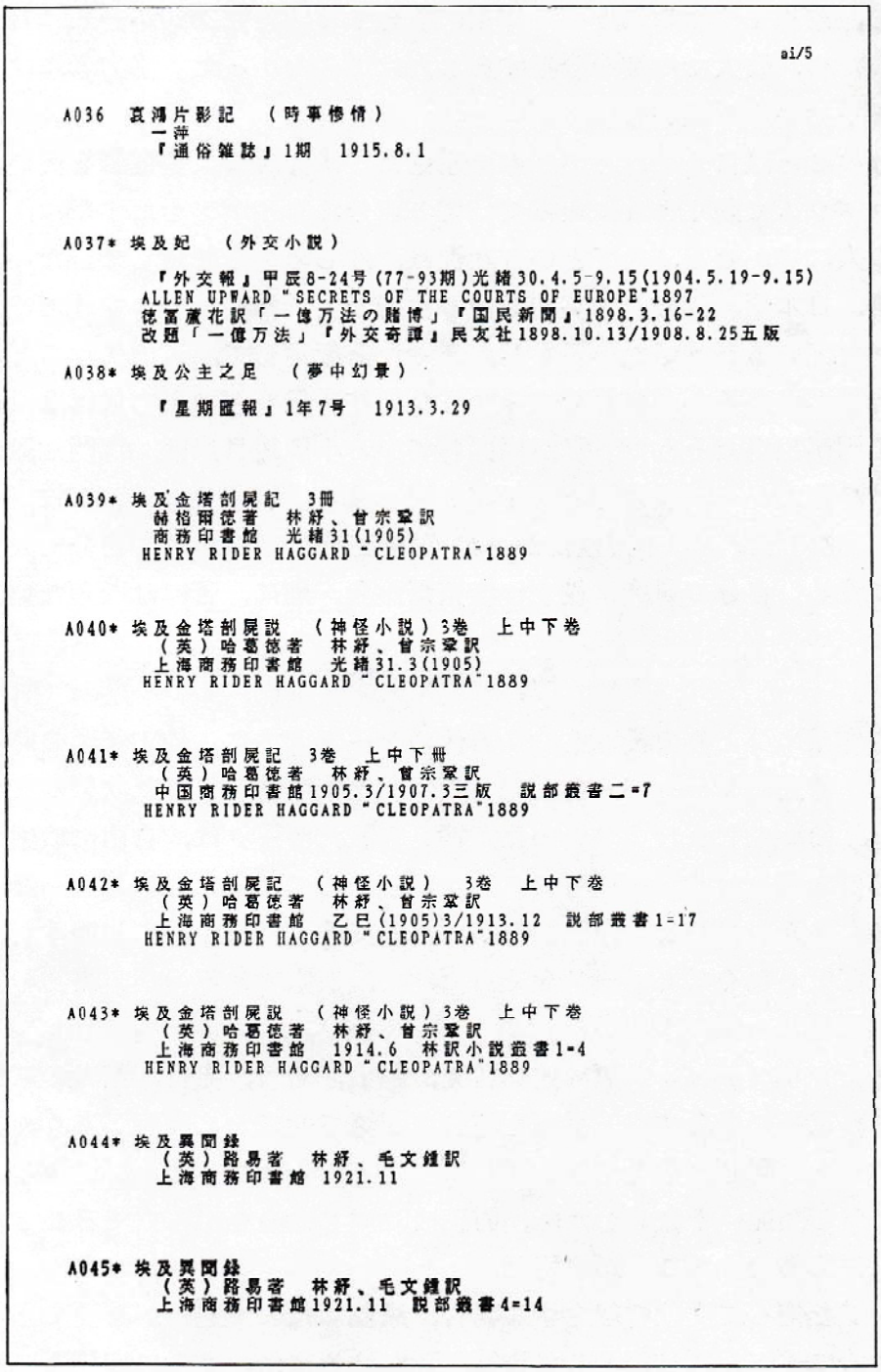
8　書籍の形に

入力作業はひとりだから時間がかかった。最終的には、全部のデータ入力に約１年半の時間を投入した。

普通のデータベースというのは、電脳に蓄えた状態のままをいうのかもしれない。いったん収納されたデータは、自由に検索できるし必要な部分だけ印刷することもできる。データをいろいろに組み合わせるおもしろさもある。ただし、今回の作業は最終的に書籍の形にするという目的がある（注：1980年代は紙媒体で刊行するほかに選択肢はなかった。インターネットが普及するのはもう少しあとだ。清末小説研究会のウェブサイトを開設したのは1996年だった）。ほかの研究者にもデータを提供して情報を共有するのがねらいだ。研究の基礎資料となるにちがいない。書籍の形にしておけば、電気がなくてもページをくるだけで検索ができる。それが書物の強みだ。利用範囲が、一気にひろがる。

作品をアルファベット順に並べ替え、題名、著者、発行、備考のみを印字するよう電脳に命令する。手順を電脳に記憶させておく機能がある。これを利用すれば、同じ作業をくりかえし行なうことができる。印刷してから間違いを発見したとき、訂正後にふたたび印刷することが可能だ。

図書カードを使って文献整理をするばあい、原稿に書き写す過程が必要であることは述べた。目録として書籍の形にする従来からの方法は、原稿を印刷所にまわし植字されたものを校正する。ゲラ刷りを印刷所と数回やりとりして校了。印刷、製本という段取りになる。植字の段階で誤植がでる。校正で見落とし誤りが



ai/5

A036 真鴻片影記 （時事慘情）
一萍
『通俗雑誌』1期 1915.8.1

A037* 埃及妃 （外交小説）
『外交報』甲辰8-24号(77-93期)光緒30.4.5-9.15(1904.5.19-9.15)
ALLEN UPWARD "SECRETS OF THE COURTS OF EUROPE"1897
徳富蘆花訳「一億万法の賭博」『国民新聞』1898.3.16-22
改題「一億万法」『外交奇譚』民友社1898.10.13/1908.8.25五版

A038* 埃及公主之足 （夢中幻景）
『星期匯報』1年7号 1913.3.29

A039* 埃及金塔剖屍記 3冊
赫格爾徳著 林紓、曾宗鞏訳
商務印書館 光緒31(1905)
HENRY RIDER HAGGARD "CLEOPATRA"1889

A040* 埃及金塔剖屍説 （神怪小説）3巻 上中下巻
（英）哈葛徳著 林紓、曾宗鞏訳
上海商務印書館 光緒31.3(1905)
HENRY RIDER HAGGARD "CLEOPATRA"1889

A041* 埃及金塔剖屍記 3巻 上中下冊
（英）哈葛徳著 林紓、曾宗鞏訳
中国商務印書館1905.3/1907.3三版 説部叢書二=7
HENRY RIDER HAGGARD "CLEOPATRA"1889

A042* 埃及金塔剖屍記 （神怪小説） 3巻 上中下巻
（英）哈葛徳著 林紓、曾宗鞏訳
上海商務印書館 乙巳(1905)3/1913.12 説部叢書1=17
HENRY RIDER HAGGARD "CLEOPATRA"1889

A043* 埃及金塔剖屍説 （神怪小説）3巻 上中下巻
（英）哈葛徳著 林紓、曾宗鞏訳
上海商務印書館 1914.6 林訳小説叢書1=4
HENRY RIDER HAGGARD "CLEOPATRA"1889

A044* 埃及異聞録
（英）路易著 林紓、毛文鐘訳
上海商務印書館 1921.11

A045* 埃及異聞録
（英）路易著 林紓、毛文鐘訳
上海商務印書館1921.11 説部叢書4=14

図6 印字例 『清末民初小説目録』 同一小説でも異版を収録するから書名がならぶ

そのまま残る。加筆、削除をするたびに印刷費用が加算される。

電脳に入力されたデータは、いってみれば電子カードである。しかも、原稿用紙を兼ねているのが便利だ。電子カードに書き込んだと同時に、原稿用紙にも記入されるという意味。１枚350文字で約１万枚の電子カードは、400字詰め原稿用紙に換算すると約9,100枚になる。よく書いたものだと自分で思う。

単票に印字したものを版下として使う。通しページと見出しをつける（図6)。こうすれば、印刷所での植字とゲラ刷りの校正工程を省略することができる。索引も同時に作成した。これが『清末民初小説目録』(中国文芸研究会1988.3.1*[1]）約1,200ページである。

9　今後解決すべき問題点

現在、増補改訂作業にはいっている。

技術上の問題点として次の２点が今後の課題として残る。

１　印刷書式
２　印字方法

印刷書式とは、紙媒体に印刷するばあいに設定するもろもろの条件である。

用紙の大きさ、A5にするかそれともB5か。字間、行間、余白を何ミリとるか、などだ。読みやすくするためにはそれなりの設定が必要だ。

TIMSⅡには、残念ながら書式設定の機能がない（注：今から思えば当然であった。データの整理が目的だから書式設定は不要なのだ)。問い合わせると１インチ当たり６行が標準だといいはる。英語のばあいは標準かもしれないが、漢字をあつかう日本では違ってもいいのではないか。私は単純にそう思う。どうやら電脳の生まれたいきさつに関係するらしい。英語圏で生まれ育った機械をむりやり漢字圏で使用する。そこに生じる不具合だろうか。

印字方法は、プリンタの違いである。

私が使用したドットインパクト方式では、印字頭のドットが黒色インクリボン

を打ち続ける。維持費は安くなるかもしれない。だが、徐々にインクが薄くなる。それでは印刷用版下にはできない。わざわざ熱転写用のプリンタを買うこともできない。リボンを頻繁に取りかえることで切り抜けた。しかし、印字結果にはいまだに満足がいかない。

レーザプリンタを使うことができれば、かなり思い通りの仕上がりになるだろう。勤務先のレーザプリンタ（注：当時は巨大な装置で部屋のなかに鎮座していた）で印刷できそうだ。そちらに希望をつないでいる。ただし、聞いてみればこちらでも印刷書式が設定できない。編集も不可能だという電算事務室のはなしだ。

ひとつの便法として次のようなことを考えている。

TIMS II のデータをフロッピーディスクに移す。→エプソンPC-286Vで動かしているワープロソフト「新松」でデータを読み込む。→空き行を削除するなどの編集を行なう。→勤務先のレーザプリンタで印刷する。

400字の外字が垣根となってこんなまわりくどい方法を取らなくてはならないのか、といささか気がすすまない。

10　おわりに——電脳の可能性

個人電脳と市販のソフトを利用して使用にたえる目録を作ることは、大きな困難がともなう。しかし、不可能ではない。根気さえあれば、一応のものはできるだろう。

個人電脳の可能性をひとつあげるとすれば、専門研究の出版を比較的容易にするかもしれないということだ。いままでは、主に費用の点で埋もれさせるしかなかった研究成果、研究資料が、研究者自身が電脳を利用することでこの世にでてくる可能性が生まれる。個人電脳は、個人印刷機をも兼ねているからだ（注：後日のインターネットの普及は問題を大きく解決することになった）。

『清末民初小説目録』がよい例である。印刷数わずかに200部だ。1,200ページのものを原稿から植字し、ゲラ刷りをやりとりする普通のやり方だと少部数印刷刊行は確実に赤字がでる。採算のとれない出版物を刊行する出版社があるとは考えられない。

個人電脳は、専門書の少部数刊行を可能にする道具ともなるかもしれないのだ。

【注】

1）『清末民初小説目録』は1988年の初版以来、以下のように改版した。

樽本照雄編『新編清末民初小説目録』[第２版]清末小説研究会1997.10.10／樽目録第２版

樽本照雄編、賀偉訳『新編増補清末民初小説目録』[第３版]済南・斉魯書社2002.4／樽目録第３版

樽本照雄編『清末民初小説目録　第４版』清末小説研究会2011.3.31　電字版（CD-ROM　非売品）／樽目録第４版

樽本照雄編『清末民初小説目録　第５版』清末小説研究会2013.4.15　電字版（ウェブ公開　非売品）／樽目録第５版

樽本照雄編『清末民初小説目録　第６版』清末小説研究会2014.3.31　電字版（ウェブ公開　非売品）／樽目録第６版

樽本照雄編『清末民初小説目録Ｘ』清末小説研究会2015.10.10　電字版（ウェブ公開　非売品）／樽目録Ｘ

清末民初小説の種類

「その１　準備篇」は『大阪経大論集』第42巻第5号（通巻第205号　1992.3.31）に掲載。清末民初にはおびただしい小説が発行されたのは事実だ。しかし、その数量を数字で示した研究者はいない。電脳を使用して小説の種類を算出する。その１は、電脳で利用できるデータを抽出するための作業手順をのべる。

「その２　実践篇」は『大阪経大論集』第42巻第6号（通巻第206号　1992.4.19）に掲載。清末民初に発表された小説の数を同じく電脳を使用して実際に算出する。グラフ化してみると、1911年辛亥革命を谷としている。その形態は「ふたこぶラクダ」に似る。ご注意をひとつ。本稿で示した数字は、『清末民初小説目録』(1988）にもとづいている。その後、目録は増補を続けているから数字はもはや同じではない。1991年４月時点でのデータによる仮説であると重ねていう。その後、増補作業を続けて数字は増加している。だが、刊行数推移全体の傾向が「ふたこぶラクダ」であることについての変更はない。数回にわたってグラフを作り直しての結論だ。次を参照のこと。樽本「清末民初の翻訳小説」『清末翻訳小説論集（増補版)』2017所収

その１　準備篇

本稿の目的

本稿の目的は、ふたつある。一つは、清末から民初にかけての時期に発表された小説の種類はいくつあるのか、比較的こまかな数字を仮説として提出すること。もうひとつは、仮説を出す過程で必要とした個人電脳の操作――主として、市販の異なるソフトウェア間におけるデータの授受と整理について具体例を示すこと

である。

1991年３月、北京の大学に勤務するＡ氏（本名を出してもいいようなものの、何があるかわからないのが現代中国の現状らしいから、名前は伏せる）より手紙があった。清末小説研究会の編集した『清末民初小説目録』（中国文芸研究会発行1988.3.1）には、同一書を数えないとすると、結局のところいくつの種類を収録しているのか、具体的な数字を教えろ、と問われる。

以前、阿英の「晩清小説目」(『晩清戯曲小説目』増補版　上海・古典文学出版社1957.9）にもとづいて清末小説の発行推移を追跡したことがある*1。当時は、カードを利用して整理した。作品１種類につき１枚のカードに記入し、枚数を数え、折れ線グラフを作成して、その発行情況の特徴を述べたのだ。すべて手作業である。

当時の小説を量的に把握しようという試みはめずらしかったようで、１、２の論文にグラフが引用された。ただし、これは1911年までの変遷しか反映していない。よった阿英の目録が、辛亥革命を区切りとしているからだ。「晩清小説目」と題するゆえんである。（注：このグラフは、あくまでも阿英目録にもとづいているところに限界がある。後にわかったのは、阿英目録に収録されていない作品が多く存在していた事実だ）

阿英の目録にしてから今から言えば不満のあるものだ。作品の初出である雑誌を採録していたりいなかったり。単行本も複数収録したりそうでなかったり。統一した方針があるようなないような、不確実さを露呈している。なによりも、新聞からの採取が絶対的に不足している。しかし、長い間、中国では、同時に日本でも清末小説といえば阿英の目録に多くを依拠しなければならない情況が続いていた。研究が進まない理由は、清末小説の資料は散逸しており図書館にも所蔵されていない、といいわけされていた。

1985年、清末小説目録を日本で作成することにした。阿英「晩清小説目」より数えて約30年後になる。入手できる限りの資料をもとに、カード採取作業を数人で分担する。作品の収録対象範囲も、中華民国の1918年前後まで広げた。雑誌の初出から現在まで再版、復刻、影印されたものも採取する。つまり、私たちが必要としたのは、ひとことでいえば清末民初小説についての履歴書であった。最終

的に、個人電脳に入力し（すなわち電脳化資料庫である）、整理したものが上述の『清末民初小説目録』だ。出版した時点で、創作、翻訳あわせて約１万件にのぼった*2。

清末から民初までをカバーする目録は、1991年現在にいたるまで、中国においても作成されていない*3。この『清末民初小説目録』をもとにして、発行点数の変遷を追った。当時の中国では、最初、小説雑誌に連載したものが後に単行本にされる、という形をとることが多い。雑誌に発表されたまま、単行本にはならなかったものも数知れずある。同一書も発行年が異なればそれを数えた発行点数の変遷だった*4。

北京のＡ氏に、清末民初にどれくらいの種類の小説が発表されたのか、と問われても、すぐに答えることはできない。なぜならば、清末民初小説電脳化資料庫は、種類のみを数えるようには最初から設計されていないからだ。

使用している電脳化資料庫ソフトは、TIMSⅡ（ティムス・ツー）という。この２、３年、改版されておらず、ほかと比較するとやや柔軟性にとぼしいソフトとなっている。しかも、元データとして重要だから、TIMSⅡで直接細工をしたくない。万一、不都合が起こってデータ消滅ということになれば、ここ数年間の努力が無に帰する（『清末民初小説目録』を作成した日立2020は、目録出版後いつものようにデータをバックアップしている最中に、突然、物理的に自己崩壊した。突然死である。データは、消えた。わずか３年間の寿命だった*5。現在は、エプソンが故障知らずで快適に作動している）。「危険」をおかすことはできない。

そこで、実際の作業は、ソフトの桐第３版を使って行なうことにする。桐第３版は、選択したレコードから別のファイルを簡単に作成できるなど使い勝手がよいのだ。TIMSⅡから桐第３版にデータを移動し（後述）、これを、翻訳、創作に分割する。重複する作品名を排除し、年代を区切り、一応の数字を出した。北京のＡ氏に、「おおよそ」との限定つきで回答したというわけである。

あらためて本格的に集計をとりなおすことにする。その前に、資料についての前提を説明し、編集方針を決めなければならない。

編集の方針

いきなり実状説明になる。清末から民初にかけて発表されたすべての作品を網羅する目録を作成することなど、まずは、不可能であろう。理由を述べる。

○資料の方面から

当時発表された小説作品は、なにも小説専門雑誌ばかりとは限らない。一般雑誌に発表されることもあるし、新聞もある。まず、発表媒体が多様だ。さらに、印刷の事情がある。清末民初を通じて印刷の中心地は、終始、上海であった。これにくわえて清末時期では日本が、民初時期には日本に取ってかわり北京が印刷地として擡頭してくる*6。上海、日本、北京で発行された雑誌・新聞・単行本のすべてを見ることは、常識からいって、できない。

さらに中国の図書館でも、清末民初の小説を所蔵する所は多くない。

具体例をあげよう。前出『中国通俗小説総目提要』の756頁から1258頁までを見る。阿英「晩清小説目」には掲載された作品であっても、提要では未見のものが77種類にのぼる。専門家を動員し、欧陽健、蕭相愷のふたりがほとんど中国全土の図書館を調査しているにもかかわらずである（「編輯説明」5頁）。中国においても、原書を確認することがすでにむつかしくなっていることがわかるのだ。まして、日本の図書館で清末民初小説をさがすことが容易でないことは、言う必要はないだろう。実状説明のひとつだ。

阿英の「晩清小説目」以降、いくつかの補遺が発表されてはいるが、中国において全面的に改訂した目録は出版されなかった。原本を見ることが困難（原本が所蔵されていない、また、所蔵されていても閲覧できるとは限らない）というのが、理由のひとつだと推察する。

そういう現状がありながら、外国である日本で、あえて目録を作成しようというのだ。大胆不敵といわれてもしかたがない。しかし、研究に必要なものは、自分で作らざるをえない。他人の努力を期待するほうが間違っている。

原本を目にすることがむつかしい。となると、次善の策は、すでに発表された書目をもとにして編集しなおすことである。中国では、こういう編集ものすらないのだから、日本で作る価値はある。これがわたしたちの『清末民初小説目録』がある理由だ。

書目という２次資料からも収録したわけだから、もとになった目録の記述が正しいかどうかが最後まで問題となる。実状説明のふたつだ。

ついでにもうひとつ。『清末民初小説目録』は、現在も増補訂正作業を継続している。目にした論文に版本が記述されていれば目録と照合してみる。目録に採録してなければそれを取りこむ。増補訂正作業は、終点というものがない。以下の数字は、あくまでも1991年４月現在のものであることをおことわりしておく。

資料は万全というわけにいかない、という説明をした。もう少し具体的な問題に立ち入っていこう。

〇認定の方面から

『清末民初小説目録』の基本編集方針は、初出から採録するというものだ。原史料を見ることができれば、雑誌そのものから採取する。できなければ雑誌目録も活用する。

種類数をもとめようとすると、発生するのが、

１．創作か翻訳かわからない？
２．同一作品名で作者名が異なる場合はどうする？
３．作品集、合冊本はどう数える？

などの問題だ。単に発行点数をあつかっていたこれまでとは異なる側面が浮かび上がってくる。

１の例として、たとえば、阿英「晩清小説目」翻訳之部139頁に、

航海奇談　范騰宵訳。宣統元年（一九〇九）海軍本。不完。

と見える作品がある。しかし、上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』第２巻下（上海人民出版社1982.2。2664-2665頁）に収録されている雑誌『海軍』を見ると、

第１期（宣統元年四月十四日）
冒険小説　航海奇譚（未完）　　范騰宵
第２期（宣統元年十月十九日）
冒険小説　航海奇譚（続）　　范騰宵

とあるだけで、これが翻訳かどうかわからない。

同様の例として、阿英「晩清小説目」翻訳之部126頁の、「蒋景緘著『金篛葉』光緒戊申（一九〇八）小説林社刊」がある。阿英は、翻訳に分類しているが、これは「小説林小本小説」叢書の一種らしい。翻訳と創作が混在していて18種類ある。創作のような気もする。これらはいずれも、今、仮に創作としてあつかっておく。

すこし横道にそれる。創作、翻訳と分けているのは、阿英のやり方にならっているのだが、考えてみれば、この区別もいいかげんなものだ。阿英がいいかげんという意味ではない。当時の小説を、はたして創作と翻訳にきれいに二分できるのかという疑問があるのだ。翻訳といっても、外国の作品を忠実に中国語化するものから、もとの作品の姿をとどめないくらいに改作するものまで、幅はひろいのではないか。日本では、翻訳と創作のあいだに「翻案」*7とよんでいるものを置いている。清末民初に「翻案」という分野が独立して成立するのかどうか、わからない。翻訳－「翻案」－創作と三分できるだろうか。三者の境目は、はなはだあいまいだ。個々の作品についての吟味が必要であることはいうまでもないが、私としては、「翻案」は翻訳に含めてもいいのではないかと考える。「翻案」を灰色とすれば、翻訳とはその灰色部分を含んだ、相当、範囲のひろいものとなるだろう。

さらに創作といいながら、翻訳であることを隠している作品もあるというから、その区別、あるいは判定は、むつかしくなる。

認定に困難がともなうというのは、単行本の場合も同じである。

２の同一作品名で著者名が異なる例をあげる。

新官場風流案　14回　1冊　　天夢　　小説進歩社　宣統1(1909)
新官場風流案　二集　10回　1冊　瘦腰生　小説進歩社　宣統1.4(1909)

同じ小説進歩社で、発行もともに1909年だ。ところが、回数が14回と10回で違うし、著者が天夢と瘦腰生とで異なる。同一書名で、一集、二集と別人が書きついだものかとも思う。原史料があれば、本文を見て判別をつけることができようが、ないものはしかたがない。別の作品としてあつかうことにする。

次のような例はどうか。

新官場現形記 初二集 32回 4冊
　杭州老耘編　彪蒙書室　　光緒33(1907)
新官場現形記（絵図） 初集8回2冊 二集4冊
　不題撰人　　上海改良小説社　光緒34(1908)
　　二集宣統2(1910)
新官場現形記（絵図） 12回
　延陵隠叟　　文明小説社　　宣統1(1909)/宣統2(1910)
新官場現形記 12回
　詠秋樵子　　文明小説社　　宣統1(1909)
新官場現形記 三集 15回 2冊
　南武野蛮続　小説進歩社　　宣統2(1910)
新官場現形記 二集
　心冷血熱人編 改良小説社　　宣統2.2(1910)
新官場現形記
　詹言　　『蜀風報』1-9(3年6期)期1913.11.15-1914.4.1
新官場現形記（社会小説）
　超然　　『遊戯雑誌』4期　(1913?-15?)

よくもまあ同じ書名の本が出たものだと感心する。著者の違うところを見ると同名の叢書で内容は別であるかもしれない、と想像できる。しかし、もしかする

と筆名を変えているだけの同一人物という可能性もある。速断できない。疑問を残しながら、著者が違えば別々の作品とする。

最後に、作品集、合冊本をどのように考えるのか。

たとえば次の作品集だ。

短篇小説合璧　時事報館　宣統1(1909)
（英）可寧屠児著、雄今訳「大発財」，陳聴彝「玫瑰賊」，亜義訳「赤珠」，新吾郎「珠娘艶史」

収録されている作品（「大発財」「玫瑰賊」など）が明記されている。これは作品ごとにバラして考える。ただし、はじめ雑誌などで発表されたものを収録したのだろうから、それぞれの初出が明らかになっていれば、初出の方でも採取しているはずだ。そうなると作品名として重複してしまう。重複するものは、のちに、ひとつの作品に統一する。初出が不明の作品は、こちらの作品集のものを数えることにする。発行年月がズレてしまい、最善の方法ということはできないが、やむをえない。

『神州短篇小説集』（刊年不明）、『趼人短篇九種』（『月月小説』に掲載したもの。1906-1908。注：阿英が便宜的に名づけた）、『短篇小説十五種』（上海群学社1910）、『国魂小説集』（国魂叢編社。刊年不明）なども同様のあつかいをする。

また、『短篇小説十様錦』『短篇小説雑曲』（ともに上海群学社。刊年不明）は、収録作品は不明である。作品集として１種類に数えておく。ということになれば、前出『短篇小説合璧』などの書物自体も、勘定にはいることになる。つまり、作品集、合冊本も種類に数えることにする。

以上をまとめる。

１．創作か翻訳かわからないものも、どちらかに、一応、分類してしまう。
２．同一作品名で作者名が異なる場合は、別作品としてあつかう。
３．作品集、合冊本は、バラせるものはバラして１作品と数え、作品集、合冊本も１種類に数える。

以上の編集方針で具体的な作業にはいることにしよう。

その２　実践篇

作業と集計

○作業の実際

いうまでもないことだが、個人電脳を使う場合の利点のひとつは、一度入力したデータは、再利用できることだ。原稿用紙の１枚目から書き直す、ノリとハサミで切り貼りする、ペンダコが痛む、などなどにもう一度かえろうとは金輪際おもわない。１万枚をこえるカードを利用して何かやろうという気になるのは、これが電子化されたデータだからだ。

○TIMSⅡから桐第３版へ

ふたつ以上のアプリケーション・ソフトで受け渡しできるデータは、MS-DOSのテキストファイルのみであるらしい。ここらあたり、電脳の仕組みに素人であるから自信がない。ともかく、TIMSⅡで蓄えたデータを桐第３版で読むことのできる形式に変換する必要がある。

○TIMSⅡでデータを書き出す

TIMSⅡには、「他ソフトとのデータ授受」という選択肢がある。これで扱うことができるのは、説明書によると、CSV形式、固定長形式、SYLK形式などとなっている。電脳に詳しくない素人が困惑するのが、このようなわけのわからない固有名詞だ。説明書を書いた人は、そのことに気がついていない。気がついているのかもしれないが、わかりやすく書く気がないらしい。

とりあえず、CSV形式というのを選択して「,」区切りのテキストファイルに書き出す。

TIMSⅡで作成した清末民初小説目録のデータは、ますます増え、1991年４月の時点で約7.98MB（メガバイト）にふくれあがっている。この約８MBのデータは、

過去５年間の涙はないが汗と怒りの蓄積といえる。８MBのデータを扱うには、ハードディスクが不可欠となる。現在、80MBを40MB×40MBに分けたものと、100MBを40MB×60MBに割ったものを使用している。もとのデータからいくつかのデータを引き抜き、別のファイルを複数作成することになっても、これだけあれば、当面、不足はないだろう。

移動（この場合は複写というほうが適切な表現かと思う）に必要なデータ項目を桐第３版で設計しておく。TIMSⅡでは、著者・訳者索引を作成するための項目を設定している。作品の種類数を集計するのには、必要でない項目もある。それらは省いて桐第３版で再設計をするのだ。複写する項目は、以下のものである。

総番号――ABCを頭文字に連番を振る。元データを検索するときのキー項目となる。

連番――入力時に自動的に振られる。目録出版以後に増補したデータは、この連番を手掛かりに検索する。

創作翻訳――創作は「0」、翻訳は「1」とする。それぞれで集計することを考えている。

題名――作品名に角書、回数など。

SHUMING――作品名の中国語音をローマ字で表示。四声は、数字で表わす。書名の中国語音でABC順に配列しなおすことを考慮にいれている。また、作品名の重複を検出する場合、ここがキー項目となる。

著者――創作ならば原作者、評点者など。翻訳ならば原作者、訳者など。同一書名の場合、著者が同じか異なるかで、作品の異同を判断する。

発行――初出の雑誌名、巻号数、発行年月日。単行本も同じ。

NIAN――発行年月日。同一書名の場合、この発行年月日順に配列することを考慮する。

年――上のNIANと同様なのだが、ここでは月日を省略する。年別に発行件数などを集計するためのもの。NIAN項目でもできなくはないが、４桁に統一しておけば、集計に便利だろうという考えからこうしている。

備考――注釈に使う。TIMSⅡでは、備考欄は４項目分を取っている。それ

にあわせて桐第３版でも、一応、４項目分を設定する。問題となるのが、この備考欄である（後述）。

設計を終わり、桐第３版用のファイル名（QMBOOK.TBL）をつけておく。

○桐第３版でデータを読み込む

桐第３版を起動し、あらかじめ設計したファイル（QMBOOK.TBL）を指定する。「読み込み」を選択すると、窓が開いて、表、テキスト、K3フォーマットなどのファイル種別を指定しろとうながす。上に述べたTIMSⅡの、CSV形式、固定長形式、SYLK形式など、と表現が異なっていることに気がつくだろう。これが個人電脳界の現状だ。ソフトによって、呼び方が違っている。狭い世界のはずが、用語の統一さえなされていない。呼び方が違うのだから内容も別なのだろうと思うではないか。そうなるとTIMSⅡと桐第３版で一致する単語がないのだから、データの授受など不可能だということになる。ところが、TIMSⅡの「CSV形式」が桐第３版の「テキスト」に相当するのだという。

約１万１千件のデータを読み込むのにしばしの時間がかかる。

桐第３版での作業が終了した。TIMSⅡと桐第３版とのソフトの性格が異なることによる問題が、さっそく発生している。

○問題が生じる

TIMSⅡは、固定長型データベースといわれる。基本は表形式だが、カード（帳票）形式でも設計できるので、カードを書く感覚で使用できる。ただし、１項目は60バイトまでしか入力できない。漢字に換算すれば、収納できるのはわずか30字である。そのうえ40項目までが上限で、１レコードは、2400バイト（漢字で1200字）までという制限もある。さいわい、私の設計では約700バイトに収まった。つまり、１カード漢字350字を記入できる。そのため、長いデータは、次の項目に送るなど工夫をする必要が生じる。それで解決できなければ、カードを２、３枚と続ける細工を強いられることになるのだ。なぜ、そんな不自由なソフトを購入したのかと問われるかもしれない。最初に購入した日立2020では、1986年当

時、値段とのかねあいで使えるソフトはこれくらいしなかった、というよりしかたがない。それでも『清末民初小説目録』を刊行できた。たいしたものだ、と現在ではなぐさめている。

固定長が原因で強いられている入力時の工夫が、桐第３版で手間をとられることになる。桐第３版は、データの長さや桁数を気にする必要のない可変長型だ。TIMSⅡで１から４に設定した備考は、桐第３版では備考１にまとめることができる。そうするためにいくつかの作業が必要となるのだ。

もうひとつ意外な現象が現われた。外字に関連して、部分的にデータが消滅したのだ。

外字については、最初から悩まされどおしである。漢字第１、第２水準だけでは不足する。『清末民初小説目録』では、約700字の外字を作成することになった。しかし、エプソン（ＮＥＣでも同様）では、188字の外字しか一度に扱えない。しかたなく、記号「＊」で埋めておき、連番を記入したメモを別に用意している。

桐第３版でファイルの内容を見ていると、あるはずの記載が抜けている。それも複数ある。元のファイルを表示して対照すると（デスクトップを２台使用している、などと書くと万年筆を自慢しているようで恥かしい）、データの消滅に規則性があることに気がついた。外字の部分から下が複写されていない。

そもそも清末民初小説目録のデータは、前述したように、最初は、日立2020で入力した。日立2020が、わずか３年で原因不明の自己破滅をしたため（何回でも言う）、データをエプソンに移植したのだ。日立2020とエプソンでは、外字の管理方法が異なっているのだろう、エプソンでは日立の外字を表示せず、空白のままになってしまう。日立の自滅後、エプソンですべてのデータを点検するのに約２ヵ月かかった。外字部分に「＊」を挿入するなどの処置をほどこしたのだ。今回の操作で、日立2020→エプソンのTIMSⅡ→桐第３版とデータが移動することになったのだが、未処理の外字部分以下が抜け落ちたらしい。不思議なこともあるものだ。ここは、手作業で補うよりしかたがない。

それはさておき、TIMSⅡの備考１-４に分かれているデータを、桐第３版の備考１にまとめてしまいたいのだが、どうすればいいのか。これが問題である。

ひとつの方法は、１レコートずつ、備考２から備考１へ複写し、備考３からも

備考１へ複写し……と繰り返すことだ。これだと、１万１千以上の件数があるのだから時間がかかってしょうがない。手作業と変わらなくなり、なんのために電脳を使っているのかわからない。

○こうして試行錯誤が始まる

試行１：桐第３版の機能にデータの併合・連結（併合元表の項目値を併合先表の項目値の後ろへ連結する。文字列型の項目にだけ指定できる。説明書569頁）がある。別ファイルのデータをキー項目を定めて文字を追加するのだ。備考１－４だけのファイルを作る。ハードディスクのＢドライブにファイルを置く。連結を命令する。しばらくたってstopキーを押すと、処理は１パーセントと表示する。さらに作業を続行させるのだが、あいかわらず処理１パーセント。想像通りにはうまくいかない。作業を中止する。やはり、一つひとつ見なければならないのか。

試行２：表形式とは別にカード型を設計する。桐第２版の時、同じようにカード型を作ろうと試みたことがある。しかし、とうとう成功しなかった。説明書を読んでもわからなかった。今度の桐第３版は、比較的簡単に設計できた。「素人にやさしい」をめざした成果か。はじめからそうあってほしかった。まず、表形式で大きくデータを並列して表示する。備考２に文字が見えるものは、データがあふれていることがわかる。そこで、カード型に切り替え（HOMECLRキーを押せばよい）、SHIFT＋F9の値複写機能を使って必要部分をコピーする。たしかに、備考１にデータを複写することは、できる。だが、これも人力作業を繰り返し続けなければならない。カードを一枚いちまい見ていくのだから時間がかかる。数ヵ月の時間が必要かもしれない。これでは問題の最初にまいもどることになる。

試行３：桐第３版で読み込む前の状態でなんとかならないか。TIMSⅡでデータを書き出した。これは、「,」でデータが区切られている状態のままだ。「,」で区切られているのだから、必要箇所の「,」を削除したうえで桐第３版で読めばいいのではないか。数メガをこえるデータを編集できるエディタ、ワープロといえば、桐第３版と同じ開発元の「新松」しかない。新松でファイルを見る。画面一面にひろがるデータの平原にめまいを覚える。換置機能を使ったとしても、いちいち確認しながら「,」を削除できる情況にはない。

試行錯誤は、文字通り、誤ったままの試行に終わった。

○関数を使用

何か適当な機能があるはずだ。一度、開発元に問い合せてみることにする。

返答があった。「関数」を使うのだそうだ。関数といえば、数学ではないか。例のサイン、コサイン、タンジェント。数字の計算をするわけではないのにね。説明書の記述を書き抜いてみよう。「関数とは、引数として値を与えると、定められた処理や計算を内部的に行ない、その結果の値を返してくる、一種のサブルーチンのようなものです」(87頁)。なんのことか理解できますか。自慢ではないが、引数、値を返す、サブルーチン……さっぱりわからん。説明書をさがすとき、こういう部分に、私の必要としている機能が説明されているなど、だれがわかるだろう。開発元は、わかっているのだろうが、素人には無理だ。つくづく電脳業界は遅れている（不親切だ）と思う。まさか理解できない人は、電脳を使うな、とはいわないでしょうね。

関数一覧を見ると、数学関数、型変換関数など11の大分類がある。合計137の関数が並んでいる。たいした数だ。「文字列操作関数」のなかの「＃連結／＃ＣＡＴ　複数の文字列をつなげる」というのが該当するらしい。

カーソルを「備考１」に移動する。

ファンクションキーの「置換」を押す。

窓が出現。計算式の部分に、

＃連結（[備考１]，[備考２]，[備考３]，[備考４]）

と書き込む。

行ごとの確認を「しない」で、実行。

約１時間で作業は完了する。うまくいったみたいだ。

数件のレコードにまたがったデータは、検索して１件に収める。これに少々時間がかかる。

以上で、一応、準備が整った。いよいよ桐第３版での集計作業にはいることに

する。

○桐第３版で集計

最初から作品名の重複を洗い出してもいいように思うが、それは早計である。創作と翻訳の双方に同名の作品がある場合が想定される。たとえば、次の例がある。

案中案　（英）柯南達利著　商務印書館訳印　商務印書館　光緒30(1904)
ARTHUR CONAN DOYLE “THE SIGN OF FOUR”［阿英135］（阿英「晩清小説目」135頁に採録されているという意味）
案中案　金一明　『小説海』3巻7号　1917.7.5

ひとつは翻訳、片方は創作、同一作品名であるが内容は、当然、異なる。
そこでファイルを、まず、創作と翻訳に分ける。

○創作と翻訳

選択機能を使用し、創作と翻訳にファイルを二分する。それぞれが、次の作業の元ファイルになる。また、ファイルを小さく分割することにより、それだけ作業時間を短縮することができる。この時点で、創作7,512件、翻訳3,705件、合計11,217件という数字が得られた。これには、初出から現在までの版本が重複して含まれている。要求されているのは、清末民初時期の作品種類数だから、最近の復刻版などは必要ない。年代を区切れば、ファイルのサイズはもっと小さくなる。

○1920年以前

清末から民初における小説の種類数の変遷を概観できるように、1920年以前のデータのみを抽出することにする。

創作のファイルを呼び出し、カーソルを「年」に移動し、「選択」キーで1920年以前と指定すればよい（実際は、<=1920 などと記述する）。次の数字が出てきた。創作6,722件、翻訳3,377件、合計10,099件。

この状態で、「重複データの単一化」を実行する考え方がある。「データが重複しているレコードがあるときには、重複するレコードの先頭だけを選択します。重複していないレコードは、そのまま表示します」(説明書549頁)。単一化だけですめば簡単だ。ところが、これを実行してしまうと、重複した複数のレコードのうち先頭のレコードを選択するわけで、先頭は発行年不明のものであることがある。ここは、発行年の記入してあるレコードを選んでほしい。そうでないと発行情況が把握できなくなる。「重複データの単一化」は、この場合、役に立たない。

「重複データの単一化」がダメならば、重複データを選択するまでで止めなければならない。その後は、作品の種類を絞り出すために、雑音を除く作業をしておこう。

〇雑音の削除

なにが雑音かを決めよう。作品名が同一のもので、作者も同じ、発行年だけが異なるというものは、再版本だろうという予測がつく。この場合、再版本は、雑音だ。

作品名が２行以上重複しているレコードを選択する。これがかなりな数にのぼる。もともとのデータが複雑に記入されたものだから、一括して処理する方法が見つからない。重複データについては、ひとつひとつ点検しながら、不必要な雑音を削除するよりほかない。見落としがある。数度にわたって、重複データの検出→削除、を繰り返す。その結果、次のような数字が出てきた。

創作6,320種、翻訳2,376種、合計8,696種

以上は、1920年までに発表、発行された小説の種類だ。一応の結論めいたものであるが、せっかくだからもう少し細かく見ていこう。

種類の変遷

〇清末と民初

大きく二分する。辛亥革命（1911年）を境にした清末と民初ではどうか。

表形式の編集画面を表示させる。カーソルを「年」に移動、「選択」を選び「<=1911」と指定すれば、あとは自動的に集計ができる。1912年以後のものは、同じく「選択」の「補集合」を指定するだけでいい。

年	創作	翻訳	合計
-1911	1,820	1,061	2,881 （発行年不明を含む）
	(*573)	(*191)	(*764)（* 発行年不明）
1912-1920	4,500	1,315	5,815
合　計	6,320	2,376	8,696

1911年以前の数字を、阿英「晩清小説目」と比較してみよう。

阿英の目録で、発行年を明記しているものは、創作が439件、翻訳が606件の合計1,045件である。

うえの数字は、発行年不明を除いて数えると、創作が1,247種で阿英の約2.84倍、翻訳が870種となりこれも阿英の約1.43倍である。両者を合計した2,117種は、阿英の約2.02倍だ。

○年ごとの集計

1894年から１年毎の集計は、「選択」で年次を指定する。創作について27回の集計をとる。翻訳も同じ回数をくりかえす。合計54回の作業を単純反復するだけだ。カードを１枚いちまいくることを考えれば、キーを押すことなど苦にはならない。

以下のような数字が表示される（1991年４月現在)。

年	創作	翻訳	合計
1893以前	588	199	787* （*発行年不明を含む）
1894	7	1	8
1895	7	0	7
1896	2	2	4
1897	7	4	11

1898	2	3	5
1899	9	2	11
1900	10	3	13
1901	15	7	22
1902	17	13	30
1903	69	79	148
1904	74	65	139
1905	64	64	128
1906	94	121	215
1907	165	184	349
1908	224	138	362
1909	211	82	293
1910	124	44	168
1911	131	50	181
小計	1,820	1,061	2,881
1912	108	44	152
1913	183	83	266
1914	691	197	888
1915	1,257	279	1,536
1916	751	209	960
1917	568	221	789
1918	462	113	575
1919	306	64	370
1920	174	105	279
小計	4,500	1,315	5,815
合計	6,300	2,376	8,696

○「清末民初のふたこぶラクダ」ふたたび

得られた数字をグラフで示してみよう。どこかで見たような形態だと気がつかれたに違いない。「清末民初のふたこぶラクダ」*8である。以前のふたこぶラクダのばあいは、ここに集計した種類数とは異なる。再版本などを含めた発行点数の推移であった。その特徴は、以下のようにまとめることができた。

清末（以前）

１．1902年を境として発行点数が急増している。

２．最初は翻訳のほうが創作よりも多く、逆転するのは1908年になってからである。

３．頂点は1907年である。

民初（以前）

４．創作が翻訳をうわまわって発表されつづける。

５．民初小説の発行点数の頂点は、1915年である。

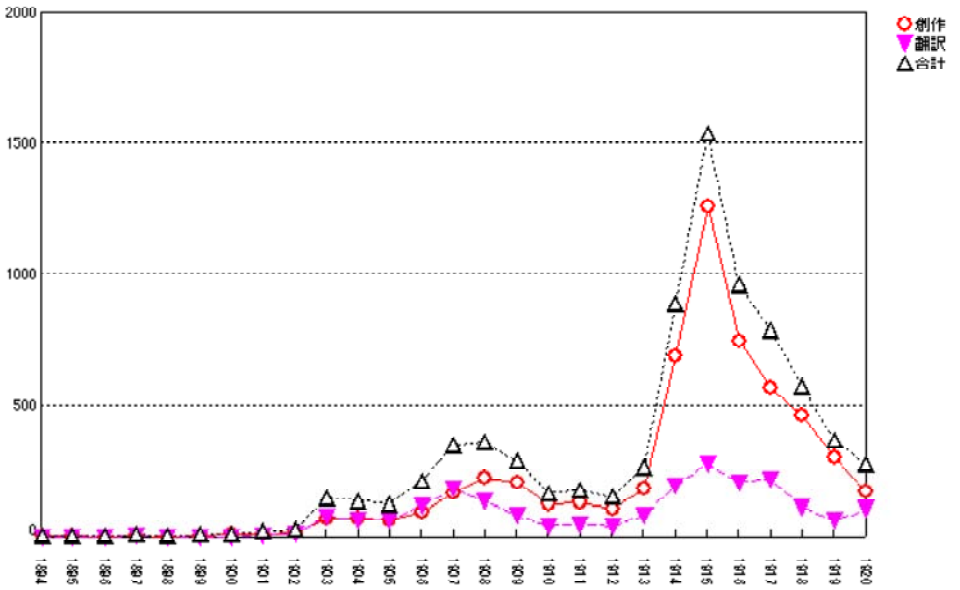


図 清末民初のふたこぶラクダ（データは1991年４月現在）

今回の種類数の変遷を発行点数の推移と比較する。すると、こうなる。

１．清末は1902年を境として種類数が急増している。

２．翻訳と創作は、最初、ほぼ同数で発表されており、創作が翻訳をうわまわるのは、1908年以降である。

３．清末における種類数の頂点は1908年である。

４．民初も創作が翻訳をうわまわって発表されつづける。

５．民初小説の種類数の頂点は、1915年である。

両者を見比べる。

２の翻訳と創作の割合に関して、発行点数の推移では、翻訳が創作より多い。しかし、種類数の方では、翻訳と創作がほぼ同数となる。その理由は、発行点数では、翻訳の重版を数字に含めているためである。

また、３の頂点については、以前は発行点数が1907年にピークを示していた。今回の種類数の長上は1908年である。ここがわずかにズレているにすぎない。ほぼ、ふたこぶラクダ（発行点数の推移）と同じだということがわかるのだ。ということは、「清末民初小説のふたこぶラクダ」という把握のしかたは、発行点数ばかりでなく種類数においても有効であることを証明していることになる。

こまかい数字をあげて説明した。それだけで何か確かな事柄を説明されたような気になるかもしれない。いうまでもなく電脳は正確に作動する。しかし、いくら電脳が正確だからといっても、指示された通り間違いなく単純な作業をこなしているにすぎない。基礎となるデータ入力は、人の手作業である。入力したデータの点検も、最後は人の判断によっている。あやふやな人（私個人のことをいっていると考えてもらってもいいし、一般的な言葉であるとされてもよい）を基本にできあがっているのだ。

確固としたものと見える数字も、その実、不確実性を含んだものであることを強調しておきたい。

【注】

１）樽本「目録って何だ」『大阪経大論集』第124号　1978.7.15（『清末小説閑談』所収）

２）樽本「電脳化資料庫日記」『中国文芸研究会会報』第69号　1987.8.30（本書所収）
樽本「清末民初小説目録の構想」『清末小説』第10号　1987.12.1（『清末小説論集』所収）
樽本「電脳を利用した漢字文献整理」『大阪経大論集』第183号　1988.5.15（本書所収）

３）江蘇省社会科学院明清小説研究中心編『中国通俗小説総目提要』（北京・中国文聯出版公司

1990.2）が発行された。書名が表わしている通り提要が主眼であって総目録ではない。清末までを収録の範囲とする。また、創作のみで翻訳を採らない。ゆえに、収録された清末小説は、おおよそ595種類（作品名のみのものを含む）に止まってしまった。

4）樽本「清末民初小説のふたこぶラクダ」『野草』第42号　1988.8.1（『清末小説論集』所収）

5）樽本「きまぐれ電脳日記」『中国文芸研究会会報』第90号　1989.4.30

6）樽本「清末民初における定期刊行物の時空」『清末小説』第13号　1990.12.1（『清末小説論集』所収）

7）翻案についての高島俊男氏の定義が参考になる。一、原拠として個別の作品を指摘できること。二、ストーリーがだいたい同じであること。三、主要な登場人物が一対一で対応していること。同氏『水滸伝と日本人――江戸から昭和まで』大修館書店1991.2.20。135頁。

たまたま目についた吉武好孝『近代文学の中の西欧』（教育出版センター1974.11.5）には、「翻案とは、平たくいえば、改作のことだと思えば十分である」「翻案というのは、翻訳とはちがって、原作に当るものをきっかけにした創作なのだから、それは外国文学には属さず、あくまでも日本文学の一部分であり一分野なのである」（「第一章　翻案史研究の覚え書」１頁）と書いてある。

翻案を創作とするか翻訳とするかは、以上の通り意見が分かれている。高島説は、翻訳か。吉武説は、創作。

8）注４に同じ。樽本『清末小説論集』所収

【参考文献】

1．『TIMSⅡ TURBO ユーザーズマニュアル』エー・エム・アール株式会社1987.10.1

2．『日本語データベースシステム桐ver.3　会話処理リファレンス』株式会社管理工学研究所1990.7.28

＊

私の書いたもののうち注で触れた文献以外で、個人電脳を利用して作成したもの、電脳に関する文章を以下にあげておく。

3．樽本「京大電脳化資料庫に接触する」『中国文芸研究会会報』第75号　1988.2.29

勤務先にある電脳を経由して京大の電脳に接触し、CHINA3というデータベースを利用した報告書。公のデータベースは、便利である。おおいに利用したい。しかし、自分に必要なデータベースは、最終的には自らが作らなければ役に立たないことがわかった。

4．樽本編「『老残遊記』人名索引」『大阪経大論集』第193号　1990.1.15

TIMSⅡでデータを入力整理し、新松で整形した。

５．樽本編「『二十世紀中国小説史』第一巻索引」『大阪経大論集』第200号　1991.3.31

桐第３版でデータを入力整理し、新松で整形した。

【付記】本稿は、1991年度本学特別研究費による成果の一部である。

「函髻記」をめぐって

『清末小説から』第29号（1993.4.1）に掲載。神田一三名を使用。

鄭炳純の「李叔同的出家与《函髻記》」(『読書』1992年第４期　1992.4.10。116-118頁）がある。「李叔同（弘一法師）の『函髻記』という小本は、珍しいもので、ここで紹介すれば、弘一大師の人生観、倫理感、愛情感を理解するうえで手助けになることもあるかもしれない」と書きはじめる。

説明によれば、該書は、西泠印社に印刷させた非売品であるという。署名は「盟鴎榭著」、表紙に「函髻記」の三文字、左下に「盟鴎榭雑著」とあり、雑著二文字の間に「李息私印」と朱印が押してある。李息は、李叔同が出家する前に常用した名のひとつで、通例そのような位置に捺印できるのは作者自身しかいない。盟鴎榭は李息のことである。鄭炳純は、そう断定する。

唐代の進士・欧陽行周と太原の名妓・申行雲の悲恋を題材とするこの短編は、清末小説研究会編『清末民初小説目録』(中国文芸研究会1988.3.1。233頁）にも以下のように収録されている。

H117　函髻記　盟鴎榭著　『小説月報』６巻９号　1915.9.25

これ以外に同名の小説は、『清末民初小説目録』に見当たらない。『小説月報』を見れば、54-58頁に掲載された作品は、鄭炳純が紹介するものと同一内容である。

盟鴎榭が李叔同の筆名であるとする鄭炳純の文章を読んで、私は腑に落ちないものを感じた。捺印の場所を断定の根拠にする部分も大いに怪しい。それよりも、張純「南京図書館所蔵晩清創作小説(1)」(『清末小説から』第15号　1989.10.1。10頁)に次のような記載があるのを知っているからだ。

> 33.評点四大名家小説不分巻　二冊　民国四年（1915）／排印本。／附注：該書収入梁啓超《世界末日記》、鄭孝胥《函髻記》、康有為《青娥血涙》、樊増祥《琴楼夢》。

「函髻記」と題するほかの作品を見ない以上、ここに示された鄭孝胥「函髻記」は、盟鴎榭名で発表された作品ではないか、と考える方が自然だろう。ただし、『評点四大名家小説』を目にできない現在、私にはそう断定することができない。

盟鴎榭は、李叔同か、それとも鄭孝胥か、疑問のままに残されるかと思われた。

しかし、回答は、すぐ得られたのだ。同じく『読書』の次号に、労祖徳は、「関於《函髻記》」(『読書』1992年第５期　1992.5.10。152-154頁）を書いて、鄭炳純の誤りを正した。

労祖徳は、鄭孝胥「海蔵日記」(中国歴史博物館所蔵）壬寅（1902）から、「函髻記」に関連する文章を引用する。その核心は、つぎの部分である。

> 五月廿一日：欧陽行周の「函髻記」を読んで触発され、小説を書いて思いを託そうと考える。
> 六月十六日：「函髻記」を書く。

「函髻記」が鄭孝胥の作品であるからには、発表時に使用された盟鴎榭という名称は、鄭孝胥の筆名であると考えてよさそうだ。

なお、労祖徳には、「鄭孝胥日記中的出版史料――読《商務印書館大事記》」(『商務印書館館史資料』之四十二　北京・商務印書館総編室編印1988.11.19）と題する文章があることをつけくわえておく。

【追記】馬良春、李福田総主編『中国文学大辞典』全８巻（天津人民出版社1991.10）所収の『評点四大名家小説』には、鄭蘇龕（孝胥）著とある。

【補記】

中国歴史博物館編、労祖徳整理『鄭孝胥日記』全５冊（北京・中華書局1993.10）が刊行された。

『清末民初小説目録Ｘ』(2015）には、以下のように掲載している。参考までに示す。略号については、ウェブ公開の該目録を見てほしい。

H0337

函髻記

盟鴎榭（鄭孝胥）著

民国

[景深720206]木活字印本　陳汝衡跋。王勉「民国四年（1915）始由私家付刻，承印的是杭州西泠社，用羅紋紙仿宋木活字精印」[劉民665]盟鴎榭ママ

H0338

函髻記

盟鴎榭（鄭孝胥）

『時事新報』1915.8.20-26

[劉民417]

H0339

函髻記

盟鴎榭（鄭孝胥）著

『小説月報』6巻9号　1915.9.25

[彙④2991][大典354]は「丞ママ髻記」に誤る[史索一825][系目286][劉民15]短篇

H0340

函髻記

鄭蘇龕（鄭孝胥）

『評点四大名家小説』上海・広益書局1915.10

梁啓超「世界末日記」、康有為「青娥血涙」、樊増祥「琴楼夢」と合冊[大辞⑤3210][劉民665]

鄭蘇庵

H0341

函髻記　（哀情小説）

盟鴎榭（鄭孝胥）

胡寄塵編『小説名画大観』上海・文明書局、上海・中華書局1916.10／北京・書目文献出版社1996.7影印　北京図書館蔵珍本小説叢刊

H0342

函髻記

鄭孝胥

于潤琦主編『清末民初小説書系・社会巻下』北京・中国文聯出版公司1997.7.20

『評点四大名家小説』1915年10月

H0343

函髻記

盟鴎榭（鄭孝胥）雑著

『中華文史論叢』第57輯　1998.7

王勉「盟鴎?与小説「函髻記」」のなかに全文を収録

H0344

函髻記伝奇

盟鴎榭（鄭孝胥）著

不明

[唐線199][唐書15]出版社：待考1919、線装鉛印[左目282]高梧軒編次。民国年間惜陰堂?宋排印本。按：此劇雖云伝奇，然系時調説唱曲本，非曲牌聯套体戯曲[左録512]

『清末民初小説目録』の現在

『中国文芸研究会会報』第140号（1993.6.30）に掲載。『清末民初小説目録』(1988）について日本中国における該目録の評価を紹介し、増補訂正作業を継続していることを説明する。

『清末民初小説目録』を出版したのは1988年３月１日だ。ちょうど５年が経過した。編纂の現状とこれからの予定を述べておきたい。

1　出版をめぐって

『清末民初小説目録』は、A4判、本文1,008頁、著訳編者索引122頁の精装本で世に出た。発行部数は、200部である。この数字が多いか少ないかは、見方による。印刷費用は、中国文芸研究会の出版基金（野草基金と称する）からと清末小説研究会が折半して出資しまかなった。共同出資となったのは、当時、野草基金が印刷費の全額を捻出できなかったからである。清末小説研究会とはいっても、実態は樽本個人が費用を負担した。

野草基金の規定では、出版の２年後に費用を精算し、赤字が出ると出版を希望した者がその赤字を埋めなければならないと定められている。つまり、基金は、どうころんでも赤字にならない仕組みである。その仕組みの成立に私も手を貸しているのだが、うまく考えられているとしかいいようがない。

費用を折半したうえに、赤字分まで面倒を見なければならぬのか。そうまでし

て出版する意味があるのか、と思わぬわけでもなかった。こんなに「高価」(定価２万円）な、それも清末民初という特殊な時期の目録が売れるわけがない、という人もいた（あとで直接私にそう語った)。定価２万円といっても、これは印刷費用だけを基礎に算出したものだ。本来ならば当然含むべき人件費、機器費などのコストを算入していない。仮にすべてのコストを計算するならば、原価だけで１冊当り６万円を下らないのは確実だ。

迷いをふりはらい、費用の捻出をいとわなかったのは、約１万件の書目は、自分ひとりで利用するにはあまりにももったいない、研究者の役に立つはずだ、という確信があったからにほかならない。思い込みにすぎないといわれようと、必要とする人には便利なものだということはわかっていた。ただし、印刷費用を回収できるだけの需要、目録を必要としている人数がいるかどうかは不明だったことは確かである。

2　目録に対する反響

目録出版後の最初の反応は、中国から発せられた。「阿英が編纂した『晩清小説目』が世に問われて三十年あまり後、この分野ではじめて出版された資料の最も完備した書籍である」*1と『文藝報』が記事にした。

本文わずかに４行の報道であったが、さすがに全国紙である、中国の研究者で興味をいだく人は、この新聞記事によって目録の出版を知ったらしい。

日本では、西田元子氏が『国立国会図書館月報』の「本屋にない本」欄*2において目録を取り上げてくださった。すこし長くなるが引用しよう。

> 作品は中国音のＡＢＣ順に排列、各作品の版本は雑誌初出、初版より1987年以前に再版、復刻されたものまでを採録し、総数は約１万件にのぼる。上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』、阿英編『晩清戯曲小説目』、同編『中国近代反侵略文学集』叢書をはじめとする目録、資料集、研究論文など掲出の参照文献は約80種、散逸した原資料の欠を補うために各種の文献を博捜して収録されたものである。採録の基準に差異があるが、1,070種、1,144

件を収録する前掲の『晩清戯曲小説目』増補版（1957、古典文学出版社）の小説目部分をしのぐ、網羅的かつ精密な目録といえよう。巻末には「著訳編者名索引」が付されている。

会誌『清末小説』などに拠る清末小説研究会の長年の研究成果の一つである労作『清末民初小説目録』は内外の研究者に基礎文献として活用されることと思われる。

目録の出版意義を正しく理解した紹介といえるだろう。対象は違うとはいえ、著者の論文の意図が理解できず、あれがない、これがない、と「ないものねだり」をふりまわして間の抜けた点で「画期的な書評」*3を目にするにつけ、上の書評がその根本的なところではるかに良質であることはいうまでもない。

目録の序文は、范泉氏により中国語に翻訳された*4。これには范泉氏の付記があり、氏から見た目録の特色とこれへの注文が述べられている。

好意的な紹介があったためであろう、出版して１年後に計算してみると印刷費をまかなうだけの販売収入があった。そればかりか、中国文芸研究会の野草基金によって出版された数種類の書籍のなかで、この目録は基金の増収にきわめて大きな貢献をしたのである。

3　中国から出版の申し入れ

懇意の中国人研究者から手紙がきた。ある出版社の重点出版物として『清末民初小説目録』を出版したい、という内容だ。ありがたい申し入れである。中国で出版したいというのは、学術資料としての価値があると判断されたと考えていいだろう。しかし、条件がひとつついている。「それについては印刷費用を負担してほしい」というのだ。日本で出版したばかりで、こちらには売るほど在庫がある。さらに、増補訂正作業を継続している最中でもあった。もうひとついうと、こちらが印刷費を負担してまで中国で出版してもらうほどのことでもない。お断わりした。

目録は、出版した時点で古くなる。誤植などの間違いも避けられない。数人に

よる共同作業の部分もあり、中島利郎氏をわずらわせて全体に目を通してもらった。といっても、電脳に入力をしたのはひとりだから、最終的な責任は私が負わなければならない。増補作業を欠かすことはできないのだ。

この５年間に、利用する機器、ソフトともに変更があった。

4　機器の変更

日立2020でデータをバックアップ中、突然、ハードディスクが自己崩壊した。この故障についてはしつこく書いたことがある*5。

現在は、エプソンを使用し、ハードディスクは100MB（メガバイト）を中心にすえて動かしている。データは、もう１台のエプソンに外付けしているハードディスク100MBにも複写する。さらに用心のために40MBの３台目ハードディスクにも同じものを収納しておく。念のために、データのみを圧縮（LHAを使用）して複数のフロッピーに退避する。三重四重に複写をとっておくのは、私が心配性だからだ。

ソフト、ハードディスクともに壊れても代替品は簡単に入手できる。しかし、自分が作成したデータだけは同じものはどこにも存在しない。消滅してしまったら２度と復元することはできない。電子情報の扱いやすさと壊れやすさは同居しているのだ。電子機器の最大の強みであり弱点でもある。

1993年１月、データの整理に使っていたTIMSⅡTURBO（ティムス・ツー・ターボ。以下、TIMSⅡと表記）が不調となった。仕様ではデータ３万数千件の入力が可能であるが、１万２千件近く入力したところで突然勝手に終了してしまう。何度も同じ症状が現われる。原因はわからない。『清末民初小説目録』は、TIMSⅡで整理印刷したものを版下に使った。７年間使ってきて愛着がある。しかし、開発元もすでに販売をやめており（たぶん)、問い合せに答えてくれるかどうかわからない。これを機会にデータベース・ソフト桐（きり）第３版に全データを完全に移動することにした。

5　増補訂正作業

小説の実物がなんらかのかたちで確認できれば、目録と対照する。しかし、そういう機会は日本では少ない。清末民初時期に発行された小説を自分の目で見ることは、それほど簡単なことではないのだ。必然的に２次資料に頼らざるをえなくなる。目についた文献で関係しそうな書籍は、目録で検索して確認する。あればよし、なければ追加収録する。

増補作業を継続しながら、もういちど阿英「晩清小説目」*6と照らし合せることをくりかえした。備考欄に［阿英**］と記入するためである。「**」部分には該当ページを挿入する。

本目録は、主として２次資料を材源にしている。清末小説研究に利用する資料のうち主なものを出典として明らかにしたかったのだ。目録からさかのぼる手掛かりがあれば、なにかと便利であろう。

増補作業で取り入れたおもなもののいくつかをあげておきたい。

ａ　『民国時期総書目（1911-1949）』外国文学（北京図書館編　書目文献出版社1987.4）

所蔵する実物にもとづいた目録だ。信頼性が高い。［民外］と略称する。各作品を『清末民初小説目録』と照合し、記述が一致するものは、備考欄に［民外****］と注記する。****は、『民国時期総書目』の総番号である。発行年、記述が一致しないものは、本目録に新たに追加し、同じく［民外****］と注記する。

ｂ　『中国通俗小説総目提要』（江蘇省社会科学院明清小説研究中心編　北京・中国文聯出版公司1990.2）

［提要］と略称する。本書に収録している作品で、1900年以降発行のものを、基本的に採録する。各作品を『清末民初小説目録』と照合し、記述が一致するものは、備考欄に［提要****］と注記する。****は、『中国通俗小説総目提要』の頁数である。発行年、記述が一致しないものは、本目録に新たに追加し、同じく［提要****］と注記する。

本書は、1991年９月に天津第２次印刷の再版本が出た。初版とはページ数が異なるので注意を要する。

ｃ　『中国文学大辞典』全８巻（馬良春、李福田総主編　天津人民出版社1991.10）

［大辞］と略称する。本書「分類索引」の「近代文学〔小説〕」に収録している作品を基本的に採録する。ただし、すべてを採用したわけではない。各作品を『清末民初小説目録』と照合し、記述が一致するものは、備考欄に［大辞****］と注記する。****は、『中国文学大辞典』の頁数である。発行年、記述が一致しないものは、本目録に新たに追加し、同じく［大辞****］と注記する。

以上は、増補の主たるものだ。ことに『中国通俗小説総目提要』と『中国文学大辞典』の２種類は、作品提要となっているので参考にすることができるだろう。

6　目録の未来

データ数10,074件で目録を発行した。1993年３月20日現在、12,218件に増加している。この５年間で約2,100件のデータが増えたことになる。

出版が予告されていた『民国時期総書目（1911-1949）』の文学理論・世界文学・中国文学巻（上下、北京・書目文献出版社1992.11）が出て、最近、入手した。当然、目録に取り込む予定である。その量を考えれば気が遠くなりそうだ。やりかけたことだから、あと最低５年間、泥沼のような増補訂正作業を続ける。

電脳の印刷関係も改善がすすんでいる。『清末民初小説目録』の再版を出版することが将来あるとすれば、より鮮明な印刷でお目にかかるだろう。それとも、書籍のかたちではなくフロッピー出版という可能性もないわけではない。

【追記】

TIMSⅡは、開発元も販売をやめており、と書いた。しかし、1993年４月12日付で会社より案内が郵送されてきて、TIMSⅡのDOS/V版を発売するという。DOS/V用の機器を買う予定がないので役に立たないことに変わりがない。

【補記】

上で述べた「再版」は、『新編清末民初小説目録』[第２版](清末小説研究会1997.10.10）となって実現した。それが、『新編増補清末民初小説目録』[第３版](済南・斉魯書社2002.4）につながったのだった。

1993年当時はウェブサイトで公開するという発想はなかった。インターネット上で清末小説研究会ホームページを公開したのは1996年である。『清末民初小説目録』は、第６版を2014年にウェブにかかげた。同じく『清末民初小説目録Ｘ』も2015年に電字版として公表。誰でもダウンロードできる。2016年現在管理している全データ数は、約36,000件である。

【注】

１）署名は「文」。「日本出版《清末民初小説目録》」『文藝報』第12期1988.3.26

２）西田元子「本屋にない本」『国立国会図書館月報』第333号1988.12.20

３）樽本「画期的な書評」『中国文芸研究会会報』第129号1992.7.30。樽本『清末小説研究論』所収

４）范泉訳、樽本照雄作「《清末民初小説目録》序」『中国近代文学争鳴』第１輯1989.10

５）電脳と目録に関連して書いた文章を掲げておく。

「電脳化資料庫日記」『中国文芸研究会会報』第69号1987.8.30。本書所収

「清末民初小説目録の構想」『清末小説』第10号1987.12.1。樽本『清末小説論集』（法律文化社1992.2.20）所収。

沢本郁馬「『清末民初小説目録』について」『清末小説から』第９号1988.4.1。樽本『清末小説研究論』所収

「電脳を利用した漢字文献整理」『大阪経大論集』第183号　1988.5.15。本書所収

「きまぐれ電脳日記」『中国文芸研究会会報』第90号1989.4.30

「『清末民初小説目録』の欠点」「研究結石」『清末小説から』第14号1989.7.1

「清末民初小説の種類（その１　準備篇）」『大阪経大論集』第42巻第５号　1992.3.31。本書所収

「清末民初小説の種類（その２　実践篇）」『大阪経大論集』第42巻第６号　1992.4.19。本書所収

６）阿英「晩清小説目」『晩清戯曲小説目』増補版　上海・古典文学出版社1957.9

『清末民初小説目録』それから（初稿）

『トンシュエ』第11号（同学社1996.2.15）に掲載。1988年に発行した『清末民初小説目録』について、現在まで増補訂正作業を継続している。その収録作品数は、発行時より約1.4倍に増加していることなどを紹介する。該誌は本文縦組みのため漢数字を使用した。また、字数の制限があったため、本稿では削除した部分を復活させている。「初稿」とした理由である。また、本稿は『トンシュエ』総輯号（2001.5.30。創刊号から20号までの合訂本）に再録された。

もしかすると無謀なことではないのか、と気づいたのは作業がかなり進んでからだった。採ってもとっても、記録すべき作品が次々と出現する。全体でどれくらいの件数になるのか想像がつかないのだ。

泥沼のような作業が始まる発端となったのは、十年前の一九八五年だった。清朝末期から民国初期に発表された小説の総目録を共同で作成することになる。中村忠行先生の発案である。書名を『清末民初小説目録』とする。

それまで清末小説の専門目録といえば、阿英「晩清小説目」（『晩清戯曲小説目』増補版所収。上海・古典文学出版社一九五七）くらいしかなかった。これはこれで便利なのだが、雑誌初出から単行本になった作品を検索しようとするともう手立てがなくなる。

当時、民初を含んだ小説目録が中国になかった理由のひとつは、政治的なものだろう。空白状態だった。

中国でも編纂されていない、清末民初小説の総目録を日本で作成しようという

のは、それだけで無茶といわれてもしかたがない。阿英の目録は、創作四七九件、翻訳六二八件の合計一一〇七件を収録する。清末が約一〇〇〇件であるならば、民初でその二倍、全体でせいぜい三〇〇〇件どまりだろう、というのが私の個人的予想だった。

編集方針を以下のように決め、四人で分担をしてカードをとりはじめる。

一、採録対象の作品は、一九〇二－一九一八年に発行されたものとする。
ただし、例外がある。
ａ　阿英「晩清小説目」に採られた作品は、上記の期間をはずれていてもこれを採録する。
ｂ　商務印書館説部叢書、林訳小説叢書などは、一九二〇年代以降に発行されたものも収録する。
ｃ.『中国近代期刊篇目彙録』は、一八五七－一九一八年間に創刊された雑誌を収録している。これらの小説は、できるかぎり採録する。
二、各作品の版本は、雑誌初出から最近の排印本までを採録する。
三、翻訳の原作は、わかっているものは注記する。

雑誌の時代ともいうべき清末から民初にかけて、大量に発表された小説（創作と翻訳）の総目録である。初出から最近の単行本までを一覧できるようにするから、作品の履歴書ともいえるだろう。基礎資料として、総目録が私たちには必要だった。

日本で作業を行なうため制約をうける。雑誌、単行本の原物を見ることができない場合が多い。書目などの第二次資料にたよることになるのもしかたがない。

分担してとったカードを集めて整理すると予想通り約三〇〇〇件である。カードのままでは不便だから個人電脳に切り換え、市販のソフトウエアで原始的に入力を三ヵ月続けると作業はほぼ終わった。ところが、上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』全六冊（上海人民出版社一九八〇－八四）で作品のひとつひとつを点検しはじめると、採録もれが大量に発見されたのだ。『中華小説界』全三〇期、『礼拝六』全一〇〇期など、抜かせば総目録としてなんの意味もなくなる。最初

の会合から二年が経過していた。

使用機器の関係で実際の作業は私に集中した。まるで泥沼だと思いもしたが、途中でやめてしまえば今までの努力はむだになる。すべての空き時間を注ぎ込んで一年半の入力作業を終えると、なんとか利用できるものになった。全体で約一万件の作品を収録する。一九一一年までに限ると約二四〇〇件となり、これは阿英「晩清小説目」の約二倍である。

電気がなくても利用できるのが紙媒体に印刷した書籍の利点だ。印刷してあれば機器のきまぐれで情報が消滅することもない。日本で出版するのだから、日本の漢字を使用する。外字は作った。Ａ４判、本文約一〇〇〇頁、著訳編者索引一二二頁の清末小説研究会編『清末民初小説目録』（中国文芸研究会一九八八）がそれである。

出版からすでに七年間が経過した。二〇〇部印刷して在庫はほとんどない。その間、資料性の高い書籍がいくつか中国で出版されたのは、増補訂正作業を継続している私にとってはうれしいことだ。主なものをあげる（出版年順）。

北京図書館編『民国時期総書目（1911-1949）』外国文学　北京・書目文献出版社一九八七

江蘇省社会科学院明清小説研究中心編『中国通俗小説総目提要』北京・中国文聯出版公司一九九〇

馬良春、李福田総主編『中国文学大辞典』全八巻　天津人民出版社一九九一

北京図書館編『民国時期総書目（1911-1949）』文学理論・世界文学・中国文学　北京・書目文献出版社一九九二

賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学総書目』福州・福建教育出版社一九九三

陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典』（1897-1929）上海教育出版社一九九四（1930-1965年部分の別本もある）

特に、『二十世紀中国文学大典』は、一八九七－一九二九年を対象としており、清末民初にわたるものとしては、中国大陸においてはほとんど始めての年表形式の書籍ではなかろうか。単行本に限らず、雑誌掲載作品をも採取し、作品によっ

ては内容を紹介する。創作、理論批評、訳文、作家活動、文壇記事、文化要録、社会背景に分けて年月日順に記述がある。小声でつけくわえれば、有用だが、誤植が多く、注意が必要だ。

『清末民初小説目録』は、データ数一万〇〇七四件で発行された。その後の増補訂正で、一九九五年現在、総有効件数一万三四六九件（創作九二九二件、翻訳四一七七）となっている。約三割の増加だ。該目録は、作品の履歴を検索するのに便利であるのはいうまでもない。そのために編纂したのだ。また、清末民初に発表された小説を量的に把握することができるようになったのは予想の外であった。

増補訂正をすませた第二版は、はたして出版できるかどうかわからない。仮にできるとして、日本だけに視野を限定すれば、個人電脳が普及している現在、書籍のかたちで出すよりも、生のデータをそのまま磁気媒体に載せることも考えられる。それとも通信であろうか。

世界の漢字圏を考えれば、紙に印刷することの方がまだ有効だろう。いま、使用できる機器、ソフトウエア、漢字だけで、とりあえず整理し利用できる状態にしておくことが必要なのだ。

今も続いている無謀という泥沼も、慣れてしまえばただの日常生活にすぎない。

劉鉄雲の写真をめぐって

『清末小説から』第40号（1996.1.1）に掲載。初出は、それまでに公表されていた劉鉄雲の写真４種類５枚について、その特徴と関連などを述べた。異なる書物では１枚の集合写真にうつった人物に別の名前が与えられているのに気づく。資料考証のうえ正しい名前を特定した。本稿は、それ以後に目にした写真をいくつか追加し説明する。

1　劉鉄雲の肖像

劉鉄雲の肖像写真でよく知られているのは４種類ある。そのうちの１枚は、集合写真だ。そこから劉鉄雲部分のみを切り離したものが別に流通し、こちらの方が知名度は高い。正確にいうと４種類５枚だ。便宜的に肖像1-5と番号を振る。

少し説明すれば、肖像5には４人の人物が写っている。そこから切り離したのが肖像4、すなわち劉鉄雲というわけ。この１枚について異なる撮影年が示されている。それについても考えたい。今回、肖像6と肖像7を加える。

2　それぞれの肖像

はじめに「劉鉄雲の肖像一覧」を掲げておく。写真が、どの書籍雑誌に掲載、収録されているかを○印で示した。ただし、ここにあげたのは代表的な刊行物のみであり、写真掲載誌を網羅したものではないことをことわっておく。出回っている劉鉄雲の写真の多くは、一覧のいずれからか複写しているといってもいい。

劉鉄雲の肖像一覧

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
肖像1			○										
肖像2	○	○			○		○						
肖像3		○											
肖像4部分		○		○									
肖像5全体			○	○		○		○				○	○
肖像6									○	○	○	○	
肖像7												○	

A 『人間世』第３期1934.5.5

B 魏紹昌編『老残遊記資料』北京・中華書局1962.4

C 劉蕙孫『鉄雲先生年譜長編』済南・斉魯書社1982.8

D 「清末小説アルバム」『野草』第33号　1984.2.10

E 劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』成都・四川人民出版社1985.7

F 羅継祖輯述『羅振玉年譜』台湾・文史哲出版社1986.11

G 劉徳隆、朱禧、劉徳平著『劉鶚小伝』天津人民出版社1987.8

H 武　禧「劉鶚与羅振玉」葉立生主編『五味雑陳話劉鶚――紀念劉鶚逝世一百周年』北京・中国文史出版社2009.3

I 劉徳枢『吾家家世』2009.11私家版

J 劉蕙孫子女編『翰墨清芬　劉鶚 劉大紳 劉蕙孫三世手迹輯存』壱号文化伝播有限公司　刊年不記（2014）

K 李雪萌「尋找人文済南的"老残茶館"」『山東画報』2013.6.8 電字版

L 王　凱「老残劉鶚的謎様人生」『海南日報』2016.7.4 電字版

M 『崔敬邕墓誌銘』台湾・藝文印書舘1976.3

肖像1（右側は兄）

掲載誌：劉蕙孫『鉄雲先生年譜長編』済南・斉魯書社1982.8 初出

撮影年：1902年

劉鉄雲が、兄・夢熊（字・渭卿。のち孟熊、渭清、味青とも）とならんで立ってい

刘铁云（左）及其兄刘渭清

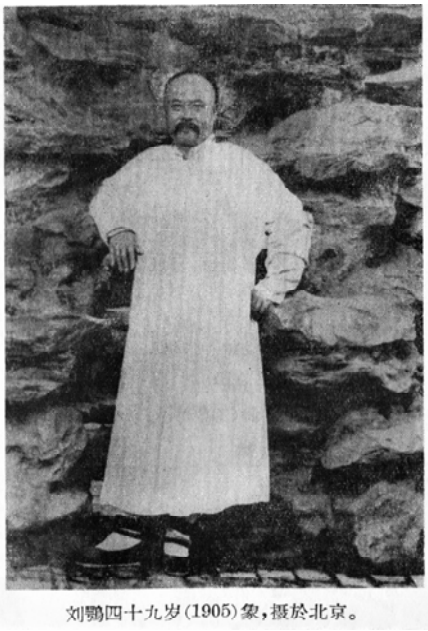
肖像1（右は兄）

老殘遊記作者劉鐵雲先生遺像

肖像2（よく見かける）

刘鹗四十六岁(1902)象，摄於上海。

肖像3（洋装）


刘鹗四十九岁(1905)象，摄於北京。

肖像4（部分）

る写真である。ほかに掲載されているのを見たことがない。珍しい写真だということができる。

ふたりともお椀帽をかぶり、短い上着（綿入れか）を着ている。劉鉄雲の方は特に着ぶくれているように見える。そこから季節は冬だと思われる。厚着をしているところからも、少なくとも夏ではないだろう。劉鉄雲は、口髭をはやし、丸顔で、眼光が鋭い。カメラの方をみすえている。欄杆のような造形物の支柱に左手をおき、重心を左に傾けて左足をまげてつま先を右足の前に軽くおいた姿勢をとる。一見すると、中庭で撮影したように思える。しかし、光の当り具合が全面的であるのが不自然で、奥行がなく、実際の屋敷で撮影したのではなさそうだ。いかにも写真館のセットらしい。

いつ撮影したものか書かれていない。劉鉄雲の兄は、1905年に死去しているから、この写真は1905年以前に撮ったものであるのは確かだ。のちに述べる肖像3と同時に撮ったとすると1902年という可能性が高い。

この写真から劉鉄雲だけを切り取ったものがある。ウェブなどでも見かける。

肖像2（よく見かける）

掲載誌：『人間世』第 3 期 1934.5.5 初出

撮影年：不明（1902?）

劉鉄雲の胸から上サイズの顔写真である。あちこちに転載されており、なじみの写真だということができる。

1934年に発行された雑誌『人間世』第 3 期が初出だ。掲載されたとき、「老残遊記作者劉鉄雲先生遺像」と説明文がつけられた。『人間世』という雑誌は、B5判の大きさで、この大きさの肖像写真というのは迫力がある。

1949年以降、中国で出版されたいくつかの『老残遊記』と資料集にほとんど同じ写真を見かける。「ほとんど同じもの」というのには理由がある。魏紹昌編『老残遊記資料』（北京・中華書局1962.4）に収録するとき、『人間世』掲載の写真を複写し、さらに右肩の一部を削除したからだ。その後、いくつかの版本などには、この『老残遊記資料』所収のものを重ねて複写したものを使用している。見ればわかる。複写して写真凸版を作るときに生じる網点による模様（モアレ）が現わ

れているからだ。

『老残遊記資料』収録のものは、『人間世』と同じ写真原版をもとにしたのではないかという推測もありうる。しかし、私は、写真の原版ではないと思う。なぜなら、『人間世』の劉鉄雲が着ている上着は、シワがよっているところまで写っているが、『老残遊記資料』を見れば、上着全体が真っ黒になってしまい細かなシワが印刷されていない。『老残遊記資料』の肖像は、『人間世』の写真を複写したので微妙な濃淡がとんでしまったと推測できる。『人間世』に提供されたもとの写真は行方がわからず、親族の手元にも原版はないのだろう。

写真の劉鉄雲は、お椀帽をかぶり、眼光は鋭いが、やや緊張がとれた感じもする。口髭をはやし、辮髪の一部分が頭の後に見える。襟のところがモゴモゴしたように見えるのは、下にたくさんの服を着ているからであろう。右肩に白く写っている部分があるが、これは劉鉄雲を撮影した時に当てたライトに服地が反射したものだと思う。そうでなければ、印画紙に光が入ったものか。それゆえ、前述のとおり『老残遊記資料』に転載した写真は、この光った部分を修正している。

緊張がとれた感じがすると述べたのは、肖像1に比較しているからだ。２枚の写真をよく見比べると、その表情が微妙に違う。顎にあたる右襟の位置が異なる。あとは帽子をかぶったところ、着ぶくれた感じ、右肩のライトの反射（そうだとして）などは同一である。肖像1、肖像2ともに同時に撮影したものではないかと思う。

ちなみに、同じく『人間世』第38期（1935.10.20）には、李伯元先生遺像、呉妍人四十二歳時像の２枚が掲げられる。いずれも『月月小説』に掲載されたのを転載したものだ。

肖像3（洋装）

掲載誌：魏紹昌編『老残遊記資料』北京・中華書局1962.4 初出

撮影年：1902年

劉鉄雲の洋装の写真は、珍しい。

劉鉄雲四十六歳の時（1902）、上海で撮影したと説明がなされている。洋装でシャツにネクタイをむすび、右手にステッキ、左手でツバひろの帽子をかかえる。

左足を前にして軽く足を組んだかたちでかたわらの岩に腰をあずける。帽子はかぶっていない。頭髪が額のところまであるように見える。辮髪が突然オールバックの髪型になるはずもなく、カツラだろう。

注目してほしいのは、ステッキの先にある柱である。上に鉢植えが飾ってあるものだ。これは肖像1でしめした支柱と同じものである。そのつもりで見ると、肖像1で兄の後に岩があるが、これと肖像3の劉鉄雲が腰をあずけている岩が同じものだということに気づく。どうやら同じ写真館で撮影したものと思われる。背景画を取りかえ、タイルの床には敷物を置き、さらに岩の前にも鉢植えを配置して雰囲気を変えたのである。劉鉄雲が着ている洋服、帽子、ステッキおよびカツラは、写真館が用意している貸衣裳だろう。もしこの写真が1902年に撮影されたとするならば、肖像1、肖像2も同時に撮られただろうから同じく1902年のものということになる。

肖像4（部分）と**肖像5**（全体）

肖像4と肖像5は、前述のとおり部分と全体である。もともとは１枚の写真でありながらまず劉鉄雲を含んだ集合写真「全体」(肖像5）が公表された。のちに劉鉄雲部分（肖像4）を取りだして発表された。部分から説明する。

○肖像4（部分）

掲載誌：魏紹昌編『老残遊記資料』北京・中華書局1962.4 初出

撮影年：1905年と1906年の２説があるが、1906年だろう

劉鉄雲四十九歳（1905)、北京で撮影、とのみ説明される。劉鉄雲が白い長衣を着て、岩壁の前に立っている。左手を岩の一部に置き、右手は岩に肘掛け、右足をななめ前に出し休めの姿勢をとる。表情は和らぎ、微笑んでいる。なにか嬉しいことがあったかのようだ。いかにも劉鉄雲ひとりだけを撮影したもののようだが、実は、これは集合写真である。劉鉄雲部分だけを切り離したものだ。部分を拡大してこれだけはっきりと写っているのだから、もとになった写真はよほど鮮明に撮られていたと思われる。もとになった全体写真は、次の肖像5である。劉蕙孫の著作から引用する。あらかじめ述べておくが人物名を間違えている。

肖像5（全体）

○肖像5（全体）

掲載誌：劉蕙孫『鉄雲先生年譜長編』済南・斉魯書社1982.8 初出

撮影年：1905年と1906年の２説があるが、1906年だろう

1981年３月、私はこの集合写真と同じものを劉徳威氏よりいただいた。もとのネガから焼き増しした原版写真ではない。原版写真をカメラで複写したものだ。劉鉄雲の上方に白い反射したような部分があるのが証拠である。複写する時、写真に光が反射したものと思われる。写真裏に氏の筆で「劉鶚四十九歳（1905[ママ]）与琴師在北京寓中」と書かれている。岩の壁の前に作られた階段に４人の男性が立っている。左の３人は、両足をそろえ両手も下に下ろしたままの姿であるが、右の劉鉄雲だけは、肖像３で説明したようにポーズをとっているのがおもしろい。

その後、劉蕙孫『鉄雲先生年譜長編』に同じ写真が掲載され、その説明に「劉鉄雲在北京寓所造『千仏岩』邀集友好趙子衡（右三）、王孝禹（右二）、琴師張瑞珊（右一）欣賞」と書かれているのに気づいた。この岩の壁が「千仏岩」というもので、劉鉄雲が作らせたという。

同年譜長編（127頁）では、劉鉄雲日記光緒三十一（1905[ママ]）年七月二十一日の記述「……午後、千仏岩が落成し、王、趙を見学に招き、晩飯を吃す」を引用する。説明によると、この集合写真は、劉鉄雲所蔵の崔敬邕碑に貼られていたという。劉鉄雲本人のほかに劉大紳が見知っているのは、王孝禹、趙子衡、張瑞珊の３人だと書いてある。張瑞珊は、北京で有名な琴師で、劉鉄雲が師事していたのだそうだ。写真を見た劉大紳が、写っている人物をそうだと特定したのだろう。そこ

で『野草』第33号（1984.2.10）において清末小説特集を編集したとき、この写真を転載し、劉蕙孫の説明によってそれぞれの人物に以上のとおりに名前を示した。

よく考えてみれば、劉蕙孫の説明は、すこしずれているように感じる。劉鉄雲日記には、王と趙のふたりだけを招待している。張瑞珊の名前は書かれていない。日記の記述と写真の人数が合致しないとなれば、その時の写真ではないと気づいてもよかった。これは後から言えることで、劉大紳の証言を疑う根拠は、当時、私にはなかった。

同じ集合写真に違う説明をつけた文章がある。それを読んで、私も考えてみる気になった。

羅継祖輯述『羅振玉年譜』（台湾・文史哲出版社1986.11）に掲載されている。私が劉徳威氏よりいただいた写真と同一のものらしい。ただし、『羅振玉年譜』が掲載する写真の方が原版だと思う。劉鉄雲の上方に白くなっている部分が小さい。上は劉鉄雲たち。下は羅振玉（右）と王国維（左）。

上　光緒卅二年（一九〇六）羅振玉與友人同攝於丹徒劉氏抱殘守缺齋（北京）左起王孝禹（壿）羅振玉、方葯雨，劉鐵雲（鶚）時羅振玉四十一歲

下　羅振玉與王國維中華民國五年（一九一六）春攝於日本京都淨土寺町永慕園，時王將返國去上海。是年羅五十一王年四十

『羅振玉年譜』の写真は不鮮明だ。全体を示すだけにして写真は別のものに差し替える。該書から説明文を抜き出しておく。

『羅振玉年譜』

『羅振玉年譜』の説明「上　光緒卅二年（一九〇六）羅振玉與友人同攝於丹徒劉氏抱残守缺斎（北京）左起王孝禹（瓘）羅振玉、方葯雨，劉鉄雲（鶚）時羅振玉四十一歳」

『羅振玉年譜』の説明「下　羅振玉與王國維中華民國五年（一九一六）春攝於日本京都浄土寺町永慕園，時王将返去上海。是年羅五十一王年四十」

ウェブ上において王凱「老残劉鶚的謎様人生」(『海南日報』2016.7.4電字版）を見つけた。肖像5（全体）の元写真と思われる。写真右上に光の映りこみがないからだ。こちらを掲げる。この写真は別のウェブサイトにも見ることができる。電子複写だからどこが初出かわからない。

『羅振玉年譜』の説明は、劉蕙孫とは異なる。右端の劉鉄雲を除いた３人は、左から王孝禹、羅振玉、方葯雨であり、1906年撮影だという。劉蕙孫が指摘した人物と共通するのは、王孝禹だけだ。ただし、『羅振玉年譜』は、その人物は羅振玉だとする。

『羅振玉年譜』の下に羅振玉と王国維の写真が掲げてある。これと比較対照すると３人の中央は羅振玉だといっていい。はっきり写っている同じ写真を存萃学社編集『羅振玉伝記彙編』(香港・大東図書公司1978.12）から引用する。

肖像5（全体）劉鉄雲の右隣（向かって左）は、誰か。

橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（北京・中華法令編印館1940.10.25初版／名著普及会復刻1982.3.20）に方若（葯雨）の肖像が付けられている。この写真を見ると年齢に差はあるが、劉鉄雲の右側の人物によく似ている。

羅振玉と方葯雨の写真にもとづけば、３人ともに『羅振玉年譜』が指摘する人物に違いなさそうだ。

では撮影時期は、いつか。劉蕙孫のいう1905年か、それとも1906年か。

『羅振玉年譜』（33頁）はつぎのように説明する。光緒三十二年丙午（1906）八月、劉鉄雲は、揚州の成氏所蔵になる崔敬邕墓誌を入手した。同好の士である王孝禹、方葯雨および羅振玉をその抱残守缺斎に招いて一緒にめでたという。

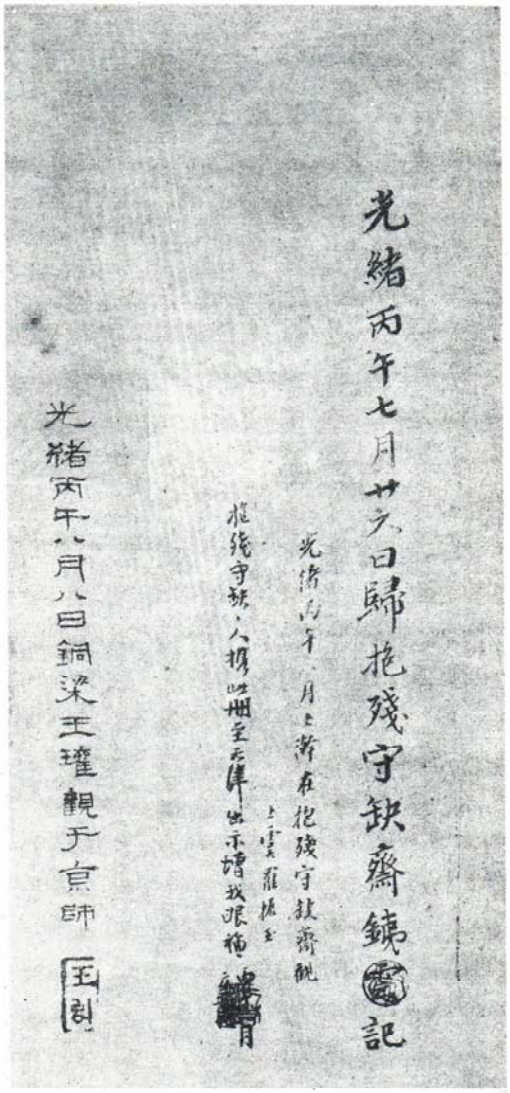
崔敬邕墓誌の拓本というのは、きわめて得にくいものだったらしい。墓誌は清の康熙年間に出土したが、いつのまにか行方不明になったため拓本は少ないという。方若原著・王壮弘増補『増補校碑随筆』（上海書画出版社1981.7第一版／1984.2第二次印刷。291-293頁）は、世に伝わる５種類について記述する。劉鉄雲と関係者の名前が見える部分のみを紹介しよう。

その１　端方藏濃淡拼合本。王懿栄は、濃墨拓の後半本をまず入手した。王没後は劉鉄雲の所蔵になった。劉鉄雲は、全本を揚州の成氏より入手する。この半本は、王孝禹の手を経て端方のものになり、端方が劉健之から贈られた淡墨前半本と合わせて１冊にしたもの。現在は、上海図書館所蔵。

その２　劉鉄雲蔵成氏本。劉鉄雲が、丙午（1906）秋に揚州の成氏より全文本を入手した。劉鉄雲は、日本に委託してコロタイプ（写真製版のひとつ）で100部を影印し同好の士に贈呈した。それには劉鉄雲、方葯雨、王孝禹、羅振玉の集合写真が１枚収められている。拓本そのものは、のちに王孝禹の所有に帰し、王孝禹没後は、毘陵の陶氏のものとなり、現在、行方不明。

影印本が出ている。劉鉄雲収蔵『崔敬邕墓誌銘』(台湾・藝文印書舘1976.3）に説明と集合写真が掲げられる。劉鉄雲が日本東京芝区烏森町吾妻屋旅館で書い

崔敬邕墓誌銘
此誌石久佚拓本傳世甚稀而書
法寶爲北魏碑誌之冠流傳人間
都不知者一兩本而已直與西嶽華
山碑等重而子八月得此本於京師
揚州成氏所藏也用日本寫真收印
百部分贈同好共欣賞者鋼梁
王孝禹上虞羅叔蕓定海方藥雨
下方寫真由左而右是也
光緒丙午八月二十五日丹徒劉鉄雲記於
日本東京芝區烏森町吾妻屋旅館



た。これこそが集合写真の初出だと思われる。該書のうしろに劉鉄雲が入手をした日付「光緒丙午七月廿六日」が記入される。これも写真で示す。

その３　劉健之藏本。これはまずコロタイプで影印され、四司馬墓誌と１冊にされ、のちに羅叔言の所有となった。日本・博文堂が再度影印している。梁鼎芬、莫枚、沈曽植、王孝禹、羅振玉の題記がある。

その４　費念慈藏本。略。

その５　南京博物院藏本。略。

角井博「墓誌銘集（上)」(『墓誌銘集＜上＞』中国書法ガイド25。二玄社1989.8.10。12頁）にも拓本について言及があることをいっておきたい。上ほど詳しくはなく記述の食い違う部分が少しある。

説明を読んでみれば、なるほどきわめて貴重な拓本であったのだ。その全文を入手した劉鉄雲の喜びも想像できよう。同好の士を招待して喜びを分かちあった。だからこそ記念写真を撮る気にもなったものと想像できる。どうりで劉鉄雲はニコニコと笑みを見せているはずだ。崔敬邕墓誌拓本を手に入れたことがよほど嬉しかったのだろう。

ついでにいうと、劉鉄雲乙巳日記（1905）には、羅振玉、王孝禹、方葯雨の３人が集合する日がない。1906年分の日記は残っていない。

肖像5（全体）は以上のとおり、1906年、方葯雨、羅振玉、王孝禹が、劉鉄雲の

抱残守缺斎に集まり、入手した崔敬邕墓誌を楽しんだ記念に撮影したものとしていいだろう。

肖像6

掲載誌：武禧「劉鶚与羅振玉」葉立生主編『五味雑陳話劉鶚——紀念劉鶚逝世一百周年』北京・中国文史出版社 2009.3 初出

制作年：1909年？

本稿を『清末小説から』第40号に発表後、劉徳隆氏より劉鉄雲の肖像はもう１枚あると知らされた。これであろう。

武禧は、肖像6について「羅振玉題劉鶚遺像」と説明している。写真で見る限り添え書きが小さすぎて読めない。かろうじて冒頭が「宣統元年」らしく見える。劉鉄雲は新疆迪化（ウルムチ）で同年旧暦七月初八日に死去した。「鉄公遺象」だから死去後のものだ。これは写真ではないように思う。写真ではなく肖像画であれば「鉄公遺象」などと題辞を書き込むことができる。しかも、顔の表情が若く同時に厳粛な雰囲気を感じさせるように描いてある。「遺象」だからだろう。

肖像6は、以下にも収録されている。

劉徳枢『吾家家世』2009.11私家版

劉蕙孫子女編『翰墨清芬　劉鶚 劉大紳 劉蕙孫三世手迹輯存』壱号文化伝播有限公司　刊年不記（2014）

王凱「老残劉鶚的謎様人生」『海南日報』2016.7.4電字版

肖像7

掲載誌：李雪萌「尋找人文済南的“老残茶館”」『山東画報』2013.6.8

撮影年：不明

北京に「老舎茶館」があるのだから済南には「老残茶館」があってもよい、という主張を展開する。それに添えられた写真だ。写真について李雪萌は解説していない。編集者が挿入したと考えられる。出処を示さない。

写真左上に書き込まれた「劉鉄雲鶚」は鉄雲本人の手になるものかどうか。この写真はいままで関連書籍に収録されたことはたぶんないだろう。顔の表情からすれば壮年の頃だろうか。詳細は不明。劉徳隆氏に知らせた。見たことがないという返答だった。

番外

肖像4（部分）にもとづき肖像画に作り直したものがある。彩色をほどこす。主としてウェブ上で見るが書籍などに使われている可能性もある。出来がいいとは思わないからここに引用はしない。

【補記】

筧文生氏よりハガキをいただいた（1996年１月３日付）。「「崔敬邕墓誌」につい

て。それが北魏熙平二年（五一七年）のもので、清康熙十八年河北安平出土のものであることは、書いておいてほしかったと思います。でないと劉鉄雲らがなぜ貴重視したかが分かりにくい。……」

ご指摘ありがとうございます。

『清末民初小説目録』に「新編」とつける理由

『清末小説から』第45号（1997.4.1）に掲載。旧版『清末民初小説目録』を増補訂正して大幅に収録小説件数を増やした。典拠資料を明記するなど工夫をこらしたため「新編」と名付けることを述べた短文。

魏紹昌主編『中国近代文学大系』第12集第29、30巻史料索引集１、２（上海書店1996.3、7）は、清末民初の小説を中心とした資料集として注目に値する。

年表、雑誌目録、紹介、研究文献目録によって構成される。貴重な雑誌、文芸新聞も収録紹介していて有用である。

上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』全６冊(上海人民出版社1965.12／1980.7-1984.8）が、雑誌の細目を集成し、まことに便利だった。史料索引集には、この大部の彙録にも収められていない雑誌を探しだしているのがよろしい。とくに文芸新聞は、珍しいものを多く紹介していて、まことに驚嘆するのだ。

新しい資料は、座っていては出てこない。地道な作業によってようやく日の目を見る。資料発掘作業は、論文を書くことに較べて低く見られる傾向があるのではないか、と私は疑っている。論文の基礎となる資料を軽視することにならないのか、この矛盾に気がつかないのも不思議なものだ、などと思ったりする。

有用な資料は、有用だからこそ大いに活用すべきだ。史料索引集に収録あるいは紹介された小説は、現在も増補訂正作業を継続している『清末民初小説目録』とまず照合する。目録に未収録の作品は、取り入れる。字句に異同があれば、注記する。これらの作業をくりかえした。

約6,800件の項目を照合し、そのうち約1,000件を目録に追加する結果となる。

刊行を準備中の新しい『清末民初小説目録』は、創作10,869件、翻訳4,865件、合計15,734件で作業をほぼ終了した。各作品について出典を明記するなどして、数量ともに以前の目録とは異なる。これが、「新編」と題する理由なのだ。

【補記】

「新編」とつけた目録は、次のとおり刊行した。樽本編『新編清末民初小説目録』[第２版]清末小説研究会1997.10.10

清末小説研究ガイド９７序説

『どんなんかな？「学問」――専門分野へのアプローチ――』『大阪経大論集』別冊第４号（1997.11.15）に掲載。論文を論文として成り立たせている条件、研究者の型、私の経験、日本における清末小説研究の情況などを述べる。研究分野としての清末小説が研究者の死角となっていることと合わせてその研究方法の例を紹介することが目的である。『清末小説研究ガイド2005』に収録。

清末小説研究に必要な文献を案内する「資料篇」（『大阪経済大学教養部紀要』第14号1996.12.31。具体的な文献資料の解説と作家名索引、書名索引）と同時に書いた。本稿の中にカッコで数字をつけたのが「資料篇」の番号だ（無視してほしい）。本来は１本にすべきだったが、分量が多すぎるので二分して発表。発行が１年近くずれているのは、単なる発行遅延であって，別に意味はない。研究ガイド風の文章は、さかのぼれば『中国近現代文学研究ガイド』第１版（中国文芸研究会・咿唖之会編発行1985.12.1）の「第２部清末文学」および「本書の使い方」が最初だ。その後、清末小説部分だけを増補して「清末小説研究ガイド」（『清末小説』第10号1987.12.1）を書く。その後、中国文芸研究会編『図説中国20世紀文学』を企画編集する。最初は、研究会による出版を予定していたが、担当責任者の怠惰と勝手な判断で出版社の発行となった（白帝社1995.3.20）。該書は、人物を中心に配列している。その研究資料部分を充実させればより利用しやすい研究ガイドができると考え提案着手する。しかし、これは結局実現しなかった。本稿には、加筆した。

１　論文の条件

研究論文を成立させている条件は、ただひとつしか存在しない。すなわち、新

しい発見があるかどうかだ。

発見である

発見とは、なにか。ほかの研究論文では指摘していないことを書く、見逃されていた新事実をとりだす、誰も気づかなかった側面を展開させる、などなどである。核となる発見がない場合は、研究論文ということはできない。

発見を論文の核とすれば、その表われかたにはいくつかある。

作家研究の場合は、知られていなかった新事実を発掘する、未知の作家に光を当てる、別の側面を引きだす、などだ。

作品研究の場合は、未知の作品を発掘する、新しい読み方、解釈を提出する、等々である。作品の真偽が問題になることもあろう。

資料の場合は、作家、作品に関する新資料を発掘する。それにより新しい作家像、作品解釈が生まれてくれば、さらによろしい。文献資料を編纂することも重要だ。

いちばん避けなければならないのは、すでに発表された他人の論文に全面的によりかかっただけの、発見のない文章を書くことだ。もとの論文がすでに公表されているのだから、なにもそのなぞりをあらためて発表する必要はないではないか。既知の事実であっても、いくつかを組み合わせて従来とはまったく異なる別の側面を浮かび上がらせるとか、せめて間違いを指摘するとか、なにか新味を加えてほしい。

資料である

私が強調したいのは、資料発見整理の重要性だ。作家研究、作品研究だけが研究ではない。

研究者のなかには、資料の発見整理を軽視するひとがいる。以前からいわれていることだが、その傾向が今にいたるまで根強く残存している。事実の発見を重視しない。

1996年、香港で国際学会が開催され、私も参加した。中国近代文学における翻訳が、中心議題である。私は、日本語経由で欧米の作品が漢語に重訳されている

ことについて発表した。それはいいのだが、他の報告を聞いていると、その中に、清末の一部翻訳小説を一覧表にして配付した研究者がいた。一覧表に呉趼人の「電術奇談」（1903年初出）を掲げている。上海の研究者から資料の援助をえたという。

「電術奇談」は、日本・菊池幽芳の作品を呉趼人が翻訳したことで有名だ。しかし、菊池幽芳の原作が何であるのか、指摘した研究者はいなかった。1985年、私は、それが「新聞売子」であるのをようやくつきとめた。この事実は、清末小説研究会編『清末民初小説目録』（日本・中国文芸研究会1988.3.1）にも盛り込んである。

香港の研究者が、「電術奇談」を翻訳としているところまでは正しい。ところが、その人は、『清末民初小説目録』の存在を知らないようなのだ。上海の別の研究者から情報を伝えられたにもかかわらず、肝心の菊池幽芳作「新聞売子」を脱落させている。上海の研究者が採りこぼしたのか、香港の研究者が脱落させたのか、それは不明だ。だが、事実の発見からすでに10年が経過している。『清末民初小説目録』の発行からもほぼ10年になろうとしている。それにもかかわらず、底本である菊池幽芳原作「新聞売子」を掲げないという誤りが、根強く継続される。

菊池幽芳の「新聞売子」を知らないことから、いかなる現象が出現するか。

呉趼人は、翻訳したのではなく「再創作」したのだ、と短絡するのである。1930年代に孫楷第が根拠もなく言いはじめた「すでに翻訳という性質のものではない」*1が、大事に語り継がれていく。先達の記述を強く守るほどに、中国の研究者は、義理堅い。呉趼人「電術奇談」を創作として扱い、内容提要、年表などにも創作の部に編入する結果となる。「新聞売子」を入手する努力をしないで、口移しに「再創作」をくりかえす。知ろうとすれば、いくらでも手段はあるだろう。それにもかかわらず、以前と同じく不十分な記述で終始しており、またそれを不思議だと思わないのは、資料の発見を軽視していることにほかならない。

こういう例もある。1995年、韓国ソウルで韓国中国学会国際大会が開催された。私は、清末に開催された経済特科に、有名な作家・李伯元と呉趼人が同時に推薦された事実を突き止めたことを報告した。

以前は、李伯元と呉趼人の経済特科推薦に関して、記述は混乱していた。

推薦は1901年だった、いや1903年だ、李伯元の推薦には言及するが、呉趼人には触れない、李伯元が1901年に推薦され、呉趼人は1903年だなどとまちまちでどれが正しいのかわからない。魯迅、阿英、魏紹昌たち、いわゆる「権威」の記述を全面的に取り入れて勝手に書きちらしていた。李伯元と呉趼人の経済特科に関しては、事実の発見にとりくむ文学研究者が、中国には百年近くも出現しなかった結果なのである。

私は、当時発行されていた1902年の新聞記事に、李伯元と呉趼人の名前を発見した。李と呉のふたりが、同時に経済特科に推薦されていたのだ。これで過去の研究のほとんどすべてが、誤りであったことが判明した。

国際学会では、報告に対して論評を加える人がいる場合がある。私の報告を論評した年配の研究者（論評するためにわざわざ中国から参加していた）は、1901年だろうが、1902年であろうが、1903年であっても、１年くらいの違いで大した問題ではない、という意味のことを発言された。その研究者は、大学で博士課程の学生を指導する資格を持っていると名刺に書かれている。１年くらいの違いは無視して、もっと「大きな問題」を論文のテーマに選べと学生を「指導」するのだろう。なるほど百年近くにわたって、中国で誤りが踏襲されていて、訂正する研究者が出現しなかったのも無理はない、と納得がいったのだった。

資料を重視しない研究者も、その資料にもとづいて研究をせざるを得ない。よってたつ基盤が軟弱では、立論そのものが成立しにくくなることに気づいていないといえよう。

2　研究者の型

研究者といってもいろいろな型がある。それぞれが違う気質にもとづいていることはいうまでもない。

気質である

つまり研究者には、研究の内容によって向き不向きがあるといいたいのだ。

「こうあらねばならい」と自分で決めつけ、自分の気質に合わない作業をイヤイヤやるのは、その人にとって不幸である。それでもやる、というのなら、弱音をはかないでもらいたい。泣き言など聞きたくない。また、書評で他人の研究を批判するヒマがあるのなら、資料の発掘に努めてもらいたい（オッ、これは私のことであった）。私に言わせれば、研究ぐらい、自分の好きにさせてほしいものだ。

研究者の型を大きくふたつに分ける。基礎研究（コツコツ）型と総合研究（ヒラメキ）型である。

基礎である

基礎研究は、資料の発見整理などを主としていう。資料整理には、だいたいが長い時間を必要とすることが多い。文献目録でいえば、ただ研究室に座っているだけでは作成することができない。集書から始まる。書店に足を運ぶ、目録で注文する。また、図書館、研究機関に出向いて蔵書を閲覧する。蔵書目録を丹念に追跡して必要な文献をすくいあげる。雑誌、単行本に掲載された論文を蓄積しておく。いずれの作業にもコツコツと従事する辛抱強さが要求される。このコツコツ型は、その作業自体を楽しむことができる人でなければ続かない。将来、電脳通信（注：当時の用語。今でいうインターネット）が発達すれば、文献の探索に変化が生じるだろう。しかし、資料探索の手順は、ほとんど変わらないと考える。

総合である

総合研究は、大きく想像力を働かせ、立論の斬新さで引きつけるものだ。事実の裏付けをともなわない総合研究は、単なるホラ話である。それなりの面白さはあるが、研究とはいいにくい。事実に根ざしたヒラメキは、結実すればすばらしい。最終的には、文章のかたちにしてほしい。事実にもとづいた論理で説得してほしい。話だけを聞けばなるほどと納得してしまいそうだが、論文にしてみると穴だらけでとても研究論文として成立していないという可能性もある。

万能である

第三の型の研究者も、当然ながら存在する。緻密な事実探索を行ないながら、

大きな問題を組み立てる研究者だ。基礎と総合を統合する、いわば万能型である。コツコツとヒラメキを合体させて、「コツメキ」型である。ただし、その数は多くはない。

私の立場は、基礎研究と総合研究に格差を認めない、それぞれに重要な仕事であると考えるものだ。万能型は、それですばらしいが、研究者はすべて万能型でなければならない、というわけでもない。だから、気質である、向き不向きがある、というのだ。

研究者の「あるべき」型は、ない、というのが私の主張である。何を研究してもよろしい。研究者はみずからの気質によって、それぞれ、コツコツに本領を発揮したり、ヒラメキを得意としていたり、コツメキに輝いたりするのだ。最低限の要件は、ただひとつ、「発見」である。発見のある資料や文章を提出したいものだ。

3　イモヅル方式と原本主義――私のやり方

発見のある文章を書くには、いくつかの作業をこなさなければならない。研究対象が、どの水準にあるのか、なにがわかっていて何が不明であるのか。研究情況を把握していなければ、「発見」がはたして本当に「発見」であるかどうか判断が下せない。つまり、問題の所在を明らかにするための準備である。

疑問である

問題の所在と口でいうのは簡単だが、見つけるのはむつかしい。問題そのものはどのようにさがすのか。大きな問題だ。色々な場合があるだろう。自分で自主的に探しだすとなれば、「疑問」を感じたところから出発するほかないだろう。

「なぜ」から始まる。関連する複数の論文を読み、引用文があればもとの文章を探す、注がついていればその文献を探索する。イモヅル式に文献を収集していき、同時に原本にあたるよう努力する。これが、私のやり方なのである。

一般的な調査の手順と、やや特殊な例をそれぞれひとつずつ挙げて説明しよう。

既知である：一般的調査の概略――劉鉄雲「老残遊記」の場合

既に知られていて、ありふれたことのように見える。しかし、その実、さぐってみるとこれが意外な発見につながった、という例をあげよう。劉鉄雲「老残遊記」二集である。

今から約20年前にさかのぼる。1975年当時、中国では依然として「文化大革命」が継続中で（「文革」の終了は1976年）、研究は中断していた。日本でもその影響を受け、清末小説を研究対象にしている研究者はほとんど存在しなかったといっていい。

劉鉄雲「老残遊記」二集（続集ともいう）を翻訳した飯塚朗の解説*2にある。「老残遊記」の制作発表過程は、次のように信じられていた。

１．1903-04年

『繍像小説』第9-18期に連載された。13回（実質14回）。ただし、原稿第11回は削除されている。

２．1904年

『天津日日新聞』に初集20回を連載、完結。

３．1905年

劉鉄雲日記に「老残遊記」巻11執筆の翌日巻15を書くとあるのは、二集を指す。

４．1907年

『天津日日新聞』に掲載されていた。

以上の経過をたどったものだといわれている。

いきなり細かい説明になってしまった。具体例をあげるとそうなる。ご了承ねがいたい。

劉鉄雲「老残遊記」について知ろうとしても、当時の「１．事典」と「２．文学史」には、あまり詳しいことは書かれていない。ただし、「３．研究叢書」に示した専門資料集である魏紹昌編『老残遊記資料』（北京・中華書局1962.4。采華書林影印本あり）に収録された文章によって疑問の存在を知ることができる。

1962年時点で、劉鉄雲日記の記述についてすでにふたつの疑問が提出されてい

るのだ。

ひとつは、「老残遊記」二集第11回が執筆された翌日に第15回を書いていおり、第12-14回はいつ書いたのか不明で不自然だということ。

ふたつ目は、二集第11回が1905年に執筆されているにもかかわらず、その新聞掲載が２年後の1907年というも説明できない。

大きな疑問だ。これに答える文章は、中国において提出されなかった。飯塚論文も『老残遊記資料』にもとづいて記述されている。だが、疑問が存在しているなどとは書いていない。

研究論文を読んでいただけでは、問題は解決できなかっただろう。疑問をときほぐす糸口がどこにもないからだ。その場合は、自分の身体を動かす。自分から動いて資料を探索する過程で、きっかけをつかむ機会にめぐりあうこともある。

私は、そのころ「老残遊記」関係の資料と研究論文を収集していた。原本の雑誌を探して天理図書館、京都大学人文科学研究所（６．蔵書目録に雑誌が掲載されているものがある）などへ足を数回運んでいる。研究文献だけではなく、「老残遊記」の版本そのものを調査する必要があった。各種版本間の字句の異同を比較対照していたのだ。やらなければならない仕事だったといえよう。

京都大学の中央図書館を訪れる機会があった。念のために図書カードを調べてみた。ほとんど見たことのある版本ばかりだ。ところが、１枚のカードに「『老残遊記二集』九巻光緒三十三年天津日日新聞排印本」と書かれているのに気づいた。表示から想像するに、これは初出本に違いない。まさか、日本に二集の初出本があろうとは、想像すらしていなかった。京大人文科学研究所の所蔵だと書いてある。歩いて15分くらいの距離だ。その時は、『老残遊記二集』の所在がわからないと司書からいいわれ（研究所のだれかが借り出していたのだろう）、日をあらためて訪問したことを覚えている。

図書カードを見たのは、偶然である。図書館の蔵書は、増加しつづけている。所蔵目録に掲載されるまで時間のズレが生じる。私は、そのズレにたまたま遭遇したことになる。幸運だったのだろう。「幸運」と書けば、文字通り受け取る人がいるかもしれない。確かに「幸運」だったろうが、私がそれに気がついたのは、「老残遊記」の版本のことを考え続けていたからだ。求めていたから私の目につ

いた、というのが事実だと思う。その証拠に、図書カードを見た研究者は、私以外にも多く存在しただろうが、誰ひとりとして新発見に結びつけることができなかった。

帙に収められた該書を見ると、新聞からの切り抜き本であった。途中ほんの少し脱落があるが、掲載月日が明記されているのが貴重だ。本文の裏にある広告から、その連載時期は1907年だと確認することができる。この切り抜き本は、きわめて珍しい。中国でも、今にいたるまで二集の原本を所蔵する研究機関があるとは聞いていない。中国の研究者でこの二集に言及している人がいるとすれば、所蔵を明示していなくても、京大人文研所蔵本を指していることは間違いない。

さて、「老残遊記」二集初出の出現によって、上に見る疑問はどうなるか。

１の『繍像小説』連載と、４の『天津日日新聞』連載の二集は、初出の発見によって動かすことのできない事実であると断言できる。

問題は、必然的に、残る２の「1904年『天津日日新聞』に20回を連載、完結」と３「1905年劉鉄雲日記に「老残遊記」巻11執筆とあるのは、二集を指す」のふたつとなる。

ここで思いだしたのが、「老残遊記」初集の第11回は、『繍像小説』の編集者によって没原稿にされた事実である。３で示された二集巻11は、没になった初集第11回ではないのか。「二集巻11」ではなく、「初集巻11」だと思いついた瞬間に、すべての謎がとけた。

劉鉄雲日記の記述をよく見てみれば、どこにも「二集」とは書かれていない。引用者が勝手に二集だと決めつけているにすぎない。清末小説研究の「権威」阿英が断定したことである。それに後の研究者は惑わされた。

事実は、こうだ。

劉鉄雲は、没書になった初集第11回の原稿を1905年になって復元した。第12-14回の原稿は、すでに『繍像小説』掲載のものがある。あらためて書く必要はない。翌日に第15回原稿を書いているのは、だから、当然のことなのだ。劉鉄雲日記に見える原稿は初集についてのものだった。

そこまでわかると、２の「1904年『天津日日新聞』に20回を連載、完結」の年代が間違っていることに気づく。私は、初集の『天津日日新聞』連載は、1906年

前半だと推測した。なぜ推測かというと、「老残遊記」初集を掲載した『天津日日新聞』の原物を確認することができないからだ（注：「老残遊記・自序」が掲載されたのは1905年だった。郭長海「劉鉄雲的佚詩和几件聯語」『清末小説』第33号　2010.12.1）。

論文の核となる部分が見つかった。これで論文を執筆することができる。目途がたった時点で、つぎにやらねばならぬことがある。まわりを見まわす。自分が書こうとしていることについて、すでに他の研究者が論及していないかどうかを点検することだ。

「老残遊記」二集に取り組んでいた頃は、周囲に目を配る必要はなかった。前述のように、中国では「文革」中であり「老残遊記」関係の研究論文は発表されなかったからだ。

私が「天津日日新聞版「老残遊記」二集について」を書いて自身の見解を発表したのは、『野草』第18号（日本・中国文芸研究会1976.4.30）誌上であった。1984年、天津に長期出張をしたとき、入館料金を支払って訪れた南開大学図書館で、ひとつの報告書が書架に置いてあるのに気がつく。中国社会科学院文学研究所動態組編『文学研究動態』1982年第10期だ。見れば、私の『野草』掲載論文を紹介する文章（草平輯）が載っている。日本から中国・北京へ、情報が伝わるのに６年かかったことになろうか。現在と比較すれば隔世の感がある。

未知である：特殊な例――商務印書館の場合

事典、文学史に記述を見ることができない、特殊な分野を研究するときには、どうするか。商務印書館を例にして述べる。

清末小説を背後で支えていたのが、出版社である。近代的出版社の代表は、上海・商務印書館を第一にあげなければならない。名前のごとく、最初は印刷請け負いの印刷会社として創立された。教科書出版に進出し、経済基盤を確立した。はやくから文芸関係の雑誌を発刊し（前出『繍像小説』は商務印書館の発行である）、同業者との熾烈な競争を経て中国最大の出版社となる。

その商務印書館が、清末から民国初期にかけて、つまり1903-1914年の実質約10年間、日本の金港堂と合弁会社であった事実を知る人は多くない。商務印書館自身が、日中合弁会社であった事実を隠そうとしたし、日本では、あれだけ隆盛

を誇った金港堂自体が現在では消滅してしまっている。関心を呼ぶはずがない。

私が、商務印書館に興味を持つきっかけとなったのは、次の年表の記述だった。日本語に訳す。

［中国出版史料補編1957］

「商務印書館大事紀要」

1914年　日本株を回収する（1903年、日本・金港堂が上海に来て印刷会社の設立準備をはじめた。本館は、しばらく日本商の資本と技術を利用していたが、本年にいたり全ての日本株を回収した）。*3

1914年に日本株を回収して「完全華商」となったのはいい。

奇妙に感じたのは、1903年の項目において日本・金港堂と合弁会社となったことを述べないで、1914年にまとめている点である。記述の都合上、1914年に集めたのかもしれない。しかし、年譜であれば、時間の順序に説明するほうが整合性が保たれるのではないか。

ほんの些細なことである。しかし、なにか腑に落ちなかった。これが商務印書館の合弁問題を調べるきっかけとなった。

日中の出版関係といえば、実藤恵秀の著作を見るのが決まりである。今、思いだしたのだが、そうするように人に教わったわけではない。研究雑誌をながめていたら、自然にその人の研究守備範囲がわかったのだ。

実藤恵秀の記述によると、商務印書館自身が「中日合資時期（光緒二九－民国二(ママ)）」と書いているのだ。光緒二十九年とは、西暦1903年であり、民国二年は、1913年にあたる。さらに、商務印書館へは日本人が参加していたとある。

［実藤恵秀1940］

……商務印は金港堂より十万円の資本を迎へると同時に、印刷専門から、印刷出版へと飛躍する。編訳所の編輯長には高師教授たりし長尾雨山を迎へ、その下に日人並に留日畢業生の編輯陣を布いて……*4

長尾雨山が商務印書館で働いていた。そういうこともあったのか、とその時は思っただけだった。ところが、実藤は、商務印書館がその文章のなかで長尾雨山に言及していないと立腹している。

> 右の一文は民族意識の高まつて来た民国二十年に書かれたものであるとはいへ、われわれから見ると長尾雨山の抹殺の如きは甚だ科学的でないと思ふ。*5

まず、実藤恵秀が文章の中で、商務印書館のことを「甚だ科学的でない」と怒っているのに、私は驚いた。長尾雨山の名前が商務印書館の記録に出てこないだけで、そこまでいうのか、とますます腑に落ちない。そういう目で文献を見てみると、なるほどおかしなことがあるのだ。

実藤恵秀が述べている商務印書館と金港堂の合弁について、まったく無視する文献もあった。

本文が1,101頁もある巨冊王雲五『商務印書館与新教育年譜』（台湾商務印書館1973.3）には、金港堂との合弁が記述されていないのだ。金港堂はおろか合弁という単語さえ、ない。不思議としかいいようがないではないか。なぜ、事実を無視するのだろうか。ますます調べたくなる。

> ［アジア歴史事典1960］
>
> 商務印書館　中国の出版会社。1897年＜ノース・チャイナ・ヘラルド＞の印刷工夏瑞芳（略）が、義兄で同僚の鮑咸恩・鮑咸昌兄弟、高鳳池と合資4,000両で上海に設立、1903年日本金港堂の機械設備・技術を導入し、日本との合辦となったが、14年これを買収した。（略）*6

金港堂は出てくるが、長尾雨山の名前はない。

ついでに、中国、日本で出版された最近の事典も見ておこう（漢語は、日本語に翻訳する）。

陳旭麓、方詩銘、魏建猶主編『中国近代史詞典』（上海辞書出版社1982.10）には、

商務印書館の項目がない。

［中国現代文学事典1985］

商務印書館　一八九七年創立。創立者は夏瑞芳、鮑咸思(ママ)、鮑咸昌、高鳳池。のち張菊生、高夢旦が加わる。一四年、日本金港堂の株を完全に回収。（略）*7

鮑咸思は、鮑咸恩の間違い。1914年の金港堂株を回収を述べて、合弁の開始がいつなのか書かれていない。

［中国大百科全書1990］

商務印書館　中国近代の出版事業において歴史の最もふるい出版機構である。清光緒二十三年（1897）上海に創業され、（略）。創業者は、夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌、高鳳池たちである。（略）1905(ママ)年、日本の書店と合資し株式会社となる（略）。*8

日本・金港堂との合弁は、1905年ではなく、1903年だし、合弁解消についても言及がない。

［出版詞典1992］

商務印書館　清光緒二十三年（1897年）上海に成立した。夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌、高鳳池が創業し、のち張元済、印錫璋が加入する。*9

金港堂と合弁会社であったことには一言も触れない。専門論文でいくら事実を明らかにしても、事典の記述にはなかなか反映されない。ここらあたりが事典としての限界なのだろう。

［集英社世界文学大事典５　1997］

商務印書館　中国の出版社，1897年創立。創立者は夏粋芳，鮑咸思(ママ)，鮑咸

昌，高鳳池。のち張菊生（元済），高夢旦が加わる。発行所は上海河南路。辛亥革命当時日本側の資本が半分を占め、印刷や編訳業務に日本人が多数参加していたものを，1914年，日本金港堂の株を完全に回収することにより独立した。（略）*10

［中国現代文学事典1985］の記述にもとづいて加筆してある。鮑咸思は、鮑咸恩の間違い。金港堂との合弁開始がいつのことなのかも、書かないのは、以前と同じ。

さて、私は、商務印書館が日本の金港堂と合弁であった事実を広く資料を当ることによって調査しながら、名前の出てきた長尾雨山についても知りたく思った。

手掛かりは中村忠行論文にあった。

［中村忠行1962］

折柄教科書疑獄事件に失脚して悲運を嘆つてゐた元高等師範学校教授長尾愼（ママ）太郎（雨山）……*11

わずかな記述だが、大きな手がかりである。教科書疑獄事件とは、なにか。疑問が疑問を呼ぶ。

疑獄事件だから、言及がある単行本もある。しかし、私の知りたい長尾雨山関係は、そういう著作には言及されていない。

私が採用した方法は、当時の新聞を調査することだった。大阪経済大学図書館に所蔵される『大阪朝日新聞』のマイクロフィルムを丹念に読んで、事件の経緯を追った。明治時代には、裁判記事が新聞に掲載されていることがわかる。ほかにもっと適切な資料があるのかもしれないが、その頃の私には思い当らなかった。

長尾雨山の予審決定と公判の模様は、『大阪朝日新聞』に見出すことができない。しかたなく国会図書館へ出向いて『時事新報』に必要な記事があるのを見つけた*12。

新聞の報道によると、長尾雨山は、書肆の求めに応じて教科書の文章を校閲した。謝礼を受け取ったが、思いもよらずそれが収賄だと認定されたのだ。校閲料

だとばかり思っていたものが、賄賂だとされた。雨山は、当然、控訴する。しかし、結局のところ雨山の主張は認められなかった。明らかに、長尾雨山は、冤罪なのである。

長尾雨山が東京高等師範教授を投げ捨てて、あるいは捨てるように強制され、上海へむかった理由は、この教科書疑獄事件であったことがわかった。

さて、事実がわかった段階で、論文執筆に取りかかる、という順番である。

まわりを見回す、と先にいった。研究論文であれば、他人の立論と同じであっては都合が悪い。自分の発見だと思っていたものが、論文発表後にそうでなかったとわかるのはやはり気持ちのいいものではないだろう。世界の研究情況からまったく無関係に研究をすることは、今の時代ではまず無理だと考えるほうがよろしい。そこで研究の最先端を知る必要がでてくる。

本ガイドを、最新情報収集のためのアンテナとして利用するにはどうするかを述べよう。

4　最先端を知る

昔はさておき、現在は、それほど悠長なことを言ってはいられない。自分が思いつくようなことは、他の誰かも思いつくのだと考えたほうがいいだろう。日本と中国、香港、台湾あるいは欧米との地理的距離は、それほど大きい問題ではなくなった。研究の最先端を知ることが必要なのだ。

過去において、中国でも清末小説を専門に研究する学術雑誌が発行されたことがある。残念ながら、それらは長続きしなかった。最近の「改革開放」政策が、学術雑誌、専門著作の発行をさらに困難にしている。採算がとれない、と出版社が気乗り薄なのだそうだ。べつに中国に限ったことではなかろう。日本でも事情は同じだ。

雑誌である

研究の最先端を知りたければ、研究専門雑誌を見るのがいい。

日本には、季刊『清末小説から』（注：2016年現在第123号を継続刊行）と年刊『清

末小説』（注；2012年第35号を発行して終刊）が発行されている。突然、休刊になるということは、ない。この２種類とも、私自身が編集発行しているのだから、断言することができる。

『清末小説から』には、毎号、研究文献目録が掲げてある。中国、香港、台湾などで発表された清末小説に関する論文目録だ。該誌のバックナンバー（国会図書館に所蔵されている）も見れば、なおよい。

清末小説研究会のホームページ（http://www.biwa.or.jp/~tarumoto→2016年http://shinmatsu.main.jpへ移転した）が設置されている。文献のいくつかは、テキストファイルで利用できる。研究に役立つだろう。

人間である

情報収集の際のもうひとつの原則は、人にたずねることだ。わからないことがあれば、人に聞く。これが一番てっとりばやい。ただし、まわりに適当な人がいない場合はどうするか。専門誌に論文を発表している研究者を追う。ある分野に集中して研究を続ける人もいる。その研究者が発表する論文を読んでいくのが、もうひとつの方法である。

人に聞く。できなければ研究専門誌を読む。これが情報探索の基本原則だといっていいだろう。

5　清末小説という分野

最後に、清末小説という分野そのものが、1990年代の日本でどのようなあつかいを受けているのかを簡単に見ておこう。さきにお断わりしておくが、ここに提出する著作について、私は、批判をしているのではない。事実を指摘している。

無視である

本文では、清末小説とよんでいるが、ほかに「晩清小説」などといわれたりする。時期区分をやりはじめると１冊の本が必要になってくる。私は、梁啓超が日本・横浜で創刊した小説専門雑誌『新小説』の1902年から、辛亥革命の1911年ま

でに発表された小説を指して清末小説という。1912年中華民国成立から1918年までは民国初期小説、つづめて民初小説、合わせて清末民初小説である。1902年からと言っているが、それ以前に発表された小説を無視するわけにはいかない。1902年の『新小説』で象徴させているとご承知いただきたい。

清末小説の範囲は、約10年間という短さである。この清末小説の10年間は、日本では、ひとことで言うならば、ほとんど無視されているのだ。1990年代に発行された、比較的新しい書籍を例にとろう。

藤井省三『中国文学この百年』（新潮社1991.2.20。新潮選書）がある。その発行年から推測するに「この百年」というのだから1890年からのことだろう。「中国新聞事始」の項で、19世紀初めの中国語雑誌、新聞を紹介する。しかし、これに続くのは、1919年の五四運動であり、清末小説を飛び越している。巻末にある「現代中国文学関係年表」は、1840年から開始され、清末小説も採取されているから、まったく無視というわけではなかろうが、それだけの扱いである。

岩城秀夫『中国文学概論』（朋友書店1995.4.10。457頁）には、「清代には右のほかに幾種かの小説が書かれているが、『儒林外史』の手法にならったものには、李宝嘉の『官場現形記』、呉沃尭の『二十年目睹之怪現状』があり」という２行のみである。

それでは、現代文学史はどうか。吉田富夫『中国現代文学史』（朋友書店1996.4.1）は、「五四新文化運動と新文学の覚醒（1915-27年）」が、実質的な記述のはじまりだ。

いずれも清末民初小説がスッポリと抜け落ちていることが理解できるだろう。

ただし、状況の変化を感じさせる動きがないでもない。

藤井省三、大木康『新しい中国文学史』（ミネルヴァ書房1997.7.5）では、第Ⅱ部近現代の文学（藤井執筆）第１章に「清末の文学」を書いている。『中国文学この百年』で清末小説をほぼ無視したのにくらべれば、はるかに進歩したといえるだろう。清末小説を視野にいれるのは、当然であるにしても、その当然のことがなされてこなかったのが、実情であったことを強調しておきたい。

有望である

日本に限っている。清末小説は、大多数の研究者の視野に入っていない。変化

のきざしがあるにしても、大勢にはなってはおらず残念である。くりかえすが、私は、別に怒っているわけではないので誤解のないように願いたい。それが現実だといっているにすぎないのだ。

だが、逆に言えば、研究分野としては可能性が大いにある、ということにほかならない。ほんの少し努力するだけで、あなたは、すぐに専門家である（笑）。それも日本においてばかりではない。漢語で論文を書いた日には、即、全世界に知られる存在となることは、太鼓判を押してもいい（大笑）。

【注】

1）孫楷第『中国通俗小説書目』中華大辞典編纂処、国立北平図書館1933.3

2）「老残遊記解説」『官場現形記（下）　老残遊記　老残遊記続集』平凡社1969.6.2　中国古典文学大系第51巻

3）張静廬輯註『中国出版史料補編』北京・中華書局1957.5所収。559頁

4）実藤恵秀「初期の商務印書館」『日本文化の支那への影響』日本・蛍雪書院1940.7.5。246頁

5）同上。248頁

6）藤井正夫執筆。『アジア歴史事典』第４巻　平凡社1960.5.27/1984.4.1新装復刊。415頁

7）白水紀子執筆。丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版1985.9.30。133頁

8）『中国大百科全書　新聞出版』北京・中国大百科全書出版社1990.12。253頁

9）辺春光主編『出版詞典』上海辞書出版社1992.12。585頁

10）白水紀子執筆。『集英社世界文学大事典』５　集英社1997.10.25。397頁

11）中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学」（一）『山辺道』第９号　1962.12.25。56頁

12）詳細は、樽本「金港堂・商務印書館・繍像小説」『清末小説閑談』所収

なお、金港堂を追求している稲岡勝の諸論文がある。

稲岡　勝「金港堂小史――社史のない出版社「史」の試み」東京都立中央図書館『研究紀要』第11号　1980.3.26

――　「金港堂「社史」の方法について」『出版研究』12　1982.2

――　「近代出版史と社史」『出版研究』13　1983.2.20

――　「明治出版史から見た奥付とその周辺」『出版研究』15　1985.3.25

――　「「原亮三郎」伝の神話と正像――文献批判のためのノート」『出版研究』18

1988.3.15

——「近代出版に関する復刻版資料」『出版研究』19　1989.4.15

——「金港堂と商務印書館の合弁問題に関する文献について」『日本出版学会会報』第75号　1991.12.31

——「関於金港堂与商務印書館合作問題的文献資料」沈洵澧訳『出版史料』1992年第4期（総第30期）　1992.12

——「金港堂の七大雑誌と帝国印刷」『出版研究』23　1993.3

——「初期商務印書館的源流——美華書館、修文書館、岸田吟香、金港堂」『出版与印刷』1994年第2期　1994

——「明治検定期の教科書出版と金港堂の経営」東京都立中央図書館『研究紀要』第24号　1994.3

——「教科書合弁、日中交流の師——今世紀初め、日本の出版社が清近代化に一役」『日本経済新聞』1995.3.3

——「初期商務印書館の源流——美華書館、修文書館、岸田吟香、金港堂」『出版教育研究所所報』第7号　1995.7

——「日中合弁事業の先駆、金港堂と商務印書館の合弁1903-1914年」『ひびや』（東京都立中央図書館報）第145号　1996.3

——「修文書館と『上海新報』」『出版学校日本エディタースクール・上海出版印刷高等専科学校　日中出版教育校際学術交流会論文集』出版学校日本エディタースクール　1997.6.7

【補記】商務印書館研究に関して以下の２種類をウェブ上で公開している。

樽本『初期商務印書館研究（増補版)』清末小説研究会2016.5.1 電字版

樽本『商務印書館研究論集（増補版)』清末小説研究会2016.5.15 電字版

阿英「晩清小説目」の構造

『大阪経大論集』第48巻第４号（通巻240号 1997.11.15）に掲載。阿英「晩清小説目」の編集方針は、単行本を主とし、雑誌にも採録範囲をひろげるものであった。しかし、清末が雑誌の時代であったことを考えれば、小説目録の編集方針は、単行本よりも雑誌を主対象としなければならない。そこに意識のずれがある。阿英「晩清小説目」の雑誌収集が不徹底であったこと、当時の小説全体からすれば、わずかに33%しかカバーしていないことを資料をもとにして証明する。

本稿は、1997年武夷山国際中国小説史研討会のために作成した。これをもとにして作成した漢語原稿「阿英「晩清小説目」的結構」は、『清末小説』第20号（1997.12.1）に掲載している（補記：『清末小説研究集稿』2006収録)。本稿はその日本語版である。論旨、使用資料は同様だが、引用文などが異なる。

中国において、阿英「晩清小説目」の誤りを、部分的に訂正する試みがなされたことはある。だが、全面的に指摘したのは、本稿が最初であろう。中国において訂正がなされなかった理由のひとつは、もとになる資料が整備されていないことだと考えられる。また、新しく提出したもうひとつの視点は、目録編集の方針について、単行本主義、雑誌主義にわけたことである。

作品の数字についてひとこと説明しておきたい。小説の発表件数について、過去において何度か数字を提示した。根拠となる目録があった。いちいちあげない。近くは『新編清末民初小説目録』(1997)、『清末民初小説年表』(1999）がある。ただし、この目録は現在も増補訂正作業を継続している。そのため提示する数字が違うことになる。時間の区切り、作品の認定などいくつかの違った側面があり、どこに焦点をあわせるかでも数字が異なってくる。本書に収録するにあたり、その後に出版した『新編増補清末民初小説目録』(済南・斉魯書社2002）に基づいて、数度目の集計をしなおした。年表の誤りを訂正した数字でもあることを申し添える。ゆえに、『清末民初小説年表』に主としてよって考察した郭浩

帆「清末民初小説與報刊業之關係」(『清末小説から』第70号2003.7.1）が示す作品数とも異なっているのでご注意いただきたい。図も新しくしている。初出に掲載した「資料３：阿英「晩清小説目」と『新編清末民初小説目録』の比較表」は、はぶく。根本資料を『新編増補清末民初小説目録』に変更したため数字に異同を生じたからだ。数度にわたり同様の計算をくりかえしている。その結果わかったことをのべれば、収録する作品件数が多くなっても、発行件数の動向は、基本的に同じ傾向を示しているということだ。別稿「阿英説「翻訳は創作より多い」は事実か」(本書所収）においても同主旨のことを述べた。

1　はじめに

阿英「晩清小説目」は、1950年代に発表された。以来、現在にいたるまで利用されている。小説目録としては、長い寿命を保っているということができよう。小説目録という２次資料が、それも１種類だけが、40年以上にわたって使用されているのは、異例といってもいい（補記：2016年現在、「60年以上にわたって」)。道具としての小説目録は、常に更新されるのが普通であるからだ。

本稿は、この阿英目録本体そのものを読み解くことを目的とする。すなわち、書目としての特徴を指摘し、さらに発表当時における存在意義とその果した役割について考察する。

2　阿英「晩清小説目」の現在

清朝末期に発表された小説の書目である「晩清小説目」は、『晩清戯曲小説目』(上海文藝聯合出版社1954.8）に収録されて発表のはこびとなった。

創作と翻訳の２部構成になっており、その配列は、作品名の筆画順である。著訳者、出版年、出版社、掲載雑誌名という項目が簡潔に記録される。１千をこえた収録作品数の多さもあり、当初から清末小説を研究する場合の基礎資料となっていた。

初版より３年後に増補部分をつけくわえて再度出版される。これが、増補版（上海・古典文学出版社1957.9）だ。さらに、この増補版は、中華書局（1959.5）から

も出ている*1。

その後、書籍の形で再版されることはなかったようだ。しかし、大いに利用はされている。研究論文に引用されるのは、当たり前だから触れない。別の利用のされかたがある。たとえば、清末小説の叢書を出版する計画があった場合、作品選択のために参考資料のひとつとして影印のうえ内部発行されるといった利用法だ*2。

また、最近発行された管林、鍾賢培、陳永標、謝飄方、汪松濤「中国近代文学大事記」(1840-1919）*3においては、各年に発表された創作、翻訳がどれくらいの数にのぼるのか、統計数字の根拠として阿英「晚清小説目」を使用している（補記：劉勇、李怡総主編『中国現代文学編年史』第2巻（林分份、黄育聡主編）北京・文化藝術出版社2015.11。阿英目録にもとづき刊行点数を集計している。37、70、87、107頁)。

目録発表より40[60]年あまりが経過した現在においても、充分な利用価値がある、と中国研究界が認定している証拠だ。

小説目録が、40[60]年をこえて研究者たちに利用されているのはなぜか。目録そのものに価値があることはいうまでもない。では、その特徴は、なにか。

3　阿英「晚清小説目」以前の目録

阿英「晚清小説目」は、その出版は1954年ではあったが、14年をさかのぼる1940年には編纂を終わっていたという*4。

阿英『晚清小説史』（上海・商務印書館）の出版が1937年５月だった。『晚清小説史』そのものが、いくつかの先行論文をもとにして書かれたものだ。それと並行して、阿英は、10種をうわまわる清末関係の目録類を編集している。つまり、阿英は、当時、清末小説そのものを収集するかたわら、その目録を編集し、研究論文を執筆していたということになる。ひとつのまとめが『晚清小説史』というわけだ。

阿英以前に、清末小説に言及する文学史がないわけではない。胡適「五十年来中国之文学」(『最近之五十年』上海・申報社1923）あるいは魯迅「第二十八篇　清末之譴責小説」(『中国小説史略』北京・新潮社1923-24）などが有名だ。また、単行本で

は陳子展『中国近代文学之変遷』(上海・中華書局1929）もある。

【補記】翻訳だけを収録した（曾）虚白原編、蒲梢（徐調孚）修訂『漢訳東西洋文学作品編目』(真美善書店1929.9.28）が刊行されている。清末に発表された小説を抽出すると44種ある。(樽本「『漢訳東西洋文学作品編目とその著者」「清末翻訳小説雑考」。ともに『清末翻訳小説論集（増補版)』2016収録）

だが、清末に限定した文学史で、しかも作品を豊富にあつかった単行本というのは、それ以前には存在しなかったのも事実だ。

文学革命以降の小説を評価する立場からすれば、それ以前の小説は打倒の対象としての存在意味しかない。否定すべき小説の研究、資料保存に力が入らないのも無理はない。研究、評価と資料保存は、基本的に問題が別だといったところで、それが混同されてきたのが実情である。つまり、評価の低さは、資料保存を困難にさせ、資料が不足している分野での研究は進展しない、という悪循環を生むのだ。そういう状況のなかにあって、阿英の『晚清小説史』の発行は、清末小説のみで１冊が成立することを証明してみせた。その着眼点の斬新さ――今から見れば、研究としては当然ではあるかもしれないが――は、高く評価される。

この『晚清小説史』には、236件の作品名があがっている。作品数は、それ以前の文学史をはるかに超えるものだ。研究界の注目を集めたのも当然であった。

「晚清小説目」が収録するのは、1,070件の小説だ。増補版は、1,107件になっている（以後、増補版の数字を使用する)。明細は、創作が479件、翻訳が628件である。

阿英『晚清小説史』の236件という数字に比較すれば、1,107件が、いかに多いかがわかる*5。

また、阿英「晚清小説目」以前に発表された目録類をも見れば、その収録数の多さが容易に理解できるだろう。

たとえば、『小説林』第３-７期（1907）に連載された「新書紹介」がある。

目録を意図して書かれたものではないが、合計64件の小説を収める*6。

たとえば、「小説林書目」(『小説林』第９期戊申年正月 1908）がある。

該誌の巻末に掲げる（影印本には収録されていない）から、自社出版物の広告だ。1905-08年に発行した86件を収録する。広告だから収集を目的とした目録ではな

い。ひとつの例として示す。

たとえば、徐念慈「丁未年小説界発行書目調査表」(『小説林』第９期戊申年正月1908）がある。

1907年に商務印書館、小説林社、新世界小説社など複数の出版社から発行された創作、翻訳小説の合計122件を掲げる。同時代の小説を調査しているのがめずらしい。ただ、1907年出版に限定しているから、清末小説全体の目録というわけにはいかない。

たとえば、『涵芬楼新書分類目録』(1911未見）があるらしい。

涵芬楼は、商務印書館の蔵書楼をいう。翻訳小説を400件近く、創作を約120件収録すると阿英はいう。蔵書目録だから単行本の数をあげているのだろう。目録の原物を見ることができないから、阿英のことばが正しいかどうか検証のしようがない。阿英のいう通りだとすれば、これはかなりな数字だといえよう（補記：のち影印本を入手。樽本「商務印書館『涵芬楼新書分類総目』について」『商務印書館研究論集（増補版)』2016所収)。

たとえば、顧燮光「訳書経眼録」(1927）がある*7。

こちらには、26件の翻訳について解説がほどこされている。

たとえば、孫楷第『中国通俗小説書目』(北平・中国大辞典編纂処、国立北平図書館1933.3）がある*8。

初版には、清末小説と考えられる作品約40件を収録する。単行本が主体となっている。後の版には、増補されて約70件くらいにはのぼるが、最初は、その程度のものだ。

以上が、阿英『晩清小説史』が出版される前の状況である。

阿英は、該書において、清末小説が少なくとも1,500件以上ある、と書いた*9。ただし、この時点では「晩清小説目」は編纂を完了しておらず、1,500件というのは推測による数字である。なぜ推測だとわかるかといえば、「晩清小説目」初版に収録されている小説は、創作、翻訳を合計して1,070件であったからだ。1,500件と予想したが、実際は、1,070件だった。1,070件という数字を把握して、阿英自身が『晩清小説史』を改訂した（北京・作家出版社1955.8)。ゆえに、該当箇所を「少なくとも一千種以上」と訂正することができたのだ。

阿英『晩清小説史』が出ても、小説目録には別の存在価値がある。それほど多くはないが、いくつかが発表されている。

たとえば、墨者「稀見清末小説目」(『学術』第１輯1940.2）がある。

いにしえを尊び今をおろそかにする愚を批判し、清末の活版小説は語るに足りないと見下す傾向があることを指摘する。ご指摘の通りです。ただ、そこに提示された小説の28件というのは、数的には、やや少ないか。阿英『晩清小説史』出版後であるだけに、さびしい。

阿英『晩清小説史』が1937年に出版されたとはいえ、「晩清小説目」は、まだ、発表されてはいない。清末小説の書目が発表される際に、当面の基準とされたのは、孫楷第の目録だった。

たとえば、周越然「稀見小説五十種」「稀見訳本小説」(『版本与書籍』上海・知行出版社1945.8）がある*[10]。

周越然といえば、孫楷第書目に見える鄭振鐸序のなかに、上海の蔵書家として登場している人物だ。孫書目に掲載されていないもので、創作50件、翻訳40件の合計90件を収録する。ただし、１種類が重複しているから、実際には89件となる。

ということで、阿英「晩清小説目」は、多くの小説目録のなかでもその収録数の多さでも際立った存在であることが理解できるだろう。

阿英の収集した書籍は「晩清小説目」に生かされるばかりではなかった。1957年から出版がはじまった中国近代反侵略文学集シリーズ、また、1960年からの晩清文学叢鈔シリーズに結実するのだ。

4　阿英「晩清小説目」の編集方針、特徴

阿英目録の編集方針を紹介しながら、同時に、他に類を見ないその特徴を指摘しておきたい。

特徴１――収録数が多い

「晩清小説目編例」が、編集方針ということになる。

孫楷第の目録が、中国の旧小説を600から700件を収録しているが、晩清部分は、わずかに40件あまりにすぎないことを阿英はいう。そこで、阿英自身が所蔵する

もので書目を編纂したとある。その数が、初版で1,070件、増補版が1,107件であることはすでに述べた。収録数の多さでは、それ以前の目録をはるかに超えることも確認しておく。

特徴２――原本に基づいている

自分の蔵書によって目録を編纂したという言葉からわかるのは、阿英が、確かな原物にもとづいているということだ。当時、１千を超える原物を所蔵する研究者は、いなかったのではないか。現在でも、そのすべてを原本で所有する研究者が存在するとも思えない。あえて空前絶後という言葉を使用しても、誇張ではなかろう。ただし、裏返せば、見ていない単行本、雑誌については触れることができないことを意味する。強みであると当時に弱点ともなる。

特徴３――雑誌を含んでいる

創作と翻訳に分け、単行本を主体に、雑誌にも手を伸ばしておおよそ１千種を得た、と阿英は書く。

雑誌にも収集の範囲を広げているのが目新しい。

例をあげよう。「十字碑　況梅汪剣虹合著。宣統三年（一九一一）小説月報本」（67頁）と記述されているのが、雑誌の作品だ。正確に書けば、況梅、心月、汪剣虹合著で『小説月報』第２年第10-11期の連載となる。該作品は、単行本にはなっていない。

阿英「晩清小説目」が雑誌をも収録対象にしている点を、今まで、指摘し評価した研究者はいなかったように思う。清末期の雑誌の重要性を知る阿英だからこそできたことだ、と強調しておきたい。

特徴４――翻訳を収録する

創作ばかりでなく翻訳小説を収録している点が、すばらしい。

翻訳小説は中国の小説ではない、という理由で、現在にいたるも粗略に扱われる傾向がある。提要、目録から翻訳作品は排除されているのだ。

清末小説を見る場合、翻訳小説を欠いては全体を見渡すことができない。欧米日本の作品が大量に翻訳されたのが清末という時代だった。

清末の文芸界を特徴づけるのは、雑誌の大量発行と翻訳小説の出現である。創作が翻訳の影響を強く受けたのは、当然であろう。それにもかかわらず、翻訳を

無視することは、当時の実情を知らない、あるいは知りたくない、という態度の表われだというべきだ。翻訳を創作と同等に扱った阿英の見識の高さは、その目録にも充分示されているといわねばならない。

収録作品は、時間的には光緒初年から宣統辛亥革命までとする。

以上が、阿英自身の述べる編集方針である。その特徴についても述べた。

はたして、阿英目録は、阿英自身がのべる方針通りに編集がなされているのだろうか。主として単行本と雑誌のあつかいについて検証する。

5　阿英「晩清小説目」の実際

阿英が目録を編集するさいに採用した方針は、単行本を主体とすることだった。

なぜ、単行本を主体にしたのかの説明は、ない。説明はないが、阿英にしてみれば、当然のことだったのではないか。「小説林書目」にしろ、「丁未年小説界発行書目調査表」にしろ、はたまた『涵芬楼新書分類目録』も、顧燮光「訳書経眼録」も、さらには孫楷第『中国通俗小説書目』も、阿英以前の目録は、すべて単行本の目録なのだ。その前例からすれば、単行本が主となるのは、あまりにも自明のことになる。

単行本本位の視点に立てば、阿英の「晩清小説目」に雑誌掲載の作品が収録されていることのほうが特異である。阿英の感覚が鋭いところだといわねばならない。雑誌掲載の小説を見逃していない。単行本にならなかった小説をも拾い上げているのだ。これこそ阿英目録の独創ともいうべき点だ。重ねて高く評価しておく。

阿英目録全体の中に占める単行本の割合は、約77%になる。残りの23%が雑誌である。

具体的に見ていこう。

「老残遊記」20回について、阿英は、「光緒三十三年（一九〇七）神州日報刊。二冊。又天津日日新聞本。一冊」（76頁）と記述する。発行所の名称は、正しくは神州日報館である。もうひとつの「天津日日新聞本」は、新聞初出をいっているのではない。『天津日日新聞』に掲載した10回分を切り抜いて「一冊」にまとめ

た。

そうすると、初出の『繍像小説』が出てきていないことがわかる。初出は無視した。雑誌を重視した阿英ではあるが、このような取りこぼしもあるのだ。

「電術奇談」も、雑誌『新小説』掲載（1903）には触れず、のちの広智書局（1905）本だけを採録する（152頁）。

単行本主体であれば、阿英の処理は、理解できる。しかし、その逆があるのだ。見ていくと、不審な箇所が出現する。

「泰西歴史演義」は、『繍像小説』本のみをかかげ、商務印書館（1906）の単行本を収録していない（87頁）。

雑誌初出だけを収録して、後の単行本を採録していない例は、ほかにもある。

「二勇少年」の初出は『新小説』（1902）だ。しかし、広智書局（1905）本は収録していない（65頁）。

「痛史」も『新小説』（1903）のみを採取し、広智書局（1911）本の記載がない（95頁）。

いくら単行本を主体とするといっても、このように取りこぼしがでてくるのはしかたがない。やむをえないことだが、その数は少なくない。

単行本から目を転じて、雑誌初出の作品を阿英はどのように扱ったのかを見てみよう。

雑誌全部を紹介する紙幅はない。見本として『新小説』『繍像小説』『月月小説』『小説林』『新新小説』の雑誌５種類について、掲載された小説がどれくらい阿英「晩清小説目」に採録されているのかを調査した。

問題となるのが、単行本と雑誌の関係なのだ。細かく見ると、意外ともいえる事実が浮上してきた。

単行本の収録率

雑誌５種類に掲載された小説について、「晩清小説目」に採録されたもの、されなかったもの、後に単行本となったもの、単行本化されたが阿英目録には採取されなかったものなどを調べて注記する（資料２：「雑誌初出作品一覧」参照）。

清末時期の文学界に見られる特徴のひとつは、前述のように雑誌が大量に発行

されたことだ。まず雑誌に発表され、そのうちのいくつかが単行本になる、という経過を主としてたどる。単行本の形でいきなり発行されるという作品は、多くない。だからこそ阿英も雑誌に注目したのだ。

その過程を知れば、単行本になった作品よりも、雑誌に掲載されたままで終わった作品のほうが多いのではないかと予想がつく。

まず、阿英の編集方針に従い、単行本化された作品がどれくらいあり、そのうち阿英はどの程度を収録したかを紹介する。

『新小説』では、掲載作品26件のうち13件が単行本となり、阿英目録には、そのうちの６件を収録する。単行本で出版された作品のうち阿英目録に収録されている割合を単行本収録率と称する。『新小説』は、46%だ。同様に数えると、『繍像小説』が89%、『月月小説』44%、『小説林』72%となる。つまり、阿英目録の単行本収録率は、約60%である。これは、雑誌５種類についての調査にすぎない。しかし、約60%という数字は、それほど少なくはない。ただし、これで充分というものでもなかろう。私の印象としては、単行本を主体としたにしては、やや、少ないように思う。

それでは、雑誌掲載の作品はどうか。

雑誌にまで目配りをした阿英の感覚の鋭さを、私は言った。まさに、清末は雑誌の時代だったのだ。大量に存在した雑誌初出の作品を無視しては、目録自体が成立しないだろう。阿英は、その事実に気づいていたからこそ、雑誌も収録対象にした。

雑誌初出の収録率

さきの雑誌５種類に掲載された創作と翻訳の作品248件のうち、阿英の目録に収録されたのは82件である。これは、掲載作品全体の約33%にすぎない。意外といえば意外だ。雑誌掲載作品のすべてを「晩清小説目」に採用したわけではない。作品の取捨選択を行なったことがわかる。

さきに、阿英「晩清小説目」に収録される雑誌は、目録全体の約23%を占める、と書いた。阿英の目録では、事実、そうなっている。この数字を見るかぎり、単行本より雑誌掲載の作品のほうが、少ないような印象を受ける。あたかも清末時

期に発表された作品そのものが、単行本という形をとって出たほうが多いように勘違いしてしまいそうだ。

しかし、阿英目録は、あくまでも単行本を主にして採取したことを知らなければならない。阿英目録に雑誌掲載作品が少ないのは、阿英が、雑誌から採録しなかったからなのだ。

ここで重大な疑問が浮上する。阿英は、どの作品を目録に採用し、どの小説を捨てたのか。選択の基準は、あるのか、という疑問である。

選択基準の疑問

阿英は、選択基準については、なにも言っていない。作品一覧をながめて、推測する以外に方法はなさそうだ。

『新小説』からながめてみよう。

阿英目録に採録されている作品は、後に単行本になったもの、つまり雑誌では連載ものが多い。逆にいえば、短篇は、収録されない傾向がある。たとえば、周桂笙訳「失女案（偵探小説)」、「双公使（偵探小説)」などは、採用されていない（注：阿英目録に角書は採取されていない)。

雑誌掲載の小説のうち、阿英目録に雑誌掲載を明らかにして収録されたものを百分率で表わし、雑誌収録率と言うことにする。『新小説』の場合は、26作品のうち10件を収録するから、26分の10で38％となる。

『繍像小説』でも同様に、短篇は、採用されることが少ない。ただし、連夢青「商界第一偉人」は、第６-14期の連載だが収録しない。雑誌収録率（15/45）は、33％だ。

『月月小説』の陳景韓「俄国皇帝（虚無党小説)」は、第２年第７-９期の連載で、目録に収録されてもいい。だが、これも採用されない。３期連載では短いのかといえば、周桂笙訳「八宝匣（虚無党小説)」は、２期連載にすぎないが採用する。雑誌収録率（36/118）は、さらに少なく31％にすぎない。

『小説林』にいたっては、短篇ばかりだと判断されたためか、雑誌収録率（7/36）は、わずかに19％となる。

『新新小説』も、短篇はおおむね不採用だ。例外として「蜂針螫（偵探小説)」、

「紫絨冠」のふたつが短篇ながら収録されている。雑誌収録率（14/23）は、61％である。

雑誌５種類を見ても、阿英の採用基準がはっきりしない。しいていえば比較的長い作品が、採用の目安となっていると推測できる。

重要問題の発生――雑誌主義か？単行本主義か？

阿英が雑誌に注目したことを、私は高く評価する。なん度でもいう価値がある。

しかし、阿英「晩清小説目」に収録された作品を詳細に見ればみるほど、雑誌からの採取が不十分であることを痛切に感じないわけにはいかない。

阿英は、単行本採取を目録の主体とした。いわば単行本主義である。阿英以前の慣習に無意識に従ったためだろう。阿英の学識の深さと感覚の鋭さが、かろうじて雑誌に目を向けさせた。ただし、従来からの単行本主義の慣習からは、完全には自由ではなかった。雑誌からの採取が中途半端になった理由ではなかろうか。

清末時期は、それ以前とは異なる文学状況が成立したことで際立っている。ひとつの事実が、小説専門雑誌の大量出版だった。印刷技術の発達と近代的出版社の成立が、雑誌の大量発行を可能にしたのだ。それまでにはなかった、まったく新しい状況が出現したといえるだろう。梁啓超の創刊した小説専門雑誌『新小説』が、日本から輸入されたことが、新しい刺激のひとつとなったことはいうまでもない。

新しい状況に出てきた新しい作品を対象とする目録は、従来とは異なる新しい発想と編集方針によって編集されるのは当然のことだ。

ここに、重要な問題が出現する。単行本を主体とするか、雑誌を主体とするか、だ。単行本を主体とした編集方針自体が、妥当なものであるかどうか、検討を必要としている。

清末時期の新しい状況を認識するならば、発想を転換する必要がある。すなわち、従来の単行本主義から転換して、雑誌を中心にした目録を作成しなければならない。雑誌に掲載された小説は、可能なかぎりすべてを収録する。すなわち雑誌主義である。これが、私の考えなのだ。

単行本中心主義の目録では、清末の新しい事態を反映する器になりきれないこ

とに阿英は気づくべきだった。阿英の才能をもってすら、乗り越えることのできなかった時代の制約ではあったのだろう。かえすがえすも惜しい。

雑誌を中心とした作品目録であるならば、採取の基準はおのずと定まる。作品の長さが目録採取の基準になるとは、とうてい思えない。新しい目録は、長篇も短篇も区別なく平等にあつかう新しい視点を必要とするだろう。

検討すべき課題は、まだある。

作品の認定

さきに阿英「晩清小説目」は、創作479件、翻訳628件、合計1,107件と書いた。確かに目録に収録してある作品件数は、数えればその通りなのだ。ただし、これには重複する作品があり、創作と翻訳を取り違えた作品があり、作品集があり、単行本も雑誌掲載のものもある、というのが実態だ。

作品の種類をどう数えるかが、まず、問題になる。

雑誌に連載された作品が単行本になる。この場合、作品としては、１件とするか２件に数えるか。

阿英の編集方針は、単行本を主とする、というものだった。しかし、雑誌を主体としなければ、当時の状況を反映する目録とはなりえない。ならば、雑誌に掲載されたものを１点と数えるほうが、より正確だ。

以下の方針を立てた。

１．作品は、雑誌掲載を重視し、同様に単行本も採取する。

２．連載作品は、雑誌に最初に登場したものを１件とする。作品の発表年も第１回の年とし、あとは数えない。単行本初版を１件と数える。再版は、別の出版社であっても数えない。

３．作品集のかたちで雑誌に連載されるばあい、それぞれの作品を１件と勘定する。

つぎに、阿英「晩清小説目」が収録した作品は、いつからいつまでか。時間についてを検証してみよう。

収録時間

発行年月に関する記述の間違いを２件だけ例としてかかげる。

「三大案」は、「光緒三十四年（一九〇九)」となっている。光緒三十四年であれば1908年のはずだ。

「女侠客」は、「光緒三十三年（一九〇七）新新小説本」とある。だが、『新新小説』の影印本に当れば、その連載が第８、９期（光緒三十一年四月初一日、五月初一日）であることがわかる。それによって訂正すれば、1905年となる。

このように記述の不足を補い、訂正をほどこす。発行年不記、あるいは不明の作品を除外すると、発表年が判明している作品は、創作が471件、翻訳が687件、合計1,158件となる。その期間は、1873年から1912年だ。

阿英「晚清小説目」には合計1,107件の作品を収録している、と書いたのと数字が違うではないか、と思われるだろう。くりかえして説明しておく。阿英目録の誤りを訂正し、雑誌連載の作品はバラして数えなおしているから数字が異なっている。ご注意いただきたい。

最後に、清末小説全体のなかで、阿英「晚清小説目」の収録範囲がどの程度のものか、これを検証することにしよう。

6　阿英「晚清小説目」の規模

阿英「晚清小説目」が、収録数のうえでそれまでの目録をはるかに超えた存在であることは、明らかだ。だからこそ、『中国近代文学大系』史料索引集１の「中国近代文学大事記」には、統計数字として引用されてもいる。

だが、阿英目録は、雑誌からの採取が不徹底であることを認識しなければならない。では、どのくらい不充分なのか。それを調べる方法は、あるのか。

現在が阿英の時代と大きく異なるのは、図書館蔵書目録、雑誌目録などの２次資料が比較的多く発行されていることである。阿英は、当然のことながら自らが収集した小説の原物によって目録を編集した。阿英はこれら２次資料にめぐまれなかった、と逆にいうことができる。

原物の単行本、雑誌を入手できる環境にいない私が、利用できるものはこの２次資料なのだ。原物を目にできない不自由さは、確かにある。しかし、同時に原物を探索するという制約から自由であることも意味している。利用できる２次資料が多数あることは、他人の目を通して原物を見ることとほとんどかわらないといってもいい。ひとりでできることは、たかが知れている。複数の人間による研究の蓄積を利用しない手はない。不確実な情報が混入している危険性は、ある。しかし、何もないよりもはるかにマシである。

『新編増補清末民初小説目録』――検証の基準

雑誌の原物（私の見たものは、それほど多くはない）、複写、さらに２次資料（論文を含む）260種をもとにして作成したのが、樽本照雄編『新編増補清末民初小説目録』（済南・斉魯書社2002.4）である。

旧版である『清末民初小説目録』は、1988年に発行した。清末から民国初期までに発表された小説について、その雑誌初出から現在の単行本までを収録することを目的としている。1988年以来、増補訂正を継続してきた。1997年には『新編清末民初小説目録』を、1999年に『清末民初小説年表』も刊行した。それらの集大成、というのはおおげさだが、とにかく増補作業を中断することなく行なってきて『新編増補清末民初小説目録』がある。

清末小説を収録して完全である、とはいわない。しかし、雑誌に掲載された作品は、長短をとわずすべてを収録するよう努力した。単行本についても、各種目録に当って収集した。原物を見ることができない作品も、発行されたという記事に基づいているから、まったく根拠のないものではない。

該目録は、清末民初の創作13,810件、翻訳5,346件、合計19,156件を収録する（2001年までに再版されたものを含む）。その収録数の多さからして、清末民初時期に発表された作品の多くを収集できたと思う。

阿英目録の収録規模をはかるために、この『新編増補清末民初小説目録』を基本資料として使う（出版後、訂正増補を継続して行なっている【補記】現在も増補作業中。『清末民初小説目録Ｘ』は2015年ウェブ公開）。

まず、時間を阿英目録にあわせて1873-1912年に区切る。自動的に、民初小説

の大部分と刊年不明の作品が、除外されることになる。

阿英目録を数えたのと同じ方針により、作品を抽出する。

その結果、創作2,200件、翻訳1,339件、合計3,539件をえることができた。

この清末部分の規模が、どれくらいかといえば、単純に計算して阿英目録の約3.1倍である。逆にいえば、阿英目録（1,158件）は、『新編増補清末民初小説目録』清末部分（3,539件）の約33％しか収録していないことになる。

阿英目録の創作471件は、『新編増補清末民初小説目録』清末部分（2,200件）の約21％を占めるにすぎない。

阿英目録の翻訳687件は、『新編増補清末民初小説目録』清末部分（1,339件）の約51％を占めるにすぎない。

阿英目録では、翻訳の方が創作よりも多い。1,158件のうちの687件だから、約59％になる。だからこそ、阿英は、『晚清小説史』において「各方面の統計によれば、翻訳書は、全数量の３分の２を占めている」（274頁）と書いた。自分の目録に収録した作品数に依拠したのは明らかだ。だが、阿英が、雑誌から採取するにあたって採用した基準は、厳密なものではなかった事実を忘れてはならない。恣意的に採取した数字を根拠に、翻訳が全体の「３分の２」になる、といっても説得力がない。

『新編増補清末民初小説目録』を見れば、実は、創作の方こそ翻訳よりも多いことが判明するのだ。上の数字から見れば、翻訳は、全体の約38％を占めるにすぎない。

創作（図1：創作部分比較変遷グラフ）

創作にかんして、『新編増補清末民初小説目録』と阿英目録を年の順に追いその変化を見る。

全体の動きを見れば、1897年に最初の小山が出現する。戊戌政変前の言論が活発化した時期である。1902年を起点として急激に発表件数が増加し、1905年に少し落ち込むものの、それ以後はさらに激しく創作が増えていることがわかる。きっかけは『新小説』雑誌の創刊であって、これが1902年のことだった。横浜で印刷された『新小説』は、上海に送られた。中国最初の小説専門雑誌、しかもそれ

図1

創作部分比較変遷グラフ
400
300
200
100
0
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900
1901
1902
1903
1904
1905
1906
1907
1908
1909
1910
1911
1912
○創作全体
▼阿英創作

翻訳部分比較変遷グラフ
300
200
100
0
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900
1901
1902
1903
1904
1905
1906
1907
1908
1909
1910
1911
1912
○翻訳全体
▼阿英翻訳

図2

が外国の日本で創刊されたという不思議な現象といえるかもしれない。創作件数の急増を示すグラフの変動は、この『新小説』の刺激を受けて、主として上海において雑誌の創刊が急増した事実を反映している。その頂は、1908年となる。

一方で阿英目録の創作グラフを見れば、全体の動きを、ほぼ、追跡する形に変化しているといえる。ただし、その増加の変化は、かなりゆるやかに見える。つまり、別の言葉で言い表わせば、創作全体に比較して、阿英目録は、はるかに少ない作品件数しか収録していないということだ。雑誌からの作品採取が少ないために生じた歴然とした差異だと理解できる。

翻訳（図2：翻訳部分比較変遷グラフ）

阿英翻訳グラフを見る限り、阿英創作グラフと比較して、全体の動きをほぼ忠実に反映しているということができる。阿英は、創作にくらべて翻訳については収録に力を入れたことが、このことからもわかるのだ。

それでも両者に距離が生じているのは、阿英の作品採取が、充分ではなかったことによる。阿英の単行本主義が影を落としているのだろう。

翻訳も創作とほぼ同じような変遷をたどる。すなわち、1902年を起点として急激に作品が増えていき、1904年にやや落ち込むものの、ふたたび発表点数を大きく増す。

発行件数の頂点が1907年であるのも一致する。創作発表件数の頂点が1908年だから、翻訳はそれより前に頂点をしめすことになる。

全体（図3：全体比較変遷グラフ）

創作と翻訳を合計した阿英目録の全体グラフと、『新編増補清末民初小説目録』清末部分の全体グラフを並べてみる。

1902年に増加の起点をおき、急激に発表点数が伸びる。1904-1905年に中だるみ状況を示し、その後、ふたたび一気に増加し1907-1908年に頂上をむかえ、あとは減少する。

1912年にむけて減少するのは、辛亥革命前後の混乱時期にあたるからだろう。小説どころの騒ぎではなくなる。

図3

全体比較変遷グラフ
600
400
200
0
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900
1901
1902
1903
1904
1905
1906
1907
1908
1909
1910
1911
1912
全体
阿英全体

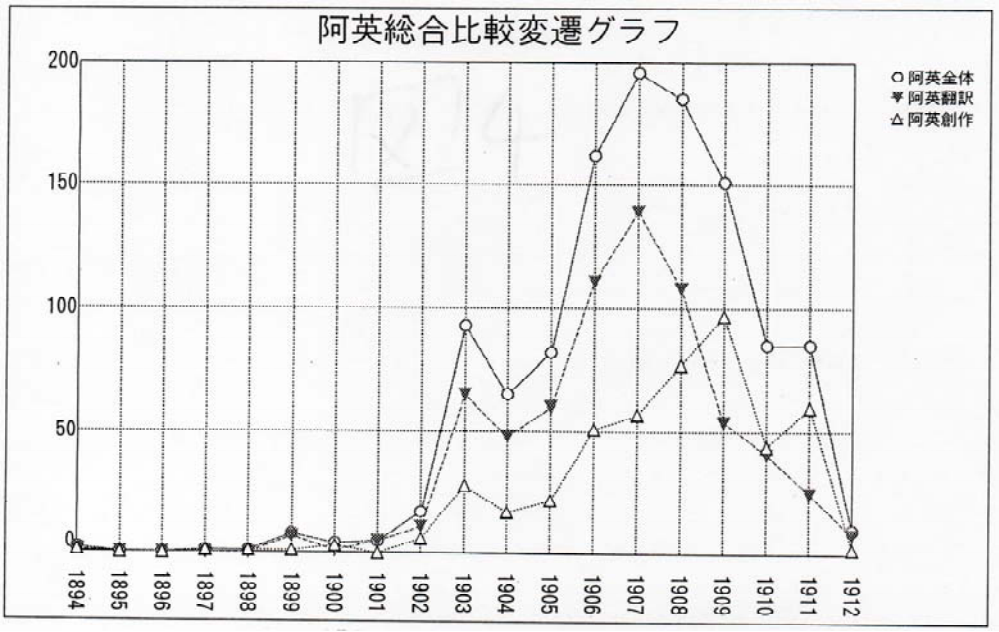

阿英総合比較変遷グラフ
200
150
100
50
0
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900
1901
1902
1903
1904
1905
1906
1907
1908
1909
1910
1911
1912
阿英全体
阿英翻訳
阿英創作

図4

創作、翻訳を個別に見た時の変遷がほぼ同じなのだから、それを合計した全体の動きが同一になるのは、説明するまでもない。

ここで見るべき点は、全体の動きよりも、その差異である。

くりかえせば、両者ともに、その変化の形態は、ほぼ重なる。ただし、阿英の示す数そのものは、グラフを見た印象では、全体の半分以下ということになる。確認のために数字を示せば阿英目録は、全体の33%を占めるにすぎない。

創作と翻訳を個別に見たかぎりでは、発表件数の多寡が差異となっているにすぎないように思える。次に創作、翻訳を併置してその変化を探ってみよう。

総合比較

創作、翻訳の発行点数を同時に示して、阿英目録と全体――『新編増補清末民初小説目録』の動きの変化を見る。

○阿英総合比較変遷グラフ（図4：阿英総合比較変遷グラフ）

清末の小説全体をさして「翻訳は創作より多い（原文：翻訳多於創作)」といった阿英の文章は、あまりにも有名である。

阿英目録に収録された創作と翻訳を比較すれば、一目瞭然、数からいっても、翻訳の優勢は圧倒的だということができる。創作が、数のうえで翻訳を追い越すのは、ようやく1909年になってからだ。

阿英目録では、翻訳が創作を上回って発表された事実は動かない。従来、言われてきた翻訳優勢説は、この阿英目録に根拠を持つ。重要だからくり返す。阿英目録にもとづけば、そういう結論になる。

よるべき資料が阿英目録しか存在しない時代には、阿英目録のさし示す結果を受け入れるのが当然であった。批判できるだけの資料の蓄積がないのだから、それはしかたのない事だったのだ。

しかし、実際は、阿英の言うところとは、違うのだ。

○全体総合比較変遷グラフ（図5：全体総合比較変遷グラフ）

『新編増補清末民初小説目録』にもとづいて創作と翻訳の変遷を見る。

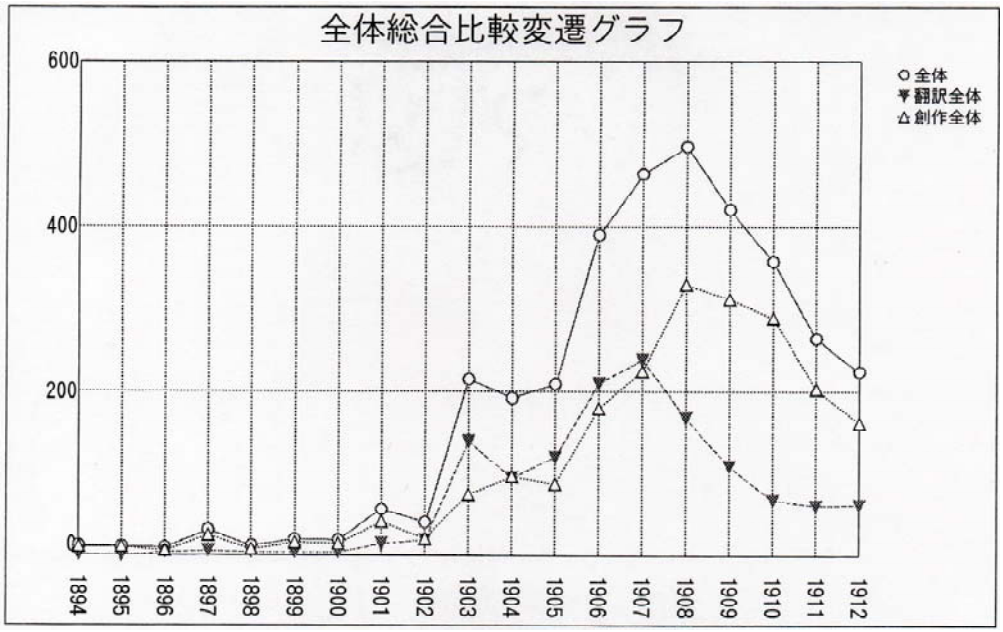


図5

翻訳が創作よりも数のうえで優勢を示す時期が、確かにある。1903、1905-07年だ。しかし、グラフで見れば、その差は少ない。阿英目録ほど顕著ではない、と十分にいうことができる。

全体の動きをながめれば、創作の発表件数が一貫して主なる位置を占めており、点として４年間がわずかに翻訳が創作よりも多い。数字で確認すれば、翻訳は全体の約38%を占めるにすぎない。1908年に創作の数が、翻訳をうわまわり、その差は、広がっているのだ。

7　おわりに

中国の学界において、阿英の「晩清小説目」が、発表当時から現在にいたるまで大いに利用されている理由は簡単である。収録数において阿英目録を凌駕する目録が、つい最近まで出現しなかったからである。これこそが、阿英目録の存在意義であった。

阿英の慧眼と努力によって編集された「晚清小説目」は、阿英以前のものをはるかに超えた存在であったのは事実だ。だからこそ、長年にわたって権威を保っていた。「翻訳小説の方が創作よりも多かった」という誤った説が、長らく信じられることになった理由でもある。

阿英目録が、単行本を中心として編纂された目録であること、雑誌からの採録が少ない事実を見てきた。収録数の不充分さは、単行本主義に起因する必然の帰結である。雑誌の時代を反映する小説目録としたいのであれば、採取の対象は、単行本を含んで、しかし、雑誌をあくまでも中心にすべきだった。

阿英「晚清小説目」は、清末小説を対象とした目録としてみれば、編集の基本において、致命的な欠陥をもっているといわざるをえない。

すくなくとも初版の『清末民初小説目録』が出版された1988年の時点で、阿英「晚清小説目」は、すでに目録としての利用価値を失っていたのである。

資料１：阿英「晚清小説目」正誤表

阿英目録では、小説題名につけられた「政治小説」「偵探小説」「言情小説」などの角書を一切採録していない。そういう編集方針らしいからいちいち指摘しない。傍線の間違いは省略する。阿英の示す発行年の表示は、厳密ではない。年号を機械的に西暦へ置きなおしている。ただし、それも阿英のやり方であるというのであれば、訂正するにはおよばない。また、『繍像小説』の刊年違いも本正誤表では書き出さなかった。問題があることだけを書いておく。これについては『清末民初小説目録X』を見てほしい。

頁	行	誤	正
創作部分			
65	4	一笠珠	一粒珠
65	8	二勇少年	創作ではなく翻訳
66	5	一九〇六年十二月刊	一九〇六年十一月刊
67	11	光緒三十四年（一九〇九）	一九〇八
68	4	品花女史	品花小史

70	2	光緒三十三年（一九〇七）	光緒三十一年（一九〇五）
70	11	女子救国美談	創作ではなく翻訳
71	12	少年軍	創作ではなく翻訳
72	1	月球殖民地	月球殖民地小説
72	7	宣統二年（一九一一）	一九一〇
73	5	中外通商始末演義	中外通商始末記演義
74	2	光緒三十二年（一九〇六）	光緒三十一年（一九〇五）
74	11	揚子江白話報	揚子江
75	2	瓜分惨禍預言記	174頁と重複
75	6	光緒三十四年（一九〇八）	丙午光緒三十二年（一九〇六）
76	7	血之花	創作ではなく翻訳
76	11	血性男子	創作ではなく翻訳
76	14	血海孤腥録	血海孤星録
82	3	英雄国	創作ではなく翻訳
82	4	英雄児女	創作ではなく翻訳
83	4	我仏山人	削除
83	8	秋風紈	創作ではなく翻訳
83	10	愛美社	愛善社
85	5	宦海升沈	宦海升沈録（177頁で訂正あり）
88	12	神女再世奇縁	創作ではなく翻訳
88	13	神州短篇小説集	『神州日報』附送小説をまとめて便宜的に命名したもの
88	13	百足球	百足珠
88	14	譚虎呆球小伝	談虎と呆球小伝の２作品
89	1	張継庚	義士張継庚伝
89	1	癡和尚	癩和尚
89	2	花夢無伝	荘夢無伝
90	7	情天憤	情天債
91	7	趼人短篇九種	阿英が便宜的に命名したもの
92	1	光緒二十二年	光緒三十二年
92	2	黒奴伝	創作ではなく翻訳
92	11	中国新婦女界雑誌	中国新女界

93	4	紫羅蘭　創作ではなく翻訳
93	13	菲律濱外史　菲獵濱外史
96	10	澤源　僊源
97	10	宣統元年（一九〇九）　光緒三十三年（一九〇七）
99	14	新党発財記　新党陞官発財記
100	1	冶逸　治逸
100	5	新児女英雄　新児女英雄伝
104	5	雁叟　隻叟[妛]
105	4	臨妝鏡　臨鏡妝
105	9	双美人　創作ではなく翻訳
105	12	双指印　創作ではなく翻訳。重複する
106	5	甕金夢　創作と翻訳に重複する
106	11	金和岑　金松岑

翻訳

110	11	陳澤如　陳繹如
112	1	曾家鞏　曾宗鞏
112	7	小学生旅行記　小学生旅行。翻訳ではなく創作
113	3	大侠錦披客伝　大侠錦帔客伝
113	3	幡渓子　蟠渓子
113	7	媚支　媚姿
114	6	心冷　心。冷は、訳者陳景韓のこと
114	6	苔痕　痕苔
115	10	長出偶得　長田偶得
115	14	培侖　培倫
116	8	新小説　新新小説
118	2	安侖坡　安介坡
118	11	古天宮　古王宮
119	3	匈奴騎士録　匈奴奇士録
119	8	達濱　達溟
120	5	漢毅　毅漢
123	11	幡渓子　蟠渓子

124 2	貝克偵探譚	貝克偵探談
124 2	保徳度	保徳慶
124 6	英蘭姆	削除。林訳に蘭姆はない
124 8	麦枯淮爾特	麦枯滑特爾
124 10	金剛石之頚鍵	金剛石之頚鏈
124 10	万金之革帯	万金之革袋
126 6	格理民	格理尼
126 7	青梨影	青藜影
126 12	金翁葉	翻訳ではなく創作
127 8	柴四郎	柴四朗
127 10	波痕夷因	波痕黄因
128 6	人境学社	人鏡学社
128 8	錦伊斉	鐸伊斉
129 10	迦茵小伝	迦因小伝
129 10	幡渓子	蟠渓子
132 6	銭楡	楡銭
134 1	珊宅彦弥	三宅彦弥
134 13	山上上泉	山上丶泉
136 1	蔡一諤	薛一諤
136 4	少栗風葉	小栗風葉
136 9	斯塞爾	斯賓塞爾
137 7	海門案	海門奇案
137 13	門里徳	們麗徳
138 1	海外奇談	瀣外奇譚
138 3	蒲魯薩貪色皆良朋	蒲魯薩貪色背良朋
138 6	冒険尋夫絡偕伉儷	冒険尋夫終諧伉儷
138 7	恒妬心李安徳棄妻	懐妬心李安徳棄妻
139 2	航海奇談	翻訳ではなく創作
139 4	茶花女遺事	巴黎茶花女遺事
140 11	希臘詩人	希臘訳人
140 12	紳士　海姆	紳士克你海姆
142 12	広末鉄腸	末広鉄腸

143 3	広末鉄腸	末広鉄腸
143 5	英柯南道爾著	削除
143 11	松貫野一	松野貫一
145 3	楽人楊珂	楽人揚珂
147 7	科雷	雷科
147 11	解朋訳	解朋著
148 5	英柯南道爾著	削除
148 10	費娥剣	翻訳ではなく創作
154 1	新炸弾	翻訳ではなく創作
154 4	妬謀夫案	妬婦謀夫案
155 1	司蒂文孫	路易司地文
155 13	万国演義	翻訳ではなく創作か？
156 10	閨娜伝	翻訳ではなく創作
156 11	司忒夫脱	司威夫脱
158 1	裴廼傑奇案	裴廼傑奇案之一（178頁で訂正あり）
159 1	密碼被殺案	密碼殺人案
159 3	英柯南道爾著	削除
160 12	高爾基	戈厲機
161 9	魯濱孫飄流記演義	魯濱孫漂流記
163 11	二十二回	四十二回
164 8	甕金夢	創作と翻訳に重複する
166 1	双鴿記	双鴿記
166 9	顧明卿	顔明卿
168 7	幡渓子	蟠渓子
169 10	梅内門	色東麦里曼
172 8	鸚鵡怨	翻訳ではなく創作

増補

174 9	瓜分惨禍預言記	75頁と重複
175 10	弥士畢著。李英圃、王星如訳	亜利美都原著　夏栄光子謙、黄恩煦玉垣訳
175 12	李子鳴、郭若衡訳	弥士畢著　王星如訳　李英圃潤
175 13	屈登著。李英圃、王星如訳	屈敦著　李子鳴、郭若衡訳

176 1　紅薔薇　　翻訳ではなく創作

資料２：雑誌初出作品一覧

創作、翻訳を区別せず、作品名の中国語音ABC順に配列する。

○印は、「晩清小説目」に収録されている雑誌初出の作品をさす。

●印は、単行本をさす。

◎印は、単行本はあるが、「晩清小説目」に収録されていない作品をさす。

×印は、「晩清小説目」に収録されていない作品をさす。

○●のふたつをつけた作品は、「晩清小説目」にはそのどちらも記載していることを意味する。

数字は、掲載号を示す。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

『新小説』

1 白絲線記（外交小説）	×◎	6
2 電術奇談（写情小説）24回	×●	8-18
3 東欧女豪傑（歴史小説）5回	○	1-5
4 毒蛇圏（偵探小説）	×●	8-24
5 毒薬案（偵探小説）	×	5
6 俄皇宮中之人鬼（語怪小説）	×◎（説部腋）2	
7 二十年目睹之怪現状（社会小説）45回	×●	8-24
8 二勇少年（冒険小説）18回	○◎	1-7
9 反聊斎（剳記小説）	×	12-15
10 海底旅行（泰西最新科学小説）21回	○◎	1-18
11 洪水禍（歴史小説）5回	○	1-7
12 黄繍球（社会小説）	○◎	15-24
13 回天綺談（政治小説）14回	×●	4-6
14 九命奇冤（社会小説）36回	×●	12-24
15 離魂病（偵探小説）	○●	1-6
16 神女再世奇縁（奇情小説）	○	22-24
17 失女案（偵探小説）	×	16
18 世界末日記（哲理小説）	×◎（説部腋）1	
19 双公使（偵探小説）	×	19

20 水底渡節（冒険小説）	×	18
21 痛史（歴史小説）27回	○◎	8-24
22 嘯天廬拾異（箚記小説）	×	8-14
23 新聊斎（写情小説）	×	7
24 新中国未来記（政治小説）5回	○	1-7
25 宜春苑（法律小説）	○	6-14
26 知新室新訳叢（箚記小説）	×	20-24

――――――――――――――――――――――――――

単行本収録率　6/13=46%

雑誌収録率　10/26=38%

『繍像小説』

1 跛翁案	×（三疑案）62	
2 痴人説夢記	○	19-54
3 斥候美談（軍事小説）	×	72
4 灯台卒	×	68-69
5 俄国包探案	×	21-22
6 負曝閑談（新編小説）30回	○	6-41
7 哥利亜司考得船案	×（華生包探案）4-5	
8 花神夢	○	56-59
9 華生包探案	×●	4-10
10 環瀛誌険	○●	5-25
11 幻想翼	×●	53-55
12 回頭看（政治小説）	×●	25-36
13 活地獄43回	○	1-69
14 僬僥国（一名汗漫遊）	○	5-71
15 経国美談新戯	×	1-34
16 苦学生	×	63-67
17 老残遊記13巻	×●	9-18
18 理想美人	×	71-72
19 鄰女語12回	○◎	6-20
20 旅居病夫案	×（華生包探案）10	

21 売国奴	×●	31-48
22 夢遊二十一世紀	×●	1-4
23 墨斯格力夫礼典案	×（華生包探案）8	
24 三疑案	×●	60-62
25 掃迷帚	×●	43-52
26 珊瑚美人（政治小説）	×●	27-41
27 山家奇遇	×	70
28 商界第一偉人	×	6-14
29 生生袋（科学小説）	○	49-52
30 世界進化史	○	57-72
31 市声（実業小説）	○●	43-72
32 書記被騙案	×（華生包探案）9	
33 孀婦匿女案	×（華生包探案）7	
34 泰西歴史演義	○◎	1-38
35 天方夜譚	○●	11-55
36 未来教育史	○	43-46
37 文明小史（新編小説）60回	×●	1-56
38 賭騙奇聞（迷信小説）8回	×●	41-46
39 小仙源（原名小殖民地）	×●	3-16
40 学究新談（教育小説）	○●	47-72
41 雪駒案	×（三疑案）61	
42 伊蘭案	×（三疑案）60	
43 銀光馬案	×（華生包探案）6	
44 玉仏縁	×●	53-58
45 月球殖民地小説	○	21-62

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

単行本収録率　17/19=89%

雑誌収録率　15/45=33%

『月月小説』

1　愛芩小伝（写情小説）	○	21
2　暗中模索（警世小説）	×	20

3　八宝匣（虚無党小説）　○●　1-2
4　爆烈弾（虚無党小説）　×　16-18
5　彼何人斯（警世小説）　×　12
6　査功課　×（趼人短篇九種）8
7　赤斗蓬（殺人奇談）　×　23
8　刺国敵（国民小説）22回　○◎　1-10
9　醋海波（家庭小説）7章　○●　5-8
10 大改革（短篇小説一）　×　3
11 大人国（寓言小説）　○◎　6-8
12 盗馬（巴黎五大奇案之一）　×　6
13 盗偵探（偵探小説）22回　○●　2-24
14 妬婦謀夫案（実事偵探）　×（新厂九種）6
15 断袖（巴黎五大奇案之一）　×　3
16 俄国皇帝（虚無党小説）　×　19-21
17 発財秘訣（社会小説）10回　○◎　11-14
18 放河灯（社会小説）　×　19
19 飛訪木星（科学小説）　×（新厂九種）5
20 風雲会（歴史伝奇）　×◎　10-24
21 公冶短（短篇小説）　×　13
22 孤臣碧血記（歴史小説）　×　16
23 古王宮（言情小説）　○　10-12
24 光緒万年（理想科学寓言譏諷詼諧小説）×（趼人短篇九種）13
25 国事偵探（威林筆記第二則　短篇小説）×　2
26 海底沈珠（偵探小説）　○◎　10-18
27 含冤花（教育小説）　×●　10-16
28 合家歓（新年小説）　×　13
29 黒籍冤魂（短篇小説）　×（趼人短篇九種）4
30 恨史（言情　短篇小説）　×　8
31 紅宝石指環（家庭小説）　○●　17-23
32 紅痣案（高龍偵探案之一案　実事偵探）×（新厂九種）11
33 猴刺客（偵探小説）　×　21
34 後官場現形記（社会小説）8回　×●　9-21

35 鶏卵世界（短篇小説） × 23
36 趼廛剰墨（箚記小説） × 7-12
37 趼人短篇九種 ○◎ 2-13
38 剣術家被殺案（海謨偵探案之一） × 3
39 劫余灰（苦情小説）16回 ×● 10-24
40 解頤語（滑稽小説） × 7-9
41 介紹良医（遊戯小説） × 21
42 今年維新（短篇小説） × 13
43 空中戦争未来記（科学小説） × 21
44 快陞官（短篇小説　記事） ×（趼人短篇九種）5
45 立憲万歳（短篇小説　滑稽） ×（趼人短篇九種）5
46 両晋演義（歴史小説）23回 ×● 1-10
47 両羅勃以利（偵探小説） × 19
48 両頭蛇（短篇小説） × 22
49 柳非煙（侠情小説） ○◎ 11-18
50 緑林豪傑（威林筆記第四則） × 7
51 倫敦新世界（科学小説） ×（新厂九種）10
52 猫日記（滑稽小説） ×（新厂九種）12
53 梅倫奎復讐案（偵探小説） × 20
54 美国独立史別裁（乙部歴史小説第一種）○◎ 1-10
55 美人島（冒険小説） ○◎ 9-23
56 美人局（威林筆記第三則） × 4
57 墓中屍案（訳本短篇小説） × 8
58 南〓都閲兵記（俳諧小説） × 14-15
59 女偵探（虚無党叢談之一　短篇小説） × 13-15
60 平歩青雲（短篇小説　笑枋） ×（趼人短篇九種）5
61 破産（短篇小説） × 11-12
62 乞食女児（短篇小説） × 10
63 巧婦（短篇小説） × 23
64 情姫（訳本短篇小説） × 5
65 情中情（写情小説） ○ 1-5
66 慶祝立憲 × 1

67 人鏡学社鬼哭伝（短篇小説）　×（趼人短篇九種）10
68 弱女救兄記　○　1-2
69 三玻璃眼（偵探小説）　○◎　1-16
70 殺人公司（虚無党小説）　×　17
71 善良煙鼠（社会小説）　×　21
72 上海遊驂録（社会小説）10回　×●　6-8
73 上海偵探案　×（新厂九種）7
74 上海之秘密（社会小説）　○　1
75 少年軍（軍事小説　短篇）　×　9
76 少女失父案（偵探小説）　×　24
77 失舟得舟（航海小説）　○◎　3-4
78 失珠（中国偵探）　○　15-17
79 十年一夢（威林筆記第一則　短篇小説）×　1
80 世界末日記（科学小説）　×　19
81 守銭虜再生記（海謨偵探之二）　×　6
82 双圏媒　痴情小説）　×　18
83 双屍祭（巴黎五大奇案之一　偵探小説）×　1
84 水深火熱（短篇小説）　×（新厂九種）21
85 特別菩薩（滑稽　短篇小説）　×　8
86 天国維新（詼諧小説）　○　22
87 鉄窗紅涙記（哲理小説）　×●　1-18
88 維多利亜宝帯縁　×　1-6
89 未来世界（立憲小説）　○◎　10-24
90 ＊烈士殉路（時事新劇）　×　11-12
91 烏託邦遊記（理想小説）　○　1-2
92 無理取閙之西遊記（滑稽小説）　×（趼人短篇九種）12
93 小足捐　×　6
94 新盦訳萃（箚記小説）　×　1-19
95 新封神伝（滑稽小説）　×●　1-10
96 新鏡花縁（寓言小説）　○◎　9-23
97 新涙珠縁（心理小説）　○◎　19-24
98 新乾坤（滑稽小説）　○　20

99 新鼠史（寓言小説）	○	22-24
100新舞台鴻雪記（社会小説）	○	15
101新再生縁（科学小説）	○	4-5
102玄君会（短篇小説）	×（新厂九種）3	
103学界鏡（教育小説）4回	○●	21-24
104学究教育談（社会小説）	×	12
105医意（滑稽体　短篇小説）	×	7
106義盗記（短篇小説）	×	3
107義侠記（一名黒奴報恩）	×	9-14
108預備立憲（短篇小説）	×（趴人短篇九種）2	
109玉環外史（偵探言情小説）	○	20-24
110岳群（一名乱草中之孤墳　侠情小説）	○	9-24
111雲南野乗（歴史小説）3回	○	11-14
112運動（新年小説）	×	13
113中国進化小史（社会小説）	○	1
114珠宮会（巴黎五大奇案之一）	×	4
115諸神大会議（滑稽小説）	×	13-17
116紫羅蘭（奇侠小説）	○	21-24
117自由結婚（箚記小説）	×（新厂九種）14	
118左右敵（奇情小説）	○◎	4-9

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

単行本収録率　12/27=44%

雑誌収録率　36/118=31%

『小説林』

1　白綾巾（滑稽小説）	×	12
2　碧血幕	○	6-9
3　吃大菜（滑稽小説）	×	7
4　地方自治（短篇小説）	×	2
5　第一百十三案　（偵探小説）	×●	1-12
6　地獄村	×●	9-12
7　電冠（科学小説）	○	1-8

8 俄羅斯之報冤奇事（短篇小説）	×	11
9 觚剰（短篇小説）	×	10
10 好男児（教育小説）	×	9
11 黒蛇奇談（偵探小説）	×●	1-12
12 滑稽談（短篇小説）	×	5
13 仮女王案（短篇小説）	×	8
14 警察之結果（短篇小説）	×	6
15 臨鏡妝	○	9-12
16 緑林侠譚（短篇小説）	×	5
17 馬哥王后佚史（大仲馬叢書第一種）	○◎	11-12
18 買路銭	×	3
19 魔海（言情小説）	×	1-8
20 孽海花（歴史小説） 第21-25回	×	1-4
21 劈棺（短篇小説）	×	11
22 平望駅（短篇小説）	×	4
23 奇童案（偵探小説）	×	9
24 〓弟案（短篇小説）	×	3
25 親鑑（家庭小説）	○◎	5-8
26 青羊褂（短篇小説）	×	9
27 窮丐（短篇小説）	×	10
28 入場券（短篇小説）	×	1
29 三勇士（短篇小説）	×	4
30 蘇格蘭独立記二（歴史小説）	×●	1-12
31 停車場	×	9
32 外交秘鑰	○	11
33 温泉浴	×	7
34 西装之少年（寓言小説）	×	11
35 新舞台三（軍事小説）	×●	2-12
36 楽隊（短篇小説）	×	6

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

単行本収録率　5/7=72%

雑誌収録率　　7/36=19%

『新新小説』

1 巴黎之秘密（世界奇談第二）	○	2-9
2 懺悔録（偵探小説）	○	3-4
3 錯恨（軍事談）	○	7-8
4 刀餘生伝（侠客談　社会小説）	×	1-2
5 刀餘生伝二（百年後之侠客談）	×	3
6 菲獵濱外史（歴史小説）	○	1-6
7 蜂針螫（偵探小説）	○	10
8 京華艶史	○	5-7
9 決闘会（法国侠客談　短篇小説）	○	6-7
10 盧生（短篇小説）	×	9
11 路斃	×	2
12 旅順落難記（軍事談）	○	7-10
13 秘密嚢（法国侠客談）	○	3-7
14 女侠客（侠客談）	○	8-9
15 聖人歟盗賊歟（心理小説）	×	1-3
16 食人会（世界奇談　怪異小説）	×	1
17 新党現形記（社会小説）	×	2
18 兄弟（侠客談）	×	4
19 虚無党奇話（俄国侠客談）	○	3-10
20 血之花	○	9-10
21 義勇軍（戦争小説）	×	2
22 中国興亡夢（政治小説）	○	1-5
23 紫絨冠	○	10

――――――――――――――――――――――――――

雑誌収録率　14/23=61%

――――――――――――――――――――――――――

雑誌５種類単行本収録率 40/66=60%

雑誌５種類雑誌収録率　82/248=33%

――――――――――――――――――――――――――

雑誌５種類全体収録率　122/314=39%

【注】

1）上海・古典文学出版社本と同じ。

2）『《晩清小説大全》編印計画（徴求意見稿)』上海書店出版部1985.8。創作の部を補遺とともに影印する。計画は、創作作品の叢書であったらしく、不用だとの判断からか、翻訳の部は、省略してある。

3）『中国近代文学大系』第12集第29巻史料索引集１（魏紹昌主編）上海書店1996.3

4）阿英「叙記」『晩清戯曲小説目』３頁

5）樽本「目録って何だ」『清末小説閑談』所収

6）「新書紹介」部分は、影印本では省かれている。広告だと判断されたためか。阿英編『晩清文学叢鈔』小説戯曲研究巻（北京・中華書局1960.3上海第１次印刷。台湾・文豊出版公司＜1989.4＞の影印本がある）には、「小説管窺録」と題して収録されている。508-530頁

7）阿英編『晩清文学叢鈔』小説戯曲研究巻に「小説経眼録」として532-539頁に収録される。

8）初版以後の版本には、北京・作家出版社1957.1北京第１版未見／1958.1北京第２次印刷／北京・人民文学出版社1982.12訂正重版がある。改定版がくりかえし出版され、台湾では海賊版が出ているくらいに有名な書目である。

9）阿英『晩清小説史』１頁

10）「稀見小説五十種」には、1943年7月16日の日付が書かれる。「稀見訳本小説」の末尾に、1939年6月23日の日付がある。中島利郎氏を通じて大塚秀高氏より複写をいただいた。のち、該書の複写を入手。

阿英説「翻訳は創作より多い」は事実か

『清末小説から』第49号（1998.4.1）に掲載。清末小説全体の傾向を説明して「翻訳は創作より多い」と断言したのは、阿英である。豊富な資料にもとづいた発言だった。ゆえに中国の研究者は、以後、右にならったのだ。研究者の全員が阿英の言説を支持引用しすでに伝説となっている。本稿において、基本資料を『新編清末民初小説目録』(1997）から『清末民初小説年表』(1999）に変更した。さらに、本書に収録するにあたり、『新編増補清末民初小説目録』(2002）に再度変更している。収録もれの雑誌などがあるだろう。それでも手元の資料に基づいて勘定すれば、阿英とは違う結論に到達した。すなわち、「翻訳は創作より多い」は、事実ではないのだ。初出にかかげた図２枚は、「阿英「晩清小説目」の構造」(本書収録）と同一であるから、ここでは省略する。

1　阿英説のはじまりとその根拠

清末小説研究の第一人者阿英は、清末小説全体をさして「翻訳は創作より多い（原文：翻訳多於創作)」といった。

阿英『晩清小説史』（上海・商務印書館1937.5。274頁）から約20年後に改訂した同書（北京・作家出版社1955.8。180頁）においても、まったく同じ語句を使っている。

さらに、「翻訳書の数量は、全数量の３分の２」であるとも総括する。数字を提出し具体的にのべているから、読者を説得して有力であるということができよう。

以来、「翻訳は創作より多い」、「全数量の３分の２」を占める、という阿英の

指摘は、中国において現在にいたるまで否定されたことはない。生き延びているから疑問を提出する研究者は誰もいない。これが現状だ。

例を示す。『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集１に掲げられた施蟄存「導言」(1990) *1がある。

施蟄存は、阿英（銭杏邨）の統計によるならば、と前置し「翻訳小説の出版数は、創作小説の２倍になる可能性がある」(18頁) と書いているのだ。

1937年の『晩清小説史』初版からすでに約60[80]年が経過した。この期間、阿英の指摘を検討あるいは批判した論文が発表されることは、中国語圏においては皆無であった。だからこそ阿英が引用されつづける。

理由は簡単である。阿英説を検討しようにも、よるべき資料がないからだ。阿英がみずから編集した「晩清小説目」(1954) *2をうわまわる小説目録は、中国において編集出版されることがなかった*3。

阿英が提出した「翻訳書の数量は、全数量の３分の２」という自信に満ちた発言は、彼の「晩清小説目」に根拠をもっていた。誰しも「晩清小説目」にもとづくかぎり、阿英と異なる発言をすることは不可能なのだ。

新しい小説目録が出現しないから阿英「晩清小説目」を利用せざるをえない、という循環におちいる。阿英とは別の見解が出てくるわけがない。

阿英の翻訳小説に関する説明そのものを検証しようと思えば、「晩清小説目」を凌駕する小説目録を編集する以外にない。

私は、過去数回にわたり、阿英説「翻訳は創作より多い」について検討してきた。１度で終わらなかったのは、利用する目録が成長しているためである。つまり、収録数が増加している。それゆえ数字に変化が生じた。

その変化を簡単にいえば、「晩清小説目」に密着しての検証から「晩清小説目」より離れての検討、という動きとなる。別の言葉で表わせば、同調から批判へ、という道筋である。それは同時に、収集資料の拡大と深化を意味してもいるのだ。

2　阿英説の検討

同調からはじまる

小説目録本来の目的のひとつは、書物の検索であることはいうまでもない。しかし、私は、書物検索以外に目録そのものが資料として利用できることを証明したかった。

「目録って何だ」(1978）*4は、その例である。阿英「晩清小説目」を整理しなおし、創作と翻訳の発行件数に焦点をあて、その変遷をたどった。

その結論は、以下の通りである。

> 阿英は『晩清小説史』第14章でのみ翻訳小説をあつかい、翻訳書の数は全体の３分の２を占めるというが、小説目の数字に基づけば1,107種のうちの翻訳628種であるから約56％である。初版で単行本を1,500種以上としたのを改訂版で1,000種以上に改めたのにならえば翻訳は全体の５分の３とでもした方がよかったかも知れない。31頁

３分の２ならば、約66％だ。しかし、阿英の目録を実際に数えてみれば、翻訳が約56％を占めているにすぎない。阿英のいう数字よりも10％も少ないではないか、という気持ちだった。だから、５分の３なのである。

３分の２にしろ５分の３にしろ、翻訳が創作よりも多いのは変わらない。

考えてみればこの結論は、当然のことであった。阿英は、自分の「清末小説目」にもとづいて「翻訳は創作より多い」、「全数量の３分の２」という結論を得たのだ。同じ「清末小説目」を資料にするのだから、結論が10％の違いはあるにしても、ほぼ同じになるのも不思議ではない。

そこで清末小説の発行状況を以下のみっつにまとめた。

1　1902年を境として発行件数が急増している。

2　最初は翻訳の方が創作よりも圧倒的に多く、逆転するのは1909年になってから。

3　頂点は、1907年である。

阿英が依拠したのと同じ資料を使用して阿英の立論を検討することは、無意味ではない。追跡確認とよばれる作業に属する。だが、新しい見解を得るには十分ではないこともわかるのだ。

阿英とは違った方法で、より広く資料を収集する必要がある。時間がかかるのは、当たり前であろう。新説を提起するまでに、思いおこせば約10年かかったことになる。

その前に、阿英の方法とは、なにか。ここで確認しておきたい。

阿英「晩清小説目」の特徴

阿英が「晩清小説目」を編集するさいに採用した方針は、単行本を主体とし雑誌にも採取の範囲を広げる、というものだ。単行本を中心にするから、これを単行本主義という。

阿英以前の目録は、この単行本主義によって編纂されるのが一般である。だいいち雑誌という形態が出現する前の小説を対象としているのだ。

阿英が、疑いもなく従来通りの単行本主義を採用したのも無理はない。しかし、雑誌に着目してもいる点を見逃すわけにはいかない。

清末こそ雑誌という新しい形態の出版物が出てくる新時代の幕開けであった。多種多数の雑誌に小説が発表されるようになる。そのうちのいくつかは単行本化される。つまり、新しい時代の小説は、雑誌掲載を中心としたものに主流が移動しているのだ。単行本を中心にしながら、雑誌を無視しなかったところに阿英の非凡な才能をみることができる。

雑誌が主な発表媒体であるならば、清末小説の目録は、当然ながら雑誌を主たる採取対象としなければならない。これを雑誌主義という*5。

阿英の採用する単行本主義では、とりこぼす作品の割合が増大するであろう、と予想は簡単につく。事実、そうであった。

詳細に阿英目録を検証すると作品採録に不十分な点が見つかる。

たとえば、同じ雑誌に掲載されていながら、阿英は、採取する作品とそうでない作品に分けている。そうでありながら、採取の基準は、明示されてない。恣意的なのだ。単行本を見逃していることもある*6。

以上のような不備が「晩清小説目」にある事実を認めなければならないだろう。不備のある小説目録を基礎とし、それから得られた「翻訳は創作より多い」という結論に対して疑問が生ずるのは当然である。

雑誌主義にもとづき、雑誌初出から作品を採取して編纂発行したのが清末小説研究会編『清末民初小説目録』（中国文芸研究会1988.3.1）である。雑誌主義といっても単行本を排除しているわけではない。単行本も、できるかぎり収録している点を強調しておきたい。

批判――「翻訳は創作より多い」を疑う

『清末民初小説目録』を発行したあと、増補訂正作業を続けていた。その最新データにもとづいて阿英「晩清小説目」を比較検討した。

阿英「晩清小説目」が提供する数字から離れ、「晩清小説目」を別の資料――すなわち『清末民初小説目録』にもとづいて見直した最初の論文が、「清末民初小説のふたこぶラクダ」(1988）*7だ。

新しい資料によってはじめて阿英「晩清小説目」とは違う様相を指摘することができた。

発行年が記載されている作品のうち1911年までのものを抽出する。字数の多少にかかわらず、初出を１件と数え、再版本は計算に入れない。以上の方針を定めて創作と翻訳の件数を取りだす。

その最大の特徴をいえば、清末の作品総量2,372件からすれば、創作1,237件に対して翻訳1,135件となり、ほぼ互角であるという意外な結果である。

阿英のいう「翻訳は創作より多い」どころか、数字をこまかくみれば、創作が翻訳よりも多い。雑誌初出の作品を、阿英が実行したよりもより広く深く採取したうえでの結論だ。阿英の言葉とは大きく隔たった事実が浮かび上がったのである。

以後、「清末民初小説の種類」(1992）*8、「清末民初の翻訳小説」(1996）*9で同様の比較検討作業を公表してきた。

集計作業をするたびに、データ数が異なる結果となっている。それは、毎日のように増補訂正作業を継続しているからなのだ。また、データ抽出の角度によっ

ても出てくる数字が違うこともある。阿英の「晩清小説目」は、増補改訂されることはない。いわば死んでしまっているのにくらべて、私の『清末民初小説目録』は、日々、成長しているのだ。その数字も同一というわけにはいかない。

3　「翻訳は創作より多い」は事実か
――『新編増補清末民初小説目録』による再検討

1997年10月、『新編清末民初小説目録』を発行した*10。雑誌初出を中心に、単行本もできるかぎり収録するという編集方針を徹底させたものだ。

さらに、新編目録にもとづいて改編した樽本照雄編『清末民初小説年表』（清末小説研究会1999.10.10）を作成した。そうして『新編増補清末民初小説目録』(済南・斉魯書社2002.4）が出た。くり返すが現在も増補訂正作業を継続している

機会があり、ついでに、阿英「晩清小説目」についても誤植、翻訳と創作の入れ違いなどを点検しなおした（注：樽本「阿英「晩清小説目」の構造」参照。本書所収)。作品集は、収録されたひとつひとつの作品を１件として数える。

その結果、阿英「晩清小説目」は、1873年から1912年まで、創作は471件、翻訳は687件の合計1,158件を収録していることが判明する。ここには、刊行年を記載しない作品は含んでいない。

これに対して、『新編増補清末民初小説目録』の清末部分（阿英目録に合わせて1873-1912年とする）は、どうか。

創作2,200件、翻訳1,339件の総合計3,539件という数字を得ることができる。

阿英目録の1,158件を『新編増補清末民初小説目録』清末部分の3,539件で割れば、阿英「晩清小説目」がどれくらいの範囲を収録しているかがわかる。

おおまかにいって、阿英目録は、『新編増補清末民初小説目録』清末部分の約33％しか収録していないことが判明する。

『新編増補清末民初小説目録』にもとづけば、清末に発表された創作、翻訳小説の発行件数の推移をほぼ正確に把握することができると考える。

清末に発表された小説の創作と翻訳の発行件数（雑誌掲載のものと単行本を合計している）の推移は、次のようになる。

清末１　1902年を境として作品の発表件数が急増している。

清末２　最初、やや翻訳が創作をうわまわって発表されており、創作が翻訳を超えるのは、1908年以降である。

清末３　作品発表の頂点は、1908年である。

阿英「晩清小説目」と比較すれば、清末１の1902年に発行件数が急増する部分は、訂正の必要はない。しかし、そのほかは、清末２の転換年を1908年（阿英目録は1909年）に、清末３の頂点も1908年（阿英目録は1907年）と改めなければならないだろう。

問題は、創作と翻訳の割りあいとその動向である。阿英のいう、「翻訳は創作より多い」、「全数量の３分の２」に直接かかわる部分だ。

翻訳の発行件数の多さが創作にやや先行しているが、阿英の示す圧倒的というほどの差は認めることができない。総合した発行件数のうえからいっても、創作は2,200件で、翻訳の1,339件よりもやはり多いのである。

『新編増補清末民初小説目録』を見れば、翻訳は、実のところ清末全体の38%でしかない。

阿英の「翻訳は創作より多い」という事実はない、という結論にたどりつく。

以上が雑誌主義による資料にもとづいた回答である。

4　結論――阿英説の誤り

結論としては、阿英説「翻訳は創作より多い」は事実ではない、をくりかえすことになる。

しかし、だからといって翻訳小説が創作小説に及ぼした影響を否定するものではない。内容による影響関係の問題は、別に検討されなければならないだろう。

内容とは関係なく、翻訳小説が、少なくとも1903年と1905-07年の間は、数のうえで創作小説よりも多かったことは否定できない事実でもある。

ただ、阿英のいう「翻訳書の数量は、全数量の３分の２」は、誇張にすぎる、

実情を反映した立論ではない、と私は異議をとなえたいのである。

【注】

1）施蟄存「導言」『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集１　上海書店1990.10

2）阿英『晩清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8／増補版　上海・古典文学出版社1957.9

3）陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典』（1897-1929）上海教育出版社1994.12がある。収録数は、阿英「晩清小説目」よりも多い。ただし、こちらは年表であって小説目録というわけにはいかない。阿英「晩清小説目」とは編集意図が違うのだ。王継権、夏生元『中国近代小説目録』（南昌・百花洲文藝出版社1998.5　中国近代小説大系80）が出版された。ただし、翻訳小説を採録しない。

4）樽本「目録って何だ」。『清末小説閑談』所収

5）樽本「時代を反映する小説目録――『新編清末民初小説目録』のこと」『中国文芸研究会会報』第190号1997.8.31。漢訳がある。賀偉訳「反映時代的小説目録――関於《新編清末民初小説目録》」（樽本編『新編増補清末民初小説目録』済南・斉魯書社2002.4）

6）樽本「阿英「晩清小説目」の構造」。本書収録

7）樽本「清末民初小説のふたこぶラクダ」『清末小説論集』所収。【補記】民初のデータを入力間違いしていた

8）樽本「清末民初小説の種類（その１　準備篇）」『大阪経大論集』第42巻第５号（通巻第205号）1992.3.31、「清末民初小説の種類（その２　実践篇）」『大阪経大論集』第42巻第６号（通巻第206号）1992.4.19。ともに本書所収

9）樽本「清末民初の翻訳小説――付：日本語経由の欧米漢訳小説一覧」『大阪経大論集』第47巻第１号（通巻231号）1996.5.15。『清末翻訳小説論集（増補版)』所収

10）樽本『新編清末民初小説目録』清末小説研究会1997.10.10。いわゆる樽目録第２版

小説目録の新暦旧暦問題

『清末小説から』第54号（1999.7.1）に掲載。表題を変更した。清末小説の発行年月を表記するばあい、年は新暦、月は旧暦を使用するという奇妙な習慣が中国の学界にはある。新暦旧暦混用という。新暦と旧暦の混用など、普通は問題にもならない。だが、清末民初小説をあつかう場合、避けて通ることのできない事柄だ。それが、今まで問題にもならなかったのが、かえって問題なのだ。小説目録を作成してきた経験から、私は、はやくから気づいていた。私が知っているくらいだから中国の研究者は誰でも承知しているとばかり思っていた。それが、そうでもないらしいことがわかって、それならば書く必要があると考えた。目録類は、２次資料として重要な役割を果たしている。この新暦旧暦混用を採用している例を５件あげて、注意を喚起する。阿英と間接的に関わりあいがあるから、ここに収録する。一部分を加筆した。

清末までは旧暦を、中華民国になって新暦を採用した。これは歴史の常識であることを最初にいっておく。

私が早くから直面していたのが新暦旧暦問題である。「繍像小説総目録」(1973)に始まるから、相当な昔だということができよう。『月月小説』『遊戯世界』『小説林』『競立社小説月報』『小説月報』『新小説』『小説時報』などの目録を発表して、これが『清末民初小説目録』(1988）あるいはこれを増補した『新編清末民初小説目録』(1997）につながっていく。『清末民初小説年表』(1999）では、最後まで注意を強いられた。『新編増補清末民初小説目録』(2002）でも同様だ。

耳慣れない言葉かもしれない。だが、誰でもが実際に見ているはずだ。

清末に発行された雑誌、出版された単行本は、発行年月を旧暦で表示する。こ

れを収録した目録を参照し利用する時、新暦に換算のうえ記述されているのを目にするのだ。記述の都合で新暦に統一すれば、旧暦を変換する必要が必然的にでてくる。

ところが、そのばあい年は新暦に置き換え、月は旧暦のままに記述する文献、目録が存在している。すなわち新暦旧暦混用だ。

たとえば、目録に「一九〇六年十二月」、あるいは「1906.12」と記述されているとしよう。元となった出版物を見ると「光緒三十二年十二月」と印刷されている。中国での刊行物のなかには、月止まりで表示するものがある。日にちまで印刷していないとやっかいだ。

上記の旧暦に対応する新暦は、実際には「1907年１月14日-２月12日」である。説明すると、旧暦と新暦にはズレが生じていて、だからこそ問題が発生する。「光緒三十二年十二月」は、日の表示がないから、「十二月一日」ならば「1907年１月14日」だし、「十二月三十日」なら「２月12日」という期間の幅を持っているという意味だ。

目録表示の「一九〇六年十二月」にもどる。目録の編者は、「光緒三十二年」は新暦の「一九〇六年」に置き換え、「十二月」は旧暦のままにした。ここに新暦旧暦混用が発生する。

「光緒三十二（一九〇六）年十二月」と記述すれば、誤解が生じることは少なくなる。全体が旧暦で表示されているとわかるからだ。しかし、これを「一九〇六年十二月」、あるいは「1906.12」と書くから混乱がうまれる。一九〇六年が新暦表示なのだから「十二月」も同じく新暦に違いないと思いこむ。無理もない。説明もせず、旧暦と新暦を混用して目録に記述するほうが悪い。

この新暦旧暦混用は、目録作成上の基本的間違いだと考える。しかし、中国では、研究上それほど意識されてこなかったのではないか。

問題の存在を明らかにしようと私が思ったのは、『二十年目睹之怪現状』の発行に関して、その年月の表記に問題があることを述べたことがきっかけである*[1]。

私は、阿英の「晚清小説目」に書かれている出版年月の「一九〇六年十二月」が誤りであると指摘した。「一九〇六年」は新暦だ。「十二月」は旧暦を示す。しかも旧暦で「十一月」と書かなければならない箇所だ。阿英目録の誤記である。

これに対して、中国のある研究者が、旧暦を新暦に換算すると「一九〇六年十二月」になり、阿英は正しい、と反論してきた。どうやら、この人は、「一九〇六年十二月」がまるまるの新暦であると思ったらしい。

違うのだ。奇妙なことに思われるだろうが、重要だからくり返すと阿英が書いた「一九〇六年十二月」の「一九〇六年」は新暦だが、「十二月」は旧暦なのである。その中国人研究者は、これが新暦旧暦混用の一例であることを知らなかった。

本来旧暦「十一月」とあるべき箇所を阿英は「十二月」と書き誤った。その間違いを私は指摘したのだった。だが、例の研究者は新暦旧暦混用があること自体を知らないのだから、問題そのものが理解できなかったのだろう。

これで新暦旧暦混用の事実が、中国研究者といってもそれほど知られていないとわかった。たしかに、今まで新暦旧暦問題――特に、小説目録の記述方法について論じられることはなかったように思う。

いくつかの目録を紹介して問題の根が深いことを述べる。

孫楷第『中国通俗小説書目』*2は、1930年代の早くから出版されている目録だ。清末小説を収録しているのも特色のひとつとして知られる。該書では出版年のみを記述する。たとえば、「宣統二年」のように旧暦で表わし、月日は省略している。あえて新暦に換算することもない。

阿英「晩清小説目」*3あたりから、旧暦と新暦の併記を見るようになる。こちらは基本的に年のみの表示である。例をあげると「光緒三十二年（一九〇六）」と示す。機械的に換算しただけ。月日を省略するので新暦旧暦のズレは、かえって露出しない。例外があって、これが『二十年目睹之怪現状』なのだ。「第一冊　一至十五回　一九〇六年二月刊」(66頁）などと年号を書かず、しかも「二月」は旧暦である。説明はない。これが、新暦旧暦混用のさきがけということができるかもしれない。

新暦旧暦混用は、阿英以後は普通のことになる。

例１：現代文学期刊聯合調査小組編『中国現代文学期刊目録（初稿）』上海文芸出版社1961／アメリカ・ARL影印1968

【対象】雑誌、新聞【範囲】1902-1949年【説明】出版年月の記述方法について説明はない

それぞれの文学雑誌について、上海図書館あるいは作協上海分会に所蔵されているものは、そう明記する。清末の代表的雑誌を例にとる。創刊号と終刊号の原物および目録の記述を対照してみよう。

	原物	目録
新 小 説	光緒二十八年十月十五日-刊年不記	1902.10-1905.12
繍像小説	癸卯五月初一日-刊年不記	1903.5-1906.4
新新小説	光緒三十年八月初一日-光緒三十三年四月初一日	1904.8-1907.4
月月小説	光緒三十二年九月望日-戊申十二月	1906.9-1908.12
小 説 林	光緒三十三年正月-戊申九月	1907.1-1908.9
小説月報	宣統二年七月二十五日-（略）	1910.8-（略）

本目録の記述は、原物の「光緒二十八年」を西暦1902年に置き換え、月は旧暦のままとする。日は、省略している。『小説月報』のみなぜだか「1910.8」に書いて他の記述と異なる。新暦旧暦混用の方法に従えば、「1910.7」と表示しなければならない箇所だ。誤植かと思うが、別に意図があるのかどうか不明。

本題とはずれるが、指摘せざるをえないさらに奇妙なことがある。刊年が本来記されていないものにも発行年月を明記する。だから、当然、推定であるはずだ。『繍像小説』は、第13期より発行年月日を印刷しなくなり、発行そのものが遅延している。編者の李伯元が死亡したのちも発行が継続された。これが現在の研究結果である。しかし、この目録を見れば、あるはずのない終刊期日が「1906.4」と書かれているではないか。「推測」という説明はどこにもない。仮に推測するならば「丙午三月十五日」とすることは可能だ。ただし、この推測は間違っている。どのみち「1906.4」にはならない。原物に存在しない発行年月を書く場合は、注記する必要がある（注：2016年現在、多くの記述がいいまだに誤ったままだ）。

雑誌そのものは、作協上海分会に所蔵されているらしい。そこまで書かれているのだから、目録に見える終刊期日がまさか推測とは誰も思わないだろう。こうして『繍像小説』についての誤った記述が一人歩きする。

例２：上海図書館編『中国近代現代叢書目録』香港・商務印書館1980.2
【対象】叢書【範囲】1902-1949年【説明】出版年月の記述方法について説明はない

清末小説に関係する叢書といえば、商務印書館発行の説部叢書と林訳小説叢書が有名だろう。

説部叢書は、最初、第一集から第十集まで、各集10冊の構成で100冊が発行された。商務印書館が金港堂と合弁会社であった時代の貴重な翻訳叢書である。のち、商務印書館は金港堂との合弁を解消し、この叢書を再版する。最初の100冊を初集と改称する。収録されていた日本の作品を別の翻訳に差し替えてもいる。日本の金港堂と手を切って独立したのだから、叢書内の日本色をも一掃したかったのか。ただし、差し替えがあっただけで日本の作品をすべて排除したわけではない。

該目録は、実物を見たうえで記録している。ゆえに記述は詳細だ。

たとえば、第二集第五編に掲げられる作品について見てみよう。

５．珊瑚美人（政治小説）　（日）三宅彦弥著　中国商務印書館編訳所訳
1905年４月初版　９月再版　134頁

「134頁」とあるところからも、原物を見なければ書けないことがわかる。

問題は、「1905年４月初版　９月再版」である。「1905年」部分を見れば、これは西暦だからあきらかに新暦だ。「1905年」が新暦ならば、同じアラビア数字の「４月」も新暦だと思うだろう。ところが、違う。原本には、「光緒三十一年四月初版／光緒三十一年九月再版」と明示されている。すなわち、「光緒三十一年」を新暦の「1905年」に置き換えただけで、「４月」は旧暦のままなのだ。

例３：全国図書聯合目録編輯組編輯『全国中文期刊聯合目録（1833-1949）』増訂本　書目文献出版社1981.8
【対象】雑誌【範囲】1833-1949年【説明】推算のものについては［］を使用す

る

比較対照するために『新小説』『繍像小説』の２種類について見る。

	原物	目録
新小説	光緒二十八年十月十五日-刊年不記	1902.10-1905.12
繍像小説	癸卯五月初一日-刊年不記	1903.5-1906.3

目録の記述は、ここでも明らかに新暦年と旧暦月の混用である。

記号［］を使用すると説明しながら、実際にはカッコも使わず、記載されていない『新小説』『繍像小説』の終刊期日を、あたかも記載されているかのように記述する。

例４：北京図書館編『民国時期総書目（1911-1949）』外国文学　北京・書目文献出版社1987.4

【対象】単行本【範囲】1911-1949年【説明】出版年月の記述方法について説明はない

商務印書館の説部叢書は、初集100編と称し再編集しなおして出版されたことは前述した。その第１編は、黒岩涙香が重訳した外国ものである。はじめ説部叢書とは無関係に出版されていたものを、再版に際して叢書に取り入れた。

0184

天際落花（言情小説）　黒岩周六著　褚霊辰訳述　①上海　商務印書館　1908年５月初版，1914年４月再版　119頁　32開　（説部叢書　初集第１編）

ここにも頁数を明示して原物を確認していることが理解できる。

私の手元にある原物の再版本を見れば、出版年は、「戊申年五月初版、中華民国三年四月再版」と書いてある。戊申は1908年だ。そこまでは、いい。しかし、該書目の「５月」は、明らかに旧暦を示している。「1908年５月」も新暦旧暦混用だ。

例５：賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学総書目』福州・福建教育出版社1993.12
【対象】単行本【範囲】1917-1949年、1882-1916年翻訳【説明】出版年月の記述方法について説明はない

特別に収録された1916年以前の翻訳文学巻に、同じ例を見る。

> 珊瑚美人　小説。［日］三宅彦弥著，商務印書館編訳所訳。上海商務印書館1905年４月初版，９月再版。収入説部叢書第二集第５編。

原本には、「光緒三十一年四月初版／光緒三十一年九月再版」と記載されていることを前に述べた。対照すれば、ここでも「1905年」が新暦で「４月」が旧暦であることが判明する。くりかえすが、典型的な新暦旧暦混用にほかならない。

阿英の「晩清小説目」からはじまり、主要な目録が、いずれも説明ぬきで新暦旧暦混用を採用していることを見てきた。

旧暦の年月日を換算するのは、それほど困難なことではない。工具書を見れば書いてある。やっかいなのは、年月のみの記載で日までの表示をしない場合だ。前述のとおり日が印刷されていないと新暦に換算することができない。

日の記載がないばあい、新暦旧暦混用はやむをえない措置だったとはいえるかもしれない。そのときは、やはり説明が必要だろう。中国において今まで特別な説明をしていなかったのは、この新暦旧暦混用が当然の記述方法だと考えられていたからだろうか。

基本資料となるべき中国の目録類には、新暦旧暦混用のようないわば奇妙な記述があることを知って利用すべきだ。

【注】

１）樽本「阿英「晩清小説目」の新暦旧暦問題」。本書所収

２）孫楷第『中国通俗小説書目』北平・中国大辞典編纂処、国立北平図書館1933.3／北京・作家出版社1957.7北京第１版未見、1958.1北京第２次印刷／北京・人民文学出版社1982.12訂正重

版
3）阿英「晩清小説目」『晩清戯曲小説目』上海文芸聯合出版社1954.8／増補版　上海・古典文学出版社1957.9

阿英「晩清小説目」の新暦旧暦問題

——竺慶麟への反論をかねて

『大阪経大論集』第50巻第１号（通巻249号 1999.7.8）に掲載。表題を変更した。『二十年目睹之怪現状』の発行年月を阿英が誤記している。これが発端になった。本稿では、その源である阿英目録の記述を問題にした。阿英は、出版物の刊年表記に旧暦と新暦を混在させており（新暦旧暦混用という）、新暦に換算したように見える。しかも、実際は書き誤っていることを指摘した。同様に旧暦と新暦を混用する資料の存在に目が向くのは必然である。それにしても、明らかに阿英の書き間違いであるにもかかわらず、阿英の記述は正しい、と主張する研究者竺慶麟が出てきたのには驚いた。阿英のこの新暦旧暦混用の事実を竺慶麟は知らないのだ。なによりも書物そのものを手にとって確認するという研究の基本を無視している。とにかく反論したかったらしい。

1　はじめに

呉趼人『二十年目睹之怪現状』の発行年月に関して、今、日本と中国の研究者の間で論争が進行している。論争の舞台は、北京で発行されている『読書』という雑誌だ。わずかな紙幅しか占めてはいないが、この論争が内包する研究上の意味は、小さくない。

『二十年目睹之怪現状』は、分冊で単行本化された。阿英は、その第４冊は「一九〇六年十二（ママ）月」に発行されたと書く。

日本の樽本照雄は、阿英の記述は間違っているといい、中国の竺慶麟は、阿英は間違っていないと反論する。

対立している両者の主張は、どちらが事実であろうか。

論争の内容を検討する前に、論争の焦点となる新暦旧暦について簡単な説明をしておく。

2　新暦旧暦の混用表示

最初にひとこと。本稿では、旧暦は和数字、新暦はアラビア数字を使用している。ただし、引用文はその限りではない。

清末小説についてまわるやっかいな問題のひとつに、新暦旧暦の換算、あるいは混用表示がある。

清朝から中華民国への大変動にともなって、暦も旧暦から新暦に変更された。すなわち、旧暦宣統三年十一月十三日を新暦の中華民国元（1912）年１月１日とした。以後、新暦が使用されることになる。

ただし、新暦使用の決定があったとはいえ、事前に旧暦で印刷していたものが改暦後も市中に出回ることは容易に想像できる。あるいは、新暦旧暦の変更にともなう混乱を出版物の内部でなんとか制御しようとする動きがある。

たとえば、辛亥革命をのりきった上海・商務印書館の文芸雑誌『小説月報』に混乱の例を見ることができよう。

私の見た『小説月報』は、第２年第８期の奥付に「宣統三年八月二十五日」と明示されていて、期日通り、あるいは前もって印刷発行されたことを示している。しかし、これが、次の第９期になると、「辛亥年九月」と印刷されていながら、「中華民国元年四月再版」と表示される。同じく第10期も「辛亥年十月」、「中華民国元年四月再版」、第11期が「辛亥年十一月二十五日」、第12期は「辛亥年十二月二十五日」とある。第３年第１期にいたりようやく「中華民国元年四月」と記述される。

宣統の年号をはずしたのは、清朝が滅亡すると見た商務印書館の判断だろう。あるいは、中華民国以後に奥付だけをつけかえて再版を装った可能性もある。

だいいち、旧暦十一月十三日が新暦への切り替わり日である。第11期の「辛亥年十一月二十五日」は、新暦に転換することを事前にしらなかった事実を知らし

めている。しかたなく旧暦表示のままで出荷した。

つまり、『小説月報』の奥付にみる混乱は、社会の混乱をそのままに反映している。それぞれの発行期日である「辛亥年九月」は旧暦で、「中華民国元年四月」は新暦だ。ここでは、新暦旧暦が混在している。

新暦旧暦が混在しているだけならば、それだけのことで別にたいした不便も生じない。

しかし、問題を複雑にしているのが、旧暦と新暦を区別しない研究者の無理解である。あるいは、新暦旧暦の区別を一応はしてはいるが、独特の書き方をして誤解を与えている実例のあることだ。

「一九〇六年十二月」という記述は、旧暦なのかそれとも新暦か。

わかりきったことだと感じられるかもしれない。1906年とあるからには、これは新暦に違いなかろう。こう考えるのが普通だと誰しもが思う。だが、中国では、実情はそれほど単純ではない。

読み方の可能性としては、ふたつある。

ひとつは、そのまま1906年12月という新暦を示しているというもの。ただし、清朝時期であれば旧暦を使用するのが通常だから、新暦表示は研究者が換算している場合が多い。換算する時に、間違いが生じることも充分ありうる。

もうひとつは、「一九〇六年」は新暦であって、「十二月」の部分は旧暦であるという奇妙なもの。この普通に見れば奇妙な書き方が、中国では奇妙だと意識されていないところに問題の深刻さがある。

3　樽本の指摘

呉趼人『二十年目睹之怪現状』第４冊の発行年について、阿英の記述が誤っていることを述べたのは、樽本だ*1。

該作品は、最初、雑誌『新小説』に連載された。『新小説』が休刊したのち、分冊で発行されていることは周知のことだろう。中国の研究者が、第４、５冊の発行年月を説明して「ともに同年（注：1906）十二月に出版された」と書く。その根をさがすと、阿英目録にたどりつく。阿英は、第４、５冊ともに「一九〇六

年十二月刊」*2と記しているのがその証拠だ。阿英が「晩清小説目」に記述しているのだから、「ともに同年十二月に出版された」と説明してどこが間違いであろうか、というわけだ。

しかし、作品の原物を見れば、第４冊の奥付には、「光緒三十二年十◎一月二日」と印刷されている。光緒三十二年は、いうまでもなく1906年にあたる。

「十一月刊」と書くべきところを、阿英は、「十二月刊」と書き誤った。あるいは、原稿は正しかったが、組版段階で誤植をした。その誤植が訂正されなかった。だから、第４冊と第５冊の発行が同時だと誤解されることになったのだ。のちの研究者が、すべてこれを踏襲した。ゆえに、阿英にはじまって、中国の専門家全員が明らかに誤っている、と樽本は述べた。

4　竺慶麟の指摘

いや、阿英の記述は誤っていない。間違っているのは、樽本の方だという人物が出現する。

樽本は、阿英の間違いを引き継いだ専門家として魏紹昌、王俊年、盧叔度、裴效維らの実名を掲げている。いささかでも事実に相違すれば、彼らから反論批判がなされないわけがない。研究者は、正確な記述をするために神経をすり減らしているといっても過言ではないからだ。

中国の学界において、氏名を明らかにして誤りを指摘することの衝撃度は高い。体面を重んじる歴史的背景を知る人は理解している。今回の指摘が外国人によって行なわれたことは別にして、通例ならば何がなんでも反論したいところだろう。私の過去の経験からしても、十分に予想がつく。

ところが、今回は、彼ら専門家からの直接の反論ではないことが不思議のひとつだった。

それぱかりか名前をあげた専門家のなかのひとり（注：裴效維）からは、『二十年目睹之怪現状』の初版を見ていないから阿英の書いている通りにしたがった、という手紙をもらっている。

当事者にはわからなくても、遠くから見る人には理解できることもあろう。以

下において内容を紹介する。

竺慶麟「阿英氏は間違ってはいない（原文：阿英先生没有錯）」（『読書』1998年第12期 1998.12）の論点は、ふたつある。新暦旧暦の換算と各研究者の記述方法だ。

5　新暦旧暦の換算

「光緒三十二年十一月二日初版発行」は、新暦になおせば「一九〇六年十二月十七日」となる。阿英の記述は「一九〇六年十二(ママ)月」だから、これは正しい。阿英は、間違ってはいない、と竺慶麟はいう。

新暦旧暦対照表にもとづいて調べた結果であることが述べられている。竺慶麟には、自信があるのだろう。絶対的な自信があるからこそ『読書』誌に自説を公表したにちがいない。

この部分のみを見れば、いかにも竺慶麟説が正しいように思える。だから『読書』編集部も掲載に同意したものと想像される。

しかし、竺慶麟は、「光緒三十二年十一月二日」は、新暦「一九〇六年十二月十七日」だと強調しているにすぎない。阿英が書いている「一九〇六年十二(ママ)月」がどういう性質のものであるのかを考えていないのが不思議のふたつ目。

阿英のいう「一九〇六年十二(ママ)月」は、まるまる新暦であると竺慶麟は信じているらしい。そうでなければ、旧暦を新暦に置き換えただけで反論が成立すると考えはしないだろう。問題は、それほど単純ではないのだ。

樽本が、旧暦を新暦に換算しもしないで、阿英が間違えている、という結論に達した。そうとでも竺慶麟は考えているのだろうか。換算したうえで、なお阿英の記述には誤りがある、と樽本は言っている。これを知らないとすれば、知らなくとも想像することができなければ、竺慶麟は、研究それ自体をあまりにも軽視しているといわざるを得ない。

竺慶麟は、該作品の第４冊のみを問題にしているから全体との関係が分からなくなっているのだ。つまりは、阿英が『二十年目睹之怪現状』の発行全体についてどのような書き方をしているのか竺慶麟は見ていないといえよう。

6　事実と阿英の書き方

事実から出発しなければならない。

単行本『二十年目睹之怪現状』の発行情況を、一覧表として下に掲げる。それを新暦に換算し、阿英が「晩清小説目」でどのように書いているかも見てみよう。

『二十年目睹之怪現状（社会小説）』　８冊　108回　我仏山人（呉趼人）　総発行所上海広智書局　発行所横浜新民社

原本	阿英
第一冊　光緒三十二年 二 月十八日（1906.3.12）	一九〇六年 二 月刊
第二冊　光緒三十二年 四 月 六 日（1906.4.29）	一九〇六年 四 月刊
第三冊　光緒三十二年 九 月廿二日（1906.11.8）	一九〇六年 九 月刊
第四冊　光緒三十二年十一月 二 日（1906.12.17）	一九〇六年十二(ママ)月刊
第五冊　光緒三十二年十二月十六日（1907.1.29）	一九〇六年十二月刊
第六冊　宣統　元　年 三 月十五日（1909.5.4）	一九〇九年 三 月刊
第七冊　宣統　二　年 八 月十五日（1910.9.18）	一九一〇年 八 月刊
第八冊　宣統　二　年十二月（1911.1）	一九一〇年十二月刊

（本稿で問題にしている第４、５冊を線で囲んでおく）

見れば理解することができる。

阿英は、旧暦の「光緒三十二年」を機械的に「一九〇六年」に置き換えた。同じく「宣統元年」は「一九〇九年」に、「宣統二年」は「一九一〇年」に書き換える。ただし、換算したのは、年だけで、月は旧暦のままにした。「宣統二年十二月」は、新暦になおせば1911年１月になる。しかし、阿英は、「一九一〇年十二月」と記述しているところからも彼の書き方を確認することができる*3。

結局のところ、阿英は、新暦旧暦の換算を年にのみ適用した。月は旧暦だから、これを新暦旧暦混用という。

問題にしている該作品第４冊の「一九〇六年十二(ママ)月」は、「一九〇六年」部分が新暦であり、「十二(ママ)月」部分が旧暦であることが理解できるはずだ。

もし仮に、竺慶麟が主張するように、第４冊「一九〇六年十二月」が新暦だとしよう。そうすると、阿英の書く第１冊、第３冊、第５冊、第６冊、第７冊、第８冊はすべて誤りということになる。１ヵ所を擁護するために、残りの６ヵ所（１ヵ所は新暦旧暦の月が、偶然、一致する）を誤りだとして犠牲にするつもりか。

ゆえに、くりかえせば、第４冊の「一九〇六年十二(ママ)月」は、阿英の書き方に従えば、本来「一九〇六年十一月」と表記しなければならない箇所である。「十二(ママ)月」としたのは、阿英にしてみれば予想外の誤記となってしまったのが真相であろう。樽本が指摘する阿英の誤りとは、まさにこのことを指している。

阿英の記述方法は、もとから典型的な新暦旧暦混用の例なのである。

「光緒三十二年十一月二日」は、たしかに新暦「一九〇六年十二月十七日」ではある。しかし、これは阿英の書く「一九〇六年十二月」と見た目は同じもののようでいて、実はなんの関係もないことなのだ。

中国の専門家からの反論がないのは、阿英の記述全体を知ったうえでの誤りであることを認識しているからだと理解できる。

7　各研究者の記述方法

もうひとつの問題点は、阿英の記述をウのみにした専門家についてだ。

彼らが誤っているかどうかは、旧暦を使用しているのか、それとも新暦を使用しているのかをそれぞれについて見なければならない、というのが竺慶麟の主張だ。

これまた一見もっともらしい。

しかし、私が言っているのは『二十年目睹之怪現状』第４冊と第５冊のふたつながらに同年同月に発行されたとする記述が間違っているということなのだ。旧暦であろうが新暦であろうが、そのどちらも成立する問題である。竺慶麟は、そこまでも考えていない。

それぞれの研究者が、旧暦、新暦のいずれを使用しようとも、原物さえ確認していれば、第４冊は「十一月二日」に、第５冊は「十二月十六日」に出版されたことが理解できる。間違いようがない。それをなぜ誤るのか、と問題にしている。

いってしまえば、中国の専門家は、原物にもとづいて記述する手間を惜しんだのではないか。これこそ研究の姿勢に関係するものだ。大きな事を論ずることを重視するあまり、小事を軽んじているのではないか、という疑問表明なのである。

8　結　論

竺慶麟の反論が誤ったのには、ふたつの理由がある。

その１　新暦旧暦混用という事実があることを竺慶麟は知らなかった。

混用は、まことに困ったことではあるが、中国ではありふれた現象でしかない。こまかいことをいえば、年月表示のみで日の記載がない当時の出版物は、正確な新暦換算ができないことがある。これが新暦旧暦混用の原因のひとつかもしれない。

その２　樽本が問題提起した『二十年目睹之怪現状』第４冊のみの発行年月にこだわって、作品全体の発行に関する阿英の記述には注意を払わなかった。

反論を提出するためには、発表された文章の一部分についてのみの考察では充分ではない場合がある。部分を全体の流れのなかに置いて、ようやくその部分の意味が判明する。阿英の原文にあたる必要性をあらためて教えてくれる。

樽本と竺慶麟の論争は、清末小説の研究に新暦旧暦問題が存在していることを広く明らかにした。旧暦のみ、新暦のみの表示のほかに、新暦旧暦混用例が普通にあることは、専門家には周知の事実だ。これを一般にまで知らしめた点が、功績のひとつだ。

中国の専門家にも研究上の弱点があることが判明した。先行文献を丸呑みにして原物を確認しない。その結果、誤った記述をしたのがその例だ。40年をうわまわる長きにわたって、阿英の誤りを指摘した中国人研究者がいなかった事実を知るべきだろう。また、文章の一部分だけをつかまえて、それを根拠に結果としてそれまでの誤った専門家に続こうとする人も出現する。このことを明らかにしたのももうひとつの功績だといえるだろう。

【注】

1）樽本「文献をあつかう姿勢――『呉趼人全集』を例として」。『清末小説研究論』所収
樽本「不要軽視小事」『読書』1998年第８期1998.8。今回、竺慶麟の反論を引きだしたのは、この文章だ。『清末小説研究集稿』所収
樽本「発言のあと――「不要軽視小事」のこと」。『清末小説研究論』所収

2）阿英「晩清小説目」『晩清戯曲小説目』上海文芸聯合出版社1954.8／増補版　上海・古典文学出版社1957.9。66頁

3）ここで少し説明しておく。阿英「晩清小説目」において『二十年目睹之怪現状』についての記述だけが、月までを掲示している。ほかの部分は、基本的に年だけなのだ。たとえば、「宣統元年（一九〇九）」のように書いている。月まで書き込まなければ、新暦旧暦混用に悩まなくてもよくなる。阿英は、なぜ『二十年目睹之怪現状』に限って「光緒」「宣統」の年号を省略して、新暦旧暦混用にしてしまったのか。不思議でならない。

【附記】

本稿を提出したのは、1999年2月だった。その後、ゲラ刷りが出てくる４月下旬までに郭延礼「阿英先生的記載是用的夏暦」（『読書』1999年3期1999.3）が発表されていることを知る。本稿と同主旨であることを記しておきたい。（1999.4.22）

小説雑誌の重版問題

雑誌の重版とは、今ではあまり目にすることはないかもしれない。しかし、中国では過去において、単行本の重版と同じように雑誌の重版が刊行されたことがあった。現象として存在しているにもかかわらず、これに言及した研究論文を私は見たことがない。雑誌の原物に触れる機会が少なく、影印版で間に合わせているのが原因ではなかろうか。誰も気づいていないなら発表する価値があると思った。初出は以下のとおり連載した。本稿では小見出しを改めた。

1「『繍像小説』の重版」『清末小説から』第57号（2000.4.1）に掲載。清末時期に創刊された小説専門雑誌は、重版された事実がある。読者に歓迎された証拠だ。だが、研究界において雑誌の重版をいう研究者はいない。その理由を考えるに、原本そのものを手元に置いて調査研究する人がいないためだろう。原本に当たれば、創刊号と称するものの中に表紙が異なるばあいがある。原稿募集広告を例にとれば、初版創刊号には掲載されていないが、重版創刊号には、掲載されていることがある。重版の事実を知らず、重版にもとづいて創刊号から原稿募集を行なっていたと記述するならば、それは事実から離れる。重版の事実を『繍像小説』を例にして紹介する。原稿募集広告は、当時の文人に原稿料制度が形成されつつあることを知らせることにもなった。職業作家の誕生を経済的に成立させた条件でもある。まさに中国文学史上、空前のできごとでもあるのだ。陳平原『《文明小史》与"繍像小説"』について清末小説研究会ウェブサイトに公表したものを収録する。

2「『新小説』の重版」『清末小説から』第58号（2000.7.1）に掲載。『新小説』が重版されていることを知る研究者は多くない。雑誌の原本を手にする機会が少ないからだろう。重版を判断する手掛かりのひとつは、表紙の違いだ。しかし、上海書店の影印本は、それを無視して重版の表紙で統一する。重版に気づく研究者が少ない理由となっている。『新小説』が重版された事実を広告ページに変化があること、および『新民叢報』に掲載された『新小説』についての広告（一部）を資料にして証明する。

3「『月月小説』ほかの重版」『清末小説から』第60号（2001.1.1）に掲載。『月月小説』と『小説林』について初版と重版の違いを検証する。

清末に出現した小説雑誌の隆盛は、それら小説雑誌そのものが重版されるという事実をもってしても知ることができる。初版だけでは間に合わなかったほどの需要があったということだ。

初版か、重版か、研究界においては、それほど注目されていない問題のように思う。研究論文に言及されることがないからだ。

初版と重版を比較して、収録作品に違いがあるわけではない。作品本文も同一である。そうであるならば、初版と重版の違いに気づく研究者が多くないのもうなずける。

だが、作品以外の部分に注目すると、とたんに初版と重版の問題が出てくる。

たとえば、初版と重版では、表紙が異なっていたり、広告ページがあったりなかったりする。明らかにふたつのものなのだ。そこまで細かく見る人は、少ない。少ないというよりも、私の見る限りこの重版問題に気づいている研究者は、ほとんどいないのだ。

広告ページを題材にする時、本来は、あとからつけくわえられたものにもかかわらず、最初から掲載されていたかのような記述をする。これは、正確ではない。厳密に初版と重版を区別すべきだと考える。

私が日本で見ることのできる小説雑誌は、それほど多くはない。いくつかの主要な雑誌について、重版問題を論じることにする。

1　『繍像小説』のばあい

『繍像小説』の表紙には、２種類がある。牡丹と孔雀だ。この事実は、研究者周知の事柄に属する。

ただし、牡丹の花１輪が、羽根を広げる孔雀にいつ交替したのか、従来からいくつかの説らしいものがある。あるいは、記述が混乱している。

牡丹から孔雀へ

たとえば、第２期から変更になったとするものがある。

○牡丹　第１期　孔雀　第２期　畢樹棠「繡像小説」(『文学』第５巻第２号1935.7.1。270頁。「談繡像小説」と改題。張静廬輯註『中国出版史料補編』北京・中華書局1957.5。129頁／魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12。463頁）

畢樹棠が書いているのは、創刊号は牡丹で、第２期より羽を広げた孔雀に改められたというのだ。

第２期から孔雀に変わっているのならば、次の表紙写真がある。

○孔雀　第６期　張静廬輯註『中国近代出版史料二編』(上海・群聯出版社1954.5）

孔雀の第６期があるのも不思議ではない。

だが、創刊号から孔雀を示す文献もある。

○孔雀　第１期　阿英『晩清文藝報刊述略』(上海・古典文学出版社1958.3）

表紙写真が飾られている。阿英の著作なのだから、とこちらの方が信用される可能性が高くなる。それでは、畢樹棠のいう牡丹は書き間違いなのか。

実は、『繡像小説』表紙の牡丹孔雀問題については、私は、過去においてすでに結論を出している。

> 第一期の表紙は牡丹の花が一輪描かれ、第八期まで同じ図柄である。第九期から最終の第七二期まで、孔雀が羽をひろげた図柄が続く。(樽本「『繡像小説』について」『清末小説閑談』所収。384頁）

当時、澤田瑞穂所蔵だった『繡像小説』に基づいてこう書いた（注：澤田旧蔵の『繡像小説』全冊は現在早稲田大学図書館風陵文庫所蔵)。この版が貴重なのは、初版であるからだ。有名な「本館編印繡像小説縁起」は、色紙に印刷されて創刊号と第２号（期）の本文冒頭にとじ込まれている（「縁起」の影印を『清末小説から』第50号

（1998.7.1）17頁に掲げておいた。文章そのものを収録した資料集は多い。だが、これ以前に原物を写真版で示した文献は、中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第３集（北京・人民出版社1983.11）くらいか)。ところが、中国の研究者の文章を読むと、この「縁起」を収録していない版があり、捜し当てるまで苦労したという。つまり、重版が存在していることが理解できる。

私は、『繍像小説』の原物にもとづいて、第１-８期は牡丹、第９-72期は孔雀と確認している。畢樹棠の書く、第２期から孔雀に変化する、は当然誤りである。張静廬が資料集で掲げた第６期の孔雀も、重版であることがわかる。阿英が示した第１期の孔雀も、同じく重版だ。

つまり、牡丹を飾った初版と、孔雀で統一した重版があったことになる。

私の記述を参考にしたかどうかわからないが、魏紹昌の資料集は『繍像小説』の表紙２種類を掲げて次のように説明する。

○牡丹　第１-８期　孔雀　第９-72期　魏紹昌編『李伯元研究資料』(上海古籍出版社1980.12。17頁）

正しい説明がつけられている。この説明は正しいにもかかわらず、同じ資料集に収録した畢樹棠の論文の該当箇所について、注釈を加えないのは少し不親切な気がする。

それよりも、大きな問題がある。魏紹昌は、畢樹棠の文章を勝手に書き換えているのだ。重要な箇所だから、何度でもいう。

『繍像小説』の停刊時期に関する部分である。

畢樹棠の原文は、「停刊年月不明、約在光緒三十二三年之間」(270頁）と書かれている。『繍像小説』の発行年月日は、第13期より記載されなくなる。だから、畢樹棠の書くように停刊の年月は不明、1906年から1907年の間と説明するのが正確なのだ。

ところが、魏紹昌は、この部分を「停刊於光緒三十二年（丙午）三月」と勝手に書き換えた。停刊の年月が不明どころか、光緒三十二年（1906）三月に確定しているように書くのだ。畢樹棠の原意を損なう改竄だといわざるをえない。

これは、資料編集者がやってはならない種類の、資料集の資料的価値を疑わせ

ることになる、編集者のいわば自殺行為である。せめて注釈というかたちで、編集者の意見だとわかるようにできなかったものか。現在に至るまで、『繍像小説』が「光緒三十二年三月」で停刊しているように広く深く誤解されている原因は、この魏紹昌の書き換えにいくらかの責任があるはずだ。

牡丹と孔雀を並べて掲げるのは、魏紹昌編『李伯元研究資料』よりも、次の文献の方が早い。

○牡丹　第１期　孔雀　第９期　澤田瑞穂「閑談『繍像小説』」(『清末小説研究』第４号1980.12.1。５頁)

『李伯元研究資料』の発行年は1980年12月となっているが、実際の出版は遅れているはずだからだ。

このふたつの写真は、前述のように澤田瑞穂所蔵の『繍像小説』原物から撮影した。

『繍像小説』の牡丹孔雀問題は、以上で決着がついていると思っていた。

だが、雑誌の影印版が出版されて、問題は振り出しにもどったような印象をあたえる。あるいは、一層の混乱を発生させた。影印版は、表紙を孔雀で統一してしまったのだ。

○孔雀　第１-72期　『繍像小説』(上海書店影印、香港・商務印書館1980.12　晩清小説期刊シリーズ)

影印版の出版は、原物を見ることのできない情況を一変させたという意味で、画期的である。その資料的価値は高い。

だからこそ、底本の選択には注意を払ってもらいたかった。重要な「本館編印繍像小説縁起」が収録できていないのは、底本になかったためなのか。ないならば、「縁起」をそなえた版本を捜索するのが本来のありかただろう。この重要文章を収録しないで影印版を出版した気が知れない。それとも、「縁起」そのものの存在を知らなかったのか。まさか、と思う。

また、広告ページを削除するという編集方針にも大いに問題がある。削除することによって、影印版の学術的資料価値が、大きく損なわれるということに無知

【図1】初版創刊号表紙　　**重版創刊号表紙**

なのである。これは、最近の『図画日報』影印版にも引き継がれている。よくよく研究者でない人物が主宰しているらしい。

影印であれば原物と同じだ、と普通考えるではないか。表紙が孔雀で統一されていれば、初版もそうだった、と誰しもが思う。説明がないのだから、しかたがない。

○牡丹　第１期　孔雀　第８期　楊義、中井政喜、張中良合著『二十世紀中国文学図志』(上冊　台湾・業強出版社1995.1。15頁。また、改題『中国新文学図志』上冊　北京・人民文学出版社1996.8。14頁。翻訳がある。「二十二、『新小説』と『繍像小説』、清末四大小説雑誌(上)」森川＜麦生＞登美江訳　森川登美江・中井政喜訳「『二十世紀中国文学図志』＜８＞（選訳)」『名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科言語文化論集』第20巻第２号1999。）

せっかく創刊号の牡丹を掲げながら、どういうわけか孔雀の第８期を並列させ

ている。第９期から孔雀に変更されているのに気づかなかったのか。それとも、編者の手元にあった雑誌が、たまたま、そうなっていたのか（補記：同じく『二十世紀中国文学図志』学術出版会2009.6.30では第１期は牡丹のまま。孔雀は第11期を掲げる。39頁)。

以上のように、表紙についての説明と影印版が、一致しない。当然のように混乱する研究者が出現する。原物を見ることができないからなおさら困惑するのだろう。

ある研究者から『繍像小説』の表紙について質問を受けた私は、あらためて説明しなければならなかった。

以下は、清末小説研究会ウェブサイトに掲げている。全文を引用する。なお、今回、＊印の注を追加した。

> 『繍像小説』の表紙について質問をいただきました。重要な問題ですので、以下に説明しておきます。
>
> 『繍像小説』には、２種類の表紙があります。牡丹と孔雀です。しかし、初版と重版では、その表紙が異なります。
>
> 質問１：『李伯元研究資料』(上海古籍出版社1980.12）463頁に「第一期表紙は牡丹であり、第二期から最後まで孔雀である」と書いてある。本当か。
>
> 回答：畢樹棠の書き誤り。『李伯元研究資料』所収の畢樹棠「繍像小説」には、魏紹昌により書き換えがあるので注意を要する＊上に述べた停刊年月に関しての書き換えを指す。
>
> 質問２：『李伯元研究資料』17頁に影印されたその２種類の表紙の注に「第１-８期が牡丹で、第９-72期が孔雀」と書いてある。本当か。
>
> 回答：これが正しいのです。私は、原物初版と原物重版の２種類を所有しており、それで確認できます。
>
> 質問３：1980年に上海書店が影印出版した『繍像小説』８冊の表紙は１-72期まで「孔雀」のみ。どちらが正しいか。
>
> 回答：上海書店の複写本は、正しくない＊「正しくない」というのは、表紙についてのこと。本文はそのままである。

『繍像小説』初版の表紙は、第１-８期が牡丹で、第９-72期が孔雀なのです。研究者によって記述が異なるのは、『繍像小説』の重版を見て書いているからでしょう。

上海書店が出版した複写本は、重版にもとづいたもの、厳密な手続きを経ていませんから、信頼することはできません＊「信頼することはできません」というのも、表紙についてのこと。

『繍像小説』には、初版と重版が存在していることが理解できよう。

重版の証明

『繍像小説』に重版があることの根拠は、表紙の違いである【図1】。

初版は、くりかえせば、表紙の図柄が牡丹だ。第９期より孔雀へ変更された。牡丹表紙の創刊号と第２号には、「本館編印繍像小説縁起」が掲載されている。

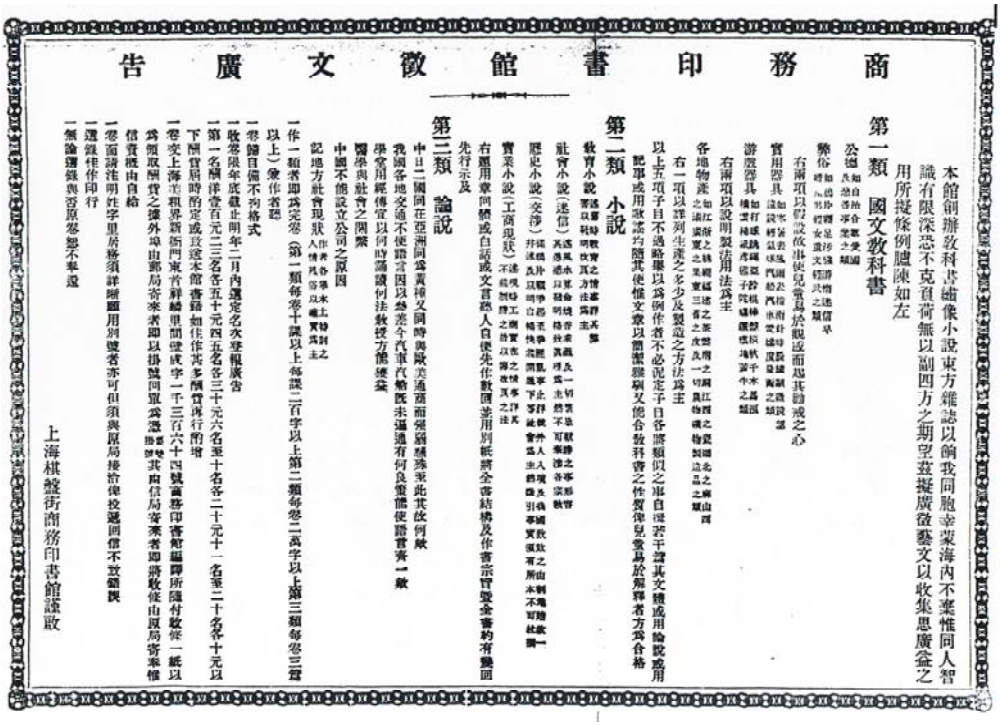
創刊号から第８期までを重版するにあたり、表紙を孔雀に統一し、「本館編印繍像小説縁起」を収録しなかった。あるいは、なにかの手違いで収録されなかった。

重版にあたって作品本文は同一にしたまま、表紙を孔雀に変更した。そのほかの違いといえば、広告ページ、裏表紙の差し替えもある。乱丁、落丁も発生している。全冊揃いといっても、初版と重版を混在させたものも存在する。

初版には存在して、重版には見られない例として「商務印書館徴文広告」をあげておこう。

「商務印書館徴文広告」

「商務印書館徴文広告」は、文字通り商務印書館が行なう原稿募集の広告である【図2】。『繍像小説』第22期の巻末に、薄緑の色紙に印刷され折りたたんで綴じ込まれている。挟み込みではない。綴じ込みだから印刷時期を予測する手掛かりとなる。第23期も同じ形態でつけられる。ただし、こちらは薄茶褐色の紙というだけが異なる。この広告は、上海書店が出版した影印版には、収録されていない。



商務印書館徵文廣告

本館創辦教科書繡像小說東方雜誌以酬我同胞幸藁海內不棄惟同人智識有限深恐不克負荷無以副四方之期望茲擬廣徵藝文以收集思廣益之用所擬條例臚陳如左

第一類 國文教科書

公德 如自治合羣愛國 (略)

弊俗 如纏足早婚早死賭博迷信 (略)

右兩項以假設故事使見當爲於觀感而起其勝減之心

實用器具 如光學電學於觀感而起其勝減之心 (略)

游戲器具 如打球踢球放鴿子放紙鳶放風車 (略)

右兩項以說明製造用法爲主

各地物產 如江浙之絲蘇之綢川之錦之類 (略)

右一項以詳列生產之多少及製造之方法爲主

以上五項子目不過略舉以爲例作者不必泥定子目各將類似之事自擬若干篇其文體或用論說或用記事或用歌謠均聽其便惟文章以簡潔明白爲合教科書之性質倘見當爲於解釋者方爲合格

第二類 小說

教育小說 (略)

社會小說 (略)

歷史小說 (略)

實業小說 (略)

右題目備不拘格式

一 收卷限年底截止明年二月內選定名次登報廣告

一 第一名酬洋壹百元二三名各五十元四五名各三十元六名至十名各二十元十一名至二十名各十元以下酬書籍時酌定或送本館書籍如作者多酬資再行酌增

一 卷交上海羣玉租界新衙門南首群益里間壁成字一千三百六十四號商務印書館編譯所隨付收條一紙以爲領取酬資之據外埠由郵局寄來者即以掛號回單爲憑

一 卷面請注明姓字里居務須詳細匿用別號者亦可但須與原局接洽俾校閱信不致錯誤

一 選錄作印行

一 無論選錄與否原卷恕不奉還

上海棋盤街商務印書館謹啟

第三類 論說

中日二國同在亞洲同袁黃種又同時與歐美通商而獨被殊亞此其故何歟

我國各地交通不使語言因以參差今汽車汽船既未通通有何良策能使語言齊一歟

學堂用經傳宜以何時爲讀何法教授方能獲效

學與社會之關係

中國不能設立公司之原因

記地方社會現狀 (作者各舉本土特別人情風俗以備異日之參考)

(第一類每卷十葉以上每葉二百字以上第二類每卷二萬字以上第三類每卷三萬以上) 徵作者啟

【図2】「商務印書館徵文広告」

「商務印書館徵文広告」は、『東方雑誌』第９期光緒三十年九月二十五日（1904.11.2）にも掲載される。『繍像小説』と同じもの。青色紙に印刷されている。同一の広告が、『東方雑誌』と『繍像小説』に掲載されるから、発行年月が不明の『繍像小説』がいつ出版されたかを推測する手掛かりとなる（詳しくは、樽本「『繍像小説』の発行時期ふたたび」『清末小説探索』所収を参照のこと）。

商務印書館が教科書、『繍像小説』および『東方雑誌』を創刊し、それらのための原稿をひろく募集することをいう。

第１類国文教科書、第２類小説、第３類論説という種類分けになる。

小説では、具体的に教育小説、社会小説、歴史小説、実業小説と指定される。さらに、その報酬も明記されているから次に引用しておく。

> 第１位　洋100元、第２３位　各50元、第４５位　各30元、第６-10位　各20元、11-20位　10元……

字数による計算ではなく、１篇に対する報酬であることがわかる。

1904年３月に創刊した『東方雑誌』がらみの原稿募集広告であって『繍像小説』専用ではない。商務印書館の刊行物共通で、原稿募集の結果は、『東方雑誌』第２年第３期（光緒三十一年三月二十五日 1905.4.29）において発表された。題して「商務印書館徴文題名」という【図3】。

呂俠人（贈百元）　東絲生　張宗祥（各贈五十元）　李惜霜　姬文（各贈三十元）　蔡緑農　王惜華　寿孝天　張文英　呉啓明（各贈二十元）

桂成支　何寿珊　陳枚　海蠖　胡子承　丁逢甲　魏虞卿　呉廷銓　顧祖武　王立（各贈十元）

呂勉之　西泠樵者　周惺　紅崖　劉巽権　包栄爵　有恒軒　朱寿俠　壮者　黄鐘　企蘇子　姚子盤（各贈五元）

高覚仏　褚博甫　褚溥春　許玉庭　觾觾子　青山外史　卜琴　朱紫芳　郭必　楊仲騏　潘鶴青　洛陽老梅　馮鏡芙　趙冕黄　越俠（各贈国文教科書教授法八冊習画帖九冊）

香雲庵　郭襟陶　蘭皐羈客　張侗初（各贈本年東方雑誌十二冊）

徐癯曇　蓬莱求仙客　曹惕广　駢東駕日生（各贈繍像小説第一至十二冊）

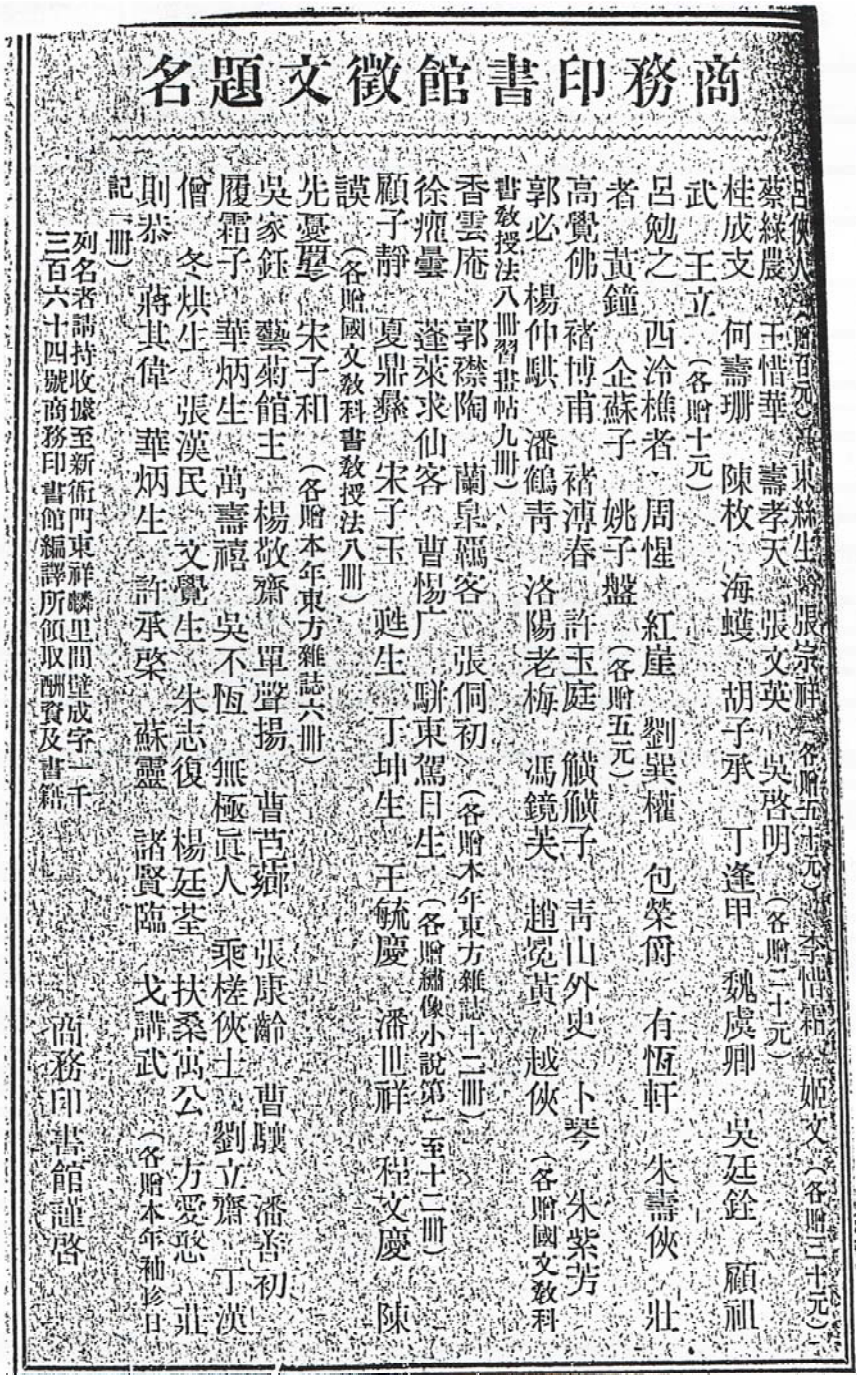
顧子静　夏鼎彝　宋子玉　甦生　丁坤生　王毓慶　潘世祥　程文慶　陳謨（各贈国文教科書教授法八冊）

先憂盦　宋子和（各贈本年東方雑誌六冊）

呉家鈺　藝菊館主　楊敬斎　単声揚　曹芑瀟　張康齢　曹驤　潘善初　履霜子　華炳生　万寿禧　呉不恒　無極真人　乗槎俠士　劉立斎　丁漢僧　冬烘生　張漢民　文覚生　朱志復　楊廷荃　扶桑寓公　方愛憨　荘則恭　蒋其偉　華炳生　許承棨　蘇霊　諸賢臨　戈講武（各贈本年袖珍日記一冊）

入選者が以上の数にのぼるのだから、応募者はこれの数倍はあったのではないかと想像するのに十分だ。

入選者の中には、作品を商務印書館から出版するもの、『繍像小説』に掲載す



商務印書館徵文題名

呂俠人（贈百元）　東絲生　張宗祥（各贈五十元）　李惜霜　姬文（各贈三十元）
蔡綠農　王惜華　壽孝天　張文英　吳啓明（各贈二十元）
桂成支　何壽珊　陳枚　海蠖　胡子承　丁逢甲　魏虞卿　吳廷銓　顧祖
武　王立（各贈十元）
呂勉之　西泠樵者　周惺　紅崖　劉巽權　包榮爵　有恆軒　朱壽俠　壯
者　黃鐘　企蘇子　姚子盤（各贈五元）
高覺佛　褚博甫　褚溥春　許玉庭　艤艤子　青山外史　卜琴　朱紫芳
郭必　楊仲騏　潘鶴青　洛陽老梅　馮鏡芙　趙冕黃　越俠（各贈國文教科
書教授法八冊習畫帖九冊）
香雲庵　郭襟陶　蘭皐羈客　張侗初（各贈本年東方雜誌十二冊）
徐癯曇　蓬萊求仙客　曹惕广　駢東駕日生（各贈繡像小說第一至十二冊）
顧子靜　夏鼎彝　宋子玉　甦生　丁坤生　王毓慶　潘世祥　程文慶　陳
謨（各贈國文教科書教授法八冊）
先憂翠　宋子和（各贈本年東方雜誌六冊）
吳家鈺　藝菊館主　楊敬齋　單聲揚　曹芭薌　張康齡　曹驤　潘善初
履霜子　華炳生　萬壽禧　吳不恆　無極眞人　乘槎俠士　劉立齋　丁漢
僧　冬烘生　張漢民　文覺生　朱志復　楊廷荃　扶桑寓公　方愛愍　莊
則恭　蔣其偉　華炳生　許承棨　蘇靈　諸賢臨　戈講武（各贈本年袖珍日
記一冊）

列名者請持收據至新衙門東祥麟里間壁成字一千三百六十四號商務印書館編譯所領取酬資及書籍

商務印書館謹啓

【図3】「商務印書館徵文題名」

るものも出てくる。

たとえば第１位の呂侠人は、『惨女界』30回２冊を商務印書館（光緒三十四(1908)年三月)から出版している。

30元を獲得した姫文は、「市声（実業小説)」25回（『繍像小説』第43-72期刊年不記）を執筆連載する。

また、丁逢甲は、一人で複数の文章を応募した。丁逢甲で10元、筆名の壮者で５元、丁坤生名義では国文教科書教授法８冊を獲得している。作品としては、壮者名義で「掃迷帚」24回を『繍像小説』第43-52期（刊年不記）に掲載しているといった具合である。

最後に、「附録商務印書館徴文」が、『東方雑誌』第２年第４期（光緒三十一年四月二十五日 1905.5.28）に掲載されていることも付け加えておく。作者と文章題名は、以下のとおり。

李惜霜「我国各地交通不便語言因以参差今汽車汽船既未遍通有何良策能使語言齊一歟」

李惜霜「学堂用経伝宜以何時誦読何法教授始能獲益」

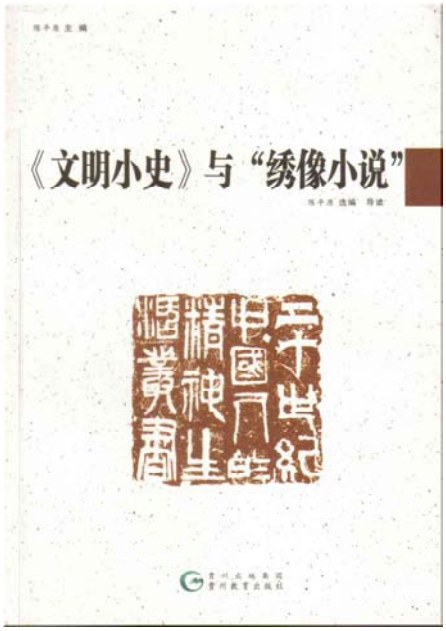
海蠖「医学与社会之関係」

丁逢甲「中日二国同在亜洲同為黄種又同時与欧美通商而強弱懸殊至此其故何歟」

商務印書館主催による原稿募集によって小説家が輩出した、というわけではなさそうだ。しかし、一般読者に向けて原稿料を明示して文章を募集するという行為は、原稿料制度の存在を広く知らせることになったであろう。

すなわち、上海において売文によって生活することの可能性をより拡大したのではないか。原稿料による生活の成立――職業作家が誕生する環境を準備したと考えるのだ。

【補記】『繍像小説』に初版と重版が存在することを知らないと以下のような事態が出現する。清末小説研究会ウェブサイトから引用する。



陳平原選編導読『《文明小史》与“繍像小説”』

貴陽・貴州出版集団、貴州教育出版社2014.7.1　20世紀中国人的精神生活叢書

2015.1.16

『繍像小説』収録作品から挿絵（繍像）を抜き出して集めた書物です。

内容は、つぎのとおり。

陳平原「総序」、

「作為“繍像小説”的《文明小史》——《＜文明小史＞与“繍像小説”》導読」、

「活地獄」「醒世縁」「負曝閑談」「鄰女語」「老残遊記」「癡人説夢記」「月球殖民地小説」「瞎騙奇聞」「未来教育史」「市声」「掃迷帚」「学究新談」「玉仏縁」「世界進化史」の部分挿絵、

「文明小史」60回全部の挿絵**（第22回2丁は未収録）**、

自在山民撰「文明小史」評語。

収録したいくつかの挿絵について誤りがあります。

本来あるべき挿絵が存在していません。別作品のものが、かわりに挿入されているのは奇妙です。

38頁「負曝閑談」第16回１丁は「老残遊記」第2回の、42頁「鄰女語」第10回１丁は「負曝閑談」第18回の、46頁「老残遊記」第2回１丁は「鄰女語」第10回の挿絵に間違っています。編集上の手違いでしょう。

また、雑誌そのものがもとから間違っている箇所はつぎのとおり。

51頁「癡人説夢記」柱の第九回は第十回の、83頁「世界進化史」柱の第十五回は第十六回の誤り。

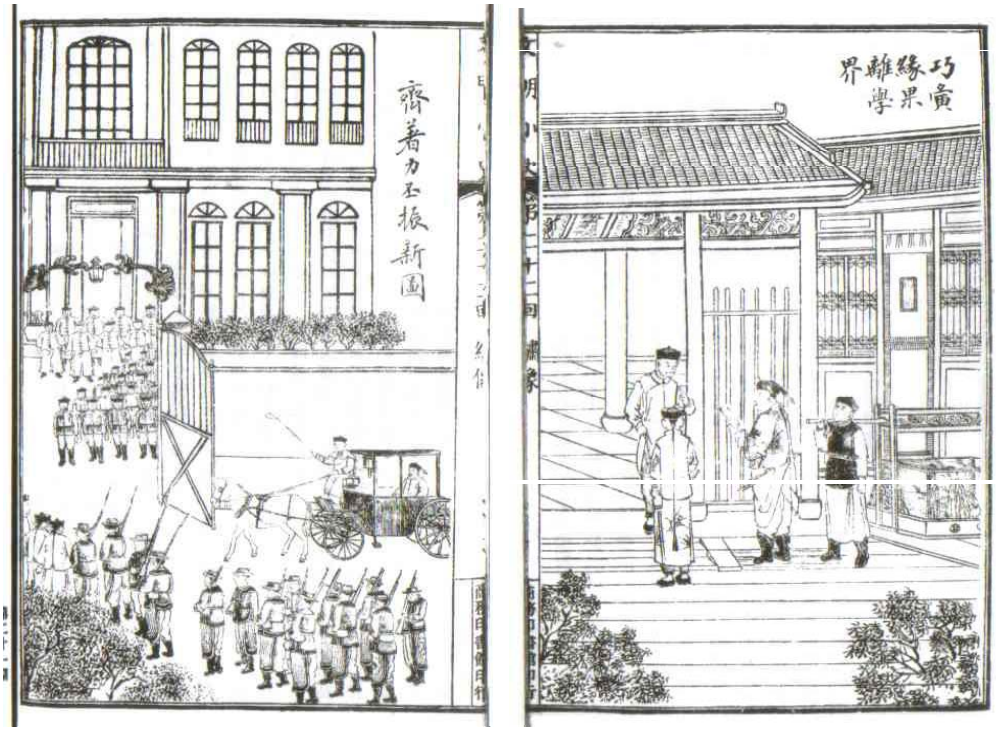
該書は、「挿絵（繍像）」を主としています。回数の誤記については、導読する陳平原の説明があってもよかったと思うのです。

「文明小史」第22回の挿絵2丁が収録されていないことを説明しています。20頁注4です。

『繍像小説』第21号（期）に「文明小史」第21回と第22回が掲載され、後者には挿絵がない、という。

ですから、全部で118丁だそうです。

それは間違いです。第22回の挿絵を下に掲げます。



この挿絵は、該誌の初版には存在し、再版には見られません。

陳平原本に第22回の挿絵を収録していないのは、たぶん再版本によっているからでしょう。初版本を見るべきでした。

彼は、『繍像小説』の主編が李伯元であるかどうかについて過去に論争があったことに触れます（14頁注2）。そこは、いいですね。

しかし、雑誌の発行が遅延していた事実を無視する。「文明小史」の作者と『繍像小説』の発行情況には密接な関係があります。そこに気がつかなかったのは、残念なことです。

小さいことをひとつ指摘しておきましょう。

3頁で林琴南「論古文之不当(ママ)廃」(上海『民国日報』1917.2.8）をあげています。

題名が違います。「当」ではなく「宜」です。

また、『民国日報』は転載しただけ。初出は、天津『大公報』(1917.2.1）と書くのが正確です。

2　『新小説』のばあい

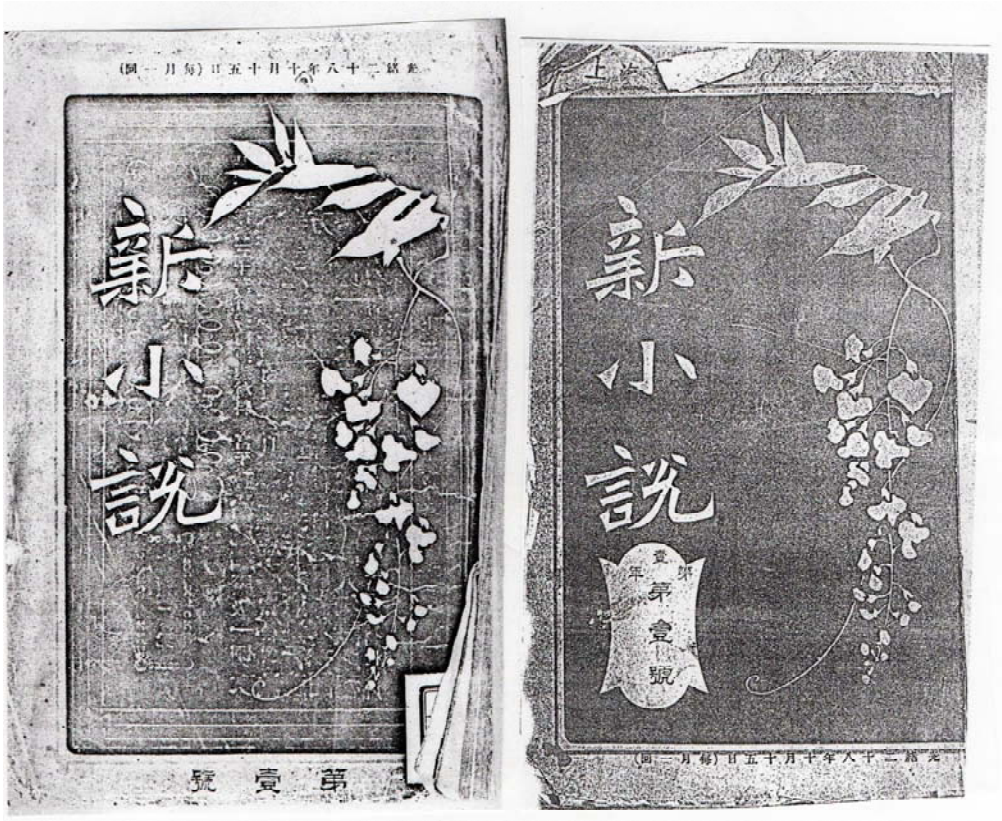
『新小説』が重版されている事実は、それほど広く知られていないのではないか。

注意深い研究者であれば、『新小説』の表紙を見て気づいているはずだ。しかし、話題になっていないところを見ると、やはり周知の事実というわけにはいかないのだろう。

本稿では、『新小説』が重版されていること、その際、広告ページに変化があること、および『新民叢報』に掲載された『新小説』についての広告（一部）を紹介する。

「本社徴文啓」

『新小説』が重版されていることを知る手掛かりのひとつは、原稿募集の広告「本社徴文啓」である。



【図4】初版第１号　　重版第１年第１号

◀表紙の配色を示すために孔夫子旧書網から引用する

「本社徴文啓」の存在を紹介した劉徳隆が書いているところによると、郭浩帆から影印版『新小説』のどこにも「本社徴文啓」は掲載されていないという指摘があったという*1。

中国でも『新小説』の原物ではなく影印版しか利用できない情況があることがわかる。それと当時に、影印版がひとつの権威のようになっていることも理解できる。影印版「晩清小説期刊」シリーズが共通して広告ページを削除し、初版と重版を区別していない事実を知らない人もいるのだ。

原本である『新小説』創刊号（光緒二十八年十月十五日 1902.11.14。天理図書館所蔵）にも、「本社徵文啓」は収録されていない。そのことを劉徳隆に知らせると、創刊号の表紙と「本社徵文啓」の複写を送ってこられた。

表紙を照らし合わせてみれば、「新小説」の題字と花を組み合わせる図柄は同じではあるが、号数を印字する場所が異なる。

天理本は、「第壹号」とのみ表紙の下に印刷する。劉徳隆からもらった複写は、「新小説」の題字の下に枠をくりぬいて「第壹年第壹号」をはめ込む【図4】。表紙は、明らかに異なる。創刊号に２種類ある、というのはそういう意味である。

「第壹号」(「本社徵文啓」なし）と「第壹年第壹号」(「本社徵文啓」あり）の違いに分かれていることをどう考えるか。

常識的に考えて「第壹年第壹号」と表示するのは、「第貳年」を経験しているからこそ「第壹年」というのではないかと推測できる。つまり、「第壹号」が初版であり「第壹年第壹号」とする方は重版だ、と考えることが可能だ。

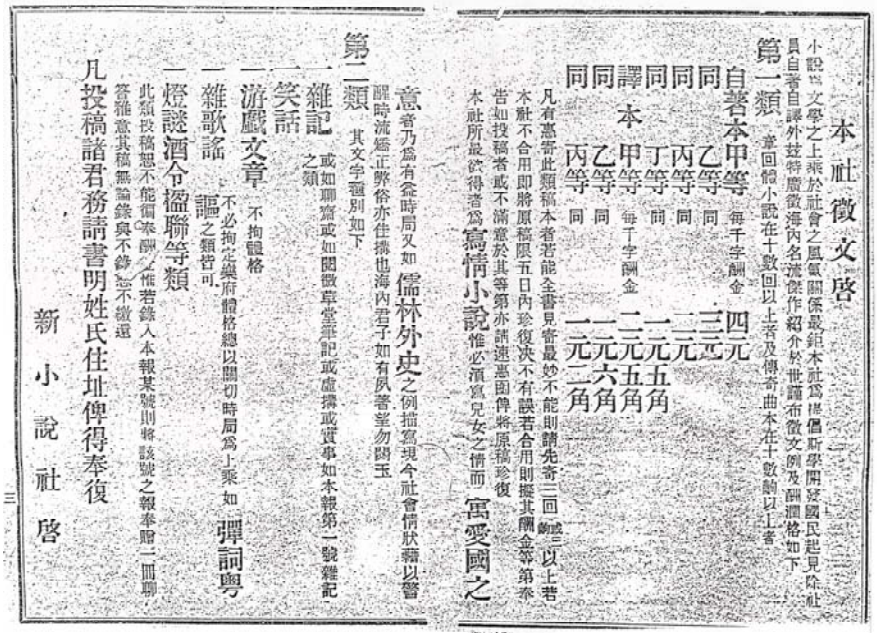
影印版『新小説』は、重版を底本にした。だが、広告ページを削除するのが編集方針らしいので「本社徵文啓」は収録されていない。

劉徳隆が「本社徵文啓」の存在に気づいたのは、閲覧した重版『新小説』が原本だったからだ。重版『新小説』を底本にして広告ページを削除した影印版しか見ることができなかった郭浩帆は、あるはずの「本社徵文啓」が存在していないことに戸惑った。

重版『新小説』に掲載された「本社徵文啓」【図5】と同一内容のものが、『新民叢報』第19号（1902.10.31）に掲載されている。劉徳隆のご教示である。『新小説』よりも時間的により早い。

第１類は、章回体小説で甲等毎千字４元、乙等同３元、丙等同２元、翻訳が甲等同２元５角、乙等同１元６角、丙等同１元２角だ。創作は翻訳より約２倍の原稿料である。第２類は、雑文で原稿料なし。

内容は同じだが、新民叢報社の刊行物だから、「本社」とはならない。題名は、「新小説社徵文啓」【図6】という。わずかに異なるのは、この題名と末尾に通信文が付いていることだ。すなわち、「揚州埂子街水倉巷潘第見恵楽府八首已收到謹布報謝　本社附復」とある。



本社徵文啓

小說爲文學之上乘於社會之風氣關係最鉅本社爲提倡斯學開發國民起見除社員自著自譯外兹特廣徵海內名流傑作紹介於世譯布徵文例及酬潤格如下

第一類 章回體小說在十數回以上者及傳奇曲本在十數齣以上者

自著本甲等 每千字酬金 四元
同 乙等 同 三元
同 丙等 同 二元
同 丁等 同 一元五角
譯本 甲等 每千字酬金 二元五角
同 乙等 同 一元六角
同 丙等 同 一元二角

凡有惠寄此類稿本者若能全書見寄最妙不能則請先寄二回或三回以上若本社不合用即將原稿限五日內珍復決不有誤若合用則擬其酬金等第奉告如投稿者或不滿意於其等第亦請速惠函俾將原稿珍復

本社所最欲得者爲寫情小說惟必須寫兒女之情而寓愛國之意者乃爲有益時局又如儒林外史之例描寫現今社會情狀藉以警醒時流矯正弊俗亦佳搆也海內君子如有夙著望勿閟玉

第二類 其文字種別如下

一雜記 或如聊齋或如閱微草堂筆記或虛搆或實事如本報第一號雜記之類

一笑話

一游戲文章 不拘體格

一雜歌謠 不必拘定樂府體格總以關切時局爲上乘如彈詞粵謳之類皆可

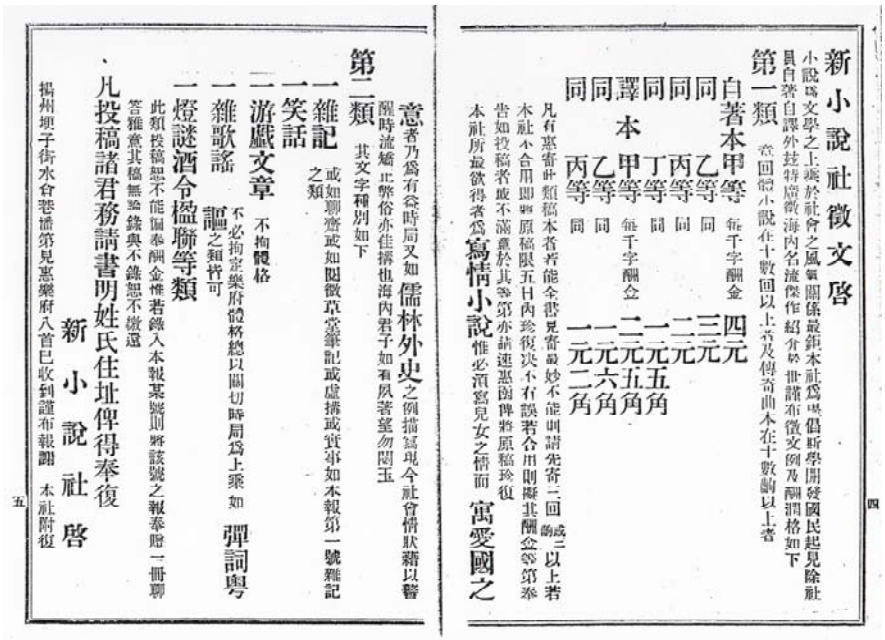
一燈謎酒令楹聯等類

此類投稿恕不能倘奉酬金惟若錄入本報某號則將該號之報奉贈二冊聊答雅意其稿無論錄與不錄恕不繳還

凡投稿諸君務請書明姓氏住址俾得奉復

新小說社啓

【図5】「本社徵文啓」



新小說社徵文啓

小說爲文學之上乘於社會之風氣關係最鉅本社爲提倡斯學開發國民起見除社員自著自譯外兹特廣徵海內名流傑作紹介於世譯布徵文例及酬潤格如下

第一類 章回體小說在十數回以上者及傳奇曲本在十數齣以上者

自著本甲等 每千字酬金 四元
同 乙等 同 三元
同 丙等 同 二元
同 丁等 同 一元五角
譯本 甲等 每千字酬金 二元五角
同 乙等 同 一元六角
同 丙等 同 一元二角

凡有惠寄此類稿本者若能全書見寄最妙不能則請先寄二回或三回以上若本社不合用即將原稿限五日內珍復決不有誤若合用則擬其酬金等第奉告如投稿者或不滿意於其等第亦請速惠函俾將原稿珍復

本社所最欲得者爲寫情小說惟必須寫兒女之情而寓愛國之意者乃爲有益時局又如儒林外史之例描寫現今社會情狀藉以警醒時流矯正弊俗亦佳搆也海內君子如有夙著望勿閟玉

第二類 其文字種別如下

一雜記 或如聊齋或如閱微草堂筆記或虛搆或實事如本報第一號雜記之類

一笑話

一游戲文章 不拘體格

一雜歌謠 不必拘定樂府體格總以關切時局爲上乘如彈詞粵謳之類皆可

一燈謎酒令楹聯等類

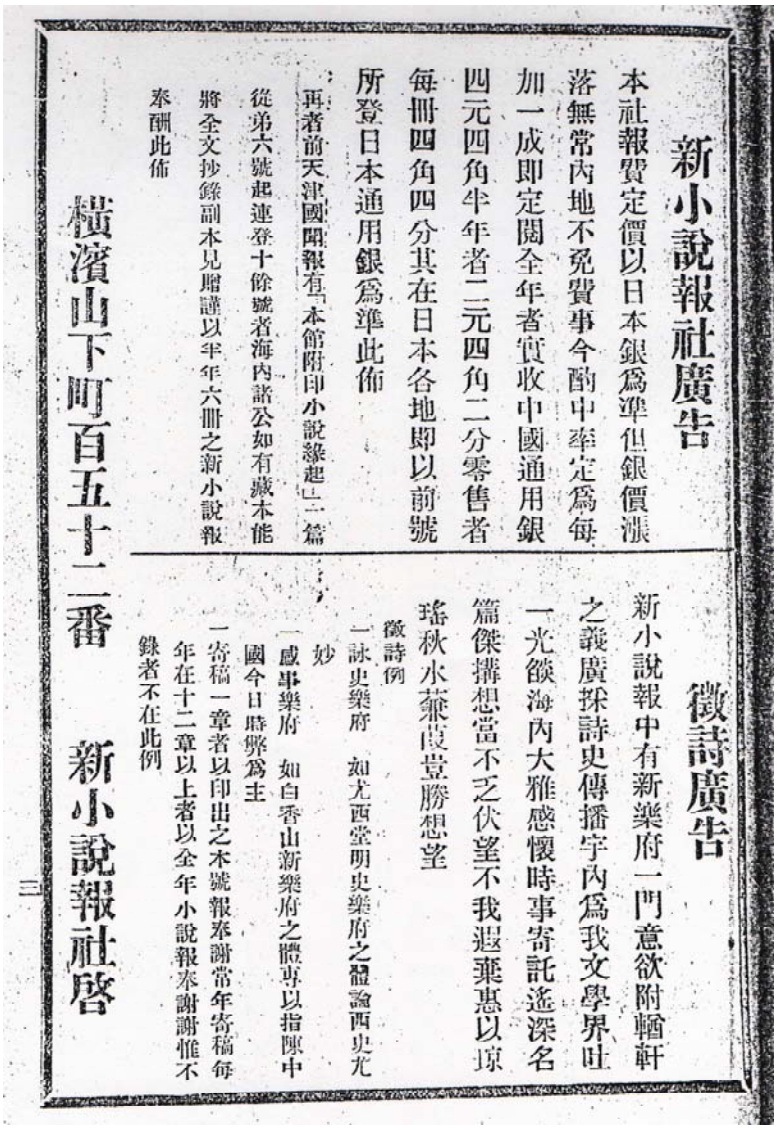
此類投稿恕不能倘奉酬金惟若錄入本報某號則將該號之報奉贈二冊聊答雅意其稿無論錄與不錄恕不繳還

凡投稿諸君務請書明姓氏住址俾得奉復

新小說社啓

揚州埂子街水會巷浦第見惠樂府八首已收到謹布報聞 本社附復

【図6】「新小説社徵文啓」



新小說報社廣告

本社報貲定價以日本銀爲準但銀價漲落無常內地不免貲事今酌中率定爲每加一成即定閱全年者實收中國通用銀四元四角半年者二元四角二分零售者每冊四角四分其在日本各地即以前號所登日本通用銀爲準此佈

再者前天津國聞報有本館附印小說緣起二篇從第六號起連登十餘號者海內諸公如有藏本能將全文抄錄副本見贈謹以半年六冊之新小說報奉酬此佈

橫濱山下町百五十二番　新小說報社啓

徵詩廣告

新小說報中有新樂府一門意欲附軺軒之義廣採詩史傳播宇內爲我文學界吐一光燄海內大雅感懷時事寄託遙深名篇傑搆想當不乏伏望不我遐棄惠以瑤秋水蒹葭豈勝想望

徵詩例

一詠史樂府　如尤西堂明史樂府之體論西史尤妙

一感事樂府　如白香山新樂府之體專以指陳中國今日時弊爲主

一寄稿一章者以印出之本號報奉謝常年寄稿每年在十二章以上者以全年小說報奉謝惟不錄者不在此例

三

【図7】「徵詩広告」

なぜこのような通信文があるかといえば、これに先立つ『新民叢報』第15号（1902.9.2）に「徵詩広告」【図7】で詠史楽府、感事楽府といった例をあげて募集をしたからだ。これへの応募があったことが、通信文からわかるだろう。

ついでに言えば、この『新民叢報』第15号の「徵詩広告」の上には、「新小説報社広告」がある。主として『新小説』の定価についてお知らせなのだが、さら

に、と続けて興味深い記述がなされている。その部分を引用する。

「再者前天津国聞報有「本館附印小説縁起」一篇従第六号起連登十余号者海内諸公如有蔵本能将全文抄録副本見贈謹以半年六冊之新小説報奉酬此布」という。

『国聞報』に掲載された論文は、幾道、別士の「本館附説部縁起」だからこれを指すつもりらしい。説部は、小説の意味に使うから、記憶に残っていたままを書いたのだろう。手元にないから求めている。書き誤りもしかたがなかろう。その連載も光緒二十三（1897）年十月十六日から十一月十八日というから、約一ヵ月の長きにわたる。

梁啓超が『新小説』創刊号に発表した「論小説与群治之関係」との関係を考えると興味深い。すなわち、「論小説与群治之関係」の発表が十月十五日だから、その直前である二ヵ月半前にも、梁啓超は、「本館附説部縁起」などの資料を捜査していたということだ。

『新民叢報』を見ていけば、そこに『新小説』の広告が掲載されており、『新小説』が重版されたことを証明する語句を発見する。

『新民叢報』の重版――『新民叢報』に見る『新小説』の広告

『新小説』の重版をいう前に、『新民叢報』にも初版と重版があることに触れておきたい。

例をあげれば、葉凱蒂が紹介した「中国唯一之文学報　新小説」という広告がある（「関於晩清時代的小説類別及《新小説》雑誌広告二則」『清末小説』第12号1989.12.1）【図8】。『新民叢報』第14号（1902.8.18）に掲載されている。７頁から14頁までの表示があるから、本文に組み込まれたページだ（本来ならば第15頁にも２行の文句と出版社名があるのだが、示されていない。複写をするときに欠落したものか。陳平原、夏暁虹編『二十世紀中国小説理論資料』第１巻（1897年-1916年）北京大学出版社1989.3の41-47頁に完全なものが収録されている）。

ところが、私が国立国会図書館で見た該号の「中国唯一之文学報　新小説」は、題字のみ毛筆で書かれているし、ベランと長い折り畳み式の広告なのだ【図9】。これは雑誌を製本する場合に、折り畳むだけ余計に手間がかかる。最初はしようがなくても、重版の際にはそうならないように一般のページ形式に変更するのが

中國唯一之文學報

新小說

每月一回 十五日發行 洋裝百八十葉

小說之道感人深矣泰西論文學者必以小說首屈一指豈不以此種文體曲折透達淋漓盡致描人羣之情狀批天地之竅奧有非尋常文家所能及者耶中國自先秦以前斯道既鬯漢書藝文志已列小說家於九流但漢唐以後學者拘文牽義困於破碎之訓詁鶩於玄渺之心性而於人情事理切實之跡毫不措意於是反鄙小說爲不足道夫人之好讀小說過於他書性使然矣小說既終不可廢而所謂好學深思之士君子吐棄不肯從事則俱沖無行者從而篡其統於是小說家言遂至毒天下中國人心風俗之敗壞未始不坐是本社同人恫焉是用因勢而利導之取方領矩步之徒所不屑道者集精力而從事焉班孟堅不云乎閭里小知者之所及亦使綴而不忘如或一言可采此亦芻蕘狂夫之議也其諸新世界之青年亦在所不棄歟條例如下

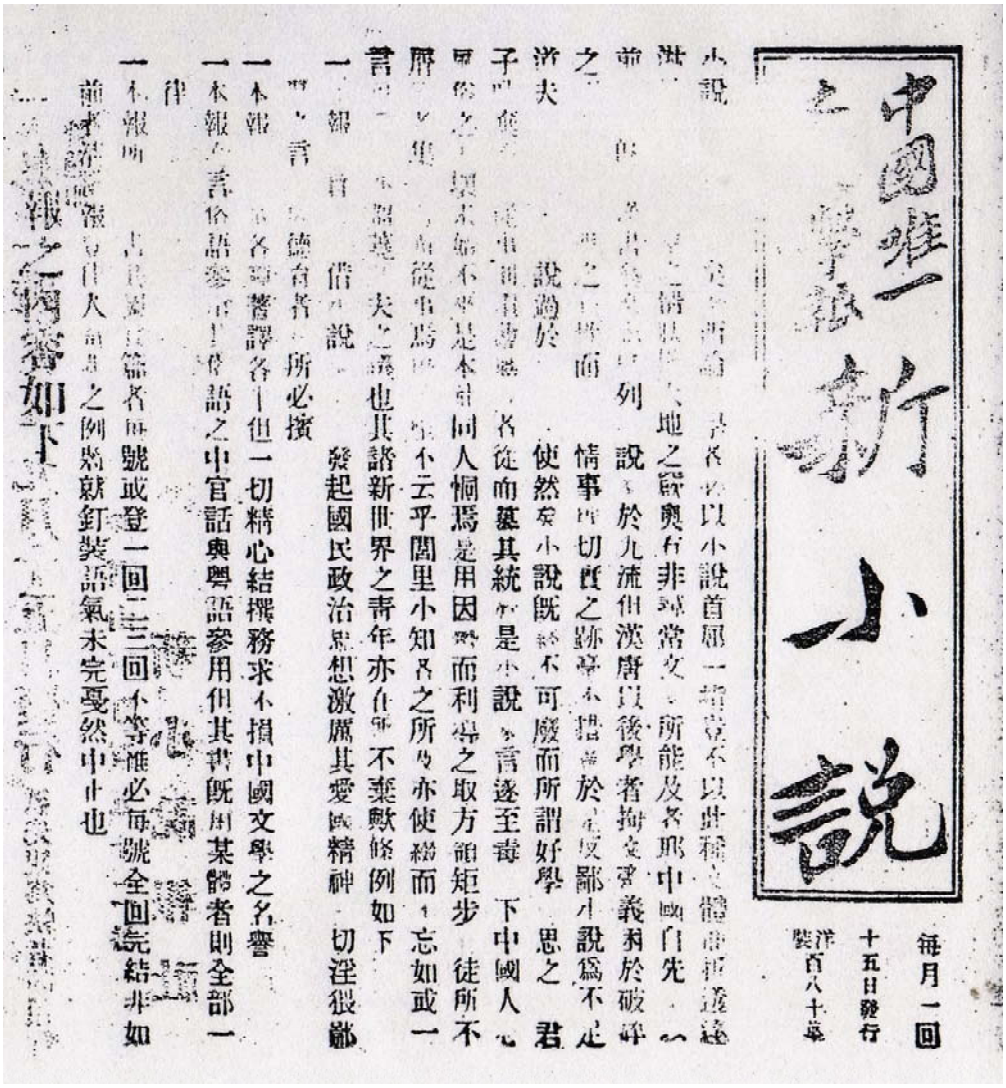
一本報宗旨專在借小說家言以發起國民政治思想激厲其愛國精神一切淫猥鄙野之言有傷德育者在所必擯

一本報所登載各篇著譯各半但一切精心結撰務求不損中國文學之名譽

一本報文言俗語參用其俗語之中官話與粵語參用但其書既用某體者則全部一律

七

【図8】「中国唯一之文学報　新小説」『新民叢報』第14号　題字は活字（重版）



【図9】「中国唯一之文学報　新小説」『新民叢報』第14号　題字は毛筆の折り畳み式広告(初版 部分)

普通のやり方ではなかろうか。すなわち、『新民叢報』にも初版と重版があるということだ。

さて、次はすでに触れた第15号掲載の「新小説社広告」と「徴詩広告」がある。第17号（1902.10.2）には、これもベランと折り畳み式広告の「中国唯一之文学報　新小説第一号要目予告」だ。葉凱蒂が紹介している。

第19号（1902.10.31）には、２種類の広告がある。ひとつは、『新小説』第１号掲載の目次を掲げる。題して「新小説第一号目録全告」という。それに続くのが、例の「新小説社徴文啓」だ。

そうすると、当然のように疑問が生ずるだろう。

もともとは、『新民叢報』第19号（1902.10.31）に掲載されている「徴文啓」にもかかわらず、なぜ初版『新小説』創刊号には掲載されないで重版の創刊号に掲載されたのか？

一見、もっともらしい疑問だ。原稿を募集する広告は、すでに公にされている。のちに発行される初版『新小説』創刊号に掲載されるのに何の不都合があろうか。重版『新小説』創刊号には掲載して、初版『新小説』創刊号には掲載しないのは、理屈が通らない。

はたしてそうか。

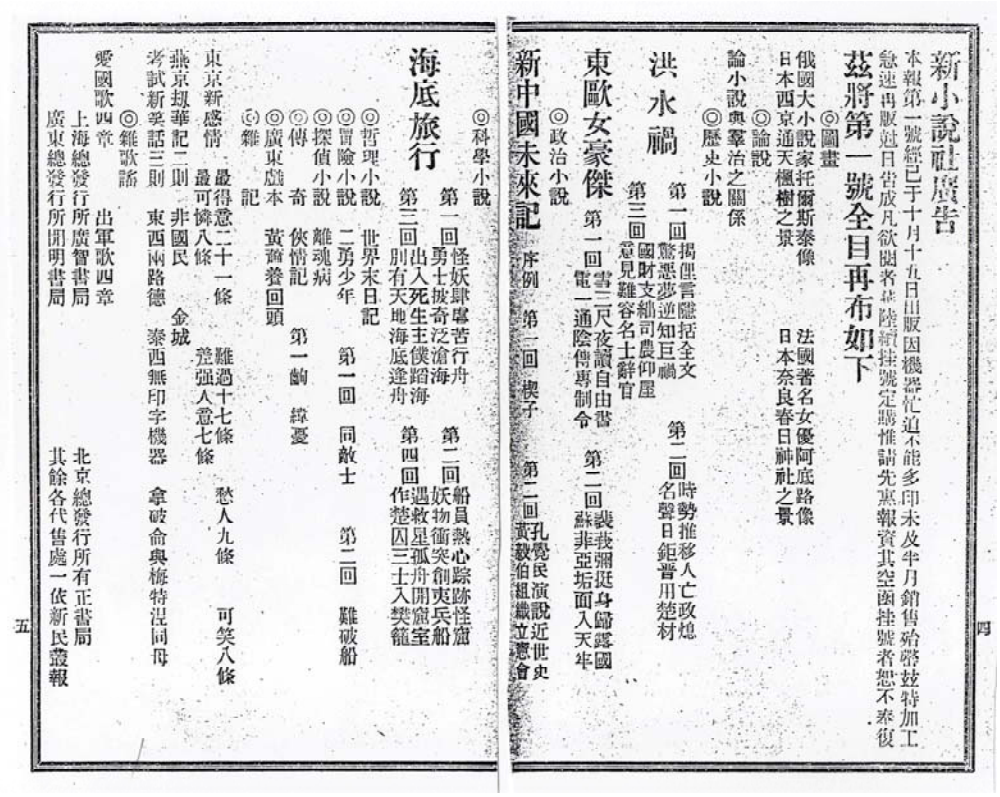
雑誌を編集し発行する経験を持つ私に言わせれば、創刊号に原稿募集をうたう広告など載せたくはない。なぜなら、創刊早々いかにも原稿が不足しているような印象を読者に与えるからだ。月刊誌ならば、創刊する以前から、少なくとも数号分の原稿を用意してあるはずだ。手回しよく原稿募集広告を打つ暇など、とてもないだろう。初版創刊号の販売成績を見た上で、将来も継続して刊行できそうだという判断ができれば、長期計画を立てるためにも、原稿募集を公表しようかという気になる。もしも、３号雑誌で終わるようなことがあれば、創刊号で原稿募集を行なっても、それがムダになる。

すべての雑誌にこの考え方が適用できるとは限らない。だが、これを初版『新小説』創刊号に「徴文啓」が掲載されていない理由としておく。

第21号（1902.11.30）に「新小説社広告」が再版を告知する【図10】。

すなわち「本誌第１号は、すでに十月十五日に出版いたしましたが、機器の手当ができず多くを印刷することができませんでした。販売好調で半月ならずしてほとんど底をついております。ここに特に急いで再版し日限を定めて完成しました。……［本報第一号経已於十月十五日出版因機器忙迫不能多印未及半月銷售殆罄茲特加工急速再版尅日告成……］」

「十月十五日」は、旧暦をいう。新暦になおすと1902年11月14日だ。再版広告



新小說社廣告

本報第一號經已于十月十九日出版因機器忙迫不能多印未及半月銷售殆罄茲特加工急速再版尅日告成凡欲閱者請陸續掛號定購惟請先惠報資其空函掛號者恕不奉復

茲將第一號全目再布如下

◎圖畫
俄國大小說家托爾斯泰像　法國著名女優阿底路像
日本西京通天楓樹之景　日本奈良春日神社之景

◎論說
論小說與羣治之關係

◎歷史小說
洪水禍　第一回　揭俚言隱括全文　驚惡夢逆知巨禍　第二回　時勢推移人亡政熄　名聲日鉅晉用楚材
第三回　國財支絀司農仰屋　意見難容名士辭官

東歐女豪傑　第一回　雪三尺夜讀自由書　電一通陰傳專制令　第二回　裴莪彌挺身歸露國　蘇非亞垢面入天牢

◎政治小說
新中國未來記　序例　第一回　楔子　第二回　孔覺民演說近世史　黃毅伯組織立憲會

◎科學小說
海底旅行　第一回　怪妖肆虐苦行舟　勇士披奇泛滄海　第二回　船員熱心踪跡怪窟　妖物衝突創夷兵船
第三回　出入死生主僕蹈海　別有天地海底逢舟　第四回　遇救星孤舟開窟室　作楚囚三士入樊籠

◎哲理小說　世界末日記
◎冒險小說　二勇少年　第一回　同敵士　第二回　難破船
◎探偵小說　離魂病
◎傳奇　俠情記　第一齣　緯憂
◎廣東戲本　黃齋養回頭
◎雜記
東京新感情　最得意二十一條　難過十七條　愁人九條　可笑八條
最可憐八條　差强人意七條
燕京刼華記二則　非國民　金城
考試新笑話三則　東西兩路德　泰西無印字機器　拿破侖與梅特涅同母

◎雜歌謠
愛國歌四章　出軍歌四章
上海總發行所廣智書局　北京總發行所有正書局
廣東總發行所開明書局　其餘各代售處一依新民叢報

四　五

【図10】「新小説社広告」

の『新民叢報』第21号が11月30日付の発行だから、確かに半月後になる。印刷部数が明らかにされていないのは残念だ。しかし、創刊号の売れ行きがよかったことが、ただちに重版を決定していることから理解できよう。

この重版が、表紙の違いになって表われている。もうひとつ、『新小説』の長期発行が可能だと判断したことが、初版にはなかった「本社徴文啓」を重版に付け加えることになったのだ。

「新小説社広告」のあとには、『新小説』第１号の目次を掲げる。論説「論小説与群治之関係」、歴史小説「洪水禍」「東欧女豪傑」、政治小説「新中国未来記」、科学小説「海底旅行」そのほかを回目とともに示している。

第21号には、さらに「新小説第二号内容提要予告」が続く。論説に説明して「論文学上小説之位置」をあげる。だが、該論文は、『新小説』第２号ではなく

第７号（1903.9.6）に楚卿の名前で発表されている。予定よりも大幅に遅れた。予告通りにはいかない。

第22号（1902.12.14）に「新小説第二号内容」が、第24号（1903.1.13）に「新小説第三号要目」が掲載されている。

何号まで重版があったのか、という疑問もわく。これも、表紙の変化から推測せざるをえない。

影印版『新小説』は、創刊号から第３号まで重版に基づく。その根拠は、表紙の図案が号数を枠の中に収める形だからだ。第４号より表紙が初版創刊号と同じく、号数を表紙の下辺に配置する。

以上から、第１-３号に重版が存在する、と私は推測したい。

『新小説』は、清朝政府からの言論弾圧を受けていた。第３号を発行し、次の第４号を出すまで五ヵ月がかかっているのが証拠のひとつだ（「横浜・新小説社に言論弾圧」『清末小説叢考』収録）。『新小説』の重版は、清朝政府による言論弾圧の期間に実行されたとわかる。

3　『月月小説』のばあい

『月月小説』の表紙は、そっけない。上方に “THE ALL-STORY MONTHLY.” と横書きに表示し、題字の「月月小説」を縦書きにしただけ。花もなければ模様もない。あっさりしたものだ。

『月月小説』が重版されていることは、雑誌自身に明記されているからわかりやすい。

初版第１号の目次には、「光緒三十二年九月望日発行」と表示がある。新暦になおすと、1906年11月１日だ。表紙裏（表二）は、楽群書局の出版案内で『中学校用無機化学』、『考察東瀛警察筆記』および『社会小説黒海鐘』の書名が掲げられる。

一方の重版第１号は、表紙に「丙午臘月第三次印本」とわざわざ刷ってある。初版から約三ヵ月後にあたる。

ただし、目次には、「光緒三十二年九月望日（第三次印本）」となっているから少

THE ALL-STORY MONTHLY.

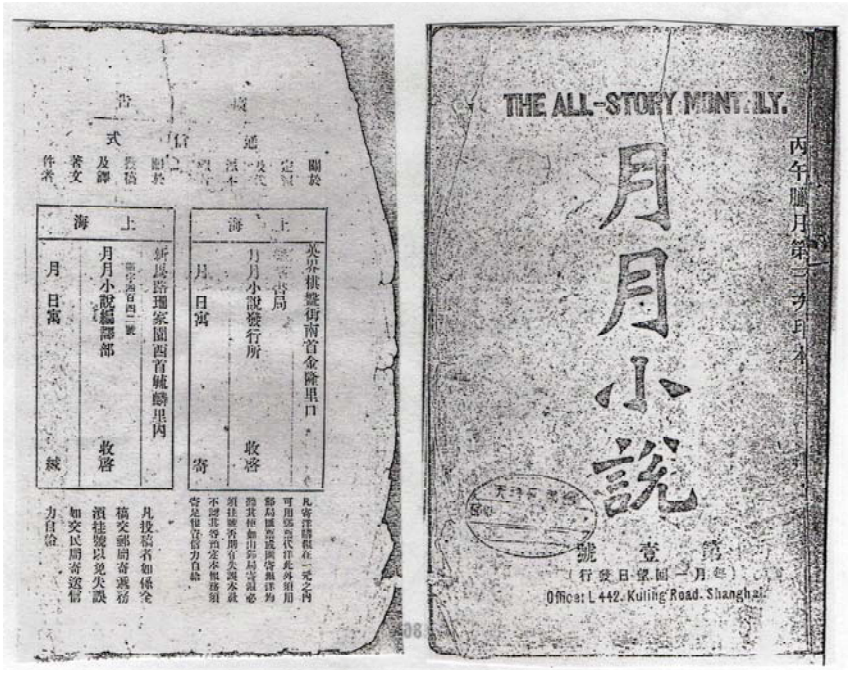
月月小說

第壹號

（每月一回廿五日發行）

Office: L 442, Kuling Road, Shanghai.

【図11】『月月小説』初版第１号



THE ALL-STORY MONTHLY.

丙午臘月第一次印本

月月小說

第壹號

（每月一回廿五日發行）

Office: L 442, Kuling Road, Shanghai.

【図12】『月月小説』重版第１号

しややこしい。初版と重版が同一の日付だからだ。表紙の「第三次印本」と合わせて見れば間違いようがないが。

重版が初版と相違する点は、表紙裏（表二）が楽群書局の出版案内にとってかわって「広告／通信式」があることだ。

宛名が左右にふたつ示してある。『月月小説』の購入希望者は、「英界棋盤街南首金隆里口　楽群書局　月月小説発行所」あて申し込むこと、投稿者は、「新馬路珊家園西首毓麟里内　衛字四百四二号　月月小説編訳部」あてに書留で送るように指示する。

この「広告／通信式」は、もともと第２号に掲載されていた。重版するにあたって、第２号のものを第１号重版に移したのである。

投稿者へ原稿の送り先を指示するだけで、何字につき何元の原稿料を支払うとまで明示する文面ではない。だが、あきらかに原稿募集を行なっていることが理解できるだろう。

『月月小説』でも、他と同じように初版創刊号に掲載することは注意深く避けている。創刊号から原稿募集では、あまりにも体裁が悪いと編集者が考えたのではないか。これが私の推測だ。

4　『小説林』のばあい

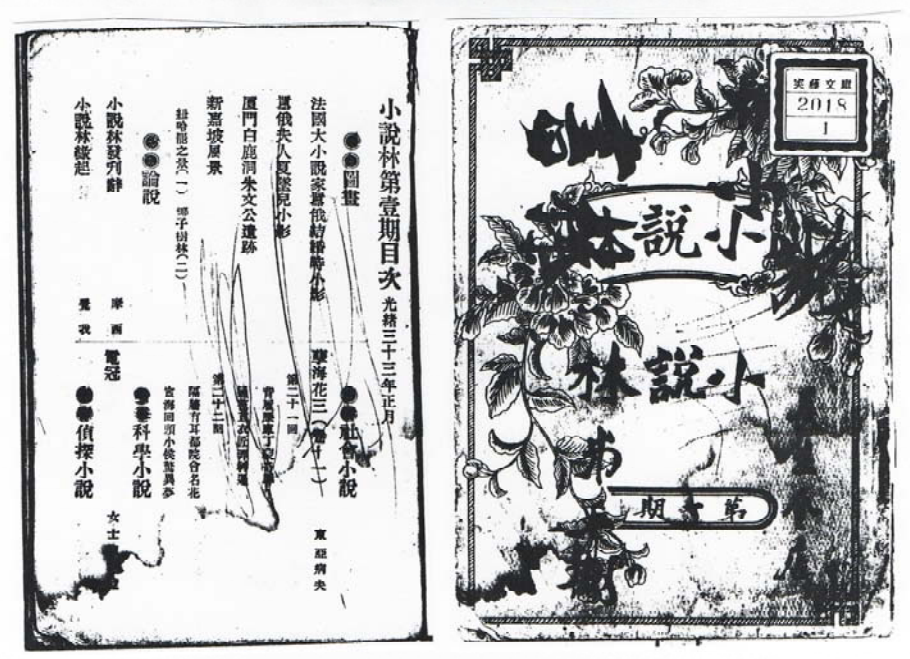
『小説林』も第１期を重版している。

重版を説明する前に、表紙の変化を指摘しておきたい。

創刊号から第５期までと第６期以降の意匠に変化がある。似ているから見逃す恐れもないではない。

その図案は、右肩から複数の花と蔓状に枝が垂れ下がり左下に向う。子持ち罫による上の枠内に「小説林」、下の枠には「第一期」と赤色文字で記入されている。この基本構造は、全冊を通じて揺るがない。

変化のひとつは、表紙全体を囲む罫だ。第５期までは、斜線をほどこした太い罫が右下と左上の二隅を稲妻文様風で飾る（表紙a）。それが第６期以降は、子持ち罫で三隅が草模様に変更される（表紙b）。



【図13】『小説林』初版第１期　表紙a（実藤文庫　落書きがある）

【図14】『小説林』重版第１期　表紙b（国立国会図書館）

◀表紙の配色を示すために架蔵の１冊を掲げる

もうひとつの変化は、題字「小説林」の書体だ。特に目立つのは、「説」の形で第４画が長く書かれている箇所だろう。全体的に見ると無骨な印象を受けるが、第６期からは、華奢な毛筆体に変わる。

初版第１期の目次１頁冒頭には、「光緒三十三年正月」と印刷されている。３頁目は、「徴文広告」と「編輯者　小説林総編輯所」「印刷所　小説林活版部」を示し、総発行所上海棋盤街小説林宏文館有限合資会社の発行物であることを謳う。その裏ページは、「宏文館広告」だ。

初版第１期の「徴文広告」は、優れた作品ならば何でも送られたし、という内容である。創刊号から原稿募集というのは体裁が悪い。これが私の考えなのだが、例外となる実物が出ているのだからしかたがない。

違いといえば、第３期（丁未年三月）では、原稿募集の内容が具体的になる。すなわち「募集小説」と題名を変え、「甲等　毎千字五圓／乙等　毎千字三圓／丙等　毎千字二圓」と原稿料までも明らかにする。募集の内容が初版第１期の一般的から第３期の具体的に濃くなる変化を認めれば、「体裁が悪い説」もいくらかは適用できるか。

第３期には、つづいてお知らせが３種類ある。「特別広告」で作品の無断掲載を告発し版権を主張し、「募集文苑雑著」を掲げて、古近体詩、遊戯文章などについて甲等10元から辛等半元までの原稿料を示す。さらに「募集写真片」で写真を募集する。その値段は、甲等10圓、乙等５圓、丙等３圓だ。

重版の目次には、「光緒三十三年六月再版」と表記される。初版が正月だから半年後にも需要があった。

重版第１期を出すに当たって、表紙は、第６期以降に使用する表紙bを流用し

ている。もうひとつ、第３期に掲げた「募集小説」「特別広告」「募集文苑雑著」「募集写真片」を一組にして移動させた。

『小説林』第２期について疑問がある。国会図書館所蔵本、実藤文庫所蔵本および上海書店影印本のいずれも目次３頁部分がない。「編輯者　小説林総編輯所」「印刷所　小説林活版部」を掲げる箇所だ。ゆえに第２期に「募集小説」以下の広告が掲載されているかどうかは、私は、確認していない。

以上、見て来たのは、1902年から1907年にかけての雑誌の重版情況である。重版にしたがって出入りする原稿募集広告に注目すれば、これは、いわゆる清末四雑誌における原稿料の相場を探ることを意味するといってもいいだろう。

『新小説』が公にする原稿料は、創作が毎千字で４元から２元まで、翻訳が2.5元から1.2元までの幅がある。料金の違いは、創作に比較して翻訳が低く見られている証拠だ。

『繍像小説』は、一般公募で字数による原稿料は明示しない。『月月小説』も同様。

『小説林』は、５元から２元まで。

素人に対してだけ字数計算で、原稿料の相場も幅が広かったというわけでもない。職業作家であっても、安かったり高かったり、計算方式も、字数計算、原稿買い取り、印税方式とさまざまな形態があった*2。

雑誌の重版からいくつかの事実の存在を推測することができよう。

ひとつは、雑誌そのものに対する読者の需要が多かったこと。身の回りに感じる時代が動いている感覚を文章で確認したいという読者からの要求が、雑誌に掲載される小説に向ったと考えることができよう。すなわち、同時代を反映する作品への期待があったということだ。

出版社からいえば、読者の需要があれば雑誌を創刊する価値があることを確認することになる。当たれば事業拡大のよい機会だ。当然のことながら、書き手の発掘が差し迫って必要となる。原稿募集という方法があることを知れば*3、実行しないわけがない。原稿料を公表することで、自然に原稿料の相場というものも成立する。

原稿料の相場が立てば、それを背景にして職業作家が生まれる可能性が出てく

る。李伯元と呉趼人らが経済特科の推薦を断わったのが、その象徴的事件だ、と私は考える*4。しかも、職業作家が出てくる環境は、それほど長い時間をかけて成立したわけではない。きわめて短期間であったと思う。1902年の日本横浜における『新小説』創刊から雪崩をうったように誕生した小説雑誌群が、そのことを証明している。

【注】

1）劉徳隆「関於《新小説》的"本社徴文啓"」『清末小説から』第51号1998.10.1。14-15頁

なお、関連する文章に、郭浩帆「《新小説社徴文啓》的価値和意義」(『清末小説から』第58号2000.7.1）がある。

2）樽本「清末民初作家の原稿料」『清末小説論集』所収

3）さかのぼれば1895年の『万国公報』第77冊1895.6に小説募集広告が掲載されている。

参考文献：

陳業東「近代小説理論起点之我見」『明清小説研究』1994年第１期（総第31期）1994.3.1

王立興「一部首倡改革開放的小説――詹熙及其小説《醒世新編》論略」『明清小説研究』1994年第１期（総第31期）1994.3.1

武　禧「一八九五－一八九六年小説略説――晩清小説雑談５」『清末小説から』第44号1997.1.1

劉樹森「傅蘭雅 "求著時新小説"：起源与終結」『清末小説』第21号1998.12.1

4）樽本「李伯元、呉趼人と経済特科の意味」『清末小説探索』所収

「救劫伝」の作者艮廬居士は、胡思敬か

——附：「救劫伝」第12-16回

『清末小説』第23号（2000.12.1）に掲載。沢本香子名を使用。阿英の記述が、のちの研究者を大いにまどわせた例のひとつである。阿英は、研究界の権威だ。記述の妥当性を検討する人は、いない。誤りが正されることなく広まった理由だ。

義和団事件を主題とする「救劫伝」の作者艮廬居士について、胡思敬説と張仲清説のふたつが存在する。艮廬居士は胡思敬だと阿英が書いた。大多数の研究者がそれを信じている。しかし、各種伝記、筆名録を調査しても胡思敬は艮廬居士という号を持つことを確定できない。阿英が断定したように見える「胡思敬（艮(ママ)廬居士）」は、誤りである。それが現在に至っている。

また、作者を特定する過程で、阿英が恣意的に本文を改造している事実を発見した。ある場所では本来あるはずの文章が、削除されたうえ書き換えられている。阿英による捏造である。

朱徳慈が「晩清小説家瑣考」（『明清小説研究』2005年第１期（総第75期）2005発行月日不記）において、艮廬居士の生卒年、家世、経歴などを明らかにしている。朱は樽目録第３版には触れる。だが、本稿が公開されていることを知らない。

「救劫伝」の作者艮廬居士は、誰か。

現在、２説ある。ひとつは胡思敬とし、もうひとつは張仲清だとする。

２説あるといっても、張仲清とする文献はごく少数にすぎない。胡思敬説を唱える文章が、圧倒的に多数を占める。多数ではあっても、それが正しいかどうかは別問題であるところに学術研究の複雑さがある。

胡思敬説の源を探っていけば、ここでも阿英に突き当たってしまう。

清末小説研究の分野において、比較的多くの問題が阿英に発生しているといわざるをえない。その理由のひとつは、それだけ阿英が先行して研究を進めていたからだ。

もうひとつの問題点をあげれば、阿英以後、多くの研究者が彼を権威として高みにあげてしまったことがあるだろう。権威だから、当然、少しの疑問すら誰も感じない。頭から信用する。資料上、少々つじつまがあわなくても目をつぶる。あるいは、阿英説に強引に合わせてしまった。これが実情だと推測する。ひとりが引用すれば、他人もそれに従う。これの繰り返しである。かくして、現在は艮廬居士＝胡思敬ということにほとんどなっている。

さかのぼって阿英説を検討する前に、いくつか存在する「救劫伝」の版本について簡単に説明しておきたい。阿英が後の研究に与えた影響が、小さくないからだ。

1　「救劫伝」の版本について

「救劫伝」の版本は多くはないが、それでも複数ある。雑誌連載からはじまり、のちに単行本となった。叢書に収録されてもいる。

○「救劫伝」16回　艮廬居士演　『杭州白話報』第２-31期　光緒二十七年五月十五日-壬寅四月五日（1901.6.30-1902.5.12）　写真で見る限り刊行月日は、不鮮明

「救劫伝」は、最初、『杭州白話報』に連載された。最終回には、序、同人題詞、回目を掲載する。

『杭州白話報』(1901-1904）は、「救劫伝」が連載されていたころは、木刻線装の旬刊、つまり月３回発行の雑誌だった。題名通りに杭州で発行された白話による定期刊行物だ。その主旨は、「民の知恵を開き、民の気概を作る」ことにあった。当時、収束したばかりの義和団事件についても多くの記事が掲載され、おおむね、義和団に反対する立場にたったという*[1]。

義和団事件を描いた作品のひとつが、艮廬居士演「救劫伝」である。

「救劫伝」第16回に「厄災から救済するという私のこの考え［我這個挽救劫数

的意思]」とある。義和団事件を、中国が見舞われたひとつの厄災と考え、事件後に実施された新政を改革（変法）つまり救済法だととらえる小説だ。

『杭州白話報』に連載されたものが、そのまま単行本に形を変えて出版された。

○『救劫伝』16回　２冊　艮廬居士撰　杭州白話報刊本　刊年不記

木刻線装本。序および桃源山人、太虚子の「同人題詞」などがつく。これらは前述の通り、雑誌での連載を終了した時点でつけられたもの。単行本化にあたって、冒頭に移された。

『杭州白話報』連載のままを引き抜いて２冊本にしたことが明白だ。別の言い方をすれば、同一版木を使用して刊行している。

第１-10回、第11-16回の２冊に分ける。それほどの分量もないのに、なぜ２分冊にしているのか不明。事実、１冊にまとめたものを別に見たことがある。

私の手元にある複写を見れば、もとから刊年を記載していない。ところが、北京図書館編『西諦書目』(北京・文物出版社1963.10。目４の64丁ウ）は、刊年を「光緒二十七年」と明記している。連載終了が光緒二十八（1902）年であるから、『西諦書目』の記述は、明らかに矛盾する。おおよそ1902年の発行だと考えていいだろう。

これ以後、阿英が叢書に収録するまで、本文そのものは、長らく人の目に触れなかった。

○「救劫伝」12回　艮廬居士　阿英編『庚子事変文学集』北京・中華書局1959.5。207-255頁　中国近代反侵略文学集

叢書に収録されたことは、学術上、大きな意味を持つ。散逸が激しい清末小説をなんとか保存しようとした阿英の功績は、高く評価すべきものだと考える。ややもすれば、無視されがちな分野だけに、作品そのものを読むことができる状態にしたことは、阿英の大きな貢献だ。のちの研究者によっても広く利用されたことは、いうまでもない。

しかし、疑問を感じる点もある。たとえば、序および桃源山人、太虚子の「同人題詞」などを省略する。不可解なのが、全16回ある本文のうちの12回分しか収

めていないことだ。部分収録ならば、そう書くだろう。阿英は、16回本を入手しているはずなのだが、なぜ12回だけなのか。その説明は、ない。

それどころか、阿英編の第12回本文には、まことに奇妙な箇所がある。

終わりの部分に「和約草稿」12条が掲げられる。その冒頭に前文がついているが、これは原作にはもともと存在しないのだ。さらに条文そのものが、原作よりもかなり詳しい。

つまり、阿英は編纂するにあたって、勝手に原文を削除した。そのかわりに正式な条文と入れ替えたのである。原作「救劫伝」には、前文もなければ、12条の条文は簡略化したものを掲げるにすぎないにもかかわらずだ。

さらに、原作では、条文の後ろには、清朝の国家財政が赤字のうえに、莫大な賠償金を捻出するためどうするかと説明がつづく。塩税はどうの、アヘンはどうの、インフレがひどいの、とこまごまと情況が述べられる。ところが、阿英編纂の「救劫伝」は、それらをすべて削除する（注：文末に資料として掲げた）。削除して以下の文章に置き換えた。翻訳を示す。

> 諸君！これこそが北京和約の全文である。中国の慶親王と李鴻章が、各国の公使と北京で一年間議論したのちにようやく議定した。この十二条は、大綱にすぎない。まだそれぞれに詳細な規定があるが、我々はいまだに見ていない。考えれば、徹底的にしてやられたのにほかならない。今、ロシアが我が東三省地方を無理矢理占領しようとしており、半年前にすでに条約を結んだ。幸いにして我が全国のなかで理解している人は、力を合わせて電報を政府に打ち、抗議したためようやく中止となった。現在、この事は、まだ終了していない。私が見るところ、ロシアは東三省を必ず占拠するつもりである。また私が見るところ、我が中国は、ふたたびロシアと争うことができないのだ。ああ！どのみち我々は、まるっきり意気地がなく、力を合わせて国家を防衛しようとは思わないのである。この時におよんで、目を見開いて何を望むというのか？なにを望むというのか？

本来はあるはずの文章が、削除されたうえ、上のように書き換えられた。この

部分は、阿英が捏造した真っ赤な偽物なのである。だから、文末の「次回につづく［且聽下回分解］」がない。これでは、第12回で完結したような印象を持つ研究者がいても不思議ではなかろう。

原作とはなんの関係もない文章を、よくもまあ挿入したものだとあきれてしまう。ロシアの東三省占拠を非難しているのは、阿英が編集していた当時の中ソ対立を背景にしているに違いない。

いくら阿英であろうとも、これは編集者がやるべきではない改変である。もし、阿英が手を加えたこの「救劫伝」を根拠にして、作品論を展開するならば、それは、原作とは無関係なものにならざるをえない。

阿英は、原作12回の最後部分を書き換えたから、第13回以降にそのまま接続することができなくなった。だから全16回のうちの12回しか収録できないという中途半端に終わったとわかる。

この『庚子事変文学集』に収録されている「鄰女語」には、阿英の勝手な省略があることを明らかにした*2。はるか以前に、研究者に対して警告が発せられたと考えるべきだ。ゆえに阿英の編集物をあつかう場合、慎重な姿勢が要求されるのは自明の理である。

案の定、阿英は、「救劫伝」でも同じ行為をくりかえしているのだった。中国大陸で編纂されたから、阿英が編集者だから、といって鵜呑みにしてしまう研究者は、阿英に騙されることになる。

○「救劫伝」12回　艮盧(ママ)居士　台湾・広雅出版有限公司1984.3　晩清小説大系

「鄰女語」「恨海」「京華碧血録」「庚子国変弾詞」とともに１冊に収録される。義和団事件ものを集めて１冊にしたとわかる。著者名を間違えている。誤植だ。また、こちらも12回しかないのは、収録に際して阿英編『庚子事変文学集』に拠ったからだ。ゆえに、阿英の書き換えもそのままひき写す結果になっている。研究論文を書く場合、阿英編集本と同じく、この台湾本も底本にしてはならない。

以上のようなわけで、現在、普及しているのは、12回版の「救劫伝」でしかない。それも、全16回本ではない、阿英による改竄がある、というふたつの理由で

欠陥品である。

いうまでもなく、原作16回は、『杭州白話報』で読むか、杭州白話報の単行本２冊で確認するのが最良かつ基本の方法となる。日本においては、やろうと思えば、珍しくこの両方ともに可能なのだ。

さて、艮廬居士問題に入ろう。

2　阿英説の基本、変化から決定へ

問題が阿英から始まるから、その軌跡を追わざるをえない。

阿英の「救劫伝」に関する記述は、ほとんど研究メモのような短文から始まる。

○阿英『小説閑談』上海良友図書印刷公司1936.6.10

「「救劫伝」十二回、艮廬作、「杭州白話報」に掲載されて、庚子国変の事を記す。小説の体裁を用いて事変の経過を説明するが、材料は忠実でなく、文筆も極めて平凡である。もっとも奇怪なのは、義和団の殺戮行為について大いに攻撃を加えており、しかも帝国主義に対しては言及しようとしないのだ」(204頁)

研究メモらしいから、艮廬居士ではなく、艮廬と書いていたりするのだろう。また、16回あるはずの本文が12回しかないことになっている。

10回本ならまだ理解できる。現存する『救劫伝』２冊本は、10回で第１冊を構成しているからだ。阿英がいう12回は、それからすれば中途半端だろう。疑問を述べれば、「同人題詞」などについて言及していないことが理解しがたい。推測できるのは、阿英が入手したのは『杭州白話報』そのものか、あるいは連載途中のものを抜き出して私的に一本としたものかもしれない。それにしても12回は、いかにも半端であるとくりかえしておく。12回本が、別にあるようにも読めるが、おそらく単行本化された12回本は存在しないと私は考えている。

艮廬（居士）の本名についての言及はない。

次の『晩清小説史』も、記述は、これとほぼ同じである。

○阿英編『晩清小説史』上海・商務印書館1937.5

「また艮蘆(ママ)居士と署名するものが、『杭州白話報』上に「救劫伝」十二回を作り義和団の事を述べる。海外との通商から辛丑条約までを描いて完成する。義和団に対しては非難が周到であるが、帝国主義が民衆に行なった残虐行為に対しては一言もいわない。文筆は拙劣である」(80頁)

艮蘆(ママ)居士とするのは、単なる誤植と思われる。ここでも12回とし、しかもそれで完成したとも書いているのは奇妙である。手元にある原本複写を見れば、第12回末尾には、「次回に続く［且聴下回分解］」とあるばかりか、第13回の回目も本文に印刷されているからだ。明らかに続きが存在しているにもかかわらず、それを12回で完結したと阿英が受け取ったのは、何としても理解しがたい。

また、艮廬居士についても、著者が誰であるのかの推測はなされていない。

新しい事態をむかえたのは、「救劫伝」16回本を阿英が発見してからのことだ。

○阿英「庚子八国聯軍戦争書録」張静廬輯註『中国近代出版史料初編』上海・上雑出版社1953.10

この書録は、未発表であったという。その作成年は、1938年４月11日と記されている。『晩清小説史』を出版して約１年後だ。話の順序からいって、この文献に触れないわけにはいかない。

阿英が所蔵していた「救劫伝」は、12回本だったから、説明の文章ではいずれも12回と書いている。その後、蘇州で16回本を見つけた。だが、購入する時間がなかった（阿英がそう書いている)。そこで、この書録では、「戦（日中戦争）前、蘇州で１冊を見たことがある。16回のようだった」と書き加える。

１度は取り逃がした16回本だったが、結局、阿英は上海で入手した。蘇州の本屋が、戦火を逃れて上海に移転してくる。その在庫に「救劫伝」16回本があった。

艮廬居士の正体について言及が始まるのは、この翌年からである。

○鷹隼（阿英)『剣腥集』上海・風雨書屋1939.3――胡思敬説浮上

研究メモ風の短文いくつかを「国難小説叢話」の題名のもとにまとめた。その「救劫伝」の項目は、発見があったため書き直されて、以下のようになった。

「「晩清小説史」では、十二回本の「救劫伝」に言及したが、実はこの本は十

六回であったのを、私は、はじめは知らなかった」「庚子事変の諸小説の中で優秀作ということはできない。作者は、艮廬居士というが、「驢背集」を著した人と同一人物であるかどうかは知らない。「驢背集」は詩文ともにすばらしいが、こちらは平凡で言うに足りない。にわかにはよう断定しない」（93頁）

16回本の存在を明らかにした点が新しい。

新しいことのもうひとつは、艮廬居士が「驢背集」の著者と同一人物であるかどうか、ひとつの手掛かりを提出しているところだ。

「驢背集」の著者名を、ここで阿英は書いていないが、胡思敬なのだ。「驢背集」は、義和団事件を自ら体験した胡思敬が、その経験を詩と注釈によって描写した作品である。阿英のこの詩文に対する評価は、高い。一方の「救劫伝」は、低い。それでも、阿英は、ここで著者についてひとつの可能性を示唆する。強調しておきたいのは、胡思敬だと断定しているわけではない点だ。判断を留保していることに注目しておく。

該書「国難小説叢話」のなかには、「中東和戦本末紀略」に関する短文をあらたに追加収録する。

「中東和戦本末紀略」は、平情客演で同じく『杭州白話報』第２年第１-31期（光緒二十八-二十九 1902-1903。未見）に連載されている。

阿英は、この作品について「平情客著、十回。該報に庚子小説「救劫伝」十六回を作った艮廬居士と同一人物かどうか知らない」（90頁）とも書く。

阿英は、『剣腥集』という書物の中において、「救劫伝」の作者艮廬居士についてふたりの候補者を掲げた。すなわち、胡思敬と平情客（狄楚青のこと）である。いずれも決め手に欠けるため、可能性をいうに止まっている。

中華人民共和国成立後、阿英は、『晩清小説史』を部分的に改訂して出版する。全面的な改訂ではない。だから、多くの箇所が旧版のままだ。「救劫伝」についても、わずかな手直ししかなされていない。

○阿英『晩清小説史』北京・作家出版社1955.8

「また艮廬居士と署名するものが、『杭州白話報』上に「救劫伝」十六回を作り、……」（51頁）

初版の語句とほとんど同じだ。初版で「艮蘆(ママ)居士」と誤記していたのを訂正し、「十二回」を「十六回」に書き換えただけにすぎない。ここでは、胡思敬にも、平情客にも触れない。

情況が変化するのは、義和団事件についての文学資料集を編纂してからになる。

○阿英編『庚子事変文学集』北京・中華書局1959.5　中国近代反侵略文学集――胡思敬説の確立

序文として書かれたのが、「関於庚子事変的文学」だ。この中で、「救劫伝」について２ヵ所で言及する。

まず、「救劫伝」に関する解説から見ていこう。

「この戦役について語り物の性質を完全にそなえている小説は、最初には艮廬居士の「救劫伝」十六回がある。『杭州白話報』に掲載され、小説の体裁で事変の経過を説明し、……」(23頁)

この記述は、あくまでも「国難小説叢話」あるいは『晩清小説史』で行なった説明の延長線上にある。

16回本を入手しているはずなのに、資料集には、本文は12回しか収録していない。阿英は、12回末尾を改竄したから第13回と接続できなくなったのだろう、とくりかえしておく。

もうひとつの言及箇所は、「驢背集」を説明するところだ。

「胡思敬（艮(ママ)廬居士）の驢背集四巻は、最初、雑誌『華国』に掲載され、後に単行本として発行された。この戦役の事実を記録した詩集のひとつである。「救劫伝」の作者艮廬と同一人物であるかどうかは知らない［胡思敬（艮(ママ)廬居士）的驢背集四巻、最早登載在雑誌華国上、後来刊印了専冊。也是這一戦役紀事史詩集之一。与救劫伝作者艮廬、不知是否一人？］」（９頁。「驢背集」も同書に収録する。84-101頁）

ここにきわめて重要な指摘がある。阿英は、まぎれもなく「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」と書いているのだ。

『剣腥集』(1939）で艮廬居士が胡思敬である可能性を示唆して以来、20年後の『庚子事変文学集』(1959）において「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」と明示するにいたった。

阿英は、長年の資料収集の結果、ついに艮廬居士が胡思敬である証拠を発見した。誰しもが、これで決定したと考えるだろう。同時に、もうひとつの可能性であった平情客は捨てられた。

事実、後の研究者のほとんどが、阿英が記述する「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」に飛びついた。だれ一人として、同じ箇所に、「「救劫伝」の作者艮廬と同一人物であるかどうかは知らない」と阿英が重ねて書いていることに注意を払わなかった。

阿英の『庚子事変文学集』における「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」説が、どれくらい研究者に影響を及ぼしたのか。次に検証してみよう。

3　阿英以後の趨勢――圧倒的に胡思敬説

「文化大革命」をむかえた中国では学術研究が中断していた。「救劫伝」の艮廬居士については、日本での言及の方が先である。

○中島利郎訳注「晩清小説史試訳ノオト（5）――第４章庚子事変の反映」『咿唖』第９号　1977.11.30

阿英『晩清小説史』の日本語翻訳と注釈である。注に、関係する部分がある。

「(29) 艮廬居士　本名不詳。ただ詩集『驢背集』等の著者、胡思敬にも「艮(ママ)廬居士、退廬、退廬居士」などの筆名があり、彼のことかもしれない。阿英「晩清小説目」では「銀廬居士」となっている」(50頁)

中島利郎は、胡思敬について「「艮(ママ)廬居士、退廬、退廬居士」などの筆名があり」と注した。胡思敬の筆名に艮廬居士を含めたその根拠は、阿英の文章に違いない。

説明しなければならないのは、「阿英「晩清小説目」では「銀廬居士」となっている」という箇所だ。誤るのは初版（上海文芸聯合出版社1954.8。89頁）であって、増補版（上海・古典文学出版社1957.9）では訂正している。それを書かないのは、不親切だろう。

中島利郎の訳注は、平凡社出版の翻訳に吸収された。

○阿英著　飯塚朗、中野美代子訳『晩清小説史』日本・平凡社　東洋文庫349　1979.2.23

「(25) 艮(ママ)廬居士　胡思敬（一八七〇～一九二二）字は漱唐のこと。退廬、退廬居士ともいう。『小説目』に銀廬居士とするのは誤り」(320頁)

もとになった「試訳ノオト」では、「彼のことかもしれない」と一応の疑問符をともなっていた記述が、こちらでは、艮廬居士は胡思敬であると断定されるにいたった。「晩清小説目」の初版しか参照していないのは、もとのままだ。

作品についても注釈がつけられた。

「(27)『救劫伝』『杭州白話報』連載後、同報館より各期から分離して抽印本として単行（年は未詳）。いま『庚子事変文学集』上冊所収。阿英、「十六回」に誤る。阿英「救劫伝」(『小説閑談』初版所収）参照」(320頁)

「阿英、「十六回」に誤る」とは、大胆な説明である。阿英自身が、12回は間違っていた、16回本を入手したと書いているのを否定するのだ。おそらく『庚子事変文学集』に12回分しか収録していないから、阿英が誤ったと判断したのだろう。ここは、「誤る」とする指摘そのものが間違っているという、不注意であると同時に恥かしい注釈である。

一方、中国では「文革」後、ようやく清末小説研究が復活しはじめる。

「救劫伝」は、辞書項目として収録されることが多い。著者については、基本的に、すべて阿英が書いた「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」説を踏襲しているといってもいいだろう。

○江蘇省社会科学院明清小説研究中心編『中国通俗小説総目提要』北京・中国文聯出版公司1990.2／1991.9再版

「救劫伝　十六回　存　“艮廬居士演” と題す。すなわち胡思敬であり、詩集『驢背集』四巻がある」(846頁。蕭相愷執筆）のように書かれる。

艮廬居士は胡思敬である、と理由も根拠もなく断言する。理由も根拠も必要のない事実である、という認識があるからだろう。

ついでに触れておくと、提要において回目は16回を示すが、13-16回の内容を説明していない。阿英が行なった原文の書き換えについても言及しないから、執

筆者の蕭相愷は、阿英編集本に拠って該当項目を書いたのだろう。「正文半葉十一行、行二十五字」と原物を見ていなければ書けないと思われるのに、不思議なことだ。

あとの文献は、列挙するだけに止めたい。

王継権主編『中国歴代小説辞典』第４巻近代（昆明・雲南人民出版社1993.3）には、「艮廬(ママ)居士（胡思敬）著」(144頁。童煒鋼執筆）とある。孫文光主編『中国近代文学大辞典』(合肥・黄山書社1995.12）は、「作者即胡思敬」、「光緒二十八年（1902）《杭州白話報》連載」とする（890頁。万建清執筆)。梁淑安主編『中国文学家大辞典・近代巻』(北京・中華書局1997.2）は、胡思敬の項目で「一号艮廬(ママ)居士」とし、「又作小説《救劫伝》十六回」と記述する（317頁。王飆執筆)。

4　新説提起

艮廬居士＝胡思敬説一色のように見えるかもしれない。だが、胡思敬をあげない文献も、実は存在する。

たとえば、清末小説研究会編『清末民初小説目録』(中国文芸研究会1988.3.1）は、「救劫伝」の項目において、「艮廬居士（張仲清)」とし、胡思敬には触れない。また、樽本編『新編清末民初小説目録』(清末小説研究会1997.10.10）も、同じく張仲清と注記する。ただし、異なる説を紹介することを忘れない。「[提要846]では、艮廬居士を胡思敬とする」（325頁）といった具合だ。さらに、樽本編『清末民初小説年表』(清末小説研究会1999.10.10）では、「艮廬居士（胡思敬）／張仲清？」（7a）と微妙に変化させている。それは、考えにユレが生じたためである（補記：樽本編、賀偉訳『新編増補清末民初小説目録』(済南・斉魯書社2002.4)では、張仲清とし本名は張茂炯と注記した。本稿にもとづいている)。

王継権、夏生元『中国近代小説目録』(南昌・百花洲文芸出版社1998.5　中国近代小説大系80）が、「艮廬居士（張仲清)」（402頁）と書くのは、『清末民初小説目録』を引き写しているからにすぎない。

森川登美江「清末小説点描１――義和団事件を描いた文学作品」(『大分大学経済論集』第50巻第２号　1998.7.20）は、『新編清末民初小説目録』により２説があるこ

とを知ったうえで、注１において胡思敬と張仲清の両説を併記している（64頁）。張仲清が合編で『万国演義』を出版していることを指摘しているところが新しい。

『清末民初小説目録』の出版は、1988年である。『中国通俗小説総目提要』が1990年に発行されるよりだいぶ前のことになるのに、なぜ、張仲清説が中国の研究者の目に入らないのか。理由は、簡単である。中国の研究者の多くは、『清末民初小説目録』を見ていないからだ。

それよりもなにも、清末文学研究の権威である阿英が、艮（ママ）廬居士は胡思敬だと断定しているのだ。異論が出てくるはずがない。そういう意味では、王継権、夏生元『中国近代小説目録』は例外的な存在だろう。ただし、こちらは、前述したように『清末民初小説目録』に拠っており、阿英説を検討する時間的余裕がなかったのかとも思う。

では、艮廬居士は、胡思敬なのかそれとも張仲清なのか。

5　胡思敬説

まず、胡思敬説からはじめよう。

阿英がとりあげる胡思敬は、著名な人物で、人名辞典などにも多く採録されている。手元の古い文献から見ていくと、橋川時雄のものがある。

○橋川時雄『中国文化界人物総鑑』北京・中華法令編印館1940.10.25初版／名著普及会復刻1982.3.20

これには胡思敬の経歴が、かなり詳しく書かれている。冒頭部分を引用する。

「字は漱唐、号は退廬、江西西昌の人。光緒癸巳に郷試に挙げられ翌年進士、乙未に殿試に補せられ、翰林院庶吉士となり、戊戌に散館、史部主事となり、其の間読書と購書につとめ、……」（275頁）という。蔵書の多さでも有名で、かつまた『退廬文集』７巻など著書多数がある。多数の著書のひとつが、阿英のあげた「驢背集」だった。

橋川の記述で気になるのは、号のなかに艮廬居士が含まれていないことだ。辞書項目だから、すべての号が列挙されているわけではない、と考えればおかしい

ことはない。では、別の筆名録を見ておく。

○張静廬、林松、李松年「戊戌変法前後報刊作者字号筆名録」『文史』第４輯 1965.6

胡思敬　胡漱唐、瘦唐、退廬、退廬居士（226頁）

○藤田正典『現代中国人物別称総覧』汲古書店1986.3

胡思敬　1870-1922.5.26（字）漱唐、瘦篁、瘦唐（号）退廬居士、退廬、問影楼主（72頁）

このふたつとも似たようなものだが、いずれも艮廬居士を挙げていない。

朱宝樑主編『二十世紀中国作家筆名録』増訂版上下（台湾・漢学研究中心編印1989.6。317頁）にしろ、大部な陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』(杭州・浙江古籍出版社1993.5。653頁）にしろ、胡思敬の項目に艮廬居士を収録していないのは同様である。また、徐為民編『中国近現代人物別名詞典』(瀋陽出版社1993.10）にも「1870年生　江西新昌人　瘦唐、漱唐（字)、退廬、退廬居士（号)、問影楼主」(113頁）とあって、艮廬居士が見えない。

胡思敬と親しい友人の陳毅が書いた「胡退廬墓表」(卞孝萱、唐文権編『民国人物碑伝集』北京・団結出版社1995.2）には、「退廬諱思敬、字瘦篁、新昌胡氏、退廬其晩号」(936頁）と記されている。艮廬居士はおろか、艮廬すらもない。

これはどうしたことだろうか。

胡思敬の「驫背集」は、最初、雑誌『華国』に掲載されたと阿英はいう。『華国』(目次では華国月刊）そのものを見れば、第１巻第２-９期（1923.10.15-1924.5.15）に連載されているのが確認できる。その著者名に「艮廬居士」とでもあれば、胡思敬が号に艮廬居士を使用したという証拠になる。だが、雑誌を手にすると、本文には、退廬居士（目次は退廬）とあるだけだ。

こうなれば、推測はひとつしかない。胡思敬は、艮廬居士という号を持っていないのではないか。

大量の文章を残している胡思敬だから、その著作集に「救劫伝」が含まれていれば、その著者だと断定することができる。

そこで、胡思敬撰『退廬全集』全７冊（近代中国史料叢刊第45輯、台北・文海出版社。刊年不記）を見る。　しかし、ここには「救劫伝」は収録されていない。

胡思敬の全集に「救劫伝」が存在しないということは、該作品は胡思敬のものではないと判断していいだろう。

艮廬居士が胡思敬の号でないならば、出発点にもどって検討しなければならなくなった。つまり、「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」と書いた阿英説の再検討である。

6　阿英「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」説の謎

阿英は、次のように書いている。重要な箇所だから、くりかえす。

「胡思敬（艮(ママ)廬居士）の驢背集四巻は、最初、雑誌『華国』に掲載され、後に単行本として発行された。この戦役の事実を記録した詩集のひとつである。「救劫伝」の作者艮廬と同一人物であるかどうかは知らない」

あらためて読んでも、不可解で筋の通らない文章であると私は感じる。なぜか。

「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」と明記しておいて、その後ろに「「救劫伝」の作者艮廬と同一人物であるかどうかは知らない」と続けるのは、論理的につじつまがあわないからだ。

「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」と記しているからには、艮廬居士の本名が胡思敬であることを示しているにほかならない。したがって「救劫伝」の艮廬も胡思敬になる。ところが、「「救劫伝」の作者艮廬と同一人物であるかどうかは知らない」というのだから、書いていることが前後であきらかに矛盾する。

それとも、胡思敬は艮廬居士という号を持っていて、しかも「救劫伝」の作者艮廬と同一人物ではない、というのか。

中国には、同姓同名の人物も多い。同じ号を使用する複数の文人も存在する。「救劫伝」の場合も、それと同じなのだろうか。

つまり、艮廬居士と同一の号を使用している別人の存在を阿英は言っているのか。そうであれば、「救劫伝」の艮廬居士は、胡思敬とは別人ということになる。阿英以後、艮廬居士＝胡思敬と書いてきた研究者の全員が誤っていることを意味する。

それよりも、同一号を持つ別人というのであれば、上とはちがった書き方にな

るのではないか。これが私の考えである。たとえば、「同一号を有しているが」などの注釈をつけて、「「救劫伝」の作者艮廬と同一人物であるかどうかは知らない」と記述するのであれば、同号別人という考えも成立しないわけではない。

だが、私が推測する真相は、それほどまでに複雑ではない。簡単なことなのだ。印刷過程で発生した誤りではないか。

すなわち、「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」で示している「艮廬居士」は、「退(◎)廬居士」の誤りだと思う。

阿英の原稿は、「胡思敬（退廬居士)」となっていたのではないか。それを植字段階で「胡思敬（艮(ママ)廬居士)」と間違った。「退廬」と「艮廬」は、見た目に似通っている。おまけに、著述の箇所は「艮廬」が話題にのぼっているからなおさらだ。校正段階で、その誤植を見逃し、現在に至るまで誤解が継承されているのである。そうとしか考えられない。

私の推測にしたがって、阿英原文の「艮」を「退」に直してみる。

「胡思敬（退廬居士）の驢背集四巻は、最初、雑誌『華国』に掲載され、後に単行本として発行された。この戦役の事実を記録した詩集のひとつである。「救劫伝」の作者艮廬と同一人物であるかどうかは知らない」

これでようやく話の筋が通る。「退廬居士」だからこそ、その直後にある「「救劫伝」の作者艮廬と同一人物であるかどうかは知らない」となんの矛盾もなく文章が成立する。阿英は、退廬居士である胡思敬が、艮廬と同一人物かどうかは分からない、と従来の自説をくりかえしているにすぎない。

阿英の原文が「胡思敬（退廬居士)」であったとするならば――そうだと私は確信するが、「胡思敬＝艮廬居士」説は、一瞬にして根底からくつがえる。したがって、誤植を信じた研究者は、必然的にすべてが誤りになる。

胡思敬は、艮廬居士という号を持っていなかった。これが、ひとつの結論である。

それでは、もうひとつの張仲清説はどうなるか。

7　張仲清説

艮廬居士＝胡思敬説が否定されると、張仲清が有力な存在として浮き上がって

いくる。艮廬を号に持つ人物は、筆名録によると二人いる。

○楊廷福、楊同甫編『清人室名別称字号索引』上下　上海古籍出版社1988.11
　張茂炯　呉県　仲清　艮廬（1317頁）
　蒋元樾　海寧　照生　艮廬（1667頁）

　蒋元樾について、私は知らない。
　張仲清は、人名録に収録されている。そのまま紹介する。

○北京支那研究会編『最新支那官紳録』同会1918.8.20／1919.9.10三版
　張茂炯（Chang　Mao-ch'iung）　字　仲清　江蘇省呉県人／前清甲辰科進士出身にして曾て度支部主事軍餉司科長たり、民国成立するや塩政署参事に任ぜられ、嗣で財政部整理賦政所議員、清査官産處評議員となり四年七月五日少大夫を授けられ、十月十日三等嘉禾章を給与せらる、六年十二月善哉塩務署参事たり。年齢四十三。（440頁）

○『最近官紳履歴彙録』第一集　北京敷文社1920.7
　張茂炯　字仲清年四十五歳江蘇呉県人（後略）（138頁）

　２種類の数え年をもとにして計算すれば、張仲清は、1876年生まれとなる。甲辰は光緒三十（1904）年だから、科挙が廃止される直前に進士となった。その経歴を見れば、『清塩法志』３百巻（塩務署1920）という著書をもつこととあわせて塩務に従事したことがわかる。
　義和団事件発生時は、数えで二十五歳、「救劫伝」の連載が光緒二十七（1901）年から翌年にかけてだから、二十六歳の時となる。著作と年齢との関係は、不合理なところはない。
　艮廬という号のほかに、もうひとつの手掛かりは、『万国演義』という作品だ。

○『万国演義』

『万国演義』60巻は、前出『中国通俗小説総目提要』(854頁）の記載によれば、沈惟賢輯著、高尚縉鑑定、張茂炯述章（上賢斎蔵版、作新社制印　光緒二十九（1903）年四月）となっているという（原物未見)。

注目されるのは、張茂炯の名前があることだ。「炯」の俗字が「烱」である。つまりここの張茂炯は、問題にしている張仲清と同一人物にほかならない。

「救劫伝」第15回には、義和団に殺害されたドイツ公使ケッテレル男爵の件に関して、醇親王がドイツまで赴いてドイツ皇帝に謝罪する模様が書き込まれる。ベルリン（柏林）が出てくるところなど、世界歴史を述べているらしい『万国演義』に関係している張茂炯（仲清）にとっては、執筆はそれほど困難なことではないと想像する。

上賢斎は、杭州にあったというから、『杭州白話報』と同じ土地であるのも、かかわりがありそうな気もする。さらに加えて「救劫伝」の発表が1901年からで、『万国演義』の出版が1903年だから、時間的に接近しているのも興味深い。

『新編清末民初小説目録』に収録された膨大な作品の中に、艮廬居士名義の作品は、わずかに「救劫伝」１作しかない。艮廬という号を持つ人物が張仲清であり、その本名張茂炯を冠した作品『万国演義』がほとんど同時期に存在しているのは、偶然の一致とは思えない。

以上の資料を総合して結論を述べる。

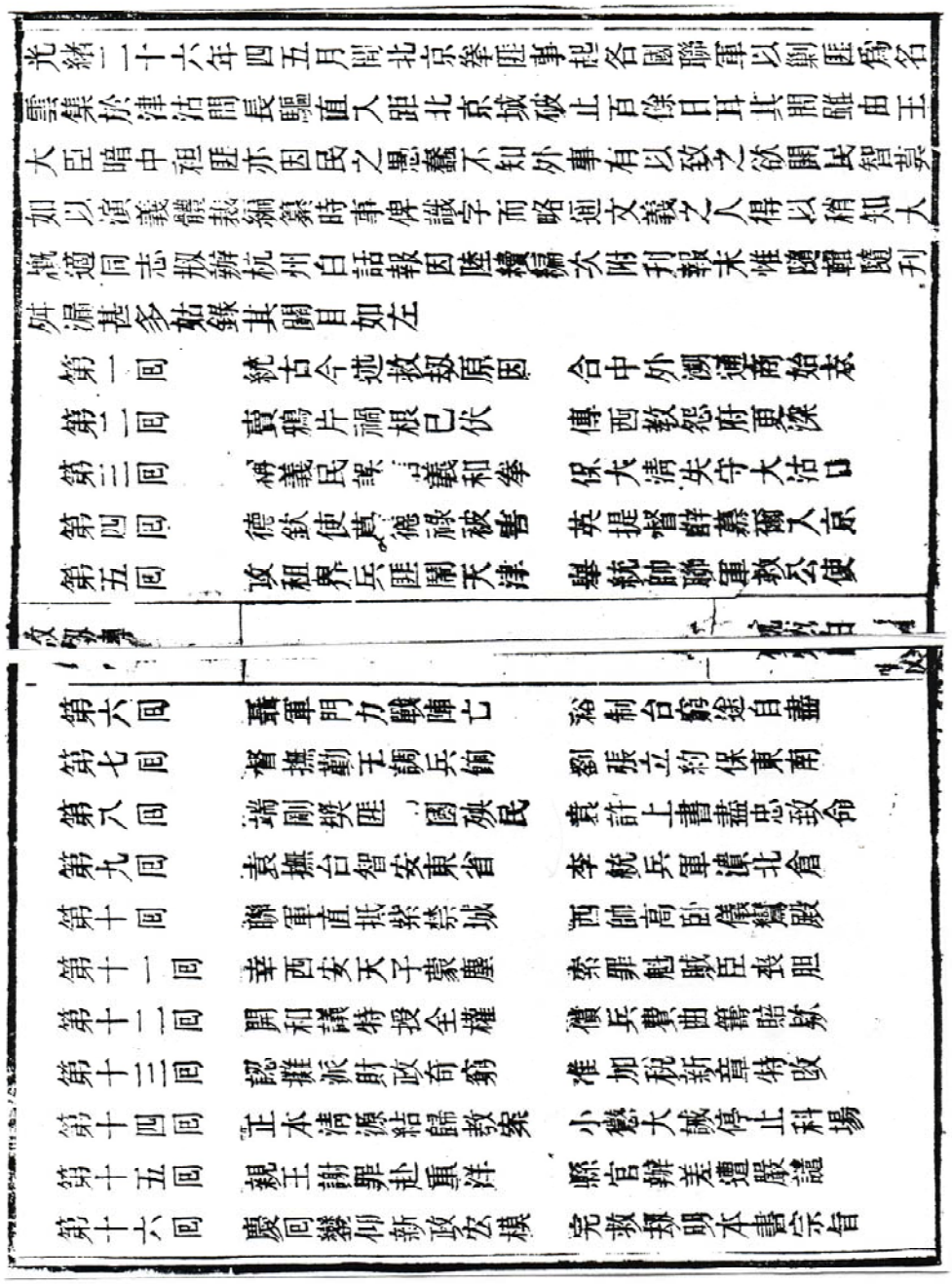
「救劫伝」の作者艮廬居士とは、胡思敬ではない。張仲清のことである。

【注】

1）謝俊美「杭州白話報」北京・中国社会科学院近代史研究所文化史研究室、丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第２集　北京・人民出版社1982.10。63-80頁

2）樽本「版本のこと――「鄰女語」を例として」『清末小説論集』所収

附：「救劫伝」第12-16回



光緒二十六年四五月間北京拳匪事起各國聯軍以剿匪爲名雲集於津沽間長驅直入距北京城破止百餘日耳其間雖由王大臣暗中袒匪亦因民之愚蠢不知外事有以致之欲開民智莫如以演義體裁編纂時事俾識字而略通文義之人得以稍知大概適同志叛辦杭州白話報因陸續編次附刊報末惟隨輯隨刊舛漏甚多姑錄其關目如左

第一回　統古今述救劫原因　合中外溯通商始末
第二回　賣鴉片禍根已伏　傳西教怨府更深
第三回　稱義民誤[illegible]義和拳　保大清失守大沽口
第四回　德欽使葛德祿被害　英提督薛慕爾入京
第五回　攻租界兵匪鬧天津　舉統帥聯軍救公使
第六回　聶軍門力戰陣亡　裕制台窮途自盡
第七回　督撫勤王調兵餉　劉張立約保東南
第八回　端剛獎匪[illegible]國殃民　袁許上書盡忠致命
第九回　袁撫台智安東省　李統兵軍潰北倉
第十回　聯軍直抵紫禁城　西帥高卧儀鸞殿
第十一回　幸西安天子蒙塵　索罪魁賊臣喪胆
第十二回　開和議特授全權　償兵費曲籌賠款
第十三回　認攤派財政奇窮　准加稅新章特改
第十四回　正本清源結歸教案　小懲大誡停止科場
第十五回　親王謝罪赴重洋　縣官辦差遭嚴譴
第十六回　慶回鑾仰新政宏模　完救劫明本書宗旨

敘目既竟復贅數言以告閱者曰中國地大物博人民四百兆雖經此番創鉅痛深安在無自强之日雖然默察事平之後其號爲良民者固然不識不知而悍愎之徒仍不改其仇恨外洋之見將來之隱患豈有量哉所望閱是編者心知其意逢人演說俾不識字之人亦曉然於拳匪之禍咎由自取非開智無以自强非自强無以弭患往歲之禍實人謀之不臧不得概委之劫數也此則演輯是編之微意也夫

劫風火起燒荒宅　苦海波深蕩破船
力小無因救焚溺　清涼山下自安禪

同人題詞

塵海茫茫劫未開憂生黃面幾輪廻憑君洒盡金人淚持向昆明證劫灰　秦關乍喜得重生燕市何人感不平依舊夕陽無限好白河官舫賽銅鉦　攘夷大義託尊王小說虞初進上方便把興亡作兒戲釣天醉夢和宮商　官家兩局錯當初閭閻誰聞慟哭餘且託彈詞和腰鼓蓋生孤憤貢生書　野史陽秋筆底分長歌當哭不堪聞願書千萬流傳本題作儒家陰騭文　桃源山人

救劫有心君義俠降魔無術我悲歌墨痕邪及淚痕漬來日難於前日多函谷驚塵屯鐵騎洛陽沽酒狎銅駝白雲變幻尋常事未過含婆可若何　太虛子

算人數不多了　足足鬧了三個月　不但這幾十萬之中　死了大半　連那各府各城各鄉村的善良百姓　也被害死了不計其數　這眞是扶清滅洋倒反興洋了　如今事到如此　俗語說放火容易救火難　又道千丈麻繩總有一個結　沒奈何只有講和的一個法子　要知和議如何　下回分解

第十二回　開和議特授全權　償兵費曲籌賠款

卻說朝廷自懲辦衆匪之後　要想同各國商量和局　當時隨駕這些大臣　能明白事理　又要平時極有聲望的　到也揀不出那一個　仔細想來　只有李傳相鴻章　老成碩望　各國也都相信他的　最爲合宜　本年義和拳匪起事的時節　他現任兩廣總督　後來洋兵攻破天津　事勢危急　朝廷便趕快調他做直隸總督　派充北洋大臣　那時已經鬧得不成事體傳相來到天津　也無從下手　只好聽候朝廷的意旨　等到京城失守　聖駕西巡的時節　曾屢次催他請各國停戰　那時各國因罪魁未經懲辦　不肯議和　及至懲辦罪魁的　上諭下來　方纔開議　列位可知這李傳相曾經出使到歐洲各國　親眼看見了他們的治國理民　實在有許多好法子　我國眞有不及他們之處　回來的時節　也同朝廷這厥大臣們說起　無奈他們總不相信　不肯將舊章改變　這傳相也沒奈何　前事不提　卻說傳相當日奉到　上諭　特派爲議和全權大臣　准其便宜行事　另外又派了一個慶親王

幫同辦理　一齊來到北京　會面之後　大家商量一個辦法　這日二人同去見聯軍統帥華德西　先講些寒暄的說話　統帥問道　貴國　皇上　能早日回京否　慶親王回答道　吾等　皇上早日回京　惟刻下難於布置　可否請貴統帥轉請各公使　早將和議條款議定　統帥道　約數日內即可照辦　慶親王道　敝國甚望如此　皇上俟和議一有頭緒　即將返蹕　統帥道　和議中國須吃虧　倘能早日歸結　吃虧處略可減少　說畢　又講些閒話　大家告辭　從這日起　又彼此商量了一個多月　纔將和約草稿議定　內中先將情節敘明　後列總綱十二條　今開載如下　教列位可以知道

第一款　原任德國葛大臣被害一事　欽派親王專使　前赴德京　代表中國　皇帝國家慚悔之意　遇害處所　樹立銘誌之碑　敘述中國　皇帝惋惜此等凶事之旨

第二款　各國駐京大臣所指出之人等　皆須照應得之罪分別輕重　盡法嚴懲　以蔽其辜　諸國人民被害及凌虐城鎮　五年之內　概不得舉行文武各考試

第三款　日本使館書記生杉山彬　中國國家　必須用優榮之典　以復日本國政府

第四款　中國國家　須在各國墳塋　曾遭汚毒發掘之處　建立銘碑　以昭滌垢雪侮之意

第五款　運進中國之軍火　及製造軍火之各種器料　照諸

國後定之律　不准運入中國

第六款　各國各會人等　及爲他國就事之中國人民　所有身家財產　中國均認公平貼補

第七款　各國常駐兵隊保衛使館　並將使館所在境界　自行防守　中國人民　概不准在界內居住

第八款　京城至海道　須留出來往暢行通道　如與其有礙之大沽炮台　一律削平

第九款　京城至海道暢通　由諸國酌定數處　備兵駐守　不使有斷絕之虞

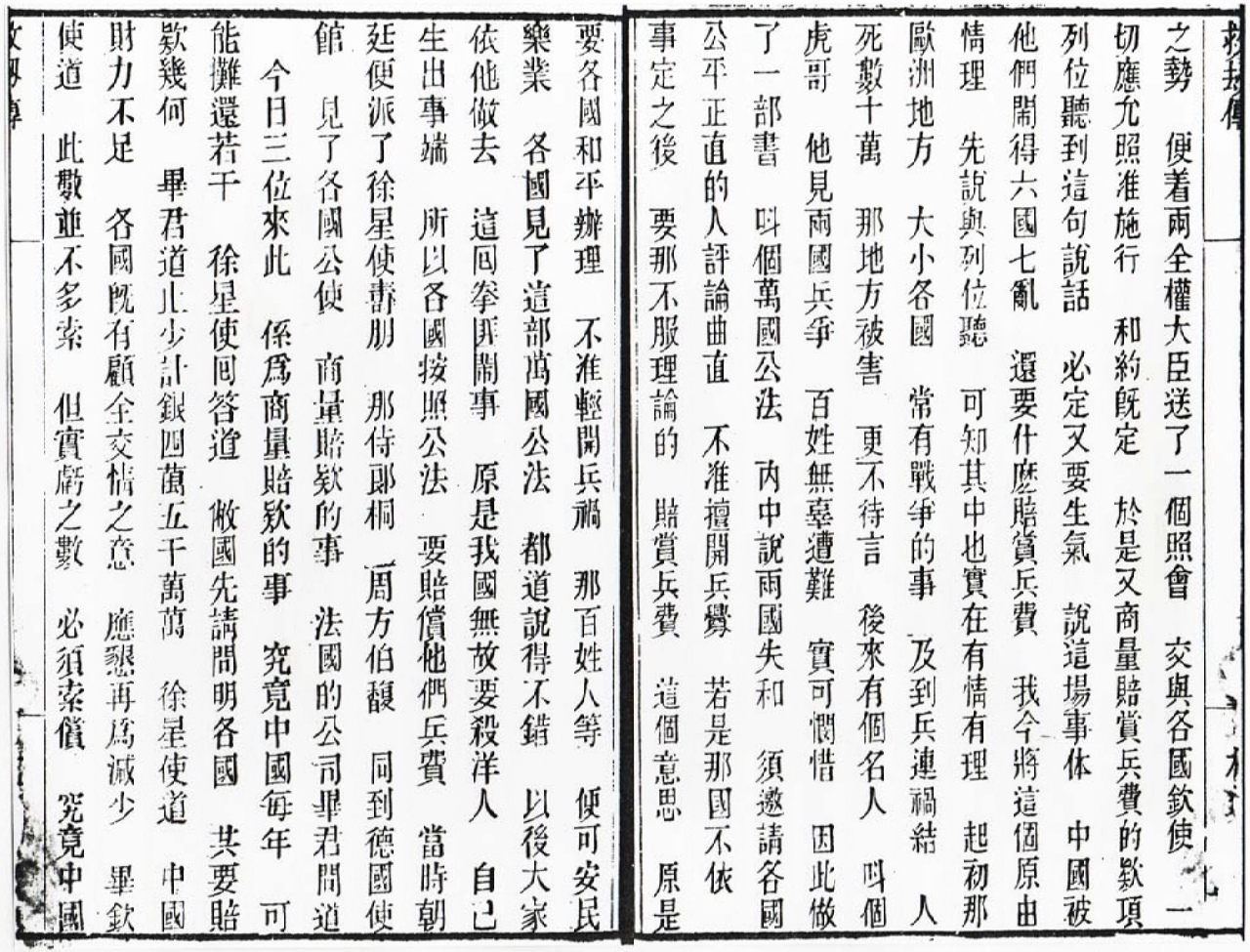
第十款　中國皇帝　須頒諭旨一道　通行布告各屬府縣州縣　永禁軍民人等　仇視諸國　違者定以死罪　各省

督撫文武官員　所屬境內　如復傷害他國人民　即行革職永不叙用　將此諭旨　張貼兩年　俾衆周知

第十一款　凡關平通商各事宜　各國以修改爲有益者　中國認與商議更改

第十二款　總理各國事務衙門　必須革故更新　諸國欽差大臣　覲見中國皇帝禮節　亦應一律更改　其如何變通之處　由諸國酌定　中國照允施行

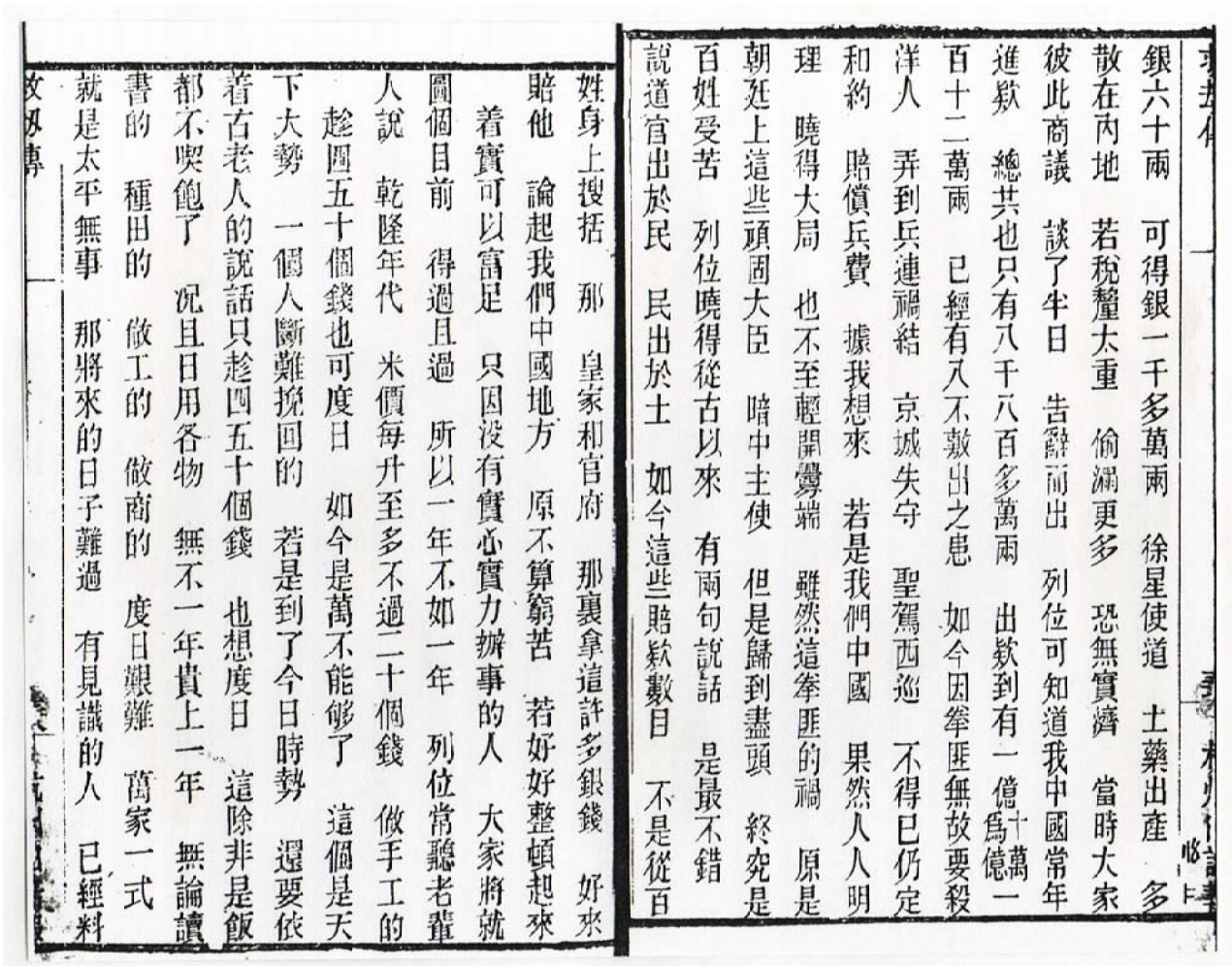
以上各款　必須中國國家照辦　方肯將京畿一帶駐紮的兵隊　指日撤退　另外再有子目幾百條　大約都是善後一切事宜　漫漫詳細酌議　當時兩全權大臣　便將這十二條大綱　電奏西安行在　皇太后　皇上看了　料知有不能不允



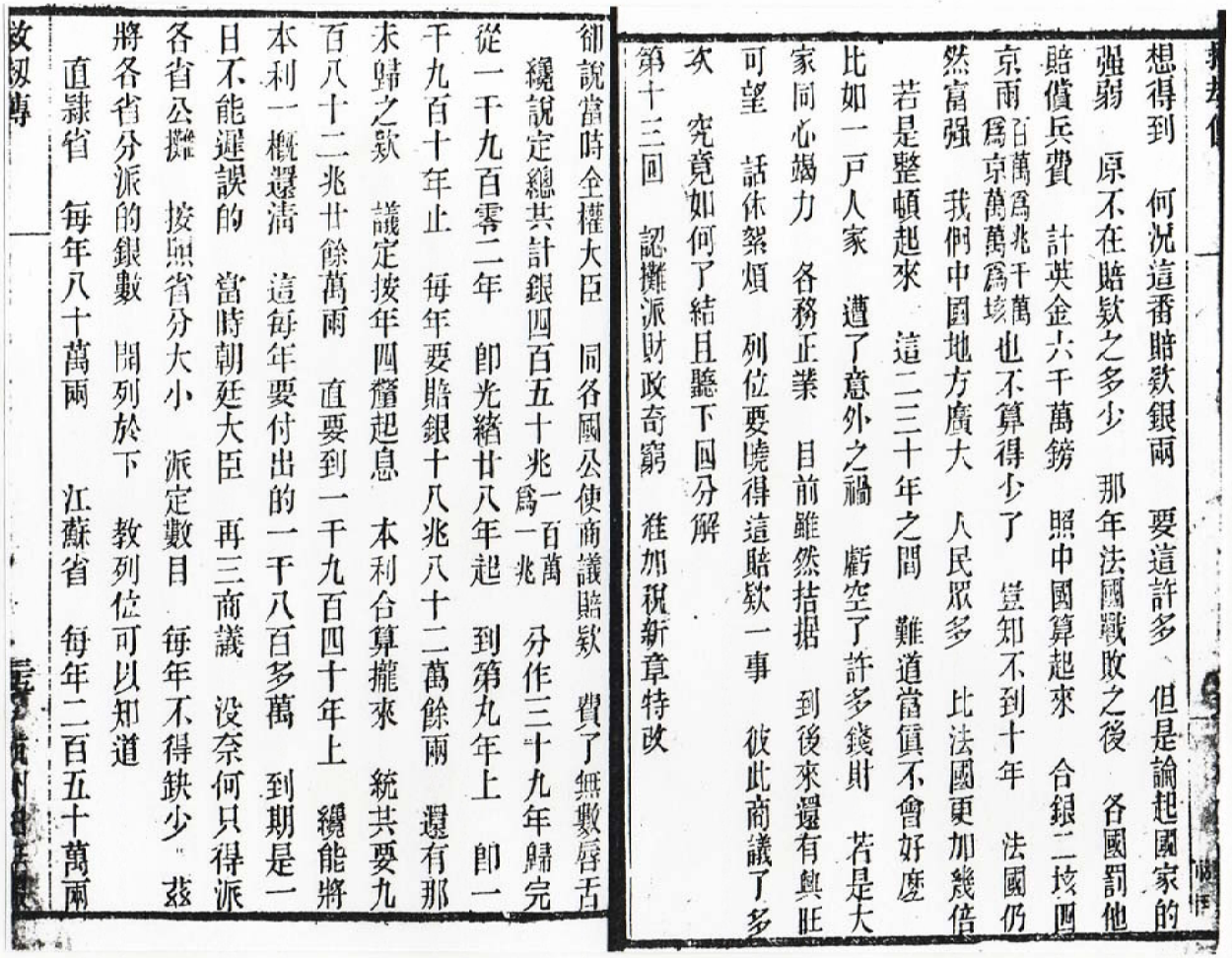
之勢　便着兩全權大臣送了一個照會　交與各國欽使一
切應允照准施行　和約既定　於是又商量賠賞兵費的款項
列位聽到這句說話　必定又要生氣　說這場事体　中國被
他們鬧得六國七亂　還要什麽賠賞兵費　我今將這個原由
情理　先說與列位聽　可知其中也實在有情有理　起初那
歐洲地方　大小各國　常有戰爭的事　及到兵連禍結　人
死數十萬　那地方被害　更不待言　後來有個名人　叫個
虎哥　他見兩國兵爭　百姓無辜遭難　實可憫惜　因此做
了一部書　叫個萬國公法　內中說兩國失和　須邀請各國
公平正直的人評論曲直　不准擅開兵釁　若是那國不依
事定之後　要那不服理論的　賠賞兵費　這個意思　原是
要各國和平辦理　不准輕開兵禍　那百姓人等　便可安民
樂業　各國見了這部萬國公法　都道說得不錯　以後大家
依他做去　這回拳匪鬧事　原是我國無故要殺洋人　自己
生出事端　所以各國按照公法　要賠償他們兵費　當時朝
廷便派了徐星使書朋　那侍郎桐　周方伯馥　同到德國使
館　見了各國公使　商量賠款的事　法國的公司畢君問道
今日三位來此　係爲商量賠款的事　究竟中國每年　可
能攤還若干　徐星使回答道　敝國先請問明各國　共要賠
款幾何　畢君道止少計銀四萬五千萬萬　徐星使道　中國
財力不足　各國既有顧全交情之意　應懇再爲減少　畢欽
使道　此數並不多索　但實虧之數　必須索償　究竟中國

有若干欵項　可以作抵　徐星使道　中國近年庫帑　又不敷出　各位諒已盡知　我想若能將海關進口各貨　酌議加稅　則於賠欵大有裨益　畢欽使道　我等亦曾議及　似屬可行　計加稅以後　中國每年可多得銀一千萬兩以上　如今中國常關稅　每年共得銀若干　徐星使道　如交稅務司徵收　每年約可得銀四五百萬兩　畢欽使道　洋貨進口加稅　及常關稅　歸稅務司代征作抵　我等皆以爲然　但所差之數尚多　徐星使道　請問各國之意　究意可緩至若干年攤還　畢欽使道　攤還年分　暫且慢說　須考究再有何欵可以作抵　閒中國鹽課爲大宗入欵　每年究有若干　徐星使道　鹽課鹽釐　每年收數　共約一千三百萬兩　但我

中國有若干應用要欵　皆取結於此　只可內中勻出四百萬兩作抵　畢欽使道　聞中國漕糧　約每年一百二三十萬石　若改辦折收現銀　必可多餘幾百萬　徐星使道　改折甚難　百姓交米　往往撓水攙土　藉以取巧　倘一律改折現銀　百姓吃虧　必多怨望　此亦非善策也　畢欽使道　閒裁減旂餉　每年可省若干　徐星使道　此難預定確數　總之每年應攤還若干　除鹽課常稅　及洋貨加稅外　不敷之數　由中國設法解足可矣　畢欽使便問道　每年究竟能攤還若干　徐星使道　至多一千五百萬兩　畢欽使拿洋筆仔細一算　說道　如此須要六十年　爲期太遠了　當時英國的欽使·在旁說道　閒土藥比洋藥　多至三倍　如每担加



銀六十兩　可得銀一千多萬兩　徐星使道　土藥出產　多
散在內地　若稅釐太重　偷漏更多　恐無實濟　當時大家
彼此商議　談了半日　告辭而出　列位可知道我中國常年
進款　總共也只有八千八百多萬兩　出款到有一億十萬爲億一
百十二萬兩　已經有入不敷出之患　如今因拳匪無故要殺
洋人　弄到兵連禍結　京城失守　聖駕西巡　不得已仍定
和約　賠償兵費　據我想來　若是我們中國　果然人人明
理　曉得大局　也不至輕開釁端　雖然這拳匪的禍　原是
朝廷上這些頑固大臣　暗中主使　但是歸到盡頭　終究是
百姓受苦　列位曉得從古以來　有兩句說話　是最不錯
說道官出於民　民出於土　如今這些賠款數目　不是從百
姓身上搜括　那　皇家和官府　那裏拿這許多銀錢　好來
賠他　論起我們中國地方　原不算窮苦　若好好整頓起來
着實可以富足　只因沒有實心實力辦事的人　大家將就
圖個目前　得過且過　所以一年不如一年　列位常聽老輩
人說　乾隆年代　米價每升至多不過二十個錢　做手工的
趁國五十個錢也可度日　如今是萬不能够了　這個是天
下大勢　一個人斷難挽回的　若是到了今日時勢　還要依
着古老人的說話只趁四五十個錢　也想度日　這除非是飯
都不喫飽了　況且日用各物　無不一年貴上一年　無論讀
書的　種田的　做工的　做商的　度日艱難　萬家一式
就是太平無事　那將來的日子難過　有見識的人　已經料

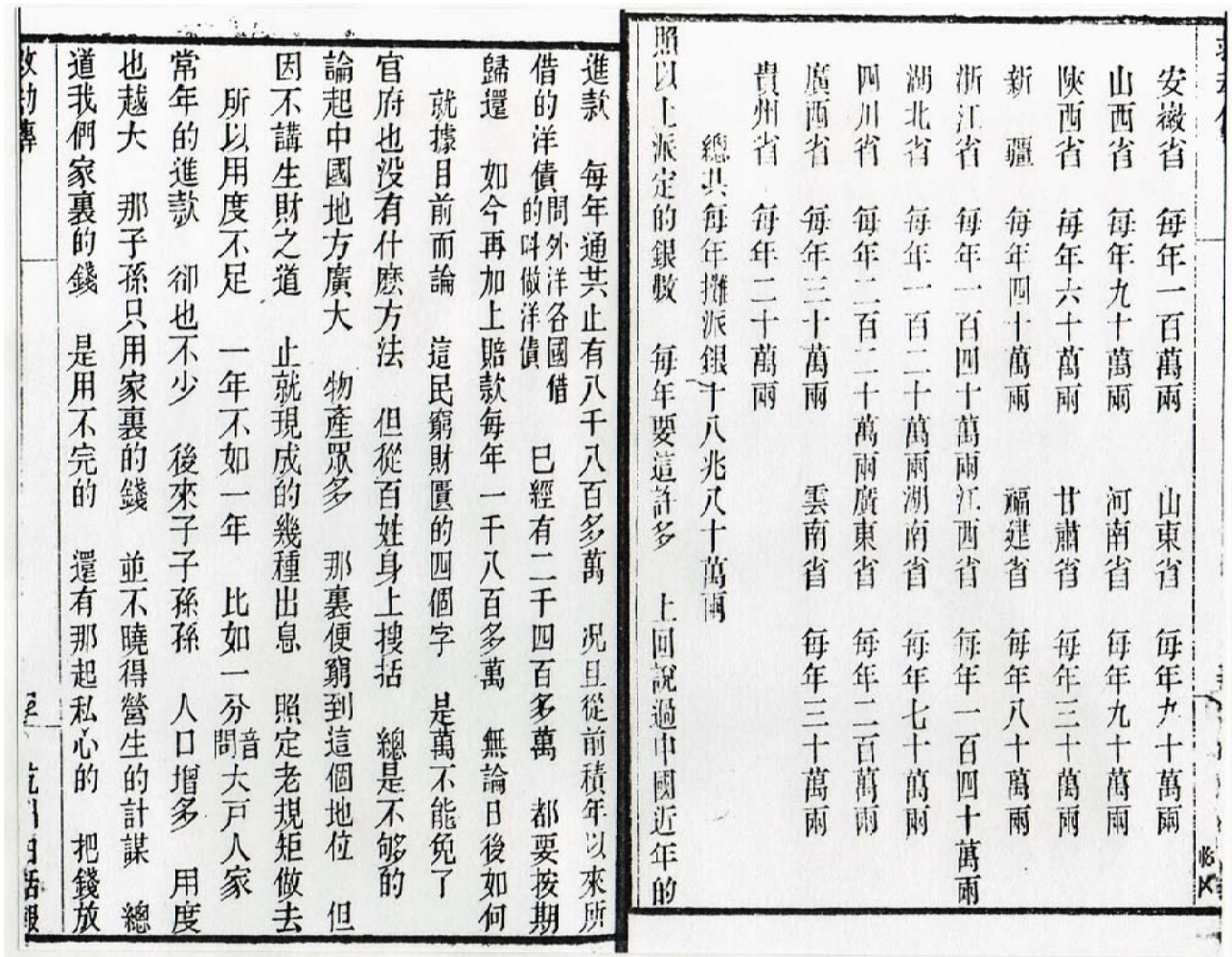


想得到　何況這番賠款銀兩　要這許多　但是論起國家的
強弱　原不在賠款之多少　那年法國戰敗之後　各國罰他
賠償兵費　計共金六千萬鎊　照中國算起來　合銀二垓四
京兩（百萬爲兆千萬　也不算得少了　豈知不到十年　法國仍
爲京萬萬爲垓）　我們中國地方廣大　人民衆多　比法國更加幾倍
若是整頓起來　這二三十年之間　難道當眞不會好麼
比如一戶人家　遭了意外之禍　虧空了許多錢財　若是大
家同心竭力　各務正業　目前雖然拮据　到後來還有興旺
可望　話休絮煩　列位要曉得這賠款一事　彼此商議了多
次　究竟如何了結且聽下回分解

第十三回　認攤派財政奇窮　雅加稅新章特改

卻說當時全權大臣　同各國公使商議賠款　費了無數唇舌
纔說定總共計銀四百五十兆（一百萬爲一兆）　分作三十九年歸完
從一千九百零二年　即光緒廿八年起　到第九年上　即一
千九百十年止　每年要賠銀十八兆八十二萬餘兩　還有那
未歸之款　議定按年四釐起息　本利合算攏來　統共要九
百八十二兆廿餘萬兩　直要到一千九百四十年上　纔能將
本利一概還清　這每年要付出的一千八百多萬　到期是一
日不能遲誤的　當時朝廷大臣　再三商議　沒奈何只得派
各省公攤　按照省分大小　派定數目　每年不得缺少　茲
將各省分派的銀數　開列於下　教列位可以知道

直隸省　每年八十萬兩　江蘇省　每年二百五十萬兩



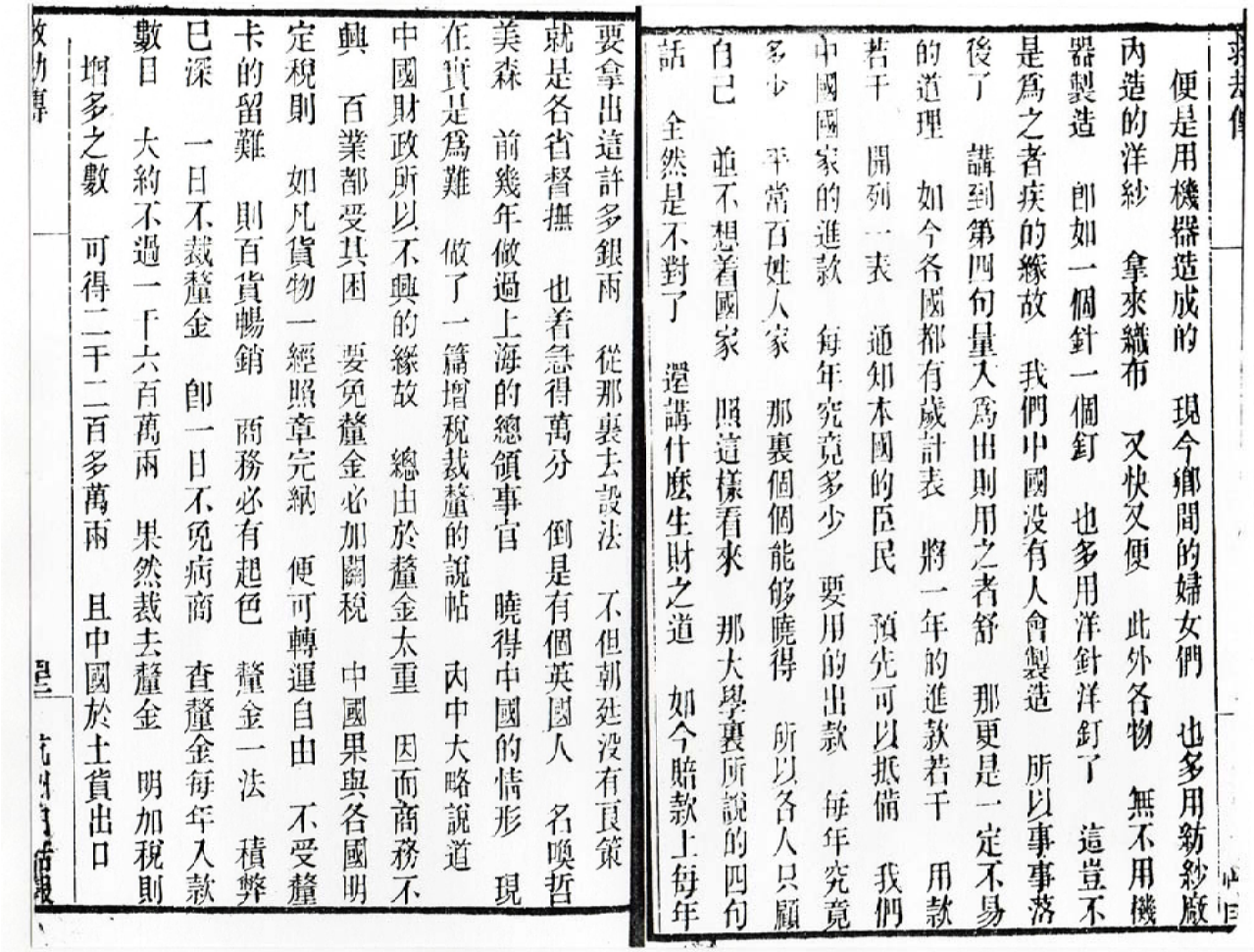
安徽省　每年一百萬兩　山東省　每年九十萬兩
山西省　每年九十萬兩　河南省　每年九十萬兩
陝西省　每年六十萬兩　甘肅省　每年三十萬兩
新　疆　每年四十萬兩　福建省　每年八十萬兩
浙江省　每年一百四十萬兩江西省　每年一百四十萬兩
湖北省　每年一百二十萬兩湖南省　每年七十萬兩
四川省　每年二百二十萬兩廣東省　每年二百萬兩
廣西省　每年三十萬兩　雲南省　每年三十萬兩
貴州省　每年二十萬兩

總共每年攤派銀十八兆八十萬兩

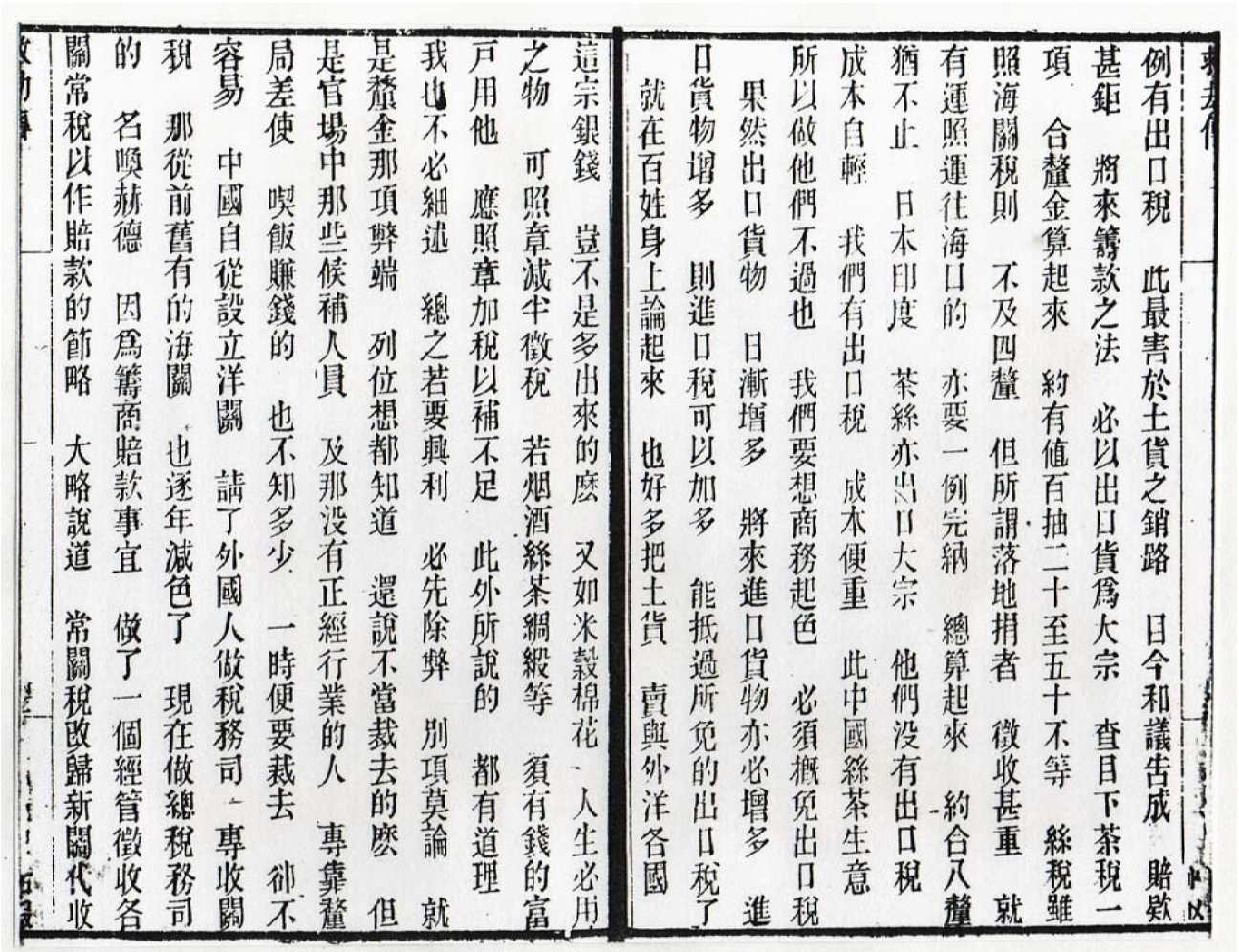
照以上派定的銀數　每年要這許多　上回說過中國近年的進款　每年通共止有八千八百多萬　況且從前積年以來所借的洋債　問外洋各國借的叫做洋債　已經有二千四百多萬　都要按期歸還　如今再加上賠款每年一千八百多萬　無論日後如何就據目前而論　這民窮財匱的四個字　是萬不能免了　官府也沒有什麽方法　但從百姓身上搜括　總是不夠的　論起中國地方廣大　物產眾多　那裏便窮到這個地位　但因不講生財之道　止就現成的幾種出息　照定老規矩做去　所以用度不足　一年不如一年　比如一分音問大戶人家　常年的進款　卻也不少　後來子子孫孫　人口增多　用度也越大　那子孫只用家裏的錢　並不曉得營生的計謀　總道我們家裏的錢　是用不完的　還有那起私心的　把錢放

在自己腰裏　口裏卻妝窮做啞　一個錢也不肯拿出來做些
正經事業　因此外場門戶　雖然好看　到後來總一年不如
一年了　列位有讀過大學的　那大學中說的好　說道生財
有大道　生之者眾　食之者寡　爲之者疾　用之者舒　則
財恆足矣　這幾句話　無論古今中外　總是一個道理　列
位倘然不解　我就說個大略　列位便可知道了　那頭一句
生之者眾　便是說生財的人　國內眾多　照小註說國無游
民則生者眾矣　如今中國地方　統共算來有四萬萬人　失
業的游民　各處都有　此等人士不算士　農不成農　工不
爲工　商不能商　俗語叫做吃空手飯　地方官長　也沒有
一個法子　可以禁止他　這生之者眾一句　已經不能夠依

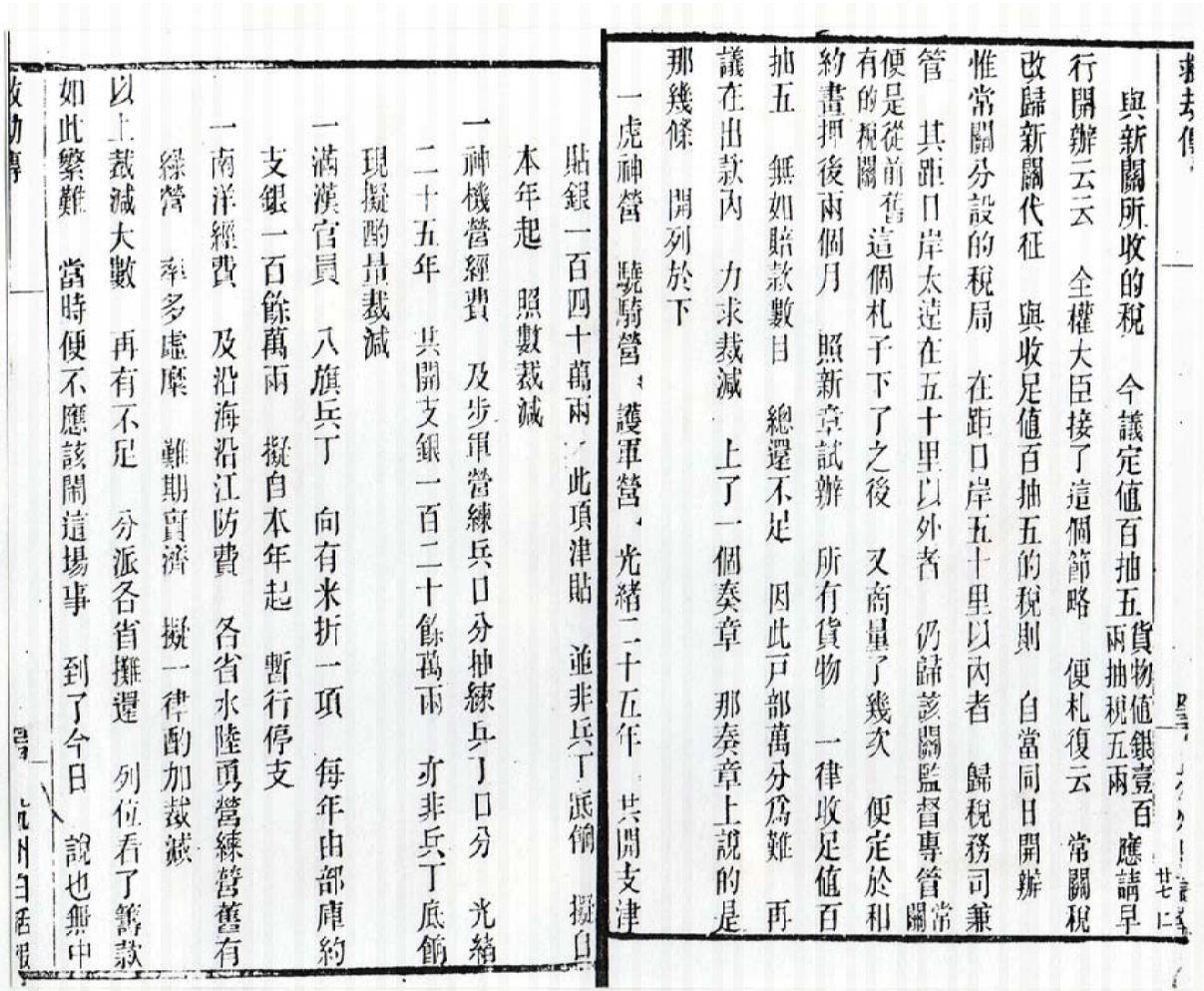
他了　第二句食之者寡　便是說用財的人　比生財的人數
要少　照小註說朝無倖位則食者寡矣　列位曉得何以叫做
倖位　便是那無功食祿的人　如今不但做官的　有好些無
功食祿　連他的親眷朋友　世交故舊　但講了些情面　挖
了些手腳　便得了好差使　好位置　這等人好穿好喫　比
現任做官的　還要濶綽　這豈不是倖位麽　至於第三句爲
之者疾　疾便是快速的意思　我們中國無論何業　都要用
手去做　從沒有講機器製造的法子　比如畊田織布這兩件
事　從古以來　都用人力　不料如今外國人　造出了機器
耕田本來用牛的　如今用馬力　且用火輪的汽機力　比
用人力要快速十倍　織布也用機器　列位身上所穿的洋布



便是用機器造成的　現今鄉間的婦女們　也多用紡紗廠內造的洋紗　拿來織布　又快又便　此外各物　無不用機器製造　即如一個針一個釘　也多用洋針洋釘了　這豈不是爲之者疾的緣故　我們中國沒有人會製造　所以事事落後了　講到第四句量入爲出則用之者舒　那更是一定不易的道理　如今各國都有歲計表　將一年的進款若干　用款若干　開列一表　通知本國的臣民　預先可以抵備　我們中國國家的進款　每年究竟多少　要用的出款　每年究竟多少　平常百姓人家　那裏個個能够曉得　所以各人只顧自己　並不想着國家　照這樣看來　那大學裏所說的四句話　全然是不對了　還講什麽生財之道　如今賠款上每年要拿出這許多銀兩　從那裏去設法　不但朝廷沒有良策就是各省督撫　也着急得萬分　倒是有個英國人　名喚哲美森　前幾年做過上海的總領事官　曉得中國的情形　現在實是爲難　做了一篇增稅裁釐的說帖　內中大略說道中國財政所以不興的緣故　總由於釐金太重　因而商務不興　百業都受其困　要免釐金必加關稅　中國果與各國明定稅則　如凡貨物一經照章完納　便可轉運自由　不受釐卡的留難　則百貨暢銷　商務必有起色　釐金一法　積弊已深　一日不裁釐金　即一日不免病商　查釐金每年入款數目　大約不過一千六百萬兩　果然裁去釐金　明加稅則增多之數　可得二千二百多萬兩　且中國於土貨出口



例有出口稅　此最害於土貨之銷路　日今和議告成　賠款甚鉅　將來籌款之法　必以出口貨爲大宗　查目下茶稅一項　合釐金算起來　約有値百抽二十至五十不等　絲稅雖照海關稅則　不及四釐　但所謂落地捐者　徵收甚重　就有運照運往海口的　亦要一例完納　總算起來　約合八釐猶不止　日本印度　茶絲亦出口大宗　他們沒有出口稅成本自輕　我們有出口稅　成本便重　此中國絲茶生意所以做他們不過也　我們要想商務起色　必須概免出口稅果然出口貨物　日漸增多　將來進口貨物亦必增多　進口貨物增多　則進口稅可以加多　能抵過所免的出口稅了就在百姓身上論起來　也好多把土貨　賣與外洋各國這宗銀錢　豈不是多出來的麽　又如米穀棉花一人生必用之物　可照章減半徵稅　若烟酒絲茶綢緞等　須有錢的富戶用他　應照章加稅以補不足　此外所說的　都有道理我也不必細述　總之若要興利　必先除弊　別項莫論　就是釐金那項弊端　列位想都知道　還說不當裁去的麽　但是官場中那些候補人員　及那沒有正經行業的人　專靠釐局差使　喫飯賺錢的　也不知多少　一時便要裁去　卻不容易　中國自從設立洋關　請了外國人做稅務司　專收關稅　那從前舊有的海關　也逐年減色了　現在做總稅務司的　名喚赫德　因爲籌商賠款事宜　做了一個經管徵收各關常稅以作賠款的節略　大略說道　常關稅改歸新關代收



救劫傳　廿七

與新關所收的稅　今議定值百抽五貨物值銀壹百應請早兩抽稅五兩行開辦云云　全權大臣接了這個節略　便札復云　常關稅改歸新關代征　與收足值百抽五的稅則　自當同日開辦惟常關分設的稅局　在距口岸五十里以內者　歸稅務司兼管　其距口岸太遠在五十里以外者　仍歸該關監督專管常關便是從前舊有的稅關　這個札子下了之後　又商量了幾次　便定於和約畫押後兩個月　照新章試辦　所有貨物　一律收足值百抽五　無如賠款數目　總還不足　因此戶部萬分爲難　再議在出款內　力求裁減　上了一個奏章　那奏章上說的是那幾條　開列於下

一虎神營　驍騎營、護軍營、光緒二十五年　共開支津貼銀一百四十萬兩、此項津貼　並非兵丁底餉　擬自本年起　照數裁減

一神機營經費　及步軍營練兵口分神練兵丁口分　光緒二十五年　共開支銀一百二十餘萬兩　亦非兵丁底餉現擬酌量裁減

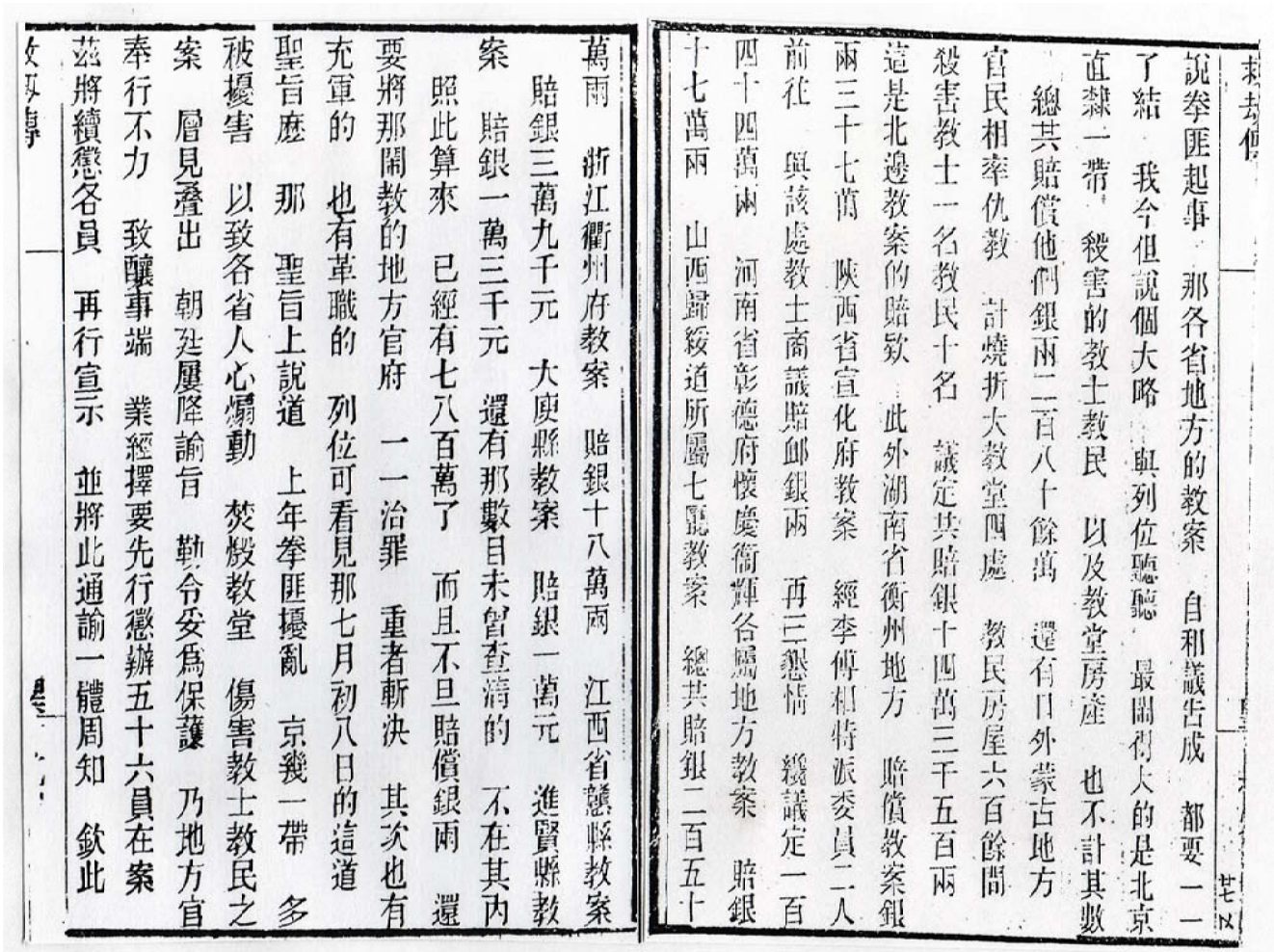
一滿漢官員　八旗兵丁　向有米折一項　每年由部庫約支銀一百餘萬兩　擬自本年起　暫行停支

一南洋經費　及沿海沿江防費　各省水陸勇營練營舊有綠營　率多虛糜　難期實濟　擬一律酌加裁減

以上裁減大數　再有不足　分派各省攤還　列位看了籌款如此繁難　當時便不應該開這場事　到了今日　說也無中

救劫傳　廿七

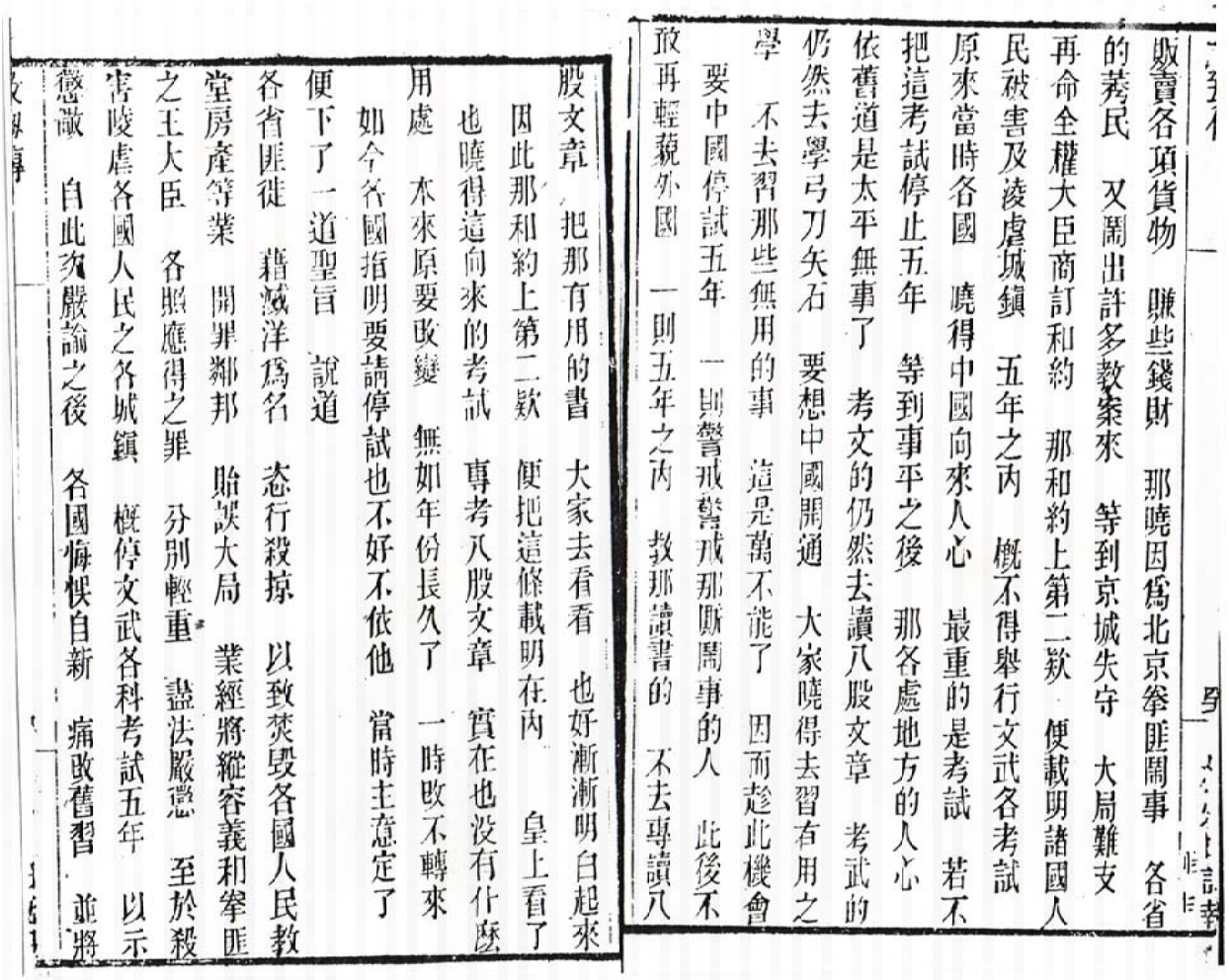
用了　還有一樁未了的事　我再慢慢說個詳細便了
第十四回　正本清源結歸教案　小懲大誡停止科場
御說自從定了和約　賠償兵費銀四百五十兆　再加利銀總
共九百八十二兆廿三萬餘兩　分作三十九年攤還　當時全
權大臣慶親王　同李傅相　奏報朝廷　都依允了　便大家
畫了押　各國纔肯約日退兵　還有那各省的城鄉市鎭　當
時殺害外國來傳教的教士　及本地皈教的教民　并將教堂
焚毀　這起案件　頭緒紛繁　最鬧得大的　是北京直隸一
帶　此外如湖南　陝西　江西　河南　山西　浙江等省地
方　都有鬧教的案件　論起傳教的事　中國人心　本來是
不服的　但是當初所定的通商條約上　原載明有保護教堂
及教士的身家產業　朝廷既經准他傳教　自然應該大家
和好　那曉拳匪要扶清滅洋　見着外國人　不問皂白　一
概亂殺　又因這厮無賴的窮民　借鬧教爲名　任意搶掠
因而有這場大禍　列位可曉得他們外國人　也有說傳教的
事　容易肇禍　總要商量一個善策　前幾年有個英國的名
人　叫做宓克　他做了一部書　叫做支那教案論（外國人稱中國叫支那）
書中說天主教的教士　不願法國的國家　用兵力來保
護　因爲傳教是勸人爲善　總要人心自服　纔不鬧出事來
這部書說得道理明白公正　教人看了　自然心平氣和
可惜文理深奧　隨常人有些看不懂　若是大家明白了道理
那鬧教的案件　自然也不會如此之多了　這且不表　單



說拳匪起事　那各省地方的教案　自和議告成　都要一一了結　我今但說個大略　與列位聽聽　最鬧得大的是北京直隸一帶　殺害的教士教民　以及教堂房產　也不計其數　總共賠償他們銀兩二百八十餘萬　還有日外蒙古地方官民相率仇教　計燒拆大教堂四處　教民房屋六百餘間　殺害教士一名教民十名　議定共賠銀十四萬三千五百兩　這是北邊教案的賠款　此外湖南省衡州地方　賠償教案銀兩三十七萬　陝西省宣化府教案　經李傅相特派委員二人前往　與該處教士商議賠卹銀兩　再三懇情　纔議定一百四十四萬兩　河南省彰德府懷慶衛輝各屬地方教案　賠銀十七萬兩　山西歸綏道所屬七廳教案　總共賠銀二百五十萬兩　浙江衢州府教案　賠銀十八萬兩　江西省饒縣教案　賠銀三萬九千元　大庾縣教案　賠銀一萬元　進賢縣教案　賠銀一萬三千元　還有那數目未曾查清的　不在其內照此算來　已經有七八百萬了　而且不旦賠償銀兩　還要將那鬧教的地方官府　一一治罪　重者斬決　其次也有充軍的　也有革職的　列位可看見那七月初八日的這道聖旨麼　那　聖旨上說道　上年拳匪擾亂　京畿一帶　多被擾害　以致各省人心煽動　焚燬教堂　傷害教士教民之案　層見疊出　朝廷屢降諭旨　勒令妥爲保護　乃地方官奉行不力　致釀事端　業經擇要先行懲辦五十六員在案　茲將續懲各員　再行宣示　並將此通諭一體周知　欽此

這道　聖旨內　計定爲斬監候罪名者十餘人　革職發往極邊充軍　永不釋回者二十餘人　革職永不叙用　革職留任者又數十人　內中道府州縣都有　還有那已經死故　追奪官爵的　可見做官也要明白道理　曉得時勢　不能胡亂做去的了　若是平常時節　開導百姓　教他們也曉得時勢　那地方上便好了　無如有些做官的　專爲賺錢　巴結上司　欺壓百姓　還講什麽開導　這個緣故　總因那斷做官的　都是從做八股文章出身　得了科名　便好做官　他於世務上　原是隔膜　列位要曉得我們中國　雖有四萬萬人　那識字明理的　眞正無幾　婦女們果然莫論　那男子漢凡是種田的　做工的　許多人中　能有幾個識字　就是生意

場中　雖然也有很通文理的　但於國家大局　都不甚留意　這也莫去怪他　最可怪者　是讀書場中人　專門學會了做文章　做詩賦　有的下筆千言　有的滿口然而所以　一心想望中舉人、中進士　今年歲考　明年鄉試　後年會試　那命運湊上的　做了官　賺些銀錢　封妻蔭子　榮耀鄉里　便算是他一世的正經大事了　那湊不上的　窮途潦倒　一些事務也不會做　這等人名爲讀書　其實是天下最無用的人　總歸是把這幾篇八股文章害死了　但是中國的人心　無論讀書不讀書　都看得科名二字　是極重的　所以每到科場年分　那赴考求科名的　個個歡天喜地　趾高氣揚　滿心想望高中　就是那做生意的人　也好趁着考市



販賣各項貨物　賺些錢財　那曉因爲北京拳匪鬧事　各省的莠民　又鬧出許多教案來　等到京城失守　大局難支　再命全權大臣商訂和約　那和約上第二款　便載明諸國人民被害及淩虐城鎮　五年之內　概不得舉行文武各考試　原來當時各國　曉得中國向來人心　最重的是考試　若不把這考試停止五年　等到事平之後　那各處地方的人心　依舊道是太平無事了　考文的仍然去讀八股文章　考武的仍然去學弓刀矢石　要想中國開通　大家曉得去習有用之學　不去習那些無用的事　這是萬不能了　因而趁此機會　要中國停試五年　一則警戒警戒那賦鬧事的人　此後不敢再輕藐外國　一則五年之內　教那讀書的　不去專讀八股文章　把那有用的書　大家去看看　也好漸漸明白起來　因此那和約上第二款　便把這條載明在內　皇上看了也曉得這向來的考試　專考八股文章　實在也沒有什麼用處　本來原要改變　無如年份長久了　一時改不轉來　如今各國指明要請停試也不好不依他　當時主意定了　便下了一道聖旨　說道

各省匪徒　藉滅洋爲名　恣行殺掠　以致焚毀各國人民教堂房產等業　開罪鄰邦　貽誤大局　業經將縱容義和拳匪之王大臣　各照應得之罪　分別輕重　盡法嚴懲　至於殺害陵虐各國人民之各城鎮　概停文武各科考試五年　以示懲儆　自此次嚴諭之後　各國悔悞自新　痛改舊習　並將

此次諭旨　刊刻謄黃　徧行張貼　務使家喻戶曉　勉爲善良　以無負朝廷諄諄告戒之至意　將此通諭知之　欽此

道道　聖旨下來之後　那各省督撫　便將開教的各府州縣查明　一律停止考試　那開首的　便是北京直隸順天府　保定府　永清府　天津府　順德府　河間府　滄州　通州　冀州　遵化州　景州　獲鹿縣　永安縣　朝陽縣　東安縣　武邑縣　灤平縣　望都縣　張家口

其次山西　太原府　忻州　太谷縣　大同府　汾州府　孝義縣　曲沃縣　大甯縣　河津縣　岳陽縣　潮平縣　文水縣　壽陽縣　平陽縣　長子縣　高平縣　澤州府　隰州　蒲縣　絳縣　平遙縣　潞城縣　潞安府　洪洞縣　歸化城　綏遠城

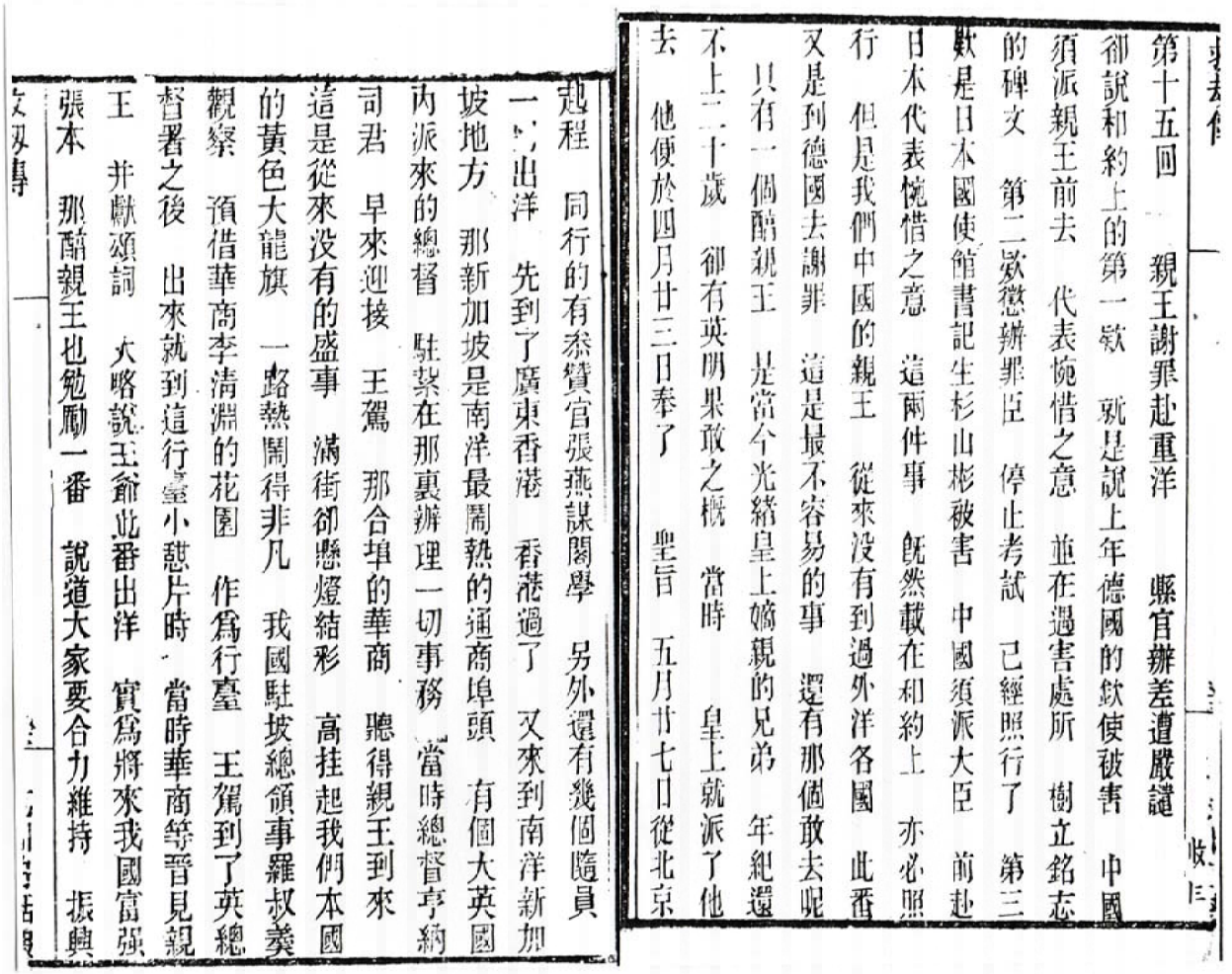
其次河南　南陽府　河內縣　鄭州　光州　陳州府　濬縣　彰德府　太康縣　襄城縣　西華縣

其次山東　泰安府　湖南　衡州府清泉縣　江西　鄱陽縣　陝西　甯羌州　浙江衢州府　東三省　盛京　甲子廠　連山　于慶街　北林子　呼蘭城

以上所開的省分各府州縣　均須停試　還有那未曾查明的　後來查出之後　也陸續添上　止有廣東　廣西　甘肅　雲南　貴州　這五省還沒有開教的事　本年仍復舉行鄉試　其餘一概停止　列位說起這番停試之事　必道是因洋人迫脅　娶我如此　不得不依　其實這考試的事　原是無憑

面子上是說爲國求賢　掄才大典　那裏曉得這考試的流弊　曾經多少名人說過　就在南宋朝代的時節　已經是壞了　所以當時那個朱夫子　要興學校　他說國家若是要得人才　先要把這科舉　停止三十年　纔有人才可用　列位想朱夫子的話　難道是錯的　他要興學校　便是同現在的辦學堂　大略相同　不過要人人都講究實學　不要專在科名上用心　如今讀書的人　除了科名　還有什麼實在有用的學問　所以一聽得停止考試　人人驚惶的了不得　便道沒有發達的日子了　列位試想　難道從古以來這許多建功立業的人　都是從舉人進士出身的麼　我勸如今讀書的人只要去留心有用的學問　學問好了　國家自有用着我的

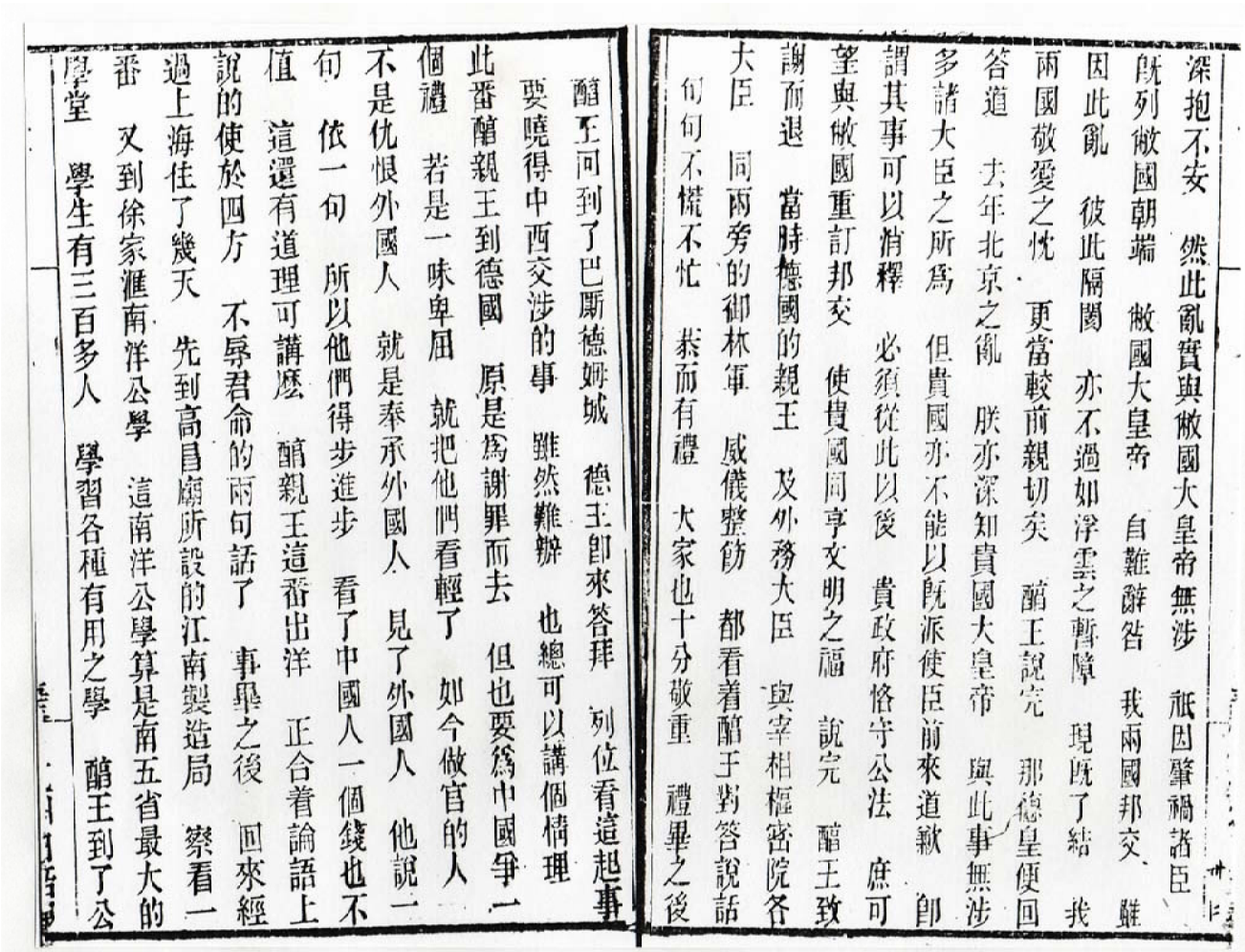
日子　若是學問沒有　莫說五年　就是十年也不爲遲　皇上將各省停止考試的意思　原是要從今以後　讀書的人個個去講究實在有用的學問　爲將來中國自强之基　這個意思　你們相信得過嗎　今且按下不提　卻說當時和議已成　罪魁照辦　賠款的數目　已經說定　各處的教案已經完結　大家想請　皇太后　皇上回鑾　但是回鑾這件事　談何容易　不比百姓人家　逃難出去　等時勢太平　就好搬回家鄉　一些兒也不費事　那皇家的體統向來是講究濶綽的　況且在西安的文武百官　多少人扈衛難道就是格容易動身　我今先把和約上的第一款　同第三款　說明白了　再說回鑾的事　教列位好慢慢聽來



第十五回　親王謝罪赴重洋　縣官辦差遭嚴譴

卻說和約上的第一款　就是說上年德國的欽使被害　中國須派親王前去　代表惋惜之意　並在遇害處所　樹立銘志的碑文　第二款懲辦罪臣　停止考試　已經照行了　第三款是日本國使館書記生杉山彬被害　中國須派大臣　前赴日本代表惋惜之意　這兩件事　既然載在和約上　亦必照行　但是我們中國的親王　從來沒有到過外洋各國　此番又是到德國去謝罪　這是最不容易的事　還有那個敢去呢　只有一個醇親王　是當今光緒皇上嫡親的兄弟　年紀還不上二十歲　卻有英明果敢之概　當時　皇上就派了他去　他便於四月廿三日奉了　聖旨　五月廿七日從北京起程　同行的有參贊官張燕謀閣學　另外還有幾個隨員一共出洋　先到了廣東香港　香港過了　又來到南洋新加坡地方　那新加坡是南洋最鬧熱的通商埠頭　有個大英國內派來的總督　駐紮在那裏辦理一切事務　當時總督亭約司君　早來迎接　王駕　那合埠的華商　聽得親王到來　這是從來沒有的盛事　滿街卻懸燈結彩　高挂起我們本國的黃色大龍旗　一路熱鬧得非凡　我國駐坡總領事羅叔羲觀察　預借華商李清淵的花園　作爲行臺　王駕到了英總督署之後　出來就到這行臺小憩片時　當時華商等晉見親王　并獻頌詞　大略說王爺此番出洋　實爲將來我國富强張本　那醇親王也勉勵一番　說道大家要合力維持　振興

商務說得詞氣極其和　並沒有一毫驕貴的模樣　那些華商　無不人人喜悅　個個稱揚　到第二日　仍坐拜恩輪船　八點鐘開行　大家都奏樂相送　離新加坡過去　那西便是檳榔嶼　也算一個大埠　王駕便登岸拜會坡督　沿路迎送的熱鬧　同新加坡一式　過了檳榔嶼　便望科倫布進發　話分兩頭　卻說德國的京城　叫做柏林　另外有個巴斯德姆城　城裏有座奧林哲利宮　德王原想醞親王到德國的時候　先住在巴斯德姆城的奧林哲利宮　隨後派馬兵一隊　到巴斯德姆城前來迎接醞王　同到柏林相會　後來聽得醞王到了瑞士國的巴斯利城　忽然有起病來　不能起程　列位試猜猜看　這個緣故　到底爲何　原來德皇因爲此番醞王到德京　本爲謝罪而來　故意定了一個禮節　要醞王見他的時候　同見我們中國自己的　皇上一樣　行個跪拜之禮　列位可知道論起中國的禮　臣子見皇帝　原是要跪拜的　但是同治年間　因爲他們各國公使　不肯行拜跪之禮　所以定了一個約章　以後我們中國使臣到外洋　也不行跪拜之禮　大家一樣　纔是公平　既然有了這個約章　難道可以不算麼　當時醞親王因爲這個緣故　所以假說有病　不肯就到德國去見德皇　後來德王曉得自己太僭禮了　就把這個禮節改過　醞親王便到巴斯德姆城　德皇亦來迎接　同到巴斯德姆城的旁邊有個紅石列斯宮　彼此相見　呈遞國書　醞王說道　敝國大皇帝　因去年拳匪之亂



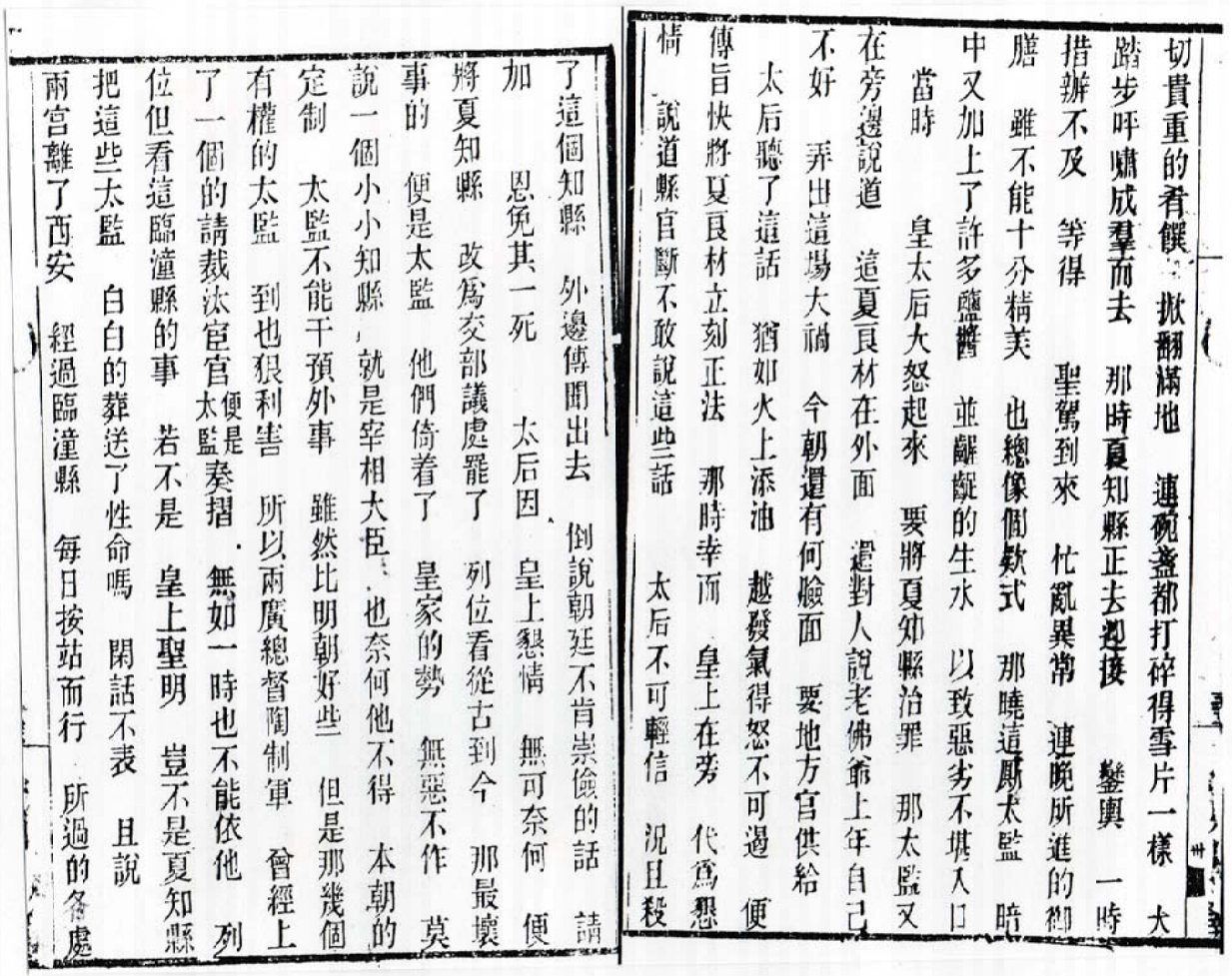
深抱不安　然此亂實與敝國大皇帝無涉　祇因肇禍諸臣
既列敝國朝端　敝國大皇帝　自難辭咎　我兩國邦交　雖
因此亂　彼此隔閡　亦不過如浮雲之暫障　現既了結　我
兩國敬愛之忱　更當較前親切矣　醇王說完　那德皇便回
答道　去年北京之亂　朕亦深知貴國大皇帝　與此事無涉
多諸大臣之所爲　但貴國亦不能以既派使臣前來道歉　即
謂其事可以消釋　必須從此以後　貴政府恪守公法　庶可
望與敝國重訂邦交　使貴國同享文明之福　說完　醇王致
謝而退　當時德國的親王　及外務大臣　與宰相樞密院各
大臣　同兩旁的御林軍　威儀整飭　都看着醇王對答說話
句句不慌不忙　恭而有禮　大家也十分敬重　禮畢之後

醇王回到了巴斯德姆城　德王即來答拜　列位看這起事
要曉得中西交涉的事　雖然難辦　也總可以講個情理
此番醇親王到德國　原是爲謝罪而去　但也要爲中國爭一
個禮　若是一味卑屈　就把他們看輕了　如今做官的人
不是仇恨外國人　就是奉承外國人　見了外國人　他說一
句　依一句　所以他們得步進步　看了中國人一個錢也不
值　這還有道理可講麼　醇親王這番出洋　正合着論語上
說的使於四方　不辱君命的兩句話了　事畢之後　回來經
過上海住了幾天　先到高昌廟所設的江南製造局　察看一
番　又到徐家滙南洋公學　這南洋公學算是南五省最大的
學堂　學生有三百多人　學習各種有用之學　醇王到了公

學中 一一查問 勉勵子一番 又過了兩日 聽得 皇太后 皇上 已決計回鑾 先須經過河南 再到北京 那醇王就起程先到河南 等候 聖駕到來 便去覆旨 這且按下不表 卻說 兩宮自到西安駐蹕 將近一年 那陝西地方 從前原是好的 漢朝唐朝的時代 京城都在那邊 自從宋朝以後 便漸漸的不如從前了 近年更各處饑荒 百姓都苦的了不得 道路崎嶇 來往極爲不便 兩宮到了那邊之後 體察情形 亦實在不能久居 幸虧和議告成 北京的洋兵 已漸次撤退 又經各省督撫 都聯名電請回鑾 說道萬不能再行遲緩 皇太后便下了一道 聖旨 選定了一個黃道吉日 從西安起程 先過河南

再到北京 所有經過的地方 都要將蹕路行宮 十分脩理完備 那時行在的大臣們 并一路的地方官 都要備辦 皇差一事 異常忙碌 到了這日 兩宮起蹕 凡是經過的街道 都用黃色的土泥 鋪得坦平 兩旁的店鋪人家 一齊結綵懸燈 擺列香案 還有許多兵馬 騎着馬都在街道兩旁 彈壓那厮來看的閑人 到了早晨七點三刻時候 只見一隊當先開路的馬兵 奔馳而過 第二起就是太監人等 和那厮穿黃馬褂的人員 內中也有坐車的 也有騎馬的 第二起之後 便是 聖駕 用黃色的轎子 三十六個人抬着 抬轎的都穿着團龍馬褂 那沿路肅靜無聲 百姓們都跪着路旁兩面 遠遠望見 皇上的狀貌 比上年到西

妄時候　更加壯健　隨後就是　太后　太后的面貌　長臉顴骨甚高　兩目閃爍有光　但是比去年老些　後面的是皇后　同那厮宮中的妃嬪　最後是大阿哥　大阿哥之後是各親王　及軍機大臣榮祿等　并隨駕諸臣　還有許多車輛　紛紛不絕　出了南門　一路按站行來　那經過的地方　再也不必細說了　有一日到了臨潼縣的地方　當時做臨潼縣知縣的　姓夏　名叫良材　號曰楚卿　這臨潼縣缺本來清苦　夏知縣又是一個正派的人　不會巴結討好　聖駕來到的前一日　先有一起太監　跑到縣官的衙門內　說道　咱們老佛爺太后爲老佛爺　所經過的地方　都要送咱們官門費　你這個縣裏　應該送咱們一千二百兩宮門費　若是照數送出來　咱們便在老佛爺前　幫你說些好話　你若不送　就恐有不測之禍　你可知道嗎　那夏知縣說道　爺爺是明白的　卑職這個地方　十分清苦　沒處賺錢　那裏拿得出一千二百兩銀子　來孝敬爺爺們呢　這厮太監說道　你若拿不出現銀　就是金銀首飾貴重的物件　拿來作抵亦可　夏知縣道　卑職的家小　都不在衙門裏居住　還有什麼金銀首飾　那太監便大怒道　你這個東西　眞不識好歹　到明朝不要懊悔來不及了　恨恨而去　夏知縣便將一切應辦的事　料理完備　聽候　聖駕到來　那曉到了第二日　忽然來了許多槍長大漢　滿口京鼻子　自稱是王爺大臣的手下人　一擁而入　到那　皇差公所的厨房中　將一



切貴重的肴饌 掀翻滿地 連碗盞都打碎得雪片一樣 大踏步呼嘯成羣而去 那時夏知縣正去迎接 鑾輿 一時措辦不及 等得 聖駕到來 忙亂異常 連晚所進的御膳 雖不能十分精美 也總像個款式 那曉這厮太監 暗中又加上了許多鹽醬 並離礙的生水 以致惡劣不堪入口 當時 皇太后大怒起來 要將夏知縣治罪 那太監又在旁邊說道 這夏良材在外面 遣對人說老佛爺上年自己不好 弄出這場大禍 今朝還有何臉面 要地方官供給 太后聽了這話 猶如火上添油 越發氣得怒不可遏 便傳旨快將夏良材立刻正法 那時幸而 皇上在旁 代爲懇情 說道縣官斷不敢說這些話 太后不可輕信 況且殺了這個知縣 外邊傳聞出去 倒說朝廷不肯崇儉的話 請加 恩免其一死 太后因 皇上懇情 無可奈何 便將夏知縣 改爲交部議處罷了 列位看從古到今 那最壞事的 便是太監 他們倚着了 皇家的勢 無惡不作 莫說一個小小知縣 就是宰相大臣 也奈何他不得 本朝的定制 太監不能干預外事 雖然比明朝好些 但是那幾個有權的太監 到也狠利害 所以兩廣總督陶制軍 曾經上了一個的請裁汰宦官(便是太監)奏摺 無如一時也不能依他 列位但看這臨潼縣的事 若不是 皇上聖明 豈不是夏知縣把這些太監 白白的葬送了性命嗎 閑話不表 且說兩宮離了西安 經過臨潼縣 每日按站而行 所過的各處

地方　也不必細說　後來到了河南的開封府　便暫時駐蹕
卻說上年所立的那個大阿哥　就是縱容拳匪的端王　親
生的兒子　那端王既經定了罪魁的名目　圈禁在甯夏地方
這大阿哥也不承抬舉　漸漸的放肆起來　到了西安之後
越發把無禮的事　任性妄爲　皇太后起初極其憐愛　後
來看他如此行爲　心中也不耐煩　屢次責罰　他終不肯改
過　況且各國也說這大阿哥　是不應該立的　皇太后
便降了一道　聖旨　把這大阿哥名號撤去　着他立卽出
宮　並加恩賞給入八分公銜俸　毋庸當差　列位可知上年
立大阿哥爲皇嗣的時候　天下的人心　原是不服　早有
電報到京裏去　勸諫不要立的　如今不到兩年　仍舊廢了

可知公論自在　不容勉强的了　我今再把回鑾的事情
下回說個明白便了

第十六回　慶回鑾仰新政宏模　完救劫明本書宗旨

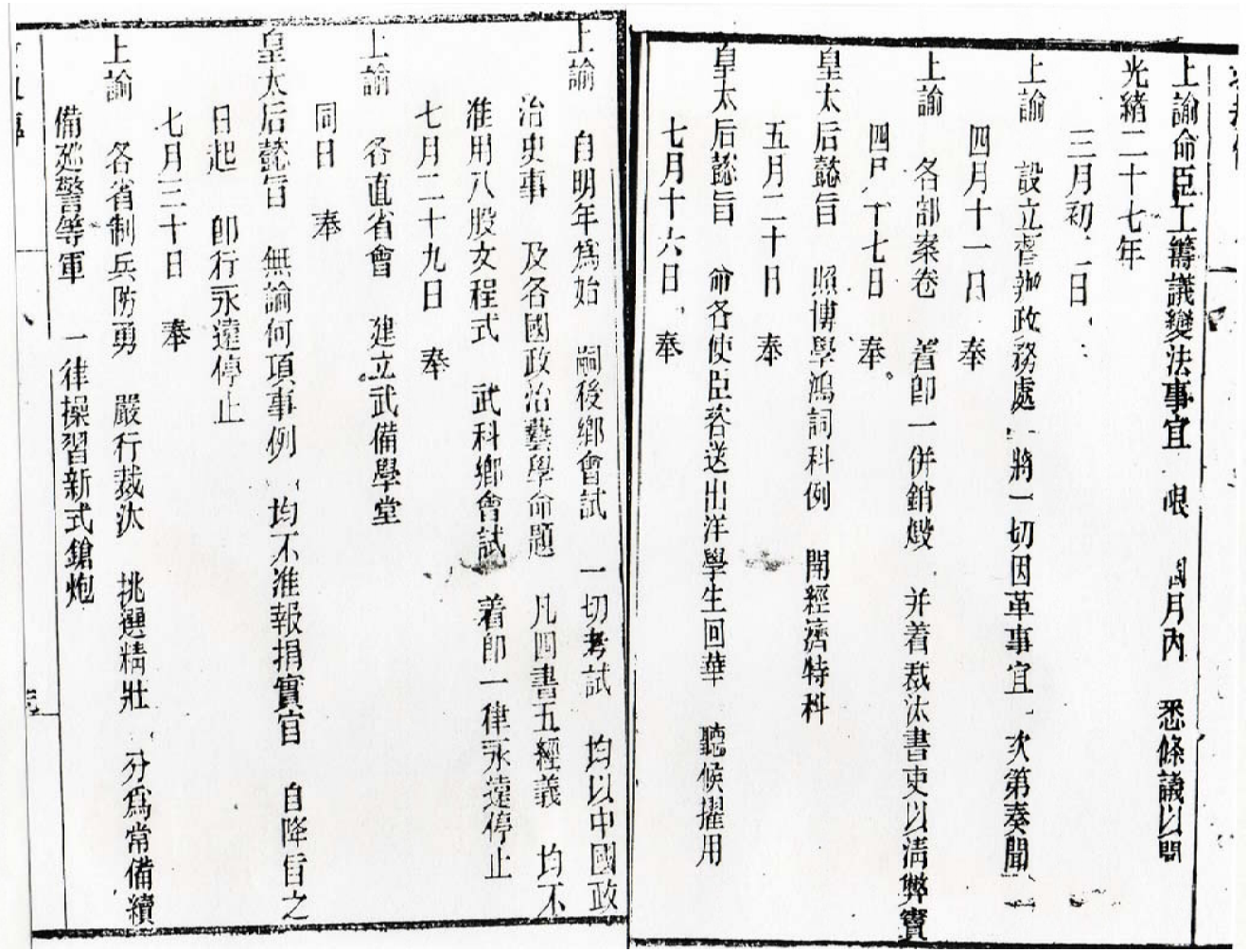
卻說　兩宮駐蹕河南之後　仍復啟鑾回京　那一路的情
形　上回已經略表　不復贅說　惟有那渡過黃河的這一日
天氣晴明　風平浪靜　皇太后看了　心中十分歡喜
說道這是河神效靈　便降旨將大王將軍諸神　崇加封號
并發出許多銀兩　賞賜那駛舵工水手　這也是中國崇奉神
道　講究祥瑞的意思　莫去論他　到了十一月廿八日　皇
上先進京城　第二日　就是　太后同宮中的妃嬪　一起
進城　那時各國的公使　和公使的夫人　都來迎接　皇

太后見了　十分致敬　都對了他們拱手　洋人來看的　也都把帽子脫下　站在兩旁迎接　皇太后進了正陽門　想起上年出去的情形　何等倉皇　不覺悲傷起來　便一直哭到宮中　當卽召見文武百官　說道去年之亂　皆因我誤聽人言　以致上危宗社　下害生靈　京城危亂之時　我本要與國存亡　不曉得何以出西直門　又不曉得何以止舍在某村某家　當時村中婦女　獻上來了一碗冷粥　筷子沒有把膏粱稈子代代　又是一只長　一只短　因爲腹中饑餓勉強喫了幾口　心神稍稍安定　纔曉得你們在危城中　也十分喫苦　說罷　便放聲大哭　當時殿上殿下的這廝臣子也跟着哭了一場　大家沒有話說　都照常的辦事便算了

列位可記得戊戌那年　皇上早有改變舊法　力行新政的意思　那時接連的　聖旨下來　都是變法自強　天下的人心　十分響應　後來因那厮頑固的大臣　恐怕行了新政　用他們不着了　他們便百端阻撓　鬧出一宗大公案來　依舊照向來的辦法　那曉不到三個年頭　這借名扶清滅洋的拳匪　便闖出這場大禍　可見得當時新政不行　都是被那厮頑固大臣弄壞的　所以　皇上自從出京　一直到回鑾以後　下過幾十次的　聖旨　都是力行新政的話　我今先把新政的大綱節略　傳與列位知道

光緒二十六年

十二月初十日　奉



上諭命臣工籌議變法事宜　限　兩月內　悉條議以聞
光緒二十七年
三月初一日
上諭　設立督辦政務處　將一切因革事宜　次第奏聞
四月十一日　奉
上諭　各部案卷　着即一併銷燬　并着裁汰書吏以清弊竇
四月十七日　奉
皇太后懿旨　照博學鴻詞科例　開經濟特科
五月二十日　奉
皇太后懿旨　命各使臣咨送出洋學生回華　聽候擢用
七月十六日　奉

上諭　自明年爲始　鄉會試　一切考試　均以中國政治史事　及各國政治藝學命題　凡四書五經義　均不准用八股文程式　武科鄉會試　着即一律永遠停止
七月二十九日　奉
上諭　各直省會　建立武備學堂
同日　奉
皇太后懿旨　無論何項事例　均不准報捐實官　自降旨之日起　即行永遠停止
七月三十日　奉
上諭　各省制兵防勇　嚴行裁汰　挑選精壯　分爲常備續備巡警等軍　一律操習新式鎗炮

八月初三日　奉

上諭　各省所有書院　於省城均改設大學堂　各府均改設中學堂　各州縣均改設小學堂　並多設蒙養學堂

八月二十日　奉

皇太后懿旨　據劉坤一張之洞會奏　整頓中法以行西法各條　其中可行者　即着擇要舉辦　各省疆吏　亦應一律通籌　切實舉行

十月二十五日　奉

上諭　各省大學堂畢業學生　由督撫學政　拔尤咨送京師大學堂　欽定作爲舉人貢生　再由大學堂咨送禮部考試　欽定作爲進士　二體殿試　分別等第　量加擢用

十二月二十三日　奉

上諭　著宗人府八旗都統遴擇各旗子弟聽候遣派出洋赴各國游學

同日　奉

皇太后懿旨　滿漢官民人等　著準其一律通婚　滿人婦女此後勸令勿再纏足

皇上上諭　列位看以上疊次所降的　都是從來沒有見過的　看來這一切的新政　定要實心實力漸漸的奉行起來了　不過中國地方廣大　那各府州縣的城鄉市鎮　以及偏僻的地方　還不能夠人人曉諭　古語說　已行下効　捷於影響　如今上面的人　既然要行新政　難

道下面的還不依著了去做嗎　但是做起的時候　總有人不相信　說道這是什麼西法　其實中國從古到今　也不是一成不變的　比如春秋列國以前　治天下都用井田封建　自從改變以後　這兩件事是萬萬不能行的了　其餘衣冠宮室一切的制度　那項不是漸漸改變的　列位做了今世的人只曉得現今是這樣　不曉得從前原不是這樣的　將前比後可見這變法的事　也不足爲奇了　我這部書　從中外通商說起　便是從古以來幾千年沒有的一大變局　大局既然改變　那治理國家的法制　也不能不變　這是一定不易的道理　隨人講得去　如今你們都把外洋各國　當作夷狄把古來書上所說駕馭夷狄的方法　看待外洋各國　所以於大局全然不對　上年義和拳匪的事　鬧得這樣結局　難道丙申沒有一個忠義的人　都因不明白大局　自道是中華大國　把各國當作夷狄　看輕他們　因此鬧到這個田地　人死了幾十萬　如今和約已定　仍舊與各國通商往來　你們想起這番大亂　沒得別說　總說是個劫數　唉　列位　這劫數二字　究竟是那個定的　若說是天定的　也要人力挽回挽回纔好　世界上頂大的劫數　便是刀兵水火瘟疫這幾種　刀兵的事　我這救劫傳第一回　已經說個大略　如今就把水火瘟疫的事　做個比例　完我這個挽救劫數的意思　列位可曉得世界開闢以來　我中國到了唐堯的時代　那洪水之災　還是大的了不得　當時派了一個臣子　名叫伯

鯀　去治了九個年頭　仍然治不好　後來舜派了鯀的兒子大禹　再去治了八個年頭　那大禹受盡千辛萬苦　一定要把洪水治好　開通了九條大河　那水勢就漫漫的平順起來了　水勢一平　那地面上就好種這些五穀　養活人民　列位想這洪水之災　原不是人造出來的　也要費多少人力　去治他好來　這不是挽回刼數的一個大憑據嗎　至於論到火燒和瘟疫兩件事　俗語說天火該燒　人命該遭　都把這火燒委之天數　列位想如果火燒是天數　應該由他去燒罷了　爲什麼要用水龍并多少救火的人去救他呢　難道人可逆天行事麼　並且茅棚草舍　格外容易失火　那堅固的甎牆瓦屋　到底少些　難道這厮住茅棚草舍的人　都應該遭

天火燒的嗎　瘟疫也是地方上垃圾穢物　不掃除潔淨　日久便發出臭氣來　釀成瘟疫　認眞並沒有天上放下來的瘟神　叫些小鬼來下瘟藥　中國上古的聖人　神道設教　這原是要那厮愚笨的人　心裏懼怕鬼神　不敢做壞良心的惡事　如今反相信鬼神太過　凡事都說有神道　比如上年義和拳匪起事　他們也裝神做鬼　欺騙愚民　大家也會相信　唉　列位吓　神道是聰明正直的　既是聰明　難道不料到拳匪日後必敗　既是正直　難道肯幫助這厮殺人放火　到處搶擄的匪人　有人說這厮應該遭刼數　所以神道騙騙他們　叫這幾十萬人的性命　都好白白送脫在這裏　唉　這是事過之後、沒的別樣說法了　只好委之刼數　到底論

起理來．終是人事差了的緣故　我中國開闢到如今　挽回
劫數的人　也不知有多少　那女媧氏煉石補天　年代久遠
道理又奧妙　這也莫去論他　就是大禹治水這一件事
要算中國地方挽回劫數的　頂大事業了　到了春秋時候
出了一個孔聖人　做了一部春秋　把列國治亂興亡的道理
明明白白載在春秋上　後人看了　便曉得天下國家的治
亂興亡　總逃不出這個道理　再歇了一百多年　又出了一
個孟子　那孟子論起天下國家的治亂興亡　便從大禹治水
說到孔子成春秋而止　可見孔子以前　挽救劫數的　要
算大禹第一個　但是後人論起孟子的功勞　說道也不在大
禹之下　孟子一生做人　只是好辯兩個字　被外人多少批

評　如今這部救劫傳　說了無數的閒話　眞是好辯　而且
內中有些道理　現在的人聽了　也必定有許多批評　唉
這救劫傳不過一部通俗的演義　原不算得什麼　列位且把
看閒書的工夫　分些出來　看看這部救劫傳　恐怕比看三
國志　水滸傳　還要多得些益處哩

菩薩說法點頑石一一人前出一舌八千龍女與修羅各醒香雲
換毛骨觀雲

故人三載別風雨暮春寒袖中救劫傳淚墨不曾乾宋平子

『游戯報』の周樹人

『清末小説から』第60号（2001.1.1）に掲載。『游戯報』に周樹人の名前が掲載されているのは有名な事実だ。周樹人は魯迅の本名である。ゆえに『游戯報』に魯迅は投稿したことがある。これが定説になっている。しかし、『游戯報』の周樹人がまぎれもなく魯迅のことである証拠は、今まで誰も提出していない。『游戯報』の原物さえ提示されたこともない。私は、以前から『游戯報』の周樹人が魯迅である証拠を出すように要求してきた。この文章を書いたのは『游戯報』の部分複写を入手したからだ。該当部分を検討し、やはり『游戯報』の周樹人が魯迅である確証は存在していないことを明らかにする。

『游戯報』に周樹人の名前が掲載されていることを、私は、疑っているのではない。

その周樹人が、間違いなく魯迅本人であると、なぜ断定できるのか、その根拠はあるのか、と単純な疑問を提出しているだけだ*1。

『游戯報』に周樹人の名前を見いだしたのは、路工である*2。

それ以来、『游戯報』の周樹人は魯迅だ、とひろく認定されたまま現在にいたる。魯迅研究の専門家からは、疑問らしきものはなにひとつ出されていない*3。

路工による断言が、のちの魯迅研究家によってくりかえし引用されてきた。

その間、資料の発見がまったくなされなかったわけでもない。『魯迅年譜』第１巻が、周囲の情況について詳細な説明を加えたことがある。

すなわち、『游戯報』が発表した募集詩の入選者名簿の甲等第７位（原文：甲等第七名）に周樹人の名前で掲げられ、図書購入券１元（購書券一元）を贈られた。

題名は「花好月圓」である、という記述だ*4。

「甲等第七名」「購書券一元」「花好月圓」などを、はじめて明らかにした。説明が具体的で、『游戲報』の実物を確認していなければ書くことはできないと推測される。

しかし、この説明には、致命的な欠陥がある。『游戲報』の周樹人は魯迅だ、とはじめから信じきっている。疑う気持ちは、まったくないらしい。ゆえに証拠を示さない。『游戲報』の周樹人がなぜ魯迅なのかという根本問題は、解決されていないのだ。説明が詳細になった分、『游戲報』の周樹人は魯迅であるという思い込みは、より強固なものとなっている。

ここでも私はくりかえさざるをえない。『游戲報』の周樹人が、周樹人であるというだけで魯迅のことだと断定するのは、性急すぎるのではないか。検討する必要があるだろうというのである。

なぜなら、周樹人を名乗る人物は、魯迅ばかりではないからだ。当時、複数の周樹人が存在していた。

魯迅という筆名をもつ周樹人、通州のひと周樹人（墨生）、貴渓のひと周樹人。同時代に、少なくとも３名は同姓同名者がいる。

だから、『游戲報』の周樹人が魯迅であることをいうためには、なんらかの証拠を出す必要があろう。研究上、当たり前すぎる要求である。

今まで『游戲報』の該当部分全体が紹介されることは、なかった。

題名の「花好月圓」までを指摘している『魯迅年譜』第１巻が、前出の文章で『游戲報』の写真を掲載してもいいはずだが、それは実行されていない。

このたび入手した資料によって以下に関係部分の全文を掲げる。

『游戲報』己亥（光緒二十五年）十一月十七日（1899.12.19）

花好月圓人寿図徵題贈彩単〇超等十名　邗溝趙君弼臣贈袍料洋十元　咸陽汪君献贈書籍票洋四元　昭文孫君同康贈日本小説佳人之奇遇一部十六冊　呉県欧陽君淦贈石印廿二子一部二十本　丹徒葉君玉森贈石印東華続録一部十六本　泉唐鍾君濂　文君斌臣　諸君以壮　周君樹人　許君毓麟　各贈書籍票洋一元〇特等二十名　鍾鏞　梁元漪　銭煥綺　鍾春　鍾震　魯奎綬　沈錫侯　楊

【図】『游戲報』光緒二十五年十一月十七日（1899.12.19）

昺　薛宜興　沈福庶　曹涵　呉作賓　沈焜　孫吟笙　梁元溥　余観国　楊象書　董琪　蘇甘伯　楊家禾　以上各贈書籍票毎値五角　一等姓氏明日続録

『魯迅年譜』第１巻が明確にしたはずの事柄と照合すれば、いくつかの字句が異なっていることに気づく。

募集された詩の題目は、「花好月圓」ではなく、「花好月圓人寿図」が正しい。

周樹人の順位は、「甲等第七名」ではなく、「超等第九名」だ。

書籍購入券には違いなかろうが、原文は「購書券一元」ではなく、「書籍票洋一元」である。

字句の食い違いがあることから、『魯迅年譜』第１巻は、直接、『游戲報』の原物にもとづいて記述したのではないことがわかる。なにかの資料を孫引きしたのだろう。

『游戲報』の記事を見て、複数の事実がうかびあがってくる。

入選者の氏名発表記事だが、入選者全員が平等に掲げられているわけではない。等級が設けられており、扱いに差がある。同じ「超級」であっても、上位５名は、原籍を明記し、おまけに賞品がほかとは違う。

呉県欧陽君淦は、ほかならぬ欧陽鉅源である。呉県は今の蘇州を示す。『游戲報』に投稿を繰り返し、それによって李伯元に認められた。のちには、李伯元と作品を共同で執筆するようになる。李伯元の死後は、「文明小史」などを代筆した。李伯元の後継者といっていい位置を占める。

孫同康に景品として与えられた「日本小説佳人之奇遇一部十六冊」というのも興味深い。

書名と冊数から見ても、これは、あきらかに日本語原本だ。漢訳「佳人奇遇」が『清議報』１-35冊(1898.12.23-1900.2.10）に連載が開始されたのは、この『游戲報』の1899年よりも約１年も前のことだ。ただし、1899年12月時点では、連載が継続中であった。漢訳が単行本になるのは、もっと後のことになる。

日本語原本が景品となった理由は、なにか。

想像できるのは、『清議報』が上海に伝えられて話題になり、原本「佳人之奇遇」が輸入されていたということか。あるいは、漢訳とは関係なく、一部の注意

を引いていた日本の小説だったのか。孫同康が日本語を解したかどうかは、わからない。景品とは出すことに意味があり、内容を理解できるできないは問題ではない、といわれればそういうものかもしれない。

「東華続録」を贈られた葉玉森は、南社の社友だろう*5。

問題の「周君樹人」を、あらためてながめる。

「周君樹人」とあるだけだ。それ以外の字句は、なにもない。よく見てほしい。

原籍も明らかにされてはいない。この周樹人が魯迅であると断定する証拠はおろか少しの手掛かりすらも、ここにはまったく示されていない。

たどりつく結論は、ひとつだ。路工の指摘は、根拠をもたない勝手な断定である。のちの魯迅研究者の、検証なき追従である。

『游戯報』の周樹人が魯迅であるかどうか、不明のままだとするほかない。決め手に欠ける、と私は、何度でも主張する。

【注】

1）樽本「二人の周樹人」『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念中国語学・文学論集』東方書店1983.12.10。
樽本「周樹人がいっぱい」『清末小説探索』所収

2）路工「魯迅与民間文学」『新建設』1959年12月号1959.12.7。51頁

3）私の知るかぎり、唯一の例外は王学鈞だ。沢本郁馬「李伯元研究の広がりと深化――王学鈞編『李伯元全集』第５巻の特色」『清末小説』第21号1998.12.1。『清末小説研究論』所収

4）魯迅博物館・魯迅研究室編『魯迅年譜』第１巻　北京人民文学出版社1981.9。67頁

5）「南社社友事略」鄭逸梅編著『南社叢談』上海人民出版社1981.2。110頁

呉趼人の手紙２通

『清末小説から』第65号（2002.4.1）に掲載。沢本郁馬名を使用。呉趼人は、「アメリカの中国人移民排斥法に反対する運動（反美華工禁約運動)」に参加した。活動の情況を知ることのできる彼の手紙を『申報』1905年に見つけて紹介する。各資料集に収録されてはいるが、語句が異なっている部分もあり、原資料によることの重要性を強調する。

呉趼人が積極的に参加した「アメリカの中国人移民排斥法に反対する運動（反美華工禁約運動)」に関係する手紙を２通紹介する。

該運動に関連して、呉趼人が書いた手紙で有名なものは、曾少卿あての３通がある。

最初、呉沃堯名で「致曾少卿書」と題して阿英編『反美華工禁約文学集』(北京・中華書局1960.2/1962.11上海第二次印刷。666-668頁）に収録された。もとは、民任社輯『中国抵制禁約記』(1905)と蘇紹柄編『山鍾集』(覚覚社1906)に掲載されているという（両書ともに未見)。

この３通の手紙は、くりかえし資料集に収録されている。

阿英にはじまり、魏紹昌編『呉趼人研究資料』(上海古籍出版社1980.4。328-330頁)、盧叔度校注『我仏山人文集』第８巻(広州・花城出版社1989.5。104-106頁)、海風主編『呉趼人全集』第８巻のなかの裴效維学鈞校点「文」(哈爾濱・北方文藝出版社1998.2。213-215頁)などだ。

この４種類とも収録した３通の手紙は、語句は同じである。当たり前だと考えられるかもしれないが、実は、一部分は、当時の新聞で公表されたものと異なる。

上に述べた文学関係ではなく、別の系統、すなわち歴史関係で呉趼人の書信が引用されている。

朱士嘉編『美国迫害華工史料』(北京・中華書局1958.12）には、「呉研人致曾鋳函」と呉趼人の名前を間違って収録する。『曾少卿伝』という書物からの引用だ。

張存武『光緒卅一年中美工約風潮』(台湾・中国学術著作奨助委員会1965.8)は、運動全体の推移を述べるなかで呉趼人の行動も追跡する。その拠った資料は、主として『新聞報』だ。これに掲載された反美華工禁約運動の書信をたんねんに収集し利用しているのだ。

張存武その他の書をもとにして、林健司「呉趼人と反華工禁約運動」(『咿唖』第20号1985.3.10）が書かれた。林は、そのなかで「呉趼人の反華工禁約運動活動状況表」を掲載し、呉趼人の詳細な行動日程表を示している。講演活動、上海の商会への列席、あるいは演説などを一覧表にするのだ。曾少卿あての第１書簡が、光緒三十一年六月13日（1905.7.15)付『新聞報』に掲載されたことも明記する。

林健司「呉趼人と反華工禁約運動」を参照して、つまり「呉趼人の反華工禁約運動活動状況表」のほとんどそのままを取り入れたのが王俊年「呉趼人年譜」(『我仏山人文集』第８巻。344頁／『呉趼人全集』第10巻。33頁）だ。王俊年自身、注でそのことを記している。彼が以前に発表した「呉趼人年譜」(『中国近代文学研究』第２輯1985.9）と比較してみれば、一目瞭然だ。

林健司の作成した「呉趼人の反華工禁約運動活動状況表」には、興味深い箇所がある。1905年７月22日の『新聞報』には、商会あての呉趼人の書簡が掲載されているという。

ここに紹介するのは、『申報』に掲載された呉趼人の手紙２通である。

1「呉趼人函」「彙録各埠致曾少卿籌抵制禁約函」『申報』光緒三十一年六月十三日（1905.7.15）

曾少卿にあてた手紙は、資料集に収録されている。容易に見ることができる。それと比較対照すると、『申報』掲載のものは、冒頭部分が、省略されていることがわかる。だが、注目に値するのは、すでに知られている文章と字句が一部分異なる点だ。

彙錄各埠致會少卿籌抵制禁約函

吳趼人函（前略）僕竊有慮者，近日側聞我國政府頗有干預此舉之意然其所藉口者無非日深恐匪徒藉端煽惑無知愚民致滋擾變而已應請宣佈告各埠同志將此次抵制情形演成白話並伸明此事與旅華美人毫不干涉我等倘遇美人當格外優待以表我中國之諳達大度不過不用其貨不受其傭以抵制其禁工之約耳未系以衛華不可因此滋生事端等語刊成傳單於各鄉鎮到處分送既可使人人皆知又可弭患無形更可免政府之藉口此於交涉上先事預防所宜研究者也尤有進者不用美貨之議自是實行抵制之上策然我中國商家之資本又不得不曲為顧全使毅然行之不顧善後之策則彼華辦美貨之資本家不將大受其虧乎抑彼資本家出而挽阻不為破壞此舉之大勢乎想謂宜開一大會邀集各商詢悉其以前所定之美貨（以定單為據）一一由商會蓋號便查現存之美貨亦一一登錄由商會給予印花簡粘於各貨之上以為憑證凡有標識者不在禁用之列所定之貨一到後亦照此辦法辦後不得再定運者由商會議定直到如此庶於保全商本與實行抵制可並行而不悖至於此項印花施如何粘貼如何杜弊則請公及精於商務者籌之僕於商界一途未經涉歷無可敷陳也和六日人鏡學社發會於社中問人本以僕不文邀僕演說僕嘗此次日俄之戰日本二戰再戰挫斃強俄遂享地球上最大之名譽今吾中國之抵制美約亦一無形之戰也使能而勝名譽當不亞於日本我國人宜努力為之（後略）（外）

1『申報』光緒三十一年六月十三日（1905.7.15）

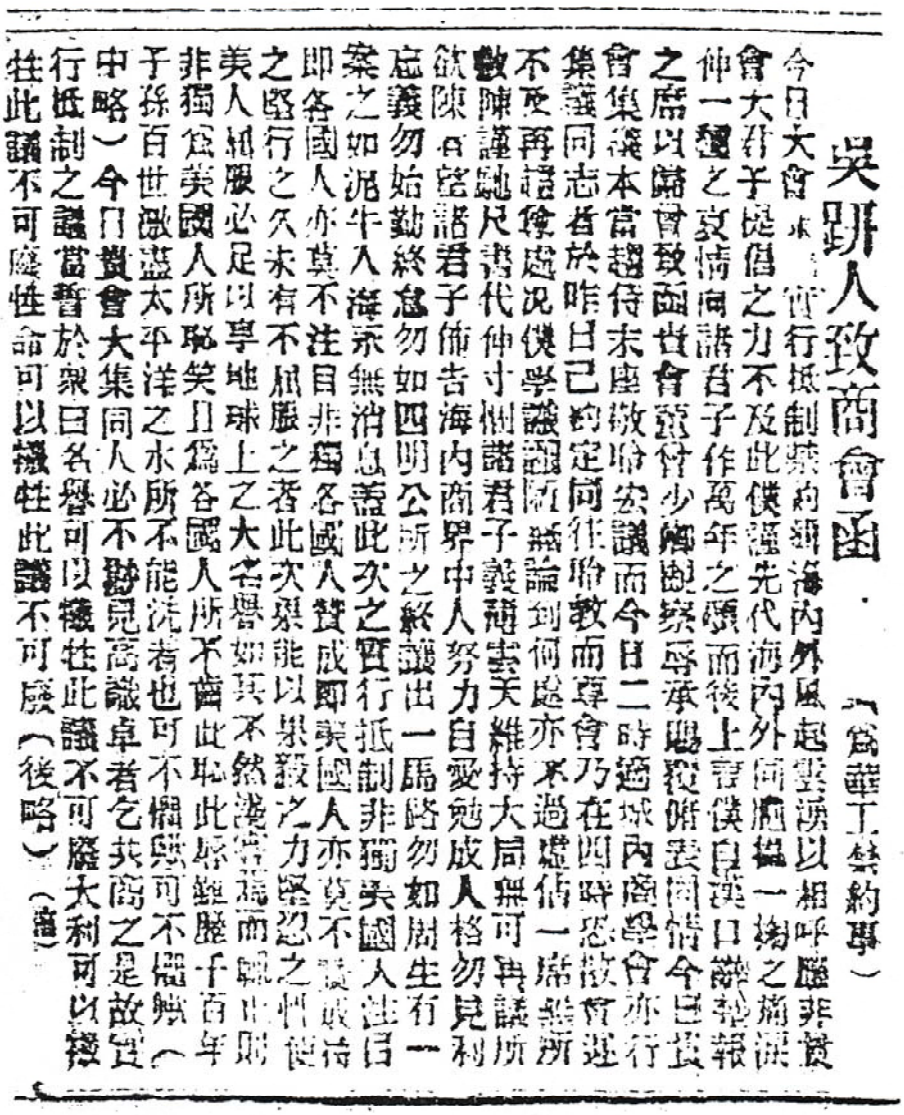
阿英をはじめとする資料集は、すべて、「然僕竊有慮者，近日側聞有禁阻此挙之意」とする。ところが「有禁阻此挙之意」部分は、実は、「我国政府頗有干預此挙之意然其所藉口者」なのだ。

もう一箇所、資料集所収の文章では削除したところがある。［］内に原文をおぎなう。

「又可弭患無形，［更可免政府之藉口］此於交涉上先事……」

原文の「政府」を省略していることがわかる。

阿英を始めとして各種資料集の編集者が拠ったのは、初出の新聞ではなかった。のちに編集出版された蘇紹柄編『山鍾集』などの書籍を再利用した。たぶん、その時には、原文の「政府」関連部分はすでに削除、書き換えられていたと予測する。



吳趼人致商會函

（爲華工禁約事）

今日大會[illegible]實行抵制禁約新海內外風起雲湧以相呼應非貴會大君子提倡之力不及此僕謹先代海內外同胞[illegible]一掬之痛深伸一種之哀情向諸君子作萬年之願而後上言僕自漢口辭報之席以歸曾致函貴會竟曾少卿觀察辱承賜覆俯表同情今日貴會集議本當趨侍末座敬聆宏議而今日二時適城內商學會亦行集議同志者於昨日已約定同往聆教而尊會乃在四時恐散會遲不及再趨[illegible]處況僕學識[illegible]論到何處亦不過虛佔一席無所數陳謹馳尺書代伸寸悃諸君子義薄雲天維持大局無可再議所欲陳者望諸君子佈告海內商界中人努力自愛勉成人格勿見利忘義勿始勤終怠勿如四明公所之終讓出一馬路勿如周生有一案之如泥牛入海永無消息蓋此次之實行抵制非獨美國人注目即各國人亦莫不注目非獨各國人贊成即美國人亦莫不贊成待之堅行之久未有不屈服之者此次果能以果毅之力堅忍之性使美人屈服必足以享地球上之大名譽如其不然淺嘗[illegible]而輒止則非獨爲美國人所恥笑且爲各國人所不齒此恥此辱雖歷千百年子孫百世激盡太平洋之水所不能洗者也可不懼歟可不懼歟（中略）今日貴會大集同人必不勝見高識卓者乞共商之是故實行抵制之議當誓於衆曰名譽可以犧牲此議不可廢大利可以犧牲此議不可廢性命可以犧牲此議不可廢（後略）（[illegible]）

2『申報』光緒三十一年六月二十日（1905.7.22）

2「呉趼人致商会函(為華工禁約事)」『申報』光緒三十一年六月二十日（1905.7.22）

張存武の該書には、部分的に引用される。

全文を公表するのは、これが最初だろう。全文を掲げるだけにとどめる。

雑誌の黄帝紀年

——新暦旧暦問題

『清末小説から』第71号（2003.10.1）に掲載。表記を一部改めた。清朝末期に発行された雑誌群は、刊行年を表示するのに基本的には光緒宣統などの元号を使用している。しかし、清朝に反対する革命派の人々は、それとは違う元号を使用して立場の違いを表明した。すなわち黄帝紀年である。これには黄帝紀元と中国開国紀元などがある。ただし、同じ年数にならない。その理由は、もとから根拠が薄弱だからだ。くわえて旧暦と新暦が混合しており、清末小説目録を作成するばあいの障碍となる。陳大康『中国近代小説編年』を紹介しながら、新暦旧暦問題を論じる。

清末民初小説目録を編集するとき、私が頭を悩ませたのは新暦旧暦問題である。

辛亥革命によって中華民国が成立する。旧暦宣統三年十一月十三日を新暦1912年１月１日に切り換えた。これが背景にある。

清朝末期におびただしく創刊された雑誌群は、その発行年月を当然ながら旧暦で表示していると考えてよい。

ただし、中華民国初期には、旧暦を守って奥付に発行年月日を印刷するものがある。１、２ヵ月の時間的ズレは、文学研究には直接の関係がないと思われる。ゆえに、そこまで問題にする人はいない。

しかし、より正確な小説目録をつくることを目標にしている私には、これは小さくない障碍となる。

旧暦と新暦が混在しているから、両者併記を編集方針にする。正確に記述しようとして私があらためて遭遇したのは、黄帝紀年なのだ。

1　『清末民初小説目録』の編集方針

新編とか増補とかいちいちつけるのはわずらわしい。以下、『清末民初小説目録』と称する。

『清末民初小説目録』を編集するにあたっての方針のひとつは、できるだけ多くの小説作品を収録することだ。創作ばかりでなく、翻訳も含んでいる。外国小説の翻訳が急増するのも清末小説界の特徴のひとつであるからだ。もし、外国小説だという理由で小説目録から排除してしまうと、清末小説界の新しい流れを無視した貧弱なものにしかならないだろう。

編集には２次資料を利用している。ゆえに、小説ではないものも収録してしまう可能性がある。作品を原物で確認できないことが原因だ。

収録の基準はゆるめに設定する。より多くの作品を収録しておいて、実際に利用する研究者の独自の判断にまかせている部分があることによる。

『清末民初小説目録』は、あくまでも調査の手掛かりを提供しているにすぎない。日本で主として２次資料によっている限り、作品を厳密によりわけることは不可能だ。だから、不足している作品をご教示してくださる人がいるのは、とてもうれしい。また、より正確な記述になるようにご指摘くださるのも大歓迎だ。

中国から、これもあれも小説ではないとたくさんのご指摘をくださる人がいた。ありがたい。詳細に点検いただいて恐縮に感じる。しかし、非小説でも削除はしない。ご教示は目録に反映させて注釈を加える。

なんども同じことを書くのは気がひける。しかし、日本で清末民初小説を原物で確認することは、むつかしい。まったく不可能ではないにしても、原本がほとんどないのだ。

私がしかたなく採用した苦肉の策が、上にいう２次資料を利用することだった。

日本にもととなる原物がないにもかかわらず、清末民初小説の目録を作成するのは、無謀なことに違いない。だから、中国以外の外国で、清末小説目録はおろか、それに民初を含めた小説目録を編集した人は、過去において存在しなかった。

だが、阿英の「晩清小説目」だけにいつまでも頼っているわけにもいかないで

はないか。なにしろ、1950年代に刊行されたままで、すでに内容が古くなっている。古いというのは、阿英目録が単行本主義を採用しており、雑誌からの採取が不十分だという意味だ。意識を改革して雑誌を編集の中心にすえなければ、清末民初時期における小説界の実態は見えてこないだろう、という考えが私にはあった。だいいち、阿英目録は「晩清小説目」と題するところからもわかるように、民国初期は対象外なのだ。民初が空白となって埋めようがない。

なによりも、研究のために私自身が、清末民初小説目録を必要としている。ひとつの作品について、その雑誌初出から単行本が一覧できれば便利だと思った。さらに、最近の版本にいたるまでを網羅すれば、現在、読むことができるかどうかもわかる。

以上は、過去に説明したことがある。そういういきさつで『清末民初小説目録』はくりかえし、といっても３回だけだが、作り直して発行した。現在も、増補訂正作業をつづけている（補記：2015年に目録Xをウェブ公開した）。

原物によるだけで小説目録が作成できればいうことはない。それが、日本ではできない、と幾度いっても自分ではあきることがない。見ていない書物を収録するならば、書名には「稿」をつけるべきだというご意見もあろう。変則的であることは十分承知している。だが、ないよりマシという考えがなければ、作業は進まない。

『清末民初小説目録』の使用限界についても、かさねて表明している。あくまでも原本をさがす手掛かりにしてほしい。文章を書くときは、原本を入手してから、その原本にもとづくことが重要だ。原本をさがさず、目録だけにたより、それで記述を誤ったとしても、利用者に責任がある。はっきりいっておきたい。

２次資料を利用して目録を編集するのには、正負ふたつの側面がある。

直接、自分が手にしない版本も目録に取り入れることができる。ほかの研究者が自分にかわって調査してくれていると考えればよい。多くの目録、論文が書かれただけ、それを参照して取り込むのだから、私の目録は自然と内容が豊富になる。

その反面、これで終了ということが、ない。

原本を見れば、それで記述は終わる。いうのは簡単だ。だが、清末民初の小説

は、数が多い。実際の作業はそれほど軽くはないと容易に想像できる。

２次資料にたよっている分、小説目録が出版されるたびに、『清末民初小説目録』を点検しなおすことになる。ほかの研究者による発見があるかもしれない。それを知るためには、ひとつひとつを比較対照して確認する必要がある。もうひとつ、自分の書き間違いを訂正する機会にもなる。私が勘違いしている箇所も少なくない。記述が不一致であれば、どちらが正しいのか、調査する必要がでてくる。

阿英の「晩清小説目」をはじめ、中国で発行された近代小説の目録は、入手できるかぎりのものを利用して点検している。備考欄に略号をつかって追記しているから、それをたどって原本に到達できる可能性も生まれる。

点検をくりかえすことによって、同時にそれら２次資料の信頼性をあぶりだすことになろうとは思いもしなかった。意外だった。

中国のある目録は誤植が多いとわかる。また、ある目録は、厳密に記述されており編集者の姿勢を強く感じるのだ。別の目録から多くをマル写しという目録もないではない。ただし、これらのことがわかったのは副産物である。私は、ほかの目録のよしあしを見ようとしているわけではいない。利用しようと考えているだけだ。

2　『中国近代期刊篇目彙録』のこと

『清末民初小説目録』を最初に編集したとき、大いに利用したのが上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』全６冊（上海人民出版社1965.12／1980.7-1984.8。①1857-99年分1965.12／1980.7第２次印刷②1900-11年分1979.10③1900-11年分1981.6④1900-11年分1982.2⑤1912-14年分1983.8⑥1915-18年分、補編1984.8）だった（以下、彙編と称する）。

この大部の彙録が出版されるまえのことだ。清末民初に発行された小説専門雑誌８種類の目録を作成した経験が、私にはある。雑誌目録だから、原本を手元においての作業となる。当時、清末民初の小説雑誌目録など、世界のどこにもなかった。そのときの経験にもとづけば、小説目録を編集しているつもりなのに、それとは関係のない作品の確認にてまどり、まことに効率の悪いことであった。

そのご、私の目の前に出現した彙録は、雑誌の原物をもとにして作成されており質の高さは圧倒的である。作品のすべてを雑誌の掲載通りに記述する。しかも、小説専門雑誌に限定していない。一般雑誌をも採取対象にしてある。手間とヒマのかかったこの彙録は、利用するだけの信頼性があることは誰もが認めるだろう。だからこそ、中国で編集される多くの資料に利用されることになったのもうなずける。彙録の発行を見て、私は自分が進めていた小説雑誌の目録編集をやめることにしたのだ。

私は、この彙録を信用していた。まさか不都合な箇所があるなどとは、思いもしない。

全面的に信頼していたし、それだけの価値があると今でも考えている。ただ、ある部分には少し違った考えを感じたことも書いておこう。

たとえば『繍像小説』だ。彙編②の1103-1115頁に収録されている。

『繍像小説』第13期から発行年月日を記載しなくなる。私は、原物で確認して目録を作成したから間違いはない。そのとき、刊年不記とだけ書けば、正確だが味気ないと私は思った。当時、『繍像小説』の発行遅延説などとなえられてはいない。阿英の説明通り、李伯元の死去によって『繍像小説』も停刊したという定説を私も信じていた。だから、半月刊が守られたとしたら、という仮説にもとづいて推測の発行年月日を示しておいた。今から考えれば、余計なことだった。

彙編はそれをどう処理したかというと、私とほぼ同じ方法によっている。すなわち、第13期には、「1903年11月〔癸卯十月〕」と特別なカッコを使用して区別したのだ。

ただし、解説で第13期より刊年を記載しなくなるとは書かなかった。これが説明不足のひとつ。

私が説明不足だと書けば、彙編の編集者は怒るだろう。なぜなら、「編例」で説明していると考えているはずだからだ。「編例」を注意深く読んでいれば、（）でくくった箇所が雑誌の原載通りの刊年であると書いてある。だから、『繍像小説』第13期よりそのカッコがなくなるのだから、利用者は、刊年の記載はなくなったと理解しなければならない。しかし、不注意な読者のほうが多い。「1903年11月〔癸卯十月〕」という記述を見た利用者は、原本にそのまま印刷さ

れているという間違った印象をほとんどの研究者がいだいてしまう。

もうひとつ、彙編は、定説通りに「至1906年４月（光緒三十二年三月）停刊」と解説した。間違いだが、これはやむをえない。異説がとなえられる以前のことだからだ。

彙編の説明と記述を見て、『繍像小説』第72期には「1906年4月〔丙午三月〕」と記載されていると考える研究者がでてきても、不思議ではなかろう。事実、原物を確認せず、彙編だけを見て該誌第72期には「1906年4月〔丙午三月〕」と印刷してあると書く専門家がいる。すこし驚いたが、そういうものだ。誤った記述が、中国の研究界に定着している原因のひとつである。

3　陳大康『中国近代小説編年』のこと

さて、のべたように小説目録による点検作業は、現在も継続している。

最近、利用のしがいがある著作がでてきた。陳大康『中国近代小説編年』（上海・華東師範大学出版社2002.12）である（以下、編年と称する。これより12年後に陳大康『中国近代小説編年史』全６冊　北京・人民文学出版社2014.1が刊行される）。

1840-1911年間の小説年表だ。『清末（あるいは晩清）小説編年』と題してもおかしくはない。

月日まで記入し詳細である。しかも、旧暦と新暦を併記するという周到さをあわせもつ。雑誌連載作品については、その初出と途中、完結を示している。単行本は、初版だけでなく再版なども記述する。読む要素があるというのは、作家、刊行物に関連する説明もしているからだ。また、翻訳作品も収録しているのが特徴のひとつとなる。ただし、残念に思うのは、原作品、原著者を明らかにしない。『清末民初小説目録』を参照したと書いてあるのだから、引用してもらってもよかったのだ。「近代小説作者及其作品一覧表」「近代小説出版状況一覧表」「近代小説篇名索引」があって便利だ。

原作品の「序」などから適宜引用しているところからも、原本を確認していることがわかる。こういうところが、記述の信用性を高める。

編年を使用して私がどのように作品を点検しているのか、例をひとつおめにか

無綫電話

夜靜更闌萬籟俱寂一丸冷月掩映於疏柳叢樹之間竹籬短短中圍一片草場其北隅有茅屋三椽右（笑）（呆）

『小説時報』9期　宣統3.3.20(1911.4.18)

けよう。

『中国近代小説編年』284頁の宣統三年三月二十日（1911.4.18）には、『小説時報』第９期掲載の作品が集めてある。

そのなかのひとつに「無線電話」がある。問題は、この作品名なのだ。

私は、『小説時報』の目録を作成したことがある。1975年のことだった。

『清末民初小説目録』を編集するときも自分がつくったこの目録から作品を採取した。その後、いくつかの２次資料で点検しているから、それらを備考として追記している。

『清末民初小説目録』の記述は、以下のようだ。

w0622
無線電話
笑（包公毅）、呆（徐卓呆）
『小説時報』9期　宣統3.3.20(1911.4.18)

[大典214][史索一408][系目51]宣統三年三月三ㄇ十日とする。

作品の初出が『小説時報』であることが、これを見てわかる。宣統３年部分は旧暦を、1911年部分は新暦を意味する。以下の資料も[系目51]以外は、上とおなじような記述をしている。略号の説明を兼ねてかかげる。

［大典］陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典』(1897-1929）上海教育出版社1994.12
［史索一］祝均宙、黄培瑋「中国近代文藝報刊概覧」魏紹昌主編『中国近代文学大系』第12集第29巻史料索引集　上海書店1996.3
［系目］王継権、夏生元編『中国近代小説目録』南昌・百花洲文藝出版社1998.5　中国近代小説大系80

点検の段階で、記述に異なる箇所がでてくることがある。その時は、原物で確認している作品については、２次資料の間違いであると注記する。確認できないものは、各資料でこのように記述しているという意味で「ママ」と表記することにしている。

該作品は、のち、叢書に収録された。

w0623
無線電話
笑（包天笑）、呆（徐卓呆）
南昌・百花洲文藝出版社1996.12　中国近代小説大系78　短篇小説巻（上）
選自《小説時報》第9号，上海小説時報社　宣統三年（1911）四月版。校点者：晏海林。責任編委：王継権

この備考を見れば、叢書に入れるとき初出雑誌から復刻したことが理解できる。備考欄の「選自《小説時報》第9号，上海小説時報社　宣統三年（1911）四月版」は中国近代小説大系にある説明からそのままを引き抜いた。もし四月が旧暦であるならば、間違い。新暦であるなら例の新暦旧暦混用の例となる。

それはさておき、作品名が「無線電話」であることにかわりはない。

さらに、別のＳＦ関係の単行本にも収められている。冒頭に作品番号がついていないのは、本を入手したのが目録発行後だったからだ。つまり、増補したという意味である。

無線電話
笑（包天笑）、呆（徐卓呆）
葉永烈主編『大人国』福州・福建少年児童出版社1999.12　中国科幻小説世紀回眸叢書第１巻
葉永烈「総序」、「第一巻説明」、「代序：中国科幻小説発展簡史」

作品名「無線電話」でなにも問題はなさそうに思える。

ところが、陳大康の編年284頁に掲載されているのを見れば「無線電語(ママ)」になっているではないか。「話」が「語」だからまぎらわしい。「語」とするのは編年だけだから、最初は、該書の誤植だと単純に思った。

ところが、念のため彙録④を調べてみると、なんと「無線電語(ママ)」なのである（2701頁）。

編年と信頼している彙録が同じ記述だ。それらが『清末民初小説目録』とは異なるから、にわかに不安になる。

［史索一］の408頁をあければ、これまた「無線電語ママ」である。彙録と同一だ。以前、点検したときはその違いを見逃したらしい。

私は、原物の雑誌によって目録を作成した。にもかかわらず、記述が異なる事実を前にしては自信がゆらぐ。注意したつもりで、間違いを避けることができないのが実状だ。私の誤記かもしれない。確認したつもりで間違うのは、私のばあいよくあることだ。疑いがふくらむ。

あらためて『小説時報』第９期を見てみる。

目次も本文も「無線電話」であった。「語」ではない。つまり、「無線電語(ママ)」としたのは、彙編にある誤植のひとつだといえる。

彙編の誤植は、のちの各種目録がよった資料源を暗示する。彙編をもとにして

［史索一］がその誤りを踏襲し、編年も引用してまちがったということだ。

『清末民初小説目録』では、なぜ、彙録の間違った「電語（ママ）」を引き継がず、正しい「電話」になっているのか。

理由は簡単だ。私は『小説時報』の原物を見て目録を作ったからだ。日本には原物がない、といいながら、例外的に原物で確認できる雑誌のひとつであった。つまり『小説時報』については、彙録を参照していない。ゆえに、彙録の誤植を引き写すことを免れた。原物を見ることの重要さが、ここにある。

というような手順で、作品のひとつひとつを点検する。採録もれの作品を見つけたり、私の勘違いで間違って記述していることに気づいたりする。といっても、それほど多くはない。大多数は、確認するだけである。［編年］という略号を追加するのは、検索の便宜を考えてのことだ。

4　新暦旧暦問題

点検作業をつづけていて、ある作品でひっかかった。旧暦と新暦が一致しない。「1907.11」と書いて、1907年が新暦、11月が旧暦というような単純な混用ではない。私がひっかかった部分は、彙録にもとづいて記述していた。

中国開国紀元

清朝も末期になれば、いろんな情況が出現する。黄帝紀年もそのなかのひとつだ。印刷物の刊年に光緒宣統という元号を使用しないところに、政治的な意味を持たせる風潮が発生したのである。

陳旭麓、方詩銘、魏建猷主編『中国近代史詞典』（上海辞書出版社1982.10）には、黄帝紀年についての説明がある。1903年に革命的刊行物が使用しはじめたもので、1905年を黄帝紀元四千六百三年と推定したという（636頁）。

黄帝紀年が実際に使用された例を見れば、おおきくわけて黄帝紀元と中国開国紀元がある。

まず、中国開国紀元から紹介しよう。

○『復報』のばあい

作品名をあげると理解しやすい。『復報』の記述によって、その奇妙な事実を知った。

『復報』は、日本東京で創刊されたという。

w0577
無情弾
恋華
『復報』7-9期　中国開国紀元4604.10.30-4605.3.30(1906.12.15-1907.3.30)
[大典104][史索一299][系目52]は掲載誌を掲げない。

『復報』第７期の「中国開国紀元4604.10.30」は旧暦だ。だから新暦になおせば「1906.12.15」になる。なぜ旧暦だとわかるかといえば、彙録③の該誌第２期に「中国開国紀元四千六百四年閏四月二十五日」（1832頁）と表示しているからだ。閏月があるのは、旧暦に決まっている。

ところが、彙録を見れば『復報』第９期の「3.30」も旧暦であるはずなのに、新暦での表示が「1907.3.30」となっており同一なのだ。

はじめは、気づかなかった。旧暦と新暦が一致することがあるのか、と感じたくらいだ。彙録が間違っているとは少しも思いはしない。誤植があるとはいっても、その数は彙録ではそれほど多くはない。

編年で点検していると、該当箇所を見比べてみて記述が一致しない。だいいち編年には、中国開国紀元などはどこにもみえない。だから、私の目録の備考欄に「[編年178]光緒33.2.17ˀˀ(1907.3.30)とする」といったんは書いて追加とした。ただし、このように書けば編年の記事に問題があるような印象を与える恐れがある。いかがしたものか。

だが、考えてみれば彙録の記述も納得しがたい。なぜ旧暦と新暦が同じ日付になるのか。

彙録③の『復報』部分をもういちど開いてみる。

疑いの目で見れば、奇妙な記述になっている。

『復報』第７期の発行年月日は、「1906年12月15日（中国開国紀元四千六百四年十月三十日）」だ。

『復報』第８期の発行年月日は、「1907年１月30日（中国開国紀元四千六百五年一月三十日）」と書かれている。

（）のなかは原載のままという「編例」の説明であった。

前者の「十月三十日」が旧暦表示であり、それを新暦になおせば「12月15日」であるというのは、すでに見たとおりこれであっている。

問題は、後者だ。第７期までのやり方に従えば、旧暦「一月三十日」が新暦「1907年１月30日」に相当するという意味に違いない。

だが、『復報』の中国開国紀元四千六百五年、すなわち光緒三十三年には、旧暦「一月三十日」は存在しない。

ならば、この「一月三十日」というのは新暦のことなのか。

旧暦では「正月」と表記するのが普通だ。旧暦を「一月」とは書かないと思いもする。

彙録の編者は、そのあたりの説明を『復報』については一切おこなっていない。わずかに、第11期について、奥付で「四千六百四年」と誤っているので「四千六百五年」に訂正したというだけだ（1839頁欄外）。

『復報』について解説している何炳然も、雑誌が表示する暦についてはなにも言っていない*1。

上の例でいえば、『復報』は、創刊号から第７期までは、中国開国紀元を使い内実は旧暦だ。しかし、第８期から以降は、同じ中国開国紀元でありながら、新暦に切り換えたことになる。

問題の該誌第９期に話をもどす。

彙録にある中国開国紀元四千六百五年三月三十日は、したがって新暦の「1907年３月30日」となる。

では、編年178頁の「二月十七日（３月30日）」は間違っているのかといえば、そうではない。

これは、中国開国紀元を省略して、新暦３月30日を旧暦に換算した二月十七日を表示したにすぎない。

旧暦と新暦を併記することを編集方針としたから、あくまでもそれに忠実に従った処理であろう。

○『民報』のばあい

『民報』も『復報』とおなじく、日本東京で創刊している。1905年11月26日の創刊号より中国開国紀元を使用し（西暦、明治、光緒を併用）、しかもそのすべてが新暦となっている。『復報』第８期のように1907年から新暦に切り替わったようでもない。

○『漢幟』のばあい

これも日本東京の出版である。彙録の1907年１月25日付創刊号には、ごていねいに「中国開国紀元四千六百零五年陽暦一月二十五日」と書いてある。『民報』と同じく西暦、明治、光緒を併用し、しかも「陽暦」であることを明示している。

以上の３種類を見れば、中国開国紀元といっても、旧暦から新暦に切り換えたり、最初から新暦だったりする。すべてが一致しているわけではない。

黄帝紀元

もうひとつの黄帝紀元を途中から採用するのは、『広益叢報』と『江蘇』だ。

○『広益叢報』のばあい

彙録で見る限り、重慶の『広益叢報』は長期にわたって刊行されつづけた。1903年から1912年までの９年間に287号を数える。小説に関していえば、その多くが再録である。長寿雑誌であったことにかわりはない。

年号を採用しているから、最初は光緒で、つづいて宣統にかわるのは当たり前だ。

変化を見せるのは、辛亥革命直後である。いよいよ宣統ではなくなるという時代の動きがあったのであろう。『広益叢報』第278号（第9年第23冊　1911.10.31）より宣統を廃止して黄帝紀元（旧暦）を使用しはじめる（彙編②1072頁）。

ただし、黄帝紀元ではあるが、1911年を四千六百九年とし、これは中国開国紀元と同じになる。

編年も『広益叢報』掲載の作品を採取している。旧暦だから、「黄帝紀元」という表示をはずしているだけ。

黄帝紀元にはもうひとつの数字があって、それは『江蘇』で使われている。

○『江蘇』のばあい

『江蘇』は、1903年に日本東京で発行された。最初は光緒を使用し、第３期より黄帝紀元あるいは紀元に変更している。それには、「黄帝紀元四千三百九十四年閏五月一日」と書かれており、旧暦であることがわかる。

編年は、こちらも紀元あるいは黄帝紀元を書いていない。もともとが旧暦だから、元号を示さなくても問題はないという判断だろう。

以上を見れば、黄帝紀年といっても、表わしかたにはいくつかの種類がある。しかも、それらの年数は、かならずしも一致していない。

そのほか

そのほかに、孔子降生あるいは、孔子を使用するものもある。こちらは、黄帝紀年ではない。特に、日本で発行された『清議報』は、光緒と併記していることを参考までに記しておく。

次のような例もある。[彙①934]『東亜報』孔子生二千四百四十九年五月十一日（1898.6.29）である。

あるいは、支那漢族黄中黄（章士釗）著『沈蓋』（支那第一蕩虜社）には、「共和二千七百四十四年」(1903）などと見える。黄帝紀年ばかりではなさそうだ。

前出『中国近代史詞典』には、附録４「辛亥革命期間所用黄帝紀年対照表」がついている。この附録では『民報』『黄帝魂』『江蘇』の名前があげられ西暦と対照されている。これをもとにして、私の知るいくつかを追加して以下のような対照表を作成した（旧は旧暦を、新は新暦を表わす）。

	中国開国紀元	黄帝紀元*2	黄帝紀元	孔子隆生、孔子	共和
	『民報』新	『黄帝魂』旧	『江蘇』旧	『清議報』旧	『沈蓋』
	『漢幟』新		『国民日日報』旧	『祖国文明報』旧	
	『広益叢報』#1旧		『醒獅』#2旧		
	『復報』旧新				
	『東莞旬報』#3旧				
1901				2452	
1902					
1903		4614	4394		2744
1904		4615	4395		
1905	4603	4616	4396		
1906	4604	4617	4397	2457	
1907	4605	4618	4398	2458	
1908	4606	4619	4399	2459	

#1 黄帝紀元4609（1911）より

#2 一年のズレがある

#3 黄帝紀元を使用

上の分類に一致しないものもある。

日本東京で発行された『醒獅』第１期は、黄帝紀元四千三百九十七年九月一日（1905.9.29）とする。しかし、『江蘇』などが表示する四千三百九十六年に比較すると、それよりも一年遅れた年数になっている。

というようなわけで、清末雑誌の刊年表記は、光緒宣統のほかに、中国開国紀元と黄帝紀元（または紀元）などが使われていることが理解できる。

中国開国も黄帝も意味するところは異ならないはずだが、実際の数字が違う。フィクションだといってしまえば、西暦も同じことだ。約束事にすぎない。重要なのは、黄帝紀年を使うことであった。その数字が一致しようがしまいが、それは問題ではなかったようだ。

その使用例は、外国である日本において多いといえよう。

いくつかの数字が使用されている事実がある。結局のところ、それを小説目録にどのように反映させるか、という問題になる。

5　編年の処理

編年の著者陳大康は、中国開国紀元、黄帝紀元などという黄帝紀年の表記を採用しなかった。編年の記述を見れば、それらが見えないのだから、そういう編集方針にしたのだと理解できる。

黄帝紀年を省略して、新暦であれば別に換算して旧暦を掲載した。記述の統一を考えての処置だろうと推測する。黄帝紀年の数字そのものが一致しないのであれば、それをいちいち提示するのは、なんの意味もないという考えか。

結果として、編年には、旧暦の月日に対応させた新暦がある。旧暦を漢数字であらわし前面に押し出す。カッコ内に新暦をアラビア数字で表示する。全体を見れば、まことにスッキリとした印象を受ける。

だが、原文の言葉を省略した分、当時の雑誌が持っていた雰囲気を失うことになったのではないか。

前述したように、黄帝紀年を使用するのは、雑誌編集者たち、あるいは成員の政治的思想的立場を明確にする方法のひとつであったからだ。

『清末民初小説目録』では、たとえば、以下のように記述している。

> m0739
> 明日之瓜分
> 瓜子
> 『江蘇』7期　黄帝紀元4394.9.1(1903.10.20)
> [大典55][系目246][編年108]

もとのままがよろしい、という判断である。これを見れば、『江蘇』は、黄帝紀元と旧暦を使用する雑誌だ、とすぐに把握ができるだろう（本来ならば、旧暦は漢数字で表示したい。しかし、目録のばあいは、そうしていないと凡例でことわっている。印刷空間の節約のためだ。それを知らないある中国人研究者が、アラビア数字を見ただけで新暦旧暦を区別していないと言ってきたことがある。凡例を示して反論しておいた）。

結論としては、彙録の刊年についての記述は、基本的に原本に忠実であることを確認できた。

また、編年の刊年の表示も、誤りではないことがわかった。原文通りではないにしても、刊行月日については、わざわざ新暦を旧暦に換算するという手間をかけている。

点検作業をつづけることが、問題を発見することにつながる。

【附記】渡辺浩司氏より資料をいただきました。感謝します。

【注】

1）中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第２集 北京・人民出版社1982.10

2）黄帝子孫之多数人『黄帝魂』(黄帝紀元四千六百十四年十二月六日）所収の「黄帝紀年説」には、「黄帝降生四千六百十四年閏五月十七日書」と記してある。旧暦だとわかる。また、「黄帝降生後大事略表」の四千六百十一年が義和団事件になっている。該当年が1900年にあたる。

参考文献：

島下美喜「清末留日学生と「黄帝紀元」」『千里山文学論集』第60号1998.9.1

竹内弘之「中華民国年号の成立に関する一考察」『町田三郎教授退官記念中国思想史論叢』 九州大学中国思想史研究室1995.3.11

「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く

附：『繍像小説』刊行一覧

『清末小説から』第75号（2004.10.1）に掲載。李伯元「文明小史」と劉鉄雲「老残遊記」の盗用事件は、有名である。魏紹昌が、盗用の事実を指摘したあと「解決不能」だと疑問３点を提出した。なぜ李伯元は没書にした文章から盗用したのか。劉鉄雲はなぜ抗議しなかったのか。両者の盗用関係を誰も知らなかったのはなぜか。これらの疑問を解決した研究者は、今まで存在しない。だが、私はいう。魏紹昌の疑問は、立論の前提が間違っているから成立しないのだ。理解の分かれ目は次の点にある。すなわち、「文明小史」と「老残遊記」が掲載された『繍像小説』は、李伯元が死去したのちも発行を継続していた。この事実を押さえる研究者だけが謎を解く。

要約：盗用した「文明小史」は、李伯元の死後に発行された『繍像小説』に掲載されている。だから、盗用事件は、李伯元と劉鉄雲のあいだには存在しない。盗用したのは欧陽鉅源である。劉鉄雲は、自分の没原稿が盗用されたとは知らなかった。もし知っていたとしたら息子の劉大紳に話していたはずだ。だが、劉大紳の証言は残っていない。盗用の事実を知らないのだから抗議もしていない。「文明小史」は、雑誌連載後、単行本が１度出版されただけだ。長い間読むことのできなかった作品である。「老残遊記」から盗用した部分があることなど、専門家でさえ知らなかった。魏紹昌の疑問が成立しない理由である。

くり返すほどに重要だ。李伯元が死去してのちも『繍像小説』は継続発行されていた。私は、この事実をしつこいくらい文章にしている。その意味するところの最大のものは、「文明小史」の最後部分は、今まで考えられてきた李伯元の筆になるものではない、ということだ。従来の定説をくつがえす私の主張は、中国でも注目する研究者はいない。『清末小説』第27号（2004）に投稿のあった中国からの文章に、あいかわらず魏紹昌の文章を定説あつかいにして疑うことなく引用している。編集途中だったから著者（注：王燕）に注意をうながすと、私の論文を読んでいないからどうしようにもない、とのご返事である。私が書いた漢語論文を送ったが、その研究者は文章を訂正することはなかった。私以外に

異論を提出している人がおらず、納得できなかったらしい。そのために、発掘した資料を提示しているのだが、理解しなかった。2016年現在も状況に変化はない。『繍像小説』発行遅延を認めながら「文明小史」の著者について考えが発展していかない。それが中国学界の現状だ。

魏紹昌論文については、以前、検討したことがある。資料が集まる過程で、私の考えも変わった。魏紹昌論文をあらためて検討した理由である。なお、附録の「『繍像小説』刊行一覧」は『繍像小説』の発行遅延時期についての最新資料である。本文中にも注したが、本書所収の論文47「『繍像小説』発行遅延について――王文君氏へ」と共有する。

「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」とよばれる１件は、清末小説研究の分野において比較的広く知られている。

人の目を引く理由は、李伯元の「文明小史」が、劉鉄雲の「老残遊記」から文章を盗用、ことばをかえていえば無断借用しているからだ。あからさまで、ほかに例を見ない。

1961年３月25日、この事実を指摘した魏紹昌の文章「李伯元与劉鉄雲的一段文字案」*1が、『光明日報』に掲載された。彼は、それにくわえて関連する疑問３点を提出してもいる。だが、疑問はそのまま放置され、誰も解答していない。

すでに長い時間が経過した。その間、研究が進み、新しい事実が発掘されている。「文明小史」と「老残遊記」を掲載した雑誌『繍像小説』そのものについて、ある定説がくつがえった。魏紹昌の立論した前提が変化しているということだ。

前提の変化をふまえて、私は以下のことを指摘した。

すなわち、盗用問題だけでおさまらないこと、『繍像小説』の発行遅延問題がからんでいること、などだ。

前提が変わったことを知れば、魏紹昌の掲げた論文名「李伯元与劉鉄雲的一段文字案」に誤りが含まれていることに気づく。

しかし、魏紹昌は彼の生前において、私が提起した問題に答えることはなかった。また、のちの研究者は、問題が存在していることをほとんど理解しない。

立論の前提を含めて、魏紹昌のいう疑問全体をあらためて検討する。

1　魏紹昌論文

魏紹昌論文の主旨は、つぎのとおり。

李伯元の「文明小史」と劉鉄雲の「老残遊記」は、李伯元が主編をつとめる『繍像小説』(商務印書館出版。1903年）に連載された。しかし、「老残遊記」は、第13回で掲載が中断した。その原因は、『繍像小説』の編集者が、著者の劉鉄雲に相談することなく該原稿の第11回を没書にし、つづく３回を１回ずつくりあげたからだ。つまり『繍像小説』第18期に掲載された「老残遊記」第13回は、実は、第14回の原稿だった。劉鉄雲は、『繍像小説』のやりかたに立腹して原稿執筆を中止した。翌年（1904[ママ]）、「老残遊記」は、『天津日日新聞』に発表の場所を移す。第１回から掲載をはじめて、第11回の原稿をおぎなったから、それ以後に出版された単行本は、原状を回復している。

没書になった「老残遊記」第11回の内容は、申子平がのべる神秘的な議論と「北拳南革」をののしるものだ。これは、北方の義和団と南方の革命党に対する劉鉄雲の反動的政治観点を暴露しており、『繍像小説』がこの回を没書にしたのには道理がある。しかし、『繍像小説』第55期に掲載された「文明小史」第59回に、李伯元ママは劉鉄雲がののしった「北拳南革」など約1,500字あまりをそのまま盗用している。

以上は、あくまでも魏紹昌の見解である。誤解のないように。私が「ママ」と注記した箇所が問題になる（後述)。

このあとに、魏紹昌は疑問３点を掲げて、それらが解決不能であることをのべた。それを検討する前に、上に紹介した文章について補足説明しておく。

劉鉄雲「老残遊記」の執筆と『繍像小説』誌上での連載中止のいきさつ、および『天津日日新聞』に発表の場所を移動したことは、魏紹昌が記述するとおりだ。彼は、劉大紳「関於老残遊記」(『文苑』第１輯1939.4.15）の説明をそのまま下敷きにしている。

「老残遊記」は、なぜ連載中止になったのか。その理由は、1904年以降の長い期間いっさい不明のままだった。ゆえに、読者の目には２種類の「老残遊記」が

存在しており、不可解だという印象をあたえていた（後述）。連載中止から数えてほぼ35年後に、劉大紳は「老残遊記」の『繍像小説』連載について複雑な経緯があったことをはじめて明らかにする。劉鉄雲の息子だからこそ説明することができた。

注目されるのは、魏紹昌が指摘した次の事実だ。

没書になった劉鉄雲「老残遊記」第11回の文章が、のちの李伯元（ママ）「文明小史」第59回に盗用されている。

魏紹昌がのべる文章には、正確でない箇所がふたつある。「ママ」を付けて示した。

ひとつ。「老残遊記」が『天津日日新聞』に連載の場所を移した時間を「翌年（1904（ママ））」と書いているのは、正しくない。彼は、先行研究、すなわち阿英が「1904年」とのべている*2のを疑うことなくそのまま取り入れた。私に言わせると、魏紹昌は結果として間違った。

とはいえ、それは無理のないことなのだ。阿英の説明を否定できる研究者は、魏紹昌を含めて中国にはいなかった。

ふたつ。文章を盗用したのは、誰か。被害者は、いうまでもなく劉鉄雲である。問題は、盗用した人物のほうなのだ。

「文明小史」に盗用部分があるのだから、その作者が盗用した。李伯元である。魏紹昌は、なんの疑問もいだかずにそう考えた。だからこそ、論文の題名を「李伯元与劉鉄雲的一段文字案」とした。李伯元と劉鉄雲が対立していると考えたからだ。現在でも、盗用したのは李伯元だ、とほとんどの研究者が信じている。しかし、それは違う。

説明の順序から、魏紹昌が提出した疑問をつぎに示しておく。

彼は、李伯元と劉鉄雲に盗用関係があること指摘して、次の３点が説明できないという。

1　李伯元は『繍像小説』の主編であったが、みずからが没書にした劉鉄雲の原稿をなぜ自分でもういちど使用したのか。

2　劉鉄雲は、盗用についてなぜ抗議をしなかったのか。

3　「文明小史」と「老残遊記」は、当時すでに流行していたが、読者はこの盗用になぜ気がつかなかったのか。

魏紹昌は、疑問を提起しただけだ。答えようがないし追究するつもりもない、とわざわざ書いている。

それゆえか、あえてこの謎の解明にのりだす研究者は、いなかった。今にいたるまで、いわば「謎」として残っている。

魏紹昌がみずからの疑問に答えることができなかったのには、理由がある。立論の前提が間違っているからだ。ほかの研究者も同じ前提によっている。魏紹昌と結論を共有するのも当然ということになる。

2　謎を解く

魏紹昌の提出した疑問3点を検討していく。疑問点を再度示し、それが出てくる前提を明らかにする。

1　李伯元は『繍像小説』の主編であったが、みずからが没書にした劉鉄雲の原稿をなぜ自分でもういちど使用したのか。

魏の前提：『繍像小説』は、李伯元の死去によって3年分全72期を発行して停刊した。

ここにかかげた「前提」は、魏紹昌の論文には書かれていない。書く必要がないほどに研究者にとっては常識だとの認識がある。なにしろ研究界の権威阿英が、そう書いているのだ。異論など、とんでもない。

『繍像小説』は半月刊を維持していたが、主編李伯元の死亡によって刊行を中止した。李伯元が死去したのは、光緒三十二（1906）年三月十四日だ。『繍像小説』の終刊号である第72期の発行日は同年三月十五日だから、まさに李伯元の死去と一致する。

『繍像小説』の刊行に関する「定説」でもある。「定説」だからこそ、わざわ

ざ書く必要もない前提なのだ。

阿英を先頭にして、研究者のほとんどがそう信じて疑わない。魏紹昌も例外ではなかった。

だが、この間違った前提にたつ限り、うえの謎を解くことはできない。

では、正しい前提とはなにか。

『繍像小説』の発行が遅れていた。李伯元の死後も『繍像小説』は発行を継続していた、という事実だ。これを『繍像小説』発行遅延説という。

『繍像小説』は第13期より発行年月を明記しなくなる。雑誌の原物を見ればわかる。『繍像小説』第72期のどこにも「光緒三十二年三月十五日」と書かれてはいない。発行年月日は、空白になっている。

阿英が、李伯元の死去と『繍像小説』の停刊を推測によって結びつけた。それを後の研究者たちが、検証ぬきで信じこんでいるだけだ。

私は、雑誌が実際にいつ発行されたのか、客観的な資料にもとづき検討をつづけてきた。

私が手がかりにしたのは、広告だ。雑誌の発行元である商務印書館が新聞に掲載した『繍像小説』発行遅延のおわび広告、および『世界繁華報』、天津『大公報』、『中外日報』、『申報』、『東方雑誌』、『消閑録』などに見られる出版広告である。

商務印書館の手になる発行遅延広告は、光緒三十一年二月初六日付『中外日報』、同年十二月初一日付『中外日報』、および光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に掲載された。

それらを総合して別表の「『繍像小説』刊行一覧」（注：「『繍像小説』発行遅延について――王文君氏へ」と共有する）を作成したので参照してほしい。

結論をいえば、発行が全体的に予定よりも遅れていた。発行元の商務印書館が、その事実を認める新聞広告を出している点に注目すべきだ。

『繍像小説』の発行がどれだけ遅れていたか。遅延の状況は、おおまかにいえば以下のようになる。

第１年全24冊は、光緒三十（1904）年年末に、第２年第25-48期は、光緒三十一（1905）年年末に、第３年第49-72期は、光緒三十二（1906）年年末にずれ込んで

発行されている。全体からいえば、予定を約十ヵ月ほど遅れての停刊である。

注目すべきは、光緒三十二年になってからだ。

『繍像小説』は、第３年分を発行しはじめる。第52期を発行した後に事件が発生した。李伯元が、『世界繁華報』(光緒三十二年二月十五日付）に自らの「肺病宣言」を掲載したのだ。

「肺病宣言」から一ヵ月後に、李伯元は死去する。

つまり、李伯元が『繍像小説』の編集と著作に関係していたのは、第52期あたりまでにすぎない。

李伯元の死後と四月一杯、合計すると約一ヵ月半にわたり『繍像小説』は発行されなかった。空白期間をへて閏四月初旬に第55期以降を刊行しはじめる。年末に第72期を発行して刊行を停止する。

以上が正しい前提である。

李伯元の死後も『繍像小説』は刊行を継続していた。それまでの「定説」――李伯元の死去と『繍像小説』の停刊が同時である、は事実ではない。

正しい前提にもとづけば、魏紹昌が提起した疑問はどうなるか。

盗用した「文明小史」第59回は、『繍像小説』第55期に掲載されている。その発行時期は、李伯元の死後約一ヵ月半である。ゆえに、盗用関係は、劉鉄雲と死者である李伯元のあいだには発生しえない。盗用したのは、その後を継いだ欧陽鉅源である。正確に表現しようとすれば、「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」ではなく「「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件」と書かなければならない*3。これが魏紹昌の論文名にある誤りだ。

没書にされたのは、劉鉄雲「老残遊記」第11回の原稿であった。原稿は、『繍像小説』の編集部に保存されていた。李伯元の死後、それを欧陽鉅源が利用して「文明小史」第59回に取り込み継続執筆した。

くりかえす。李伯元が没書にして、欧陽鉅源が利用（盗用）した。「文明小史」の署名南亭亭長が、李伯元と欧陽鉅源の共同筆名であると私がいう根拠でもある。

李伯元みずからが没書にしたものを、またなぜ盗用したのか、というのが魏紹昌の疑問だった。しかし、実行者がかわっているから疑問それ自体が成立しない。

2　劉鉄雲は、なぜ盗用について抗議をしなかったのか。

魏の前提：劉鉄雲は、自分の文章が盗用された事実を知っていた。

魏紹昌は、盗用の事実を知ってこの論文を発表した。当事者である劉鉄雲も、当然、盗用された事実を知っていたはずだ。魏紹昌は、疑いもなくそう思いこんだ。

盗用されたと知っていれば、抗議するのしないのという問題が発生する。しかし、盗用の事実を知らなければ、抗議が出てくる余地はない。

はたして、劉鉄雲は、自分の文章が「文明小史」に盗用された事実を知っていたのだろうか。これこそが、問題だ。

劉鉄雲は、執筆した「老残遊記」を、直接、自らの手で『繍像小説』の編集部に届けていたわけではない。中継したのは連夢青だ、という劉大紳の証言がある。劉鉄雲は「老残遊記」が掲載された『繍像小説』は読んでいる。これも劉大紳が証言している。雑誌も手元に置いていただろう。しかし、原稿が没書になった時、執筆を中止して抗議の意思を表明した。それ以後、『繍像小説』とは関係を絶っている。自分の作品が掲載されていない『繍像小説』について、劉鉄雲が興味を示すはずもない。まさか、没書になった原稿が「文明小史」に盗用されるとは想像もしていなかっただろう。

さらにいえば、光緒三十二年の正月と八月に劉鉄雲は、日本を訪問している。そのほか坤興織布工場の経営に失敗するとか、いくつかの実業経営に従事して各地をとびまわっている。上海の『繍像小説』に掲載された「文明小史」を見る機会などなかったと考える。

劉鉄雲は、「文明小史」に自分の文章が盗用されたことを知らなかった。私がそう判断する主要な根拠は以下にある。

すなわち、劉大紳「関於老残遊記」のどこにも「文明小史」に盗用された、とは書かれていないのである。該文は、『繍像小説』において没書にされたいきさつを詳細に記述しているにもかかわらず、盗用を問題にはしていない。普通に考えて、奇妙である。没書のほかに盗用までも、と大書していい事柄なのだ。劉鉄雲が盗用を知っていれば、息子の劉大紳に告げないはずがない。

ひとつつけ加える。研究者劉徳隆（劉大紳の孫）に、劉大紳はなぜ盗用問題について言及していないのかと質問したことがある。それには気づかなかったという返答だった。劉家にその伝承はないらしい。

「老残遊記」と「文明小史」の本文を比較対照する人もいなければ、盗用の事実に気づいた人物も、光緒三十二年当時は劉鉄雲を含めて誰もいなかった。

結論は、ひとつだ。劉鉄雲は盗用の事実を知らなかった。ゆえに、抗議をするわけがない。息子の劉大紳に話すこともない。

魏紹昌は、盗用に関する自分の知識を無意識のうちに劉鉄雲に投影してしまった。ありえない疑問を作り出した。ここでも、彼の疑問は成立しない。

3　「文明小史」と「老残遊記」は、当時すでに流行していたが、読者はこの盗用になぜ気がつかなかったのか。

魏の前提：「文明小史」と「老残遊記」は、当時すでに流行していた。

魏紹昌のいう「当時」というのは、「文明小史」第59回が発表されたころを指すと思われる。光緒三十二年（1906）だ。

彼は、1960年代の感覚でこの疑問を提出している。60年代であれば、「文明小史」も「老残遊記」も広く知られた作品となっている。だが、光緒三十二年の「当時すでに流行していた」とおおざっぱにいうことはできない。

劉鉄雲の『老残遊記』初集20回は、『天津日日新聞』連載が完結したのちに単行本として発行された。

しかし、読者の前には長い間にわたって２種類の「老残遊記」が存在した。

ひとつは、『繍像小説』に連載されていた「老残遊記」だ。理由も明らかにされず第13回（実は第14回）で中断している。

もうひとつは、『天津日日新聞』連載のもの。初集20回本として多数の出版社から単行本が刊行された。

両者の本文の違いを調査したのが、阿英だ。

阿英がなぜ調査することになったかといえば、その前に趙景深の文章がある。

趙景深が書いているのは、こうだ。彼の父親が、『繍像小説』から抜いた「老

残遊記」を見せて、出回っている単行本とは第９回から第11回の部分が異なるという。今、『繍像小説』本は手元にないので、それを所蔵している阿英に答えてもらいたい*4。

それを受けた阿英は、『繍像小説』連載と亜東図書館本を使用して本文の対照をした。その結果を「老残遊記校勘記」*5と題して発表したのが、ようやく1941年になってからだ。亜東図書館本には見える第11回が、『繍像小説』には掲載されていない事実を指摘している。内容が異なるというだけで、その理由までは説明しない。

「老残遊記」は、多数の出版社が刊行するほどの有名作品であった。しかし、その初出誌『繍像小説』で連載中止になった経緯について1941年の阿英は知らなかった。その経緯を公表した劉大紳「関於老残遊記」(1939）を読んでいなかったと考えられる。

専門家の趙景深、阿英であっても、そういう状況である。２種類の「老残遊記」のどちらが本物か、判断をつけかねている。「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係にいたっては、趙景深はまったく気づいていない。また、1941年の阿英も知らないのは同じだ。盗用関係があることが、一般に知られていなかった証拠といえる。

もうひとついうならば、出版の様子が異なる。

「文明小史」は、『繍像小説』で連載を終了した直後の丙午年十月九日（1906.11.24）に商務印書館から２冊本で発行された。しかし、その後、1955年になるまで単行本で出版されたことはない。ほとんど忘れ去られた作品だったのだ。楊世驥も1945年時点で読むのがむつかしいと書いている*6。

それをわざわざさがしだして文章にした楊世驥すら、「文明小史」に「老残遊記」からの盗用部分があることには言及しない。気づかなかったとわかる。

ここでも、魏紹昌の疑問は成り立たない。

結局のところ、彼の提出した疑問３点は、前提が間違っていた。疑問そのものが成立しない。的はずれであったということだ。

3　誤りをさかのぼる

「文明小史」と「老残遊記」の盗用関係に最初に気づいたのは、1955年の阿英だと私は見ている。魏紹昌は、自分の論文のなかで阿英の名前を出すことはなかった。阿英が「盗用事件」だと明確にのべていないから、触れなかったのかもしれない。その結果、表面上は魏紹昌が第一発見者になっている。

阿英が『文明小史』(北京・通俗文藝出版社1955.7）を出版した時に書いた「叙引」*7に興味深い部分がある。

> 彼（注：李伯元）は劉鉄雲と同様に「北拳南革」に反対していた。「文明小史」第59回のなかで1,500字を用いて「革命党は天理国法人情を破壊するものだ」とののしり、義和団は「妖怪をよそおって俗人をおどし」「国家の命をほとんどほうむりさった」という［他和劉鉄雲一様，反対「北拳南革」，在文明小史第五十九回裏，就用一千五百言詆「革命党是破壊天理国法人情」的，説義和団「装妖作怪，駭俗驚愚」，「幾乎送了国家的性命」］4頁

「北の義和団と南の革命党」に対して、「李伯元」は劉鉄雲と同じ見解を抱いていた、という。ではなぜ、阿英はその約1,500字を『文明小史』から削除したのか。偶然に同じ意見だったというだけならば削除する必要などない。文章そのものが一致していた。ここから、「李伯元」が劉鉄雲の文章を盗用したと阿英は考えた。これが削除した理由である。

阿英こそが、誤った前提にたって盗用問題をとらえていたのだ。後の研究者が、「定説」から抜け出すことができず、謎を解明することに失敗したのも無理はない。

【注】

1）初出以外に、つぎの文集に収録されている。『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12。『中国近代文学論文集』(1949-1979)小説巻　中国社会科学出版社1983.4。晩清小説大系『文明小史』台湾・広雅出版有限公司1984.3。魏紹昌『晩清四大小説家』台湾・商務印書館

1993.7

2）阿英「関於老残遊記二題」『小説二談』上海・古典文学出版社1958.5。つぎのように書く。「刊載時期，在商務輟刊之翌年，即甲辰（一九〇四年）」61頁

3）参考：樽本「「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係を論じる」『中国文芸研究会会報』第57号　1986.1.30。『清末小説論集』所収

4）趙景深「老残遊記及其二集」『小説閑話』上海・北新書局1937.1。258-259頁

5）魏如晦（阿英）「老残遊記校勘記」『文林月刊』第6期1941.11。「《老残遊記》校勘記」『小説四談』上海古籍出版社1981.12

6）楊世驥「文明小史」『文苑談往』上海中華書局1945.4／1946.8再版。79頁。『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12。晩清小説大系『文明小史』台湾・広雅出版有限公司1984.3。『中国近代文学論文集』（1919-1949）小説巻　中国社会科学出版社1988.5

7）また、阿英「《文明小史》叙引」『小説四談』上海古籍出版社1981.12。154頁

附：『繍像小説』刊行一覧

凡　例

青色印　第１年24期　第２年48期　第３年72期の実際の完結刊年

黄色印　注意すべき事項

*印　王文君「就《申報》刊《繍像小説》廣告——與樽本照雄先生商榷」『清末小説から』第114号　2014.7.1　王論文により『申報』部分を訂正加筆した。注：「光緒三十三年五月初一日　第4版　第72期」は未記載

**印　陳大康『中国近代小説編年史』全６冊（北京・人民文学出版社2014.1。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

3*印　劉穎慧『晩清小説広告研究』北京・人民出版社2014.9。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

4*印　文娟「附録：近代《申報》小説広告編年」『結縁与流変——申報館与中国近代小説』桂林・広西師範大学出版社2009.3。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

5*印　文娟2016.1.30付メール。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

『繍像小説』刊行一覧　2016.1.30

光緒年	月	日	繍像小説 期	世界繁華報	(天津)大公報	中外日報	申　報	新聞報	東方雑誌	備　考
二十九 癸卯 1903	五	初一	1			**初五　1		初五　1		初七 1 同文滬報
		十五	2		廿七　1	3*廿五　2	*十八　数冊	廿四廿五　2		(四月朔　張元済が李伯元を主編に招聘する)
	閏五	初一	3					十五創刊号再版広告		
		十五	4		**廿八　1-3	**十八　3		十八　3		
	六	初一	5		初三-十二 1-3	3*十三　4		十三　4		
		十五	6		廿三　1-4					廿四 3 游戯報
	七	初一	7							
		十五	8	廿　5	廿六　5	3*十八　5		十七　5		
	八	初一	9			**十六　6		十五十七　6		
		十五	10		廿七　6	3*廿七　7		廿六　7		
	九	初一	11	初三　7	初六　7	**十一　8		十一　8		
		十五	12		十八　8					
	十		13(推定)		十二　4続到					初一 商務印書館金港堂合弁
			14 〃			**廿五　9		廿五廿八　9		
	十一		15 〃		初十　9					初八 1-9 消閑録（×推定15 詠日俄交戦也　時期的に矛盾)
			16 〃		廿三　10	*3十六　10		十六十九　10		廿四 10 消閑録
	十二		17 〃							
			18 〃			**廿二　11		廿一廿二　11		廿三 日露開戦(1904.2.10)
三十 甲辰 1904	正		19 〃	初八　1-12	初六　11				1現出至14	初六 11 消閑録
			20 〃		三十　12	**廿三　12		廿三　12		十二 12 消閑録
	二		21 〃		初十　13	3*初四　13		初四初五　13	2　〃	
			22 〃		廿六　14	**十九　14		十九　14		
	三		23 〃						3　17	
			24 〃							
	四		25 〃	初五　15	初七　15	**初一　15		初一　15	4　〃	(15 詠日俄交戦也　時期的に矛盾しない)
			26 〃			**廿三　16		廿　16		十八 詠日俄交戦也　遊戯報　**廿九　16　時報
	五		27 〃		廿七　17			十五　17	5　18	**十六　16　時報
			28 〃		廿九　18	**十六 17 廿四18		廿二　18		18 老残遊記13回で中断（実際の原稿は14回)
	六		29 〃						6　〃	**初三　18　時報
			30 〃							
	七		31 〃						7　〃	
			32 〃		廿四　19	**十八　19		十八　19		十八 19 時報
	八		33 〃						8　〃	
			34 〃							廿九 商務印書館編訳所移転
	九		35 〃						9　〃	
			36 〃		廿八　20	**十九　20		十九　20		十九 20 時報
	十		37 〃						10　〃	
			38 〃			廿　21		廿　21		
	十一		39 〃	初十　23		初一22 初十23		初一初二22 初九十一23	11　〃	
			40 〃		十六　21,22	廿三　24		廿三廿四　24		
	十二		41 〃		初二　24	初四　24			12　〃	
			42 〃							
三十一 乙巳 1905	正		43 〃						2-1　×	十二 劉鉄雲、李伯元面会
			44 〃	廿八　25						
	二		45 〃			初六　25-29	*初六　25-29	初六　25-29	2預定25-48	初六 遅延広告(中外日報、新聞報)
			46 〃			十八　30,31	*廿一　30,31	十四　30,31		
	三		47 〃			初九　32		初九　32	3　〃	
			48 〃							
	四		49 〃						4　〃	
			50 〃			3*　十七　33,34	*廿八　32-34	十七　33,34		
	五		51 〃						5　×	
			52 〃							
	六		53 〃			初五　35	*初七　35	初六　35	6　25-48	4*初六　35 申報
			54 〃			廿一　36-38	*廿三　36-38	廿一　36-38		
	七		55 〃			初八　39,40		初六　39,40	7　〃	
			56 〃				*十六　39,40			
	八		57 〃			十一　41,42	十二　41,42	十一　41,42	8　×	
			58 〃							
	九		59 〃				5*廿三　43		9　×	初一 老残遊記『天津日日新聞』で連載開始
			60 〃			**廿五　43	廿七　43	廿三　43		
	十		61 〃			初七　44	*初七　44	初八　44	10　×	初三 老残遊記11回原稿を復元
			62 〃				5*廿七　44			初四 老残遊記15回原稿を新しく執筆
	十一		63 〃			初五　45,46	初五　45,46	初六　45,46	11　×	
			64 〃				*十一　45,46			
	十二		65 〃			初一　47,48	*初八　47,48	初三　47,48	12　×	初一 遅延広告(中外日報)
			66 〃			3*十五　49,50	十五　49,50	十六　49,50		
三十二 丙午 1906	正		67 〃			**十五　50	**十五　50	**十七 50	3-1　×	劉鉄雲日本訪問１回目
			68 〃				廿九　49-52	廿九　49-52		
	二		69 〃	十五 李伯元肺病宣言 52 遅延広告		初二　49-52	*初六　49-52		2預定49-72	初六 遅延広告(中外日報)
			70 〃			初六　52				
	三		71 〃			廿　49-52	*廿四　53,54		3　×	十四 李伯元死去
			72 〃			廿五　53,54	*三十　53,54	廿五　53,54		53　文明小史57回、活地獄27回（×李伯元作ではありえない)
	四								4　×	
	閏四						*初九　55,56		5　49-72	55　文明小史59回、活地獄29回（×李伯元作)
										56　文明小史60回、活地獄30回（×李伯元作)
	五								6　×	
	六					初二　55,56	初八　57	初三　55,56	7　49-72	57　活地獄31回（×李伯元作)
					十六-廿六 57	初八　57,58	*十一　57,58	初七 57 初九 57,58		58　活地獄32回（×李伯元作)
	七				初三-廿　57				8　現出50	59　醒世縁弾詞12回(×李伯元作)
						廿二　58,59	*十三　59,60	廿二　58,59		60　活地獄33回（×李伯元作)
	八				初五　57	初二　60,61	*初一　60,61	初一　60,61	9　〃	劉鉄雲日本訪問２回目 61　活地獄34回（×李伯元作)
						廿　62-64	*十九　62-64	十九　62-64		63,64　活地獄35,36回（×李伯元作)
							*廿八　61-64			
	九						4*初四　62-64		10　61	
	十								11　〃	初九　『文明小史』商務印書館単行本
						廿六　65-67		廿七　65-67		65　活地獄37回（×李伯元作)
	十一						*初五　65-67		12　〃	十五 呉趼人「李伯元伝」『月月小説』1年3号
							*廿九　69	廿九　67-69		68,69　活地獄38,39回　醒世縁弾詞13,14回（×李伯元作)
	十二					初二　69	*初八　68-70		13　72	初一 蒋維喬、談小蓮と相談 70,71　呉趼人「活地獄」40-42回
						十八　72	*十八　72	十七　72		十八 改良広告(中外日報)　72　欧陽鉅源「活地獄」43回
三十三 丁未 1907	正					十一 現満72	4*十三 現満72		4-1　〃	十八 現満72　時報
	二								2　現満72	
	三								3　〃	

【参照】

光緒三十三年九月初三日（1907.10.９）付『時報』『中外日報』ほかに、「商務印書館／南亭亭長／繍像小説」という商務印書館自身の広告（劉徳隆の指摘あり）

[編年③1304]『中外日報』光緒三十三年七月初六日（1907.8.14）、初八日、十四日、二十五日、八月初一日、九月初三日、初十日、十一日、十三日、十六日、二十三日。『時報』九月初三日、十三日。『神州日報』七月十三日

文迎霞「関於《繍像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』第38巻第３期2006.5.15

陳大康「晚清《新聞報》与小説相関編年（1903-1905）」『明清小説研究』2007年第２、３期（総第84、85期）　2007発行月日不記

陳大康「中国近代小説史料――《繍像小説》中小説史料編年」『文学遺産　網絡版』劉霞によると2010.4.5（未確認）　電字版　『新聞報』広告を主として採録する

劉　霞「関於《文明小史》的刊行時間」『現代語文』2012年第1期（総第454期）2012.1.5

欒偉平「夏曾佑、張元済与商務印書館的小説因縁拾遺――《繍像小説》創辦前後張元済致夏曾佑信札八封」『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期（総第174期）2014.1.15。引用して四月朔「商務館現求助於繁華報館主人李伯元，其筆墨亦平浅，然此外更無人」

文　娟「附録４：《申報》所刊雷瑨的謝贈文字」1905.8.16（陰暦七月十六日）には「第四十九、五十冊《繍像小説》」とある。送られてきた写真を見ると「第四十九五十冊繍像小説」となっている（2016.1.30受。写真参考）。前後左右の資料からたぶん誤植だろうと考える。『文学場域変革中的交融共生――掃葉山房説部及雑誌刊行研究』上海大学出版社2015.11。275頁

『申報』1905.8.16（光緒三十一年七月十六日）

↓ 雷瑨謝贈（文娟氏提供）

志謝商務書館惠贈書籍

第五冊初等小學國文教科書　是書共計英六十課文筆淺顯而圖繪尤極精細故有五彩圖兩張設色鮮明頗能引兒童趣誠初等小學堂不可不備之書也

第四十九五十冊繍像小説　讀史者讀近代之史較之古史易於領會以時代近而風俗同也小説亦然雖文筆有所稚而人名地名則寓言入九頗耐人尋味至此外詞曲各種亦多新奇可喜誠足開智慧而廣見識也（未完）

本館告白

近日紙價奚約之昂風潮未息投書賜顧者日必數起爰於本月十五日始另立寄信一門以便將惠示者排次登錄惟一切須由現

1906.5.31(光緒三十二年閏四月初九日)

↓

志謝贈書　○昨承商務印書館將以簡易國文課本簡易數學課本各二冊編為歷史地理修身格致等課本各一冊語言淺顯而事實頗完備最合於半日學堂後學堂星期學堂等之用又繍像小說五十五六兩期其中文明小史已成全編以立憲猜穴頗具含蓄不盡之意新編之花神夢哀感頑艷海人心脾不堪於冷風凄雨時讀之一

研究雑誌の最先端

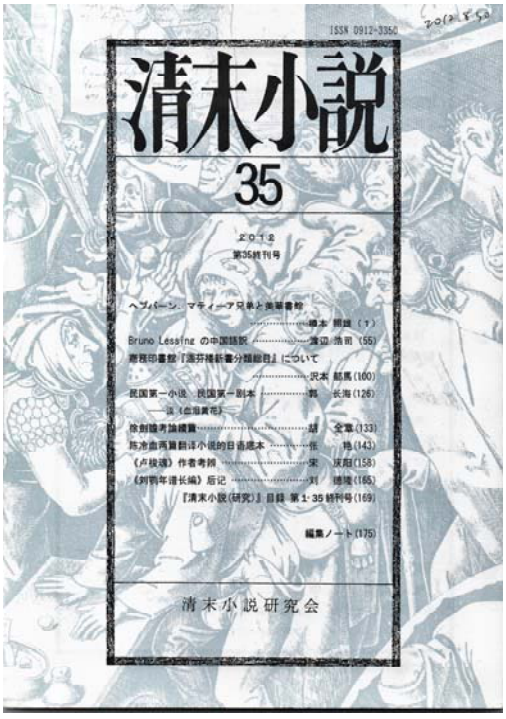
大阪経済大学図書館『としょかん』第72号（2005.10.1）に掲載。年刊『清末小説』および季刊『清末小説から』を発行する理由と経緯を述べ、それらが研究雑誌の最先端であると紹介する。あわせて、日本における研究情況一般についても説明する。図書館報では、図書に関する記事を読みたい。その考えにもとづき本来のあるべき姿に引き戻した。そうできる機会があったからだ。判型もA4に大きくし、表紙はカラーを使用する。年２回の発行には毎号私が執筆すると決めた。大学の一般向け出版物であるが専門論文をあえて掲載した。自分でおもしろく感じる文章は、ほかの人も興味をもってくれるはずだ。その逆はありえない。

私が年刊『清末小説』を主宰して28年になろうとしている（注：2016年現在39年)。のちに季刊『清末小説から』を加えて合計２誌を長年にわたって編集発行しているのには、当然ながらその背景がある。

気ぜわしいのは、社会の動きだけとは限らない。日常生活とはほとんど関係の生じるはずもない中国文学の研究においても、同様なのだ。

大きな理由のひとつは、短期間のうちに研究成果をあげなければならない、という風潮の浸透である。

息の長い、じっくり腰をすえた研究は、その成果がいつになれば出てくるのかわからないがゆえに敬遠される。なにしろ、学術振興会の科学研究費請求に際しても、１年単位で達成目標を掲げなければならない。器具を使用した実験であれば、はらう努力とその先の結果が最初から見えているのかもしれない。だが、中国文学についていくら解明すべき目標を定めたところで、はたして資料的な裏付けを得ることができるかどうか、はなはだあやふやにならざるをえない。あるは



第35終刊号 2012

ずの資料が、ない、という可能性は大きい。中国の図書館では、目録に掲載されている図書ですら、実際には在庫していないことが日常茶飯事なのだ。ましてや、中国から離れた日本で研究をつづけているのだから、資料的な不足はいかんともしがたい。

結局のところ、達成できるかどうかわからない巨大な研究課題は、重要であろうとも最初から放棄される。そのかわり、１年後には論文を確実に書くことができそうだ、という小さな目標に設定せざるをえなくなる。

最初は、対象をしぼりこまなくては、とても研究成果など望めない。成果がなければ、未来もなくなる、というのが研究界の現状なのである。

こうして、細分化した専門分野とともに、視野は確実にせばまる。

結果として、中国文学全体をおおいつくして研究する巨人は、すでにまれになっている。古典文学から現代文学まで、その対象作品は膨大な数にのぼる。中国文学史にしても、複数の執筆者で分担するのが普通である。大きく２分して記述されることが多い。古代から清朝まで、多くは1840年のアヘン戦争あたりまでの

部分と、1911年の辛亥革命を経て1919年の五四文学革命からはじまって現代にまでいたる。詳細な文学史では、それがさらに細かくわけられたりする。

自分の専攻ときめた分野と、その成果を発表する媒体にズレが生じるのが普通だ。

媒体には、いくつかある。大学の紀要、論集、学会誌などがすぐ思い浮かぶ。成果を要求するならば、その発表場所としての紀要、論集を用意しなければならないのは当然のことだ。読む読まないは別の問題である。

学会誌で、私の加入している研究団体をいえば、日本中国学会のものがある。古典から現代まで、それも哲学、文学、言語にわたって総合的だ。総合的だから、私の専攻する清朝末期の小説についての論文は、ほとんど掲載されない。現代中国学会の機関誌は、対象が現代であって文学に限らない。こちらにも、まず清末小説の論文は載らない。日本中国語学会は、語学が専門だ。中国社会文化学会もその対象範囲は広い。これらのすべてが、私にとってははるかかなたの存在である。

ほかの研究分野では、細分化したままに専門誌が存在しているのだろう。だが、中国関係の学会でいえば、そこまで細かく分かれていない。だからこそ、大学の研究室が独自に、あるいは専門家が複数集まって自分たちの研究雑誌を創刊する。

注意深い読者なら、すぐに気づかれたことであろう。上に述べた中国文学史の区分には、空白部分がある。すなわち1840年から1919年までの期間だ。古代文学の末尾に当り、近現代文学では頭の直前部分に相当する。いずれの時代区分からも敬遠されている期間だ。自分たちの守備範囲ではない、という認識があるらしい。

私の専攻する清朝末期（略して清末）小説研究という分野は、まさにその空白部分と重なる。研究者が豊富に存在する分野と、そうではない分野があるとすれば、私は、たまたま後者に属している。専門家も日本にはほとんどいない。だから、拙著『清末小説叢考』（汲古書院2003）の書評を行なうようにと本学学会からいわれたときは、困惑せざるをえなかった。

同好の士が多数いる、あるいは自分の専攻する分野についてその専門雑誌があるという人は、よほど環境にめぐまれた研究者だと私には見える。

清末小説の研究雑誌について、中国の情況を説明しておいたほうが理解しやすい。

研究の本場が中国であることはいうまでもない。研究者も多い。当然、清末小説研究誌も発行されていると思われるだろう。ところが、そうではない。1980年代に『中国近代文学研究』が中山大学中文系の編集で出されたことがある。３号で停刊となった。華南師範大学近代文学研究室編『中国近代文学評林』が第７輯まで発行されている。だが、これは既発表の論文を再録するだけの研究論文集だ。専門家の集まる中国近代文学学会（ある著書には「国家一級学会」だと誇らしげに書いてある）は、機関誌を持たない。各大学の紀要、あるいは研究所の論集には、清末小説関係の論文がときたま載るだけ。南京の江蘇省社会科学院文学研究所が発行する『明清小説研究』に関係論文が登載されるのが目を引くくらいだ。中国には、清末小説研究の専門雑誌がないという事実を書かなければならないのは残念である。

自分の専攻分野に適合する発表媒体が存在せず、また、他人の努力をあてにしていては出現がいつになるかわからないばあいは、どうするか。この現実を克服するためには、解決策はひとつしかない。自分で専門研究雑誌を創刊することである。研究課題のみを追求し営利を目的としない。出せば赤字に決まっているから採算は最初から度外視せざるをえない。お金の問題ではなく、研究上必要だから発行する。

そういう理由で、私の主宰する年刊誌『清末小説』および季刊誌『清末小説から』がある。

『清末小説』は、1977年に創刊した（創刊時は『清末小説研究』と称し、第８号より改題）。中国では「文化大革命」が終了したばかりだ。研究再開の動きがあるかなしかの時期だった。日本での活動のほうが、はるかに先行したことになる。

以来、世界で唯一の清末小説専門研究誌が日本で発行されつづけている。2004年までに27号を出した（注：第35号2012年で終刊）。創刊号から第７号までは、A5判、活版印刷。第８号よりB5判に改め、オフセット印刷である。年１回、清末小説についての長編論文、資料を掲載する。一方、『清末小説から』は年４回の発行で、短編論文と研究情報を主として登載する（注：第124号をウェブ公開して現在も継

続中)。

世界で唯一の専門研究誌だから、専門家の投稿が中国はもとより、香港、台湾、オーストラリア、ドイツ、アメリカなど各地からある。使用言語は、日本語と中国語だ。見た目には、中国語の原稿の方が多数を占める。「発見のある」論考が掲載されるのは当然として（そうなるように編集している）、さらには新出資料の発掘がある。研究の最新情況も反映しており、この研究分野では不可欠の専門誌であるのも必然なのである。

最近の例をあげよう。『清末小説』第27号には、周作人が漢訳したアリ・ババ物語の『侠女奴』を検討した論文を掲載する。その英文原作にさかのぼって追求する論考としては最初のものだ。また、商務印書館と金港堂が合弁を解消した文書を発掘している。これは新資料の発見であり、しかも日本で実現した。研究者が見て驚いたのも当然だ。『清末小説から』第78号では、『迦因小伝』（ハガード H. R. Haggard 著『ジョーン・ヘイスト Joan Haste』）についての魯迅の説明が間違っている事実を指摘する。問題が存在していることを発掘し、さらに深く展開している。従来見られなかった資料を提示しつつ論を進めているから説得力に富む。

研究雑誌の最先端は、はるか遠くの仰ぎ見る場所ではなく、気がついてみれば自分の手元にあったわけだ。

『清末小説研究論』を語る

大阪経済大学図書館『としょかん』第73号（2006.4.1）に掲載。『清末小説研究論』(2005）を自分で解説する。内容を紹介しながら、中国の研究情況と日本のそれを総括することが主旨となる。要約すれば、過去30年間における中国の研究情況は「壊滅状態から再生へ」であり、日本の研究情況は「受信から発信へ」となる。

清朝といえば、中国にきまっている。ついこの前の王朝だ。その末期に出現した小説群を清末小説と称する。中国では「晩清小説」とよびならわす。対象の時期は、主として1902年前後から1911年まで、日本でいえば明治30年代半ばから大正直前までのせいぜい約10年間にすぎない。

「清末小説研究」に関する私の文章を集めて本書が成った。研究論文集ではなく、研究情況についてのべるものだから範囲は広くなる。資料発掘の記録、文献案内、書評、研究者との交流記、あるいは思い出、国際学会参加報告、海外での書物探索、論争などなど、数えてみれば長短あわせて80本の文章である。

発表の時間順に配列したのは、1975年から2004年までの約30年間にわたる研究情況の変化を読みとることができるように考慮したためだ。ここでいう研究情況とは、中国と日本についていう。

最初の文章は、清末小説研究に使用される基礎文献の紹介である。研究には小説専門雑誌の探究が不可欠であると指摘した。今にいたるまでこの考えは変わっていない。変化するどころかますます強固になっている。自分でも驚くくらい揺らいでいない。

樽本『清末小説研究論』清末小説研究会2005.8.1
清末小説研究資料叢書９

日本に存在する中国の小説雑誌をさがすことからはじめた。その総目録を作成する作業を続けているとも書いている。『大阪経大論集』に成果を発表しはじめていた。日本の公共機関で所蔵しない雑誌の目録も作った。回目までも採取している点では、当時から現在にいたるまで、それほどの緻密な目録は公開されたことはない。日本と中国を通じて、有用な資料だと今でも私は考えている。ところが、ある人（すでに定年退職した）が、大学論集に掲載せず目録だけ別に印刷してはどうか、と面と向かって私にいう。大学論集は論文を載せるものだから資料ははずせ、という意味である。総目録のもつ価値が理解できないのだ。自分が理解できないものには価値も認めない、という姿勢にはあきれた。委員会で検討してほしいと私が答えると、サタやみになった。というような無理解な情況のもとで研究を続けていたのをあらためて思い出す。私は性格が本来おだやかである。当時は、変なことをいう人だ、と感じただけだった。今、書いているうちに過去がよみがえってきて不愉快になる。怒りさえわきたつ。昔の文章を読み直すのは、なつかしいばかりとは限らない。なるほど、時代遅れのことをやっていたし、今

でもそうだと痛感するのだ。

この30年間をふりかえって中国と日本の研究情況はどうか。

中国についてひとことで表現すれば、「壊滅状態から再生へ」となる。

「文化大革命」時期は、研究界も壊滅状態だった。清末小説研究についていうと、それ以前から批判があった。「文革」後にようやく遅ればせながら冷静な姿勢で研究が進められるようになったということだ。

私が実際に体験したのは、「文革」終了10年後の1987年、淮安で開催された劉鉄雲学会においてだった。名誉回復大会であることを小声で知らされて少なからず驚く。清末の作品である「老残遊記」の著者劉鉄雲を記念する学術大会だとばかり思っていたからだ。中国でいう名誉回復とは、現在生活している子孫に政治的迫害を加えないという宣言である。なんと生々しいことか。学術研究を政治運動から切り離すためには、そのような手続きが必要であるとは日本にいる私には想像もつかなかった。同時代を生きながら、中国と日本ではその社会構造がまったく違うことを強く感じたのだった。その学会のためにわざわざ修復した劉鉄雲故居だが、現在にいたるまで私を除いた日本人が訪問したという記事を読んだことがない。周恩来が育った場所として触れられることはあってもだ。

中国で公表された研究成果は、紹介するように努めた。たとえば、陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』(1993)であるとか、「中国近代文学大系」シリーズの史料索引集(1996)など。後者については、相当詳細に検討し、誤りも指摘している。また、『李伯元全集』(1997)、于潤琦編「清末民初小説書系」(1997)、王継権ほか編『中国近代小説目録』(1998)、『呉趼人全集』(1998)、郭延礼著『中国近代翻訳文学概論』(1998)、李錫奇編著『南亭回憶録』(1998)、范伯群主編『中国近現代通俗文学史』(2000)、『唐弢蔵書目録』(2003)、季刊『明清小説研究』などの叢書名、書名、雑誌名を見てもらえれば、中国で基礎資料の整備がかなり進んでいることが理解できるだろう。まさに、「再生」なのである。

中国で質量ともに充実した研究が継続されているのだから、日本における研究はもののかずには入らないだろう。こう考えるのが普通だ。たしかに、資料の存在からいっても、そういう面があることを私は否定しない。

それでは、日本で清末小説を研究をする意義はないのか。そんなわけはない。

日本における清末小説研究をひとことでいうならば、「受信から発信へ」となる。「発信」するとは、引用する価値のある情報をこちらから提出するという意味だ。

1970年代に私が書いた文章は、研究の基本文献を紹介するものだった。前述したごとく、当時、発行されていた小説専門雑誌群を重視するのには、理由がある。清末という時期を特徴づけるのは、印刷技術の急速な発展にともなって出現した定期刊行物、雑誌の存在なのだ。雑誌に小説が掲載される。だからこそ雑誌の総目録を作成する必要を感じ、それを実行していた。この作業は、のちの『清末民初小説目録』(1988、1997、2002。補記：2011、2013、2014、2015)、『清末民初小説年表』(1999)に結実する。その特徴は、各作品の雑誌初出から単行本までを詳細に追跡した目録、年表であるという点である。中国でも類を見ない詳細な目録は、それだけで有力な「発信」だということができよう。

小説雑誌を重視するのは、私にとってみれば必然の研究姿勢である。ところが、中国の研究界では、この当然すぎる発想は、誰も持ち得なかった。研究の権威であるあの阿英ですら、雑誌重視の姿勢を堅持することができなかった。なぜそれがわかるかといえば、研究の基礎文献（現在でもそう堅く信じている中国人研究者は多数いる）であった阿英編「晩清小説目」(1954／1957）は、雑誌初出を採取しているといってもそれが不徹底なのだ。阿英ならば、資料に不自由な時代だったからやむを得ない側面があった、ということができるかもしれない。だが、後の研究者のだれひとりとして阿英を継いで「晩清小説目」を編集しなおさなかった。王継権ほか編『中国近代小説目録』は、翻訳を無視する。その時点で、彼らは阿英の後継者になりそこねた。「文革」を原因にしてもかまわない。だが、私にいわせれば、清末において小説雑誌が繁栄したという事実を筆にしていても、実際に雑誌そのものを手にする研究者は少なかったのではないか、と想像する。だから、雑誌を主体とした小説目録を作成するという考えそのものが出てこなかった。逆にいえば、雑誌群を確認した研究者はいたが、そこから目録作成へむかう方向には価値を見いださなかったのだ。地道な作業よりも、論文を書く方が楽しいにきまっている。

陳大康『中国近代小説編年』(2002)は年表だ。ただし、1840-1911年までの清末

で終わっている。拙編『清末民初小説年表』が民国初期の1918年あたりまでを網羅しているのに及ばない、と指摘しなければならないのは残念なことだ。『清末民初小説目録』が、増補をくりかえして３度目には中国の斉魯書社から出版されたのも理由のないことではない。

日本から世界に「発信」しているというのは、私が年刊『清末小説』および季刊『清末小説から』を主宰しつづけていることを含んでいる。本書に収録した文章のうちの多くは、この両誌に掲載した。

過去の日本において清末小説を研究する専門雑誌が発行されたことはない。現在の中国でも、そのようなものは存在していないのだ。さらにいうなら、『清末小説』と『清末小説から』はウェブサイトで全世界にむけて公開している。今まで「受信」するばかりだったことを考えれば、日本からある程度の「発信」が実行されている、と謙虚にいう。

最後にひとこと。

本書の各文章は、私がその時々に重要だと感じた研究課題について書いたものだ。時流に合わせたわけではない。ゆえに、30年前の文章であっても、その内容を訂正する必要がなかった。誰もいわないだろうから、自分で書いておく。

中国の研究者と討論をする

――『清末小説研究集稿』に関連して

大阪経済大学図書館報『としょかん』第75号（2007.4.1）に掲載。『清末小説研究集稿』を自分で解説する。とくに論争性のある論文についてその状況、背景などについて説明を加える。実例のいくつかを省略して発表した。今、もとの姿にもどす。本書が出版されたとき、私はビールでひとり乾杯したことを思い出す。もとはといえば、その財団の出版援助に応募していた。だが、日本の審査員には本書の価値を理解してもらえなかったようだ。私はそういう分野を研究しているという意味である。

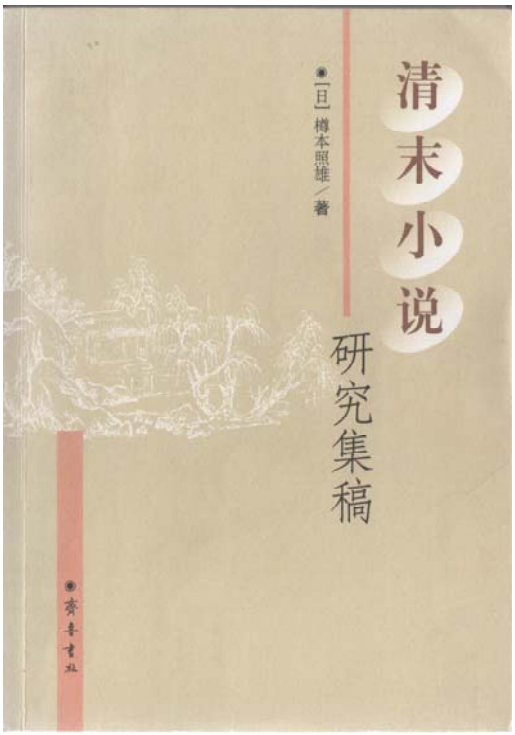
拙著『清末小説研究集稿』（陳薇監訳。中国・斉魯書社2006）は、文字通り清末小説についての研究論文集である。今までの私の著書と異なるのは、１冊まるごと中国語（漢語）であることだ。

日本人が著者として名前を掲げる中国語論文集には、２種類がある。ひとつは、日本語の単行本が出版された後にそれを中国語訳したもの。もうひとつは著者自身が中国語で書いた著書だ。

中国語を母語としない人が、中国語で書いて本を出す。報道関係者にその例を見たことがある。だが、学術専門書では、多くはない（注：現在は少なくない）。ましてや、清末小説の研究分野では、皆無である（注：現在も同じ）。

拙著は、それらとも同じではない。どこが相違するかといえば、収録した論文の約７割は、私自らが中国語で書いて発表したもの。残りは、もとの日本語論文が他人によって中国語に翻訳された。その混合であるからだ。

該書に収録した論文のいくつかを紹介する前に、論文執筆に関する私なりの原



『清末小説研究集稿』

則をのべておこう。

複雑なことはない。新しい発見のある論文を書く。これだけだ。この原則は、使用言語に影響されない。

日本人の私が、中国文学、それも特に清末小説とその関連分野を対象として研究する時、何が重要だと考えているか。従来とは違う発見をつけ加えることを私が自分の論文に求めているのである。できれば、私の論文を引用しなければ研究そのものが成立しない、という水準をめざす。

簡単な例をあげよう。中国の老舗出版社で世界的に有名な商務印書館についてだ。該社は、過去において、日本の金港堂と合弁会社だったことがある。だが、詳細は明らかではなかった。私は、この事実を調査して拙著『初期商務印書館研究』(2000、増補版2004。補記：増補版2016ウェブ公開）にまとめた。中国にいては利用できない資料を多く盛り込んだ。その結果、日中両社の合弁という事実を、新しい資料を発掘して詳述している点でほかに類を見ないものとなる。両社の合弁についていえば、今までのどの専門書よりも詳しいと自負する。

ゆえに、中国で発表される商務印書館研究の論文に拙著の書名を参考文献に見つけることができなければ、その論文は金港堂との合弁問題については不十分な記述しかない。そう認定してよろしい。評価の試金石となっていると断言する。

学術論文の翻訳について触れておく。

中国では、翻訳は著者に断わりなく行なわれる。学術研究では、珍しいことではない。私の経験からいえば、事前に翻訳の許可を求められたことがない。

中国済南で開催されたある国際学会に出席したおりのことだ。参加者の中のひとりが近づいてきて、私に印刷物を手渡す。見れば、私の論文の中国語訳なのである。翻訳されているとはまったく知らなかった。こういうばあいは、対応に困る。ありがとう、というべきなのか、事前に知らせてほしいというべきなのか。ホウ、へえ、と返事が曖昧にならざるをえない。学術研究だから金銭問題は、基本的に発生しない。中国人にしてみれば、頼まれもしないのに翻訳して著者の論文を宣伝してやっているという気持ちが強いらしい。私にしても、いったん公表した論文は、誰がどのように利用してもかまわない、と考えている。だからこそ、ウェブサイトに論文を掲載して公開するのだ。済南では、たまたま翻訳者と会う機会があったから掲載誌をもらった。それ以外は、掲載雑誌も送ってきはしない。いかがなものか、と思いはする。

私が中国語で論文を発表したのは、さかのぼると1983年であった。

清末の小説「老残遊記」外編残稿について、その執筆時期を論じた。書く気になったのは、中国の研究者が発表した論文に納得がいかなかったからだ。中国語で短文を書いた。さらに、私の考えを中国の専門家に検討してもらうには、中国で発行されている刊行物に投稿するのが適当だと判断した。少し考えて全国紙である『光明日報』を選ぶ。その当時、中国の古典文学を研究対象とした「文学遺産」欄を設置していたのが理由だ。

さいわい採用されて、同紙に掲載された（「関於《老残遊記》外編残稿的写作年代」『光明日報』1983.4.12）。その後、ご本人から手紙をもらった。私の説に全面的に賛成するという主旨である。その率直なお人柄にうたれた。

その次が「秋瑾東渡小考」（『光明日報』1984.3.13）だ。女性革命家秋瑾（しゅうきん）は、中国では格別に著名な女性だ。彼女は、夫と子供を中国に残したまま日本に留学して

いる。来日は周知の事実だ。ところが、その日時、船出した中国の港が諸文献でマチマチである。上海から乗船した、いや天津からだ、と定まらない。ましてや、船名を明記する文章はない。はては想像に想像を重ねて根拠のない文章までが発表されるしまつだ。事実を明らかにする資料が見つかっていないらしい。中国の専門家には、手に余る問題だったように見受けた。

秋瑾が来日した時、彼女を連れてきた日本人女性がいた。服部繁子という。彼女の夫は、当時、北京の京師大学堂（後の北京大学）で教えていた服部宇之吉である。私が日本で入手した資料は、その服部繁子が書いた手記だ。当事者の証言である。これ以上正確な資料はない。しかも、中国ではその存在が知られていない。これをもとにし、さらに同時代の新聞を裏付け資料につけ加えて、問題を解決することができた。

それまで秋瑾の来日日時を特定した人はいない。私のいう新しい発見とは、そういう種類のことも含む。秋瑾が来日した月日部分だけを取り出して自分で中国語にした。いうまでもなく、その価値があると判断したからだ。それを理解する編集者がいたらしく『光明日報』は、ふたたび私の短文を採用した。

のち、該文は、郭延礼編『秋瑾研究資料』（山東教育出版社1987）に収録される。収録の許可は求められなかったが、別に私はかまわない。前出服部繁子の手記を送ってほしいと要求されたから喜んで提供した。提供者として名前を出す、という話だった。しかし、本が出てみるとその記載はない。私から求めたわけではなく郭氏から言い出した約束が守られなかった、という点だけがすこし気になった。だが、名前などどうでもいいことなのだ。

これには後日談がある。いったんは特定した日時、港と船名だった。しかし、あとから間違いであることに自分で気がついた。証言者繁子自身の勘違いである（ゆえに前出短文は『清末小説研究集稿』には収録していない）。別に論文を書いてそれらを訂正したのだ。ただし、これを再び中国語で発表することはなかった。それから約20年が経過する。永田圭介『競雄女侠伝――秋瑾の生涯』（株式会社編集工房ノア2004）が出た。見れば、私の中国語論文によったらしく日にち、港、船名を間違えたままである。著者は、私の訂正論文があるということを知らないらしい。ウェブサイトで検索する手段を持っていないのだろうと推測する。

収録した論文のひとつを紹介しよう。大問題となった。その題名を「誰が『繡像小説』の編集者か［誰是《繡像小説》的編輯人］」（「文学遺産」第653期『光明日報』1984.9.4）という。

大問題というのは、これがきっかけで文字通り世界的規模の論争を惹起することになったからだ。上海で発行されていた雑誌『出版史料』が、この問題について特集を組んだ。その反響の大きさを理解してもらえるかもしれない。

清末時期の上海で最初に出版された小説専門雑誌が『繡像小説』である。金港堂と合弁する直前の商務印書館が発行元だ。その編集長は李伯元である、というのが定説だった。それに異議をとなえたのが、当時、商務印書館に勤務していた汪家熔氏だ。編集長は李伯元ではない、と真っ向から否定した。自社が過去において発行していた雑誌について、その社員研究者が定説を否定したのだ。その意味は小さくない。中国では、関係者でなければ読むことのできない資料は多い。汪氏は社内の資料を発掘して発言した、と誰でも思う。だが、論文を読めば、状況証拠でしかない。

私は、そのころ天津に長期出張していた。天津での生活にようやく慣れたころだ。この論文を思い出し、反論する文章を中国語で執筆した。李伯元は、劉鉄雲「老残遊記」の原稿から文章を盗用している。それができるのは『繡像小説』の編集長だったからだ（補記：1984年の頃は「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」と考えられていた。正確にいうならば「「文明小史」と「老残遊記」の盗用事件」だ）。これが私の論旨である。『光明日報』に投稿したのが７月だった。それが掲載されたのは、９月だ。２ヵ月の時間を必要としたのは、新聞社が専門家鄭逸梅と魏紹昌に検証の文章を執筆するよう依頼したためらしい。

あとからつぎのような話を聞いた。汪氏はただちに長文の反論を『光明日報』に投稿したという。編集部から樽本と同じ字数に縮めるよう要求があり、反論が同紙に掲載されたのが11月６日だ。私はといえば、その日の夜行列車で済南にむけて出発する準備をしていた。「老残遊記」の舞台になっている済南を訪れるのが目的だ。市内の大明湖、市外にある黄河の渡し場に行って実地検証をする（補記：本書所収「「老残遊記」紀行　１　済南篇」参照）。出発前に配達されてきた新聞を見れば汪氏の文章がある。車中でそれをじっくり読んだ。

汪氏は、李伯元が劉鉄雲の文章を盗用したのではなく、その逆だと主張する。これには驚いた。なにに驚いたかといえば、ひとつはありえない説を提出したからだ。もうひとつは、彼が私を素人扱いしているからにほかならない。李伯元と劉鉄雲の盗用問題については、それまで私は考えをかさねていた。氏は、私がこの問題について無知だと頭から決めてかかっているのだ。外国人だから詳しいことを知らないのも無理はない、という態度で執筆している。

汪氏は、資料を発掘しながらそれにもとづいて立論する。私の尊敬するタイプの研究者である。後に発表した論文は、すべてこの研究姿勢で貫かれている。だが、李伯元と劉鉄雲の盗用問題については、判断を誤った。

汪氏は、出版研究では第一人者である。だが、小説研究について、この時は、付け焼き刃的に知識を仕込んで文章をひねり出しただけ。

汪氏は、よりにもよって私の専門分野に口をはさんだのである。私はひそかに気の毒に思った、と正直に書いておく。そういう私の態度は傲慢だ、と感じられるだろう。だが、論文を公表するというこの非日常的行動を実行するには、それくらいの心構えが必要とされるのである。

実をいうと、彼にはさしせまった事情があった。これもご本人からもらった手紙に書いてあったことだ。同僚から、日本人にやられたらしいな、と嫌味をいわれていたという。氏にしてみれば、なんとしてでも反論を書かざるをえない状況だった。純粋な学術問題が、日中間の面子（メンツ）（面目、体裁の意）問題にすりかわるのが1980年代の中国であった。ただでさえ面子がからむと話がややこしくなる。おまけに日本と中国の２国をまたいでいるから複雑さは倍加する。学問は学問だろう、国境は無関係だ、と私がいくらいっても理解しない人は理解しない。

『繍像小説』の編集長については別の研究者による新しい資料の発掘があった。だが、資料としての信頼性が低いと評して汪氏は認めようとはしない。彼は、とうとう最後まで自説をまげなかった。結局のところ、問題が完全に解決するのに、約20年近くの年月が必要になる。『繍像小説』の発行元商務印書館は、当時の新聞に自社広告を掲載している。それらのひとつに李伯元を招聘したと明記しているのが発見された。動かぬ証拠である。

汪氏は、私の最終論文を読んで、私信をよこした。自分の誤りのようだ、と短

く述べている。新聞の該当部分を写真で示したから納得せざるをえないだろう。ただし、それはあくまでも私信の中においてだけのこと。別の論文に記入して公表するわけではない（補記：私信では自らの誤りを認めた汪家熔氏だった。しかし、のちに公表した文章ではあいかわらず李伯元説を否定し続けた）。批判をしているのではない。やり方が異なっているというだけのことだ。

「小さな」問題では呉趼人（ごけんじん）『二十年目睹之怪現状』の版本問題がある。カッコをつけたのは、小さく見えるが実は大きな問題である、と私が考えているからだ。

中国の著名な研究者たち全員が、該書初版の発行年月を間違っている。わが目を疑うとはこのことだ。その原因は、彼らが、研究界の権威である阿英（あえい）の誤記を引用し続けたことにある。まさか斯界の権威が間違うとは思わない。だから、誰ひとりとして書物の原物で確認することをしなかった。私が指摘するまでの44年間にわたって誤りが続いていたのだ。怠惰の極みである、と日本であれば痛罵され、嘲笑され、軽蔑されるに決まっている。研究者としての資質を疑われることにもなりかねない。

私がその誤記について短文を書いて発表すると、名前をあげた中のひとり（注：裴效維氏）が手紙をくれた。確かに初版を見ていない、だが、作家研究とは何の関係もない、という。あきれて物もいえない。

作家研究とどう関係があるというのか。そのようなことは私は一言ものべていない。原物を見れば誤りようのない事柄なのだ。自国の小説研究について確認の手を抜いてもいいのか、と書いているにすぎない。研究の姿勢が問題なのだということにその著名な中国人研究者は気づいていないのだ。私の気持ちが落ち込むのは、こういう時である。

調べていくと従来の定説をくつがえさざるをえない結論に達することがある。それをそのまま論文にすると、定説を信じ込んでいる研究者の論文を批判することになる。本論文集を読みかえしてみて、名前のあがった中国人研究者のことを考えないわけでもない。しかし、学術研究には意見の相違はつきもので、しかたがないことなのだ。このたび集めたのは、論争性をおびた論文ばかりではない。少数ではあるが、目立つかもしれないから説明をした。

約３割が他人による中国語翻訳だ。彼らは勝手に翻訳して掲載誌も送ってこな

い。今回は、私が自由に利用させてもらった。感謝のしるしに拙著を送ろうにも、連絡先がわからない。

最後になったが、監訳をひきうけてもらった陳薇氏を紹介しよう。

陳氏は、『川端康成文集』（中国社会科学出版社1996）、『永井荷風選集』（中国作家出版社1999）などの翻訳書を出版して著名である。後者は、講談社の第13回野間文芸翻訳賞を受賞した。日中両国において屈指の存在であるのはいうまでもない。

私が書いた中国語の文章は、学術論文である。言いまわしに意を用いるという種類のものではない。新しい発見を素直に述べただけ。意味が通じていればそれでよい、と考えた。事実、多くは私が書いたままで公表している。しかし、こういうやり方は中国では本当は通用しない。なによりも文章がよくなければならない。これが中国の伝統であり常識である。ゆえに、今回１冊にまとめるにあたっては中国学界の慣習に従うことにした。それには、やはりことばの専門家にまかせるのがいちばんよろしい。日本の大学ではじめて中国語を学んだ私は、そう結論した。陳氏には、私の中国語を修正してもらった。さらに前言と後記も氏の翻訳になる。私の希望通りのものになっていると確信する。

該書の内容を大まかに理解してもらうため、目次だけを下に掲げておく。

『清末小説研究集稿』目次

1　清末小説資料在日本
　劉鉄雲資料／李伯元資料／呉趼人資料／雑誌和出版社
2　劉鉄雲和日本人
　西村天囚／牧放浪／小田切万寿之助／西村博／中島裁之／中根斎／内藤湖南
3　《老残遊記》写作刊行的両個問題
　定論／令人費解的両個問題／解決問題
4　関於《老残遊記》外編残稿的写作年代——与時萌先生商榷
5　劉鉄雲読過梁啓超的原稿嗎？
6　《老残遊記》和《文明小史》的関係
　引言／《繍像小説》登載《老残遊記》／《繍像小説》的出版延期／《老残遊記》初集的写作和出版／誰是《繍像小説》的編輯？／魏紹昌所提出的問題／結論
7　胡適如何認識《老残遊記》

緒論／胡適的 “文学革命” 観／胡適的《老残遊記》論

8 《劉鶚散論》序

9 誰是《繡像小説》的編輯人

10 《繡像小説》出版延期問題簡論

11 有関《繡像小説》編者問題的討論

有関《繡像小説》編者問題的討論的情況／誰是南亭亭長

12 《繡像小説》的編者到底還是李伯元

13 《官場現形記》的初期版本

迄今為止的版本研究概況／初期版本的系統

14 《官場現形記》的真偽問題

緒言／真偽問題的発生与発展／《官場現形記》増注本／結論

15 李伯元和呉趼人的経済特科

要解決的問題在哪里？／研究的情況／什麼是經濟特科／李伯元和呉趼人的經濟特科／結論

16 呉趼人《電術奇談》的原作

17 不要軽視小事——広智書局本《二十年目睹之怪現状》的出刊日期

18 阿英先生的寫法——與竺慶麟先生商榷

19 阿英《晚清小説目》的結構

序／阿英《晚清小説目》的現在／阿英《晚清小説目》以前的目録／阿英《晚清小説目》的特點／阿英《晚清小説目》研究／阿英《晚清小説目》的規模／結論

20 反映時代的小説目録——関於《新編清末民初小説目録》

21 《游戲報》的周樹人是魯迅嗎？

22 関於魯迅的《斯巴達之魂》

《斯巴達之魂》的発表／《斯巴達之魂》与《歷史》／複数典拠説／創作部分／創作還是翻訳

23 《新小説》的出版日期和印刷地点

《繡像小説》的停刊日期／《新小説》的停刊日期／樽本説

24 辛亥革命時期的商務印書館和金港堂之合資経営

公司和經理／合資的條件／偶然發生的兩件事／誤解1——金港堂 “教科書貪汚案件” 以後在上海尋找投資的機會／誤解2—— “主權在商務的合資”／合資的決算報告書／董事會報告／結論

『清末小説研究集稿』日本語前言と後記

『清末小説から』第83号（2006.10.1）に掲載。本稿は、拙著、陳薇監訳『清末小説研究集稿』(中国・斉魯書社2006）のために書いた日本語原文である。研究の履歴を簡単にたどる。出版時には漢語に翻訳された。

1　前　言

本書には、清朝末期の作者、作品、雑誌および出版社に関する論文を収録した。

普通に考えて、日本に見る価値のある清末小説関係の資料があるとも思えない。ところが、意外なことに貴重な文献のいくつかを、私は日本において発見した。幸運なことだ。

貴重な文献の発見が、長年の問題を解決することに結びつくことがある。

たとえば、『老残遊記』二集を日本で発見することが、劉鉄雲著「老残遊記」の執筆発行に関して存在した長年の疑問を解明するきっかけとなった。

こちらには、別の問題が浮上してくる。すなわち、「老残遊記」を掲載した『繍像小説』それ自体の発行が遅延していたというのだ。この問題については、当時の新聞を資料に使用し私なりの考えを提出した。出版遅延に関連して生じたのが、李伯元の「文明小史」にまつわる盗用問題の見直しだ。

『官場現形記』の版本系統を見直すことになったのは、日本で発見した世界繁華報館本『増注官場現形記』が手がかりになった。

「官場現形記」の作者李伯元と呉趼人は、経済特科にどのように関係したのか。

それまで不明確であった事実を解明することができたのは、当時の新聞に関連記事を発見したからだ。

阿英の「晩清小説目」は、権威をもった目録だと誰でもが認める。しかし、ひとつの目録が数十年もの長きにわたって利用できるはずもない。もしそうであるならば、版本について新しい発見がされていないという意味にほかならない。日本で『清末民初小説目録』を編纂しようという気になったのは、自分で納得のいく小説目録が必要だったからだ。目録編纂の作業は、結果として阿英の小説目を点検することにつながった。

『遊戯報』に掲載された周樹人は、本当に魯迅なのだろうか。魯迅の書いた「斯巴達之魂」は、作品として成功しているのか。清末の作家と作品をささえた上海の出版社は、当時の日本の出版社とどのような関わりをもったのだろうか。

というぐあいに、研究対象がひとつの作品から別の作品に、雑誌から出版社へと発展していって現在にいたっている。いずれの論文も資料の裏付けを得て立論していることを強調しておきたい。

私が行なった指摘のいくつかは、従来の通説を否定する。本書の最大の特色だといっていい。

研究の参考になればさいわいだ。

2　後　記

私の研究は、劉鉄雲著「老残遊記」について調べることからはじまった。

中国では「無産階級(プロレタリア)文化大革命」が進行中で、その他の研究分野と同じく清末小説関係の研究論文が発表されることもない。「文革」以前の中国の学界において、清末小説批判があったことは、日本では周知の事実である。批判された清末小説をわざわざ研究対象に選ぶ学生は当時いなかった。

清末小説に関する研究資料もとぼしい日本である。日本横浜で発行されていた『新小説』の全冊を所蔵する図書館は、日本には存在しない。ましてや、『繍像小説』全冊など公共機関には影も形もない（影印本が発行されるのは、1980年代になってからだ)。研究資料が不足していることは明白である。しかし、何を研究するの

も自由であるのが日本のよいところだ。興味をしめす人がいないからこそ、私は、清末小説を研究対象にすることにした。

事のおこりは、『繍像小説』の編者問題だった。論争がはじまり、これに関連して「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題がからんできた。学界の大論争に発展した様子は、本書所収の論文に詳しい。

そうこうするうちに、掲載誌である『繍像小説』の発行遅延説が提起される。この発行遅延説は、劉鉄雲と李伯元の盗用問題にも影響をあたえることになった。

一方で、私は、日本で清末小説関係の新資料をいくつか発掘している。『天津日日新聞』の切り抜き本「老残遊記」二集、李伯元の『庚子蕊宮花選』、あるいは世界繁華報館本『増注官場現形記』などは、中国でも存在が確認されていない。それくらい貴重だということができる。これらの書籍を日本で発見したことが、未解決の問題を解決し、また、あらたな問題の提起につながっている。研究の進展に貢献したと考える。

日本で清末小説の目録を作成するなど向こう見ずだといわれてもしかたがない。しかし、創作作品、翻訳作品を網羅した小説目録がなければ、研究が進まないことはあきらかだった。小説目録を編集してみると（樽本編『新編増補清末民初小説目録』済南・斉魯書社2002.4)、有名な阿英の「晩清小説目」には決定的な欠陥があることが判明した。

本書に収録したのは、漢語で発表した論文のいくつかである。

日本語論文を自分で漢訳したものがある。あるいは、最初から漢語で書いて中国、香港、台湾、韓国、日本で発表した。また、他人の手によって漢訳された論文も本書に収録している。全体の３割くらいか。それぞれの文末に訳者の名前と掲載誌を明記したのは、感謝の気持ちを表わすためだ。さらに、既発表の論文にもとづいて今回あらたに漢語で少数を書き下ろした。全体を点検し、一部を書き改め、資料をつけ加えた箇所もある。

ながめてみれば、最初に書いた漢語論文は、1983年の『光明日報』に掲載されたものだった。すでに20年以上が経過している。当時、利用できる資料は限られていた。初出の雑誌で確認できないものもあったのだ。点検する過程で、初出にあたることができるものは確認しなおした。

すべての論文を読み直してみて驚いたことがある。ある部分については、同じことを繰り返している。その理由は、私の指摘が大多数の研究者の関心を引かないためだ。必然的に繰り返すことになった。

私の興味は、事実を掘り起こして清末小説を研究することにある。

資料をさがしていく過程で、疑問が生じる。資料をみつけることによって、今まで知られていない事柄を白日のもとにさらす。新しい事実がわかれば、情況をより詳細に把握することができる。

作者に関するものであるならば、不明である経歴の一部分を明らかにする。翻訳作品であれば、その原作をつきとめる。版本の系統、あるいは作品間の盗用が問題になることもある。雑誌ならば、その発行年月日の謎を解明する。これらの実践結果を公表するために年刊誌『清末小説』、季刊誌『清末小説から』を発行しつづけている。

私の研究方法は、こうである。

清末小説に関する事実を資料によって明らかにすることが目的だ。その方法は、できるかぎり資料を集めることにつきる。矛盾した内容を示す資料ならば、その理由を考えることが問題解決のてがかりになる。清末小説研究には、事実の探索が重要であると考えているからにほかならない。本書を読んでくださった読者は、理解してくれるだろう。「主義」を持って、最初に設定した結論にむかい資料を取捨選択しながら論文を書くというやり方には、私は、まったく興味がない。それが研究方法として成立するとは、考えてもいないのだ。

現在、私は、翻訳小説に関する調査を続けている。科南道爾（コナン・ドイル）、「天方夜譚（アラビアン・ナイト）」、哈葛徳（H・R・ハガード）など、研究文献の少ない分野は、それだけやりがいがあるというものだ。

潘建国「近代小説的研究現状与学術空間」を読む

『清末小説から』第81号（2006.4.1）に掲載。『文学遺産』2006年第１期（2006.1.15）に掲載された潘建国の文章を批判する。近代小説研究について現状把握と提案を行なう。すばらしい提案のかずかずであるが、本人はそれを実行する気があるのか。行動で示さなければ意味がない。

第５回『文学遺産』論壇および『文学遺産』編委会拡大会議が開催された、とA4判に拡大した雑誌『文学遺産』2006年第１期（2006.1.15）で紹介されている。そこでの発表のひとつが潘建国の「近代小説的研究現状与学術空間」だ。

中国近代小説研究について、過去と現在の研究情況を総括し多くの提案を行なう。会議での発言だからか短文である。それだけ、要点が鮮明になっているといえよう。

よっつの分野にわける。１．目録資料などの文献基礎、２．研究の地理範囲、３．研究対象、４．政治文学技術の側面である。

１．文献基礎

目録作成を重視する。近代小説の目録としては、阿英『晩清戯曲小説目』（1954）、王継権ら『中国近代小説目録』（1990[1998の誤り]）および樽本照雄『新編増補清末民初小説目録』（2002。樽目録第３版と称する）をあげる。それらが、不十分であることを指摘するだけではない（後述）。図書館の蔵書を実地に調査し、真に完全で信頼できる『中国近代小説総目提要』の編纂を提案する。

小説叢書について言及するのは、当然でありながら貴重だ。台湾・文雅出版社（広雅出版有限公司が正しい）「晩清小説大系」、広西人民出版社と百花洲文藝出版社の「中国近代小説大系」のふたつがある（上海書店の『中国近代文学大系』もあげてほしい）。それだけでは不足だから、さらに完備した「中国近代小説集成」を編集する。「近代翻訳小説集成」「近代創作小説集成」「近代報刊小説集成」などに分ける。これが実現したらどれほどすばらしいだろう。

研究資料では、『新小説研究資料』『時報小説研究資料』などを提案する。

２．地理範囲

従来の研究が上海に偏りすぎているという指摘である。日本、香港、マカオ、南洋、ハワイ、サンフランシスコなどの中国人作品、あるいは、外国人（宣教師など）が中国語で書いた作品なども研究範囲に入れる。上海以外の都市、たとえば広州、天津、漢口などなど、北京でも多くの作品が発表されているから研究対象になる。

３．研究対象

翻訳小説の重視を提言する。具体的には、近代翻訳小説目録の編集、近代小説訳者集団の研究、近代翻訳小説の底本、来源研究、近代翻訳小説類型研究などなどをいう。

４．政治文学技術の３側面

政治の側面では、「文学革命」「小説界革命」にとどまっていてはならない。たとえば、西洋科学法律の伝播という角度から近代探偵小説の盛衰史を調査する。

文学の側面では、近代小説を次のようにとらえる。古代小説と現代小説の縦方向の一環として、中国小説と西洋小説の横方向の一環として。また、単一の小説文体研究から多様化した専題研究（探偵小説史、言情小説史、滑稽小説史など）へ移動する。

物質の側面でいうと、現在、分化、微細化の傾向が現われている。小説雑誌、小説新聞、各地の出版業、重要な出版組織および著名な出版社について研究され

ている。この３側面をバラバラではなく、ひとつの密接につながった全体として捉えなくてはならない。

潘建国は、近代小説の研究情況を的確に把握している。また、そのすばらしい提案の数々には目を見張るばかりだ。どれだけ時間がかかっても、採算を度外視しても、研究に役立つ大型出版物がそろう日がくることを願ってやまない。

以上を引用して、日本の樽本が潘建国の文章を高く評価している、と書いてもよろしい。

だが、本当に言いたいのは次のことなのだ。このように身も蓋もない書き方になるのは、潘建国がほかのところで書いた私の文章について、その重要部分を無視して引用したことがあるからである。

たくさんの提案を潘建国は行なっている。それらは、すばらしいとしかいいようがない。逆に、あまりにも理想的であるからこそ、疑問がわき出る。本当か、本当に実現するのか、本当にやる気なのか、と私は思ってしまうのだ。旗をふるだけなら、言うだけなら、誰にでもできる。はたして、それは現実のものになるのか。潘建国は、現実化の努力をするつもりなのか。

目録編集について具体的に検討してみよう。

上に紹介した箇所で、阿英、王継権ら、樽本の作成した目録に不足があることを潘建国は指摘している。阿英は主として自分の蔵書を記録し、王継権らは翻訳小説を収録せず、両者ともに遺漏がとても多い。樽本は、２次文献に多くを依拠して編集し、原書を調査できず、誤収録誤記が少なくない。蔵書場所を注記せず使用するのに不便だ、という。そこから、信頼できる『中国近代小説総目提要』編集の提案が行なわれる、というわけ。

阿英の天才をもってしても、清末雑誌に掲載された小説を主軸にした目録を編集することができなかった。単行本を中心としたものにならざるをえなかったのだ。時代の制約ということができるかもしれない。私は、そう指摘したことがある。だが、問題なのは、阿英の目録を権威にまつりあげ何十年も使い続けてきた中国の研究界の方であろう。王継権らの目録は、阿英をはるかに上回っているという点で画期的なのだ。こちらは、「中国近代小説大系」の１冊だから、大系が

翻訳小説を収録していないためにそうなった。両者の誤記などについては、私の目録に詳しく記録している。

さて、樽目録第３版である。

潘建国は、不足の箇所をあげているが、この発言は、潘建国『中国古代小説書目研究』（上海古籍出版社2005.10）には見られない。研究大会での発言だから、批判してみせたのだろう。

私は自分が作成した目録が完全であるなどと思ったことはない。だから、現在でも増補訂正作業を継続している。潘建国の指摘にたいして率直に頭をたれる。しかし、納得がいかないのも正直なところだ。

「２次文献に多くを依拠して編集し」

私の目録を批判したのはいいのだが、それが同時に２次文献を作成した中国人研究者たちを批判したことになるのを潘建国は理解できないらしい。

「原書を調査できず」

情況を無視したこういう発言にたいして、私は言葉を失う。たしかに原書を調査できていない部分がある。なにしろ日本で編集したのだ。外国に原書があると思う潘建国のほうが間違っている。だから、使用説明で、あくまでも参考にしてほしい、原書は自分で捜すものなのだ、といっている。

原書を見ることが目録作成の基本である。それは、わかっている。その努力はしているが、原書さえあれば正確な目録ができるかといえば、そうとも言えない。誤記をする以外に問題も出てくる。

１例のみをあげる。

周作人が女性名で翻訳した「アラビアン・ナイト」の１話がある。

中国現代文学館編『唐弢蔵書目録』（内部交流資料　刊年不記(2003)。175頁）にはつぎのように記載される。

5177　侠女奴　萍雲　1905.5　女子世界社小説林　32開

蔵書目録だから原本を記録しているに決まっている。私は、該書の初版実物は見ていない。再版本には「丙午年三月再版／発行者小説林総発行所」とあるから、

記述が異なっているのに困惑していた。女子世界社と小説林から初版が別々に出版されたのかとも思った。

唐弢の蔵書目録に「女子世界社小説林」とあるのを見ても問題は解決しない。

確証は、別のところからやってきた。

唐文一、沐定勝『消逝的風景――新文学版本録』（済南・山東画報出版社2005.8。20頁）は該書の表紙とともに奥付を掲げる。

奥付には「乙巳五月初版／訳述者萍雲女士／潤辞者初我／発行者女子世界社／印刷所東京並木印刷所／発行所小説林」と見える。それによって、『唐弢蔵書目録』の「1905.5」が新暦旧暦混用であることがわかる。

さて、再版では「発行者小説林総発行所」としか書かれていないから、目録にはそう記録するよりしかたがない。初版の奥付には、発行者と発行所がある。目録としてはその両方を記述する手もあるだろう。だから、唐弢目録もそうした。もうひとつは、発行所の小説林だけを掲載してもいい。私なら、こちらを採用する。

当時の書籍の奥付は、一定の形になるまで不安定であった。原物があるからといって、判断に迷うことは多い。単純ではないのだ。

「誤収録誤記が少なくない」

「誤収録」というのは、清末小説ではない作品を収録しているという意味だろう。伝奇雑劇は清末小説ではない、といちいち指摘してくれた左鵬軍がいる。その指摘は、現在すすめている補訂作業においてすべて追記した。「誤記」についても、渡辺浩司、杜筆恩からの親切でかつ具体的な訂正がある。これも同様に追記、訂正している。

「蔵書場所を注記せず使用するのに不便だ」

潘建国は、誤解しているのではないか。清末民初小説は膨大な数にのぼり、あちこちの場所に所蔵されている。それをいちいち注記するのは非現実的だ。私は２次資料を注記しているから、いくらかはその役割をはたしているはずだ。それについて潘建国は理解しようとはしない。

私が潘建国の指摘を読んで違和感を覚えるのは、誤記についてだ。

普通、誤記が少なくない、と発言する以上、どこがどう間違っているか、具体

的に指摘する文章を用意しておくものだ。はたして潘建国にその準備があるのか。誤記の指摘をするためには、手間ヒマがかかる。よほどの親切心がなければできはしない。潘建国は、他人が貴重な時間を割いて行なってくれていることに便乗しているだけではないのか。他人が誤記があると言っているから、それをおうむ返しに書いているだけであれば、不用意で無責任な発言であるといわれてもしかたがなかろう（補記：潘建国による訂正の指摘は結局のところなかった。無責任であると再びいう）。

提言することとそれを実行することは、異なる。行動で示さなければ意味がない。私の著作を評して、あれがない、これがない、という人がいた。そこまでわかっているのなら自分でやったらどうだ、と答えた。その日本人は日本語が理解できなかったらしく、その後、ご本人は知らん顔である。こういうのを、一般に口舌の徒という。

潘建国の提案には、大いに期待していると書いておきたい。

【補記】潘建国は『物質技術視閾中的文学景観：近代出版与小説研究』(北京大学出版社2016.3 文学史研究叢書）を刊行した。「近代小説的研究現状与学術空間」を収録する。
また、該書の別の箇所で樽目録第３版に言及している。その箇所を翻訳する。

> 翻訳小説は晩清小説研究のなかでかなり手薄な部分でありその文献史料の探索整理も相対的に足踏み状態にある。阿英「晩清小説目」(1954)、〔日〕樽本照雄《新編増補清末民初小説目録》(2002)、劉永文《晩清小説目録》(2008）などは翻訳小説を収録して数量は見るべきものがある。しかし、いずれも書名、著訳者および出版社、出版時間の４項目だけを記録するだけでやや簡単にすぎるきらいがある。…… 310頁

樽目録第３版は、阿英目録の欠落を埋めるために翻訳小説の原作名、原作者はできる限り明記するように努力した。劉永文は、樽目録第３版を参照しながらそれを無視したのである。陳大康も同じだ。潘建国は、樽目録第３版を眺めたが利用してはいないことがわかる。特色のひとつを見落とし、事実ではないことを平気で説明しているからだ。加えて、樽目録Xがウェブ上で公開されていることも知らない。潘建国のまわりは通信環境が整っていないらしい。残念なことだ。

出版社の図書目録

——周振鶴編『晩清営業書目』のことなど

『清末小説から』第84号（2007.1.1）に掲載。神田一三名を使用。販売促進のための出版目録が、研究資料になる。以前からそう考えていた。それを利用して文章を書いたこともある。私が考えるくらいだから、ほかの研究者が着目するのは当然だ。そういう出版目録が、中国の研究者によって資料集にまとめられた。私の知らないものも多く収録されていてうれしいことだった。本文で紹介する周振鶴編『晩清営業書目』である。ただし、これに収録された商務印書館の目録は、周がいう発行年とは違うこともいっておかなくてはならない。のちに入手した『上海古籍出版社五十年図書総目』(2006）を追加した。

出版社が自社の刊行物を宣伝するために新聞、雑誌に広告を出すのは、清末においては普通に見ることができる。普通といっても、新聞、雑誌が数多く発行されるようになったという情況の変化に応じて出現したことだ。

それらをとりまとめて冊子を発行することもある。非売品、つまり無料配布の出版物であって、自社刊行物の宣伝販売を目的にしていることはいうまでもない。消耗品である。ゆえに保存する読者は多くない。出版社の図書目録は、古書目録にもほとんど出てこない。掲載されることがあれば、自分の目を疑うほどの高値がついている。必要とする人がいるらしい。

1　文明書局、中華書局のばあい

たとえば、文明書局『図書目録』(刊年不記。1920年代。図1）がある。

図1 文明書局『図書目録』

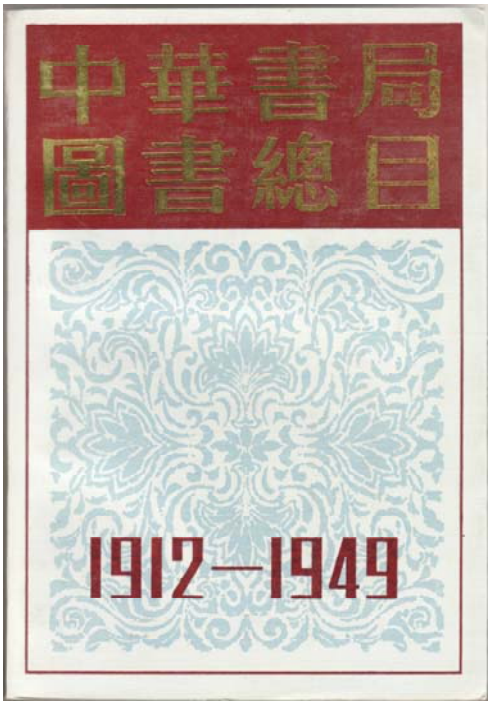


図2 『中華書局図書総目（1912-1949）』

詩文、尺牘、補助読本、各科用書、雑類、附録、小説、碑帖、書画金石に分類した小冊子だ。寄售書には、他社の書目を収録する。それらの出版社は、医学書局、真美善書店、良友図書公司などである。なんらかの関係があったというよりも、単に委託販売をしているだけなのだろう。

書名、冊数、定価はもれなく記載する。著者は、載せたりそうでなかったりと添え物のあつかいだ。図書目録は、販売を目的としたものだから、冊子そのものに出版年月日を明記する必要はない、という判断なのであろう。

大多数の図書目録は、必要最低限の記述しかしない。まれに内容を要約した説明がつくこともある。だが、基本的に単行本として発行されたことがわかるだけだ。

時間をへて、たとえば、中華書局編輯部『中華書局図書総目（1912-1949）』(北京・中華書局1987.3。図2）が編集出版されている。解放前の出版物を収録して、該書局創立75周年を記念する。

時間が経過してみると、自社出版物の図書目録は、出版社にとってはみずからが歩んできた歴史を語る資料ともなる。それを基礎にしてさらに手を加えた。

分野別に分類し、書名、著者、発行年月、判型および内容要約をつけている。

私が注目するのは、本図書総目にはそれぞれの単行本について発行年月を明記している点なのだ。ほかの図書目録には見ることができない。例外的な措置であって、まさに特異である。記念刊行物だからか、販売を目的にした図書目録の本来のワクを乗り越えている。ゆえに利用価値が高い。

実際に編集したのは、北京図書館に勤務する趙威ら９名であった。彼らは中国国内の図書館蔵書によって確認したうえでこの詳細な図書目録を作成した。自社編集にはこだわらず、外部に委託したのも中華書局編輯部の見識の高さを示しているといってよい（惜しむらくは、書名、人名索引が作成されていない）。

これほど充実している目録であるなら、小説研究の資料となりうる。利用する側からいえば、原物に到達するため、探索の手掛かりになろうというものだ。

2　三聯書店のばあい

『生活・読書・新知三聯書店図書総目：1932-1994』（北京・生活・読書・新知三聯書店1995.10。図3）がある。

「紀念鄒韜奮先生誕辰一百周年！」と扉にうたう。上編は中華人民共和国成立前（1932.7-1949.9）に出版した単行本を、下編はその後（1949.10-1994.12）の刊行物を収録する。統一番号をふり全4,604種になる。書名、著者、発行年月、ページ数、判型などを記録して詳細だ。書名索引と著者索引が完備しているのには目を見張る。こうあってほしいという図書目録の見本だといっていい。高く評価する理由である。

中華書局あるいは三聯書店が記念として発行した出版目録は、それほど充実している。

ならば、中華書局にとっては往年の競争者であるあの著名で巨大な商務印書館は、さらに充実した目録を発行しているだろう。期待をするなというほうが無理だ。

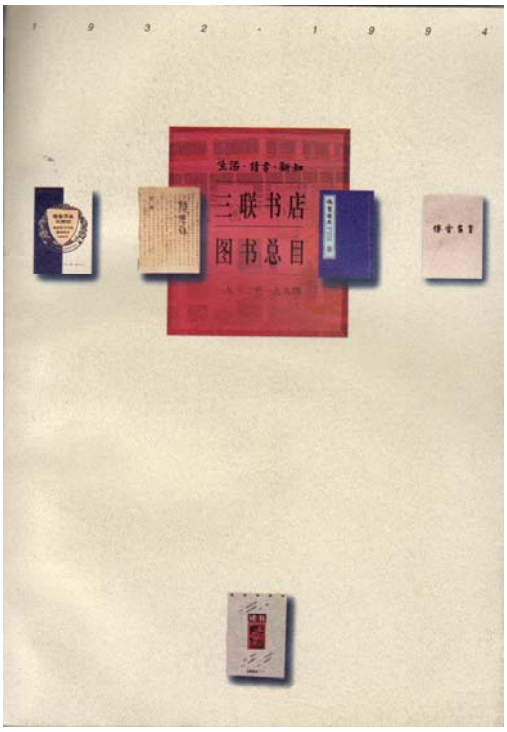


図4『上海商務印書館創業十年新廠落成紀念冊』

図3 『生活・読書・新知三聯書店図書総目：1932-1994』

3　商務印書館のばあい

私は、商務印書館版「説部叢書」の成立を追求するために、雑誌などに掲載された出版広告を資料に使ったことがある*[1]。

本稿に関係するから論文の要点を書いておきたい。商務印書館の「説部叢書」は、外国文学の翻訳シリーズである。成立した経過は以下のようだと考えている。

第一集から第十集まで各集10種類で合計100種が完結するのは1908年である。同年、作品の一部を入れ替えて改組のうえ全部を箱入りで発売する。1913年、初集と改称した。

論文執筆時は見ることができなかった商務印書館の図書目録がある。

商務印書館編訳所編輯『上海商務印書館創業十年新廠落成紀念冊』(上海・商務印書館　光緒三十三(1907)年七月　非売品*[2]。図4）だ。

掲げた図版は、表紙と裏表紙（内容は目次）である。

見開き奇数ページには、たとえば目次にある「光緒三十三年中西合歴表」を掲げ、偶数ページには自社刊行物を掲載する。そのほか電報用漢字符号一覧表とか、列車の時刻表価格表であったりする。日常生活に必要な附録をつけてはいるが、実態は図書目録である。

初等小学教科書、高等小学教科書、中学教科書、高等学堂教科書、簡易課本、初級師範学堂教科書、優級師範学堂教科書、実業学堂教科書、学堂参考書、外国語学教科書、華英字典類、地図類、政法類、経済財政類、警察類、哲学類、史伝類、地志類、問答類ときてようやく小説類になる。『繍像小説』は、この小説類に含める。あとは、雑書類、雑誌類などである。

小説類は、まず「欧美名家小説」10種をあげる。翻訳小説を前面に押し出すのだ。つづいて、「説部叢書」第一集から第九集までを掲げる。

商務印書館の「説部叢書」についての注目点は、上に述べたようにふたつある。

ひとつは、1908年の改組だ。作品の一部を入れ替える。もうひとつは、1913年の改称だ。それ以前の第一集から第十集をまとめて「初集」とくくりなおす。何度も書くのは、商務印書館版「説部叢書」についてこのように説明する文章を見ることは多くないからだ。この区別が、図書目録の発行時期を推測する手掛かりにもなっている。

創業10周年目録には、第一集として佳人奇遇、経国美談、夢遊二十一世紀、補訳華生包探案、小仙源、案中案、環遊月球、吟辺燕語、美洲童子万里尋親記、黄金血（72丁ウ、73丁ウ）をあげている。

1908年の改組では、『佳人奇遇』が『天際落花』に、『経国美談』が『劇場奇案』に差し替えられることを思い出してほしい。

また、「説部叢書」後半のいくつかには定価が書かれていない。つまり、未刊行であることを意味する。一集に10種の翻訳小説を収録するのが基本的な形だ。第九集には６種類の書名しかあげられていないところから、「説部叢書」が発行途中だということがわかる。

掲げられた「説部叢書」の構成作品を見ただけで、この冊子の発行が1908年以前であることがわかる。わかるもなにも、商務印書館の創業10周年は1907年だ。それらの事実と、創業10周年目録の発行年月は矛盾がない。

『繍像小説』には「自一至七十二期」と注記してある。

これで思い出すのは、該誌停刊時期について張純が提出した推測である。

『繍像小説』第70期所載の呉蒙「学究新談」第23回に「軍機大臣袁世凱」が出てくる。袁世凱が軍機大臣になったのは、光緒三十三年七月丙辰（1907.9.4）だ。ゆえに、第70期はそれ以後、すなわち七月以後に発行された。これが張純の推論であった。

樽本が指摘する光緒三十二年年末停刊と七ヵ月のズレが生じる。

1907年10月９日付『時報』および『中外日報』には、商務印書館が出稿した『繍像小説』の広告が掲載されている。該誌の編者は南亭亭長（李伯元）だ、と商務印書館自身が宣伝する。『繍像小説』の編者は李伯元か否かという問題は、これで解決をみた。だが、1907年10月９日の日付では、停刊問題を解き明かすことはできない。張純の推測を突き崩すことは無理だ。

だが、停刊問題を解決する資料は、実のところすでに見つかっている。

当時、上海で発行されていた新聞に商務印書館が広告を出している。これが証拠となる。

> 光緒三十二年十二月十八日（1907.1.31）『中外日報』
>
> 商務印書館繍像小説第七十二期　毎册大洋二角是書三年届滿現擬停刊明歳大加改良届期再行布告
>
> 上海棋盤街商務印書館

ここには、『繍像小説』が三年分の72期を刊行し停刊すること、明年に大改良を行なうことが書かれている。光緒三十二年年末に停刊したことは明らかだ。

見てほしい。創業10周年目録は、光緒三十三年七月に発行されている。しかも『繍像小説』が72期で完結しているという記述がある。これを合わせて考えれば、光緒三十三年七月丙辰以後に第70期が発行された、という張純の推測は否定される。

『中外日報』の広告記事と上の創業10周年目録の記述とあわせて見れば、該雑誌の停刊を光緒三十二年年末だと考えるのは、資料の裏付けがあるといえる。

図5 商務印書館『図書彙報』第118期　図6 『図書彙報』第121期　図7 『図書彙報』新6号

これが創業10周年を記念した図書目録だ。あらためて目次を見れば、この時期の商務印書館が教科書の編集刊行を主とする出版社であったことが理解できるだろう。

商務印書館は、1903年に日本の金港堂と合弁している。ところが、創業10周年目録には合弁について一言も説明していない。事実を徹底して隠し通そうとした。これが、中国図書公司から、また中華書局から攻撃される原因となったのは広く知られていることだ。

私の手元には以下のような図書目録がある。

商務印書館『図書彙報』第118期1927.4　図5
商務印書館『図書彙報』第121期刊年不記（民国十九[1930]年二月廿八日止）図6
商務印書館『図書彙報』新６号1931.3　図7

教科書類を先頭においた総合的な図書目録である。そう頻繁に発行するものではなかろう。せいぜいが年に１度出ればいいほうだと思う。また、必要に応じてある分野を特化させた目録も出版している。

図8『商務印書館訳印説部叢書三集様本』

図9 商務印書館『小説書目』

『商務印書館訳印説部叢書三集様本』(1920年か)　図8

商務印書館『小説書目』刊年不記（1924年以降）　図9

くりかえすが、販売を目的としているから冊子の発行年月は基本的に記載されない、と考えてもいい。

これらの冊子には、収録した翻訳小説について原作者名、原作名を注記しているばあいがあって便利である。

ただし、この便利さが誤解を生じることにもなった。１例をあげよう。以下の作品についてそれぞれの目録が原作を明示している*[3]。

（神怪）鬼山狼侠伝　林紓訳　２冊　１元

『商務印書館訳印説部叢書三集様本』　原作の記載なし

『小説書目』27頁　A（ママ）TYWAYO AND HIS WHITE NEIGHBOUR

『図書彙報』第118期194頁　A（ママ）TYWAYO AND HIS WHITE NEIGHBOUR

『図書彙報』第121期202頁　A（ママ）TYWAYO AND HIS WHITE NEIGHBOUR
『図書彙報』新６号　作品の記載なし

ハガード Henry Rider Haggard の原作は、“CETYWAYO AND HIS WHITE NEIGHBOUR” だという意味である。そうであれば、1882年発表のノンフィクションだ。

林訳小説については、馬泰来による一連の研究がある。原作の探究が深くなされていて研究者には必見の著作であることはいうまでもない。そこで、馬泰来「林紓翻訳作品全目」(銭鍾書等著『林紓的翻訳』北京・商務印書館1981.11）を見る。彼は、この原作を指摘して“NADA THE LILY”1892という。注に「寒光、朱羲胄、曾錦漳、韓迪厚らはみな誤っている」(62頁）と書いている。

すなわち、商務印書館が自社の刊行物について翻訳ものの原作を誤記しているのを後の研究者（馬泰来を除く）がすべてそのままウのみにしたということである。一般にいって、出版元の記述なのだからまさか誤記があるとは思わない。原物で点検した馬泰来が研究者として優れている点である。

そういう経緯がある。延長線上に『商務印書館図書目録（1897-1949)』(北京・商務印書館1981。図10。1949-1980年分を収めたものも1981年に出ている）をどうしても見てしまうのだ。馬泰来の著作は商務印書館の刊行物に収録されている。当然、図書目録も該書を参照して間違いを訂正しているだろうと考える。

商務印書館が創立85周年を記念した出版目録だ。さきに紹介した『中華書局図書総目（1912-1949)』あるいは『生活・読書・新知三聯書店図書総目：1932-1994』がよくできているので、商務印書館の記念目録にも期待した。

ところが、これがガッカリする結果となる。

見た目には、総類、哲学、宗教、社会科学、語文学、自然科学、応用技術、芸術、文学、史地および叢書総目録となっていて盛りだくさんだ。著者を明らかにしているのはよろしい。だが、肝心の出版年月の記載がない。大きく落胆した理由である。せめて初版の発行年だけでもあれば、まだ資料として利用できたものを、と残念でならない*4。

さきに示した林紓訳『鬼山狼侠伝』の原作は、やはり “A（ママ）TYWAYO AND HIS

図10『商務印書館図書目録（1897-1949）』

図11 周振鶴編『晚清営業書目』

WHITE　NEIGHBOUR”（93頁）と誤ったままだ。馬泰来の訂正は目に入らなかったらしい。同じ商務印書館の刊行物であるにもかかわらず、社内の連絡が悪いのか。別々の仕事として独自に進めたのだろう。落胆した理由である。

編集部が書いたのだろうが「説明」のなかで、80年以上の歴史があるから多くの資料が紛失していると弁解する。それをいうなら中華書局、三聯書店でも同じだろう。だが、記念図書目録については、中華書局と三聯書店にできたことが、商務印書館にはできなかった。私にとっては不思議である。商務印書館には優秀な編集者が在籍しているはずなのに、この無惨な結果だ。

出版社の図書目録は、販売宣伝の目的で発行されたとはいえ、使いようによっては研究資料となることは、以上に述べた通りだ。

中国でもこの出版目録に注目する研究者がいた。周振鶴編『晚清営業書目』(上海・世紀出版集団、上海書店出版社2005.4。図11）である。

4　『晩清営業書目』のばあい

周振鶴によると、彼は、『申報館書目』、『続書目』から1904年、1909年の商務印書館の新書目録まで１枚ものの書目を含めて約20種類を収蔵しているのだそうだ*5。

図書目録を研究資料として利用する考えをもった研究者がいるということに、今さらながら感心する。所蔵するだけでなく資料をみなで利用できるように積極的に公開したのには、感動すらおぼえるのだ。

官営と民営に分ける。それぞれの書目名があるが出版社名で代表させて下に示す（かっこ内は発行年）。

官営（官書局）として浙江図書館（刊年不記）、湖北官書処（刊年不記）および附録で官書局書目彙編（1930）を収録する。

民営出版社の目録は次のとおり。

申報館（1877）、商務印書館（刊年不記。1906?）、掃葉山房（刊年不記）、同文書局（刊年不記）、飛鴻閣（刊年不記）、緯文閣（刊年不記）、十万巻楼（刊年不記）、鴻宝斎分局（刊年不記）、申昌書局（刊年不記）、宝善斎書荘（刊年不記）、汲綆書荘（刊年不記）、慈母堂（1898）、広智書局（刊年不記）、時中書局（1910）、科学図書社（刊年不記）。附録として「上海書業公所書底掛号」(1904）がある。

いちいち「刊年不記」と記載するのはわずらわしかったかもしれない。だが、図書目録というのはそうだということを知ってもらうためにあえて書き加えた。

私が注目するのは、商務印書館のものだ。正式な書名は『商務印書館出版教科書目』というらしい。

なにしろページ数が多い。この本全体の約28%を占めている。ほかの出版社では１枚ものがあるなかで、商務印書館のは冊子になっているからだろう。

刊行年月は印刷されていないらしい。だが、周振鶴は、刊行年は1906年春だと推測した。その根拠について次のように書いている。

「該館が光緒三十二年四月に増訂出版した『商務印書館出版書目』と対照すると、本書目はほぼ光緒三十二年春に出版された」(220頁)

「光緒三十二（1906）年四月」と明記する書目が別にあると彼はのべる。それと比較対照したというのだが、こちらの発行がなぜ同年の春になるのか、説明がない。説明がないから、納得がいかない。

だいたい、周振鶴は解説において彼が所蔵する商務印書館の新書目録は1904年と1909年のものだと書いていたではないか。それと一致しない。新書目録ではなく別の書目なのだろうか。

彼が1906年春だと推測する根拠は、想像できなくもない。

たとえば、『繍像小説』の箇所に72冊を出版したと読める（362頁）。中国の学界における「常識」は、『繍像小説』が停刊したのは「光緒三十二年三月」ということになっている。ならば、商務印書館の書目は同年春であってもよい。ここらあたりが周振鶴の論拠ではなかろうか。

だが、前に紹介したように『繍像小説』が停刊するのは、光緒三十二年年末である。周振鶴の推測（だとして）は、この点で成りたたない。

もうひとつ、彼は『東方雑誌』についての記述も見るべきであった。かっこ内に西暦をおぎなう。

> 東方雑誌零售每冊三角，全年十二冊三元。甲辰（1904）年十二冊二元五角，乙巳（1905）年十二冊二元五角，丙午（1906）年十三冊三元，丁未（1907）年十二冊三元，戊申（1908）年十二冊三元，己酉（1909）年十三冊三元二角五分（346頁）

丙午年と己酉年が13冊であるのは、閏月があるからだ。

ここを見ただけで、この書目は、1909年以後に出版されたと簡単に想像がつく。1910年あたりが妥当なところだろう。ならば、『繍像小説』全72冊が刊行されているのも当然ということになる。

さらに「説部叢書」がある。100種合計131冊*6、木箱に入れて定価28元だとある。

書名を見れば、『天際落花』と『劇場奇案』が最初に出てくる。明らかに改組後のものだ。これを根拠として該目録の刊行は1908年以後となる。

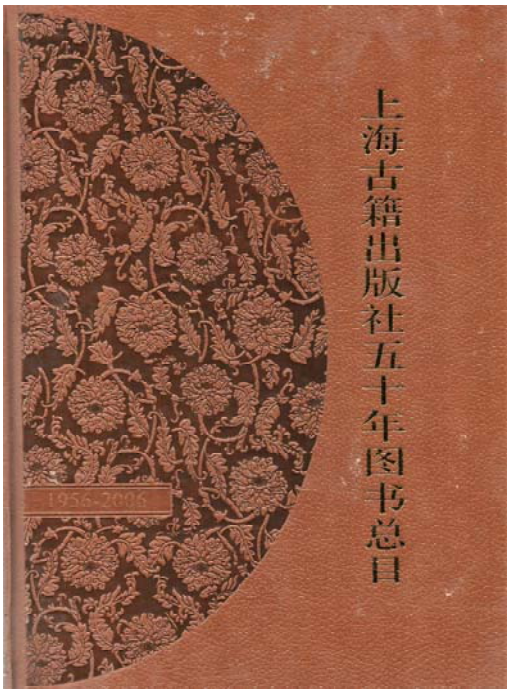


図12 『上海古籍出版社五十年図書総目』

以上を総合して、『晩清営業書目』に収録する商務印書館の図書目録は、1910年頃の発行だと推測する。

5 『上海古籍出版社五十年図書総目』のばあい

上海古籍出版社編『上海古籍出版社五十年図書総目（1956-2006）』(上海・世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2006.11。図12）は、巨冊である。索引を含めて579頁もある。しかも、定価は200元で印刷数3,000。その表紙は茶色の合成皮革を使用し、円形に草花が空押ししてありそれらが濃い茶色の背景に浮かび上がるという凝りようだ。

その説明によると、該社の変遷はつぎのようになる。新文藝出版社古典文学編輯室を基礎にして1956年に古典文学出版社が成立した。1958年に中華書局編輯所に改組される。文革後、上海人民出版社古籍編集室を経て1978年に独立して上海古籍出版社と改名したという。2003年に上海籍出版集団に加入後、2005年、上海世紀出版股份有限公司に加入している。

加入ということは吸収されたことを意味し、さらに母体が改組されたのかと推測する。間違っていたらご訂正いただきたい。

その出発点を見れば、中国古典文学の編集出版を中心にしているとわかる。清末小説に関連していえば、魏紹昌編『老残遊記資料』、『孽海花資料』、『李伯元研究資料』、『呉趼人研究資料』などが収録されているのがなつかしい（137頁）。

全冊について発行年月、判型、頁数、定価が、さらに解題がなされているのも親切だ。ただ、前述のように組織の変革によって名称が変わっているから、その時の組織の名称まで書かれていればよかったように思う。同じ出版母体だから注記する必要を認めなかったということだろうか。

【注】

1）神田一三「商務印書館版「説部叢書」の成立」『清末小説』第25号2002.12.1。『商務印書館研究論集』収録。また『商務印書館研究論集（増補版)』電字版所収

2）柳和城氏に資料のお世話になった。以下の文章がある。
柳和城「1907年商務印書館紀念冊序文」『出版史料（叢刊)』第３輯2002.9。
柳和城「1907年的商務印書館紀念冊」『清末小説』第25号2002.12.1。以下、創業10周年目録と略称する。

3）ハガードの漢訳については、樽本「漢訳ハガード小考――『血泊鴛鴦』の原作」(『清末小説から』第77号2005.4.1）を参照のこと。『清末翻訳小説論集（増補版)』電字版収録

4）書目の分類に関してと資料としての不足について李家駒が批判する。李家駒『商務印書館与近代知識文化的伝播』(北京・商務印書館2005.2)、148-150頁。なお、商務印書館（香港）有限公司編集『商務印書館与廿世紀中国光碟』(香港・商務印書館1997.10）があると李はいうが、未見。

5）周振鶴「晩清西学流行程度的一個視角（代前言)」『晩清営業書目』3頁

6）記載の通りを数えれば127冊にしかならない。記入もれがあるのではないか。各種の目録で冊数はまちまちだ。『上海指南』(商務印書館　宣統元（1909）年五月初版／七月再版）では128冊、前出商務印書館『小説書目』では132冊とする。『東方雑誌』第８巻第１号で計算すると130冊。1981年の図書目録で数えれば132冊である。どれが正しい数字なのか。

事実は、131冊だ。131冊と132冊の違いはどこから出てきたのか。初集第46編『海外軒渠録』は、１冊本である。ただし、本文巻上56頁、巻下93頁（94頁は空白）であって奥付に

「二冊」と書かれている。これが132冊の根拠なのだろう。別の版本では２冊になっている可能性を否定しない。だが、ページ数からして２冊に分ける必然性もないから、私は「二冊」とあるのは誤植だと考える。

林訳シェイクスピア冤罪事件（要旨）

『清末小説から』第85号（2007.4.1）に掲載。「速報」とうたった。公表を予告してその要旨を先行発表したのは、「李伯元と呉趼人は経済特科に同時推薦されていた」（『清末小説から』第34号1994.7.1）以来のことだ。林訳の冤罪事件は、その存在が明らかになると、ことの重大さにあらためて驚く。ゆえに、いくつかの場所で同趣旨の発言を行なった。また、問題は林訳シェイクスピアにとどまらない。本文では、英文はあえて示さなかった。Arthur Thomas Quiller-Couch, *Historical tales from Shakespeare*, 1899初版だ。アメリカ在住の林訳研究の専門家馬泰来氏より“Congratulations! おめでとう”というメールをもらった。自ら確認されたものと思う。

ひとことで言うと、つぎのようになる。

林訳シェイクスピアの底本は、イギリス人作家が小説化したものだ。

このイギリス人作家というのは、ラム姉弟ではない。だから、『シェイクスピア物語』をいっているのではない。ラム姉弟については、中国ではすでに周知のことである。今回の私の発見は、そのことではない。

もう少し補足してくりかえす。

シェイクスピア原作「ヘンリー４世」などの戯曲には、イギリス人作家が書きかえて小説にしたものが出版されている。林紓と陳家麟が漢訳した時、この小説化された英文原作を底本にしたのだ。

では、林訳の底本となった英文原作とは、なにか。それは、クイラー=クーチ『シェイクスピア歴史物語』(1898）である。

この新発見は、何を意味するか。簡単にのべよう。

林紓の翻訳は、致命的な欠陥を抱えている。なにしろ、シェイクスピアの戯曲を小説体に変えて翻訳しているのだ。林紓は戯曲と小説の区別もできないほど無知である。1924年、鄭振鐸が、シェイクスピア原作「ヘンリー４世」などの漢訳名をあげて林訳を批判した。それ以来、林訳の欠陥として研究者に広く認められている定説である。定説だからこれを否定する研究者はいない。現在まで、例外のひとりも存在していない。

林紓がラム姉弟の『シェイクスピア物語』を漢訳して『英国詩人吟辺燕語』と題した。シェイクスピアの名前だけを出して、ラム姉弟には触れなかった。これと同じことがほかのシェイクスピア原作の林訳にもあるのではないか。これが発想のもとである。ラム姉弟と同じことを別の作家が実行している可能性を考えたのだ。

シェイクスピアの戯曲を小説化した作品を調査した。多数出版されていることがわかった。試行錯誤の結果、林紓が底本としたクイラー＝クーチ版英文原作をつきとめた。

そうなると、林紓たちが勝手に戯曲を小説化したという批判は、成立しなくなる。これは立派な冤罪事件である。

小説化された英文原作を底本にした。だから、林紓が散文に翻訳するのは当然のことだ。林紓の認識不足でもないし、ましてや誤りでもない。戯曲と小説の区別がつかないというのは、あまりにも林紓を侮蔑した言辞だ。逆に、批判した鄭振鐸のほうが間違っていた。鄭の認識不足のほうが、これからは批判されることになるだろう。

いままでの林訳評価を根底からくつがえす発見であるということができる。

詳述した論文を『清末小説』第30号に掲載予定だ。ご期待下さい。

樽本論文補遺３題

『清末小説から』第85号（2007.4.1）に掲載。沢本香子名を使用。３題の内容は以下のとおり。１．「『阿英『晩清小説史』ほか索引」について」で言及していない阿英『晩清小説史』台湾版を掲げる。２．林紓「論古文之不宜廃」の初出天津『大公報』掲載を掲げる。３．「アラビアン・ナイトの翻訳者奚若」について資料を補足する。

１　阿英『晩清小説史』台湾版について

台湾版

樽本照雄編『阿英『晩清小説史』ほか索引』（清末小説研究会2007.2.1　清末小説研究資料叢書10）が出た。そのなかに台湾版『晩清小説史』２種類が紹介されている。実は、台湾ではもう１種類が出版されているのでお知らせする。

台湾・天宇出版社版（1988.9）だ。これは、香港・太平書局版（1966.1）、あるいは香港・中華書局香港分局版（1973.6）をそのまま影印したもの。なぜそれがわかるかといえば、阿英の改訂版説明文にある「為蒋匪」を削除しているからだ。この削除が香港影印本の特徴である。

つまり、台湾では、合計３種類の阿英『晩清小説史』が出版されたことになる。

上海・商務印書館の初版を影印したもの（ただし削除あり）、初版をそのままに組み直したもの、および訂正を取り入れた香港版を影印するものである。

台湾でもくりかえし重版されるのは、それだけ需要があるということだ。

2　林紓「論古文之不宜廃」について

林紓「論古文之不宜廃」は、樽本「林紓を罵る快楽（２）」（『清末小説』第29号2006.12.1）の冒頭に追加説明がある。『民国日報』に再録されたのであって、初出は不明という。

初出については、すでに指摘がなされている。洪越「五四文学革命的另一面——以林紓為中心」（『現代中国』第２輯2002.3。155頁）である。林紓の該文は、天津『大公報』1917年２月１日付に掲載された。洪越は注して、1917年２月８日付『民国日報』に転載されているが、その説明はない、とも。

初出の複写を入手したので掲げる。

「特別記載」とあって特別扱いになっている。また、林紓の肖像写真が掲げてあるのも珍しい。本文中のある字句が大文字で組んである。そこに「東人」が含まれており、中国人の注目を引くための工夫なのだろう。日本人の私としては、なにか居心地がよろしくない。

カッコのなかには、転載するならその旨をはっきり書いてほしい、と明記されている。それにもかかわらず、守られなかったようだ。『民国日報』には、天津『大公報』の表示はなかったからだ。

それにしても、林紓資料の専門書に、なぜ該文が未詳になっているのか。文章の題名を間違えて、長らく踏襲されてきた。

問題は、ふたつある。

ひとつは、胡適以外には誰も林紓の該文を直接引用していないこと。当時の知識人にとって天津という土地は、意識の上で北京から遠くはなれていたのだろうか。

特別記載

（內外各報有轉載本欄記載者請書明係由本報轉錄）

△論古文之不宜廢

林琴南

文無所謂古也唯其是願一言是則造者愈難漢唐之藝文志及崇文總目中文家林立而何以馬班韓柳獨有千古然則林立之文家均不是唯是此四家矣顧尋常之牋牒簡牘舉皆行之以四家之法不惟伊古以來無是事即欲貢之以是亦舉天下而路耳吾知深於文者萬不敢其設爲此論也然而一代之興必有數文家搶拄於其間是或一代之元氣盤礴鬱積發洩而成至文猶大城名都必有山水之勝狀用表其靈淑之所鍾文家之發顯於一代之間亦正類此嗚呼有清往矣論文者獨數方姚而攻掊之者麻起而方姚卒不之踣或其文固有其是者存耶方今新學始昌即文如方姚亦復何濟於用然而天下講藝術者仍留古文一門凡所謂藝道者皆屬空言亦特如歐人之不廢臘丁耳知臘丁之不可廢則馬班韓柳亦自有其不宜廢者吾識其理乃不能道其所以然此則嗜古者之痴也民國新立士皆剽竊新學行文亦澤之以新名詞夫學不新而唯詞之新匪特不得新且槩其故者而譏亡之吾甚莫古系之絕也向在杭州日本齊籐少將謂余曰敝國非新蓋復古也時中國古籍如陌宋樓之藏書日人則盡搭而有之嗚呼彼人求新而惟舊之寶吾則不得新而先殞其舊意者後此求文字之師將以厚幣聘東人乎夫馬班韓柳之文雖不協於時用固文字之祖也嗜者學之用其淺者以譯人轉轉相承必有一二鉅子出肩其統則中國之元氣尚有存者若棄擲踐踏而不之惜吾恐國未亡而文字已先之幾何不爲東人之所笑也

天津『大公報』1917年２月１日付

ふたつ目は、研究者の問題だ。長く探索が行なわれていなかった。まさかとは思うが、批判された林紓の文章は、探索する価値がないとでもいうのか。2002年

まで文章の掲載についての記述が不明瞭であった理由がわからない。【補記】天津『大公報』の記事は『林紓冤罪事件簿』に掲載した。

3　アラビアン・ナイトの翻訳者奚若

樽本照雄『漢訳アラビアン・ナイト論集』（清末小説研究会2006.6.1）の誤植については、清末小説研究会のホームページに訂正が掲げられている。

翻訳者の奚若が問題だ。

奚若は伍光建だ、と教えて下さる外国の研究者（注：オーストラリア在住の柳存仁）があった。該書では、張奚若ではなく、伍光建でもなく、ましてや周桂笙でもないと書いているにもかかわらずだ。日本語を理解しない人だからしかたがない。いまにいたるまで、伍光建説は根強く信じられているといっていい。

奚若は、商務印書館の理事に就任している。その関係からか、商務印書館につとめていた陳応年が奚若について文章を書いているのを知った。陳応年「奚若，一位被人們遺忘的翻訳家」（『中華読書報』1999.7.14未見。補記：のちに電字版で読み「翻訳家奚若」を書いた）という。

文軍主編『中国翻訳史研究百年回眸――1880-2005中国翻訳史研究論文、論著索引』（北京航空航天大学出版社2006.7。111頁）に題名が収録されているのを私は見たのだ。該文そのものは読む機会がない。「摘要」を見ると、奚若は伍光建の筆名では決してない、当時、高級編集者であった、と書いてある。題名通り、忘れられた存在なのかもしれない。だから、別人の筆名だと誤解されている。

もうひとつある。

謝天振、査明建主編『中国現代翻訳文学史（1898-1949）』（上海外語教育出版社2004.9）に奚若の項目がもうけてあるのは珍しい（68頁）。商務印書館編訳所に勤務していた、と説明される。

中国翻訳家　冤罪一百年

大阪経済大学『人間科学研究』第２号（2008.3.25）に掲載。

中国で著名な翻訳家林紓（りんじょ 1852-1924）である。だが、80年以上にわたり濡れ衣を着せられたままだ。中国文学研究史上まれに見る冤罪事件だといえる。ただし、研究界ではそれが冤罪であるという認識すらない。

林紓は、生前に200点を上まわる外国小説を翻訳した。上海の出版社商務印書館は、特別に「林訳小説叢書」と銘打って100編を刊行している。それほどに当時の読者から大いに歓迎された。外国文学への窓を開けたとして高く評価されている。

ただし、林紓自身は外国語を解しなかった。共訳者が原書を口述翻訳したものを林紓が得意の古文で筆記する。これが彼の翻訳方法だ。多くの共訳者がいた。だからこそ200点を上まわる諸外国の小説を漢訳することができた。

林紓は、シェイクスピアとイプセンの戯曲について小説体にかえて翻訳したと批判される。たしかに、林訳をみると「ジュリアス・シーザー」などの歴史劇、また『幽霊』は小説になっている。中国の研究者はそれを指摘して、原作のすばらしい戯曲をだいなしにしたと非難する。外国語を理解しなかったから戯曲と小説の区別もつかない、と罵倒する。奇妙なことである。中国の知識人がまさか、と私は思う。だが、研究者の全員が、中国大陸、香港、台湾、日本その他の地域の区別なく林紓の無知を罵って現在にいたっている。ひとりの例外もない。

調べると、シェイクスピアの歴史劇を小説化したクイラー＝クーチがいた。イプセンの『幽霊』をドレイコット・デルが小説化していた。

わかってみれば簡単なことだ。林紓が翻訳の際に使用した底本がもとから小説体である。漢訳して小説になるのはなんの不思議もない。今までの研究者は中国人を先頭にして（自国の文学研究ではないか、という意味を込めている）、それを知らずに林紓を一方的に罵っていただけ。痛罵することが研究だろうか。だが、それが現実に存在している事実なのだ。

それだけではない。1919年前後に北京でまきおこった文学革命に林紓は反対した、と文学史には書かれている。こちらにも例外はない。軍人の武力を背景にして北京大学を抑圧しようとした。それが林紓だと説明されている。言論弾圧を画策した悪人というわけだ。いくら外国小説を翻訳して功績があるにしても、林紓の文学的評価は地に落ちたままだ。文学革命を正統と認める現代中国においては必然的にそうなる。

だが、これも無実の罪なのだ。北京大学を抑圧しようとした事実は存在しない。林紓は文学革命派から一方的に反対者の代表に指名されただけにすぎない。林紓が当時とった行動について、ナイことをあたかもある事にされてしまった。身に覚えのない罪を押しつけられている。驚くとはこのことだ。

現代中国の学界は、林紓が冤罪であることを認めないだろう。林紓冤罪は100年はつづくものと思われる。

【参考】樽本『林紓冤罪事件簿』清末小説研究会2008.3。『林紓冤罪事件簿（統合増補版)』ウェブ公開2017

『繍像小説』研究の現在

『清末小説から』第89号（2008.4.1）に掲載。研究課題によっては、新聞を資料に利用するのが有効である。私はそう考えた。『繍像小説』に関係する問題を解明するために新聞を使った理由だ。中国の研究者が、そのことに気づいて実践しはじめたのはまことにうれしい。新聞を資料として利用した例として、樽本「「官場現形記」裁判の真相――日本を装った海賊版」(本書所収）も見てほしい。

『繍像小説』にはみっつの問題がある。編者は誰か、また李伯元と劉鉄雲の盗用事件、および発行遅延問題である。私は、問題点３件について独自の解答を提出している。だが、中国ではそれらについて長らく放置したまま追跡調査を行なっていない。

ようやく文迎霞「関於《繍像小説》的刊行、停刊和編者」(2006）が公表された。編者問題については、李伯元であることを新聞の広告を示して確認している。新聞を資料として利用するという私の方法を援用すれば、同じ結論に到着するのは当然だ。おなじく発行遅延についても新聞広告を根拠にして私の解答に近い。ただし、より緻密な推測を提示する。それは、よい。残念なことに、発行遅延から必然的に生じる盗用事件については、言及をしていない。文迎霞に今後の論考があるのだろうか（文末補記参照)。

『繍像小説』に関して、特に刊行情況と編者について論じた文章がようやく発表された。

『繍像小説』は、有名であるにもかかわらずいくつかの問題をかかえている。すでに一部では相当に深いところまで掘り下げて論議されているのが事実だ。ただ、追跡検証を行なう研究者がいなかっただけ。提起された問題は、放置され検討されてこなかった。「ようやく発表された」と書いたのはそういう意味だ。

1　『繍像小説』をめぐる問題

『繍像小説』には、どういう問題があるのか。該誌をめぐって論争が行なわれた経過を簡単に説明する。

きっかけは、編者問題だった。すでに20[30]年以上も昔のことになる。

定説では、『繍像小説』の主編者は李伯元ということになっていた。だが、そうではないと異論が提出され、いや、やはり李伯元なのだと大論争が発生した。論争になったのは、1984年以降のことである。その過程で、李伯元と劉鉄雲の盗用問題があらためて浮上する。さらに加えて『繍像小説』の刊行が遅延している、と新説が出されたのだ。

『繍像小説』という雑誌について、その編者と刊行時期は周知のはずだった。ところが従来とは違う説がでてきたのだから学界の注目を集めたのも当然だろう。しかも作品の盗用問題までも伴っている。

つまり、『繍像小説』には３件の問題がもとから存在しているのだ。

ひとつは、いうまでもなく『繍像小説』の編者問題だ。もうひとつは李伯元と劉鉄雲の盗用問題で、みっつめが発行遅延問題である。この３点が複雑にからみあっている。

主編者が李伯元であることについては、のちに決定的な資料が発掘された。当時の新聞広告だ。雑誌の発行元である商務印書館が、新聞広告で李伯元を特に招いて編集してもらったと公表していた。動かぬ証拠だから、編者問題はこれで解決である。私はそれについて最終論文を執筆した。「『繍像小説』編者問題の結末」(『清末小説から』第62号2001.7.1）という*1。

残りの発行遅延問題と盗用問題についてはまとめのつもりで、「李伯元は死後も『繍像小説』を編集したか」(同上第64号2002.1.1。両論文ともに『清末小説叢考』収録）を書いて説明した。

雑誌停刊時期に関する従来からの定説は、こうだ。

光緒三十二（1906）年三月李伯元の死去によって雑誌は停刊した。

これが定説になったのには理由がある。

『繍像小説』が半月刊の刊行を遵守したならば、その最終号である第72期は光緒三十二年三月に出たはずだ。これと李伯元の死去がちょうど重なる。このあまりにも好都合な一致は、偶然だとは思えない。すなわち李伯元の死去によって『繍像小説』は停刊した。研究の権威である阿英がそう断言している。ゆえに定説になった。

ところが、前述のとおり発行遅延説が提出される。予想していなかっただけに私は驚いた。私はその時まで定説を信じていたからだ。

重要問題が提起されている。それについて私なりの検討を行なった。第１年、第２年の発行遅延情況を探求したうえで停刊の時期は光緒三十二（1906）年末であろう、という仮説を出したのだ。定説に比較して約十ヵ月も遅れていることになる。約十ヵ月といえばほぼ一年近い時間だ。無視していいわけがない。

この仮説を出すために私が利用した資料は、当時の新聞記事と広告である。それが私なりの工夫であった。

雑誌刊行の期日が問題になっている。

普通は、雑誌に日にちの記載があったとしても実際に発行された期日と一致するとは限らない。記載よりも早かったり遅かったりするのは常識だ。

ただ、『繍像小説』が複雑なのは、雑誌そのものに刊行の記載が途中から消失しているからだ。ゆえに従来は、「半月刊が守られたとして」という前提のもとで停刊を光緒三十二年三月といっていたにすぎない。その前提を忘れ、阿英の断言もあったからそれがいつのまにか定説になった。確かな根拠は、もともとなかったのである。

発行元の商務印書館に業務日誌のようなものが保存されており、発行期日が記録されているならば話は別だ。だが、記録の存在は確認されていない。商務印書館内部の記録がないとすればどうする。なにを利用すれば『繍像小説』の刊行期日を特定できるか。私が工夫したのは、まさにこの部分だった。

外部で公開された資料を利用するほかない。そこで、日付のある新聞に着目した。商務印書館が雑誌の刊行を広告している。あるいは、雑誌が到着したと新聞記事になっている。日付のある資料としては新聞が信頼できると考えた。

この問題に関して新聞を資料に使う研究者は、私を除いてはいなかった。私が

当時最終的に使用したのは、『世界繁華報』、天津『大公報』、『中外日報』、『申報』、『東方雑誌』、『同文滬報』などだ。最初からそれらのすべてが揃っていたわけではない。中国で発行されていた新聞雑誌だから、原紙を直接利用できる状況ではなかった。時間をへて影印本になる、マイクロフィルムが作製されるなどにともなって利用できる資料が徐々に増えてきた。一箇所に資料がまとめて置いてあるわけでもない。閲覧するため日本国内のいくつかの場所に行ったし上海図書館にまで足を運んだ。だからこそ約20年という時間が必要だったのだ。利用できる資料が増えるにともない、同じ主題で私がくりかえし文章を発表した理由でもある。ただし、雑誌刊行の期日を追求するといっても新聞の記事広告を利用するのだから、おおよその推測しかできないのは明らかだ。広告は出たが実際の刊行には時間的なズレが生じる可能性もあるだろう。そう私は認識している。

雑誌の刊行が遅延していただけではすまない。なぜかというと、『繍像小説』についていえば、主編者の李伯元が死去した時期がからんでくる。上述のように、以前の定説では李伯元の死去に連動して雑誌が停刊したことになっていたではないか。その根拠がくずれた。これはなにを意味するか。李伯元の死後も『繍像小説』は出版されていたのだ。この事実は、彼の作品についての疑問を生じさせる。李伯元の作品であるはずの「文明小史」などが一部分とはいえ彼の執筆ではなくなる。私の考えは、彼の友人欧陽鉅源が書き継いだというもの。問題をすでにそこまで掘り下げて述べている。

「文明小史」が「老残遊記」から文章の一部を盗用したのは、李伯元の生前に１回、彼の死後に１回発生したことにもなる。

結論をいえば、『繍像小説』の編者問題は解決している。今まで異論は提出されていない。結果的に従来の定説、すなわち主編は李伯元説を肯定するものになった。しかし、信頼できる証拠を示しているところが今までとは異なる。証拠資料があるとなしでは大違いだ。

ところが、残りの盗用問題と発行遅延問題については、学界ではなんの反応もない。研究者は、無視して現在にいたっている。

無視する人の心理は不明だから想像するほかない。

その理由のひとつは、発行遅延については資料的な裏付けが得にくい。私がい

くら新聞を示し説明してもなかなか受け入れがたいらしい。専門家である王燕が『繍像小説』影印本（北京図書館出版社2006.4）の解説を書いて、あいかわらず「1906年４月に第72期を発行したのち停刊した」と定説を信じている。以前から異論が提出されているにもかかわらずだ。そればかりか、盗用問題になると複雑な事情があってどう理解していいのかわからないと見える。もっとも北京図書館出版社版『繍像小説』は、特殊な影印本だ。つまり、使用した雑誌はもとから原形を留めていない。連載作品をひとまとめにして分類しなおした編集本だ。雑誌の初出とは違うのだから、刊行が遅延していたなどの問題が理解できるはずがない。

もうひとつ理由があるとすれば、私が見るところ、『繍像小説』の刊行について問題があると認めると、やっかいな課題が自動的に出現するからだ。手に負えないほどに「やっかい」だから無視せざるをえない。つまり、李伯元の死去がこれに関係する。くりかえすと、発行遅延が事実であるならば李伯元死後も雑誌が発行されていた。李伯元の死後に発表された「文明小史」などは一部分が彼の作品ではないことになる。定説が否定される。文学史を書きかえる必要がでてくるのだからやっかいに違いない。

昔は、該誌全72冊の完揃いそのものを見ることがむつかしかった。研究が進まなかった理由にしてもかまわない。だが、現在は影印本が出版されているから、比較的便利にはなっているといえる。だが、このなんでもなさそうな小説専門雑誌『繍像小説』が、その内部に以上の問題３件を複雑にからみあわせて抱え込んでいる。研究者が手を出しにくい課題だといえるかもしれない。

私にしてみれば、資料を収集しそれらにもとづいて私なりの見解をすでに提出している。それをほかの研究者はどのように考えるのか。それを知りたいと長く思っていた。

そこで、冒頭の「ようやく発表された」文章を読んでみた。

文迎霞「関於《繍像小説》的刊行、停刊和編者」(『華東師範大学学報（哲学社会科学版)』第38巻第３期2006.5.15）である。

2　文迎霞論文について

表題どおり『繍像小説』の刊行情況、停刊、編者について検討した論文だ。

該文には、「要約［摘要］」がついている。論旨を理解するためには便利だから最初に紹介しよう。要約をさらに要約すれば、以下のようになる。

『繍像小説』は清末小説史において重要な地位を占めているが、刊行については解決しなければならない問題が少なからずある。当時の新聞には出版刊行の広告が掲載されているからそれによって分析する。該誌第１年24期には重大な遅延情況があり、順次延期されてその停刊時期の下限は光緒三十二年十二月十七日（1907.1.30）である。編者は李伯元だ。

うーん、と思わず声が出そうになる。「十二月十七日」と細かく特定している。私が提出した見解とそれほど違っているわけではない。ここまで精密に指摘したのは、研究を前進させたことになる。大いに期待がもてる。ただ気がかりなのは、この要約を見る限り、盗用問題と李伯元死去後の刊行継続については言及がなさそうだ。

即断は禁物だ。論述にそって検討しよう。

冒頭の、いわば「まえがき」部分において文迎霞が使用した資料をあげている。

『新聞報』、『申報』および『時報』などで、そのうちの『新聞報』に掲載された広告が重要な情報を提供しているという。『新聞報』そのほかは、すべて上海図書館所蔵のマイクロフィルムだ。『新聞報』を利用したところが新しい*2。新聞が資料として有効だという認識を文迎霞が持っているのは、まことに正しい。

ということで、論文内容を順次紹介する。

検討すべきは、『繍像小説』の創刊、継続刊行、停刊という順序になる。

創　刊

創刊については、私は『同文滬報』光緒二十九年五月初七日付の記事を提示したことがある。すなわち、『繍像小説』創刊号を贈呈されたという内容だ。『繍像小説』創刊号は該誌表紙裏の目次部分に「癸卯五月初一日」と印刷する。『同

文滬報』の記事は約一週間後だから、ほぼ表示通りの刊行であったと推測したのだ。

文迎霞は、『新聞報』同年五月初五日の商務印書館広告を示す。『同文滬報』よりも二日さかのぼる。これが新発見だ。『繍像小説』創刊号は、五月初一日の刊行だと考えてほぼよかろう。

もうひとつは、『新聞報』閏五月十五日に創刊号の再版を広告していると明らかにした。これも今まで知られていなかった事柄だと思う。文迎霞の新しい発見だ。

継続刊行

『繍像小説』については、触れるべきいくつかの注視点がある。

ひとつは、該誌第13期より発行年月日を記載しなくなることだ。文迎霞は、第12期までは毎月初一、十五日だと明記している。記述の都合で、それすらも実際は守られてはおらず、発行遅延が発生していると主張するためだ。それは正しい。だが、第13期より刊行月日を記載しなくなったと念押しをしてもよかった。刊行が事実上遅れていたことが、日にちの記載を中止した原因とも考えられるからだ。

第１年24期まで、今まで考えられていた刊行月日と『新聞報』広告との時間差を詳細に掲げている（「《繍像小説》応刊行時間与広告時間対照表」37頁）。それによると、時間差は、創刊号が四日、第24期は二百四十三日になる。たぶん第２、３年についても対照表を作成しているはずだが、雑誌に掲載されなかったのは残念なことだった。

創刊号の時間差四日というのは、誤差の範囲内だろう。雑誌記載通りの刊行だと考えていい。だが、第24期の遅れはやはり目立つ。新聞の日付で「十一月廿三」を文迎霞は示しており、私が予想した光緒三十年年末とほぼ一致する。こう書けば、文迎霞は、樽本のいう年末とは約一ヵ月の差があるというかもしれない。だが、新聞広告に依拠するかぎり、おおよその期日しか特定できないと考える。それでも、約一ヵ月の差があると主張するのであれば、そうですか、と私はいうのみ。

文迎霞が先行論文を追跡し検討し、別の資料を提出して月日をより詳細に特定

しているところを評価すべきだ。

停　刊

李伯元の死去と『繍像小説』停刊が重なる。光緒三十二年三月だ。これが以前の定説だった。文迎霞は、畢樹棠と阿英の論文をかかげる。ふたりの説明が定説になったといいたいわけだ。

たとえば、「畢樹棠は「繍像小説」という一文で、停刊の原因はあるいは編者李伯元がその月に死去したからかもしれない、と認めている」(36頁）と説明する。注をつけて、畢樹棠の該文が『文学』第５巻第１号（1935）に掲載され、魏紹昌編『李伯元研究資料』（上海古籍出版社1980）に収録してあることを示す。それはそうなのだが、魏紹昌が畢樹棠論文に対して行なった書き換えを文迎霞が指摘しないのは不十分だと考える。

文迎霞が説明するように、畢樹棠は『繍像小説』停刊の原因を李伯元の死去かもしれないと書いてはいる。だが、畢は該誌の停刊を光緒三十二年三月だとは考えてはいない。畢樹棠の該当する個所を初出と魏紹昌編『李伯元研究資料』所収のものとならべて示す。

『文学』初出　停刊年月不明、約在光緒三十二三年之間（270頁）
魏紹昌編所収　停刊於光緒三十二年（丙午）三月（462頁）

畢樹棠は、『繍像小説』第72期に刊行年が記載されていない事実をはっきりと把握している。だからこそ、停刊の年月は不明だという説明になるのだ。これが正しい記述である。だが、魏紹昌は、畢樹棠の文章を、よりにもよってその重要な部分を魏の独断で勝手にわざわざ書き換えてしまった。まことに余計なことであったとくりかえさざるをえない。研究者としてはやってはならない種類の書き換えである、と以前から私は指摘している。この事実は、中国の学界では率直に書いてはならない種類のことなのだろうか。もしそうならば、遠回しにでもわかる説明をしてほしいものだ。そうでなければ、文迎霞は『文学』雑誌を掲げては

いるが、魏紹昌が行なった書き換えに気づかなかったことになる。悪くすると『文学』雑誌そのものを確認していないのではないかと疑われる恐れさえ生じるだろう。

さて、停刊の時期である。張純と樽本の推測を紹介したあと、文迎霞は、『新聞報』光緒三十二年十二月十七日（1907.1.30）の広告に全72期が刊行された趣旨のあることをのべる。すなわち、停刊した日時の下限を示すというわけだ。私が見つけた広告は『中外日報』同年同月十八日だから、一日しか違わない。文迎霞は、私と同じ結論に到達した。

誤解のないようにお願いしたい。私は自慢しているわけではない。この問題について研究方法の正しさが文迎霞によって証明されたと思うだけだ。文が新聞広告に注目したのは正解である。証明方法が正しければ、どのような資料を使用してもほぼ同じ結論に到達するだろう。

新聞は日付がついている点で有用な資料である、と私は考えている。しかも、利用できる資料がふえてきた。以前は見ることも触ることもできなかった新聞が影印される、マイクロフィルムになる。だからこそ文迎霞は、私が実行したよりもさらに精度を高めて発行期日を特定することができたといえる。

編　者

文迎霞が新しく提出しているのは、『神州日報』光緒三十三年丁未七月初九（1907.8.17）付の広告だ。南亭亭長李君伯元を特別に招いて雑誌を編集してもらったという内容のもの。いうまでもなく商務印書館が出稿した。私が確認した同じ広告は、同年九月初三日（10.9）付『時報』および『中外日報』、さらに初六日（10.12）付『時報』だ。それらよりも約二ヵ月も早い。文迎霞の新しい発見である。

3　文迎霞に対する期待

文迎霞論文は、『繍像小説』の編者および発行遅延について従来よりも精確に考察を加えている。それが成功した原因は、『新聞報』と『神州日報』という資

料を使用したからだ。

発行遅延問題については、ここまで緻密に論じている。編者問題についても新しい資料を提出した。当然ながら、李伯元の死去後も『繍像小説』が継続刊行されている事実が確認されたということだ。文迎霞は、このことを知らないわけがない。ところが、それについては何も説明していない。不可思議である。原稿には言及をしているが掲載誌のつごうでその部分は発表時には省略されたのかどうかまではわからない。

文迎霞は、次に大きな問題がひかえていることは十分承知しているはずなのだ。

李伯元の「文明小史」は、彼の死後に公表された部分がある。書きためていたわけではない。これは誰の執筆になるものか。「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係をどのように考えるのか。きわめて重要な問題だと私は考えている。ぜひとも文迎霞の意見を聞きたい。

文迎霞は、『繍像小説』発行遅延問題と編者問題において彼女の鋭い感覚と慎重で確かな資料の取り扱い方を充分に示している。その後ろに存在している大問題についても、あざやかな結論を提出するはずだと私は信じて疑わない。

【補記】「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題について、文迎霞に対する私の期待は失われた。文迎霞の指導教授である陳大康も、その『中国近代小説編年史』(北京・人民文学出版社2014)において『繍像小説』発行遅延を認めている。しかし、前述両作品の盗用問題には気づいていない。あるいは、無視した。指導教授とその学生のふたりともが、『繍像小説』発行遅延のうしろに存在している重要事実の発見には到達できなかったと見える。残念なことだ。

【注】

1）汪家熔が当時提起したのは、『繍像小説』の主編者は李伯元ではなく夏曾佑であるという新説であった。しかし、汪は反論を受けるとふたたび夏曾佑説を出すことはしなかった。誰が考えてもありえない立論だったから当然だといえよう。今から約20[30]年前のことだ。ところが、ありえないはずの夏曾佑説をわざわざ紹介している著作が、しかも最近出版されている。洪九来『寛容与理性——《東方雑誌》的公共輿論研究（1904-1932)』(上海・世紀出版集

団、上海人民出版社2006.11。295頁）である。私が『繍像小説』の編者問題について最終論文を書いてすでに数年が経過している。それがまったく視野に入っていない研究者がいるのだから、やはり中国は広い（笑）

2）陳大康「晩清《新聞報》与小説相関編年（1903-1905)」(『明清小説研究』2007年第２、３期（総第84、85期）2007発行。いずれも月日不記）が、『新聞報』に掲載された『繍像小説』関係の刊行広告を採録している。文迎霞の掲げる『新聞報』の日付とは一致しない部分がある。

「官場現形記」裁判の真相

――日本を装った海賊版

『清末小説から』第90号（2008.7.1）に掲載。「官場現形記」裁判について、研究はだいぶ以前に着手していた。焦点となるその海賊版について、私はいくつかの候補をあげたことがある。当時の新聞を調査したのだ。ただし、私の努力と資料が不足しており特定することができなかった。劉穎慧は、今回資料を新しく提出して突破口を示した。新聞を調査して裁判の時期を特定した劉の成果を私は高く評価する。それに触発され、再度調査を行なうことにした。この種の問題では、資料の発掘こそが研究を前進させる。日本と中国の両国が関係しているように見える海賊版裁判だ。まことに興味深い。以前はできなかった新聞のマイクロフィルムを入手できるようになった。研究状況の大きな変化である。その結果、いくつかの新しい新聞記事を見つけることができた。劉穎慧論文では言及のなかった資料だ。「官場現形記」裁判の真相とは、日本人になりすました中国人を裁くものであった。裁判がどのような経過をたどって落着したかを新聞の広告と報道記事によって明らかする。これは著作権裁判のはやい例として参考になるだろう。

1　はじめに

李伯元「官場現形記」は、当時の読者から大いに歓迎された。

『世界繁華報』紙上で連載がはじまったのは、1903年からのことだ。新聞掲載の12回分をまとめて初編単行本が出版される。初編、続編とくりかえし、五編60回というように刊行された。

人気があったことは、新聞連載途中から海賊版が出てきたことからもわかる。利益を追求する業者が出現したのだ。目をつけられるくらい、また話題になるほ

どの売れ行きだったということができよう。

『官場現形記』の海賊版だから、関係者は黙ってはいない。２度問題にした。李伯元は生前に裁判に訴えたし、彼の死後には親族と欧陽鉅源のあいだで談合が持たれている。ただし、前者の裁判については詳細が長らく不明だった。

「官場現形記」裁判についての手がかりは、短い文章がひとつだけある。『新小説』第２年第８号（刊年不記）に掲げられた「新笑史」だ。『中外日報』に裁判の記事が掲載されたことをいう。新聞記事から原文「問官断得此書、燬謗官場、歴歴如絵」を紹介している。それだけのこと。

わざわざ『中外日報』という紙名をあげているのだから、裁判は確かに行なわれたらしい。だが、審議の具体的な内容がわからない。そもそも記事が掲載されたという新聞の月日が書かれていない。

私はそれを視野に入れて考えた。ところが、日本のある研究者は次のように書いた。「閑話休題、とはいえ「新笑史」の記事は、樽本氏自身「笑い話だから、たわいがない」というように、期日の記載すらない雲をつかむような話であった、本来論文で扱うべきものではなかった。まずそれが事実か疑わしい。「新笑史」の記事を裏付ける資料がなにひとつないからである。百歩譲ってそれが事実だとしても、いつおこったか不明である」*1。

私は、この記述を見て研究姿勢の違いを痛感したのだ。その人は、不明だから無視するのが当然だという。だが、私は、詳細は不明だけれどもその事もふくめて考えようと思う。その時点でいちばん合理的な解釈をさがす。新しく資料が出てきたときは、また考え直せばいい。これが私のやり方だ。

一般にいって、清末小説に関する資料は、それほど多くはない。どんなにわずかであろうが見逃すわけにはいかない。「扱うべきもので」あるからこそ、断片にせよ資料集に収録されている。例の研究者は、そのことを理解しなかった。

わずかでも手がかりがあり調査できるものならば、何かがわかるのではないか。私はそう考えて実行するが、ほとんどが失敗に終わる。日本でいくら調査研究と唱えても限界がある。それほど簡単なことではない。

情況証拠から、裁判が行なわれたのは言われている1905年八月ではなく1905年十一月以前だと私は推測した。逆に範囲をひろげたことになる。それだけではあ

まりに漠然としている。期間を絞ることができない。上海図書館までおもむいて調査はしたが、対象の範囲が広すぎた。また、私の努力も不足していたらしく該当の新聞記事を探し当てることはできなかった。

詳細がわからないまま、それから数年が経過した。気がついてみると論文が発表されており、『中外日報』そのほかに関連広告を見つけたという。私がよろこんだのはいうまでもない。

新しく利用できるようになった資料もある。私は調べ直すことにした。その結果、該論文が言及していない新出資料を盛り込んで本稿を「「官場現形記」裁判の真相」という。

にたような事があるから不思議に思う。私が長く関心を持ち続けているいくつかの課題について、追跡検証する論文が中国で同時に発表されているからだ。それも同じ学術雑誌の同じ号に掲載されているので興味深い。それらは新聞を資料に利用したところが共通している。私が以前から採用している方法と同じだからおもしろく感じる。

ひとつは、『繍像小説』問題の文章だ。これについては文章を別に発表した*2。

本稿で紹介するのは、海賊版『官場現形記』に関する論文である。劉穎慧「李伯元《官場現形記》版権訴訟始末」(『華東師範大学学報（哲学社会科学版)』第38巻第３期2006.5.15）という*3。

まず、問題の所在を明らかにしておく。

2　海賊版『官場現形記』はどれか

前述のとおり海賊版『官場現形記』が出てきたことに対して裁判が行なわれた。李伯元の生存中のことだ。

裁判になった海賊版がどれかを推測することが、まず必要だった。不思議に思われるかもしれない。それすら明確にされてはいなかった。複数の候補をあげることができるほどに、逆にいえば人気があったことになる。

可能性がある海賊版のうち、私はつきつめて次の２種類に絞った（書目番号は省略）*4。

③日本知新社本　日本吉田太郎著　光緒三十年六月
④粤東書局增注絵図本　光緒三十年十一月

表示によれば、両者ともに1904年に刊行されている。李伯元は、それらを自分の目で確認しているはずだ。関連して説明すると、本体の「官場現形記」そのものは、『世界繁華報』に連載が続いている。また、単行本としては続編（第13-24回）が出版されていると考えられる。続編刊行の年月が明記されていないから不確実な書き方にならざるをえない。

③の日本知新社本は、私の手元にある。見れば、発行責任者の名前などの記載がない。それは、当時の慣習だ。また、出版社の住所も記載していない。これでは訴えようがないではないか。だから、裁判の対象になる可能性は低いと思った。また、李伯元死後に関係者のあいだでもたれた「官場現形記」出版についての談合があったことは述べたとおりだ。当時の私は、裁判とその談合を関連づける方向で考えていた。

ゆえに、以上を総合すると次のようになる。すなわち、海賊版裁判は④の粤東書局增注絵図本が有力候補であり、その結果は和解がいちばんありそうだ。

いくつかの事実をならべて、総合的に判断した。だが、この推論は、いま修正を必要とする。

結論を先にいう。裁判は実在した。訴えられたのは、③の日本知新社本だった（次ページの写真を参照）。

あらためて私は驚く。発行元の住所も明らかにしていない出版物である。しかも、日本と日本人を標榜しながら、奥付には年号の「明治」も明示せず「光緒」のみを印刷しており、あきらかに中国人が刊行した海賊版だ。これが、いかなるいきさつで訴えられ、その結末はどうなったのか。

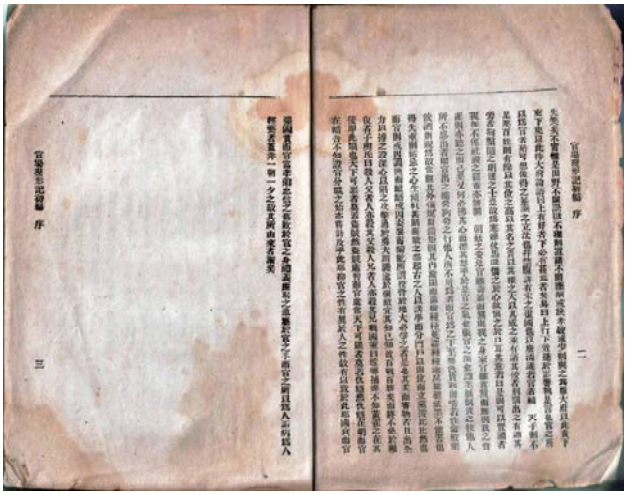
3　新聞広告

劉穎慧論文が提出した新しい資料を紹介する。

官場現形記
日本知新社藏版

官場現形記
初編
日本知新社

官場現形記初編目錄



光緒三十年五月印刷
光緒三十年六月發行
定價銀　角正
不許
翻刻
著者　日本吉田太郎
發行所　日本知新社
印刷所　日本知新社

官場現形記卷之一

劉は、当時の新聞を調査しそこから以下の新聞広告を複数探し当てた。時間順に掲げ、私が便宜的にａからｅまで記号をつける。海賊版に関係する部分のみを劉論文から抜き出して示す。それぞれについての説明はあとで行なう。また、関係資料は、のちに写真版でまとめて掲げる。

○世界繁華報館の広告

ａ：『新聞報』1904.9.2（光緒三十年七月二十三日）

「……禀准捕房査辦翻刻各書荘，幸勿誤収被累」（40頁）

ｂ：『新聞報』1904.11.8（光緒三十年十月初二）

「……書経存案，翻刻必究，前有日商朝日洋行出售洋装翻刻本，蒙日本領事論（ママ）令停売，並函請会審，分府黄司馬将托銷之席粋甫伝案厳訊，並此（ママ）附聞」（40頁）

○知新社の広告

ｃ：『中外日報』1904.11.15（ママ）（光緒三十年十（ママ）月九（ママ）日）

「洋装官場現形記毎編一元／是書毎編洋装一大本，墨色精良，紙質（ママ）堅厚，印制（ママ）清楚，装訂精致，以供喜読是書者置放書案，益壮観瞻，毎編售洋一元，各書荘均有代售，以便就近購閲。批発另議。欲批者祈与本社経理人席粋甫接洽可也。存貨無多，幸勿失之交臂。〇〇〇知新社主人弼本氏啓」（40頁）

○世界繁華報館の広告

ｄ：『新聞報』『時報』1904.11.22（光緒三十年十月十六日）

「世界繁華報館特別告白／翻印《官場現形記》者看看看／出售翻刻《官場現形記》之席粋甫前因抗伝不到，経公堂出票拘提，昨日解奉，会審憲判席粋甫先枷三天。特此布告，各書坊宝号幸勿誤售受累是盼」（41頁）

ｅ：『中外日報』1904.11.22（光緒三十年十月十六日）

「出售翻刻《官場現形記》之席粋甫前奉公堂伝訊，抗不到案，即蒙出票拘提，昨早由捕房解当奉，会審憲判席粋甫抗伝枷三天」（41頁）

劉穎慧が探し当てた以上の新聞広告が、従来は不明であった海賊版裁判の一端

を明らかにしている（後述）。句読点、カッコなどは、原文についているわけではない。注記はないが劉がほどこしたのだろう。記号をつけたままで引用した。

以上５種、ほぼ同内容のもの（ｄとｅ）があるから実質４種の広告を読み、順を追って考えると基本的なことがわかる。

まず、全体的なことをいう。知新社本が裁判の対象になっていた。また、裁判が行なわれたのは1904年11月だと判明したことも重要な手がかりになる。調査時期を大幅に絞り込むことが可能になった。従来は不明であったこれらのことを劉穎慧は明らかにした。新しい資料も出さずに批判する人にくらべれば、研究者としてどれだけ良質であるかいうまでもない。

劉が成果をあげたことを認めたうえで、不足することをいくつか先に指摘しておく。批判しているのではない。事実をのべているだけだから、誤解のないようにお願いしたい。

ひとつは、『中外日報』の報道記事そのものを掲げていない。上に引用したように広告だけだ。広告が出ているということは、裁判についての報道がなされているはずだ。しかし、それへの言及がない。裁判関連の記事はもとからないのか。それとも、劉が気づかなかっただけなのか。そこがよくわからない。丁寧な調査を行なっている印象が強いだけに、私は不思議に思う。

もうひとつは、せっかく知新社という出版社を明らかにしながら、その知新社本『官場現形記』についての説明がない。そういえば、中国の研究者が知新社本『官場現形記』の詳細を説明する文章を私は読んだことがない*5。従来からそうなのだ。中国では見ることがむつかしい版本になるらしい。

みっつめに、知新社本以外にも海賊版の候補としてあげるべきものがあることを劉穎慧は書いていない。具体的にいえば、粤東書局增注絵図本だ。それをどう考えるのか、劉の意見を聞きたいところだ。

本題に入る前に、海賊版にまつわる基礎的な知識を確認しておこう。

海賊版を取り締まる法律は、当時の中国にあったのか、という当然の疑問がでてくる。

一般にいえば、「大清印刷物件専律」は、1906（光緒三十二）年に商部巡警部学部会同鑑定となる。また、「著作権章程」（または「大清著作権律」）の公布は、1910

（宣統二）年だ*6。

ところが、いま問題にしている『官場現形記』の海賊版刊行は1904年であって、それらの法律が成立する以前のことなのだ。では、海賊版については野放しだったのかといえば、そうではない。上海という租界だからこそ著作権をめぐって訴え訴えられるという裁判が行なわれている*7。ただし、著作権裁判といっても、外国人が関係してはじめて成立するような時代と場所だった。

まず、上の広告を検討することからはじめる。裁判制度についても必要に応じて触れる。

4　新聞広告の検討

ａから見ていこう。

世界繁華報館の広告だということは、李伯元が書いたものと考えてよいか。ただし、欧陽鉅源である可能性もある。どちらかに特定できる資料が今はない。

「翻刻した各書店を調べて処罰するよう警察に許可済みである。誤って買い入れ迷惑をこうむることのないように」とある。

ここでいう翻刻とは、２種類が考えられる。もとになるのは、世界繁華報館本の活版印刷線装本だ。

ひとつは、原本にもとづいて筆写し石印版で印刷発行する。もうひとつは活版で組み直して刊行する。著者、出版元の許可を得なければ、それが海賊版となる。もし、許可を得ていれば海賊版にはならない、という簡単な理由だ。わざわざ分かりきったことを書くのは、粤東書局增注絵図本を念頭においているからだ。

劉穎慧は、この広告を根拠にして訴訟の開始だという。時期は広告掲載の前後になる。

ただし、私がここで注目するのは、海賊版の発行元を明らかにしていないところだ。前述のとおり、海賊版は複数存在する。この広告では、出版社を名指ししていない。ということは、広告ａは、複数の海賊版刊行販売者に対する李伯元からの警告にすぎないようにも思われる。それと同時に、各書店が被害者とならないようにも呼びかけた。だが、私から見れば、警告だとしてもあいまいなものだ。

海賊版の発行元が明記されていなければ警告の意味がないのではないか。

ｂは見るとおり、1904年11月８日付『新聞報』の世界繁華報館広告が、海賊版裁判に言及している。

「書経存案，翻刻必究」は、奥付（漢語では版権頁）に見かける。決まり文句だ。日本語になおせば、「登記済み、翻刻厳禁」ということになろう。

突然、具体的な固有名詞として日商朝日洋行と席粋甫の名前が出ている。担当する裁判官は、黄というらしい。当時の『申報』を見ると裁判官に黄耀宿という名前の人がいる。同一人物だろうか。参考までに記しておく。

日本の朝日洋行が『官場現形記』の洋装翻刻本、つまり海賊版を売り出した。ここの「洋装」とは、現在の漢語でいう「平装」を意味する。本物の世界繁華報館本が、中国伝統の線装本であるのに対比させている。

朝日洋行という名称からわかるのは貿易商だ。以上の広告からのみ見ると、日本の朝日洋行が海賊版を席粋甫に委託販売させたと読める。

これでは詳細がわからない。朝日洋行あるいは知新社が、日本で海賊版を印刷し中国に運び込んで販売したのだろうか。疑問が残る。

「日本領事に販売停止処分にしてもらい、あわせて会審に書面を提出して……」とはどういう意味か。

ここにでてくる会審とは、租界で発生した事件をあつかう裁判所だ。

裁判といっても租界のことだから国籍が問題になる。人に関するばあい、外国人が関与すれば当該国の領事が出てくる。中国人どうしの案件ならば領事は無関係だ*8。

日本の貿易商朝日洋行が関係していると考えられるので日本領事が登場する。しかし、奇妙だという指摘があっても不思議ではない。日本領事が出てきて日商朝日洋行に対して販売停止処分をするだろうか。つまり、日本領事が日本の貿易商を攻撃し、李伯元、すなわち中国人の権益を守ろうとしていることになる。奇妙である。日本人を保護するために日本領事館が存在するのだから、ここはウソでも朝日洋行を弁護して当然ではないか。日本人が中国人を守るはずがない、と普通は批判するところだろう。くりかえす。日本領事が日本の貿易商に制裁を加えるのは、おかしくはないか。だが、世界繁華報館の広告には、そう書いてある。

世界繁華報館の広告には日本知新社という発行元が出ていない。普通は名前をだして非難するだろう。ゆえに、おかしいと思う。広告だからわざとあいまいにしているのだろうか。逆に、広告だから強調してもいいように感じるのだが。このままでは疑問を残すほかない（後述）。

朝日洋行は、いかにも日本の貿易商にありそうな名前だ。ところが、実際にそれが存在したかとなると確認できない。

たとえば、『上海指南』（商務印書館　宣統元年（1909）五月初版／七月再版）にはない。黄光域編『近代中国専名翻訳詞典』（成都・四川人民出版社2001.12）は、外国の会社も多数を収録しているが、これにも見えない。また、王垂芳主編『洋商史――上海：1843-1956』（上海社会学院出版社2007.7）が、上海における外国商人の起源と消失の歴史を９篇37章にわたって述べる。その附録２に「1843-1949年上海洋商企業名録」がある。日本商を643軒*9と多くの会社を収録している（イギリス商634軒、アメリカ商366軒ほか）。だが、こちらにも朝日洋行は記録されていないのだ。ただし、確認できないだけで存在していた可能性を私は否定しない。

この広告で目をひくのは、朝日洋行および席粋甫という固有名詞をあげている点だとくりかえす。ということは、人物はすでに特定されている。広告ａでは名前をあげていなかった。李伯元らは、どこから探し出してきたのか。上海で販売されている海賊版だから、関係者については自然にわかるものなのか。その具体的な説明は、ない。

この時点で席粋甫は逮捕されていないことにも注目しておきたい。なぜなら、その前段階になる「召喚されるだろう」と書いてあるだけだからだ。

ｃの知新社広告が興味深い。

ｂで見た世界繁華報館の広告では、席粋甫を召喚して厳しく尋問するとあった。ところが、訴えられたはずの知新社が販売広告を打っている。しかも、一週間後の新聞広告だから、裁判所からの召喚を無視しているとわかる。広告でも裁判のことは、なにも触れていないのが大胆だ。ただし、訴えられています、とは書かないのが当たり前か。それにしても、おかしな成り行きである。

「毎編一元」というのは、初編、続編とつづいて刊行していると読むことができる。だが、裁判を抱えたままで続けて刊行できるとも思われない。私の見てい

る知新社本は初編のみだ。

引用した新聞広告には、「〇〇〇知新社主人弼本氏啓」と表示される。「〇〇〇」が原文のとおりなのかどうかは知らない（後述）。また、「弼本氏」とあるのは、なんのつもりだろうか。姓が「弼本」で名前が「氏」だという意味か。そのような日本人がいたとは考えられない。当時、小説の筆者として、たとえば「引年氏」などはある。だが、自分に「氏」をつけて新聞広告を出すのは日本人の習慣ではないと思う。

知新社の広告ｃでは、前述のとおり朝日洋行に言及しない。「弼本氏」は日本人の名前としてあり得ない。広告の文面から理解できるのは、上海において『官場現形記』を洋装本で刊行し、販売の責任者、すなわち支配人が席粋甫だということのみ。

席粋甫が逮捕されたことを宣伝するのが、世界繁華報館の特別広告ｄとｅになる。

席粋甫は召喚を拒否して出頭しないため、裁判所は逮捕状をだし拘引した。裁判所は、席粋甫をまず首かせ三日の刑に処した［先枷三天］。

広告ｅでは「枷三天」とある。劉穎慧はその両方を見て、最終結論は「枷三天」だったのだろうと推測している（41頁）。

広告には、興味深い変化がある。「知新社主人弼本氏」はどこにいったのか。ひとことの言及もないではないか。それをいうなら、日商朝日洋行も同じだ。どこかに消えてしまった。また、日本の上海領事も姿がなくなった。これらはなにを意味するか。

注３で触れた陳大康「歴史上的小説盗版案」が、それに関して疑問を提出している。

すなわち、処罰されたのが「支配人席粋甫」だけであり、法人である日本人の「知新社主人弼本氏」はまったく無傷であるのはなぜなのか。（李伯元にとっては）裁判には勝ったもののいくらかふがいないものである［有点窩囊］、と。日本人が処罰されていないのが陳大康には特別に不満であるらしい。彼は、新聞に裁判報道がある（後述）ことを知らない。海賊版は日本人が製作販売したと固く信じて疑わない。広告だけを見ているとそういう感想がでてきてもおかしくはない。

奇文快文
官場現形紀三編出版

以上の新聞広告から、「官場現形記」裁判の存在と大筋がわかったような気がする。だが、細かく見ると、いくつかの疑問が未解決のまま残ってしまう。その分、資料不足といわざるをえない。

複数の疑問が生じるからさらなる調査が必要となる。自分の手で追跡すれば、資料の確認と同時に何かにぶつかるかもしれない。

ということで、以下が私の調査とその説明になる。新しい手がかりが提供されたので、私は数年ぶりに調査を再開した。

5　調査研究を再開する

私が調べた結果は以下のとおりである。

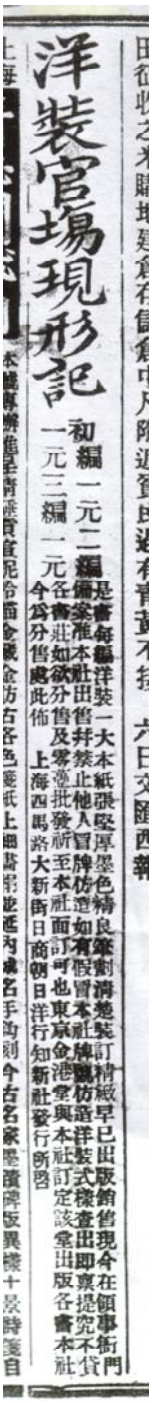
資料を発表の時間順に番号をつけてならべた。前出の新聞広告ａ-ｅと重複するものにはその旨の注釈をつける。別に写真版を掲げたのでそれについての解説を兼ねている。

○資料１：世界繁華報館広告『時報』1904.9.2

世界繁華報館の広告である。ａと同じものであることを確認する。『官場現形記』の海賊版を作成販売している複数の出版社に警告を発したように見える。特定の出版社を目標にはしていないところが、あいまいだ。

私の所蔵する知新社本『官場現形記』は、説明したように住所も発行責任者の名前もない。出版社の名前があるだけだから訴えようがない。ならば、李伯元にできることといえば新聞広告で警告するくらいか。ただし、出版社名をあからさまにしてもよかったように思うのだが、そこまでは踏み切っていない。この広告から私が読みとるのは以上のことだ。

資料１：『時報』1904.9.2


洋裝官場現形記
初編一元二編
一元三編一元
是書每編洋裝一大本紙張堅厚墨色精良筆画清楚裝訂精緻早已出版銷售現今在領事衙門備案准本社出售并禁止他人冒牌仿造如有仮冒本社牌号仿造洋裝式樣查出即禀提究不貸各書莊如欲分售及零趸批發祈至本社面訂可也東京金港堂与本社訂定該堂出版各書本社今為分售処此佈　上海四馬路大新街日商朝日洋行知新社発行所啓

○資料２：知新社広告『中外日報』1904.10.15

知新社の広告である。これこそが海賊版裁判の経過を理解するうえの鍵だといっていい。劉穎慧論文には、残念ながら言及がない。全文を以下に引用する。

洋装官場現形記／初編一元二編一元三編一元
是書每編洋装一大本紙張堅厚墨色精良筆画清楚装訂精緻早已出版銷售現今在領事衙門備案准本社出售并禁止他人冒牌仿造如有仮冒本社牌号仿造洋装式樣查出即禀提究不貸各書莊如欲分售及零趸批発祈至本社面訂可也東京金港堂与本社訂定該堂出版各書本社今為分售処此佈　上海四馬路大新街日商朝日洋行知新社発行所啓

「洋装」をうたい文句にしているのが特徴だ。線装本との差別化をはかった。

もとの世界繁華報館本は、活版線装本だ。判型は小さく活字は大きいから分冊になっている。知新社本は、判型を大きくして活字を小さく組んで洋装本だ。簡単にいえば、ページの表裏に活字で印刷してある。12回を収録し１冊本である。

該書は上海で販売されたにもかかわらず、実物を見ている研究者はほとんどいないらしい。ならば、もう少し説明しておこう。

知新社本『官場現形記』は、樽本編『官場現形記資料』（清末小説研究会2003.6.1。清末小説研究資料叢書４。46-47頁）に表紙、扉、序（３頁）、奥付を掲げておいた。今回、原本よりそれらをあらためて複写しなおし、目次と本文冒頭１頁を追加した。前に掲げたものを見てほしい。

「序」は茂苑惜秋生（欧陽鉅源）のものだ。ただし、最後部分を削除したのは、そこに該作品の著者である「南亭亭長」（または南亭。李伯元のこと）について言及する部分があるからだと考える。なにし

資料２：『中外日報』1904.10.15

ろ知新社本では、著者は「吉田太郎」ということにしている。南亭亭長を吉田太郎と置き換えればいいようなものの、そうはしていない。それはいかにも無理である。

奥付は、「光緒三十年五月印刷／光緒三十年六月発行／著者　日本吉田太郎／発行所　日本知新社／印刷所　日本知新社」となっている。

日本と日本人を強調している点にご注目いただきたい。

ただし、今、その知識は傍らに置いて上の広告のつづきを読むことにしよう。

「領事館において登記し本社の発売許可を得ており、他人が偽造することを禁止する。本社商標を冒し洋装方式を模造するものがあれば追究して許さない」

洋装本刊行の権利を独自に主張している。しかも、東京金港堂と取り決めて該社の書籍を販売するとも述べる。広告主は、「上海四馬路大新街日商朝日洋行知新社発行所」だ。日本の貿易商朝日洋行の知新社発行所ということになる。住所を明記しているのも新しい。

実在する金港堂を出したのがこの広告の巧妙なところだといえる。

日本の金港堂と上海の商務印書館が合弁したのは、前年の1903年のことだった。商務印書館は、日中合弁会社となった。当時、それを知っている中国人は、関係者を除いて多くない。商務印書館が、金港堂と合弁した事実を隠したからだ。表向きは、書籍の代理販売を行なうと宣伝した。合弁のことは公表されないのだから一般にはわからない。ところが、知新社の関係者は、その事情も知ったうえで金港堂の名前を利用したと思われる。

この広告によって知新社の存在が広く知られるようになった。ただし、知新社が海賊版の製造元であることは、のちの裁判によって判明することである。この時点で知られている事実ではない。

当時の一般読者には、どう見えるか。

日本東京の金港堂と結びついていることを公言し、「日商朝日洋行」を前面に押し出した知新社は、あきらかに日本人が経営する出版社ということになる。知新社本を手にした人も、その表示を見て日本人が刊行したと考える。

当時の人々は、この知新社の新聞広告を読んで世界繁華報館と同じことを書いていると思ったのではなかろうか。海賊版を禁止するというのだ。まさか、この

知新社そのものが海賊版の製造販売業者だとは気がつかない。世界繁華報館と提携した日本の出版社かと考えてもおかしくはない。

洋装本を売り文句にして独自性を強調している。海賊版を許さないとも主張する。日本人が刊行していると宣伝しているのだ。

海賊版製作販売者に警告をあたえたように見える世界繁華報館の広告だった。それを逆手にとっている。今、私たちは海賊版だと知っているからこの知新社の広告を見れば、盗人猛々しいと感じる。だが、海賊版製作販売者の手口としてはきわめて斬新である。海賊版がほかの海賊版を許さない、というのだ。前代未聞ではないか。

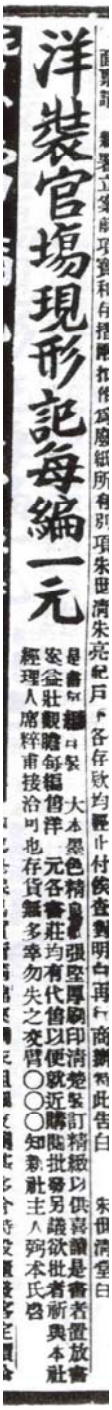
知新社は、明治期の日本では複数が実在していた出版社である。それぞれが、新聞、法律書、俳諧雑誌などを出している。各社に関連はない。「温故知新」からとって、温故堂とか知新社を名乗るのは、別に珍しいことではないだろう。だが、日本に実在するそれらのうちのある出版社が、上海にまで出かけていって『官場現形記』を印刷発行するだろうか。あるいは、日本で印刷発行した『官場現形記』を朝日洋行が上海に輸入し販売したと考えるだろうか。

一見、非常に巧妙である知新社の新聞広告である。ところが、よく考えれば以上のようにつじつまの合わない奇妙な広告なのだ。

○資料３：知新社広告『中外日報』1904.11.5

劉穎慧論文でいう広告ｃと同じ。ただし、劉が示す11月15日の『中外日報』には、該当する広告は掲載されていない。ｃには「ママ」と示した。同紙の冒頭に世界繁華報館が『官場現形記』三編の出版を広告している。本物と海賊版の広告が同日、同一新聞紙上に掲載されるという珍妙な景色になった。資料２と比較するために、文面を再度引用する。

洋装官場現形記毎編一元／是書毎編洋装一大本墨色精良紙張堅厚刷印


洋裝官場現形記每編一元

資料３：『中外日報』1904.11.5

清楚装訂精緻以供喜読是書者置放書案益壮観瞻毎編售洋一元各書荘均有代售以便就近購閲批発另議欲批者祈与本社経理人席粋甫接洽可也存貨無多幸勿失之交臂○○○知新社主人弼本氏啓

官場現形記三編出版
此書價値久爲海內外所共認三號大字排印每編六本價洋一元初二三三編共售三元臺批另議總售處大馬路億鑫里繁華報館代售處商務印書館文明廣智鏡今江左開明啓文各書局新聞中外各報館北京有正書局蘇州九華堂書經存案翻刻必究前有朝日洋行出售翻刻本蒙日本領事諭令停賣并函請會審分府黃司馬將托銷之席粋甫傳案嚴訊并以附聞

資料２の知新社広告から約一ヵ月後の掲載だ。以前と異なる箇所が２ヵ所ある。

日本の金港堂、日商朝日洋行を引っこめたこと。「○○○」に以前は「日商朝日洋行」が記入されていた。もうひとつは、支配人席粋甫と「知新社主人弼本氏」が登場したことだ。前述したように「弼本氏」は日本人だと主張しても、そのような姓名は存在しないだろう。以上の変化をひとことでいえば、日本色を一掃したことになる。

なぜ日本色が消失したか。

資料２で知新社の住所が明らかになった。これと関係すると思われる。洋装本には記載のなかった発行元が判明したのだから、世界繁華報館関係者が手を打ったと考えられる。日本を看板にしているから日本の領事が出てくるのも当然だ。手順からいえば、李伯元が訴えて中国側から日本領事館に連絡がいく。日本領事館は、日本人関係者を追究する。詳細は不明ながら、日本側の動きがあって知新社の広告から「日本」が消えたと考える。

資料２と資料３の知新社広告があるからこそ、ｂで見た世界繁華報館広告の意味がわかる。

○資料４：世界繁華報館広告『中外日報』1904.11.13

ｂ（『新聞報』1904.11.8）とほぼ同じ。同じ箇所を引用する。

「……書経存案翻刻必究前有朝日洋行出售翻刻本蒙日本領事諭令停売並函請会審分府黄司馬将托銷之席粋甫伝案厳訊並以附聞」

朝日洋行が海賊版を売り出した。ここまでは、いい。知新社自

資料４：『中外日報』1904.11.13

世界繁華報館特別告白
翻刻官場現形記者看看看出售翻刻官場
現形記之席粹甫前奉 公堂傳訊抗不到
案即蒙出票拘提昨早解訊奉 會審憲判席粹甫抗傳枷三天
特此布告各寶號幸勿誤售受累是盼

身がそう広告したからだ。

問題は、つぎの部分になる。「日本領事に販売停止処分にしてもらい」という表現の裏には、隠れた事実がある。すなわち、日本の朝日洋行だと思うから日本領事の奇妙な行動に見える。しかし、実体が日本人を装った、つまり日本人になりすました中国人だと判明すれば、日本領事が中国側に向かって販売停止処分を要求するのは当然の行為だ。海賊版を製作販売したのは日本人ではないからである。その犯人は中国人の席粋甫だった。日本人の名誉を守るために日本領事が出てきた。

席粋甫は、この時点でまだ逮捕されていない。自由の身だから、資料３と同じ広告を『中外日報』1904年11月18日付、および同月21日に再びみたび連続して掲載する。これを見ると、席粋甫は確信犯であることがわかる。逮捕されないのだから世界繁華報館としても手の出しようがない。資料４と同じ文面の広告をくり返し出すことしか対抗する方法がないのである。

ようやくのこと知新社支配人の席粋甫が逮捕され処分が下された。それを待って、世界繁華報館は大々的な広告を掲載した。

○資料５：世界繁華報館広告『時報』1904.11.22

ｄと同じ。写真を掲げる。まったく同じ広告が、翌日の『時報』1904.11.23付にも登載されていることを指摘しておく。

資料５：『時報』1904.11.22

○資料６：世界繁華報館広告『中外日報』1904.11.22

ｅと同じ。写真を掲げる。

「特別告白」は特別広告である。それも処分が決定した直後に広告が打たれている。世界繁華報館の関係者は、広告原稿をあらかじめ準備していたと思われる。

出翻刻官場現形記者看看
出翻刻官場現形記之席粹甫前奉
公堂傳訊抗不到案
即蒙
會審憲判席粹甫
出票拘提昨早由捕房解訊當奉
抗傳拘二天特此布告各書坊賈毓幸勿誤售受累是盼
世界繁華報館告白

何度も同じことをいうようだが、奇妙なのは、この広告には日本が出てこない。

知新社の洋装本そのものには「日本」を強調していたではないのか。広告にも日商朝日洋行だ、東京金港堂だと前面に出てくるのは日本だった。それがどこかに消えている。

それが意味していることはひとつしかない。つまり、日本人はもとから存在していなかった。存在しない日本の朝日洋行であるならば、海賊版を日本から輸入して席粹甫に委託販売させたという構造そのものが成立しない。

海賊版を出すには偽名を使用するに決まっている。ゆえに、名義上の責任者である知新社主人弼本氏は架空の存在だろう。ただし、実際に注文を受ける中国人は必要だ。それが、席粹甫である。本名であるかどうかは問題ではない。

日本を強調するのは、中国人が海賊版を作っているからだ。日本は隠れ蓑にすぎない。洋装本そのものに、出版社と印刷所の住所も明記しない。年号は「明治」ではなく「光緒」を使用する。せめて明治と光緒を併記すれば、それらしい雰囲気が出たかもしれない。そこまで頭が回らなかったと見える。それらのいずれもが中国上海で印刷、出版していることを示唆している。

有能な中国の官憲が、支配人席粹甫だけを逮捕して主人弼本氏を見逃すわけがない。日本人が関与しているのであれば、日本の上海領事が途中で蒸発するはずもない。つまり、すべてが席粹甫の自作自演であることを指し示している。席粹甫が日本

資料６：『中外日報』1904.11.22

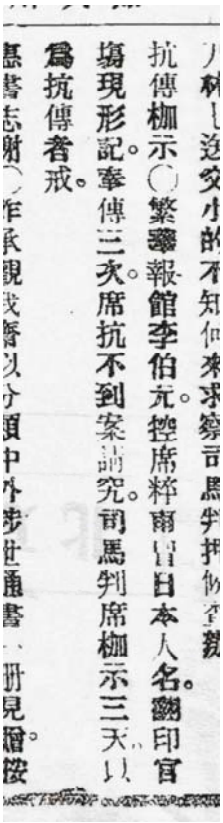
をかたって知新社本『官場現形記』を刊行し販売した。新聞広告から以上のように理解できる。

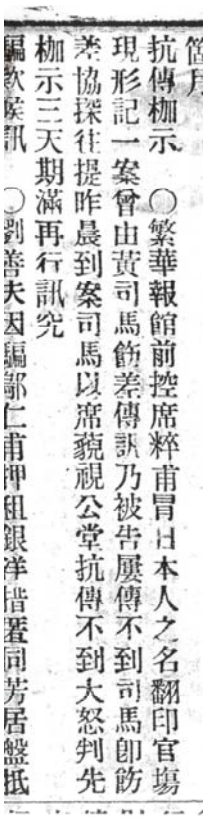
以上で調査が終了したわけではない。

つぎに、上海の新聞はこの「官場現形記」裁判をどのように報道したかを見る。

6　新聞報道――日本人を装った中国人

広告に出てくることならば、報道記事があるはずだ。そう考えて探すと『中外日報』、『同文滬報』、『時報』に以下のとおり３件のニュース記事がみつかった。それぞれ原文を示す。すべて、光緒三十年十月十六日付である。


抗傳枷示〇繁華報館李伯元控席粹甫冒日本人名翻印官場現形記一案曾由黃司馬飭差傳訊乃被告屢傳不到司馬即飭差協探往提昨晨到案司馬以席藐視公堂抗傳不到大怒判先枷示三天期滿再行訊究


抗傳枷示〇繁華報館李伯元控席粹甫冒日本人名。翻印官場現形記。奉傳三次。席抗不到案請究。司馬判席枷示三天。以為抗傳者戒。

資料７：『中外日報』1904.11.22

資料８：『同文滬報』1904.11.22

〇資料７：『中外日報』1904.11.22「本埠新聞・英租界」

「抗伝枷示〇繁華報館李伯元。控席粹甫冒日本人名。翻印官場現形記。奉伝三次。席抗不到案請究。司馬判席枷示三天。以為抗伝者戒」

世界繁華報館の李伯元だと明記してあるのが珍しい。李伯元が、積極的に海賊版対策をとっていることがわかる。ここは重要な箇所なのだ。他の海賊版について考えるときに重要な手がかりをあたえてくれる。

席粹甫が日本人を装って海賊版を作成した、と李伯元が告訴した。法廷への召喚を３度行なったが拒否して出廷しない。それで裁判官は席を首かせにして見せしめ三日の刑に処した。

広告とほぼ同じ内容だ。ただし、「日本人の名前を騙って［冒日本人名］」という箇所が問題をより鮮明に説明している。

○資料８：『同文滬報』1904.11.22「本埠新聞・英租界」

「抗伝枷示○繁華報館前控席粋甫冒日本人之名翻印官場現形記一案曾由黄司馬飭差伝訊乃被告屡伝不到司馬即飭差協探往提昨晨到案司馬以席藐視公堂抗伝不到大怒判先枷示三天期満再行訊究」

こちらも『中外日報』とほぼ同じ内容であることがわかる。席粋甫が日本人の名前をかたった［冒日本人之名］。書き方が同じだから判決文にそう明記してあると思われる。最後部分に今後の方針がつけくわわっている。処罰が終ったあとに再度尋問と取り調べを行なうとある。

以上の２件は、新聞広告とあわせ読んでほぼ全体の経過を理解することができるだろう。

興味深いのは、つぎの同日付『時報』に掲載された報道記事なのだ。さらに詳しい説明があるとともに解説までついている。注目してほしい。

○資料９：『時報』1904.11.22「本埠新聞・英界」

○翻刻書者枷号示衆　翻刻官場現形記之席粋甫前奉公堂伝訊乃竟抗不到案而又明目張胆登報出売実属藐視已極嗣経黄司馬出票拘提昨日早堂由捕房解請訊懲奉堂判先行枷号三天以為抗伝者戒至其翻刻存案書籍以及日本領事函請追究仮冒東洋人各節真行訊究

按小説為改良社会之隹書東西各国碩儒鉅子往往以科学之理想作遊戯之文章振聵発聾厥功不緜故著者毎一書出嘗獲政府許以専印版権在各国有犯翻印書籍之律者科罰極重中国書賈貪利翻印他人書籍之事層見迭出而中律懲此事也亦不甚厳一経告発僅予以薄懲或罰款若干了事乃此次黄司馬独能厳行懲辦其影響所及於出版新書之前途為何如乎

『官場現形記』海賊版をつくった席粋甫が、召喚されたにもかかわらず拒否した。そればかりか大胆にも新聞に広告をのせて販売している。裁判所軽視もきわ

英界
○翻刻書者枷號示衆　翻刻官場
現形記之席粋甫前奉公堂傳訊乃竟
抗不到案而又明目張膽登報出賣實
屬藐視已極嗣經黃司馬出票拘提昨
日早堂由捕房解請訊懲奉堂判先行
枷號三天以爲抗傳者戒至其翻刻存
案書籍以及日本領事函請追究假冒
東洋人各節再行訊究
按小說爲改良社會之佳書東西各
國碩儒鉅子往往以科學之理想作
游戲之文章振聵發聾厥功不細故
著者每一書出嘗獲政府許以專印
版權在各國有犯翻印書籍之律者
科罰極重中國書賈貪利翻印他人
書籍之事層見迭出而中律懲此事
也亦不甚嚴一經告發僅予以薄懲
或罰款若干了事乃此次黃司馬獨
能嚴行懲辦其影響所及于出版新
書之前途爲何如乎
○公堂案　王岡福淹入律師侯魯

資料９：『時報』1904.11.22

まった。黄裁判官の命令により拘束し首かせ三日の刑に処し召喚を拒否する者への戒めとした。

以上は、従来の報道と同じだ。召喚を拒否したのは、今でいえば法廷侮辱罪にあたる。その次の記述が新しい。

海賊版書籍に関して、および日本人だと偽ったことについて追究するようにと日本領事が書面で要求したことそれぞれは尋問と取調を実行する。

日本領事が要求したのは、中国人が日本人になりすまして海賊版を製作販売した事情を明確にしろということだ。日本人の名誉にかかわることだからゆるがせにできない。そう判断したものだとわかる。

新聞広告に途中から日本人が消失する理由が、これではっきりする。席粋甫は、日本人を隠れ蓑にして海賊版を製作販売したが、それが露見してしまった。日本領事からの圧力もあったのではないか。席粋甫にしてみれば、日本および日本人が隠れ蓑の役に立たなくなった。というよりも、日本人を前面に出して罪を逃れるつもりが、裏目にでた。かえって追究の手がきびしくなったということだ。

後半の解説において、この海賊版裁判について総括を行なっている。

小説は社会を改良するものだ。これが前提となる。世界各国では、版権の重要

性を認めて海賊版を取り締まって刑罰が極めて重い。ところが、中国の書籍商は利益を貪って他人の書籍を翻印（海賊版を作る）しても刑罰は軽いし罰金若干でおわる。このたびの黄裁判官は独自に処罰を行なうことができた。新しい書籍を出版する将来にそれがいかなる影響をおよぼすか、云々。

海賊版が横行する原因について、罰則の軽さを中国人自身が指摘しているのが重要だ。

従来は、海賊版の製作販売についての処罰が軽いという事実があった。それを席粋甫は熟知していたからこそ裁判所からの召喚を無視したと考えられる。裁判所の権威を傷つけられたと怒った黄裁判官が、席粋甫を三日間首かせのうえ公衆にさらすという処分にした。当時の中国人から見れば厳罰に処したということになる。

知新社本『官場現形記』裁判は、最初は日本人が関係していると考えられたからその方向で調査が行なわれたのだろう。途中で日本人が存在しないことが判明した。だから、結局は、中国の法廷で中国人が裁かれることになった。

中国人が、同胞の著作の海賊版を作成して販売したというのが事実である。席粋甫にしてみれば、頭を働かせて日本を利用したつもりだった。だが、それは逆効果となる。日本領事の出馬をうながし、かえって処罰を重くする結果になったからである。

【注】

1）大塚秀高「イカロスの翼――再び『官場現形記』の海賊版をめぐって――」『中国古典小説研究』第７号2002.3.31。59頁

2）樽本「『繍像小説』研究の現在」『清末小説から』第89号2008.4.1。本書所収

3）陳大康「歴史上的小説盗版案」をウェブ上で読むことができる。海賊版『官場現形記』について劉穎慧論文と一部が重なる。なお、私が見たウェブ上の陳大康論文は『文匯報』2007.2.27と表示があるが、別の掲載では2006.10.10あるいは11.24の日付だったりする。『文匯報』の原物で私は確認していない。【補記】陳大康は、とんでもない珍説を発表した。本書所収「注目点４：『官場現形記』の海賊版」を参照のこと。

4）樽本「『官場現形記』の版本をめぐって」『清末小説叢考』所収

5）阿英「晩清小説目」（『晩清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8／増補版　上海・古典文学出版社1957.9、北京・中華書局1959.5。81頁）に次のようにある。「又光緒三十年（一九〇四）翻本。托日本知新社版，吉田太郎著」。それ以上の記述はない。

魏紹昌編『李伯元研究資料』（上海古籍出版社1980.12。72頁）は、次のように説明する。「較早的翻印本有粤東書局石印本和仮託吉田太郎著的日本知新社刊本，此両種書的全帙，刊印日期均署光緒三十年（一九〇四），即世界繁華報館初編十二回刊行的次年，其時全書尚未出斉，此日期恐不確，実際出書当在一九〇五年之後」。その発行は1904年ではなく1905年だろうと推測している。誤解である。阿英の目録にあるのを見て、魏紹昌は勝手に60回本だと考えたらしい。1904年に『官場現形記』は出そろってはいない。ゆえに、1905年以後に発行された、と推測した。だが、事実は、知新社本は12回の１冊本である。1904年に刊行されているのは矛盾でもなんでもない。魏紹昌は、知新社本を見ておらず誤った判断を下したとわかる。

6）周林、李明山主編『中国版権史研究文献』北京・中国方正出版社1999.11。

劉哲民編『近現代出版新聞法規彙編』上海・学林出版社1992.12。

関連文献：

殷莉『清末民初新聞出版立法研究』北京・新華出版社2007.3。

李雨峰『槍口下的法律：中国版権史研究』北京・知識産権出版社2006.8。

中村元哉「海賊版書籍からみた近現代中国の出版政策とメディア界」『アジア研究』第52巻第４号2006.10電字版。

黄林『晩清新政時期図書出版業研究』長沙・湖南師範大学出版社2007.3

7）李明山主編『中国近代版権史』（開封・河南大学出版社2003.5）の「第７章　清末民初的涉外版権糾紛」において、具体例があげられている。日本人斎藤秀三郎『正則英文教科書』、商務印書館『欧洲通史』などに関する裁判だ。また、私が気づいたものに、美華書館がアメリカ領事館を通して海賊版を訴え、関炯之司馬が担当した新聞記事がある。『中外日報』1906.1.2付ニュース「伝訊翻印書籍」、同紙1906.1.6付ニュース「会訊翻印書籍」。

8）「洋涇浜設官会審章程」（1869年発効）。徐公粛、丘瑾璋「上海公共租界制度」『上海公共租界史稿』上海人民出版社1980.7。163-164頁

9）この一覧表に見なれた会社があげられている。本稿とは関係がないが、すこしだけ触れておきたい。397頁に「商務印書館股份有限公司（後帰華商）／印刷業（中日合資）／1903／1913」とある。商務印書館にほかならない。1903年に開業して1913年に終業したという表示だ。1903年に金港堂と合弁し、1914年に解消した。解消契約が成立するのが1914年１月だから、実質は1913年の終業で間違いではない。おもしろいと私が思うのは、商務印書館を日本

商に組み入れているからだ。このような扱いをした中国の文献を見たことがない。だが、日本資本との合弁会社だから、これで半分は正しいのである。

『劉鶚集』はよろしい

『清末小説から』第91号（2008.10.1）に掲載。これまで劉鉄雲に関する資料集は２度刊行されている。今回の『劉鶚集』は、劉鉄雲全集というべきものだ。集大成だからその意味は大きい。ただし、瑕瑾はある。以前はつけられていた有用な注釈を収録していない、『繍像小説』についての認識に誤りがあるなど。その点が少し残念だ。

劉鶚著、劉徳隆整理『劉鶚集』上下冊（長春・吉林文史出版社2007.12）が出版された。

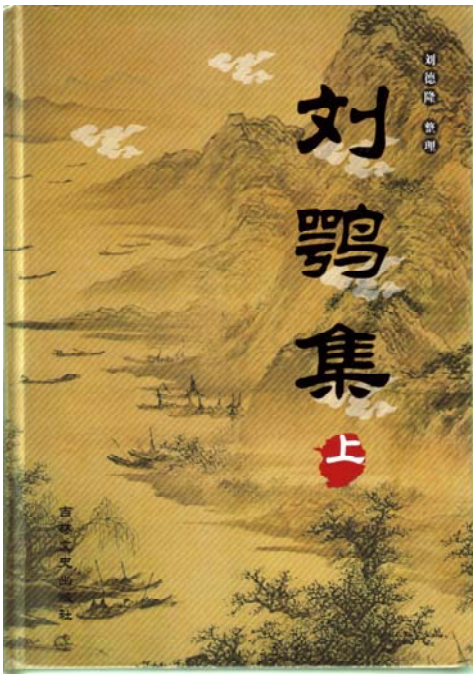
劉鉄雲の著作（一部、父成忠の文章を収める）を集め、本文のみで合計1,538頁だ。巨著というのがふさわしい。上製２冊本。装丁は絵図と濃緑色の２種類がある。

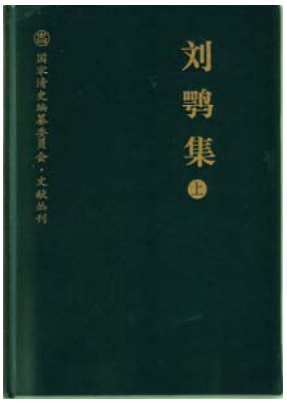
1　劉鉄雲という存在

私の興味の中心は、「老残遊記」とその著者である劉鉄雲だ。どうしても、その角度からの紹介になる。このことを最初におことわりしておく。

わざわざこのような言いわけをしなければならないのは、劉鉄雲という人物が小説作家という枠をはみだした存在であるからだ。彼個人にしてみれば、小説を書いたのは、全活動の中でわずかな部分しか占めてはいない。

著作類だけで黄河治水、数学、薬学、金石文、音楽など多方面にわたる。文字にならない実際の活動は、これを上まわる。一般には、『鉄雲蔵亀』の劉鉄雲だといった方が有名かもしれない。





劉鶚著、劉徳隆整理『劉鶚集』　もう１種類の装丁も小さく示す

そういう劉鉄雲を知ると、彼の書いた小説「老残遊記」について不満を感じるのが正直なところだ。劉鉄雲は、小説については素人なのである。そのことを「小説作家という枠をはみだした存在」と表現している。

劉鉄雲が行なった実際活動のうちのごく限られたものが、小説「老残遊記」のなかで触れられる。

黄河治水にしても、小説に書かれているのは少しだけだ。それだけのこと。だが、彼の体験をもっと具体的に書き込めば相当に違ったものができたのではないか。劉鉄雲の治水論を検討して鄭州の黄河を視察したことがある私は、そんな感想をいだく。

劉鉄雲が手がけた鉱山開発、鉄道建設、北京における難民救済活動、２度にわたる日本訪問、塩の買い付け事業、音楽（小説に一瞬出現する）、金石文字、太谷学派（小説に少し出てくる）などなどいくらでも小説の題材はあったはずだ。ところが、彼の豊富な経験と知識が、「老残遊記」に十分には反映していない。小説の専門家であれば、まさに虚実をとりまぜて自分の体験を作品にこれでもか、と盛り込まないわけがないのだ。しかし、それがない。小説作品はわずかにひとつし

か書かなかった。それを見ても彼は小説に素人だったといわざるをえない。李伯元、呉趼人、曾孟樸たちと並列すれば、経歴にしても劉鉄雲だけが異色なのである。

劉鉄雲の豊富で広範囲な文筆活動を前にして、私の手に余る部分の方が多い。紹介をする適任者がそれぞれの分野にいると考える。

ということで、私は、あくまでも「老残遊記」を中心にしてこのたびの『劉鶚集』をながめるという意味だ。限定されたものであるとご了解いただきたい。

劉鉄雲に関する従来の資料集は、清末小説としての「老残遊記」が中心となっていた。

2　老残遊記資料２種

たとえば、以下の２種類がある。刊行順にａｂの記号を割り当てる。

ａ魏紹昌編『老残遊記資料』北京・中華書局1962.4（采華書林影印あり）
ｂ劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』成都・四川人民出版社1985.7*[1]

この資料集２種類の刊行を経て『劉鶚集』が登場する。目次を別にかかげ、比較のために重複する文献にａｂを記す。

見れば以上の３種類で重複する部分は、多くはないことがわかるだろう。劉鉄雲の詩は、新しく見つかったものが加えられている。編者劉徳隆が長年にわたって広く捜索した結果である。今後も出てくる可能性がある。

それぞれに特色があるから重ならない。

ａ魏紹昌編『老残遊記資料』に見る特色は以下のとおり。

「老残遊記」初集二集の序および初集の評語を掲げた。

『老残遊記』は、以前から数多くの出版社が刊行している。ところが、版本によっては、もとからついているそれらの序、評語を掲載しないものがあった。だから、掲載することが新しかった。今では、序、評語を収録する単行本が当たり前になっている。ただし、例外がある。陳翔鶴校、戴鴻森注の人民文学出版社版

は、初版の1957年から最近にいたるまで重版をくり返すが、評語を無視している。著者劉鉄雲の執筆ではない、と考えているのだろう。

さらには、「老残遊記」二集巻７-９（以下、回を使用）および外編残稿を収録した。

それまでは、二集といえば前半の６回分しか流通していなかった。忘れられた３回分を手写本によって復刻したのが注目される。ただし、手写本だから写し間違いがある。私はそれを知っており、すでに何度か指摘した。それができたのは、私が日本で『天津日日新聞』切り抜きの『老残遊記二集』を発掘したからだ。本文を比較対照して間違いがあることを知った。

該書所収の劉大紳「関於老残遊記」ほかに劉厚沢の詳しい注釈がほどこされていることも特色のひとつだ。つぎに紹介するｂ『劉鶚及老残遊記資料』に大紳論文は収録されてはいる。だが、注釈の点ではやはりａ『老残遊記資料』収録のものが詳しいからそちらを見る必要がある。

蒋逸雪「劉鉄雲年譜」は、それまで彼が作成した年譜よりもかなり詳細だ。その理由は、劉蕙孫がａ『老残遊記資料』のために準備した年譜を参照し大幅に取り入れたからだ、という。劉蕙孫の作成した年譜は、結局資料集には掲載されなかった。かわって蒋逸雪の年譜が収録された。この間の事情は複雑で、外部にいる私には理解できない（補記：「「老残遊記」執筆経過の謎」で説明した。本書所収）。

該書成立について当事者間に紛争が生じたため、「文化大革命」終了後もａ『老残遊記資料』は再版されることはなかった。そのかわり（かどうかは知らないが）出てきたのが次の資料集だ。

ｂ劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』の最大の特色は、劉鉄雲日記を収録したことだといっていいい。

劉鉄雲日記は、その存在は以前からおぼろげながら知られてはいた。ごく一部が雑誌に掲載されたことがある。ただし、長い間公開されなかった。

清末の社会に生きて実業家としても活動した劉鉄雲は、日常の記録として日記を書いた。交流した人の実名が出てくる。その中にはのちに負の評価を下された人物もいた。太谷学派関係者も含まれる。しかも、彼は外国人との交流があった。日本人が日記に多く登場する。ある時期の中国では、日本人と交際があるという

だけで批判がおこる可能性が高かったのだろう。それが公表されると劉鉄雲の評価、あるいは子孫に政治的、社会的な悪影響をおよぼすと判断されたのではなかろうか。政治と学術研究が結びついている中国ならではの事情だったと想像する*2。

わかりやすい例をあげよう。

劉鉄雲は鉱山開発を建議した。その際、外国資本を利用することを主張したのだ。当時においては、奇妙でも不思議でもない普通の方法だ。開発するための資金が不足するのであれば、外部から調達する。開発が成功すれば結果的には中国の財産になる、という考えだ。ところが、中国で「自力更生」が叫ばれる時代には、それにあわせて過去の事実を裁断する。外国資本を導入するなどもってのほか、と批判の対象となる。劉鉄雲は外国資本に国の資源を売り渡した「売国奴」というレッテルがはられる。ところが、「改革開放」の時代にかわれば、外資導入は積極的に行なわなくてはならない。すると劉鉄雲の同じ行動主張が、先進的な称賛すべきものへと変化するのである。「売国奴」から「愛国者」に評価が一変する。

政治を優先し、その時々の「あるべき」結論に照らして過去の事実を裁断する。これが中国の学界の基本構造であるから、劉鉄雲の評価が不安定になるのは当然だ。評価の基準がぐるぐる動くから、必然的にそうなる。

「文革」が終了して10年近く経過した。劉鉄雲日記は解禁になったらしい。

珍しい日記ではあるが、誤植が多い。なぜ、それがわかるかといえば、私が受け取った版本には赤字で訂正されていたからだ。

該資料は、劉鉄雲の父成忠に関係する文献を収録した。また、「老残遊記」研究の論文を数点かかげる。太谷学派関係の文章を集めたのも画期的だった。

劉鶚著、劉徳隆整理『劉鶚集』目次

ａ魏紹昌編『老残遊記資料』所収

ｂ劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』所収

【上冊】本文776頁

戴逸「総序」1-3頁

劉徳隆「前言」1-12頁

総目録1-2頁

目録

〇河工類

恭録進呈《三省黄河全図》奏稿

恭録辦理三省黄河河道図説職名

三省黄河全図凡例

三省黄河河道一、二

三省黄河北岸堤工表

三省黄河南岸堤工表

三省黄河全図北岸堤工高寛表

三省黄河全図南岸堤工高寛表

三省黄河全図北岸金堤表

述意十二条

三省黄河図後叙（説明37-38頁）

治河五説（説明46頁）

歴代黄河変遷図考（説明75-77頁）

ｂ河工稟稿（説明、附録83-84頁）

附録１：劉成忠「河防芻議」

附録２：劉厚沢英文原稿、劉徳平訳「論歴代黄河之治理」（説明106頁）

〇算学類

孤角三術凡例

孤角三術巻首、巻上、巻下（説明146頁）

勾股天元草

天元勾股細草、巻上、巻下（説明168-169頁）

〇医薬類

温病条辨歌括（説明202頁）

要薬分剤補正（説明409頁）

〇文学類

老残遊記　巻1-20　洪都百錬生

ａｂ　自叙

ａｂ　自評

巻1-20（説明496-497頁）

附録：老残遊記（《繍像小説》本）目録（誤りがある）

老残遊記《繍像小説》本巻之十

老残遊記《繍像小説》本巻之十一

老残遊記二集　巻1-9　鴻都百錬生

ａｂ　序

ａ　巻1-9（説明546頁。ａは巻7-9のみを収録。ａの誤りは訂正してある）

ａ　老残遊記外編巻１（残稿）（説明550-551頁）

ｂ《鄰女語》評語（説明555頁。問題がある）

附録：劉大紳「劉鶚所語之異事」（説明560頁）

劉鶚詩詞聯語

ｂ　１、芬陀利室存稿（説明565-567頁）

ｂ　２、東遊草（説明571頁）

ｂ　３、抱残守缺斎遺詩輯存与補遺（説明575、576頁）

４、劉鶚詩詞聯語零拾（説明577、580、582頁）

附録：朱禧「《因斎詩存》過録、校勘記」

劉成忠伝

因斎詩存総目、序、巻１、２

○批注題跋類

劉鶚閲読《老子》手記（説明623頁）

劉鶚批注、校勘《荘子》（説明626頁）

附録：朱松齢「劉鶚批注《荘子》浅析」

ｂ鉄雲碑帖題跋輯存（説明638頁）

劉鶚書画碑帖磚瓦当拓片跋銘（説明639、640、641、642、643頁）

抱残守缺斎珍蔵碑帖（説明644、646頁）

抱残守缺斎中頭等碑帖（残頁）（説明647頁）

抱残守缺斎書画碑帖目（説明654頁）

○稟稿啓事類

石倉書局広告（７則）（説明656頁）

ｂ劉鉄雲呈晋撫稟（説明658頁）

山西・河南・浙江“礦務合同”（説明663頁）

創辦大清銀行節略（残稿）（説明665頁）

捐款声明（説明666頁）
ｂ礦事啓（説明668頁）
《鉄雲蔵亀》、《鉄雲蔵陶》出版広告（説明669頁）
劉観察上政務処書（説明673頁）
為与日本前駐天津領事鄭永昌訂立“合股経営遼東半島塩業合同”事致趙幾巽禀(説明674頁）
ｂ風潮論（説明678頁）
国粋求沽告白（説明680頁）
劉成忠文五篇（説明684頁）
〇日記書信電文類
抱残守缺斎日記
抱残守缺斎・辛丑日記（現原件不存。説明691頁）
ｂ　抱残守缺斎・壬寅日記（説明714頁）
ｂ　抱残守缺斎・乙巳日記（説明737頁）
ｂ　抱残守缺斎・戊申日記（説明743頁）
附録：関於《抱残守缺斎日記》
ｂ劉鶚書信電文（説明748、750、752、753、755、756、757、758、759、760頁）

附録：
劉鶚大事系年表（説明769頁）
ｂ劉鶚名、字、号、別名、筆名、綽名、斎名一覧
研究劉鶚的網站・著作・小説一覧
劉鶚佚詩十一首（説明776頁）

【下冊】は影印。本文762頁
〇古文字与金石類
鉄雲蔵亀（説明2頁）
鉄雲蔵陶（説明216頁）
鉄雲蔵貨（説明288-289頁）
附録１：郭若愚「介紹劉鶚的未刊稿《鉄雲蔵貨》」384-393頁
附録２：劉徳隆、劉徳平「刀布肩来満一筐　苔花侵蝕古文章――劉鶚収蔵古銭概述」394-398頁
鉄雲蔵印（説明400-401頁）

鉄雲遺印譜（説明487-488頁）
抱残守缺斎蔵器目（鮑鼎輯）（説明495頁）
〇音楽類
十一弦館琴譜（説明594-598頁）
抱残守缺斎手抄琴譜（残稿）（説明718頁）

劉徳隆「後記」758-760頁
——「写於《後記》之後」761頁
——「付印前的幾句話」762頁

3　『劉鶚集』の全体

本書の特色のひとつは、劉徳隆による解題があることだ。別掲目次に「説明〇頁」と示したように各文献の末尾につけられている。それぞれの文献について書誌情報を説明しているのがよい。わざわざ指摘することではないかもしれない。資料集であれば、当然のことだ。

上冊の河工類は、すでに出版されているものを復刻する。

算学類、医薬類は、いずれも以前にまとめられていたらしい。私は、はじめて見た（「温病条辨歌括」については劉徳隆が事前に紹介している。『清末小説』第30号2007年）。見ただけで、内容を理解したわけではない。私の手には余る。

文学類の「老子」「荘子」関係文献は、今回はじめて活字になったのだろう。1987年に、それらが発見されたという新聞記事が出たという。その時、どこかの研究雑誌に公表されたかもしれないが、私は見る機会がなかった。

そのほか、新聞の出版広告、別の資料集から関連文書を収録して有用だ。

劉鉄雲日記について少し説明する。

該書には、解説文として「関於《抱残守缺斎日記》」が掲載されている。無署名だが、劉徳隆の書いたものと思う。

これによると日記は、このたび「抱残守缺斎日記」と命名された。前のｂ『劉鶚及老残遊記資料』では「劉鶚日記」と称していた。改名したことになる。

壬寅日記に「抱残守缺斎日記」と記されていることなどを根拠とする。わざわざそう書くのは、ほかの日記にはただ「日記」とだけ記されているからだろう（b『劉鶚及老残遊記資料』に写真が掲載されている）。

「抱残守缺斎日記」でかまわないが、長いので私は劉鉄雲日記と称する。

日記の保存経過については、以前とは説明が異なっている。『劉鶚集』で解説して劉厚沢の手紙を引用しているのでそうかと思うだけだ。それは置いておく。

重要なのは、今、目前にある劉鉄雲日記がどういう状態であるかを紹介することだと考える。

日記の旧暦日付に新暦が注記してあり便利になった。b『劉鶚及老残遊記資料』にあった誤植は訂正がすんでいる。

劉鉄雲日記は、以下のものがある。あるいは、あった。

辛丑日記（1901）行方不明
壬寅日記（1902）正月－十一月
乙巳日記（1905）正月－十月
戊申日記（1908）正月－三月

行方不明の辛丑日記は、再構成して収録された。その過程が興味深い。

劉蕙孫は、前出ａ『老残遊記資料』のために年譜を準備した。それを書くために劉鉄雲日記を手元に集めて必要部分を引用したのである。上にあげた４種類の日記は、その時は存在していた。年譜には、当然、辛丑日記からも取り入れている。ただし、劉蕙孫が必要だと考えた部分だけだ。たぶん、省略した箇所のほうが多かっただろう。

ところが前述のとおり、彼の年譜は、該資料ａには掲載されなかった。結局、『鉄雲先生年譜長編』（済南・斉魯書社1982.8）となって日の目を見る。年譜長編は、辛丑（1901）年も、事柄ごとにまとめて説明している。日にち順になってはいない。引用された辛丑日記も、記事は分散した状態だ。

私は、b『劉鶚及老残遊記資料』掲載の劉鉄雲日記を見た。しかし、それには辛丑日記が収録されていない。説明もない。行方不明になったらしい。

そこで、『鉄雲先生年譜長編』に引用されている辛丑日記部分を集めて再構成した。それが、沢本香子名義の「劉鉄雲辛丑日記を再構成する」（『清末小説』第９号1986.12.1）である。

辛丑日記部分を抜き出し、月日順に配列し直し注釈をつけた。私が強調したのは「今はただ本稿が、「つなぎ」としての役割を早く終えることを望むばかりだ」。すなわち、辛丑日記の実物が発見されることを期待した。劉蕙孫が取捨選択した部分以外を含めての全文が興味深かったからだ。

だが、『劉鶚集』を見ると、実物はまだ見つかっていないらしい。私がやったのと同じく劉蕙孫の該年譜から辛丑日記部分を抽出したものだ。私のほどこした注釈は採用されなかった。それと関係があるのかどうかは知らないが、ｂ『劉鶚及老残遊記資料』に収録した劉鉄雲日記につけていた注も『劉鶚集』では省略している。有用だっただけに残念だ。必要に応じて該書ｂを参照するほかない。

『劉鶚集』は、辛丑日記について一歩前進した。だが、前にはつけていた注釈全部を排除したから一歩後退である。

下冊は、縦書きの原本を影印している。ただし、横組み用の左開きだから、縦書きページのつながりに最初はとまどう。慣れてしまえば問題はない。

気がついた下冊の誤りを指摘しておく。たいしたことではない。711-712頁と713-714頁が重複している。

4　『劉鶚集』の「老残遊記」関係部分

「老残遊記」部分について問題は、基本的にはない。

ただ、疑問に感じる箇所がいくつかある。

たとえば、496頁下部に「老残遊記」の執筆時間を説明している。

「初集は、1903年９月21日以前に着手し、1906年２月に終了した」

「1903年９月21日以前」とは、「老残遊記」第１回を掲載した『繍像小説』第９期の発行月日がそう明示しているからそこに基づくのだろう。それはそうだ。だが、「1906年２月に終了した」というのは、なにに拠ったのか不明。劉鉄雲が日本を最初に訪問したのは1906年２月だった。それからの推測かもしれない。そ

うであれば、注釈が必要だ。いずれにせよ確認できることではない。

同じく「老残遊記」二集は「1907年６月に着手した」の根拠が不明。

私は以前「天津日日新聞版「老残遊記」二集について」（『清末小説閑談』所収）において二集執筆時期を推測したことがある。1907年六月、あるいは七月以前である。理由は簡単だ。二集の『天津日日新聞』連載が七月にはじまっているからだ。劉徳隆は、それを読んだのかもしれない。あるいは、拠った資料が別にあるのかもしれない。どちらにせよ、断言するばあいは、根拠を示してほしい。

問題があるのは、「老残遊記」を最初に掲載した『繍像小説』についての解説なのである。

496頁13-14行に「『繍像小説』第９号（ママ）（光緒癸卯八月初一日・1903年９月21日）－18号（ママ）（光緒癸卯十二（ママ）・1914年１月－２月）。11（ママ）巻を連載して中止［連載11巻而中止］」とある。

まず、『繍像小説』の表紙は「期」、目次では「号」を使用している。「号」を使うなら注記があってもいい箇所だ。

『繍像小説』第18期には発行年月は記載されていない。それを注釈なしに書くのは不正確である。

また、「老残遊記」は原稿第11回が没書になったから劉鉄雲は執筆を中止した。前渡ししていた原稿第14回が第13回として掲載されて終わりだ。表面上の連載中止は、第11回（原稿第12回）ではない。書くとすれば、「13巻を連載して中止［連載13巻而中止］」としなければならない。

498頁には「老残遊記（《繍像小説》本）目録」を掲げている。

『繍像小説』第９期から第19（ママ）期（ここでは「号」ではなく「期」を使用している）まで、それぞれに１回ずつ回目を並べている。第19（ママ）期（甲辰正（ママ）月1904年２月）には巻11の回目がある。上に出てきた「18号」と一致しない。

前からいっているように、『繍像小説』は第13期から発行年月を記載しない。第13-19（ママ）期に年月をいれるとすれば「推測」という注記が必要だ。「刊年不記」とするのがより正確である。

あらためて『繍像小説』の「老残遊記」掲載状況を示す。

第９期（癸卯八月初一日1903.9.21）「老残遊記」第１回
第10期（癸卯八月十五日1903.10.5）「老残遊記」第２、３回
第11期（癸卯九月初一日1903.10.20）「老残遊記」第４、５回
第12期（癸卯九月十五日1903.11.3）「老残遊記」第６回
第13期（刊年不記）「老残遊記」第７回
第14期（刊年不記）「老残遊記」第８、９回
第15期（刊年不記）「老残遊記」第10回
第16期（刊年不記）「老残遊記」第11回
第17期（刊年不記）「老残遊記」第12回
第18期（刊年不記）「老残遊記」第13回

『劉鶚集』498頁を自分の目で確認してほしい。劉徳隆は、『繍像小説』を見ているはずだ。しかし、このような大きな誤りがある。なぜ発生したのか不可解だ。

『繍像小説』の刊行が遅延している。この事実については、私は長年にわって文章をいくつも発表した。だが、劉徳隆の『繍像小説』についての説明を読むと、やはり理解していない。阿英らのいう定説が、いかに強固なものかよくわかる。

阿英の定説が研究者の思考をどれくらい束縛しているか。もうひとつの例を示そう。

「老残遊記」初集と二集の執筆に関係する。

「老残遊記」初集は、『繍像小説』に連載された。原稿第11回が没書にされ、劉鉄雲は執筆を中止する。上に示した『繍像小説』第16期の「老残遊記」第11回は、原稿第12回に相当する。のち、『天津日日新聞』に最初から連載をはじめることになった。没書にされた原稿第11回を復元し、第15-20回を加筆して『天津日日新聞』に連載した。これが初集20回だ。

阿英は、『天津日日新聞』の掲載終了時期を「1904年」だと断定している。その翌年の劉鉄雲乙巳（1905）日記に、「老残遊記」の執筆が記録されているのが見える。こちらは当然「老残遊記」二集であると信じられた。なにしろ阿英の断定がある。二集の『天津日日新聞』掲載は1907年だ。私が日本で発掘したのが、この天津日日新聞切り抜き版『老残遊記二集』にほかならない。

劉厚沢（蕙孫の弟。徳隆の父）が疑問を提出した。「老残遊記」二集の執筆についての問題なのだ。

十月初三日に二集第11回を執筆し、翌初四日に第15回を執筆した。第12-14回はいつ書いたのか。1905年に二集を執筆して、その新聞連載が1907年であるのはなぜか。２年後というのは時間がかかりすぎている。

私は、以上の疑問について解答をだした。1976年のことだ。中国ではまだ「文革」が継続中だった。

誤解の原因は、阿英の断定である。彼は、初集連載完了を「1904年」だとした。それゆえ、劉厚沢は、劉鉄雲1905年日記にでてくる「老残遊記」は二集だと思い込んだ。しかし、阿英の断定した「1904年」にはなんの根拠もなかったのである。根拠もなく阿英は断言した、といわざるをえない。乙巳日記にある「老残遊記」第11回は二集ではなく初集の没書を復元したもの。すでに『繍像小説』に掲載された原稿第12-14回（上の一覧表に見える「老残遊記」第11-13回として発表された）は書く必要がない。必要がないから日記には言及がない。日記に第15回から執筆しているのは新構想にもとづく書き下ろしである。

簡単ないきさつだ。わかってしまえば、なんということもない。

私は、劉蕙孫に天津日日新聞切り抜き版『老残遊記二集』の複写を贈呈した。彼は、それを手元において『鉄雲先生年譜長編』の関係部分に加筆したと思われる。彼はどう説明しているか。

1905年の項目においてつぎのように書いている。「1905年」であることに注目されたい。

> (32)「老残遊記」二編（ママ）若干を続作する
>
> （乙巳日記からの引用は省略）日本京都大学人文研究所所蔵の1905（ママ）年乙巳七月初一（ママ）［十］日『天津日日新聞』登載の「遊記二集」は第１回の開始である。執筆はすべて「二集」の回数を説明している。鉄雲氏の書いた「二集」は９回にとどまるものでないばかりか、14回で終ってもいない。14回というのは、亡父（劉大紳）の書き誤りの可能性がある。またのちに書いた別の「外編」を見ると、鉄雲氏はそれで「遊記」にけりをつけたようだ。ただし、(二集)

> ９回以後が新聞に発表されたかどうか、原稿はどこにいったのかはわからない。133頁

「二編」と「二集」が出てきて不統一である。本稿では二集と称する。

劉蕙孫も厚沢と同じく、阿英のいう「1904年」初集完成説を堅く信じ込んでいる。1905年の乙巳日記にでてくる「老残遊記」は二集だという考えが彼の頭の中で定着していて動かない。どうしてもそこから抜けでることができない。その強固な信じ込みは、私が送った『老残遊記二集』の実物複写を手元においてもくつがえらないのだ。

私が二集の新聞掲載は1907年だと確認している。それにもかかわらず、上記説明を見てもらえばわかるように「1905(ママ)年乙巳七月初一(ママ)［十］日『天津日日新聞』」と劉蕙孫は書かずにはいられない。くりかえす。1907年に公開された二集の実物を見ても1905年だと間違ったことを記述する。阿英の定説に振り回されているとしかいいようがない。劉蕙孫は、実物が示す事実よりも阿英の説明の方が重要だと考える。私の理解を超えている。

そればかりか、劉厚沢が提出した疑問についても無視するのである。

考えようによっては、それも無理はないか。この二集が1907年の刊行であることと、1905年の日記に出てくる「老残遊記」が初集であることが結びつかなかっただけかもしれない。初集新聞連載終了は「1904年」だとする阿英の説明は間違いで、1905年日記の第11回は初集の没書を復元したものだ、と私が指摘しても劉蕙孫は聞き入れない。自国の清末小説研究において阿英は権威である。外国人がそれに対して異議をとなえ訂正しても耳に聞こえるだけで意味が理解できなかった。結果として、そうなった。

劉蕙孫は日本語ができなかったのだろう、と弁護する人がいるかもしれない。そんなことはない。彼は日本長崎に留学していた。日本語を理解するのである。

劉鉄雲乙巳日記に「老残遊記」第16回と書いてある。そこから、二集が第16回まで書かれている、と劉蕙孫は短絡し誤解した。その原稿はどこにいったのか、とまで説明する。

乙巳日記の第11回は初集没書の復元であるとかさねていう。日記の第16回は、

初集の第16回である。二集は９回で中断した。それ以外は新聞に掲載されていない。いくらそう説明しても、聞く耳をもたないのだからどうしようもない。

私は、劉蕙孫を批判しているのではない。ご注意いただきたい。劉蕙孫をして実物を無視させるほどに阿英の権威が絶大であること、その呪縛から自由になることは簡単ではないことをいいたいだけだ。

中国における阿英の権威がどのようなものであるか、この１例を見るだけで理解できるだろう。それを「阿英問題」と称して、誤りが複数あるという私の意見は、誰も聞きたがらない。私がその事実を指摘すると、中国の研究者は自分が侮辱されたように感じるらしい。研究にそのような要素が入り込むというのは、私には理解しがたいものがある。

そのほかで気になる部分がある。

「《鄰女語》評語」を第１-12回分、「蝶隠加評」と明示して収録する。ここに問題が発生する。

私が『清末小説研究』第１号（1977.10.1）に「憂患余生著「鄰女語」第５回至第12回評語」を収録したのは、蝶隠が劉鉄雲の筆名であることを知ったからだ。第５回からの評語であることをご確認いただきたい。

雑誌創刊号の1977年という時間を見てほしい。中国で「文革」が終了したのはその前年の1976年だ。中国では学界の活動は、まだ再開してはいない。私が訪中団に参加して北京、上海をはじめて訪れたとき、刊行したばかりの『清末小説研究』を訪問先の大学関係者に贈呈した。彼らはなんの反応も示さなかった。そういう時代だ。劉鉄雲が蝶隠名義で「鄰女語」の評語を書いていたことは、当時は誰も知らない。新しい発見だったのだ。

のちにｂ『劉鶚及老残遊記資料』は、第５-12回分の評語を収録した。第１回からではなく第５回からを採取したのは、『清末小説研究』に従ったからだろう。

ところが、今回の『劉鶚集』は、第１、２、４回分を追加している。しかも、上に示したようにそれには「蝶隠加評」と明記する。これはいかがなものか。なぜならば、それらには「蝶隠加評」とは書かれていないからだ。掲載誌に署名がないからこそ、私は第１、２、４回分の評語を採録しなかった。『清末小説研究』には、「蝶隠加評」と明示している「鄰女語」第５回以降の評語のみを採録

した理由だ。

『劉鶚集』にどうしても収録したかったのであれば、「鄰女語」第１、２、４回の評語については、「蝶隠加評」とは書かれていないことを注記すべきであった。その点に関して不正確である。

『繍像小説』第13号［期］以降に発行年月を記入するのは（553-555頁）、もともと記載がないという理由で正確ではない。

『劉鶚集』（当時はこの書名は決まっていなかった）を編集していると聞いて、私は劉徳隆に知らせたことがある。新しい資料の発見につながるのではないかと考えた。該書には触れられていないから以下に記録しておく。

5　「老残遊記」の原稿！？

魯迅『中国小説史略』（北京・団結出版社2005.3。254頁）である。

魯迅の該書そのものは、珍しいものではない。いまだに重版がくりかえされる。欧陽健『中国小説史略批判』（太原・山西出版集団、山西人民出版社2008.1）が刊行されたのを見ると、人気があることを逆に証明しているようにも思う。

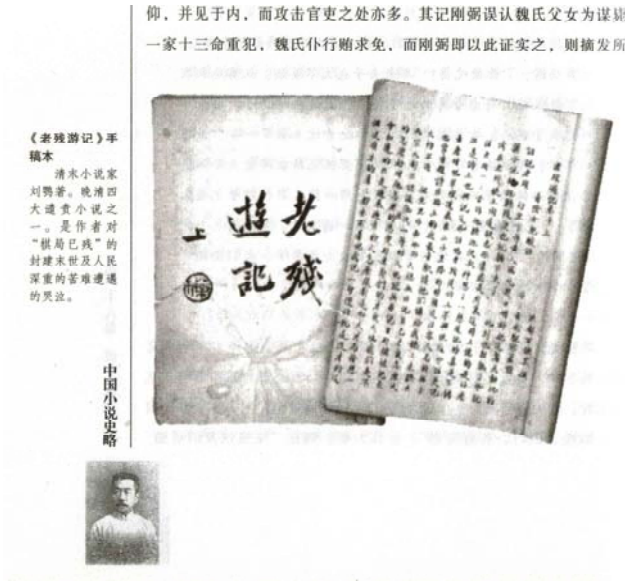
私が注目したのは、該書に添えられた書影だ。

254頁に「《老残遊記》手稿本」と題している。２分冊。「上」冊の表紙題字は天津・孟晋書社版（『天津日日新聞』連載を単行本にした）に似ている。印も同じく「薬雨」だ。右側にひろげてあるのは「老残遊記」第13回の冒頭部分である。

写真はもとから不鮮明であるが、原稿のような印象を受ける。ただし、目をこらして文面を見ると訂正個所がない。現存する下書き手稿とは、また異なる。私は、過去においてこのような原稿を写真ですら見たことがない。

「葯雨」といえば劉鉄雲の友人である方葯雨のことだ。当時、天津日日新聞社の社長である。『繍像小説』の連載を中止したのち、あらためて『天津日日新聞』に連載することになったのは、彼が劉鉄雲に執筆を勧めたからだ。新聞掲載後、初集20回を同社は印刷した。発行は上に示したように天津・孟晋書社である。それには印「薬雨」がある。また二集も同紙に掲載した。

もういちどよく見る。初集20回の原稿を２冊にわけて製本してある。これは、



団結出版社版『中国小説史略』掲載の
《老残遊記》手稿本

天津・孟晋書社版

どういう性格のものなのか。

「《老残遊記》手稿本」と書いてあるとおり原稿らしい。新聞掲載分を製本した活字版ではない。孟晋書社版の活字本であれば、私は天津で実物を見ている。こちらの原稿本２冊は、その存在そのものが不思議である。

整理しておく。劉鉄雲は、「老残遊記」を２度執筆した。

最初の執筆経過は以下のとおり。

劉大紳の証言がある。「関於老残遊記」だ。

> 父（劉鉄雲）がこの原稿（老残遊記）をはじめて書いて連（夢青）に贈った時は、最初の数回分であった。連夢青と商務印書館が契約を結んでからようやく継続して書きはじめた。毎晩帰宅すると、筆まかせに数枚を書き、翌朝汪剣農氏に手渡すと彼が清書して連夢青の家に届けた［翌晨即交汪剣農先生録送連寓］。（a『老残遊記資料』58頁）

ここに「老残遊記」執筆と原稿引き渡しの手順が説明してある。

まず、劉鉄雲は下書き手稿をつくった。その一部が現在も残っている。下書きだから修正個所がある。後にこれを使って没書になった第11回を復元したことはなんども説明した。下書き手稿を汪剣農が清書し（漢語の「録」をそう解釈する）、それを連夢青が『繍像小説』編集部、すなわち李伯元、欧陽鉅源に渡すという手順だ。

連夢青は劉鉄雲の友人であり、しかも「鄰女語」の著者である。この「鄰女語」も『繍像小説』に連載されていた。だから、劉鉄雲の書いた評語が「鄰女語」についている。しかもその連載は、「老残遊記」よりも先行していた。連夢青が「老残遊記」清書原稿を李伯元、欧陽鉅源にわたすのも不思議ではない。

汪剣農は、名を銘業といい、当時劉家で家庭教師をしていた。劉大紳が自注でそう説明している（a59頁）。劉鉄雲乙巳日記にもたびたび登場する。その記述を見ると、彼は劉鉄雲の文書関係を引き受けていたようだ。「老残遊記」を清書するのも汪の仕事に含まれていたのだろう。汪剣農が「汪五先生」と称されていたことはb『劉鶚及老残遊記資料』の注２（274頁）に見える。このような貴重な注を『劉鶚集』では省略したから、私は惜しいと感じる。

つぎは２度目の執筆だ。くりかえしになるがご了解いただきたい。

「老残遊記」の原稿第11回を没書にされて執筆は中断した。その後、方荊雨による続作の勧めがあったことは述べた。「老残遊記」は、あらためて第１回から『天津日日新聞』に連載をすることになる。

第10回までは『繍像小説』に掲載されているからそれを利用する。『繍像小説』の編集者が書き換えた部分は訂正すればよい。没書になった原稿第11回は、手元に残していた下書き手稿をもとにして復元した。これが劉鉄雲乙巳（1905）日記の第11回である。雑誌に掲載された第11-13回は、原稿の第12-14回に当る。こちらもそのまま使用できる。第15回から第20回はあらたに原稿を執筆した。

この２度目の「老残遊記」執筆過程は間違っていない、と今でも私は考えている。私が指摘して30年以上が経過した。反論は提出されなかった。

写真の「《老残遊記》手稿本」を見ることができれば、天津日日新聞社に渡したのがどういうかたちのものであったのかをさらに一歩進めて推測する材料にな

るのだ。

写真の「《老残遊記》手稿本」第13回は、清書原稿らしい。ということは、「老残遊記」初集は第１回から『繍像小説』掲載分を手元において清書しなおしたことになる。ただし、劉鉄雲自身である可能性は低いように思う。清書したのは別人だろう。

最初の「老残遊記」は劉鉄雲が下書き手稿を作り、それを汪剣農が清書した。２度目の「老残遊記」執筆でも同様のことをくりかえした、と推測するのが自然だ。ただし、清書したのが誰かは、疑問のままにするしかない。

『繍像小説』掲載分については、それを利用し必要な箇所には手を入れ下書き原稿とする。復元した第11回と追加分、すなわち第15-20回分も下書き手稿をつくる。それを天津日日新聞社の人間か誰かが清書する。その清書原稿が、団結出版社版『中国小説史略』に掲げられた写真のものではなかろうか。

葯雨の印がある。題字を書いたのは方だろう。方葯雨が清書したかどうかまではわからない。この原稿は、誰が保存していたのか。こちらも疑問だ。

まさか最近作成された偽作でもあるまい。「老残遊記」原稿の偽物をわざわざ作る意味があるとは思えないからだ。本物であるという前提で、この原稿そのものが貴重な文献である。

私は、そのように考えた。いくつかの疑問も生まれている。ゆえに、劉徳隆に知らせた。日本ではすすめることができない種類の調査である。『劉鶚集』を編集中の彼であれば、北京の団結出版社に問い合わせることができるだろう。その原稿がみつかれば、これは画期的なものになる可能性がある。『劉鶚集』において説明が加われば、それがひとつの特色にもなる。そう期待した。だが、『劉鶚集』には言及がない。

以上、ここに紹介しておく。誰か調べてくれるとうれしい。

【注】

1）書評を書いたことがある。樽本「劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』はよろしい」『清末小説論集』所収

2）樽本「劉鉄雲辛丑日記について」『清末小説論集』所収

「老残遊記」執筆経過の謎

——書簡集『滬榕書札』に見る

『清末小説から』第93、94号（2009.4.1、7.1）に連載。『滬榕書札』は劉厚沢から兄蕙孫にあてた書簡集である。劉鉄雲の孫にあたるふたりは『老残遊記資料』の編集と執筆に従事した。その過程で彼らは「老残遊記」執筆経過の謎に遭遇する。問題は執筆経過のみに止まらない。規模のより大きな謎に発展するのである。劉厚沢と蕙孫の兄弟は、「老残遊記」初集が『天津日日新聞』に連載されたのは1904年であるという阿英の誤った断定を前提にして考えている。出発点が間違っているから「老残遊記」執筆過程がどうなっているのか正しく理解することは不可能であった。魏紹昌から提出された執筆過程についての質問に答えることができないのも当然だ。一方の魏紹昌自身も、阿英説を信じていたから解答に到達することができなかった。後年、樽本が正しい答えを提出した。魏は知らぬ顔をして阿英説に根拠がないと書いたのだった。より大きな問題とは、こうだ。「文明小史」が「老残遊記」から盗用していること。それに掲載誌である『繍像小説』の発行遅延問題がからむ。編集長だった李伯元が死去したあとも『繍像小説』は発行を継続していた。李伯元の死後に発表された「文明小史」は、李の作品ではない。彼の協力者であった欧陽鉅源が執筆したとしか考えられない。「文明小史」の著者問題に発展するのだ。

劉鉄雲「老残遊記」の執筆経過、あるいは刊行情況について記述するばあい、いくつかの水準にわけることができる。

基本的な説明はこうだ。「老残遊記」は初集20回、二集９回が公表された（本稿は二集、回を使用する)。それらとは別に未公表の外編残稿がある。

もうすこし詳しくいうとこうなる。最初は雑誌『繍像小説』(1903）に連載されたが、中断した。その後、『天津日日新聞』が「老残遊記」初集20回と二集９回

を掲載した。

普通は、以上の水準でとどまる。考えようによっては、これで十分に説明したことになるだろう。執筆の経過を含めて、その情況をより深く掘り下げて記述することは可能だ。だが、実行されることはない。劉鉄雲研究あるいは「老残遊記」の作品論とは無関係だ、と判断されるからである。

つぎのことを指摘しなければならない。その水準で記述を停止すれば、より重要な事実が見えなくなる。

『繍像小説』での連載はなぜ中断したのか。説明がないから1900年代当時の読者にはその理由がわからない。一方で、初集20回の版本が流布しはじめる。注意深い読者は、本文の一部分が『繍像小説』掲載のものと20回単行本とは異なっていることに気づく。つまり、２種類の本文が存在している。どちらが正しいのか、判断する材料は提供されていない。雑誌初出と単行本の本文が違えば、作品論どころではなくなる。

それから約30年が経過した。著者劉鉄雲の息子大紳が登場する。彼は、「老残遊記について［関於老残遊記］」(1939）において連載が中断した理由をはじめて明らかにした。

劉大紳の証言を私なりにまとめるとつぎのようになる。

事件は、『繍像小説』連載中におこった。「老残遊記」原稿の第11回が編集者によって没書にされたのだ。劉鉄雲は、執筆を中断する。のちに劉が続作することにしたのは、事情を知った友人に勧められたからである。『天津日日新聞』にあらためて掲載して初集20回が成った。つづけて二集９回を同紙上に連載して途中で終了する。

以上の説明で一応の理解は得られるだろう。

だが、事実をもう少し追求すると新しい展開になる。説明できない複数の事柄が別に出現する。それらが相互にからまっていることも明るみにでる。一般的な水準でとどまっていれば、そのことに気づかない。

たとえば、劉大紳が説明しなかった、あるいは存在さえ知らなかった事実がある。盗用問題だ。

没書にされた「老残遊記」の原稿第11回が、同じ『繍像小説』に連載中の「文

明小史」第59回に取り込まれた。「文明小史」の著者は李伯元だ。『繍像小説』の編集責任者でもある（この主編者についてもはるか後の80年代に疑義が提出された)。李伯元が劉鉄雲の没原稿を無断借用した。別のことばでいえば、盗用したのである。こうなると「文明小史」という作品論に直接関係してくる。もっといえば、著者李伯元の死去という事実がこれにからむ。また、『繍像小説』そのものの発行が遅延していた事実と結びついて、情況はさらに複雑化する。新しい事実の出現により従来の認識を修正する必要が生じる。だからこそ研究は発展する。

ただし、この複雑な問題を把握している研究者は、現在それほど多くはない。『繍像小説』という小説専門雑誌を研究するのは、出版史研究の分野であって文学研究とは無関係だ、という考えが存在しているのか。それぞれの作家論、作品論とかかわっている、と指摘しても理解しにくいらしい。

「老残遊記」の執筆経過にひきもどす。

劉厚沢が直面した謎こそ、この「老残遊記」執筆経過問題であった。60年代はじめのことだ。

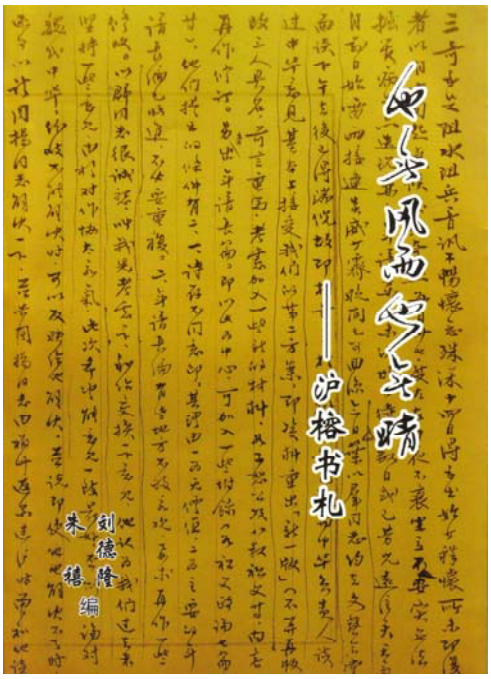
劉厚沢（1915-1970）は、劉鉄雲の孫だから親族として利用することのできる材料資料を特別に所蔵していた。そこが一般の研究者とは違う。彼が見ることができたのは劉鉄雲の日記である。日記に記載された「老残遊記」の執筆情況が、雑誌、新聞の連載時期と一致しない。利用できる資料があったから知識が増加して、かえって説明できない事柄に遭遇した。これが、本稿の主題である「執筆経過の謎」だ。

劉鉄雲「老残遊記」の執筆経過を、あらためて考える契機になった最近の出版物から紹介しよう。

1　『滬榕書札』という書簡集

劉徳隆、朱禧編『也無風雨也無晴――滬榕書札』(私家版　刊年不記［2008.11］）が刊行された（以下、書名を『滬榕書札』と称する)。

なお、あらかじめお断わりしておく。本稿はその性質上、樽本「『劉鶚集』はよろしい」(『清末小説から』第91号2008.10.1。本書収録）ほかと内容が重複する部分が



劉徳隆、朱禧編『也無風雨也無晴――滬榕書札』

ある。

私は、『滬榕書札』について清末小説研究会のホームページで簡単に紹介した。該書のおおよそを理解してもらうために引用する。

2008.12.1

『滬榕書札』は、劉鉄雲の孫に当る人物劉厚沢の書簡集です。

1958-1966年の９年間に劉厚沢（上海＝滬）から兄劉蕙孫（福州＝榕）へ当てた手紙103通を収録しています。

人間関係を簡単に説明しましょう。

劉鉄雲は、いうまでもなく「老残遊記」の著者としても有名です。彼の息子のひとりが劉大紳です。「関於老残遊記」(1939）を発表し貴重な証言を残しました。劉蕙孫と劉厚沢の兄弟は、その劉大紳の息子たちという関係になります。

書名から、劉蕙孫と劉厚沢の往復書簡集にも思われます。しかし、実物を見るとそうではありません。

「文化大革命」にあって劉蕙孫は拘束され、手元にあった劉厚沢からの手紙も没収された。のちに返還されたもののなかに手紙も含まれていたということらしい。

ところが、劉蕙孫からの手紙は没収されたまま行方不明になった。ということで、残された劉厚沢書簡を親族が協力して整理刊行したというのがいきさつです。

「反右派闘争」「大躍進」の時代からはじまって、劉厚沢の仕事、研究（太谷学派、劉鉄雲研究を含む)、あるいは親戚の消息がつづられており興味深いことです。人名には「説明」がつけられていて、親切だといえましょう。

「老残遊記」に関連しての話題が多く含まれています。読み解けば、新しいことが出てくる可能性もある。

該書は、冒頭に写真８頁、凡例、劉徳隅「前言」、目録、本文、附録（１劉厚滋「丹徒劉審言先生墓表記」、２劉徳平「読信雑憶」、３劉徳枢「吾家家世」、４劉徳隆「関於《老残遊記資料》」、５劉徳隆「《也無風雨也無晴――滬榕書札》保存整理始末」、６劉徳平「亦談書名 “也無風雨也無晴” ――校対感言」）という構成になっています。

B5判、314頁。私家版のためか奥付はありません。

手紙には、『老残遊記資料』(出版が実現したのは北京・中華書局1962.4。奥付の記載による。以下、『資料』と略称）の編集について、多くの説明がある。もちろん、それぱかりではない。劉鉄雲と太谷学派関係についての記述も大いに注目される。

書名に使われた「也無風雨也無晴」は、蘇軾（東坡）の「定風波」からとったもの。雨風だろうが、晴れだろうがかまわない。情熱を注いで執筆編集した『資料』が、刊行されてみれば他人の功績になっている。書簡集を読んだ劉徳隅（劉厚沢の息子）が父親の心情を思いやり、蘇軾のことばに重ねたところからの命名となった。

私の関心が「老残遊記」にあるために、目が自然にその方向にいってしまう。

書簡をたどりながら、まず資料編集とその刊行について簡単に説明する。

2　『資料』の編集と刊行

上海に住んでいた劉厚沢は、祖父劉鉄雲と「老残遊記」に関係する資料集の刊行準備をしていた。中国作家協会上海分会（以下、作協）の魏紹昌が窓口であったようだ。劉厚沢は、魏と連絡をとりながら資料を収集整理する。作業の進行状況は、手紙からそのおおよそを読みとることができる。問題が出てくれば、兄劉蕙孫（1909-1996）と相談する。それのくり返しだ。兄から返書が当然ある。ただし、前述したように劉蕙孫の書簡は失われた。

『資料』の編集計画には紆余曲折があって、作協が示したほぼ最終案は以下のとおりだった（記号【043-61-04】1961.3.20付。104-106頁)。要旨のみを示す。

> 『老残遊記――資料本』と『劉鉄雲年譜……初稿』の２冊本
>
> 上冊　魏紹昌、劉蕙孫、劉厚沢編輯　後３回、外編、前20回の評語、劉大紳「関於＜老残遊記＞」、蒋逸雪「年譜」、張畢来、胡適らの論文
>
> 下冊　劉蕙孫著『年譜』
>
> 中華書局発行　下冊の『劉鉄雲年譜』は、劉蕙孫が手を入れる。時間の関係で上冊のみ先行して出版し、『年譜』(「年譜長編」と称する）はその後の刊行になる。

「後３回」というのは、「老残遊記」二集第７-９回を指す。

二集は『天津日日新聞』に第９回までが掲載され、未完のままに終っている。その後、存在そのものが忘れられた。複数の出版社がくりかえし刊行したのは、初集20回のみだ。

ところが、二集９回分は、天津日日新聞社に勤務していた劉家の親族によって再発見される。1929年だった。

1934年、その４回分が雑誌『人間世』第6-14期に掲載されたのだから注目を集めた。

翌1935年、同誌の版元である上海・良友図書印刷公司より、小型の単行本が刊

行された。雑誌掲載は４回分だったが、それに２回分を加えた合計６回を収録している。

つまり、二集は本来が９回分あったにもかかわらず30年代に第６回までしか公表されなかった。北京・人民文学出版社から刊行された『老残遊記』(1957.10）は、初集20回と二集の６回分を収録している。この二集は、良友図書印刷公司本にもとづく。９回まであるとは説明していない*1。二集の残り３回分の存在は広くは知られていなかった。『資料』にそれらを収録するのは、刊行物としての大きな特色になる。また、外編については、そのようなものがあると劉大紳は説明した。だが、活字になったことはない。こちらも価値ある新資料である。

「(劉鉄雲）年譜」がふたつ見える。それらは別物だ。蒋逸雪の年譜はすでに公表されており、劉蕙孫は執筆途中である。

蒋逸雪の「年譜」は、40年代に発表された（『揚州師範学院学報』第３期1959.12掲載のものかもしれない)。これを収録する理由は、外部研究者の著作として尊重するためだ（82頁)。

その一方で、親族の劉蕙孫が手元に保存する豊富な材料をもとにして新しく年譜を書き下ろす。未公開の「劉鉄雲日記」などを含んだ資料を活用して執筆する予定だ。年譜の決定版として万全なものにする計画であろう。ただし、劉蕙孫は以前から原稿執筆に取りかかっていたが、この時点ではまだ書き終えてはいない。執筆途中である。

張畢来論文は、胡適批判につながる「老残遊記」批判で知られている。それをあえて収録するのは研究資料集として平衡をとる意味だとわかる。ただし、結局のところ論文収録はされず簡単な内容紹介が示されただけ。

胡適批判が継続して進行中であるが、胡適論文を採録するのもそういう配慮からだろう。こちらは実現した。

1961年に劉厚沢は劉鉄雲関係資料の大部分を南京博物院に寄贈した（【047-61-08】)。全部ではない。「劉鉄雲日記」についてはその存在を知らせていない。

『資料』は、その後、上海・中華書局の内部審査を通過した。だが、それでも最終的な決定が下されない。その時期に、従来とは違う別の編集方針が提示されている。奇妙に思える。その編集内容は、つぎのとおり。

上冊に「老残遊記」初集20回、二集６回、最後の３回、外編、自作の序、自作の評語を収録する。こちらは市販する。下冊は資料で内部発行とし、市販はしない（【051-61-12】142頁)。

そのころ、劉蕙孫「年譜長編」について劉厚沢と魏紹昌が修正作業をつづけていた（142頁)。劉兄弟は上海と福州に離れているから、劉蕙孫の原稿は送られて劉厚沢の手元にある。完成原稿にするためには、検討し修正をほどこさなくてはならない。分量が多いから時間がかかるはずだ。

作協の編集案と中華書局のそれとが、ここに至って異なっていることがわかるだろう。

作協案は、あくまでも研究用資料として刊行することを目的にしている。

一方の中華書局案は、それまでバラバラだった『老残遊記』を１本にまとめて出版したいらしい。いわば完本『老残遊記』を前面に押し出すつもりだ。だから、年譜などの資料は背後に追いやり、内部発行ですませたい。研究用では、販売するにしても多くの部数は期待できない、という判断があったのだろう。

劉厚沢の手紙を読んでいて、私には理解できないことがある。つまり、もうすぐ刊行する書籍であるにもかかわらず、責任者が不明確なのだ。それが当時の中国出版界の慣習なのか、それとも『資料』に限ってのことなのか、そこがよくわからない。

魏紹昌ははたして作協を代表しているのか、それとも単なる窓口で協力者なのか。それも不明である。魏がいるかと思えば、上海社会科学院の陳夢熊が出てくる（182頁では中華書局の陳夢熊とある)。作協の編集案とは別に出版元の中華書局からも編集案が提出されたことは述べた。上部のどこかに責任者がいるのだが、それは劉厚沢には知らされていないらしい。

1962年４月８日付の手紙（【063-62-08】175頁）によると、訪ねてきて出版の情況を説明したのは陳夢熊だった。該書が刊行される直前のことだ。陳は次のようなことを言った。

上冊はもうすぐ出版される。蒋逸雪部分に少し訂正があって遅れた。５月中には出る。署名は魏紹昌、劉蕙孫、劉厚沢の３人を予定していたが、「総編」の決定をへて「作協」の名前にした。印刷部数は１千部だ。劉蕙孫の「劉鉄雲年譜」

長編は、慎重に検討中である、などなど。劉鉄雲の詩集、日記についても別に出版計画あるいは出版希望があることも説明されている*2。

蒋逸雪作「劉鉄雲年譜」に修正がほどこされたこと、および編者名の表示変更が伝えられたことに注目する。

劉蕙孫の原稿は「総編室」に急いで送る、とある。「総編室」に編集刊行の責任と権限が与えられているらしい。そうすると、その室長が総責任者になるはずだ。しかし、名前は明らかにされてはいない。

実際に刊行された『資料』を手にした劉厚沢は、驚いた。作協文学研究室の名前で出ると聞かされていたが（182頁)、魏紹昌ひとりが編集したことになっている。しかも、蒋逸雪の「年譜」には大幅に手が入れられているではないか。彼が考えていたのとは違う。

実物の構成、目次などを示すと以下のようになる。

魏紹昌編、中華書局上海編輯所編輯『老残遊記資料』北京・中華書局1962.4*3

（図片）劉鶚像／劉鶚四十六歳像／劉鶚四十九歳像／《繍像小説》半月刊第九期封面／《老残遊記》最早単行本里封／《老残遊記》第五巻挿図／《老残遊記》第十二巻挿図／《老残遊記》外編原稿第一頁／《老残遊記》外編原稿第七頁

前言……編者（魏紹昌）*4

第１輯

《老残遊記》初編自序

《老残遊記》二編自序

《老残遊記》初編巻一至巻十七評語

《老残遊記》二編巻七－九

《老残遊記》外編巻一（残稿）

第２輯

関於《老残遊記》……劉大紳

《老残遊記》作者劉鉄雲先生的軼事……劉大鈞

劉鉄雲先生軼事……劉大鈞
良友版《老残遊記》二集跋一……劉大鈞
良友版《老残遊記》二集跋二……劉鉄孫

第３輯

劉鉄雲軼事……劉大傑
庚子聯軍戦役中的《老残遊記》作者劉鉄雲……阿英
劉鉄雲年譜……蒋逸雪

附録

亜東版《老残遊記》序……胡適
良友版《老残遊記》二集序……林語堂

第１輯と第２輯に線を引いたのには、理由がある。劉厚沢が、自分で校正刷りを点検したのはこの第１、２輯（『資料』1-119頁）だけであった。それ以外は見ない、と魏紹昌に告げている。なぜなら、第３輯と「附録」に収録された文章は、劉厚沢らが提供したものではないからだ。その校訂は魏紹昌が責任を持つことになった（182頁）。

確かに、第１輯は「老残遊記」関係だ。「老残遊記」二集第７-９回は、『天津日日新聞』に掲載された実物そのものではない。再発見されたとき記録のために手書きで複写した原稿をもとにしている。兄劉蕙孫にあてた手紙だから、両者にとっては周知のこと。わざわざ説明する必要がない。また、第２輯に収録したそれぞれの文章は、すべて劉家の人々が書いたもの。それらには劉厚沢自身が注釈をつけている*5。彼が点検するのは当然だろう。

胡適と林語堂の文章が特別扱いで「附録」に配置されている。「反動文人」だと批判されている人物が書いたものだからだ。60年代とは、そういう時代だった。

できてきた書籍の大きな変更点は、くりかえせば編集者の名前が魏紹昌ひとりになっていることがひとつ。

もうひとつは、蒋逸雪「年譜」が大幅に書き換えられていることだ。

劉厚沢は、狐につままれた感じがしただろう。そのふたつの変更は、ともに彼

が関知しない部分に生じている。異義を提出しようにも事前に点検していないから、どうしようもない。

蒋逸雪は該書所収「年譜」の末尾に、劉厚滋（蕙孫）の材料によって修改と補充をしたと注記する（『資料』186頁)。蒋逸雪の先行年譜は、劉厚沢から見て内容的には満足のいくものではなかったはずだ。ただ、研究者が書いた客観的な年譜として尊重するために収録を認めた。蒋の記述が不十分である箇所は、劉蕙孫が書き下ろす詳細な年譜長編で補足できる。だから別冊で刊行することに賛成したのだろう。劉鉄雲日記から豊富に引用するのが劉蕙孫原稿の特色になるはずだった。ところが、蒋逸雪がその劉蕙孫原稿にもとづいて勝手に加筆しているではないか。劉鉄雲日記については、孫引きになる。だから、従来の年譜とは違う比較的詳細な説明になっている。劉厚沢には無断で劉蕙孫原稿を利用させた結果なのだ。

これより以前の1961年10月13日付で劉厚沢は次のように説明している。

蒋逸雪が原稿修正するときの参考に劉蕙孫の「年譜長編」原稿を彼に郵送する考えを作協は示した。しかし、劉厚沢はそれを断わった。それが認められたと彼は兄の劉蕙孫に知らせた（【053-61-14】152頁)。

当たり前だ。特色のある劉蕙孫原稿を蒋逸雪に参照させれば、劉蕙孫原稿の価値は失われるに決まっている。

当事者であれば、ただちに理解するに違いない。「彼ら」は劉厚沢の意向をわざと無視した。そうしたのは、劉蕙孫著の年譜長編は別冊で刊行する意志がない、ということを示している*6。「彼ら」といえば複数だ。作協の人々だが、突きつめれば魏紹昌ひとりになるのだろうか。中華書局も関係しているから、それもはっきりしない。詳細は不明だ。問題解決のために、何回か名前のでてくる作協副主席葉以群、また陶蕘華が動いている。

私が紹介できるのは、ここまでである。

事前に了解していた説明と実際に出てきた刊行物が異なっている。どうしてそうなったのかは、当事者である劉厚沢自身にもわからない。

その後、中華書局版『資料』の再版が計画され、1962年に関係者間で合意が成った。時間を見れば『資料』発行の直後のことらしい。編集に少し変更をくわえ

る新一版だという。しかし、50年近く[以上]が経過した現在にいたるまで該書の刊行は実現していない。

外国人である私が、以上のいきさつを見てわかるのは、責任の所在が不明確だったということだけだ。

3　執筆経過、またその謎

劉厚沢は、父大紳が執筆した「関於老残遊記」*7に注釈をつける作業をつづけていた。それを進めていくといくつかの疑問に突き当たる。「老残遊記」の執筆経過についてのものだ。説明にあたり、便宜的に番号をふる。

はじめは劉大紳の説明に見える小さな誤記である。

１．二集は「８回本」と書いているが実は９回が存在する（【019-60-01】43頁）

劉大紳は、二集が『天津日日新聞』に連載されて、全部で14回があると説明した（『文苑』11頁)。そこにほどこされた注13を引用する。

> 註13　当時、書いていたのは確かに第14巻である。亡父は清光緒三十三年（1907）六月ころに漢口へ赴いたが、行くにあたって切り抜いておくよう、また掲載が終ったら余分に数部を新聞社に請求するよう私にいいつけた。また、これ以上続作はしない、と方若に言っておいたとも語った。いわれたとおりに行なったけれども、家の災難をへたため、いろいろ手を尽してさがしたが、すべてを回復することはできず、今わずかに８巻があるだけだ。良友が印刷したのは、いとこが切り抜いたのが６巻だけあったためで、それで中断したと考えた。（『文苑』12頁）

方若（薬雨）は、劉鉄雲の友人で当時『天津日日新聞』の社長だった。方が勧めて劉鉄雲は「老残遊記」初集を該紙上に連載のうえ完成させた。二集も同紙に連載したというのがいきさつだ。良友とは上海の良友図書印刷公司のこと。二集６回を1935年に刊行した。

この注が二集について説明していることに目をとめてほしい。
劉厚沢は、二集の回数について、次のような注をつけた。

> 注13でいっている「今わずかに８巻があるだけだ。良友が印刷したのは、いとこが切り抜いたのが６巻だけあったためで、それで中断したと考えた」の８巻は実は９巻である。ここは亡父の誤記である。(『資料』94-95頁)

誤記といっても小さなものだ。劉厚沢がそれを訂正したのは、いい。
つぎに別の問題がでてきた。原稿の執筆と『繍像小説』連載、あるいは『天津日日新聞』の掲載時期についてだ。1960年の段階で、そう明確には把握されてはいないが、劉厚沢は調査の必要を感じている。

２．商務印書館の『繍像小説』は、「老残遊記」をいつ掲載したのか（【021-60-03】49頁）

劉厚沢は劉鉄雲の親族だが、雑誌の『繍像小説』を所有しているわけではなかった。
「老残遊記」は、雑誌に連載されていたが中断し、そののち『天津日日新聞』に連載された。しかし、劉厚沢の手元に『繍像小説』の実物はない。
「老残遊記」執筆の経過を追跡するためには、初出雑誌を調査する必要がある。
こうして劉厚沢は、ある問題に遭遇することになった。どう考えても解決できそうにない問題だ。

３．二集執筆と「劉鉄雲日記」の記載が一致しない（【032-60-14】70-71頁）

劉厚沢は独自に利用することのできる資料を持っていた。だからこそほかの研究者が気づかなかった問題を見つけたということができる。直接拠ったのは、劉蕙孫の「年譜長編」だ。原稿を受け取ったと1960年８月14日付で知らせている。それを劉厚沢は点検しながら自分で考えた。

> 私の原稿で、頭を悩ませることがひとつあります。作品とその執筆時間の

問題です。(劉鉄雲の)「乙巳日記」と対照すると、(二集は)1905年に書いていますが、しかし私の推測とは符合しないし、その他の説明すべてとも合致しません。1905年の冬に書いて、祖父は1909年に逝去しますから、初集、二集、外編［外集］はすべて続けて書いたものです。文章の勢い、文章の作り、口調などのいかなる方面においても、まったく筋が通りません。もしあなたの言うように、二集がたしかに14章あるとすれば、「乙巳日記」に記載のあるのが書かれた二集だとするのが合理的です。しかし、「15章」というのはどこから来たのでしょうか。今、この問題を解決するためには、ただひとつの方法は、最初の『繡像小説』を探しだして、それが何時なのかを見ることです。私が今推測しているのは、二集には15章以上があって、14章だけを印刷し、現在９章が存在している可能性だけです。

「私の原稿」というのは、劉厚沢が別に執筆していた論文をさす。『文学遺産』増刊第７輯に掲載を予定していたという。だが、結局のところ掲載されなかった*8。

二集の第14回については、それが確かにあった、と劉大紳が証言している。そのことを意味する（前述したように、結果として劉厚沢は「８巻は実は９巻である。ここは亡父の誤記である」と注記した)。

劉厚沢は、劉鉄雲「乙巳日記」の記述を根拠にして「老残遊記」執筆の経過について問題を提起した。相談相手の劉蕙孫は、「年譜長編」を書いているから、何が問題なのかを十分に把握している。ただし、上の書簡を見て情況が理解できる読者は少ないだろう。だいいち、「乙巳日記」にどのように記載されているのかここでは明らかにされてはいないからだ。

出てくる単語からおぼろげにわかるのは、二集には第15回があるらしいということだ。それらをまとめて、最後部分の説明になる。劉厚沢の考えをくりかえす。二集は15回以上が書かれてはいたが、新聞に掲載されたのは第14回までだった。そのうちの９回分が現存している。ここは検討する必要がある。

４．劉鉄雲「乙巳日記（1905)」の「老残遊記」執筆は不可解という（【033-60-15】）

以上に見る「老残遊記」執筆経過は、劉厚沢の頭の中でほとんど確定してしまう。それにもとづいて資料を見ると、どうなるか。

> 原稿（注：劉蕙孫「年譜長編」）の誤った箇所、つまり別紙に書いたいくつかのほかで比較的大きな誤りは、おそらく「遊記」の著作時間でしょう（前の手紙でお伝えしましたように、私の原稿で頭を悩ませている点ですが、今はすでに判明しています。私の推定は完全に正しいのです)。あなたの原稿の1904年に「「老残遊記」小説を書く」と書いてあります。私は、二集［続篇］は1905年以前に、初集［正篇］は遅くとも1903年前後に書かれたと推測します。昨日、作協へ行って最初の（掲載誌である)『繍像小説』雑誌を探して調査しましたが、第１回は癸卯年八月の第９期に掲載されています。まさに1903年で、全部で10期に掲載され第18期以後にはありません。これにより、1903年にはすでに刊行されていて、1904年に書くということはあり得ないことが証明されます。あなたが書き写してきた「乙巳日記」は1905年で、当然ながら正しくありません。しかし、祖父が書き誤るということはありませんから、表紙をつけ間違えたのではありませんか？道理からいえば、その時期は連続していましたから、書き直す可能性もありません。もしも『天津日日新聞』のために書き直したのでしたら、１字も違わないということは断じてないのです。しかも、商務印書館本がすでに重ねて発表されていますから、書き直す必要はありません。まことに不可解です。あるいは、私が前の手紙で言ったように、「二集［続集］」は本当は９回では終っておらず、14回でもまだ終らなかったということでしょうか。この点（執筆時期）については、1903年のあとに（原稿を）切り張りするのがよろしいかと考えます。いかがでしょう。73-74頁

身内どうしの手紙だから当事者ふたりは、十分に理解しているのだろう。だが、私にはわかりにくい箇所がある。

たとえば、「老残遊記」初集についてだ。初集は1903年の『繍像小説』に連載された。それは、いい。ただし、この初集は『繍像小説』編者による原稿の没書事件が発生している。劉厚沢らは、父劉大紳の文章を読んでいるから、それを知

らないはずはない。知ったうえで、おおよその執筆経過を推測していると思われる。この段階では、そうだ。

その上、『繍像小説』は半月刊が守られて刊行されたという当時の定説にも従っている。だから、該誌第18期は1903年旧暦十二月に刊行されたと考えている。実物には刊行年月が記載されていないにもかかわらずだ。そこから、初集は「1903年にはすでに刊行されていて、1904年に書くということはあり得ない」ことになる。

劉厚沢は、自分の推測が正しいと自信をもった。そのため、劉鉄雲「乙巳日記」の1905年に原稿を執筆したのは正しくないと述べるにいたる。

奇妙である。自分の推測を事実に優先させるという誤りを犯している。また、劉鉄雲の生前には刊行されたことのない商務印書館版『老残遊記』を持ち出すのもおかしなことだ（2016年補記：1907年の『時報』と『中外日報』広告に商務印書館版が見える。実物未確認）。

結局のところ、「老残遊記」執筆経過を考えるばあい、没書事件を考慮にいれ、劉鉄雲日記の記述とつきあわせる必要がでてくる。その時、説明することのできない事態に直面するのは必然なのだ。それが判明するには、時間がかかる。

５．劉鉄雲「乙巳日記」を重ねて否定し、『天津日日新聞』を探索する（【034-60-16】）

自分の推論は正しい、と劉厚沢の持論に対する自信は継続する。

> （乙巳）日記に見える執筆年代は、『繍像小説』をすでに調査して、それが確かに間違いであることが証明されました。そうであるならば、私たちの推定は新しい発見である可能性がとても大きいのです。このことについて、あなたの「年譜」ではすでに提起しています。魏紹昌君も意気込んで、１万号の『天津日日新聞』があることを知って、彼はすでに作協から天津に連絡してなんとかさがそうとしています。私の考えでは、双方が並行して進めるのがよく、誰が先に到達してもいいのです。76頁

初集執筆は1903年、二集執筆は1904年だと劉厚沢は考えている。だから、1905

年「乙巳日記」の記述が正しくない、とかさねて述べる。自説によほど自信があるのだ。ここまで思いこむと自分から訂正するのはむつかしい。考え直すにしても、新しい資料はないのだからなおさらだ。

劉厚沢の推測が正しいかどうかは、『天津日日新聞』の連載を見ればすぐに判明するだろう。該紙上には、「老残遊記」初集と二集が連載されている。だが、新聞の探索はすぐに実現しそうにみえて、結局は失敗した。

約半月後の手紙には、つぎのようにある。

> 『天津日日新聞』の古新聞について、作協ではすでに各地に手紙を送ってさがしています。現在返答を得ているのは、国立北京図書館から『京津日日新聞』があるだけで『天津日日新聞』は収蔵したことがないということ。天津人民図書館からも返事がきており、収蔵したことはないといっています。ゆえに希望は極めてとぼしいです。【035-60-17】81頁

2008年現在も『天津日日新聞』がどこかに所蔵されているという情報は、ない。

資料的な裏付けがなく少しの手がかりを見つめて新たな推測が生まれた。

６．二集が30回前後あると推測する（【037-60-19】87頁）

劉蕙孫からの提案で『天津日日新聞』の探索先を『大公報』資料室にまでひろげた。その一方で、劉厚沢は、考えをもう一歩すすめている。すなわち、「老残遊記」二集は30回前後あるのではないか。劉厚沢があげる主な理由は、「乙巳日記」に二集が16回あると証明されている、ということ。もうひとつは、外編の冒頭に、60回を書いたが後ろの40回は薬を包んで数回がなくなった、と説明していることだ。

「乙巳日記」に見える執筆の年月は間違っている。これが劉厚沢の到達した考えである。しかし、日記に二集16回を書いたとあるのだからその箇所は信じるに足る、ということになる。推測の域をでない、と私は思う。

劉厚沢らが資料編集の作業を続けていた時、『文匯報』から「老残遊記」二集３回分を先に新聞に公表するように要求があった。劉厚沢にしてみれば予想もし

なかった突然の申し入れだ。劉厚沢の書簡では、つぎのように書いている。

『文匯報』がどこから情報を得たのか知りませんが、作協をさがして（二版編集員の徐開塁同志です）後ろの３回を彼らにまず渡し新聞紙上で発表したあと単行本にするよう要求しています。【040-61-01】95頁

情報源は、ほかならぬ魏紹昌だった。彼は、自分の書いた文章が『文匯報』に掲載されることを劉厚沢らへ前もって知らせてはいない*9。

魏紹昌「《老残遊記》残稿」(『文匯報』1961.1.29初出未見／『中国近代文学論文集』(1949-1979)小説巻　中国社会科学出版社1983.4。444頁）である。

「最近、作者（劉鉄雲）の孫劉厚滋、劉厚沢のところで、当時の二集切り抜き本の写本、および未発表の老残遊記外編残稿が発見された。これにより、二集９回本の未発表分３回ばかりでなく、劉鶚の外編残稿を同時に読めるのである」。

魏紹昌は、『資料』の大きな柱となる「老残遊記」二集３回と外編が存在していることを『文匯報』において公表した。

当時は「老残遊記」批判が継続されていた。「この原稿の発見は、われわれが今老残遊記およびその作者をいっそう深く研究し批判するための助けになる」と書くのは、そうする必要があったからだ。

７.「老残遊記」執筆経過の謎（【053-61-14】151-152頁）

劉厚沢があれほど自信を持っていた「老残遊記」の執筆経過であった。ところが、大きな謎があると「彼ら」から問題提起がなされる。「彼ら」というのは魏紹昌を含んだ作協の人々だろう。疑問点が箇条書きにしてある。本稿に関係する箇所のみを引用したい（①などの数字は原文のまま)。文末に記号「☆」をつけたのが、彼らからの指摘を示す。

> ①十月の日記で初三に遊記11回を書き、つづく初四に15回を書いているのは不可解だ。誤記か、あるいは省略したのか。原物で示すために「乙巳日記」を書留で私のところに送るよう要求する。☆

実をいうと、「老残遊記」執筆経過の謎に気づいて文章を先に発表した人物がいる。これも魏紹昌だった。「《老残遊記》続集的一段内幕」(『羊城晚報』1961.4.17-18初出未見／『中国近代文学論文集』(1949-1979)小説巻　中国社会科学出版社1983.4）という。

部分的に紹介する。

> 二集は14回までを掲載して止まった。ただし、劉鶚の「乙巳日記」を調べると、彼はその年（1905）の十月初五日に二集の第16回をまだ書いている。ゆえに「老残遊記」二集は少なくとも16回はなくてはならない。残念ながら当時の『天津日日新聞』は探し当てることができず、そのため二集は結局のところ何回掲載されたのか、完全には確定できなくなっているのだ。446頁

魏紹昌は、「劉鶚の「乙巳日記」を調べると」とたしかに書いている。だが、彼は「乙巳日記」を見ているわけではない。未発表である劉厚沢の注釈を読んでそう述べているにすぎない。しかし、内部事情を知らない人がこれを見れば、魏紹昌が「老残遊記」の執筆経過について詳細を知っていると思うだろう。

魏紹昌が「巧み」なのは、「乙巳日記」に記述された「老残遊記」執筆に謎があることを一般には説明しなかった点だ。第16回をまだ書いている、と指摘したのみ。劉厚沢が兄あての手紙で自説を説明した箇所を見てほしい。「二集は15回以上が書かれてはいたが、新聞に掲載されたのは第14回までだった。そのうちの９回分が現存している」。この考えを魏紹昌にも告げただろう。それを、魏はこれまた劉厚沢には無断で文章にして公表した。２度あることは３度あると感じる。

魏紹昌は、劉厚沢の書いていた注釈を検討している。その過程で謎があることを見つけた。それが上の手紙の疑問と指摘になる。「乙巳日記」の実物で確認したかった。

問題の1905年「乙巳日記」から該当部分を示す。

> 十月初三日，歸寓撰《老残遊記》巻十一告成。
> 十月初四日，晴，撰《老残遊記》巻十五。

十月初五日，晴，決計回京……撰《老残遊記》巻十六。(『資料』94頁)

劉厚沢は、二集の執筆は1905年以前、日記に16回があるから30回前後は書いていた、という予測を立てていた。だから、1905年に二集原稿を執筆しているのは誤記ではないかと疑った。ところが、「彼ら」は「乙巳日記」に矛盾があることを指摘したのである。劉厚沢は、この日記の記述に不審な箇所があることに以前は気づかなかった。

十月初三日に二集第11回を書き終っている。翌日には第15回を書く。第12-14回はいつ書いたのか。この疑問がだされた。劉蕙孫も説明していない。劉厚沢も考えたことはなかった。

他人（魏紹昌だろう）から質問された劉厚沢は答えることができない。「乙巳日記」を送るよう要望した理由である。

初集の執筆時期についてもいわれた。

②……たとえば、あなたはこのたび「老残遊記」執筆時期を1904年の第３項目に配置しています。私は魏紹昌と研究しましたが、疑いなく間違っていますから、1903年の第２項目に移動させなければなりません（もとの第３項目は九月のことで、私たちは沈藎が死亡したのは閏五月であるとすでに調査しています。『繍像小説』の発表は八月ですから、執筆開始は閏五月から八月の間でなくてはなりません)。……☆○　151-152頁

文末の☆○は、劉厚沢を含めた複数の意見であることを表わす。

劉蕙孫は、劉厚沢らの意見を受けいれた。のちの『鉄雲先生年譜長編』(済南・斉魯書社1982.8。107頁）を見れば1903年第２項目に配置して説明している。

さらに、もうひとつ大きな謎が提出される。

④「二集［続集］」は乙巳年に書いていますから1905年というのは確かです。しかし、父親の文章には光緒三十三年六月に亡父（劉鉄雲）が漢口におもむき、毎日１節を切り抜くとあります。両者は符合しません。なぜなら三

> 十三年は1907年ですから、1905年に書いて『天津日日新聞』に連日掲載するのが二年後で、それを毎日切り抜いて保存するようにいいつけるということはありえません。まして、当時一世を風靡した小説が、二年も放置されたあとでようやく掲載されるという可能性もありません。筋が通らないと彼らは考えていますし、私も解釈のしようがないと考えます。現在、二集［二編］の執筆時間は多くの角度からみて1905年であるのは確実ですから、私は父のいう三十三年六月に漢口におもむいた時間は誤記したものではないかと疑っています。残念なことに、その年の日記はありませんから、あなたがなんとか探し出すか、あるいはその正誤を確定できないものでしょうか？　152頁

「老残遊記」執筆経過の謎は、二集について大きくふたつある。両者ともに「乙巳日記」の記述に関係する。

二集第11回を書いた翌日に第15回を執筆したのはなぜか。第12-14回はいつ書いたのか説明ができない。これがひとつ。

もうひとつは、1905年に原稿を書いて『天津日日新聞』掲載が二年後というのは筋が通らない。

結局のところ、劉厚沢、劉蕙孫、また魏紹昌らは、問題を解決することができなかった。劉厚沢は、『資料』94頁の注９において、日記の記述をかかげてふたつの謎が存在することをそのまま正直に説明した。

劉厚沢、劉蕙孫、魏紹昌らがふたつの謎を解決できなかった理由はなにか。

私は、彼らがある「思い込み」に束縛されていたからだと考える。「老残遊記」二集の原稿執筆は1905年である、という思い込みにほかならない。

すぐ上の引用を見てほしい。劉厚沢は、「現在、二集［二編］の執筆時間は多くの角度からみて1905年であるのは確実ですから」と説明している。この考えは、どこからきたのか。

4　二集執筆1905年説の根拠

劉厚沢は初期の段階（前出番号４）で、「二集［続篇］は1905年以前に、初集

［正篇］は遅くとも1903年前後に書かれたと推測します」と書いている。ゆえに、1905年「乙巳日記」の二集原稿執筆はそれと符合しない、と疑問を提出していた。彼はのちに考え直し、二集執筆は1905年が確実だとする。劉厚沢がそう確信するにいたったひとつの要因は、阿英の論文を読んだからだ。

阿英「関於老残遊記二題」(『宇宙風乙刊』第31期1940.10.16初出未見／『小説二談』上海・古典文学出版社1958.5）である。

阿英は、該文の「老残遊記版本考」において「劉大紳「老残遊記について」によれば」と書きはじめる。それを収録した『小説二談』は、1958年に出版されている。劉厚沢が論文執筆を準備していた頃とほぼ同時期だ。劉厚沢は、たしかに阿英の文章を読んでいた*[10]。手紙のなかではいちいち「阿英によれば」と説明しないだけのこと。

阿英は、「老残遊記」が『繍像小説』に掲載された期数などについて詳細に解説する。雑誌の実物にもとづいているから正確である。

たとえば、『天津日日新聞』が掲載した「老残遊記」は削除された部分からである、という劉大紳の説明を阿英は訂正する。阿英が所蔵する『天津日日新聞』本には第１回からある。劉大紳のいうような途中からの新聞掲載ではないことは明らかだ。

しかも、阿英が彼の手元においている『天津日日新聞』本の裏は全面に広告を掲載しているという。つまり、新聞から直接切り抜いたものに違いない。新聞の切り抜き本だ。きわめて珍しい部類に属する。

阿英は、その刊行年についてつぎのように書く。

> その掲載時期は、商務（印書館）が掲載を中断した翌年、すなわち甲辰（一九〇四年）である。61頁

これを普通に読めば、「老残遊記」初集20回は「1904年」に新聞連載された、ということが明らかだ。わざわざくりかえすまでもない、と思われるだろう。1904年だと阿英は断言している。阿英が所蔵するのは、ほかでもない『天津日日新聞』切り抜き本である。いくら強調してもよい。新聞の実物にもとづいている

から疑いようがない。誰もがそう考える。1904年に初集20回は新聞紙上での連載を完結したから、翌1905年「乙巳日記」にでてくる「老残遊記」は二集だ。当然、そうなる。

1903年、『繍像小説』で連載を開始し、没書事件で中断した。1904年、『天津日日新聞』にあらためて第１回から掲載しはじめ20回で初集が完成する。ひきつづき1905年に二集の原稿を書く。

「老残遊記」執筆の経過としては、以上の順序で矛盾するところは、一見してどこにもない。だからこそ、劉厚沢と劉蕙孫の兄弟、また魏紹昌も「老残遊記」二集執筆1905年説を信じた*[11]。信じるもなにも、それ以外に考えようがない。当時はそうだっただろう。

劉厚沢は、「老残遊記」の『天津日日新聞』掲載は1904年だという阿英の説明を支持し、それをわざわざくりかえしている。

> （5)『繍像小説』半月刊の第９期から18期までは、「老残遊記」第１回から13回までを掲載し、毎回挿絵が２枚あり、その時間は光緒二十九年癸卯八月初一から十二月十五まで、西暦では1903年９月から1904年１月である。『繍像小説』は原稿第11回の全文を削除し、各回を前に移動したから中止した第13回は、実は原稿の第14回である。翌年、光緒三十年甲辰（1904）に『天津日日新聞』が「老残遊記」を転載したが、おそらく「後半」だけではなかった。阿英同志の考証によると、新しく第１回から掲載をはじめたというが、私もその考えに賛成する。(『資料』93頁）

ところが、劉鉄雲「乙巳日記」の「老残遊記」二集執筆経過に謎が生じた。

第11回を書いた翌日に第15回を書いたのはなぜか。

1905年に原稿を書いて、新聞連載が２年後であるのはなぜか。

二集執筆1905年説が正しいと考えるかぎり、この謎を解明することは不可能である。事実、解明不能だと注釈９に書いていることは述べた。

5　謎の解明――「乙巳日記」の第11回は初集

「乙巳日記」に見える執筆の謎を解く鍵は、原稿第11回である。「二集」の第11回だと考えるから理解不能になる。実は、「初集」の第11回原稿だ。劉鉄雲の日記をよく見てほしい。「老残遊記」と書いてはある。しかし、「二集」だとはどこにも明記されていない。この事実に私は気づいた。

没書事件があったことと関連する。

『繍像小説』の編集者によって没書にされたのが初集原稿第11回だった。『天津日日新聞』に第１回からあらためて連載するにしても、ボツになった第11回を復元しなければならない。手元に置いていた下書き手稿をもとにして書き直した。これが「乙巳日記」に見える第11回だ。

日記の第11回は二集ではなく初集だ、と私は理解した。その瞬間に謎はとける。わかってしまえば、どうということもない。

「乙巳日記」は、初集第11回のボツ原稿を復元した事実を記録している。第12-14回は『繍像小説』に掲載されたから書く必要はない。手直ししてそのまま新聞社に渡せばよい。翌日に執筆している第15回以降は、新しい構想にもとづく初集の原稿である*[12]。

6　謎の解明に挑んだ人々

劉鉄雲「老残遊記」の執筆過程について謎がある。その謎の存在に気づいた複数の研究者がいた。振り返れば、それが表面にあらわれてくるのは、30年代からだった。

時間の順序にしたがえば、謎がでてくる間接的なきっかけは『老残遊記二集』６回（上海・良友図書印刷公司1935.3.1）の刊行である。

二集の再公開は、大きな反響をよんだ。

二集を刊行した良友図書公司が刊行している雑誌が『新小説』だ（梁啓超の『新小説』と同名だが、なんの関係もない。良友は『人間世』も刊行していた)。主編が鄭君平

で、その知り合いのひとりに趙景深がいた。「老残遊記」についての文章を書くように求められた趙景深が発表したのが、「老残遊記及其二集」(『新小説』第２巻第１期通号第６期1935.7.15／『小説閑話』上海・北新書局1937.1）である。

趙景深によって提出された問題は、本文の異同についてだった。

趙景深は、彼の父親が持ち出した疑問を示す。すなわち、『繍像小説』に掲載された「老残遊記」の本文は、流布している単行本の第９回から第11回までを対照すると異なっている。北の義和団運動と南の革命運動を批判する「北拳南革」関連部分が、『繍像小説』には登載されていないことに注目した。もうひとつの疑問はこうだ。「跋」を書いている劉鉄孫によれば、初集20回と二集６回は『天津日日新聞』紙上に発表されたというが、それでは初集も同時に『繍像小説』に発表されたのだろうか。阿英氏は『繍像小説』を所蔵していると聞くから、彼に答えてもらいたい、うんぬん。

30年代において、『繍像小説』72期の全揃いを所蔵する人は多くなかったことがわかる。趙景深自身の手元にもない。当時から清末小説資料の収集家としても阿英は有名だったらしい。わざわざ阿英を指名した理由だろう。この段階で判明しているのは、本文について雑誌初出とのちの単行本に違いがあるというだけだ。発表の時間がどうなっているかまでは、考慮されてはいない。

初集原稿の第11回が没書になった事実を公表したのは、前述の劉大紳「関於老残遊記」(『文苑』第１輯1939）だ。趙景深の文章は、それ以前に書かれた。彼が没書事件を知らないのも当然だろう。

阿英は、趙景深の問いに答えた。筆名の魏如晦を使用する「老残遊記校勘記」(『文林月刊』第６期1941.11／『小説四談』上海古籍出版社1981.12）である。阿英は、『繍像小説』と亜東図書館本を比較対照し、第11回が原本（『繍像小説』）にないこと、これはのちに加筆したものに違いない、と説明した。加筆ではなく没書を復元したのが事実だ。しかし、阿英は知らなかった。彼が本文を校勘した時、劉大紳の文章は読んでいなかったらしい。

公表の時間は前後するが、阿英は「老残遊記」関係の論文をもうひとつ発表する。前出の魏如晦（阿英)「関於老残遊記二題」(『宇宙風乙刊』第31期1940.10.16初出未見／『小説二談』）である。こちらの阿英は、劉大紳の文章をすでに読んでいる。

だから、没書事件があったことを知って、そう解説する。しかも、『天津日日新聞』の初集について「その掲載時期は、商務（印書館）が掲載を中断した翌年、すなわち甲辰（一九〇四年）である」と根拠もなく断定したのである。「老残遊記」執筆経過についての誤解は、阿英のこの断言によって発生したことはすでに述べた。

以上は、「老残遊記」の原稿執筆過程と没書事件がおもな論点だった。問題は、それだけではない。

李伯元「文明小史」が、劉鉄雲「老残遊記」から文章を無断引用した。盗用問題が出現する。その事実があることに気づいた最初の人物は、これも阿英だ。彼の書いた「(文明小史）叙引」(北京・通俗文藝出版社『文明小史』1955.7）が証拠である。ただし、盗用というあからさまなことばは使用していない*13。阿英は、どう説明したか。李伯元は劉鉄雲と同じく「北拳南革」に反対し、「文明小史」第59回では1,500字を用いて革命党、義和団を罵った、と書く。この解説を見ただけでは、盗用の事実は浮かんでこない。ふたりの考え方が一致していたというだけ。

だが、阿英は「文明小史」の本文に対してある奇妙な処理をほどこした。「老残遊記」と同内容だという1,500字を「文明小史」から削除したのである。「叙引」にもわざわざ注をつけて「この1,500字は、本書ではすでに削除した」(4頁)と書く。李伯元と劉鉄雲がたんに同じ見解に立っていた、というだけならばその共通する部分を削除する必要はない。それどころか、両者を比較検討するためには該当個所を削除してはならないのだ。阿英は、盗用を知りながら明言はせず、ほのめかした、と私は理解する。

阿英の示唆を敏感に察知していた人がいた。魏紹昌である。彼は、みたび劉厚沢らには知らせることなく文章を公表した。「李伯元与劉鉄雲的一段文字案」(『光明日報』1961.3.25／魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12）である*14。

魏紹昌は、劉厚沢らに自分が論文を書いたことを知らせていない。『滬榕書札』には魏紹昌の該論文に関する言及はないのだ。その根拠としていいだろう。当然ながら、『資料』にも盗用事件についての指摘、あるいは注釈も存在しない。当時、劉厚沢が力を入れて継続していたのは、劉大紳論文について注釈をつける作業だった。もし、魏紹昌から盗用問題が新しい知見として相談があれば、それ

を取り入れる時間的余裕はあったはずだ。

魏紹昌論文は、この盗用事件を指摘して有名である。ただし、解決できない次の３点があるといって放りだした。

１．李伯元は『繍像小説』の主編であったが、みずからが没書にした劉鉄雲の原稿をなぜ自分でもういちど使用したのか。
２．劉鉄雲は、盗用についてなぜ抗議をしなかったのか。
３．「文明小史」と「老残遊記」は、当時すでに流行していたが、読者はこの盗用になぜ気がつかなかったのか。

この疑問３点ともに60年代の研究水準、あるいは魏紹昌の認識を前提にしている。のちに積み重ねられた研究を考慮に入れると、上の疑問は３点ともに成立しない。これについて私はすでに文章を書いた*15。

結論だけを簡単にのべる。

１――李伯元死去後も『繍像小説』は刊行されていた。盗用した「文明小史」第59回は、李伯元の死後に書かれた。書いたのは欧陽鉅源以外にはいない。著者の問題が別に発生する。
２――劉鉄雲は、自分の文章が「文明小史」に盗用された事実を知らなかった。だから、あらためて抗議をすることはない。没書の事情を明らかにした劉大紳も、盗用については説明していない。知らなかったと思われる。
３――「老残遊記」は広く読まれていた。だが、一方の「文明小史」はその存在が長く忘れ去られていた。比較対照できなければ、問題があることにも気づかない。

『滬榕書札』には、「老残遊記」についての謎の発生とその生成過程が記録されている。中国では、残念ながらその謎を解明することができなかった。その主な原因は、研究者たちが先行論文である阿英の記述に疑問をもたず、その間違ったままを受け入れたからである。

それ以上に興味深いのは、小さな疑問の背後に大きな問題が控えていたことだ。

「老残遊記」の執筆過程にのみ問題は限定される、と最初は思われた。だが、「文明小史」の盗用問題がある。『繍像小説』の主編者は本当に李伯元か、という疑問も提出された。論争がおこり、編者問題を解決する根拠として盗用事件が持ち出されてくる。さらに、それらの作品を掲載した『繍像小説』そのものにも疑いが生じた。その結果、発行が遅延していた事実が明らかとなる。この発行遅延問題は、盗用にも密接にかかわっているのだ。

問題は、当初は予想もつかなかったほど複雑なのである。

【注】

1）再版（1982.4）に二集第７-９回を収録する。説明して、劉蕙孫と劉厚沢が『天津日日新聞』から筆写した副本にもとづく、と。『資料』に収録したものにほかならない。

2）これらの刊行物が実現するのは「文化大革命」終結後のことだ。詩集については、『鉄雲詩存』(済南・斉魯書社1980.12)、劉徳威編『余瀛集――劉成忠、劉鶚及其後人詩存』(香港・天馬図書有限公司2001.1）が刊行された。日記は、劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』(成都・四川人民出版社1985.7）に収録。それらの集大成が劉徳隆整理『劉鶚集』上下冊（長春・吉林文史出版社2007.12）である。

3）魏紹昌と中華書局上海編輯所を連記したのは奥付（該書では前付）にそうあるからだ。だが、扉は魏紹昌だけの名前になっている。それで思い出すことがある。魏紹昌に会ったとき彼から直接の指摘があった。北京・中華書局ではない、上海だ、というのだ。私は、該書の記載にもとづいて出版が北京・中華書局だと記述した。私は彼に該当の個所を指さして見せた。そうとしか書きようがないのだが、魏紹昌の認識は違っていたようだ。のちの魏紹昌「魏紹昌自編書目提要」(『文教資料』1997年第5期（総第233期）1997（月日不記）31頁）においても「老残遊記資料　中華書局上海編輯所1962年４月出版」と自分で書いている。北京の中華書局は名目上のことにすぎない。魏の意識ではそういうことだろう。編集も印刷も上海で行なったのが事実であるらしい。

4）署名は「編者」とだけあって名前は明示されてはいない。しかし、扉も奥付も編者は魏紹昌だ。この前言を書いた「編者」は魏となる。

5）魏紹昌が私に直接話したことがある。『資料』の劉厚沢注釈は、厚沢の名前ではあるが実質は魏自身が書いたものだ、と。私はこのことを劉家の親族に確かめた。その人は言下に否定

した。劉厚沢の名前があるのだから厚沢が書いたのだ。その人はそう言いながらとても不愉快そうだったのをおぼえている。本稿注11を参照のこと。

6）劉蕙孫の年譜長編は、後日といっても約20年後に別の形で刊行された。劉蕙孫『劉鉄雲年譜長編』(済南・斉魯書社1982.8）がそれだ。

7）署名は紳。『文苑』第１輯1939.4.15。のち『宇宙風乙刊』第20-24期1940.1.15-5.1に再掲載。また、魏紹昌編『老残遊記資料』北京・中華書局1962.4、劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』などに収録される。

8）劉厚沢「劉鶚与《老残遊記》」は『劉鶚及老残遊記資料』に収録された。

9）劉厚沢は、魏紹昌に頼まれて『文匯報』掲載論文の切り抜きを劉蕙孫に送った。３月20日付だ【043-61-04】106頁。

10）劉厚沢が『資料』においてほどこした注釈５（93頁)、注釈11（95頁）に阿英「老残遊記版本考」をかかげる。

11）謎が日本で解明された後、魏紹昌は文章を書いた。「談談《老残遊記》的写作刊印情況」(『光明日報』1983.5.10／『牡丹伝奇』福建人民出版社1984.8／『晩清四大小説家』台湾・商務印書館1993.7）では、つぎのように説明している。「(劉鉄雲）日記には初編あるいは二編を明記していなかったため、当初劉厚沢は日記にある二巻は当然二編の巻数だと誤った」38頁。当時、劉鉄雲日記の謎を指摘したのは、ほかならぬ魏紹昌だった。誤った人々には当事者であった魏も含まれる。責任を劉厚沢に押しつけて自分は無関係を装うのはいかがなものかと思う。本稿注５に書いたように、魏紹昌は『資料』の劉厚沢注は自分が書いたと私に告げた。誤解をしたのは、あきらかに魏自身だった。当事者として何か書きようがあったのではなかろうか。魏は、該文で阿英の断定についても説明する。「阿英の文章に甲辰（一九〇四年）に刊行されたとあるが、彼が切り抜き本によって下した大まかな判断にすぎないことを私（魏紹昌）は知っている」。あとからなら、なんとでもいうことができる。

　また、魏紹昌「良友版《老残遊記》二集僅刊六回的内幕」(『晩清四大小説家』台湾・商務印書館1993.7）がある。

12）樽本「天津日日新聞版『老残遊記二集』について」『野草』第18号1976.4.30。のち『清末小説閑談』1983所収。『野草』掲載論文は、草平「《老残遊記》(《天津日日新聞》版）初集、二集刊行考」(『文学研究動態』1982年第10期）として紹介された。のち劉徳隆・朱禧・劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』所収。また、TIMOTHY C. WONG（黄宗泰）“NOTES ON THE TEXTUAL HISTORY OF THE LAO TS'AN YU-CHI” (“T'UNG PAO（通報)” VOL.69 1-3合併号, 1983）がある。さらに、劉徳隆、朱禧、劉徳平「《老残遊記》写作発表年代管見」、「《老残遊記》版本簡介」がいずれも『劉鶚小伝』(天津人民出版社1987.8）に収録されている。

13）李伯元が「借りること borrowing」について何も言っていない、と指摘する次の論文がある。DOUGLAS LANCASHIRE “A NOTE ON CHAPTER 59 OF THE WEN-MING HSIAO-SHIH (A BRIEF HISTORY OF ENLIGHTMENT)”, *AUSTRINA*, ORIENTAL SOCIETY OF AUSTRALIA, 1982. p.134

14）魏紹昌の指摘した箇所以外に無断借用があることを明らかにしたのは太田辰夫だ。「「文明小史」をめぐって」『神戸外大論叢』第12巻第３号1961.8.30

【補記】「老残遊記」から「文明小史」が無断借用した箇所を以下に示す（黄色マーカー部分）。

「老残遊記」第11回（原稿第12回）　『繍像小説』第16期　刊年不記（推定光緒三十年1904四月刊行）

這叫怒髮衝冠的魚翅。這叫百折不回的海参。這叫年高有徳的雞。這叫酒色過度的鴨子。這叫恃強拒捕的肘子。這叫臣心如水的湯。

「文明小史」第49回　『繍像小説』第45期　刊年不記（推定光緒三十一年1905十一月）

見満満的海参魚翅。上面都罩着一層油。還有些什麼恃強拒捕的肘子。寿終正寝的魚。臣心如水的湯。

15）樽本「「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く」『清末小説から』第75号2004.10.1。本書所収

『繍像小説』問題

『清末小説から』第96号（2010.1.1）、第99号（2010.10.1）に掲載。汪家熔が『繍像小説』主編問題をまた蒸し返している。『中国出版通史』７清代巻（下）（北京・中国書籍出版社2008.12）において主編は李伯元ではないという自説を展開する。すでに問題を解決する資料が提出されているにもかかわらずだ。版元である商務印書館が新聞広告で李伯元を雑誌の主編に招いたと宣伝した。その動かない証拠を汪家熔は否定するのである。研究の基本をないがしろにしていると言わざるをえない。『繍像小説』問題とは、編者、発行遅延、さらに「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件である。主編者が李伯元であったときに、「老残遊記」の没書事件が発生した。ところが、その没書になったはずの内容が「文明小史」に盗用されている。では、盗用したのは李伯元だったのか。これに『繍像小説』の発行遅延という事実がからむので問題が複雑になる。事実は、李伯元の死去後に問題の「文明小史」第59回が発表されているのだった。死者が原稿を書くことはできない。李伯元にかわる人物がいたはずだ。それは欧陽鉅源であるというのが従来からの私の主張である。盗用事件について、もういちどその経過を整理しなおした。

汪家熔『中国出版通史』７清代巻（下）（北京・中国書籍出版社2008.12）が刊行された。清末時期を対象とするから『繍像小説』についても説明がある。

いうまでもなく、『繍像小説』は上海の商務印書館が刊行した小説専門雑誌として有名だ。発行順でいえば梁啓超が日本横浜で創刊した『新小説』につぐ。上海における小説専門雑誌流行のさきがけとなった。

『繍像小説』には、複数の問題がある。ここでは、そのなかのふたつの事柄を取り上げたい。長年にわたって論争が続いてきた課題でもある。

汪家熔『中国出版通史』７清代巻（下）

ひとつは、『繍像小説』の発行が遅延していたという事実だ。

主編李伯元の死去と同時に該誌は停刊した。光緒三十二（1906）年三月である。これが1980年代までの定説であった。しかし、発行情況を新聞雑誌の広告で追跡していくと徐々に遅れていることが判明する。光緒三十二年三月ではなく同年年末に停刊した。新暦に換算すれば1907年１月下旬から２月上旬になる。これが私の結論だ。汪家熔は、該通史においてこちらの発行遅延説には同意している。彼は、「在1907年２月停刊」、あるいは「於1907年１月停刊」（343頁）と書く。記述がブレるのはしかたがない。創刊号に年月が記載されているのとは異なる。刊行途中で雑誌本体に刊年を明示しなくなった。おおよその停刊期日がわかるだけ。汪家熔の説明は、結局のところ私のいう光緒三十二年年末と一致している。

発行遅延について論争の過程は省略して結論だけをのべると以上のようになる。

もうひとつは、該誌の主編は李伯元であるか否かという問題だ。『繍像小説』の編者問題ともいう。

1980年代に汪家熔が最初に異議をとなえた。主編は李伯元である、というそれまでの定説を否定した。彼が勤務していた商務印書館の内部資料には証拠となる

文献が存在しないらしい。主編は李伯元ではないという汪家熔の主張は、状況証拠にもとづいている。李が『繍像小説』を編集したとは誰も言ってはいない、と。李伯元の友人関係者による証言を根拠とする。間接的だから状況証拠だ。

それに対して、２件の資料が提出された。

上海郵便司の記録（1905）が１件ある。主宰者が李伯元だと登記されている。

当時、一般に知られていたのは南亭、あるいは南亭亭長という筆名でしかなかった。『繍像小説』にも李伯元の名前がない（だから論争になっている）。にもかかわらず、記録には「李伯元」の名前がある。南亭が李伯元だと知っているのは商務印書館内部の人間に違いない。そういう資料があること自体に意味がある。基本的に信用できる資料だと私は考える。

汪家熔は、その記録が実在していることを自分で確認したうえで、内容が信用できないと判定した（『出版史料』1990年第４期）。記述が正確ではない、と文句をつけるだけ。反論になっていない。

資料の２件目は、決定的な証拠である。

商務印書館は、新聞広告を重視していた。自社の刊行物を宣伝するため大量の広告を複数の新聞に掲載するのだ。1907年の新聞広告である。広告のなかのひとつに「商務印書館／南亭亭長／繍像小説」と大きく表示するものがある。「本館前刊繍像小説特延南亭亭長李君伯元総司編著」と説明する。南亭亭長李伯元を特に招いて編著のすべてをまかせた、という。『繍像小説』は、商務印書館の刊行物ではあるが、その編集体制は独立したかたちであったことがわかる。李伯元にまかせた、というのだから李伯元は該誌の主編であった。広告主は、『繍像小説』の版元である商務印書館にほかならない。よく見てほしい。これを「動かぬ証拠」という。

だが、汪家熔は、そうは考えない。今回、該書でなんと説明しているか。

「しかし、それまで商務印書館が『繍像小説』の販売に天地をおおうほどに行なった広告すべてに、李［伯元］をあげたものはずっとなかった。これはただの薄弱な証拠にすぎない［但以往所有商務印書館鋪天蓋地的推銷《繍像小説》的広告従来没有提過李，這只是一則孤証］」（344頁）

「薄弱な証拠」だと強調するため、汪家熔は、続けてつぎのように書く。

「李伯元が1906年３月*1に病気で亡くなった19ヵ月後の広告であり、掲載した翌日には撤回している（当時『申報』の第１面を見ると、商務印書館が広告を掲載すれば同一の広告を数日連続して出していた）［在李伯元1906年３月病逝19個月後発的広告，并且登了一天第二天就撤了（従当時《申報》第一版看，商務印書館刊登広告都是接連幾天刊発同一広告）］」（同上）というのだ。

汪家熔の書き方からすると、新聞に１回のみ掲載された広告だということになる。だが、これは事実ではない。

問題の広告は、少なくとも以下の新聞に複数回掲載された。1907年『神州日報』（8.17）*2、『中外日報』（10.9）、『時報』（10.9、12）など。判明しているだけでこれだけの広告がある。

汪家熔は、『申報』を例にあげる。しかし、これは不適切である。なぜなら、上の商務印書館自社広告が掲載されたのは『申報』ではないからだ。立論の根拠にはならない。

くりかえす。李伯元が『繍像小説』の主編であることを明示した決定的で動かない証拠がある。すなわち、商務印書館が出稿した新聞広告だ。しかし、汪家熔はその直接証拠を否認し、間接的な状況証拠にしがみつく。彼は資料についての判断を間違っているといわざるをえない。

汪家熔は、別の箇所で次のように説明する。

「『繍像小説』ははじめから李宝嘉と彼の学生欧陽鉅源の天下だった［《繍像小説》一開始就是李宝嘉和他学生欧陽鉅源的天下］」（341頁）

雑誌に小説を掲載するとき、その実際の担い手、書き手は職業作家だという文脈で出てくる。汪家熔は李伯元（宝嘉）主編説を否定している。そうすると、上の説明とはどうつながるのか。汪家熔が特定することのできない姓名不明の人物が『繍像小説』の主編をつとめており、それとは別に主要な書き手が存在した。作家たちは李伯元と欧陽鉅源だった、と言いたいのだろうか。汪家熔は、『繍像小説』の編集部と主要作家としての李伯元たちを切り離しているようにも読める。それで李伯元らの「天下」だというのも腑に落ちない。

私は先に、『繍像小説』は商務印書館の刊行物でありながら、編集体制は独立していたと書いた。それと、汪家熔の説明は似ているようで内容は異なる。汪家

熔がいうのは、『繍像小説』の司令部としての編集部が商務印書館のなかにあって、書き手はそれとは関係のない職業作家の李伯元たちだったというだけのこと。発行と編集の主体は商務印書館にあると考えているのだろう。念のためだが、書き添える。私が商務印書館の広告から読み取るのは、商務印書館は『繍像小説』の発行元ではあるが、編集の責任は李伯元にあるということだ。それなら、「天下」だったという表現に一致する。発行と編集は別である。

発行遅延を視野に入れると『繍像小説』の編者問題は少し複雑になる。刊行途中で李伯元が死去する。単純であるわけがない。

『繍像小説』創刊から李伯元が主編をつとめていた。版元商務印書館の自社広告は、そのことを宣伝している。しかし、彼の死後も『繍像小説』は刊行され続けている。ならば、臨時に（正式か臨時かの区別はつかないが）主編を引き継いだ人物がいるはずだ。李の協力者であった欧陽鉅源をおいて別人はいない。第55期から終刊の第72期まで。時間でいえば、1906年六月から同年年末までの約半年間である。

『繍像小説』の編者問題と切り離せないものとして盗用問題がある。汪家熔と論争をはじめた最初から私はこれを提起している。

いい機会だ。問題を整理しなおして説明する。

まず、『繍像小説』の主編は李伯元だった事実を前提にする。問題を複雑にしているのは、詳細不明の部分があり、しかも『繍像小説』の刊行時期という肝心の基本部分が動いたからだ。すなわち、上記のように刊行が遅延していた。それに従い私の考えも最初のものから変化している。上の部分でいえば、主編は李伯元から欧陽鉅源に引き継がれたという箇所だ。事実を押さえながら解説する。

何が問題になっているのか。基本を示す。

さかのぼれば1903年から1906年頃までの事である。

劉鉄雲が単行本で出した『老残遊記』第11回と『繍像小説』に掲載された南亭亭長「文明小史」第59回に内容が同じ部分がある。当時の中国の社会状況を書き込み、北の義和団、南の革命（これを「北拳南革」という）を批判する箇所だ。

別々の２作品に、同じ内容の同じ文章がある。偶然に一致したものとは考えられない。劉鉄雲か、あるいは南亭亭長が、文章を盗用したことになる。これが、

「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題である（問題点を絞るために、ほかの盗用箇所は今扱わない）。

ただし、この盗用問題は、長い間研究者には認識されなかった。問題があることさえ知られていなかった。それが表面化したのは、作品の刊行から約60年後、1960年代のことだ。

時間を追って経過を説明する。

①「老残遊記」は第13回までが『繍像小説』第9-18期（1903年八月初一日-刊年不記［1903年十二月十五日だと考えられていた。誤り］）に連載され、中断している。

「老残遊記」第11回には「北拳南革」など出てこない。連載中断の理由も、その時は明らかにはされていない。当時の連載小説で中断したものはいくらでもある。「老残遊記」が特別な例でもなかった。

②「文明小史」第59回は『繍像小説』第55期（刊年不記［1905年七月初一日だと考えられていた。誤り］）に掲載された。

こちらの第59回には「北拳南革」が出てくる。

ここで読者は奇妙に感じるはずだ。初出の「老残遊記」第11回に出てこない「北拳南革」が、あとから掲載された「文明小史」に出現する。ならば、盗用問題など発生する余地はない。確かに、「老残遊記」が雑誌で連載を中断したままであったならば、何も問題にならなかったかもしれない。だが、「老残遊記」は、後に別の場所で追加執筆され初集20回が『天津日日新聞』に連載されたあと単行本になって出た。重版をくり返し広く読まれた。魯迅が清末の４大小説のなかに挙げたことも普及する要因となったであろう。

ある人が、「老残遊記」を初出雑誌と単行本で読み比べた。その感覚鋭い読者は、疑問をもつ。単行本にある第11回は、雑誌初出には存在していない。ならば、「老残遊記」といっても２種類あるのか。そう、「北拳南革」部分の存在しない雑誌初出と「北拳南革」部分が書き込まれた後の版本の２種類がある。

③「劉鉄雲日記」の乙巳（1905）十月初三日には、旅先瀋陽の旅館で「老残遊記」第11回（巻11）を書いたとある。翌日には第15回を執筆する（注：ここの第11回は、以前は「老残遊記」二集のものだとされていた。事実は初集だから、今ここに配置する）。

「文明小史」第59回は、『繍像小説』第55期に掲載された。その第55期の刊行

は、1905年七月初一日だと考えられていた（注：上述のように発行は遅延していたのが事実だ。しかし、研究の経過をたどるためにこのままにする）。時間の推移を表面からだけたどれば、ここでも「老残遊記」第11回執筆の方が「文明小史」第59回よりも遅い。問題の「北拳南革」部分も、表面だけ見れば、この時、劉鉄雲は自分の原稿に取り込んだことになる。

以上の時間的経過を見る限り、「北拳南革」についていうと次のようになる。

「文明小史」が先で「老残遊記」は後に発表された。ならば、劉鉄雲が「文明小史」から「北拳南革」部分を自分の「老残遊記」に盗用した。（補記：汪家熔はこの通りのことを主張したことがある。後に述べるように誤り）

気づいた人もいるはずだ。「劉鉄雲日記」に見える「老残遊記」第11回の翌日は第15回を執筆している。なぜ第12-14回をとばしたのか。また、劉鉄雲が「文明小史」から「北拳南革」をもし盗用したのならば、第11回にわざわざ滑り込ませる理由はなんだろう。いくつかの話題によって成立している「老残遊記」だから、のちに加筆した部分に盛り込めばいいだけのことだ。なぜ第11回にさかのぼらせるのか。

しかし、細かい箇所だ。注意を引かなかった。というよりも、③の日記部分が公表されたのは1960年代だ。くわえて、そこに書かれた第11回原稿は二集だと誤解されていた。問題になどなりはしない。

振り返れば、大きな転換点のひとつは、劉大紳「関於老残遊記」（『文苑』第１輯 1939.4.15）の公表だった。うわべの現象を追うだけでは、「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係は理解できないことが判明する。

劉鉄雲の息子大紳が、「老残遊記」の雑誌連載が中断した理由を文章にして暴露した。その事情は、当事者でなければ知ることのできない種類のものだ。

④劉鉄雲が連載を中断した理由とは、「老残遊記」第11回原稿が『繍像小説』の編者によって没書にされたからだ。言うまでもないと思うが、第11回原稿には「北拳南革」が盛り込まれている。

原稿を没書にできる権限を持つのは『繍像小説』の主編である。主編といえば、李伯元だ。李伯元が劉鉄雲の原稿をボツにした。

この没書の事実④と上の③に示した「劉鉄雲日記」の原稿第11回執筆が結びつ

く。『天津日日新聞』に連載をするために没書部分を復元する必要が生じた。元の原稿は『繍像小説』の編集者に届けていた。劉鉄雲は、手元に残していた下書き草稿にもとづいて第11回原稿を復元したのである。この「復元」が重要だ。

没書になったとは、それまで関係者以外は誰も知らなかった。原稿が握りつぶされたことが、盗用問題に対する見方を今までとは違う方向に導く。

「老残遊記」第11回未発表原稿の没書という事実がある。連載中断の原因として理解できる。また、第11回下書き草稿の一部分が存在していることも根拠になる。③の原稿復元とも一致する。『繍像小説』主編の李伯元によって没書が行なわれたことを否定することはできない。

最初の「老残遊記」原稿（未発表第11回を含む）が先行して存在している。これが新しく判明した事だ。「文明小史」第59回が書かれるのは、「老残遊記」原稿よりも後である。「文明小史」が「老残遊記」未発表原稿から盗用した。それができるのは『繍像小説』の主編である。

加えて、上述のとおり『繍像小説』の発行が遅延していた事実が明らかになった。もうひとつの転換点だ。

『繍像小説』の停刊についてくりかえすと、以前の定説は、こうだ。光緒三十二（1906）年三月、李伯元の死去と同時に『繍像小説』は停刊した。しかし、それが否定され、同年年末にまで刊行がのびていた。必然的に、主編である李伯元の死去がからんでくる。『繍像小説』の創刊から停刊まで主編は李伯元だということができなくなった。

⑤『繍像小説』の発行遅延を視野に入れて考えなければならない。劉鉄雲の「老残遊記」原稿はその最後部分が遅くとも1904年四月までには李伯元のいる編集部に届けられている。

⑥「文明小史」第59回が掲載された『繍像小説』第55期の刊行は、定説であった1905年七月初一日ではない。それよりも約一年も遅い1906年六月頃である（補記：新出資料により1906年閏四月頃になる）。

⑤と⑥をあわせる。「老残遊記」第11回未発表原稿は、「文明小史」第59回よりもはるかに早く書かれていた。しかも、「文明小史」第59回を掲載した『繍像小説』第55期の刊行は、李伯元の死去1906年三月より後のことだ。先行する「老

残遊記」原稿から「文明小史」が盗用したのは明らかである。その逆はありえない。

李伯元逝去の後に書かれた「文明小史」第59回は、それ以前からの南亭亭長名義を維持してはいる。だが、ここに見える南亭亭長の中身は李伯元ではない。考えられるのは、欧陽鉅源である。これで、没書と盗用の謎を解くことができる。以前は、李伯元がボツにしたものをふたたび盗用した理由を説明することができなかった。没書にしたのは南亭亭長（李伯元）であり、盗用したのが南亭亭長（欧陽鉅源）である。署名は同じだが別の人物だ。ゆえに、没書と盗用は成立する。

清末時期、『繍像小説』編集部が集まってくる原稿をどのように管理していたのかはわからない。使用済みの原稿を著者に返却したとも聞かない。そのまま机の中にでも収めたか。あるいは随時に破棄したか。自然に散逸したものもあっただろう。また、『繍像小説』編集部といっても、商務印書館内部に別の部屋が割り当てられていたのかどうかも不明だ。

しかし、少なくとも劉鉄雲の没原稿は、編集部に保管されていた。もしかりに、南亭亭長が『繍像小説』の編集部とは無関係の単なる寄稿作家だとしたら、没原稿から盗用できるだろうか。商務印書館に勤める別の編集者が、没原稿を外部の作家でしかない南亭亭長にわざわざ見せたとでもいうのか。

劉鉄雲と南亭亭長の双方からこの盗用問題を見てみよう。

劉鉄雲が盗用する可能性はあるか。

劉鉄雲が未発表原稿第11回を復元したのが1905年十月だ。南亭亭長「文明小史」第59回の『繍像小説』掲載は上述のように1906年六月頃になる。劉鉄雲からすれば、後から公表される文章から盗用することは不可能だ。自分の原稿だったからこそ第11回原稿を復元する必要があった。

南亭亭長が盗用する可能性はあるか。

どう考えても、「文明小史」の方が「老残遊記」原稿よりも後に書かれた。「文明小史」第59回を見ればわかる。南亭亭長が盗用したに違いない。

そこで新しい問題として浮かび上がるのが、『繍像小説』のふたり目（あるいは臨時というべきか）の主編と南亭亭長の正体である。

くり返しになる。李伯元の死後も『繍像小説』は刊行されつづけた。発行元は

商務印書館である。主編が死去すれば、あるいは死去しなくても別人に変更することは自由だ。雑誌が継続発行されているからには、李伯元にかわる主編がいたはずだ。別の人を探すまでもない。李伯元の協力者だった欧陽鉅源がそこにいる。当面は彼が引き継いだとしか考えられない。欧陽鉅源は、主編李伯元によって没書にされた「老残遊記」第11回原稿が『繍像小説』編集部にあることを知っている。欧陽は、南亭亭長名の「文明小史」を継続連載するために原稿を書く必要があった。手元にある「老残遊記」の原稿を見てそれを「文明小史」に取り入れた。可能性というよりも、実際に他人の未発表原稿から盗用した。

別の可能性を考える。「老残遊記」は『天津日日新聞』に連載後、単行本となった。欧陽鉅源は、その『天津日日新聞』、あるいは単行本を見てそうしたのか。

これについて、私は否定的だ。上海にいる欧陽が天津で発行される『天津日日新聞』を読んでいたとは考えにくい。だいいち『天津日日新聞』に「老残遊記」が連載されていたことなど彼は知らなかっただろう。手元にある劉鉄雲の原稿から自在に使用（盗用）できたのは、欧陽鉅源が『繍像小説』の主編であったからこそだ。

結論である。「老残遊記」第11回原稿を没書にした『繍像小説』主編は、李伯元である。李伯元の死後に該誌の臨時主編になったのは欧陽鉅源だ。李伯元が没にした原稿を欧陽鉅源が盗用した。「文明小史」の著者南亭亭長という筆名は、李と欧陽の共同筆名である。

『繍像小説』は、李伯元を失った時、欧陽鉅源がかろうじてあとを継承し、第72期までを刊行した。商務印書館は、新聞広告で誌面刷新を予告してもいる。それを見れば、なんとか刊行を続行しようと考えていたことがわかる。しかし、その計画は実行されなかった。第72期を刊行したままそれで打ち切り終刊となった。

【注】

1）李伯元の死去を「1906年３月」と表記して、あたかも新暦のように読める。ここの「３月」は旧暦だ。旧暦新暦混用の例である。正確な月日は、三月十四日（4.7）。

2）文迎霞論文による。文迎霞「関於《繍像小説》的刊行、停刊和編者」（『華東師範大学学報

（哲学社会科学版）』第38巻第３期2006.5.15）。なお、次も参照のこと。

樽本「『繍像小説』研究の現在」（『清末小説から』第89号2008.4.1）。本書所収。

樽本「『繍像小説』編者問題の結末」『清末小説叢考』所収

『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』序

渡辺浩司『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』(清末小説研究会2010.5.1　清末小説研究資料叢書12）に収録。渡辺浩司氏のご指摘、ご教示により『清末民初小説目録Ｘ』(2015）をウェブで公開することができた。感謝。

清朝末期からの中国文芸界を特徴づけるもののひとつは、定期刊行物の出現である。小説を掲載する媒体としての新聞であり雑誌であった。特に小説専門雑誌のあいつぐ創刊は空前といってよい。創作作品、翻訳作品を中心にそのほかを集めて定期的に刊行する。この雑誌という形態は新しいものだ。しかも、中国最初の近代的小説雑誌は、梁啓超が日本横浜ではじめた。いうまでもなく『新小説』である。それを継いだのが上海の『繍像小説』であり『月月小説』『遊戯世界』『小説林』『小説時報』『小説月報』などの雑誌になる。中華民国初期にかけても雑誌発行の隆盛はつづく。

雑誌では、長編小説ならば連載される。読者の好評を得ることができれば、それをまとめて単行本で刊行する。雑誌連載から単行本へ、という方向が成立したのもこの清末民初という時期だった。

逆にいえば、新聞雑誌連載だけで終了した作品の方が多数にのぼる。単行本にならない小説群の存在は、現在から見れば当たり前の現象にすぎない。だが、小説研究をおこなうばあい、単行本に注目していればよいという状況に変化が生じたということだ。新聞雑誌にまで研究の対象を拡げる必要がでてくる。

阿英は、小説専門雑誌の出現は清末文芸界の特徴のひとつだとはっきり認識し

て文章を書いていた。彼の著作である『晩清小説史』(1937）は、はじめの部分で雑誌群の創刊に言及する。『晩清文藝報刊述略』(1958）の著作がある。さらに、阿英「晩清小説目」(『晩清戯曲小説目』1954）にも雑誌から作品を収録している。さらに、創作と翻訳に区分けする。翻訳小説に注目しているのも阿英の見識の高さを表わしている。彼の目録が研究界では長年にわたって基礎資料として利用されてきた理由でもある。

阿英の著作、目録の題名をみてわかるとおり、時期を清末に限っている。当時はそこに注目したのは画期的なことだった。高く評価されるべき点だ。ただし、次の民国初期と連なっている側面が無視され、誰もそのことを疑問に思わない。各種文学史では清末を古典の末尾に置く、あるいは五四文学の直前に存在しただけの添え物風に扱う。清末と民初が連続しているという視点が成立しにくかった。

以上のふたつを視野に置き、小説目録を編集する必要があった。雑誌を主要な対象にし、単行本も当然ながら収録する。それでこそ時代の特徴を生かした基礎資料となるはずだ。そう考えて作業をはじめたが、すぐに壁にぶつかる。中国で繁栄した雑誌だ。それに掲載された小説をひとつひとつ目録に収録しようという。

編集方針は明確だ。しかし、日本で実行するのは、実際には常識から考えて困難である。雑誌のいくつかは日本の図書館にあるにしても、大多数は目にすることができない。新聞は、まず見ることが不可能だ。かといって、いままでのように阿英の晩清小説目だけに依拠するわけにはいかない。しかたがない。必要に迫られて実行したのは、次善の方法だ。すでに刊行されている目録類からも採取することにした。間違いが生じるだろう。しかし、ないよりもまし、というのが当面の方針だった。実物に到達する手がかりにはなるはずだ。その役に立てばよい。小説目録はあくまでも工具だ。最初から完璧を求めては前進できない。

翻訳作品には、わかる限り原作について注記するように努力した。予想よりも収録件数が多くなった。その結果が、『清末民初小説目録』(1988）である。

その後、増補と訂正を続ける。２次資料を利用したからそれらの文献名も情報として書き加える。これが追加作業のひとつだ。たどっていけばどの文献に記載があるかわかるようにした。実物で確認できない作品が多い。典拠を明らかにすることは自分にとっても必要なのだ。ひとりでできることには限りがある。そこ

に援助の手をさしのべてくれたのが渡辺浩司氏であった。

渡辺氏からもらった最初のご指摘は手書きの原稿だった記憶がある。のちにワープロ原稿になり電子メールに変わった。通信の手段は変化した。だが、変わらないのは、根拠となる文献を添えての具体的な訂正、不足のご指摘である。私が渡辺氏による訂正を信頼する理由だ。目録の増補訂正作業にとって大いに役立っていることはいうまでもない。感謝するばかりだ。

それらをできるだけ明記しながら、『新編清末民初小説目録』(1997）と『新編増補清末民初小説目録』(済南・斉魯書社2002）ができた。後者は中国で発行されたから、海外の研究者からもご指摘をいただくようになった。

渡辺氏からのご教示は、現在も続いている。それは、清末民初小説についてはまだ探求の余地があることを示している。終わりがないのだ。

探索の余地というにはあまりの広さにどうしようもない空白があることに気づく。翻訳小説だ。翻訳小説の隆盛も清末文芸界の特徴のひとつである。そういうだけならば簡単だ。しかし、困難な問題が横たわっている。訳と表示しているが原作を特定できないものも多い。原作者、原作名を明記していない作品も多く存在する。あの阿英でさえ手をつけかねていたといえばいくらかは理解してもらえるだろうか。翻訳と書いていないから創作だと考えると間違う。創作と翻訳の区別がつかない。

私の体験した例をひとつだけあげよう。

林紓たちが翻訳したシェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」など、あるいはイプセンの「幽霊」である。これらあまりにも有名な戯曲を、林紓らは小説に変えて漢訳した。そういって批判が集中している。ほとんど90年近くの長期間にわたり非難の声が続いていた。阿英も、批判をした人々のなかに含まれる。林紓は外国文学について無知であると鞭打ってきた事実が存在する。

だが、林紓が翻訳の際に採用した原作は、クイラー＝クーチ、またデルによる小説化本であった。研究の基礎が間違っていた。林紓たちに濡れ衣を着せたのである。研究者たちは林紓について論じることに忙しかった。

この簡単な実例は、そのことを私たちに知らせてくれる。原作の探索という基礎研究の重要さを私は強調したいのだ。

渡辺氏は、現在、清末民初小説翻訳の分野において精力的に研究を進められている。特定の作品、翻訳家についてではなく、対象が広範囲にわたっているところにその特徴がある。翻訳の表示がない作品について原作を指摘するという難しい課題をこなしている。翻訳作品をあつかった研究者ならば、どれだけ手間とヒマがかかるかを容易に理解するに違いない。

論文には「新しい発見」が不可欠だ。そうはいっても、実行するのはむつかしい。だが、氏の論文のひとつひとつには、その「新しい発見」が盛り込まれている。今まで研究者のひとりとして指摘したことがない事柄ばかりだ。清末民初翻訳ミステリという分野には、私の知る限り中国にも研究者は存在しない。それほど貴重なのである。

渡辺氏が研究の途中であるのは理解しているつもりだ。しかし、それらのすばらしい業績は、より広く知られる必要がある。日本の学術研究の状況を世界に示すためにとりあえずまとめて欲しい。私は、ひそかにそう思っていた。このたび、私の希望が実現したことはまことにうれしい。

2010年１月

小説目録はたのしい

——『清末民初小説版本経眼録』紹介

『清末小説から』第100号（2011.1.1）に掲載。付建舟、朱秀梅のふたりが、清末民初小説の版本を説明する。表紙、奥付を写真版で掲示するのが貴重だ。目次には133種を掲げる。文末の「補記」を参照。

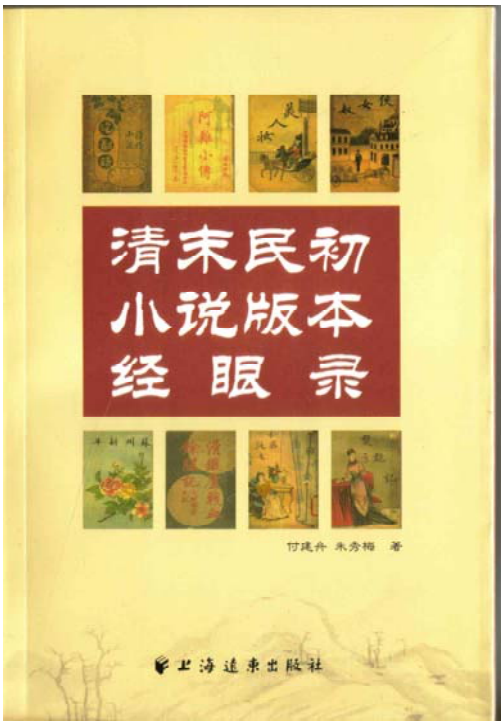
小説目録は、使用する側からすれば道具にすぎない。実物にたどりつくための手段のひとつだ。しかし、編集したことのある人ならば理解しているはず。目録には不思議な魅力がある。いちど手を着けると作業を中止するのはむつかしい。

清末民初の小説を調べるとき、関連する目録をひとつにまとめたら便利だろう。阿英「晩清小説目」を基礎にして私は編集作業をはじめた。はるか昔のことになる。

阿英目録は、彼が手元においた実物によって編集されている。そこが特徴であり長く利用された理由でもある。しいていえば、清末小説に対象を限定していることが不足か。しかし、それはないものねだりにすぎない。

ならば自分で編集するしかないだろう。民国初期の小説までを含めることにした。当時から散在している関連文献を私は収集しつづける。現在にいたるまで『清末民初小説目録』（樽目録と略す）の編集作業を継続しているのは、収録範囲が拡大しているからだ。しかも、絶え間なく新しい資料が発表されている。作業には終りがない。

付建舟、朱秀梅著『清末民初小説版本経眼録』（上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2010.6）が出版された。簡単に紹介したい（以下、付朱目録と略す）。



付建舟、朱秀梅著『清末民初小説版本経眼録』

「経眼録」といえば、清末関係では以下のような目録がある。

顧燮光『訳説経眼録』杭州・金佳石好楼1934(王韜、顧燮光等編『近代訳書目』北京図書館出版社2003.10影印本)／阿英編『晩清文学叢鈔・小説戯曲研究巻』北京・中華書局1960.3上海第１次印刷／台湾・文豊出版公司1989.4影印本

張　純「晩清稀見小説経眼録」『清末小説』第12号　1989.12.1

梁淑安、姚柯夫『中国近代伝奇雑劇経眼録』北京・書目文献出版社1996.10

また、劉徳隆著『清末小説過眼録』(清末小説研究会2004.1.1　清末小説研究資料叢書5)を思い起こす。

これらに共通するのは、著者たちが自分の眼で確認した書籍を紹介している点だ。

付朱目録は、本文355頁、目次には133種の書名を見ることができる。阿英目録は、1,107種を収録していた。両者の収録数を比較しても意味はない。時代が異

なる。編集方針も違う。

付朱目録には、従来には見られなかったひとつの特徴がある。

巻頭に表紙のカラー写真16葉を収録しているばかりではない。それぞれの書物には、本文中に解説とともにその表紙と奥付を写真版で示している。奥付を掲げないばあいは、そのものが存在していないのだろう。いずれにせよ、実物で確認したことが理解できる。そこが「版本経眼録」という所以でもある。

前出133種について、発行年月などの書誌を記し、必要に応じて「序」などを採録掲載する。また、関連の書籍にも言及している箇所がある。私が付朱目録によって樽目録に注記したのは、合計186種だ。数字が異なるのは、付朱目録では、同一書に重版など複数の版本に言及しているからだ。

著者による前言後記の類は書かれていない。該書の内容を見れば説明不用だ、と考えたのかもしれない。ただ、付と朱が作業をどう分担したのかが不明確である。連名にしているところを見ると共著らしい。互いに協力しあったと理解しておく。

写真で見るいくつかの書籍には、所蔵ラベルがはってある。図書館の収蔵品だろう。それ以外は、著者達が所有しているのかもしれない。

凡例がない。付朱らがいう清末民初の時間区分が不明だ。だが、説明がなくても本文を読めば、1903-1921年あたりになる。

たとえば、表紙にバラの花をあしらった統一意匠の10冊がある。いずれも、世界書局1924年６月初版だ。表紙の中央に書名を置く。

『独鶴小説集』『禹鐘小説集』『紅蕉小説集』『海鳴小説集』『瞻廬小説集』『叔鸞小説集』『卓呆小説集』『西神小説集』『舎我小説集』『枕緑小説集』という。

表紙右上に漢数字がつけてあるから10冊を一組にして発行したものらしい。

1924年も民初に含めるのか、などと私はいわない。どういう書籍を収録するかは著者の判断による。必要な書物であるかないかは、利用者が考えればよい。だから、そういう書物が出版されている事実の方が重要だ。

創作と翻訳を区別していない。ただし、見ればわかる。

付朱目録は、単行本に的を絞って収録している。雑誌、新聞掲載の小説には言及しない。それが悪いと言っているのではない。付朱らの編集方針は、書名の

「版本経眼録」に示されている。それでいい。

付朱目録の全体をいうと、さきほどの186種（重版を含む）になる。そのうち創作は、50種だ。翻訳は136種、うち商務印書館「説部叢書」49種（「林訳小説叢書」を含む）を数える。

これを見る限り、商務印書館発行の翻訳が多いように思われるかもしれない。しかし、商務印書館の「説部叢書」は、全体では322種にのぼる。だからそれに比較すれば多くはない。私は、付朱目録が不十分だと指摘しているのではない。現在の中国では、「説部叢書」を見ることが困難になっていると思うだけだ。

付朱目録は、商務印書館「説部叢書」を十集系列と四集系列に区別している。正確な記述だ。実物を手にしているからこそ、ふたつの系列に分かれていることが把握できたと考える。

それについての説明がある（9頁）。私が言い直す。十集系列とは、元版の数え方だ。第一集が10編で構成され、十集で合計100編になる。

その100編を初集に改組した。各集100編だ。４集第22編（注：元版と区別するためアラビア数字を使用する）まで刊行された。付朱らが四集系列と命名しているのがこれに該当する。

小説目録がたのしいと感じるのは、それによって従来の誤りが訂正できた時だ。

付朱目録に見える有益な１例を紹介しよう。

阿英「晩清小説目」（166頁）には、次のような記述がある（傍線省略）。

> 聶克卡脱偵探案　美訖克著。初編，顧(ママ)明卿訳。二編，顧(ママ)明卿、顧鵬挙合訳。光緒丁未(1907)一新書局刊。二冊。

ニック・カーターもの。樽目録を含めて今までの全部の目録が、阿英の記述を踏襲している。それはそうだ。異議をとなえるための反対資料がない。すなわち、阿英を除いて誰も実物で確認できなかった。

上記引用文の「ママ」と注記した人名に注目して欲しい。

付朱目録の149頁に該書の第二編が、『最新聶克卡脱偵探案（二編）』として採録される。説明には、「正文署上海顔明卿、顧鵬挙合訳」とある。そうすると、阿

英目録の「顧明卿」は誤植で、正しくは「顔明卿」だとわかる。さらに奥付写真を見ると「編訳者為顔景賢、校閲者為周仲華」だ。顔つながりで、明卿は景賢ともいうのかと推測する。

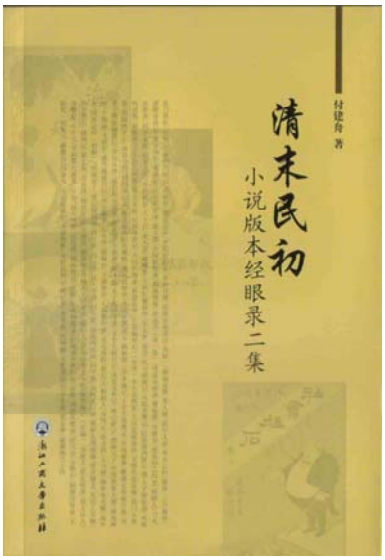
実物で確認することの重要性を示している。

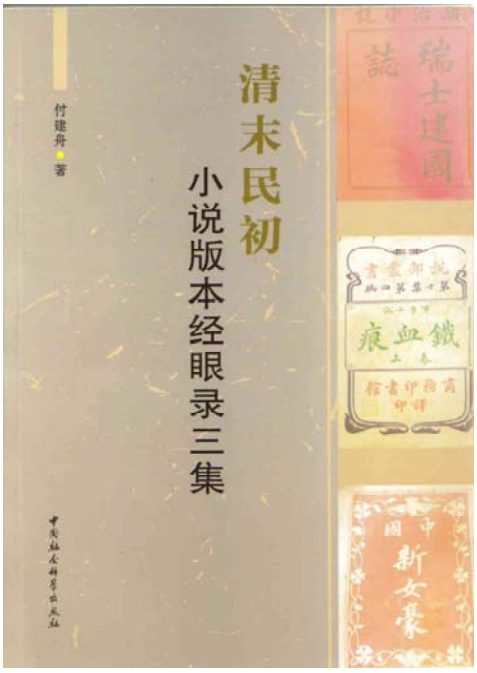
小さな疑問をひとつ。

242頁に『脂粉議員』を収録する。説明して、付朱らが見た版本には表紙がない［缺封面］という。しかし、実際には表紙を掲げて「説部叢書」二集第二十五編である。表紙がないのではないのか。

奥付写真を見ると「中華民国三年六月初版」となっている。これは「林訳小説叢書」の発行年だ。つまり、奥付は「林訳小説叢書」であり、表紙は別の「説部叢書」のものを掲示した。この箇所だけが正確さに欠ける。どうしてそうしたのか。説明があればよかった。小さなキズにすぎない。

【補記】付建舟の単独名義で以下の目録が刊行されている。





『清末民初小説版本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1

同シリーズ第２冊目。清末民初の小説（単行本）148種を収録する。表紙と

奥付の写真を掲載するのが特色

『清末民初小説版本経眼録三集』北京・中国社会科学出版社2013.8

同シリーズ第３冊目。清末民初の小説（単行本）130種を収録する。表紙と奥付の写真を掲載するのが特色

『清末民初小説版本経眼録・日語小説巻』北京・中国致公出版社2015.1

同シリーズ第４冊目。清末民初（1898-1917）の日語小説（単行本その他）98種を収録する。表紙と奥付の写真を掲載するのが特色。樽目録第６版を参照する。付建舟「清末民初日語小説漢訳本与中国文学的現代転型（代前言）」

附１：日語小説巻疑問表　著者に送付し、清末小説研究会ウェブサイトで公開した

『清末民初小説版本経眼録・俄国小説巻』北京・中国致公出版社2015.1

同シリーズ第５冊目。清末民初（1903-1925）の俄国小説（単行本その他）105種を収録する。表紙と奥付の写真を掲載するのが特色。樽目録第６版を参照する。付建舟「清末民初俄国小説訳介路径綜考（代前言）」

附２：俄国小説巻疑問表　著者に送付し、清末小説研究会ウェブサイトで公開した

2015.5.21

●[付日*]＝付建舟『**清末民初小説版本経眼録・日語小説巻**』北京・中国致公出版社2015.1

気になる点をあげました。必ずしも間違いであるとは限りません。「代前言」と本文のページ数が重複しています。ご注意ください。

[付09]＝付建舟「清末民初日語文学的漢訳与中国文学的現代転型」『外国文学評論』2009年第4期　2009.11.18

経国美談　[付09-152]角書不記、36-39〃冊1900.2-1901.1[付日3]同左

珊瑚美人　[付09-152]角書不記、1904.6-1905.1と誤る[付日3]同左

花間鶯　[付09-152]角書不記、『福建政法〃雑誌』1908.9-1909.5[付日3]同左

政海波瀾　[付09-152]角書不記、光緒29年（1903）[付日3]同左

聖人歟盗賊歟　[付09-152]角書不記、1904.9-12[付日3]同左

阿難小伝　[付09-153]日本語からの転訳だと思う。角書不記[付日3]同左

埃及妃　[付09-154]角書不記[付日5]1904.5-9〃

波斯剪　[付09-154]角書不記[付日5]同左

紅花球　[付09-154]角書不記[付日5]光緒30.9.25〃

瑪瑙印　[付09-154]角書不記[付日5]同左

三刺客　[付09-154]角書不記[付日5]同左

一条鞭　[付09-154]角書不記[付日5]同左

易児説　[付09-154]角書不記、光緒30.11.5-10.〃15[付日5]同左

俄皇宮中之人鬼　[付09-154]角書不記[付日5]同左

百合花　[付09-154]角書不記[付日5]同左

海底旅行　[付09-155]角書原著者不記、盧藉東不記、披髪生不記、大平三次不記、1-6〃号、1902.11-1903.8〃[付日6]同左

月界旅行　[付09-155]角書不記、井上勤不記、光緒29（1903）のみ[付日6]同左

世界末日記　[付09-155]角書不記、（法）広〃林瑪利安著、光緒28.10（1902.11）、徳冨健次郎不記[付日6]同左

地底旅行　[付09-155]三木愛華不記、高須墨浦（治助）不記、10期1903.12のみ[付日6]同左

空中飛艇　明権社[付09-155]1903のみ[付日7]同左／商務印書館[付09-155]角書不記[付日7]同左

空中旅行記　[付09-155]井上勤不記、1903.4-5のみ[付日7]同左

造人術　[付09-155]角書不記、（美）路易斯・〃託崙著、原抱一庵主人不記、1905[付日7]米国路易斯・〃託崙著

造人術　[付09-155]角書不記、原抱一庵主人不記、1906.2〃.20[付日7]同左

薄命花　[付09-155]角書不記、光緒33（1907.6〃）[付日7]同左

極楽世界　[付09-155]角書不記、光緒29.3（1903.3）[付日7]同左

人外境　[付09-157]「人外鏡〃」、原作名不記、1903.1-2[付日9]同左

双金球　[付09-157]角書不記、原作名不記、英文不記、光緒31（1905）[付日9]同左

莫愛双麗伝　[付09-157]角書不記、原作名不記、英文不記[付日9]同左

母夜叉　[付09-157]角書不記、原作名不記、英文不記、光緒〃（1905）初版[付日9]同左、光緒乙巳（1905）

初版

色媒図財記　[付日9]涙香小史不記

三縷髪　[付09-157]原作名不記、『偵探談』第3冊〃、光緒30年（1904）[付日9]同左

11頁「世界冒険奇譚」→「世界冒険譚」

二勇少年　[付09-158]角書不記、英文不記、世界冒険奇〃譚、1905[付日11]同左

海外天　[付09-158]原作名不記、英文不記、世界冒険奇〃譚、光緒29年（1903）[付日11]同左

澳洲歴険記　[付09-158]原作名不記、英文不記、1906、世界冒険奇〃譚[付日11]同左

航海少年　[付09-158]英文不記、世界冒険奇〃譚[付日11]同左

朽木舟　[付09-158]原作名不記、英文不記、世界冒険奇〃譚[付日11]同左

十五小豪傑　[付09-159]1902.2.22-8.4。訳自桜井彦一郎的日訳本「世界冒険奇〃譚」系列と誤る[付日11]『新民叢報』連載に訂正

十五小豪傑　（法）焦士威爾奴原著　披髪生（羅普）続訳　『新民叢報』14-24号　光緒28.7.15-12.15(1902.8.18-1903.1.13)　[付日11]未収録

電術奇談　[付09-159]角書不記、原作名不記、1903.10-1903.6〃[付日13]同左

不如帰　[付09-159]角書不記、英文不記、光緒34年（1908.10）[付日13]同左、光緒34.10（1908.10）

懺情記　[付09-160]黒岩涙香不記、原作名不記[付日13]同左

鴛盟離合記　[付09-160]角書不記[付日13]同左

古王宮　[付09-160]角書不記、黒岩涙香不記、原作名不記、英文不記[付日13]同左

天際落花　[付09-160]角書不記、原作名不記、英文不記[付日13]同左

八奶秘録　[付09-160]角書不記、1908.1-6。日本語からの転訳と誤る[付日13]同左

百合子　[付09-160]角書不記、1期1914.11再版〃[付日13]同左、[尚耳]〃直訳

寒牡丹　[付09-160]光緒32年（1906.13〃）[付日13]同左

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

経国美談　[付日10]第36至39〃冊

経国美談新戯　[付日10]1903.5.29〃-1904.9.24は誤り

海底旅行　[付日20]原作不記

[付日29]■→老

離魂病　[付日30]原作不記

政海波瀾　[付日50]原作不記

鉄世界　[付日55]原作不記

五里霧　[付日59]全名 HENRI 〃 REN 〃 ALBERT,〃 GUY DE MAUPASSANT
→HENRY-RENÉ-ALBERT-GUY DE MAUPASSANT

美人手　[付日70]LA MAIN COUPE 〃

美人手　[付日75]目次奥付（丙巻ではなく間違えて甲巻を掲げる）写真あり

楊貴妃　[付日78]原作不記

月界旅行　[付日85]原作不記、井上日訳不記

海外天　[付日91]9行　1899→1902。11行　1840→1841

地底旅行　[付日92]英国ジユールス、ウヱル子著不記、三木愛花〃

奪嫡奇冤　[付日98]2行　MILE→ÉMILE。7行　Mmile→Émile

俠恋記　[付日115]樽目録第６版を引用して、原著者是誰？「有明山樵」是否是原著者？と書く。意味不明。有明山樵が原著者

千年後之世界　[付日121]原作不記

奇獄一　[付日123]樽目録第６版を引用する。原著者待考

雙金球　[付日127]樽目録第６版を引用する。原著者待考

珊瑚美人　[付日131]『繍像小説』第27期表紙本文写真あり。第27期至31期（甲辰五月即1904年6月至甲辰七月即1904年8月と誤る）、第33期至41期（甲辰八月即1904年9月至甲辰十二月即1905年1月と誤る）

新舞台二編　[付日142]原作不記

雲中燕　[付日146]桜井鴎村訳『少看護婦』博文館1901.6.27。英語からの翻訳。初出『少年世界』1899

銀山女王　[付日146]原作不記

白雲塔　[付日152]『時報』最初と最後の写真あり（題字部分が前後で入れ違っている）

指環党　[付日161]FORTUN ᵐᵐ DU BOISGOBEY→FORTUNÉ DU BOISGOBEY

阿難小伝　[付日169]原作不記

銀行之賊　黒岩涙香訳「銀行奇談　魔術の賊」（米国小説「ドナルド・ダイキ」HARRY ROCKWOOD(本名 ERNEST AVON YOUNG)“ DONALD DYKE ”）『絵入自由新聞』1889.1.16-2.16, 小説館、銀花堂1889.7。改題『探偵談　銀行の賊』銀花堂1889.8.30。[付日171]表紙写真あり。缺版権頁。樽目録第６版を引用する。中村忠行が DU BOISGOBEY: THESCULPTER'S DAUGHTER.?と指摘したが「?」を見落とし誤解する。「原書「美国偵探叢話之一」有誤」と誤る

車中毒針　[付日175]「漢訳者呉檮，曾留学日本」と誤る（留学した事実なし）。

176頁8行　銭塘呉檮→杭県呉檮

新魔術　[付日181]大沢天仙（興国)『催眠術』文禄堂1903.12.1

181頁7－8行　版権頁署新世界小説社光緒三十三年（1907）正月初版←您看過嗎？

一捻紅　[付日184]樽目録第６版を引用して原著者為“ JULES VERNE ”は誤り。JULES VERNE 著ではない[欒114]丙午正月初版、底本爲江見水蔭、關戸浩園合著的『女の顔切』，日本青木嵩山堂明治二十八年（1895）版。国立国会図書館近代デジタルライブラリーでは江見水蔭、関戸浩園合著『(新作小説）女の顔切』青木嵩山堂1895.10.27

寒桃記　[付日189]10行　MILE→ÉMILE。190頁2行 Mmile→Émile

[付日192]表紙本文写真あり。缺版権頁。樽目録第６版により「寒桃記」由日本尾崎徳太郎原著，銭塘呉檮訳述と書いて誤る。尾崎原著「寒牡丹」と混同している。中国ᵐᵐ商務印書館1913.12四版，1914.4再版，光緒三十二年（1906）二月首版、属於「説部叢書」，但没有説明是何種系列，可能属於「説部叢書」十集系列之版本。樽本注：上のように説部叢書初集第三十一編と明示している。付建舟の勘違い

寒牡丹　[付日193]尾崎原作の出版社不記

花笑翁　[付日203]原作不記

累卵東洋　[付日207]説明して明治三十四年（1906ᵐᵐ）と誤る。原作不記

侠黒奴　[付日213]訳述者呉檮，生卒年不詳，号亶中，曾留学日本（注：留学したことはない）

血簑衣　[付日216]原作の掲載紙、刊年不記

美人煙草　[付日219]原作不記、しかも広津柳浪に触れない

[付日220]原作不記、しかも広津柳浪に触れない

地中秘　[付日222]原作不記

大魔窟　[付日225]原作不記

偵探之偵探　[付日230]に「［樽氏目録3477］記載，“(法)佚名著”。但不知原著者姓名和原著」と書く。正確ではない。「(法)佚名著」と説明したのは阿英目録114頁が代表だ。ここは阿英目録を指摘すべきだろう。

世界一周　[付日244]注：総発行所中国商務印書館と説明しながら奥付は商務印書館。奇妙

[付日246]8行　1913年12月再版→三版

[付日246]9行　筆者所見不知是再〃版本還是三版本

薄命花　[付日250]樽目録第６版を引用。原著者待考

航海少年　[付日257]注：総発行所中国商務印書館と説明しながら奥付は商務印書館。奇妙

二勇少年　[付日259]1906〃.9と誤る（34頁参照）。原作を『殖民少年』と誤る

海外天　[付日259]小説林社〃、光緒29年（1903）出版とする

朽木舟　[付日259]説部叢書百種第8集第10種〃

棠花怨　[付日265]（黒岩）涙香小史訳述『梅花郎』明進堂1890.1.15

博雅椎　[付日265]角書不記

橘英男　[付日271]原作不記

5行　説明して1908〃年12月初版と誤る→1907年……

色媒体図財記（巻上）　[付日274]FORTUN〃→FORTUNÉ

[付日275]FORTUN〃→FORTUNÉ

八奶秘録　[付日277]FORTUN〃→FORTUNÉ

天際落花　[付日287]FORTUN〃→FORTUNÉ

[付日288]中華民国十二年（1923）七月再〃版→三版

女海賊　[付日290]原作不記

模範町村　[付日292]原作不記

不如帰　[付日296]説明して四集系列〃第二十三編、原作底本不記

旅順実戦記　[付日303]原作不記

旅順雙傑伝　[付日308]原作不記

「女露兵」[文東13]真龍斎貞水「家庭講談・女露兵」『女学世界定期増刊／家庭小説小天地』博文館1905[.1.15]

女学生旅行記　[付日311]原作不記

最貧者　[付日317]原作不記

苦児流浪記　[付日325]説明して四集系列第〃二第七十九編、原作底本不記

外交秘事　[付日329]説明して四集系列第〃二集第九十編。底本不記

侠女郎　[付日332]原作不記

[付日333]説明して四集系列第〃二集〃四十七編。原作不記

地下戦争　[付日336]原作不記

泰西軒渠録　[付日336]5行　署編訳見〃発行者→編訳兼発行者

八十万年後之世界　[付日340]原作不記。説明して日本黒岩涙香翻訳成日文（そうだとすれば黒岩涙香

訳「(文明奇談）八十万年後の社会」(『万朝報』1913.2.25-6.20）のち扶桑社1913.9.25全96回（以上は伊藤秀雄）。楊心一は英語から直接漢訳しただろうから、黒岩日訳とは無関係。待考）

[付日342]原作不記

秘密怪洞　[付日344]説明して四集系列第ㄧ二集第八十八編。原作不記

2015.5.23

●[付俄*]＝付建舟『**清末民初小説版本経眼録・俄国小説巻**』北京・中国致公出版社2015.1

こちらも気になる点をあげました。必ずしも間違いであるとは限りません。「代前言」と本文のページ数が重複しています。ご注意ください。

［付115］＝付建舟「清末民初俄国小説訳介路径綜考(上)」『清末小説から』第115号　2014.10.1

［付116］＝付建舟「清末民初俄国小説訳介路径綜考(下)」『清末小説から』第116号　2015.1.1

俄国情史　[付俄2]底本日訳の出版社刊年など不記

枕戈記　[付俄3]樽目録第６版を引用。二葉亭（四謎〻）と誤る

俄帝彼得　[付俄4]李艶麗を引用して原作を誤る

写真帖　[付俄3]「写真貼〻」[付俄4]日訳為「相冊」とするが「写真帖」が正しい

托士宗教小説　[付俄5]細目あり、底本英文不記

一文銭　[付115]1905〻年第21号[付俄6]同左

　　[付115]1929〻[付俄7]同左

羅刹因果録　[付俄9]細目なし

球房紀事　[付115]Tolstoy〻[付俄9]同左

雪花圍　[付115]四集系列第〻二集第六十三編[付俄11]同左

不測之威　[付115]四集系列第〻二集第九十五編[付俄11]同左

香鈎情眼　[付俄14]17行　重複

六尺地　[付116]包天笑〻訳[付俄16]同左　→天笑生

黒獄天良　[付116]「黒獄〻」[付俄16]同左

復活　[付116]俄国托爾斯泰著、注：実物は原作者不記[付俄16]同左

情感　[付116]Zolstoi[付俄16]Zolstor〻

空大鼓　[付116]L.〻 TOLSTOY〻著[付俄17]同左

風俗閑評　[付116]細目なし[付俄17]同左

可愛的人　[付116]A.〻 Tshekhov 著[付俄17]同左

廿六人　[付116]「二十〻六人」[付俄18]同左

沙場帰夢　[付116]題名のみ[付俄18]「沙声〻場帰夢」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

俄国情史　[付俄5]日文題名「俄〻国奇聞花心蝶思録」(高崎書房〻), 1886年再版時改題為「俄国情史斯密士瑪麗伝」ともとの日本語を漢訳する

枕戈記　[付俄8]二葉亭（四謎〻）訳成日文

銀鈕碑　[付俄16]奥付は原著者：俄国莱門忒甫。莱蒙托夫〻原著と誤る。樽目録第６版を引用。蹉跎〻の家主人日訳と誤る

托氏宗教小説　[付俄26]表紙および英文表示頁写真あり。英文写真を示しながら表紙の表記などを採用。俄国托爾斯泰原著、徳国葉道勝訳、(東官麦梅生述、) 香港礼賢会出版、光緒三十三年丁未 (1907)、西暦一千九百七年

黒衣教士　[付俄30]日訳底本不記

不測之威　[付俄36]原作不記

莊中　[付俄39]原作不記
一文銭　[付俄42]原作不記
戚施　[付俄45]原作不記
塞外　[付俄45]原作不記
邂逅　[付俄48]周樹人（魯迅）〻訳と誤る。原作不記
謾　[付俄51]原作不記
黙　[付俄51]原作不記
四日　[付俄57]原作不記
生計　[付俄61]日訳底本不記
写真帖　[付俄64]「写真貼〻」と誤る。日訳底本不記
火車客　[付俄66]原作日訳底本不記
六号室　[付俄68]『小説時報』14号表紙写真は間違い
心　[付俄70]日訳底本不記
神槍手　[付俄74]原作不記
棺材匠　[付俄83]原作不記
羅刹因果録　[付俄88]四集系列第〻二集第三十九編、細目に原作不記
　[付俄90]表紙写真のみあり。説明して中華民国四年（1915）五月十二日初版発行（根拠不明)。缺版権頁
心獄　[付俄91]原作不記
春潮　[付俄109]原作不記
雪花園　[付俄112]四集系列第〻二集第六十三編。原作不記
驃騎父子　[付俄114]第〻二集第八十一編
愛国真詮　[付俄118]俄国 Nemirovich-Danchenks 〻著。原作不記
沙場帰夢　[付俄121]俄国 Nemirovich-Danchenks 〻著。原作不記
初恋　[付俄123]『青年雑誌』第1巻第5号1916.1.15〻[付116]『青年雑志』第1巻第5号（1916年2〻月）至『新青年』第2巻第2号（1916年10月1日）[付俄17]1916.1.15〻-10.1
決闘　[付俄129]英訳底本不記
托氏寓言集　[付俄132]劉永文民国小説目録、樽氏目録、二者均有誤，与実際不符←樽目録の編集方針は連載のばあい最初と最後のみを採録する。付建舟は目録凡例を読まなかったのか
風俗閑評　[付俄135]「銭〻螺旋審判」と誤る、その他は省略。原作不記。上冊民国五年十一月初版〻[印刷]
寧人負我　[付俄146]下冊表紙本文写真あり。「寧我負人〻」と誤る。原作不記
克利米戦血録　[付俄153]原作不記
人鬼関頭　[付俄162]民国六年七至十月〻
恨縷情絲　[付俄169]（1918年1月至11月〻）
　[付俄169]即「克莱采奏鳴曲」「家庭幸福」。原作不記
皇帝之公園　[付俄176]俄国 Aleksander Jvanoviteh 〻 Kuprin 著
現身説法　[付俄182]今訳為「童年少年青年」、原作不記
可愛的人　[付俄188]A.〻 Tshekhov 著と誤る　←請看190頁本文照片
蝋燭　[付俄192]該作品目次未収録。是不是詩？

歯痛　[付俄200]英訳底本不記
球房紀事　[付俄207]Tolstoy 〃(sic)〃←請看208頁本文照片
楽師雅路白忒遺事　[付俄210]「楽師雅路白武〃遺事」と誤る
三死　[付俄219]原作不記
高加索之囚　[付俄221]民国九年（1920）五月〃
　　[付俄222]俄国 Tolstoj 著不記
一椿小事　[付俄245]説明して The 〃 Very Short Romance。
　　6行　Garahin 〃
一株棕樹　[付俄262]6行　「附識」Caishin 〃
俄宮秘史　[付俄271]英訳底本不記
未生者之愛　[付俄277]英訳底本不記
[付俄297]1行　B.R.Eromehk→B.Я.ЕроШенко
附：父与子　[付俄314]日訳不記。英訳底本究竟是什麼？請告訴我詳細情況。訳者是誰、訳名是什麼、出版社是什麼、幾年刊行？

夏瑞芳暗殺事件の犯人

『清末小説から』第101号（2011.4.1）に掲載。商務印書館社長夏瑞芳を暗殺した犯人の名前が、複数ある。王慶餘、王慶瑞と１字違いだったりする。また事件の犯人周棲雲が銃殺されたという新聞報道もある。暗殺犯はひとりではないのか。なぜ複数の人物が登場するのか。新聞報道を追跡して解明する。藤元直樹氏よりメールで東京朝日新聞データベースの記事をご教示いただいた。本文に織り込んである。のちに渡辺浩司氏より『申報』に追悼会記事があると複写をいただいた。補記に引用した。

1914年１月６日、商務印書館は金港堂との日中合弁を解消した。その直後、商務印書館社長の夏瑞芳が発砲により暗殺されるという事件がおこる。夏瑞芳は、四十三歳だった。

不思議なことのひとつは、犯人の名前がまちまちであることだ。

張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元済年譜』（北京・商務印書館1991.12。116頁）では、犯人の名前は王慶餘である。

同じく『張元済年譜』の141頁注1は、犯人を「李海社（ママ）（即周棲雲）」とし、銃殺が執行されたと『申報』（1917.10.14付）の記事を紹介する。

これはどういうことか。ふたつの名前がでてくる。犯人は王慶餘ではないのか。だが、『張元済年譜』には説明がない。

ちいさなことだが、気になっていた。

簡単に説明しておこう。

私は、暗殺犯人の名前を王慶餘ではなく王慶瑞だと書いた（『初期商務印書館研

究』298頁。増補版384頁)。１字が違う。これには理由がある。

『申報』では1914年１月11日から夏瑞芳暗殺事件を連続して報道している。その記事に出てくる犯人の名前を追った。順に見ていく。

１月11日　犯人名なし

１月12日　王慶餘　現年三十二歳山東人。供係某人允給巨資嘱令将夏暗殺云云。

犯人は、大金を受け取って暗殺を請け負ったと自供している。ここまで、犯人は王慶餘という名前だ。ところが翌日から表記が変化する。

中華民國三年一月十三日

本埠新聞

◎棋盤街暗殺案三誌

▲夏廣仁追隨夏粹芳

▲上午預訊下午驗屍

▲廨員深讞小馬夫

▲王慶瑞承認行兇

▲繙譯權扮夏粹芳

▲暫綴盤問教唆犯

英租界河南路(即棋盤街)商務印書館總理夏粹芳於十號夜六時半被山東人王慶餘(即王慶瑞)暗殺於該書館門首(倘有十八歲學生夏廣仁在該書館附近雇乘黃包車亦被流彈擊中腹部自投同仁醫院醫治無效已於前晚身死兩屍均舁至虹口斐倫路驗屍所報請公共公廨中西官紳驗在案昨晨九時由總巡捕房四十號西探與華探陸根山李阿三押解正兇王慶瑞至公共公廨請究

由孫襄讞會同英領哲君升廊樓上公堂研訊先由四十號西探

『申報』1914.1.13

１月13日　王慶餘（即王慶瑞）。兇徒王慶餘即王慶瑞。凶手王慶瑞
１月14日　兇手王慶瑞

「餘」と「瑞」の違いがどこから生じたのかよくわからない。ただ、新聞報道からすれば、同一人物に違いない。13日以後は王慶瑞という名前で引き続き登場する。

１月15日　山東人王慶瑞。兇徒王慶瑞
１月16日　兇徒王慶瑞
１月17日　山東人王慶瑞
１月19日　兇犯王慶瑞

以上の記事を根拠にして、私は犯人の名前を王慶瑞と書いた。彼は現行犯逮捕だった。
つぎのニュースは、王以外の容疑者が逮捕されたというもの。

１月29日　周棲雲とその父周静安。関係者として彭良ら

記事によれば、周棲雲は、1908年に浸会大学堂で学び英語ができたという。その父の住所に小学校を開設し教えていた。父といっても「定姻」とあるから養子らしい。夏瑞芳暗殺事件後、周父子は行方をくらました。

２月３日　兇徒王慶瑞。周緝（ママ）［棲］雲と父周静安

裁判が開かれ、王慶瑞は死刑になること、周静安は保釈となったことが報じられる。周棲雲の指図だった、というのが王慶瑞の自供である。

『東京朝日新聞』1914年２月21日朝刊*1
夏瑞芳暗殺者銃殺（同上［二十日上海特派員発］）

商務印書館支配人夏瑞芳を暗殺せる應ママ慶瑞は廿日午後二時鎮守使の公署に於て銃殺の刑に処せられたり

文中に見える「應」は、「おう」にあてた誤字である。実行犯の王慶瑞が先に処刑されたことがわかる。

10月14日　首謀者李海秋（即周棲雲）が白状したため死刑の判決がでていた。昨日午後２時、銃殺が執行された。

槍斃夏粹芳被害案之主犯
謀刺北市商務印書館經理夏粹芳身死案內之主使犯李海秋（即周棲雲）經英捕房緝獲解經公共公廨訊明詳解枌滬護軍使署訊辦等情屢紀前報茲悉該犯自解軍署後經軍法課一再研訊供認主謀不諱經盧護軍使擬處死刑詳奉督軍公署核准已於昨日午後二時押赴西砲台執行鎗斃矣

『申報』1914.10.14

李海秋とは、養子になる前の本名だった。

周は夏瑞芳暗殺の首謀者である。実行犯が王慶瑞だ。犯人の名前が複数でてきたのには、上のような状況だったとはなんとなく理解できる。だが、すっきりと納得するのは無理だ。

大学で学んだことのある周棲雲が、なぜ夏瑞芳を殺害しなければならなかったのか。小学校で教えていて殺人のための大金を用意できたのか。

陳其美が事件の背後にいるとはいわれている[*2]。

疑問が残る。周棲雲と夏瑞芳の関係が不明瞭である。結局のところ暗殺の動機が不明なのだ。ゆえに事件全体がすっきりしない印象を残す。

もう少し新聞を調査すれば、暗殺の背景までも報道しているだろうか。残念ながら、今、そこまで手が回らない。

【注】

1）藤元直樹氏より資料をいただいた。2010.5.24。感謝します。

2）1914年１月12付『東京朝日新聞』には、次のようにある。「原因は第二次革命の際居留地官憲が閘北に兵を入れ陳其美等の本営を立退かしめたるは同人（注：夏瑞芳）が工場保護の運動せる結果なりとの恨みを受けたるに依るものと察せらる」

【補記】渡辺浩司氏より資料をいただいた。感謝します。

夏瑞芳先生追悼會

啓者商務印書館總經理夏瑞芳先生不幸於民國三年一月十日遇害竊思夏君生前所創事業於我國工商及教育前途影響絕鉅勳績遭慘變哀痛實深茲擇於本年五月九日（陰歷四月十五日）午後二時在上海靜安寺路味蒓園開追悼會凡我學商界同人與夏君有雅故者屆期敬請蒞臨再夏君夫人深明大義擬將一切賻儀集合成數建設學校永留紀念同人如贊成斯舉致送賻儀者幷請送交上海棋盤街商務印書館總發行所張廷桂君代收是荷

發起人

伍廷芳　貝仁元　朱葆三　葉鴻英　蘇本炎　沈敦和　楊信之　朱銀江　張雲書　蔣炳章　錢允利
鄒崇智　周金箴　盛竹書　王一亭　沈縵雲　虞洽卿　李厚祐　王一亭　張蟄夫　朱葆三
蕭錫冰　顧馥桂　俞　復　張樂君　沈　鑑　鍾觀光　于蘭坪　盛　森　于湘春　王培孫　蘇本銘　閻蘭亭　賈豐臻
汪德淵　程承澤　戚光廉　秦毓鈞　吳前樞　汪彭年　汪龍標　金詠榴　王永甲　龍　傑　張葆元　包公穀　項鍾華
陳玉麟　葉明德　葉景葵　陳鑫鑄　張毓英　魏冕章　郭惜黔　沈福祐　湯一鶴　烏順甫　方新建　鮑鳴鳳　狄葆賢
唐　乾　何天桂　張桂華　蔣維喬　江畬經　莊　俞　陸爾奎　李宣龔　龔伯瑛　徐　鋐　高鳳池　鮑咸昌　高鳳謙
陶保霖　鄺富灼　鮑咸亨　鍾　琪　顧惠成　包文穀　謝蘊棠　趙　鐘　沈琥山　俞鐵夫　樊仲璵　杜亞泉　汪詒年　張國傑
包　誠　陳鶴巖　鮑咸亨　鍾　琪　顧惠成　包文穀　謝蘊棠　趙　鐘　沈琥山　俞鐵夫　樊仲璵　甘永龍　汪詒年　何劍生
人　丁景柴　吳炳銓　倪富春　朱愛鈞　許樹巖　周湘甫　呂子泉　陳枚叔　沈冶生　高鳳岡　倪蘭芳　朱光華　李守仁

啓

中華民國三年五月

雜評三

◉夏粹方之追悼會

吾人對於夏君追悼會發二種之感情其一夏君一苦學生耳而能成就此絕大之營業且其所謂營業非僅個人利益而已實關教育前途然則人誠不可以有爲哉其二夏君方收回外股力謀擴充而乃於此際遭忌以沒則所以繼夏君之志而竟其功者其責任蓋有所屬英豪同心可不勉耶抑更有言者當此商戰劇烈時代各國長袖善舞之商家挾其雄厚之財力精利之出品風馳雲湧而來我誠敗陣步之

來函

◉浙路股東來函

此次浙路開會以公司職員之脅迫閉鎖吞我股東應得之加價此等股會我股東萬不能承認況此會報到者有三萬五千餘權而運動結果僅有一萬一千餘權是臨時不願到會之股東有三分之二以上此爲不能有效之大證延開有不肖之理事監事暗受職員運動電飾江紳我浙路股東一旦不死絕斷不能慫受此股之魚肉率領我股東即大度包容情願樂成願作公衆慈善事業亦須出自大衆公意斷不能爲受職員脅迫便爾甘

商界當之未有不被加害者自數十百商務書館之營業起而與之抗爭猶不足殺其侵入之勢力況今日如商務書館之營業有幾何耶且商務書館之所成就前此猶不能不借助於外股今重股離其關係以從事於對外之競爭然則一書館成立之難且如此吾國所有資本之大商家可不自奮乎哉

訥「夏粋方[芳]之追悼会」、「雑評三」爛、『申報』1914.5.10

「夏瑞芳先生追悼会」『申報』1914.4.21

日（申報）舊曆甲寅四月十六日●第十版

特此布告

◎追悼夏粹芳君紀

昨日午後二時爲商務印書館前總經理夏君粹芳在味蓴園開追悼會會場布置頗爲壯觀中置乙種橫一幅列夏公遺絹立像一架圍以花卉過堦花圃場中滿掛各省政學商界以及外人所送輓聯祭軸祭文等多至數百幅男女來賓約有千數百人場中不能容劍橋亭者內行立場外所有明會秩序紀錄如下（一）振鈴開會（二）由主席鄭孝胥君宣布開會詞（三）行見禮（行鞠躬禮四）伍廷芳君演說大致謂今日到會諸君恐有不知夏公履歷者鄙人略爲述之夏公前補人出身寒素幼年肄業上海清心中學性壯乃出而從生公志在實業時值新舊過渡之時見印刷事業正日興月代遂憑心研究毅然而創辦商務印書館初時規模甚小繼而營業發達是有以擴充之奈短於資本祇諸國人歸有愿者壬寅冬有日本人携巨資來上海與發印刷及出版業公念我國之印刷術及編譯上之歷隘皆其幼稚非利用外資衆取法其輕鬆不可遂與訂約合資改商務印書館爲有限公司其權悉操公手曾幾何時而虞爲百五十萬資本之大公司矣鄙人擔任該公司董事以來殫心夏公辦事認眞而有毅力內部組織完備故有今日之成績我國近年來組織千百萬資本之大公司者頗多而能如商務印書館之收效果者則甚鮮此尤足見夏公平日辦事之能力也公爲基督教徒本宗教以立身故遇事大公無私人咸敬之年來外間以欲公司附有外股類多誹謗謂人躲有以爲不然蓋該公司實基股多而外股少也夏公有驚於此振興外股收回歸人極贊成之於是夏公東渡商議贖回國股東後弭浪狙擊功成身故殊深痛惜今承諸君到會追悼誼皆具有仰慕之熱忱而夏公成業以來補助公益事業甚多其品其行可爲社會立身作則此則諸君尤當永遠景仰而紀念之也（五）臺兒院男生讀誄詞女生誦詩六（一）來賓行三鞠躬禮（七）清心中學孟俊騫君舉領學生誦詩（八）各省分館代表（計三十餘處）行三鞠躬禮並由北京分館代表孫伯恒君讀祭文（九）奏樂（十）留公小學校學生誦追悼歌（十一）商公司三所代表行三鞠躬禮並由秦君讀誄詞（十二）奏樂（十三）夏公家屬

「追悼夏粹芳君紀」『申報』1914.5.10

小説目録に見る『繍像小説』の刊行年月日

清末小説研究会ウェブサイト（2011.5.20付）で公開。『繍像小説』の刊行年月日について中国の研究者が多く誤記する。ありもしない刊行年月日を記述するのはなぜなのか。それを言いはじめた阿英に呪縛されているらしい。書影は今回追加した。

『繍像小説』の刊年について、中国の研究者が記述を誤るのはなぜだろうか。

現在では影印本で簡単に見ることができる。原物あるいは影印本を見ているはずなのだが、小説目録を作成するときに必ずといっていいほど誤記する。

まことに簡単なことなのだ。

『繍像小説』は、創刊号から第12期までは刊行年月日を表示していた。半月刊を守っていたらしい。しかし、第13期よりその年月日を印刷しなくなった。終刊となった第72期までその状態がつづく。

私がいっているのは、該誌第13期からは「刊年不記」とするのが適当であるということ。推測して半月刊の月日を示すにしても、それが推測だとわかるように記述する。ただ、それだけ。

私は『清末民初小説目録』第３版（樽目録第３版と称する）で、カッコを使用して区別した。利用する研究者の多くは、そんなことには知らん顔だ。あまりにも間違いが多い。

樽目録第４版では、推定月日を明示したうえでわざわざ「……とするは誤り」と説明した。まあ、日本語を知らなければ理解できないかもしれないが。

劉永文『晩清小説目録』（上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008.11）に収録

された『繍像小説』の刊行年月日が不正確である。これについては、書評*1で指摘した。私は、機会があるたびに注意を促している。だが、まったく研究者の役には立っていないらしい。

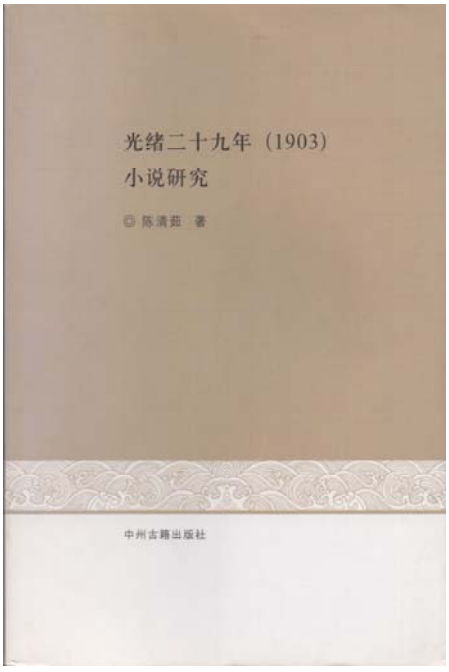
その劉永文目録について詳細に点検をしたのが王鑫「《晚清小説目録》指瑕」（『明清小説研究』2010年第4期）だ。清末小説研究会ウェブサイトの2011年２月４日付で簡単に紹介した。ご覧くださった方もいるだろう。

王の点検は、かなり細かいところまでおよんでいる。劉目録が記載した発行年の間違いをまとめているところからもその厳密さがわかる。

ところが、『繍像小説』の刊行年月日に関しては、誤りがあることを王は指摘していない。検査の対象から全体が抜け落ちている。

くりかえすが、『繍像小説』第13期より刊行年月を記載しなくなったのは周知の事実だ。どうやら、周知のことだと思っているのは私ひとりだけらしい。

王は劉目録を点検するにあたって実物を見ている。そうでなければ、作品名、著者名などの誤記を明らかにすることはできない。その彼が、『繍像小説』についてだけ刊行年月の間違いには気づかなかったのだろうか。厳密に資料をあつかうのが王のやり方だと理解したのだ。しかし、その箇所に限ってはそうではない。



『繍像小説』の刊行年月日つながりで陳清茹『光緒二十九年（1903）小説研究』（鄭州・中州古籍出版社2009.9）をご紹介する。

1903年の小説に限定して論じ、特徴がある。私が注目するのは、該書の附録として作られた小説目録だ。陳清茹は、新聞雑誌掲載の小説、単行本小説および伝統小説の３部に分けて編集した。

この陳目録には『繍像小説』掲載の小説を収録している。問題は、こちらに記載された刊行年月が大きくはずれていることだ。どこから出てきた数字なのか、最初は理解できなかった。

説明をするために「老残遊記」の初出を樽目録から抜き出す。

「老残遊記」巻1-13、『繍像小説』9-18期　癸卯8.1-刊年不記［癸卯12.15］(1903.9.21-［1904.1.31］とするは誤り）である。『清末民初小説目録』第４版では、そのように記載した。

見方から説明しよう。

該作品は、『繍像小説』第９期（癸卯八月初一日）から連載がはじまった。刊年の旧暦を新暦に変換すると、それは1903年９月21日にあたる。途中で原稿没書事件があり（目録には記さない)、連載は巻13（実際は原稿巻14）で中断する。第18期のことだった。該誌第18期には、刊行年月日が記載されていない。ゆえに「刊年不記」と表記する。うしろの［癸卯12.15］は、かりに半月刊が守られていたとすれば旧暦十二月十五日、すなわち［1904.1.31］になるだろうという意味だ。半月刊が維持された証拠は存在しない。「……とするは誤り」とわざわざ注記した理由だ。

その部分を陳清茹は、どう記載したか。つぎに引用する。

> 29.《老残遊記》，10(ママ)回，未完，作者劉鶚，載《繍像小説》第9-18期，光緒二十九年八月初一（1903年９月21日）至十二月二(マ)十九(マ)（1904年２月14日）216頁

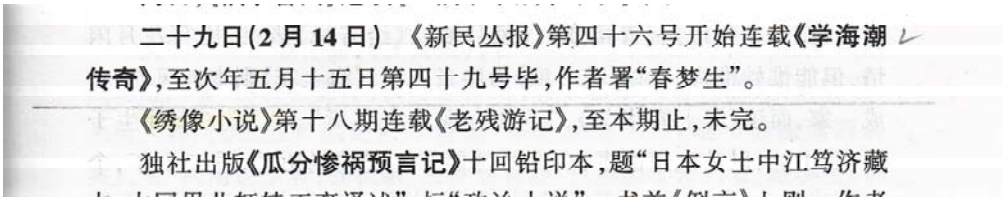
該誌第９期に刊年があるのはその通りだ。そこが問題ではない。

間違っている箇所は、10回もそうだが、ここでは「至十二月二十九（1904年２月14日)」に注目する。

ひとつは、『繍像小説』第18期には印刷されていない刊行年を記していること。

ふたつは、「十二月二十九」とはなにだろうか。

半月刊で雑誌が発行されたとすれば、刊年を表示した部分を参考にして、旧暦で初一日と十五日のはずだ。刊年が記載されていないから予測をすることにしようか。十二月の初一日か十五日のふたつしかない。そのどちらでもなく「二十九」というのだから奇妙だ。陳清茹が自分で考え出したとも思えない。何か根拠があるのではないか。そうでなければ、中途半端な「二十九」を書くことはできないだろう。


二十九日(2月14日)《新民丛报》第四十六号开始连载《学海潮
传奇》,至次年五月十五日第四十九号毕,作者署"春梦生"。
《绣像小说》第十八期连载《老残游记》,至本期止,未完。
独社出版《瓜分惨祸预言记》十回铅印本,题"日本女士中江笃济藏

陳大康『中国近代小説編年』111頁

陳が附録を作成するにあたり参考にしたのは、以下の書籍だという。

陳大康『中国近代小説編年』、尊(ママ)本肇(ママ)雄『新編増補清末民初小説目録』(漢語音にもとづいて名前を書き誤ったと見える)、陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典』、王継権、夏生元編『中国近代小説目録』、欧陽健、蕭相愷主編『中国通俗小説総目提要』などなど。

陳清茹が拠ったのは、それらのうちの１種類にしぼることができた。陳大康『中国近代小説編年』(上海・華東師範大学出版社2002.12)である。

陳大康の該書から関連箇所を引用する。

> (光緒二十九年十二月)二十九日(２月14日)《新民叢報》第四十六号開始連載《学海潮伝奇》,至次年五月十五日第四十九号畢,作者署"春夢生"。
>
> 《繍像小説》第十八期連載《老残遊記》,至本期止,未完。(注:(光緒二十九年十二月)は樽本が補った)111頁

ここを示せば、どこが誤りなのか、と反論される可能性がある。陳清茹はそういいそうだ。上とのつながりを見ると、『繍像小説』第18期の刊年はどうしても「(光緒二十九年十二月)二十九日(２月14日)」になる。陳大康は、そうはっきりと書いているではないか。だから陳清茹はそのように注記した。

だが、これが間違いなのだ。

誤りは、陳大康と陳清茹のふたりともが犯している。

『繍像小説』第18期には刊行年月日の表示がない。これが、基本事項である。刊年がないところに無理矢理月日をつけようとするから間違える。

まず陳清茹の誤りから説明する。

上に引用した陳大康の記述は「老残遊記」の行とその上の行には断絶がある。「十二月二十九日（2月14日）」は、その段落の範囲内でのみ有効なのだ。

つまり、『新民叢報』第46号は、たしかに「十二月二十九日（2月14日）」が刊行年となる。しかし、それと次段落の「老残遊記」は、なんの関係もない。陳清茹は、その事実に気づかなかった。

陳大康の年表は、つぎの編集方針のもとに編まれた。

大きくは、作品の刊行は旧暦だからその順に配列する。

ここに落とし穴がある。新暦で表わすにしても、月日のうちの日が明確でなければ換算できない。陳大康は、どうしたか。月しかわからない刊行物は、その旧暦月の後方にまとめた。年だけのばあいは、「月份不詳」の件として旧暦年の後方に配置する。

以上の編集方針を理解すれば、上に引用した『繍像小説』第18期の直前で線引きされていることがわかる。

すなわち、陳清茹は、陳大康の年表を読み間違えた。

陳大康の誤りのひとつは、まぎらわしい記述をしたことだ。あるいは説明不足か。陳清茹が誤読をしたのがその証拠となる。「同月」と別に示せば誤解を避けることができたかもしれない。結局のところそれは読み手の責任であって、陳大康を責めるのは酷であるというならば、それでもよい。だが、どのみち「十二月」には配置すべきではなかった。陳大康もやはり推測でしかない半月刊の月をうのみにしている（注：陳大康は2014年の『中国近代小説編年史』で訂正する。12年後のことだ。文末の補記を参照のこと）。

『繍像小説』刊年の誤解は、さかのぼると主として阿英の説明に行きつく。「始刊於光緒癸卯（一九〇三）年五月，至丙午（一九〇六），因伯元逝世休刊，共七十二期」（阿英『晚清文藝報刊述略』上海・古典文学出版社1958.3。17頁）。李伯元の死去と雑誌停刊を結びつけたのが阿英だった。それが間違いのもとだ。

それから半世紀以上も経過した。だが、中国の研究者はいまだに阿英の説明に呪縛されたままだといわざるをえない。自分で雑誌を見たとしても、そこに刊行年月日がないことを記す気にはなれないらしい。自分の眼が信頼できずに、存在していない月日を見るのだ。これを呪縛といわずしてなんという。

【注】

1）「清末小説目録の最新成果――劉永文編『晩清小説目録』について」『東方』2009年5月号 2009.5.5。のち『清末民初小説目録』第４版に収録。本書所収

【補記】私は1980年代から『繍像小説』の発行遅延説を公表している。本書にもいくつかの関連論文を収録している。ご理解いただけるだろう。中国で『繍像小説』発行遅延説を全面的に展開したのは、陳大康『中国近代小説編年史』全６冊（北京・人民文学出版社2014.1）が最初である。ほとんど30年間、中国の学界は『繍像小説』発行遅延説を無視し放置したのだった。

清末小説目録の最新成果（初稿）

――劉永文編『晩清小説目録』について

『東方』2009年５月号（2009.5.5）に掲載した書評のこちらが元原稿だ。掲載時には字数制限があったので準備原稿を少し削除した。今回、削除箇所をもともどし、わずかに加筆した。本文は、『清末民初小説目録』第４版電字版（清末小説研究会2011.3.31）に収録した。

劉永文『晩清小説目録』の刊行を予告する文章がある（私が入手したのは2008年６月中旬）。短文だから次に全文を翻訳する。

「本書は復旦大学「光華文史文献研究叢書」の第１種である。現存する晩清の新聞小説、雑誌小説および単行本小説についてまったく全面的に収集集成したものだ。雑誌小説は1,141種、新聞小説は1,239種あり各大学図書館の原物を利用し、単行本小説の2,593種は先人の成果を多く利用した。これは日本の学者樽本照雄の『新編増補清末民初小説目録』［第３版］に対してのとてもよい補充となる。１次資料を採用したから、晩清小説領域の基本工具として本書は詳細で確かであり、晩清新聞小説作家およびその創作状況を全体的に研究するとき、また晩清新聞文学の全体像を全面的に評価するばあいに、最も豊富で信頼できる文献的根拠を提供する」。

要点をくりかえせば「原物を利用し」「先人の成果を多く利用し」「樽本照雄の『新編増補清末民初小説目録』に対してのとてもよい補充となる」。

樽本の編集した目録第３版を強く意識し、それを大幅に増補していることを宣伝していることは明らかだ。こういう種類の文章は、普通は著者（このばあいは劉永文）の出版企画書にもとづいて書かれることが多い。ということは、劉永文自身がそう考えていることの証拠にほかならない。事実、劉目録の「説明」（2頁）

には、上記の数字がそのまま使われている。だからこそ、私は劉永文の目録に期待した。劉永文目録は、私の目録が収録していない小説（特に単行本）を多く掲載しているだろう、と疑わなかったのだ。その実態については、本文を読んで欲しい。

そもそも、書評を書く気になったのは劉永文目録のすべてを点検しおわってからだ。まず、目録について紹介する人は少ないだろう。ましてや清末小説だから、書評は出てこない可能性がある。論じることが強く求められる時代だから、その際にはこういう目録のお世話になるはずなのだ。基礎的な仕事はもっと注目される必要がある。利用する立場から発言する。それと同時に、私は目録を編集した経験があるから作成する側から見えることもある。

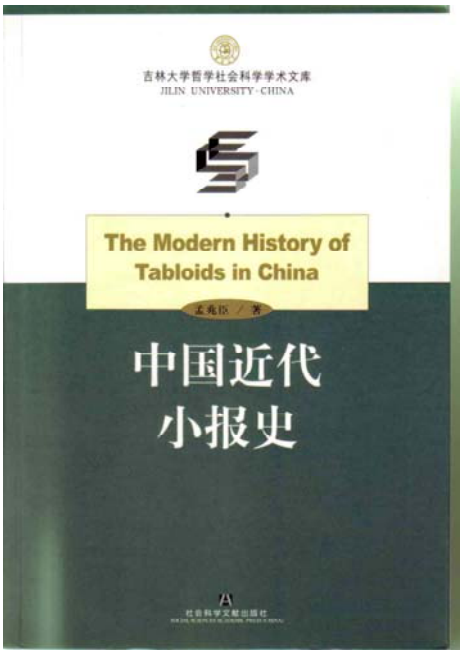
そういえば、別のことを思い出した。東方書店の書目『特選図書目録』（2008年10月）が届いた。その188頁に「146058　新編増補清末民初小説目録　斉魯書社」が掲載されている。日本語で説明して次のようにある。「……1997年に清末小説研究会で刊行した《新編清末民初小説目録》［第２版］を中国の賀偉氏らが大幅に増補したもの」。どこからわいて出た説明なのだろうか。不思議でならない。該書に「賀偉訳」と表示されているところからくる推測だろうか。まったくの誤りだ。実をいえば、賀偉は、主として「序」「後記」などを漢訳した。だが、目録本文の編集とは関係がない。書店は本を売るだけで内容までは知らないのだろう。それにしても、間違った説明を掲載する理由がわからない。

『清末民初小説目録』の増補訂正を私は今も続けている（以下、樽目録）。中国において特色のある目録が出るたびにそれらと比較対照し不足分を増補するという作業だ。

王継権、夏生元『中国近代小説目録』（南昌・百花洲文藝出版社1998.5）は、創作小説のみを収録対象とし、翻訳作品を収録していない。なぜならもとになった「中国近代小説大系」には翻訳作品を収録していないからだ。彼らは翻訳作品を無視するほかない。私は点検を行なった。新編増補版［樽目録第３版］（済南・斉魯書社2002.4）を刊行してからも同様の点検作業を継続している。日本では中国の新聞、雑誌、原本を見ることがほとんどできなかったから２次資料に頼らざるをえない。

陳大康『中国近代小説編年』（上海・華東師範大学出版社2002.12）は、1840年から

1911年までの創作と翻訳を年表形式で収録する。こちらも取り入れた。該当作品が出てくるページ数を明記して後の検索に備える。このくり返しである。



孟兆臣『中国近代小報史』（北京・社会科学文献出版社2005.10）を入手したときにはおどろいた。1840-1949年の新聞に掲載された小説を丹念に採取して詳細だ（以下、孟目録）。下篇に「中国近代小報小説目録初編」（259-673頁）がある。樽目録と比較対照し未収録の作品を追加したのはいうまでもない。清末民初部分に限定してあらたに追加したのは852件である。ただし、孟目録が影印本で刊行された新聞は収録対象外にしているのが不可解だった。『申報』『大公報』『民国日報』『盛京時報』など大型新聞である。目録としては不完全だ。

また、杜慧敏『晩清主要小説期刊訳作研究（1901-1911）』（上海世紀出版集団上海書店出版社2007.12）も見た。樽目録を参照したとあるから備考欄に注記するのは重複するが、かまわない。

劉永文『晩清小説目録』の刊行予告が出た。私がすぐさま２冊も購入予約したのには理由がある。１冊は書き込み用、もう１冊は保存用だ。書名がそのままズバリ『晩清小説目録』である。原物が届くまで、いろいろ想像して楽しんだ。

樽目録が出たあと上記のようにいくつか小説目録が刊行されている。それらを視野に入れると、決定版として出現するのではないか。つまり、私が考える決定版小説目録とは、それ以前のものとはまさに根底から異なる種類のものだ。日本で編集することができるのは２次資料にもとづいた目録でしかない。はたして正確かどうかもわからない。「ないよりマシ」というのが私の編集方針だから、率直にいって誤りも多い。

『晩清小説目録』はほかならぬ中国で刊行されるというのが私の期待を大きく

する。樽目録の欠点を克服した決定的な晩清小説目録とは、実物の書籍を手元において正確に記述するものだ。その意味で、阿英「晩清小説目」(1954) にたち戻る。初版、再版を含めて実物だけに徹底的にこだわる。もしかしたら所蔵機関がそれぞれに注記してあるかもしれない。翻訳小説には、私の知らない原著者と原作名が明記されているのではなかろうか。これこそ信頼できる小説目録だ。日本であやふやに編集した目録など一瞬にして価値を失うだろう。長年にわたった目録の増補作業から私が解放されることを意味する。どのみち中国人研究者であることの強みが発揮された目録に違いない。

日本という外国では、どうしてもできない種類の目録こそが中国の研究者によって編集刊行されるだろうという私の強い思いがあった。

中国人研究者にとっては自国の小説研究だ。小説目録に関して、外国人の後を追いかけるなどという事態は想像もできないだろうし、したくもなかろう。

劉永文編『晚清小説目録』（上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008.11）が届く（以下、劉目録）。うれしかった。日本でいうA5判で全部あわせて882頁もある巨冊だ。これにも驚嘆した。

構成は以下のようになっている（( ) 内は樽本の注釈）。

前言1-23頁

説明1-2頁

1　期刊小説目録 1-111頁

2　日報小説目録 112-217頁（有用）

3　単行本小説目録 218-391頁（創作翻訳の区別をつけない。小説集に収録された作品を独立させた）

4　報刊所登広告 392-432頁（一部有用）

5　登載小説的報刊 433-480頁

６　以小説命名的出版社　表　481-482頁

７　晩清小説年表 483-664頁（雑誌、新聞、単行本の３類に分けている。月日まで明らかにして詳しい。ただし、掲載紙誌、出版社を記載せず。作品があるとわかるだけ）

８　期刊小説索引 665-703頁

９　日報小説索引 704-749頁

10　登載小説報刊索引 750-752頁

11　単行本小説索引 753-851頁（8-9、11は統合できなかったのか？紙媒体の目録で人名索引がないのは大きな欠陥だ）

後記 852-853頁

劉永文といえば、新聞小説について複数の論文を発表していることを私は知っている。

その中のひとつは『神州日報』が小説の宝庫であることを紹介する（劉永文、呉瀟「晩清報刊中的小説宝藏——以《神州日報》為個案」『明清小説研究』2005年第1期（総第75期）2005発行月日不記）。該論文によって樽目録に33件の小説を追加した。

基本となる工具書は、いくらあってもよい。用途によって使い分ければいいだけだ。中国の研究者といってもいろいろな人が存在する。先行文献を引き写して林紓に濡れ衣を着せることに熱中している研究者に比較すれば、劉目録がどれだけ有用な仕事であるか、いう必要もないだろう。今後の研究に貢献する度合いは、比較にならない。

劉目録の構成は、大まかにいうと小説目録、媒体についての説明、小説年表、索引の部に分かれる。主体の小説目録は、新聞、雑誌、単行本のみっつに分類する。収録した数の多さに目が引かれる。さすがに新聞小説を中心に研究を続けている劉永文である。詳細な記述になっている。

まず「前言」から紹介しよう。

いきなり樽目録に言及がある。阿英『晩清戯曲小説目』（上海文藝聯合出版社1954）と前出の王継権、夏生元『中国近代小説目録』にならべて樽目録が掲げられる。私は予想もしなかった。光栄に感じて部屋のなかを行ったり来たりしたほどだ。阿

英目録は、いうまでもなく清末小説の基本工具書として著名だ。単行本を中心に据え、雑誌から少し収録した。「創作之部」と「翻訳之部」のふたつにわけたのが特色といえるだろう。翻訳を重視する阿英の見識が示された好例である。増補版である中華書局版の刊行が1959年だ。中華人民共和国成立10周年を記念するものであるならば、劉目録は中華人民共和国成立60周年の１年前に出版された。阿英の晩清小説目より約半世紀が経過している。阿英の該書が178頁だったからこの50年間で劉目録は約５倍に増大した。

劉永文は、樽目録には多くの誤りがある、と指摘する（2頁）。しかし、そこに示された間違いは４件にすぎない。その少なさに目を疑う。例としてあげただけで、隠れた誤りが多いと書きたかったのだろう。

樽目録に収録された北京地区の新聞小説は120篇だそうだ。著者、発行所、年などを具体的に示している（それだけで６頁と４分の１を費やす）。劉永文『清末民初報刊小説目録』（未刊）では北京だけで1,123篇あるという。「少なくてすいません」とあやまるほかない。劉永文は、樽目録の981頁すべてに目を通して上の120篇を抽出したとみえる。大きな労力を使ったといわなければならない。その120篇は、もとはといえば先行する中国人研究者の研究成果に基づいている。研究環境の問題もあり先人は新聞小説にそれくらいの関心しか示さなかったという事実の反映にすぎない。劉永文は後発の有利な立場に立ち、研究環境の変化を考慮せず、外国の樽目録120篇を利用して自国の先輩研究者を非難した。利用したとはいえ、そこまで樽目録を貶めているのだから、劉目録は小説を採取して厳密であることに自信をもっているのだろう。新聞小説でこれだ。私の知らない単行本を大量に教えてくれるのではなかろうか。劉目録に対する期待がいやがうえにもふくらむ。

ただし、違和感がどうしても残る。外国人が作成した目録を大きな紙幅を取って批判することへの感覚的不均衡である。なぜそこまで樽目録を罵らなくてはならないのだろうか。どこか腑に落ちない。120篇が少ないというのは、何に比較してかという問題になるが、たぶん事実だろう。しかし、現在は誰も見ることのできない劉永文の『清末民初報刊小説目録』（未刊）と比較されてもなぁ、という気持ちがある。劉永文の厳密な書き方からして、新聞を基本に追跡しながら清末

小説全体についても当然広く収集し精密に記述しているだろう。そう考えるのが普通だ。だから、少しの違和感を持ちながら私は手元の劉目録に注目したのである。

劉永文が「前言」のなかで指摘する研究界における一般的な欠点は、つぎの２点だ。

ひとつは、「研究者が論文を書くときにはみな２次資料を利用するのだが、深く緻密な資料整理という仕事をやりたがらない」（4頁）こと。

もうひとつは、旧暦と新暦の変換に間違いがあること（5頁）。

このふたつともに劉永文の指摘は正しい。そうであるならば、劉は単行本についても（初版、再版、三版などまでを記載するなど）詳細に記録しているだろう、と私は推測した。

説明によると新聞小説は1,239篇、雑誌小説は1,141篇、単行本小説は2,593部だという。これらを合計すれば4,973件となる。私は、劉目録について作品の一つひとつを点検しはじめた。

新聞小説部分は、すばらしい。少なからず喫驚する。詳しい部分が続出するのだ。その努力と厳格な姿勢にまず敬意を表したい。さすがに新聞小説を主にして研究していて蓄積がある。

小さな疑問を出しておく。

『申報』の1872年に掲載された作品が収録されていない。たとえば、「談瀛小録」、「一睡七十年」、「乃蘇国奇聞」など。それ以外にもいくつかある。

『盛京時報』については、以下の文献と照合した。

宋海燕「《盛京時報》近代小説概況」『明清小説研究』2006年第3期（総第81期）2006発行月日不記

張永芳、王金城、馮涛「《盛京時報》近代小説簡目」『清末小説』第32号2009.12.1

張永芳「《＜盛京時報＞近代小説簡目》補遺」『清末小説』第33号2010.12.1

劉目録にはない作品もある。新聞のばあいは、それだけ資料が散逸しているということだろうか。

『図画報』は珍しい。だが、これを収録するだけで作品別に整理していない。各期の目次を並べるのみ。別の新聞と扱いが異なる（208-217頁）。

雑誌掲載部分において、私の知らない雑誌が収録されており貴重だ。たとえば、『時事画報』、『北清煙報』など。

劉目録の全般にいえることだが、連載開始の月日だけあげて終了日時を示さないものがある。小さいがこれも気になる。

雑誌と新聞について劉永文は「原物あるいはマイクロフィルムをできるだけ調査し閲読した」（説明2頁）とのべている。私はそれを疑っているわけではない。ただ記述の不正確な箇所と作品に取りこぼしがあるのが理解しにくい。

たとえば、『繍像小説』に掲載された創作翻訳の合計36種を収録する。その中の１種を示そう。

> 《活地獄》，第一期至第七十二期，癸卯五月初一（1903年５月29日）至丙午三月（1906年４月）載，作者：南亭亭長。27頁

わざわざ日本語に翻訳するまでもない。なんでもない説明に見える。だが、原物を見れば上記の説明は不正確である。

「活地獄」については最終部分に著者の変更が見える。それを明確に区別して、樽目録第３版では以下のように記述した（典拠は省略する）。

h1618
　活地獄　第40-42回
　繭叟（呉趼人）
　『繍像小説』70-71期　［丙午2.15-3.1(1906.3.9-3.25)］
H1619
　活地獄　第43回
　茂苑惜秋生（欧陽鉅源）
　『繍像小説』72期　［丙午3.15(1906.4.8)］

劉目録のどこが不充分かといえば、呉趼人、欧陽鉅源のふたりを無視したことだ。すべてを南亭亭長でくくってしまった。これでは不正確だ。現在、私は『繍像小説』について上記の説明に「刊年不記」「[丙午2.15-3.1(1906.3.9-3.25)とするは誤り]」と追加している。該当部分に刊行年月日の記載はない。原物をみればわかったはずだ。

また、該誌の終刊をあいかわらず「至1906年４月（光緒三十二年三月）」（27頁）とする。すでに20年前からそれが間違いだと私は主張している。だが、認知されていないらしい。

最近では、夏暁虹「晩清報刊広告的文学史意義」（『南京師範大学文学院学報』2008年第4期）が書かれている。新聞広告の有用性を強調して注目される。それには『繍像小説』の刊行遅延にも言及している。夏論文は新しすぎて劉目録には間に合わなかったということもあろう。

ならば、文迎霞「関於《繍像小説》的刊行、停刊和編者」（『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』2006年第3期2006.5）がある。劉永文はこれを無視する。彼は新聞を中心に研究を進めてきたから雑誌は二の次になったのかもしれない。

作品の取りこぼしとは、翻訳の「俄国包探案」と「三疑案」の２作品だ。たまたま採録し忘れたのだろう。

「単行本小説目録」に入る。記載が詳細であるのがいやおうなく目に入る。

たとえば、商務印書館「説部叢書」の「集」と「編」を明記している。珍しいということができる。しかも、細かな区別をつけているように見える。１例だけ示せば『盗窟奇縁』（233頁）だ。ひとつには「説部叢書九集３編」と記し、別のひとつには「説部叢書１集83編」と区別している。劉永文は、この「九集３編」と「１集83編」がどういう関係にあるのかについて説明しない。なぜだろう。

また、『文明小史』の南亭亭長に「李伯元？欧陽鉅源？」と示す（342頁）。なぜ「？」がついているのだろう。

点検作業を進めていくうちにどこかで見たことがあるような気がしきりにする。なんだったか。なじみの書き方に違いない。

決定的になった証拠をあげよう。

『官場現形記』（248頁）に「東洋文庫」「拓殖大学」とある。また、『三公奇

案』(319頁）には「芥川文庫」を注記し、さらに、『小五義伝』(351頁）に「愛知大学図書館」と書いている。中国の目録になぜ日本の図書館が突然出てくるのか。

わかってしまえばなんということはないのだ。それらは私の『新編増補清末民初小説目録』に記述されている。無断借用したが樽目録第３版にある注記を消し忘れたらしい。

上記の「説部叢書」について説明しよう。樽目録は、「説部叢書九=3」と「説部叢書1=83」に区別して表示した。「説部叢書」の改組があったことを反映させるためにわざわざ書き分けた私の工夫である。樽目録以前にそのように区別している目録はない。それを劉目録はそのままなぞった。

劉目録の単行本部分についていえば、基本的に樽目録をまるごと写しただけ。しかも、翻訳については原著者、原作など研究成果を盛り込んだ箇所は削除している。大規模でありながら不完全な複写だといわなければならない。ならば、単行本部分については樽目録を見る方がよい。その方が手間がはぶけるというものだ。

劉永文は、「前言」において樽目録の新聞小説部分が不十分であることを強調した。私が感じた感覚的不均衡である。つきつめれば、劉目録の単行本部分が樽目録を複写して成立した事実を隠蔽するために、ことさらに強調したような気がする。後ろめたかったのだろう。それにしても、劉永文自身が「多くの誤りがある」と批判した樽目録をここまで大規模かつ不完全に写したというのはいかがなものか。

劉目録について私が行なった点検数は5,070件である。先に示した4,973件よりも増えているのは、「前言」に掲げられた一覧表にある作品も含めて対照したからだ。

以前に、劉徳隆ら各氏からのご教示、孟目録などで増補をすでに行なっている。最終的に劉目録からは691件の追加となった。大多数が新聞掲載の作品である（単行本の例外は１件のみ。『女総会』を追加した。『笑林報』の広告によるのだそうだ。ただし、該作品がはたして刊行されたかどうか不明)。

結局のところ、樽目録は新聞からの採取が少ないという事実をあらためて明らかにした。いわれるまでもなく私はそう理解している。だから、そのように自分

で説明もした。すなわち、樽目録は新聞掲載の作品については今後の課題だとして残したのだ。日本では、見ることができない。そのため作業を継続することがむつかしい。研究情況が変化したのはこの数年来だろう。以前は閲覧することができなかったのが新聞だ。それらがマイクロフィルム化されてきているのが大きな変化だ。すべてがマイクロフィルムになっているわけではなかろう。だが、劉目録などが基本的にその変化のもとに成立している事実を忘れてはならない。

劉永文は「前言」において、資料整理をやりたがらないほかの研究者を批判した。批判したそのご本人が、「単行本小説目録」について樽目録という２次資料を写すとはどういうことだろうか。右から左に、しかも恣意的になぞることは、整理することとは違うだろう。手抜きである。

もうひとつある。旧暦新暦問題だ。劉永文は、新暦で統一したようだが、旧暦のまま放置している箇所がある（『通俗日報』187-189頁。『醒世画報』199頁）。いずれも劉自身のことばを裏切る行為だ。

あとは簡単に触れる。

「晩清小説年表」は、月日まで明らかにして詳しい。ただし、掲載紙誌、出版社を記載しない。作品があるとわかるだけ。

小説索引は、新聞、雑誌、単行本に分けてそれぞれ別個に作成してある。この３種類を統合できなかったのか。利用者からすれば、作品について検索を３回くり返さなくてはならない。不便に感じる。研究者ならばそれくらいの努力をいやがるな、という親切心かもしれない。人名索引がないのは、その延長線上にある教育的配慮ではないか。全ページを丹念に見て対象の作家を拾って行け、という考えだ。樽目録のように人名索引をつけたのでは、研究者にラクをさせてダメにしてしまう。これこそ究極の親切心だと一瞬思った（まさか）。こういう種類、つまり紙媒体の目録は、索引が完備しているかどうかによって価値が判定される（注：電字版とは区別すべきだ）。特定の小説家がどのような作品を書いたのかを追跡しようにも、これでは検索することが困難である。「単行本小説索引」は必要ではない。なぜなら、単行本小説部分はもとから中国現代音のabc順に配置されているからだ。

結論に近づいてきた。

中国で本格的な清末小説目録が出版されたならば、私は編集作業を中止すると前から言ってきた。だが、このたびもそうはならないようだ。劉目録は単行本についての新発見をまったく提供してくれなかった。翻訳については、原著者、原作名も注記していないというか転写してもいない。現在まで明らかになっている研究成果まで無視することになった。劉永文にとっては荷が重かったらしい。翻訳作品に関しての該目録は一歩後退している。その意味では、劉目録の「単行小説目録」部分（218-391頁）は本来が不必要である。

誤解のないようにお断わりしておく。私は劉目録全体を批判しているのではない。期待が大きかっただけに、不十分な箇所に目が行ったにすぎない。清末小説の研究は、それくらい困難をともなうといいたいだけだ。

考えるのだが、劉永文が作成したという『清末民初報刊小説目録』（「後記」852頁の表記では『近代報刊小説目録』）を出版したほうがよほどよかった。絞り込んだ特色のある目録になっただろう。『晩清小説目録』になぜ無理をして規模を拡張したのか、その理由が不明である。思い当たるといえば、新聞小説目録ではすでに出版されている孟目録と完全に重複するからだろう。そういえば劉永文は、先行する孟兆臣の著作について一言も触れていない。無視するにもほどがある。

利用者からいえば、新聞小説については孟目録と劉目録を併用する。単行本に関しては樽目録を見る。そのように活用するのが適当だ。

最後に、劉目録に対する評価である。

新聞小説部分について１歩前進ではなく半歩前進とする理由は、孟目録が先行して存在しているからだ。単行本部分は樽目録を写しただけだから１歩後退。ついでにいえば翻訳部分の研究成果を写していないからこれも１歩後退。プラス半歩、マイナス２歩だ。以上を総合すれば１歩半後退ということになってしまう。

劉永文を声援するつもりでこの文章を書きはじめたのだが、これでは声援したことにならないか。

『清末民初小説目録』第４版問答

『清末小説から』第102、103号（2011.7.1、10.1）に掲載。上下に分けた。『清末民初小説目録　第４版』(電字版　CD-ROM　非売品）は、紙媒体に印刷していない。CD-ROMに焼いて配布した。その使用方法などを兼ねて樽目録第４版の特色を説明する。問答集のかたちにした。内容は以下のとおり。

上：第４版ＣＤは自動的に起動する／検索は自由自在／索引の問題／本文の変更点など／研究の流れ／劉永文目録など／劉目録の問題点

下：内容は以下のとおり。劉目録の単行本小説／阿英説をめぐって／電字版の問題／文字化けについて／複写、配布自由のこと

１　第４版ＣＤは自動的に起動する

問　樽本照雄編『清末民初小説目録』第４版がCD-ROMで刊行されました（清末小説研究会2011.3.1)。そのＣＤ１枚に「ごあいさつ」が同封されています。その前半部分です。

「『清末民初小説目録』第４版（CD-ROM　１枚）をお届けします。／本目録は、個人電脳で利用することができます。／その環境は、日本語版ウインドウズ（ＭＳ Windows 2003）およびアドビ・リーダー（Adobe Reader。無料の閲覧ソフト。ネットからダウンロードが可能）です。インターネット用のソフト（インターネット・エクスプローラ、オペラ、クローム、ファイアフォックスなどのどれか１種類）もご用意下さい。以上で作動することは確認していますが、その他は、不明です」

文中にある「Windows 2003」というのはなんでしょうか。

答　Windows　XPの間違いです。不注意で誤るというのはいつものこと。連想から生じました。

問　それにしても旧版です。２世代前でしょう。現在は、Windows　7[10]ではありませんか。

答　おっしゃる通り。年刊『清末小説』、季刊『清末小説から』の版下作成に使用しているのがワープロのワード2003です。自分をとりまく研究環境が変わるとわかった昨年秋でした。電脳本体を買い換えたのです。そのとき、使い慣れた旧版をわざわざ探しました。印刷するだけですから基本的な操作ができればいいと割り切っています。その2003に引きずられたところからくる勘違いです。もうひとつ、こちらは実在するWindows 2000を使ったこともありましたし。本文とは関係のないことですが、文章作成は、別の無料エディタを快適に利用しています。

問　このたび刊行された目録第４版ＣＤは、Windows　XP以外では使えないのですか。

答　アドビ・リーダーさえ動けば、だいじょうぶです。第４版はこのアドビ・リーダーを使用することが前提になっていますから。

問　目録全体の構成を教えて下さい。

答　目次をインターネット用のHTMLファイルで表示し、ここが入口になります。点撃して目的の場所に移動する。本体の目録は、基本的にPDFファイルだけです。少なくともアドビ・リーダーを導入していれば目録本文と索引は動く、と。

問　「ごあいさつ」の後半です。

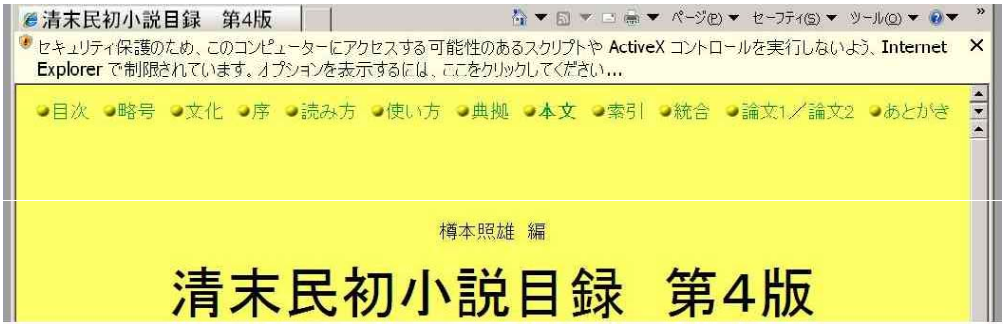
「操作方法は以下のとおり。／１．CD-ROMを装置（トレイ）に挿入すれば自動的に作動するはずです。／２．目次が表示されます。必要な箇所を点撃（クリック）してください。目的のものを表示するでしょう。／操作はそれだけです」

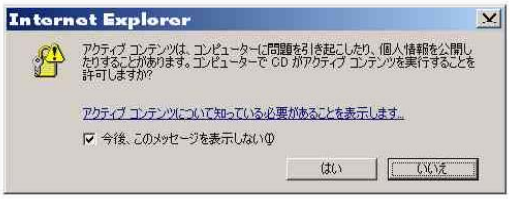
そううまい具合に動くのでしょうか。

答　電脳２台とノート電脳を使用して試験をすませています。ただ、インターネット・エクスプローラ（Internet　Explorer）を使用するばあい、次の警告（質問？）が最初に出てくることがあります。

「セキュリティ保護のため……」、あるいは「アクティブ コンテンツは、

コンピューターに問題を引き起こしたり、個人情報を公開したりすることがあります。コンピューターでＣＤがアクティブ コンテンツを実行することを許可しますか？」です。それぞれの画面を参考までかかげました。





不愉快な文章です。自分が作成したファイルについて機械が文句をつけるのですよ。注意をうながしているつもりでしょう。大多数の人が知らずに使っているソフトですからウイルス攻撃の対象になりやすい。そう想像はします。ですが、いらぬお世話ですね。下の「はい」を点撃してください。

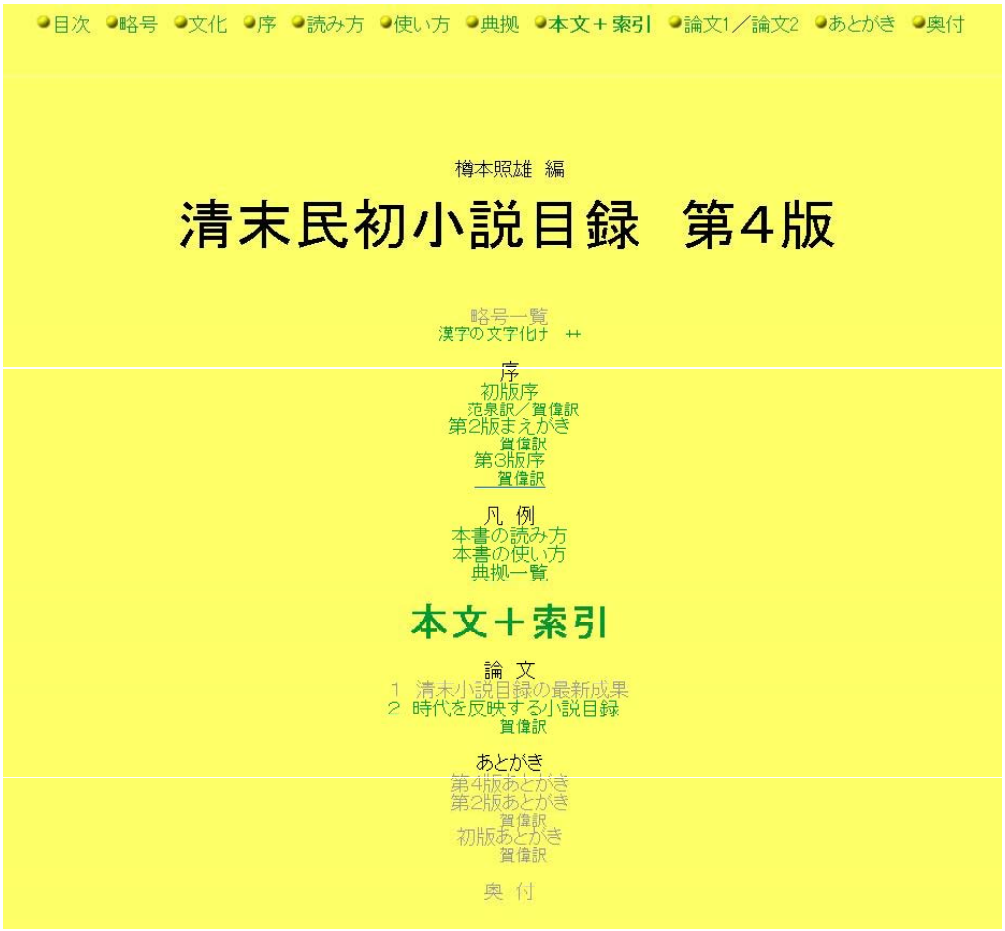
問　Windowsはよいとして、その他はどうですか。アップルとか。

答　マックMacを使用している方から報告がありました。マックでは、自動起動しないそうです。ＣＤにあるファイルからindex.htmlを点撃すれば動くといいます。そうすると、ほとんどの電脳環境で作動可能だと考えていいのではないでしょうか。

問　そのほかの操作はどうなっていますか。

答　インターネットをご利用でしたら、問題はないはず。先ほどのとおり最初に目次がでてきます（これがindex.htmlの内容です)。

使いかた、典拠資料、序、本文、索引、あとがき、奥付などを自由に閲覧できます。また、2010年11月までの清末小説研究会ウェブサイトも丸ごと収録しました。



問　そういえば、研究会ウェブサイトもこの目次も画面が同じです。色までも同一にしたのには理由があるのですか。

答　わざわざ説明するまでもないでしょう。研究会ウェブサイトの設計を目録第４版目次にそのまま流用したにすぎません。

2　検索は自由自在

問　全文検索ができるそうですね。

答　第４版の特徴のひとつです。知りたい事柄について文字を入力するだけ。電脳がその箇所を表示します。作品名、著訳者、出版社などなにもかもが検索対象

に含まれる。

問　全文検索ができるということは、部分検索も可能だと考えていいですか。

答　不都合なのは、著者を捜しているのに作品名が、あるいは出版社名が当たることです。電脳ですから区別をしません。多作の作家だと、検出結果が多すぎてかえって利用しにくいともいえます。これは紙媒体の印刷物でも同じことですが。

問　便利な側面とそうでない箇所があると。

答　電脳は融通がききません。命令されたことしか実行しないのです。たとえば、目的の漢字を探すのですがどうしても当たらない。私が点検作業中にみつけた１例はこうです。字体が異なるばあいは具合が悪い。「天霊 D0493」の漢字を指定しても見つからない。番号「D0493」から探ると「天靈」です。旧字体と新字体の違いが検索不成功の理由でした。そこは修正しておきましたが、そのほかにも不都合箇所が存在しているかもしれません。

問　日本の漢字で検索ができるとしても中国ではどうでしょう。繁体字、簡体字とありますが。

答　日本で編集刊行する目録です。日本の漢字を使用するのは当然だと考えています。アドビ・リーダーは日本漢字も使えますから問題はないでしょう。それ以外は各自で対処してください。文字化けについてはのちほど説明します。

問　検索のとき、そのほかに注意することはありますか。

答　「(劉) 鉄冷」という表示があるとします。劉鉄冷では出てきません。「)」がじゃまをします。鉄冷と短くすれば当たるでしょう。そうすると劉ではない鉄冷に出会うこともあるか、と。ただし、鉄冷に限っていえば実際にはそういう例はありませんでした。樹人ならば、陳、周、朱と３人が存在します。

問　樹人だから魯迅だ、と即断するのは禁物ということですね（注：樹人名の作品がみつかった。それは周樹人、すなわち魯迅だといわれて問題になったことがある。それをふまえる)。

3　索引の問題

問　全文検索が可能であるのはわかりました。そうすると索引は必要だったので

しょうか。縦横に検索ができることが電字版（一般には電子版）の特徴でしょう。二重手間ではないですか。

答　最後まで迷った点です。第３版について言及するなかに、間違いが多いと指摘する声がありました。確かに、ひとりで編集を行なっていますから、誤りから自由ではありません。申し訳のないことです。原因のひとつは、私の親切心があったからだと……

問　親切心とはなにでしょう。

答　索引の作成手順は、普通、本文が作成されたあとに着手すると考えます。本文にしるしをつけて、それらを採取し、まとめて配列し直す。

問　そういう順序ではないのですか。

答　私のばあいは、違います。資料の整理はデータベース用ソフトを使って行なっています。これは普通のことです。異なるのは、本文を作成すると同時に索引も作ります。そうすると作品によっては本文には出てこないけれども索引に収録するのが親切、便利だという気になるのですね。長期間にわたる作業の過程で基準が微妙にブレたのは事実ですが。

問　具体的に説明してください。

答　１例です。「S0912＊　時報短篇小説（第２集)」(番号は第４版）のなかに漢字で托爾斯泰が記載されます。私は、本文にはない TOLSTOI も索引に採取しました。研究の便利を考えてのことです。しかし、本来は存在しない単語を索引に収録するのは、不必要だといわれればそうかもしれません。

問　そのような例はいくつもありそうです。

答　そうですね。もうひとつ（番号は同じく第４版)。

> H0031＊　海底漫遊記　（一題投海記）　15回　（英）露亜尼著　海外山人訳　新小説社　光緒丙午(1906)　盧藉東訳『海底旅行』の海賊版

こちらには JULES VERNE も索引に採取しました。厳密にいうと間違いです。しかし、その前後の並びから採取することがよいと私は判断したのでした。いらないと思われるときは、無視してください。

問　索引の記号をコピペ（複写と貼りつけ）すれば、本文に跳ぶこともできて便利です。しかし、実行するとそれらしきものがないことがあります。

答　そういわれると索引は収録しなかったほうがよかったかもしれません。今後の課題にします（注：樽目録第５版以降は索引を作成していない）。

問　検索速度は遅いといった方がよろしいかと。

答　結局はアドビ・リーダーの問題だと思います。私もガマンできないくらいに遅いと最初は感じました。

問　これでは電字版にした意味がないのでは。

答　本文表示の機能をもつアドビ・リーダーについて、その内部構造は私は何も知りません。利用者のひとりにすぎないのです。元になるPDFファイルを作成するソフトが同じ会社の製品だからというだけです。やってみてわかったことがひとつあります。最初に最低でも17-18回の検索を試みる。素人の推測ですが、リーダー自身は、そのあいだに別の場所で索引を作成しているらしい（違っていたらすいません）。それをすぎると一瞬にして目的の場所に跳びますから。

問　ＣＤのままで使用していると、いつまでたっても瞬間移動は実現しませんけど。

答　試してみる価値があるのは、関連ファイルをハードディスクに複写することだと考えます。ファイルの「5.pdf」は目録本文、「6.pdf」が索引です。統合したのが「10.pdf」になります。これらを点撃すると直接操作ができます。速度をあげる近道です。私自身は、関連ファイルをハードディスクに複写して見ています（注：アドビの問題ではなかった。電脳本体の機械的能力に依存している）。

４　本文の変更点など

問　第４版では、新聞小説が大幅に増補されているようです。変化のひとつですね。見た目でいえば、本文に小さな変更があります。作品を創作と翻訳に分けて（マーカーによる）色づけしている。自動的に着色したのですか。

答　えッ、そんな便利なソフトがあるのですか。

問　エッ、そんな便利なソフトはないのですか。そうでしたら、色分けにしても

手間のかかることで……

答　翻訳作品には番号に「＊」をつけて区別したのは第３版でも同じです。ただ、電字出版で部分的に色をつけることはそれほどむつかしくはありません。念のために着色しました。厳密にいうと創作と翻訳に２分するだけでは不十分なのです。中間に位置する作品もありますから。

問　中間といいますと、なんでしょうか。

答　作品集ならば、創作と翻訳の両方を収録している書籍です。そういう書籍は、どちらに分類するのか。個別の作品にしても、創作のようであり翻訳でもあるもの。さらには、明らかに外国作品を下敷きにしているが、登場人物、舞台は中国に書き換えてある。創作を装った翻訳作品も隠れています。こちらは、研究をまたなくてはなりません。臨時に創作としましたが、問題は後まで残ります。二分したのは便宜的なものだと考えてください。

問　戯曲は小説目録に収録すべきではない。一部でそういう意見があるようです。

答　雑誌などの「小説欄」に戯曲が掲載される。私の編集方針で、それらも収録します。ご意見があるのは知っていますが、削除しません。戯曲です、とそのまま注釈欄に記入します。不要ならば無視してほしい、といっているのですがね。わかっていてしつこく論文にする中国人研究者がいます。業績が必要なのでしょう。第４版には、阿英「晩清戯曲録」(『晩清戯曲小説目』1954／増補版1959）も追加しました。しかし、これからも増やすかどうかは考慮中です。

問　典拠資料を略号で示して［ ］と（ ）が混在しています。区別しているのですか。また、英文の大文字と小文字表記があります。意味が異なるのでしょうか。

答　［ ］はまとめて多くの情報を提供してくれるもの、（ ）は各論文の著者、あるいは情報提供者を示すつもりでした。ところが、注記作業を長く続けているとそれらの区別を忘れそうになる。カッコの違いに特別な意味はないと考えてかまいません。英文の大小文字も同じことです。

問　作品集に収録された作品は、個別に独立させたようですね。

答　新聞、雑誌掲載の作品は、１作品１項目で掲げるほかに方法はないでしょう。そうならば、作品集もバラして作品ごとに独立させる。それが当然だと考えました。ただし、不徹底であることを否定しません。しかし、現在は全文検索が可能

になりました。基本的情況が変化したといっていいでしょう。編集方針もかわるわけです。

問　典拠資料に［樽本］を明示した理由はなんでしょう。

答　もともとは私の心覚えのためです。所蔵していることを失念してしまい、２度買い、時には３度かさなることがあるからです。利用者には直接の関係はありません。ですから前の第３版では、最終的にその箇所全部を削除しました。さらに説明文にも、日本では２次資料を利用することしかできない、と書きそえたのです。その結果、ある誤解を生むことになりました。その言葉通りに理解する中国の研究者がいます。私が実物を見ずに目録を編集したと受け取った。これには驚きました。謙遜がすぎたのかもしれません。

問　実際はいくつかの雑誌、単行本については実物で確認しているということですね。いちいち注記していないものもある、と。

答　目録本文を見れば、ある程度実物を見ていると理解できるだろう。そう思ったのですが、違いました。しかたがありませんね。今回も、手元にある最近の版本を注記したりしなかったり。その表示も全部というわけではありません。こちらも、とばしてくださるようお願いします。

5　研究の流れ

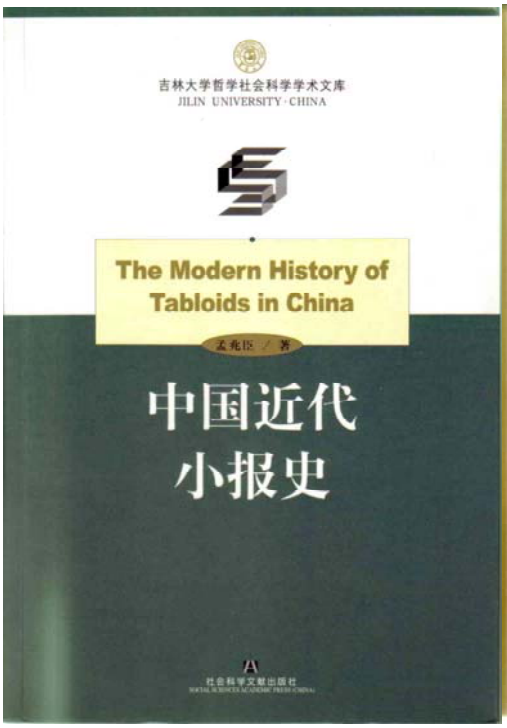
問　いま、『清末民初小説目録』を出版する理由はなにでしょうか。

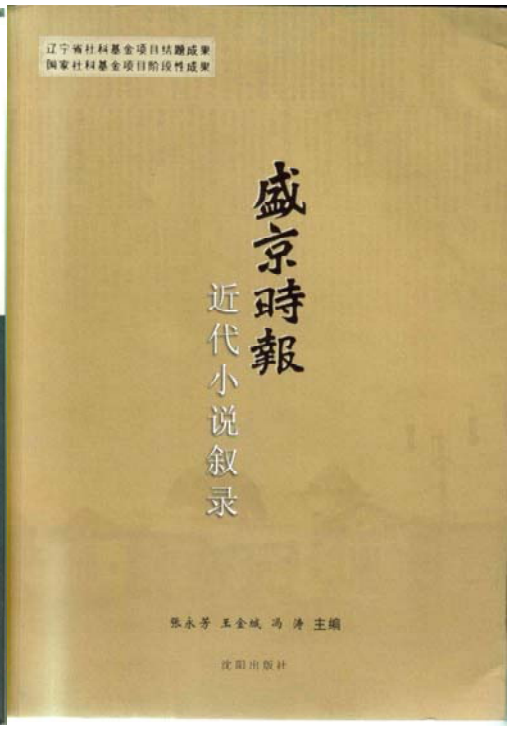
答　本目録は、初版（1988)、第２版（1997)、第３版（2002。中国で刊行）と編集刊行してきました。第３版を出したあと、漠然とですが考えたものです。中国で本格的な目録が編集出版されるはずだ、と。それまで中国では、清末と民初の両方を対象にした小説目録はありませんでした。もっとも、今もありません。中国人研究者が編纂したもの、という意味ですが。不思議といえば不思議です。阿英「晩清小説目」(前出『晩清戯曲小説目』収録）が長く権威を保っていた。民初小説は、まるで存在しないかのようでした。わずか20年前までの情況です。

問　中国で開催された研究会において、誰かがなにかを発言していませんでしたか。

答　潘建国「近代小説的研究現状与学術空間」(『文学遺産』2006年第１期）ですか*1。潘は、樽目録に誤りが多いと批判しました。そのうえで、真に完全で信頼できる『中国近代小説総目提要』の編纂を提案したのです。目の前にある研究、または目録などを批判するときは、自分なりのものを作成して準備しているはず。少なくとも私はそう考えていました。ところが、潘は違います。なんの用意もしていなかった。あれから５年はたっています。音さたはありません。潘の発言は無責任だといわざるをえませんね。口先だけの提案なのですから。行動がともなわなければ信頼を得ることはできないでしょう。ただし、理想をかたった潘提案によって、私は先入観をうえつけられたかもしれない。つぎに中国で刊行されるのは、実物を確認して編集された小説目録に違いない、と。

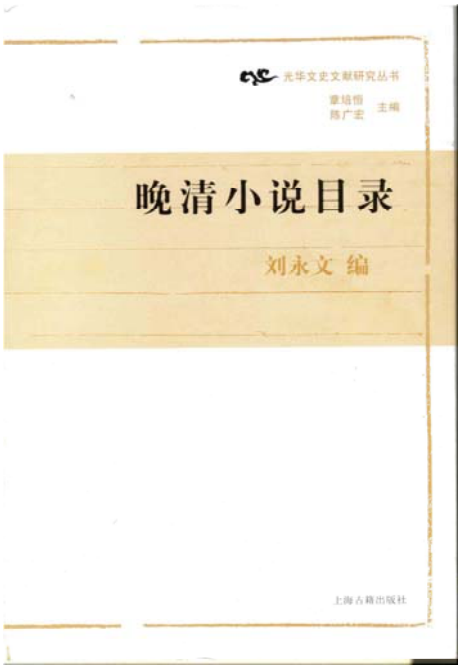
問　いっぽうで最近の新しい流れとして新聞小説研究があります。たとえば、孟兆臣『中国近代小報史』(2005）が出版されました。また、特定の新聞を対象にした目録も出現しています。





答　そうです。張永芳ら「《盛京時報》近代小説目」が、『清末小説』第32-33号

に掲載されていることはご存じでしょう。単行本になりました。張永芳、王金城、馮濤主編『《盛京時報》近代小説叙録』(2010）です。小説内容を要約しています。こちらがもとの形なのでしょう。



問　時間は前後しますが、そういう流れのなかで劉永文編『晩清小説目録』(2008）が出版された、と考えてよろしいですか。劉目録は「光華文史文献研究叢書」の１冊だそうです。この叢書は復旦大学古籍整理研究所が編集していると書いてある。

答　書名を見たとき、潘建国の提案が実現されたのかと思いました。実物にもとづいた真に完全で信頼できる目録です。しかし、劉目録を入手してみると中身が違う。内容要約ではない、所蔵を明らかにしているわけでもない、一部を除いて創作と翻訳を分けてもいない。基本的に異なるのは、民初をはずして清末に限定しているところです。

問　ご感想をどうぞ。

答　潘提案があったあとですから、私は、劉目録が刊行されるのを心待ちにしておりました。『晩清小説目録』という書名からして阿英の「晩清小説目」を継ぐ意図が明確です。劉目録を紹介した広告文（『古籍新書報』2008）を読むと、新聞雑誌と単行本について大規模に収集したとうたっています。そうとう大きな目録らしい。これは楽しみです。おまけに私を名指ししている。「単行本小説の2,593種は先人の成果を多く利用し、これは日本の学者樽本照雄の『新編増補清末民初小説目録』［第３版］に対してのとてもよい補充となる［単行本小説2593種則多利用前人成果，是対日本学者樽本照雄《新編増補清末民初小説目録》的極好補充］」（［第３版］はおぎなった)。この文面をすなおに見れば、樽目録に対して大いに補充した、つまり増補したとしか読めません。広告の文章だとはいえ中国の研

究者のことですから、「とてもよい補充」だといえば、大規模で多数で堅実で詳細で空前だと思うではありませんか。私の知らないどんな小説群があるのだろう。劉目録が具体的に教えてくれると思ったのです。

問　書評を書いていましたね。

答　「清末小説目録の最新成果――劉永文編『晩清小説目録』について」(『東方』2009年５月号。注：初稿を本書に収録する）です。ほかにも書評が発表されました。また、劉目録の誤りを指摘する文章もあります*2。その指摘については、また後で述べます。

6　劉永文目録など

問　劉目録の内容はどうなのでしょう。

答　私の書いた書評と重なる部分があることをあらかじめご了承ください。新聞小説については、孟目録と同じくらいに役立ちます。そこは明記しておきます。新聞小説は、いいのです。同じように新聞小説をあつかう孟目録と内容が部分的に重複しようとも（孟目録は清末民初をこえて1948年まで、劉目録は清末のみ)、それらふたつを参照すればよいだけです。

問　問題は、単行本小説部分だと。

答　潘提言によっていだいた先入観は、劉目録に対する思いこみになりました。劉永文は実物を確認してから目録を作成した。これです。彼は説明2頁で次のように説明しています。「雑誌および新聞目録を編集するとき、私［劉永文］はできる限り原物とマイクロフィルムを閲覧した。よって先輩学者の目録に対して多くの補充になる［在編著期刊和日報目録時我尽量査閲原件和縮微胶巻，因此対前輩学者的目録多有補充］」。劉は、原物を閲覧したことを強調しているのです。

問　説明1頁の主要参考資料にも、上海図書館、北京国家図書館、復旦大学図書館が所蔵する近代雑誌、新聞の原物およびマイクロフィルム、と力説しています。また、「後記」にも書かれていますよ。博士課程で学んでいたとき、必要な授業以外は大部分の時間を上海のいくつかの図書館ですごした。あるいは、それぞれの新聞は各地の図書館に分散していて、彼はこの仕事を知識分子の肉体労働だと

称していた、とか。さらに、博士研究員（ポスドク）になってから復旦大学と上海図書館の間を、上海と北京のあいだを奔走した、ともあります。

答　たしかに原資料を求めて東奔西走したのでしょう。研究熱心な人に違いありません。ただ、先輩研究者は新聞小説に関心を示さなかった、と責めるのは酷だと思うのです。中国の先輩研究者にかわるというわけでもなく説明すると、研究環境が以前とは異なります。ひとつをいえば、現在だからこそ新聞のマイクロフィルムも目にできる。以前は、そういう情況ではありませんでした。阿英目録がいい例です。新聞小説はほんの少ししか収録していません。それよりも、清末民初小説を研究することはタブー視される時代があった、といったほうがよろしい。情況が違うとはいえ、率直にいって劉永文の資料探求にたいする情熱には頭が下がります。

問　そのうえで、『新編増補清末民初小説目録』(第３版）には誤りが多い、不足している、と批判を繰り広げています。劉目録の前言2-3頁ですが。

答　具体例もあげている。北京地区の新聞小説について収録が不十分だと指摘しています。前言に６頁半も費やして樽目録から作品を選び出し、実際にはその約10倍はあるというのです。自分で調査した結果にもとづいているから自信満々ですね。それにしても、外国人の編集した目録を強く批判する。ここに私は違和感をいだきました。なぜそんなに力をいれるかな。

問　劉永文の批判を注意深く読めば、それらはすべて新聞小説関連です。

答　樽目録には新聞小説が収録不足だ、と私はすでに説明しています。私が認めているにもかかわらず劉永文はそのことを重ねて批判する。そこらあたりが違和感の生じるひとつの原因だったのかもしれない。劉永文は、新聞小説を中心にして研究を進めてきたのでしょう。実物を手にしていたからこそ自信をもって樽目録を批判したし、またそれが可能であったということです。そこで単行本小説の問題になります。

7　劉目録の問題点

問　劉目録単行本小説部分のどこが問題なのでしょうか。

答　資料閲覧のために図書館を巡ったというのは事実だと思います。疑っているわけではありません。劉永文が強調したのは、苦労しながら実物を閲覧したことです。さらにこう書いています。「紙幅の制限により先輩学者の目録を引用するときいちいち注記することはできなかった［由於篇幅的限制，引用前輩学者的目録時未能一一標注］」。これは参考文献が多いばあいの常套句です。逆にいえば、参照した目録の全部を注記するとページ数が増える、それほど多くの目録を参考にした、という意味です。その間にはさまって次の文章があります。「単行本小説目録に掲載した2,593部（再版小説を含む）は、先輩学者の目録を多く参照引用した［単行本小説目録所登録的2593部（包括再版的小説）則多参考、引用前輩学者的目録］」。文章の前後のつながり、文脈からして、原物を見て確認し、それにくわえて先輩学者の目録も参照した、と読みました。「先輩学者の目録」もかなりな数にのぼるらしい。なにしろ、「いちいち注記することはできなかった」とことわるくらいですから。

問　少しまとめます。先には潘提案――真に完全で信頼できる目録の作成、がありました。また、劉目録の広告では、樽目録に対してのとてもよい補充となる、があります。これらが頭のすみに残っていたということですか。

答　中国の研究者だからこそできる仕事です。図書館をめぐり歩き、新聞雑誌を閲覧した。同時に単行本も手にしていちいち確認しながら目録を作成したのだろう。劉永文がくりひろげた樽目録批判の激しさを見ても、どうしてもそう受け取る。しかし、単行本小説についていえば、実は違った。

問　どう違ったのですか。

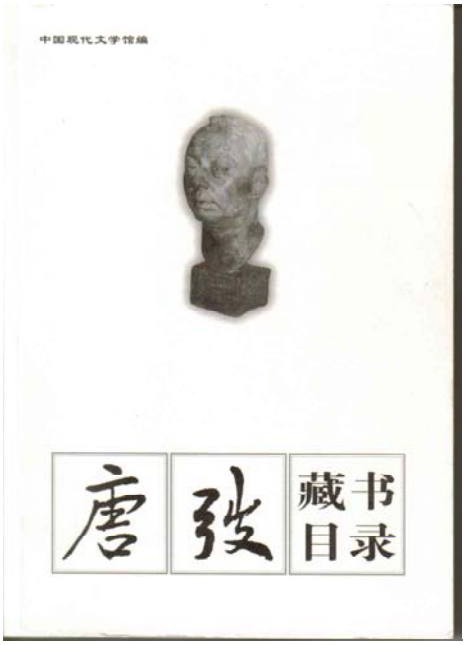
答　期待が大きかったぶん失望もそれに見合うものでした。はっきりいいまして、広告文が名指しして樽目録に対して「とてもよい補充となる」というのは間違いです。方向が逆ですね。正確に書くとすれば、樽目録を参照利用した、ことばをかえれば引き写した、となるでしょう。結局のところ、樽目録に追加できる単行本作品はありませんでした。なにも教えてくれない。肩すかしをくらった感じです。また、劉永文がいう「先輩学者の目録」は複数だと思われた。

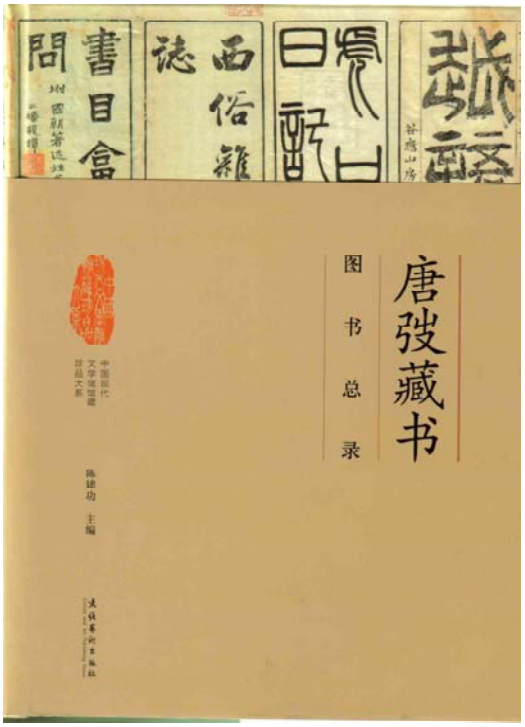
問　説明1頁「主要参考資料」には、樽目録を含んで５種類があげてあります。意外と少ないようですが。

答　参照したが掲げていない資料もあるのでしょう。しかし、それらのなかで主として引用したのは樽目録からだった。そんな事実を誰が想像するでしょうか。おまけに、不完全な引き写しです。

問　それは本当ですか。贋ディズニー、贋ドラエモン、贋ガンダムなどの遊興業界ではないですよ。本場中国の研究者が自国の小説に関して、外国人の編集した目録から引き写すというのが、今ひとつ理解しにくいです。さきの広告では樽目録について補充できる、と書いてあるではないですか。増補しているとはっきりいっています。それが虚偽だということですか。まあ、ものが目録です。記述するといっても書名、著訳者名、出版年くらいのことでしょう。限定されているのですから、偶然の一致ではないですか。

答　偶然の一致ね。都合のよいことばです。目録は誰が作成しても同じになるはずだ、といいたいのでしょう。中国の研究者が私にむかって「事実は誰が発見しても事実にすぎない」と言ったことを思い出します。そういう考えでは研究の前進をのぞむのはむつかしい。発見者の功績を認めようとはしないのですから。独自性といってもかまいません。





問　目録は誰が作っても同じだ。これのどこが間違いなのか、もうすこし説明をおねがいします。

答　唐弢の蔵書について２種類の目録が作成されました。ひとつは、中国現代文学館編『唐弢蔵書目録』(刊年不記[2003]内部交流資料）*3です。もうひとつは、陳建功主編『唐弢蔵書・図書総録』(北京・文化藝術出版社2010.10　中国現代文学館館蔵珍品大系）*4といいます。もとになった書籍は、当然同じものです。しかし、ふたつの目録を見比べると、著者名、とくに外国人名の漢字表記が異なる、発行年が違う、前者は「説部叢書」「林訳小説叢書」という名称を採録しないが後者は採取する、などです。多すぎていちいちあげることはできません。同一書籍を手元において、どうしてこうも記述が異なるのか、といぶかります。

新譯解頤語
叙言
矛广
譯述

問　はあはあ。

答　実物を手にすることの重要性はいうまでもないでしょう。しかし、実物を見ていても誤る。上の唐目録がそういう例です。また、漢字そのものが問題ということもある。

問　普通に使わない漢字も多くあるのでしょうね。

答　現在の電脳環境において、漢字問題はほぼ解決しています。しかし、不都合なことも残っている。「(新訳　滑稽小説）解頤語」は、『月月小説』第１年第７号と第９号に掲載されました。第９号の著者名は、新广とあり周桂笙の筆名です。广も厂も庵のことです。こちらはかまいません。むつかしいのは第７号のほうです。写真のように書かれています。

「矛广」の「矛」は、なんでしょう。読むことができません。よく見ると作字したらしい。「采」で代用する目録もあります。采广とか采厂とか。正確ではないにしても、それでやりすごすことができる。そういう作品だという判断でしょうか。杜慧敏『晚清主要小説期刊訳作研究（1901-1911)』(2007）では、「(采）厂」(367頁）とカッコをつけました。注意をうなが

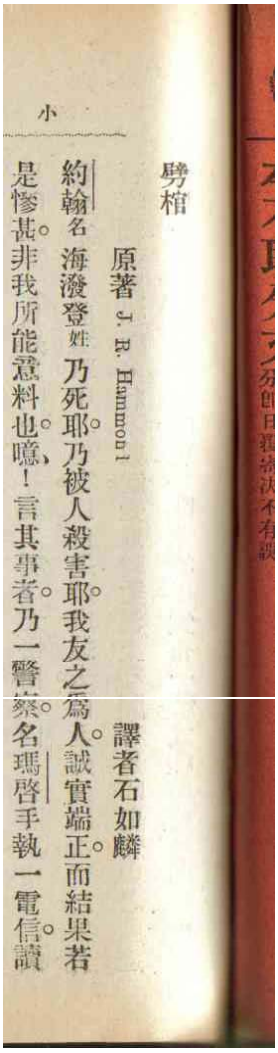
している。原文どおりには印刷できないので保留したという意味でしょう。やむを得ない処置ですね。

問　えらく細かいことです。普通にはとばして気がつかない。

答　また、印刷事故によって生じた誤解もあります。

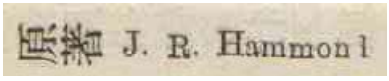
問　なにでしょう。

答　劉目録の間違いを指摘した王鑫（略号は［指瑕］）から１例を紹介します。



「(短篇小説）劈棺」(『小説林』第11期）です。劉目録71頁は雑誌を「第10期」と誤っている。王がそう指摘するのはよろしい。たしかに劉目録の誤記にちがいありません。問題は、その原作者の名前です。［指瑕169］は、原文はHammonlであると指摘しました。

王は実物を見ているから劉目録が間違えたと確信したのでしょう。参考までにその箇所を拡大しましたからご覧ください。



どうですか。実物を手に取れば、Hammondは「d」の活字が不鮮明で、Hammonlに見えるだけです。英語活字の「l」であれば前の「n」に密着します。実物を見ても、間違うときは間違う*5。

問　細かすぎてめまいがしそうです。雑誌がすぐに目の前にでてくるところを見ると、所有するのが影印本だからですか。

答　実物と影印本は違います。私は、『小説林』原本を見て目録を作成しました。国立国会図書館にかよった昔（1974）のことです。マイクロフィルムを紙焼きにしています。また、香港で出版された影印本も購入しました。そのほかに原本の一部を書店から買っています。同じ資料が重複するのはしかたがありませんね。ここに掲げた写真はその実物のほうです。

8　劉目録の単行本小説

問　なるほど。活字本の目録といってもそう簡単ではない、と。さて、劉目録が単行本に関して樽目録から「引き写した」という根拠はなんでしょう。

答　簡単なことです。樽目録だけにある記述が、劉目録にも存在している。樽目録の注記に、東洋文庫、芥川文庫、拓殖大学、愛知大学図書館などを記載した箇所があります。それらは日本の図書館、大学です。それと同じものが、なぜ劉目録にも見えるのでしょうか。日本の関係機関が劉目録に出てくること自体が奇妙です。

問　それは書評で読みました。「説部叢書」の編成に関わる数字の区別についても説明がない、とか。

答　こういうのはどうでしょう。

問　まだあるのですか。ここは変だ、という箇所ですよ。

答　一般的な間違いではなく、日本語がからむ独特のものです。

問　日本語といいましたね。目録第３版は、中国の斉魯書社が刊行しました。全文が漢語に翻訳されたのではないのですか。

答　実物を見ればすぐ理解できます。目録本文には日本語を使って説明している箇所があるのです。版下を樽本が作成し、斉魯書社はそれを印刷製本しただけです。もっとも、序、使用法、あとがき、収録した日本語論文などは賀偉氏が漢訳しています（ついでにいうと、賀偉訳とあるためか、目録第３版は中国人研究者が大幅に増補したという説明を読んだことがあります。間違った説明であることはいうまでもありません)。

問　日本語の説明文が劉永文には理解できなかった。それでおかしなことになった、と考えてよろしいでしょうか。

答　そんなところですね。ドイルの漢訳ホームズ物語です。書名が『泰西説部叢書之一』という翻訳書があります。「叢書之二」も出たのか、と質問がでそうですが、そちらはないらしい。それにしても奇妙な書名です。阿英目録では140頁に掲載されていますからご覧ください。収録作品名に誤りがあります。本来はひとつの作品であるはずのものが、「紳士」と「海姆」に分けられたのです。明ら

泰西說部叢書之一　英柯南道而著。黃鼎張在新合譯。光緒辛丑（一九〇一）刊。
毒蛇案
紅髮會
寶石冠
紳士
披斯夸姆命案
海姆
希臘詩人

かに阿英の間違い。以後、多くの研究、目録がその誤りを踏襲しています。

問　なぜ阿英の記述間違いだとわかるのですか。

答　私は上海図書館で該書を閲覧したことがあるからです。複写は許可されませんでした。見ただけですから注釈欄には［樽本］と記しません。実物を見た、と書いたほうがよかったですか。

問　作品ふたつではない、と。では、それはなにですか。

答　実は、もとがひとつで「紳士克你海姆」といいます。引き裂かれた翻訳名というわけ。原作は“THE ADVENTURE OF THE REIGATE SQUIRE /THE REIGATE PUZZLE ライゲイトの地主”です。

H0081＊
海姆[T]
（英）柯南道而著　黃鼎、張在新合訳
『泰西說部叢書之一』（啓明社）光緒辛丑(1901)
ARTHUR CONAN DOYLE “THE ADVENTURE OF THE REIGATE SQUIRE /THE REIGATE PUZZLE” 1893.6。正しい作品名は紳士克你海姆[大典35] は阿英の誤りを踏襲する [編年88]は阿英の誤りを踏襲する[劉脫252]阿英の誤りを踏襲する

第３版を引き継いだ第４版の該当個所

樽目録第３版では、「h0057*海姆」221頁と「s0479*紳士」628頁に分けて掲載しました。ただし、それぞれに「正しい作品名は紳士克你海姆」だと注記しています。また、「s0509*、s0510*紳士克你海姆」630頁も別に掲げたのはいうまでもありません。こちらにも「作品名を紳士、あるいは海姆とするのは誤り」と説明しているのをご自分で確かめてください。

問　劉目録には、それらの注釈は見あたりません。その部分は削除したと考えていいですか。それが「不完全な引き写し」だ、と。

答　彼はたぶん日本語を理解しないのでしょう。わからないから事実関係を無視したと思われます。「紳士克你海姆」は、樽目録にのみ掲げている作品名です。

他の目録では見ることのできない作品を劉目録は収録している。原作を指摘した箇所は無視して残りを引き写したのです。おかしな箇所はそれだけで終わりません。

問　以上でもう十分な気もしますが……

答　そうおっしゃらずに、お聞きください。上の「紳士」と「紳士克你海姆」の配置場所が問題です。冒頭が同じ「紳士」ですからふたつは続けて、あるいはごく近くにまとめて配列されるはずです。作品は、現代漢語音のabc順で並べていますから。ところが、私の不注意によって「紳士克你海姆」は、１頁も後方に紛れ込みました。つまり、配列について樽目録は誤ったのです。ところが、劉目録もふたつを離して配置するという同じ間違いをおかしています。

問　単行本の配列については、樽目録を参照した（説明2頁）とあります。劉永文は誤りに気づかなかったのでしょうか。中国人が現代漢語のabcを間違うのは不思議です。

答　なにも誤った配列まで引用複写することはないでしょう。機械的に写しただけ。検討する余裕がなかったのかもしれません。

９　阿英説をめぐって

問　劉目録は、「光華文史文献研究叢書」の１冊です。叢書の編集者は気づかなかったのですかね。

答　誤解しないでください。私は批判しているのではありません。単に「なんでそんなことするかなぁ」と思っているだけ。私は失望したと同時に疑問を持ちました。彼の「後記」には、清末新聞小説研究を主題にして修士論文を執筆し、博士号を取得した、と書いてあります。彼が作成したのは、新聞を中心とした『清末民初報刊小説目録』(前言6頁、また『近代報刊小説目録』後記852頁、さらに称して『近代報刊小説目録初編』後記853頁）だそうです（2011年現在、民初部分は未公開)。

問　題名を見るかぎり、新聞雑誌小説が中心です。

答　なぜそれではいけなかったのか。新聞雑誌小説の目録でいいではないですか。阿英目録の不足を十分に補うことができます。問題はどうしてもそこにめぐって

いくのです。

問　『晩清小説目録』という書名では新聞雑誌小説のみならず単行本を含みますからね。収集範囲を拡大した、というわけでしょうか。

答　考えれば、劉永文は用意した『清末民初報刊小説目録』の民初部分を捨てた。

問　捨てたわけではないでしょう。説明2頁に『民初小説目録』の出版を予告していますから。刊行準備をしているのですよ。

答　そうそう。ご存じのように樽目録は、典拠資料を縮めて記載しています。劉目録には略号［劉晩］を当てました。その理由は、劉の『民初小説目録』が刊行されたときにはその略号を［劉民］にする予定だからです（注：劉永文編『民国小説目録（1912-1920)』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2011.12)。とりあえず、目の前にある清末部分について述べます。劉永文は、『晩清小説目録』という書名にあわせて、単行本小説部分をつけ足した。その時、樽目録を引き写した、あるいは引用せざるをえなかった、と思われます。もとの新聞雑誌小説目録でよかったのです。なぜ目録の規模を単行本小説を含める方向で無理矢理拡張したのか。私が考えつく理由はひとつだけ。類似の孟目録がすでに刊行されています。それを避けるためではないのか。これが私の感想でした。それ以外に説明できる理由はあるのでしょうか。

問　私に聞かれてもわかりません。本人でなければ答えられないでしょう。

答　劉永文の説明には、引っかかる箇所があります。

問　どこでしょう。「前言」部分ですか。樽目録を批判した箇所でも。

答　阿英の主張にかかわる。すなわち、清末時期において「翻訳は創作よりも多い」です。大勢の研究者によって引用されつづけてきました。その阿英の断定が誤りであることを私は指摘したことがあります（1997)。私がそれまでに編集した目録によって実際に数えてみたら「創作のほうが翻訳よりも多い」となりました。

問　劉目録が出版されるはるか以前ですね。劉永文は、多数の新聞小説を収録して目録を編集した。もしかすると、新聞小説を含めて数えなおせばやはり阿英のいう通りだった、ということですか。逆転を再逆転させた、と。阿英にもどってしまうのでしょうか。

答　そうはなりません。その部分を劉の文章から紹介しましょう。

「条件の制約があったために「新聞」に掲載された多くの小説および附録で送られた小説は、まだ全部が合計されてはいない。特に翻訳小説に関する問題は、さらに一歩進めた調査研究が必要とされる。われわれは清末民初小説を研究するにあたって各種の結論を急いではならないのだ［由於条件的限制，衆多“日報”当中登載的小説和随紙附送的小説，還没有被全部統計出来，特別是関於翻訳小説的問題，還需要做進一歩的調査研究，我們在研究清末民初的小説時還不能急於得出各種結論］」(前言3頁)

問　結論を急ぐな。そういうこともあろうか思います。しかし、新聞の実物を閲覧したとあれだけ強調した劉永文にしては、新聞小説はまだ全部ではない、とえらく控えめなことです。

答　それはそうですが、どこか引っかかる。樽本の「創作のほうが翻訳よりも多い」は、阿英の「翻訳は創作よりも多い」に対して主張したものです。樽本が結論を急いでいるのであれば、阿英はもっと急いだことにならざるをえません。樽本説を批判しているつもりで、実は阿英を批判していることを劉自身は理解していない。

問　劉は、彼の意識とは別に結果として阿英を批判した、と。

答　私が提出した「創作のほうが翻訳よりも多い」は、では間違いなのか。それについて劉永文はなにも書いていません。自分の考えを提出していない。歯切れが悪いです。単に結論を急ぐな、とはどう見ても中途半端に思えます。樽本説が誤っていればそれを書かないはずがない。

問　劉目録は、新聞小説を充実させています。しかも、阿英目録と同じ清末が対象です。阿英説を検討するには適任者だといえるでしょう。また、樽本の指摘をわざわざとりあげたのだから劉永文はなんらかの見解を示してもいいのではないか、そういうことですね。翻訳小説研究をさらに一歩進めろ、ともいっています。翻訳小説に興味がありそうですが。

答　そこだけ見ると、翻訳小説研究を重視しているようにも思える。しかし、そういう人が樽目録の翻訳小説原作などの注釈をすべて削除しますかね。矛盾しています。

問　では、別の事情があるのですか。

答　阿英が問題にしたのは、創作と翻訳の割合です。阿英説があって樽本がそれを否定した。これが研究の時間的経過です。劉永文は新聞小説を中心に研究している。その新聞小説のなかに創作を装った翻訳があるのではないか、と疑っているのではありませんか。表面を見ただけでは、翻訳かどうかわからない。研究を一歩深めれば、隠れた翻訳がでてくるかもしれない。そこではじめてどちらが多かったのかわかる、と。

問　将来の研究に望みをたくすとは、劉永文も弱気です。なぜそのように遠回しな発言になるのでしょうか。

答　劉永文は、樽目録第３版の981頁すべてを点検し北京地区の新聞小説を抽出するほど研究熱心な人です。私が推測するに、劉は自分の小説目録にもとづき独自に数えた。ところが樽本の立論をくつがえすことができなかった。それが理由で、思わせぶりで持って回った書き方になったと思うのです。考えすぎですかね。

問　そこも本人でなければ、なんとも……

答　単行本については、当てはずれの劉目録でした。新聞小説部分は別ですから誤解のないように。くりかえしますが、批判しているのではありません。しいていえば、少し驚き落胆して残念に感じるだけです。

問　劉が樽目録を激しく批判したのは、単行本小説部分について引き写したという負い目を隠蔽するためだ。書評にそう書きましたね。考えに変化はありますか。

答　ありません。阿英説についても劉はあやふやな書き方しかできない。彼の空回りする対抗心を感じるだけです。

問　そこは、まあ、個人の受け止め方次第ですから。

答　劉目録を前にして私が理解したのは、自分が必要とする目録は、自分で編集するしかない。これが結論です。いつも同じことを言っている気がします。

問　樽目録第４版「本書の使い方」で「本目録は、あくまでも調査の補助に利用してほしい」と書いています。これはどういうことでしょう。

答　ことばの通りです。清末民初小説研究は、作品そのものから出発するはず。作品に到達するには道具があったほうが便利でしょう。初出が新聞雑誌で、ある作品はのちに単行本になる。その流れを把握したい。つまり、変化の過程がひとめでわかる道具書なのです。

問　劉目録では、雑誌、新聞、単行本のみっつに分離させています。それでは作品の流れが見えない。そうなりますね。

答　研究の最先端を知る手がかりがあれば、さらによろしい。そこから注釈をほどこすという発想につながります。

問　フムフム。あのー、目録が道具であるならば、少しばかり間違っていてもそれほど重要ではない。そういう見方も成り立つのではないですか。

答　ミもフタもないおことば、ありがとうございます。私は、目録の利用者と同時に作成者です。作成者の視点で見ると、劉目録には気になるところがある。それを述べただけです。引き写したどうのこうのというのは余計でしたか。利用者が判断するばあいの材料を提供したとお考えください。

結局のところ私にしてみれば、増補改訂作業を日常的にくり返すだけ。孟目録にもとづいて不足の作品を補充しました。劉目録についても同じ作業をやったのはいうまでもありません。

問　すでに触れられています。劉目録の誤りを指摘する論文です。それについてはどうですか。

答　王鑫「《晚清小説目録》指瑕」(2010。注参照）ですね。細部にわたる王の指摘をご覧ください。細かく点検をしています。ただ、不思議に思わないわけではない。王が検討の対象にしているのは、劉目録の新聞小説と雑誌小説のふたつだけなのです。彼はなぜ単行本小説を避けたのか。その理由はわかりません。

問　誤りをいうからには、新聞と雑誌では実物で確認しているのでしょう。単行本についてはその条件が整っていなかったとか。

答　そういうふうに見えます。全面的な検討をするまでにはいたっていない。つまり、王は自分が現在研究している範囲内で劉目録を点検してみた、ということではないでしょうか。

問　簡単にいえば、どうなりますか。中国においていままで清末民初小説目録が編纂刊行されていない、と聞きました。それが実状なのでしょうか。

答　そうです。単行本小説を含めて総合的な目録が中国で編纂されないのであれば、私が編集作業を継続するほかありません。第４版を編集刊行する理由のひとつです。

10　電字版の問題

問　ＣＤという電字版で刊行する理由は、なにでしょう。

答　第３版が１千頁をこえていました。正確にいえば、本文981頁、索引89頁、ふたつを合計して1,070頁でした。本文は２段組にしましたからそれだけに圧縮できたのです。第４版を紙媒体で刊行することも選択肢のなかにはありました。一応は考慮したのです。しかし、長期間にわたる増補作業の結果、第３版にくらべて作品数が大きくふくらんでいます。版下を作るにしても２段組で２千頁近くにはなるでしょう。これは現実的ではありません。場所ふさぎですし、なにしろ重い。しかも、縮小印刷しますから活字が小さくて見るのが困難です。それらの条件を考えあわせれば、残る突破口は電脳だけでした。

問　電脳といってもいろいろな方式があって、どれでも閲覧できるわけではないでしょう。また、電脳特有の問題もあるはずです。たとえば漢字問題。特にさきほどの「文字化け」といわれる電脳機種に依存して発生する現象ですが。解決困難にみうけられます。

答　おっしゃるように電脳を利用するばあい、正と負の両面があります。

便利な点は、編著者にとって、ページ数を気にする必要がない。これはうれしい。利用者からいえば、活字の大きさを拡大縮小と自由に調整できます。これが電字版の特徴のひとつだといってもいいでしょう。しかも、目録全体について曖昧検索をすることが可能です。作品名の途中部分であっても検索できるのは魅力ではありませんか。印刷屋さんには悪いのですが、印刷費用も発生しない。ＣＤに複写するのは簡単です。郵送料もそれにあわせて低くおさえることができる。これらは経済的に見てよい条件になります。

不便な点は、電脳を持っていなければ利用できない。動かすのに電気が不可欠だ。読みにくい、すなわち長時間の閲読性が低い。書き込みができない、などですか。

問　書き込みについてですが、新しい展開があります。アドビ・リーダーＸ（第10版）では「ノート注釈を追加」することが可能になりました。

答　なるほど、便利です。ただし、ＣＤのまま利用する時は注釈の追加はできないようですよ。ハードディスクに複写して閲覧すれば追加記入もできました。

　第３版でもあの分厚さですから持ち運ぶのには苦労します。まあ、普段に持ち歩いて読むというものではありません。ならば、机上の電脳も同じことです。いまのところスイッチを入れて動きだすまで少し待たなくてはなりませんが。

問　将来的には携帯電脳に複写して簡単に利用できるようになる、と。その時は、即座に読める。卓上電脳も必要ではなくなる。いま話題になっている電字出版の１種ですか。文字化け問題はどうでしょうか。

11　文字化けについて

答　電脳化するにあたり頭を悩ませたのがこの漢字問題です。紙媒体に印刷するならば、それほどむつかしくはありません。最後には、原始的な方法があります。表示できない漢字は、別に印刷したものを貼り込めばよろしい。ところが、個別の電脳に直接表示させるとなると、各自が保持する文字種といいますか字体といいますか、それらが異なる。どうすれば版下に近い状態で表示することができるか、難問です。解決の糸口をみつけることができなくて長い時間が経過しました。ようやくたどりついたひとつの解決策がPDFファイルです。

問　最近よく聞きます。どんな電脳環境でも読めるとか。

答　現在、ネット上に公開している『清末小説から』と『清末小説』は、ふたつともにこのPDFという形です。それ以前は、表示できない漢字には俗にいうゲタ（〓）を履かせておりました。読むというにはほど遠い。紙媒体の補助的な存在でしかありません。

問　文字化けの例をあげてください。

答　「雁叟（また贋叟)」という名前をみかけます。本来の表記は「隻変」です。『月月小説』『民呼日報』『民吁日報』などに出ていますし、また『神州日報』にもあるらしい。談善吾の筆名です*6。中国でももとの漢字は表示できないようです*7。勝手に読み替えて先ほどの「雁叟（また贋叟)」を使用しています。「変」は「叟」ですから許容範囲内です。しかし、「雁（贋)」は同音というだけ。代替

文字にはなりません。苦肉の策でしょう。劉目録はどうか。彼は「獘妾(ママ)」と書いています。「妾(ママ)」とするのはなぜだか知りません。

問　見なれない漢字です。

答　もうひとつ、こういう例もあります。『恩仇誤』(『時事新報』1911）です。劉目録は題名を『恩仇記』と誤り、著者を誹糜(ママ)と表記しています(208頁)。著者名が文字化けです。王は『恩仇誤』に訂正し、さらに「作者：獘妾(ママ)」としました（[指瑕173]）。ここもなぜか「妾(ママ)」です。ただし、陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本)』(2005）は正しく「獘妾」と表示しています（1083頁)。

問　それらの漢字を表示するのがPDFですか。

答　PDF作成に私が使用しているのはアクロバットというソフトです。目録の試作版を別の電脳に読み込ませたところ、一部に表示しない漢字があることに気がつきました。そのことをふまえて第４版には文字化け一覧表を掲載したのです。

問　一覧表をつけただけでは、本文の文字化けは解決しないでしょう。

答　アクロバットをあらためてよく見ると、PDFに出力するとき品質に差をつけることができる。表示する質が高いのから低いのまであるのですね。いいかえれば、紙媒体に印刷できる高品質から、ネットで閲覧するだけの低品質まで。今までそれを知らずに使用していました。初期設定は低品質になっています。研究会ウェブサイトに掲げていたのは、低品質のものでした。これでは表示できない漢字が出てくるはずです。試行錯誤の結果、第４版では特別な漢字も表示する高品質タイプで出力しています。

問　現在のところそれで文字化け問題は解決しているわけですか。

答　私は、PDFを作成するソフトを十分に使いこなしているというわけではありません。普段は見ることのできない難しい漢字をとりあえず表示して利用できるかな、と。その段階で第４版を送り出したということです。

問　ＣＤ１枚におさまっていますが、もし紙媒体で印刷したらどれくらいの規模になりますか。

答　組版によりますからあまり意味のある質問ともいえません。しいていえば、A5判換算で本文3,197頁、索引208頁、合計3,405頁ですね。本文を検索しているとき、「*/3197」(統合版では「*/3405」）と表示していれば、それが元の頁数になり

ます。

12　複写、配布自由のこと

問　紙媒体での印刷はやはり現実的ではなさそうです。最初にもどります。あいさつ文の最後部分です。

「なお、本目録の複写、配布は自由です。必要とする研究者にお渡しください。／お役に立つことができればさいわいです」

複写、配布を自由にした意味はなんでしょうか。ＣＤカバーには「非賣品」という紙がはられていました。

答　目録第３版、すなわち『新編増補清末民初小説目録』の複写が中国のネット上に掲げられているらしいです。お話ししましたか。

問　聞いたような気もしますが。

答　中国の斉魯書社から刊行したあの目録。約１千頁です。それを１頁ずつスキャナで読みとり、まとめてネットに掲載しているらしい。中国人がネットに書き込んでいるのを偶然読んで知りました。無料で入手できてうれしい、などという感想が添えてあったような記憶があります。複写しただけのものでは検索ができません。その点は、紙媒体でも同じです。どうみても手間のかかることをやっている。実物を購入したほうがどれほど簡単かと思いますが。

問　俗にいう海賊版ではありませんか。

答　そうでしょう。第３版は印刷部数が少なかったですから。といいながらネットで検索すると、いまでも日本中国の専門書店では扱っているようです。入手できるかどうかは不明ですが。ほとんど10年前の少部数刊行物です。中国人がネットを経由して複写を利用するのは、品不足か、それとも単なる費用節約のためですかね。よくわかりません。

問　それは置いておいて、無料で配布する意味です。

答　清末小説研究会が利益を追求する組織であれば、とっくの昔に破産しています。小説研究と経済的利益は、基本的に両立しません。非賣品とは、ネット上で

研究会のウェブサイトを開設し、『清末小説』『清末小説から』を無料公開しているのと同じ意味です。今回は、それがＣＤになった。電脳界では皆が知って使っている無料ソフトと同じ、というところですね。便利だからほかの人にも使ってもらいたい。それだけです。

問　今後はどうなるのでしょうか。

答　目録の第４版を出して終了、というわけではありません。これからも増補改訂作業を続けます。時期をみて第５版を出すこともありうる。そう考えてくださってけっこうです。范伯群先生よりいただいた『周瘦鵑文集』全４冊（2011）にもとづき、それぞれの作品に情報を追加しました。また、『唐弢蔵書・図書総録』を使っての本文検討は、すでに終了しています。やるべき作業はいくらでもある、ということです（注：2015年、樽目録Ｘをウェブ公開した）。

【注】

1）樽本「潘建国「近代小説的研究現状与学術空間」を読む」『清末小説から』第81号2006.4.1。本書所収

2）以下のとおり。

凌宏発「晩清小説的演進与流布――評《晩清小説目録》」『古籍新書報』第81期（総第237期）2009.5.28

李慶国「劉永文編《晩清小説目録》」台湾『漢学研究』第27巻第4期（総第59号）漢学研究中心2009.12

王　鑫「《晩清小説目録》指瑕」『明清小説研究』2010年第4期（総第98期）　2010発行月日不記

3）現代文学館に収められた唐弢の旧蔵書。平装本10,595件、線装本418件、雑誌1,452件の目録。清末民初小説が含まれており貴重。参考：于潤琦編著『唐弢蔵書』北京出版社2005.1、舒乙『走進中国現代文学館』上海書店出版社2004.4

4）現代文学館に所蔵された唐弢旧蔵書の図書総録（新聞、雑誌を除く)。1899年以前をひとまとめにし、あとは10年ごとに区切る。1990年代は1997年まで。出版時期の不明のものも巻末に集める。前半に多数の単行本表紙をカラーでかかげる。

5）清末小説研究会ウェブサイトに2011.2.4付で掲載。なお、杜慧敏『晩清主要小説期刊訳作研究（1901-1911)』(上海世紀出版集団、上海書店出版社2007.12）406頁も「Hammonl」と誤る。

ただし、478頁では正しくHammondと表記する。

６）樽本「㜷叟という人物――呉趼人の筆名をめぐって」『清末小説』第12号1989。『清末小説論集』所収

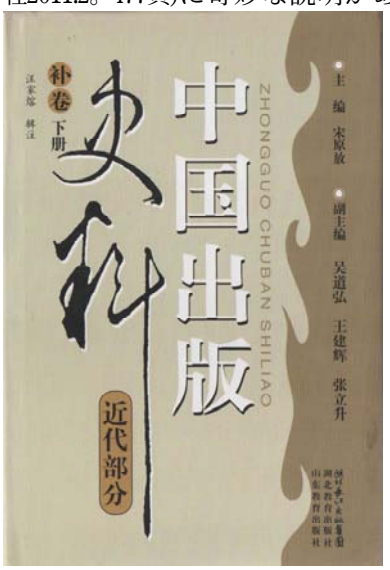
７）陳大康「《民吁日報》与小説有関編年（二）」（『明清小説研究』2009年第3期（総第93期）2009発行月日不記）178頁に表示を工夫している。彼は、つぎのように書く。「作者署“贗（下部貝字換火字）変”」。漢字を扱う研究専門雑誌でも使用できない漢字なのか、とおどろく。

貴重な出版史料のひとつ

——『繍像小説』主編を示す商務印書館の新聞広告

『清末小説』第34号（2011.12.1）に掲載。もとは清末小説研究会ウェブサイト2011.6.13付で公開。今回、表題をつけ、語句を改めた。一部に加筆している。『繍像小説』の主編は李伯元である。当時の新聞広告に発行元の商務印書館がそう書いている。この事実を汪家熔は、認めようとはしない。あいかわらず、主編が誰かは不明だと主張している。彼が編集する『中国出版史料・近代部分』補巻下冊477頁にも間違ったことを注釈に書いた。商務印書館の広告こそが、該書に収録すべき資料であることを指摘する。商務印書館の広告影印を重ねて添付する。

汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』補巻下冊(宋原放主編　武漢・湖北教育出版社2011.2。477頁)に奇妙な説明がある。『繍像小説』に関する注釈だ。

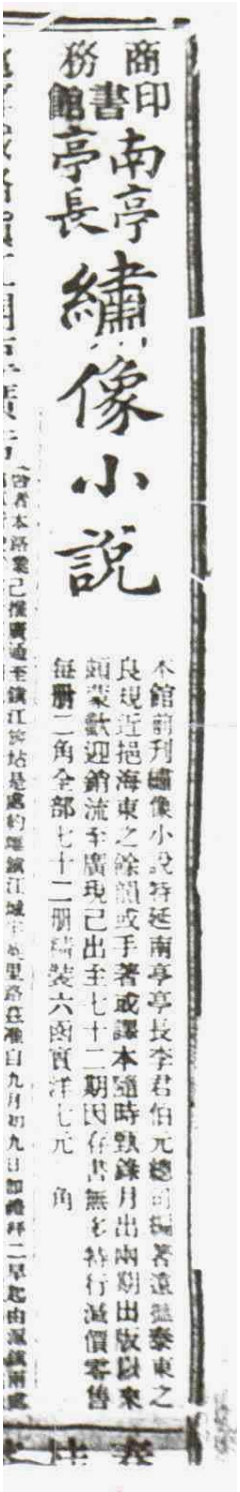


汪家熔は、従来からの彼の自説をここでもくりかえしている。私も反論して同じことを書く。

商務印書館が刊行した小説専門雑誌『繍像小説』の主編は、誰か。

討論がはじまったのは、1984年のことだった。

従来は李伯元だと考えられてきた。汪家熔はそれに対して異議をとなえた。李伯元自身が、そうだとは書いていない。友人たちの証言もない。商務印書館編訳所所長で学者の張元済が、花柳界の支配人という「悪名高い」李伯元を主



編に招くはずがない。つまり、決定的な証拠がない、と主張する。

では、誰か。

彼が取り出したのは夏曾佑だ。しかし、その確証はあるのか、と反論されるとすぐさま夏曾佑説をひっこめた。李伯元自身がそう述べていないのと同様に、夏曾佑も何も残してはいない。

決定的な資料は、商務印書館自身が出した新聞広告だ（別に掲げておく。機会あるたびに示した。ご存じの方もいるだろう。句読点は筆者）。

『時報』丁未九月初三日1907.10.9
商務印書館／南亭亭長／繡像小説
本館前刊繡像小説特延南亭亭長李君伯元総司編著。遠摭泰東之良規，近挹海東之余韻，或手著、或譯本、隨時甄録，月出兩期。出版以來，頗蒙歡迎，銷流至廣。現已出至七十二期。因存書無多，特行減價零售。每册二角。全部七十二册精装六函，實洋七元二角。

版元の商務印書館は、『繡像小説』の編集には李伯元を招請したと公表している。よくご覧いただきたい。

私は、上海図書館におもむき資料を閲覧した。マイクロフィルムで確認した広告は、1907年10月９日、12日付『時報』、1907年10月９日付『中外日報』などだ。同文の広告が掲載されている。(以上は、清末小説研究会ウェブサイト2001.4.19付で公開した。論文もいくつか書いたが煩瑣になるので省略する。同広告は別の日付で新聞に掲載されているが、これも省略)

←1907年10月12日付『時報』（資料提供劉徳隆氏）

汪家熔にあてて新聞広告の複写を送付した。彼は自説の誤りだと認めた私信を私に送ってきた。事実だから書いておく。17年を経て学術討論は終了した。私は、そう考えた。ところが、そうはならない。

汪家熔『中国出版通史』７清代巻（下)(北京・中国書籍出版社2008.12）は、『繍像小説』主編問題をむしかえしている。公の出版物では汪家熔はあいかわらず主編不明説を記述する。商務印書館の新聞広告についても、信頼しがたいと奇妙なことを述べるしまつ。振り出しにもどすつもりらしい。

私は、「『繍像小説』問題」と題してこれにも反論しておいた（『清末小説から』第96号2010.1.1、第99号2010.10.1。本書収録）。

そうして今回の『中国出版史料・近代部分』補巻下冊だ。

編者問題について汪家熔は、李伯元の知人が証言していない、と以前と同じことをくり返して主張している。

汪が注釈にいう。阿英は李伯元だとするが、胡適がかつて調査したことがあって、郷里の親戚が上海にいる李伯元の具体的活動を知っていたかどうかは疑わしい。李伯元の親友である欧陽鉅源の文章にも『繍像小説』を編集したことがあるとは書いていない。当時商務印書館の編集者だった蒋維喬は、李伯元と同郷だがそのことを述べたことがない。ひとつの説明があって（つまり汪家熔の自説のこと)、該雑誌は夏曾佑の編集だという。

汪家熔の説明は、27年前の昔にもどってしまった。

その間に行なわれた資料発掘を汪家熔は認めようとはしない。新聞広告については、まるで存在しないように振る舞っている。

李伯元が主編だという知人たちの証言がない。汪家熔は、それだけに注目する。しかし、主編だとする商務印書館の新聞広告は、彼は視野に入れない。おかしなことだ。

資料を無視しているのではないか、と汪家熔に指摘する『中国出版史料』の担当編集者はいないらしい。あるいは、商務印書館の新聞広告は出版史料として重要だから補巻にも収録したらどうか、と意見を出す人もいない。いたとしても、該巻は汪家熔が「輯注」するのだから、自分の思うように編集して書くのだろう。

【補記】

以下の文章は、2014.3.14付清末小説研究会ウェブサイトに掲げた。本書収録にあたり書き直した。

欒偉平「夏曾佑、張元済与商務印書館的小説因縁拾遺――《繍像小説》創辦前後張元済致夏曾佑信札八封」(『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期（総第174期）2014.1.15）に興味深い手紙が収録されている。

商務印書館の張元済が、夏曾佑にあてた手紙８通を紹介して、おそらく新発見だろう。

『繍像小説』の主編者問題に関連する。

経過をざっと説明すれば、次のとおり。

『繍像小説』の主編者といえば、世界繁華報館の小説家李伯元ということになっていた。

1980年代に汪家熔が、李伯元ではない、と異議をとなえた。

李伯元ではない理由のひとつが、彼の「悪い評判」である。

李伯元は花柳界の指導者（花界領袖）だった。そういう人間を張元済が雑誌の主編者に招聘するわけがない。

それでは誰が『繍像小説』の主編者なのか。汪家熔が従来の李伯元にかわって提出したのが夏曾佑だ（汪家熔「《繍像小説》及其編輯人」『出版史料』第2輯1983.12そのほか)。

それに日本の樽本が反論し、やはり李伯元だ。こうして論争がはじまった。17、18年間くらい続いただろうか。

問題はすでに解決している。

証拠は、1907年の新聞広告だ。商務印書館が、『繍像小説』の主編者は南亭亭長（すなわち李伯元）であると自社広告で公表している。

ただひとり汪家熔だけが、現在にいたるまでその資料の意味を認めていない。研究者としていかがなものか、と思う。

今回の新出資料によると、張元済は夏曾佑にあてた手紙のなかでつぎのように書いている。

「商務館現求助於繁華報館主人李伯元，其筆墨亦平浅，然此外更無人」

執筆の日付は、いうまでもなく旧暦の「四月朔」。欒偉平が注するように新暦1903年４月27日で間違いない。読点は欒偉平が施したもの。写真で確認した。

『繍像小説』の創刊が同年旧暦五月初一日だから、それ以前の情況を書いている。

張元済自身が、李伯元の名前を出して援助を求めている。しかも、この人しかいない、とまで言っているのがわかる。

これによって李伯元主編者説は、さらに強固なものとなる。

汪家熔が李伯元説を否定した根拠が張元済の存在だった。

汪家熔の言葉をくり返す。李伯元は花柳界の指導者（花界領袖）だった。そういう人間を張元済が雑誌の主編者に招聘するわけがない」

張元済自身の手紙に李伯元が出てくる。「招聘するわけがない」どころか、李伯元以外に人はいない、という記述だ。まさに汪家熔の主張を張元済その人が否定している。

夏曾佑あての手紙であることも重要だ。汪家熔が提出した主編者夏曾佑説はあきらかに成立しない。

李伯元研究で留意すべきいくつかの要点

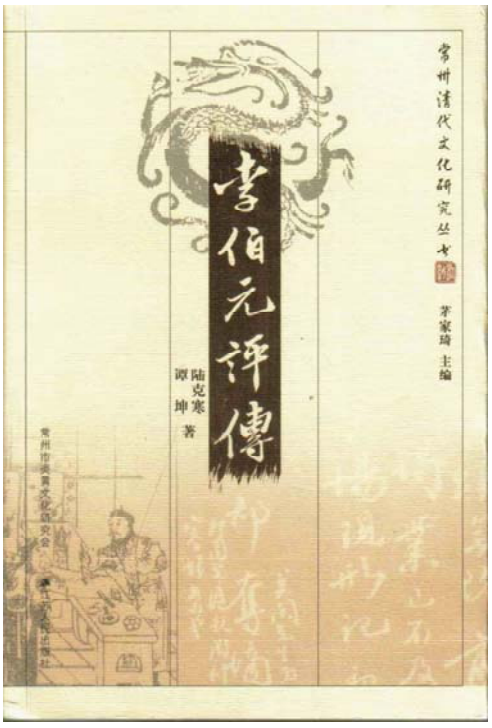
――陸克寒、譚坤著『李伯元評伝』について

『清末小説から』第121号（2016.4.1）に「いくたびかの阿英目録13」として掲載。李伯元をとりまく問題６点を軸にして『李伯元評伝』を点検する。これでまとまった１本だから独立させた。

李伯元の小説関係に問題を絞る。そこには、事実として存在するいくつかの注目点がある。研究というならば、それらを避けて通ることができない。項目を列挙して以下のとおり。

1　李伯元と『繍像小説』の関係――主編問題
2　『繍像小説』の発行遅延問題
3　李伯元死去と彼の作品の関係
4　『官場現形記』海賊版についての裁判問題
5　李伯元と劉鉄雲の関係――特に「文明小史」と「老残遊記」の改竄没書事件と盗用事件
6　李伯元と欧陽鉅源の関係

陸克寒、譚坤著『李伯元評伝』(2012。以下著者を陸譚とする）は、それらについてどのように説明しているか。本稿の目的はそれを点検することにある。注目点の内容を簡単に説明することからはじめよう。



陸克寒、譚坤著『李伯元評伝』
南京・鳳凰出版伝媒股份有限公司、江蘇人民出版社2012.12　常州清代文化研究叢書

1　主編問題

『繍像小説』は、上海の商務印書館が創刊刊行した小説専門雑誌だ。中国最初の小説専門雑誌『新小説』は、梁啓超が亡命先の日本で創刊した。それに影響を受けたといっていい。日本が中国近代小説専門雑誌発祥の地だといえば不思議に思う人がいるかもしれない。清末の中国文学は、日本との関係を除外しては説明できない。無視して誰も書かないが、それが事実だ。

『繍像小説』は半月刊ではじめられた活版線装本小冊子である。全72冊を出して停刊した。

その編集長（主編と称する）は李伯元だ。阿英がはやくから指摘していた。それが長年にわたる学界の定説だった。研究者はそのままをくりかえした。雑誌のどこにも、主編が李伯元（南亭、南亭亭長）だとは明記されていない。だが、阿英の説明に疑問を持った人はいない。

1982年だった。当時商務印書館に勤務していた汪家熔が、李伯元主編説を否定する論文を発表した。李伯元は主編ではないという。

そう主張する彼の根拠は、こうだ。発行元である商務印書館の編訳所を主宰していた学者の張元済が、花柳界の支配人という「悪名高い」李伯元を主編に招くはずがない。李伯元が主編であったという友人の証言がない。

汪家熔は、それを証明する直接証拠を持っていたわけではない。あくまでも状況証拠にすぎなかった。李伯元でなければ誰か。汪家熔は、かわりに夏曾佑を持ち出した。1983年にも同論文を別の雑誌に重ねて公表し強調した。

反論したのは樽本だ。該誌に連載していた李伯元の「文明小史」が劉鉄雲の「老残遊記」から一部の内容を盗用することができたのは、李伯元が該誌の主編だったからだ。これが反論の主旨である。

反論の文章は中国の全国紙『光明日報』に掲載された。日本人が中国人の論文を名指しして批判したものだから注目を集めたらしい。今から考えれば、『光明日報』は樽本の文章をよく掲載したものだと思う。中国人研究者鄭逸梅の意見を同時に登載したのは、確認が必要だったからだろう。少し遅れて魏紹昌も同紙に文章を寄せた。

汪家熔は『光明日報』に反論を投稿し、樽本説とは逆に劉鉄雲が李伯元を盗用したと真っ向から批判した。汪家熔は、自説に都合のいい箇所のみを取り上げて反論しただけ。「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係について彼には知識がないことを自分で公表してしまった。『繍像小説』発行遅延説が出てくる前のはなしだ。

そのやりとりがよほど興味深かったとみえ、中国の『出版史料』が主編問題の特集を組んだくらいだ。こうして『繍像小説』主編問題論争は、日本と中国で長年にわたって継続された。

論争の当初から、李伯元と『繍像小説』および作品２本の盗用事件が、からみついていることがわかる。後に『繍像小説』発行遅延説が、張純により加えられた。全体の様相はより複雑になったといえる。

李伯元主編を証明する複数の資料が新しく提出された。しかし、汪家熔は理由にもならないことを述べてそれらを否定し続けた。なぜそのような資料があるの

かという基本問題を考えようとはしなかったのだ。

2001年、決定的な資料が出た。論争開始から17年後のことである。新聞の出版広告だ。劉徳隆が発見し、樽本が確認した。

すなわち、商務印書館の自社広告に『繍像小説』の主編は李伯元だと公表していた。普通はこれを「動かぬ証拠（鉄証)」という。新聞広告の複写を汪家熔に送ると、彼から返答があった。樽本の指摘する通りかもしれない、と。しかし、それは私信の中だけであった。汪家熔は、公にはその事実を認めていない。そればかりか反論さえした。普通に考えて理解しがたい。実物の証拠資料を否定するのは、研究者がとるべき態度ではない。誤りを認めるとそれまでの自己が否定されると考えたのか。汪家熔にとっては、もはや研究ではなくひとつの信仰になっていると理解できる。

さらに2014年、欒偉平が張元済の夏曾佑にあてた複数の手紙を発掘し公表した。そのうちの１通は、商務印書館が李伯元に援助を求めているという内容である。『繍像小説』を創刊する以前に書かれた手紙だ。該誌の主編について述べたものにほかならない。

張元済書簡の宛先が夏曾佑であるところに注目されたい。夏曾佑こそは、汪家熔の考えによれば該誌の主編であるべき人物だ。汪家熔が主張するように夏曾佑が雑誌主編であるのならば、張元済が彼に李伯元について知らせる理由がない。

李伯元にかわる夏曾佑を提出した汪家熔の主張は、複数の資料によって完全に否定された。

『李伯元評伝』は、王学鈞編著「李伯元年譜」(薛正興主編『李伯元全集』第５巻1997）に資料の多くを依拠している。

専門家の王学鈞は、当然ながら『繍像小説』主編問題を取り上げている。それにもかかわらず『李伯元評伝』は、無視する。説明しない。陸譚の記述を列挙しよう。

「主編《繍像小説》」(42頁)、「他即被聘為這份小説専刊的主編」(75頁)、「他主編《繍像小説》」(77頁)、「主編《繍像小説》」(117、127頁)、「聘李伯元為主編」(145頁)、「李伯元受聘為主編」(273頁)

李伯元が該誌の主編であることだけを言う。あたかも主編問題が存在しないか

のようだ。あるいは、問題が解決していることを知っていているから（そうは見えないが）あえて言及しなかったのか。しかし、言及しないことは、知らないことと結果は同じだ。

2　発行遅延問題

『繍像小説』の発行遅延問題について中国学界は、最近までまったくといっていいほど注目しなかった。

該誌は、第13期より発行期日を掲載しなくなる。この事実を研究者は知らない。雑誌の実物で確認していないのだろう。

月２回の刊行が守られた。李伯元の死去をもって停刊した。阿英がそう説明したのを研究者のほとんど全員がこれも鵜呑みにしている。中国において阿英は研究の権威である。疑問をはさむ人はいない。私は雑誌目録を作成したとき、空白部分に刊行されたはずの月日を記入してみた。推測でしかない。すると第72期は丙午1906旧暦三月になる。李伯元の死去と月まで一致する。なるほど阿英説は正しいと思ったものだ。

1986年に張純がそれを否定した。該誌は発行が遅延していたと指摘したのである。私はしばらく考えて張純の指摘を支持した。独自に新聞広告を資料に使い、今ではより精密に遅延状況を明らかにしている。当時、新聞広告を資料に利用するという発想は中国の研究者にはなかった。

王学鈞「李伯元年譜」は、張純が提出した発行遅延問題を視野にいれている。さすがに、海外の研究状況にも詳しい王学鈞だけのことはある。日本の研究論文も参照している。ただし、遅延の可能性を認めて言及してはいるが、具体性を欠いておりもう一歩の深さがない。具体性というのは、従来いわれていた発行月日からどれくらい遅れていたかを説明することだ。1997年時点での王学鈞は、発行時期のズレを明確にする資料を所有していなかった。それどころか逆行する部分もある。たとえば、「文明小史」第60回で完結した『繍像小説』第56期の刊行を「乙巳七月」(1905）とありもしない期日を提出する(208頁)。実をいえば、その十ヵ月後の「丙午1906閏四月」あたりに第56期は刊行された。この月日を見ただけ

で、それは問題だと気づく研究者はほとんどいないだろう（後述）。

依拠した先行文献がそうだから、『李伯元評伝』の記述も同じように迷走するほかない。

「文明小史」の連載時期を「1903.5(ママ)-1905.9(ママ)」(117、118頁）とする。「1903.5」は新暦旧暦混用だ。ならば後者は「1905.7」と書かなくてはならない。第56期の刊年をそう書いたところで誤りは誤りだ。

275頁で、本年（1905）9(ママ)月、「文明小史」が『繍像小説』での連載を終了した、とするのも同じく間違い。

『繍像小説』の終刊は李伯元の死去によってもたらされた。阿英が断定し長く定説として認められていた。陸譚も『繍像小説』が定期刊行を保持していたと考えているらしい。だが、それとは矛盾した説明をしている部分がある。

李伯元病没後、呉趼人と欧陽鉅源が「活地獄」の続作を執筆した(83頁)。

李氏逝去後，呉趼人は第40-42回を続作し，欧陽鉅源が第43回を続けて、これも『繍像小説』に掲載した(117頁)。

奇妙である。李伯元が死去して『繍像小説』は終刊となった、と陸譚は考えているのではないのか。ところが陸譚によれば死後も該誌は継続刊行されたことになる。つじつまがあわない。

王学鈞がせっかく提示している手がかりだった。しかし、陸譚はそれを利用して問題を追究しようとはしなかった。日本における研究成果にはさらに興味がなかったらしい。

3　死去と作品

『繍像小説』の発行遅延問題は、李伯元の死去と密接な関係がある。

李伯元は、自分の肺病を広告して『世界繁華報』に掲載した（陸譚の言及はない)。上海で逝去したのは、その約一ヵ月後の1906年旧暦三月十四日だった。その時、『繍像小説』は第54期までしか刊行されていない。新聞広告を資料に使えば出てくる解答だ。これが具体的でしかも事実なのである。一ヵ月半にわたって休刊した後に第55期が続刊された。それには李伯元が執筆した（ことになっている)「文明

小史」第59回、「活地獄」第29回が掲載されているのだ。死者が原稿を書くだろうか。

研究者のなかには、李伯元は原稿を書きためていたという人がいる。ただの推測でありその証拠はない。李伯元は自ら肺病広告を出すほどの病人だった。原稿を書く体力があったとは思えない。かりに書きためていたならば、なぜ雑誌の休刊が一ヵ月半にわたるのか。原稿があれば『繍像小説』の刊行を中断することなく続けることができたはずだ。だからこそ、空白の期間は、もとから李伯元の原稿が存在していなかった証拠となる。

「文明小史」「活地獄」などは、李伯元の執筆ではない部分を含む。それを李伯元ひとりのものとして論じることは、すでにその研究基盤が崩壊している。それを考えずに陸譚は『李伯元評伝』を書き進めた。

4　海賊版裁判問題

李伯元の『官場現形記』は、新聞連載（分冊刊行）途中であるにもかかわらず海賊版12回本１冊が出現した。別のいいかたをすれば、それくらい読者の人気を博したのだ。李伯元の世界繁華報館が海賊版作成者を上海租界の裁判所に訴えたのは、1904年のことだった。この時、「官場現形記」はまだ完結していない。

前出王学鈞の「李伯元年譜」は、裁判を1905年の出来事にした(208頁)。それ以上に詳しいことは述べない。当時は資料がなかったからだ。

すると『李伯元評伝』もそれに依拠して、「本(1905)年、『官場現形記』の海賊版が作られ、李伯元は版権を守るため租界の会審公廨（裁判所）へ提訴した」(275頁）と書く。

海賊版事件の経緯と裁判の結果は、その後の研究によりすでに判明している。『李伯元評伝』出版の前だ。本稿では主として筆者と論文名だけを示し要約する。詳細は次を見られたい。（樽本「注目点４：『官場現形記』の海賊版」『清末小説から』第119号 2015.10.1。本書収録）

資料となったのは、新聞の出版広告だ。劉穎慧「李伯元《官場現形記》版権訴訟始末」(2006)が、世界繁華報館と海賊版を製作販売した日本知新社の出稿した

新聞広告を追跡した（関連していえば知新社本の書影は『清末小説から』第115号に掲げた)。それにより両社の応酬と裁判の日時が明らかになった。事件は、中国人支配人席粋甫が逮捕処罰されて終結する。

席粋甫が出した海賊版の広告には、ひとつの特色がある。「日商朝日洋行」「日本知新社」「日本知新社主人弼本氏」「東京金港堂」などの固有名詞をちりばめていることだ。「日本」を強調していることは誰にでもわかる。金港堂は実在する。しかしそれ以外は架空の存在である。海賊版を販売するために席粋甫がでっちあげた。

新聞広告を発掘したのは劉穎慧が努力した成果だ。事件の経過について、広告から得られる事実をそのまま記した。高く評価できる。ただし、最後の詰めがなされていない。裁判だから一般の新聞記事も掲載されているだろうという学問的想像力を持たなかった。結局は広告だけしか見ていない。真相は目の前だったのだが劉穎慧はそれに到達できなかった。

私は、中国から新聞のマイクロフィルムを取り寄せた。それができる研究情況に変化している。以前には想像もできなかったことだ。

探せば、世界繁華報館と日本知新社の広告以外にも記事がある。裁判結果を報道する新聞記事だ。複数の新聞紙に見つけた。そこには中国人支配人席粋甫が日本人になりすまして海賊版を作成販売したことが書いてある。これが真相だ(樽本「「官場現形記」裁判の真相――日本を装った海賊版」『清末小説から』第90号 2008.7.1。本書所収)。中国人による擬装、なりすましが真相であり問題の核心である。ここにご注目いただきたい。

以上の論文は、陸譚が『李伯元評伝』を執筆する以前に公表されている。見るつもりがあればそこにあったのだ。調査する努力を怠った。

劉穎慧の指導教授陳大康も、新聞広告のみを材料にして複数の文章を書いた(陳大康「論近代小説伝播中的盗版問題」2015が最新のもの)。私が指摘しているにもかかわらず、陳大康も判決を報じた新聞記事は探さなかったらしい。調査が不足している。しかも海賊版を主題にしていながらその海賊版そのものも見てはいない。見ていれば説明するはずだ。

陳大康は犯人が出稿した新聞広告のみに依拠している。ゆえに中国人が日本人

に擬装したという事実を知らない。だから、「日商朝日洋行」「日本知新社」「日本知新社主人弼本氏」が消えてしまったことを不思議に思い大きな不満を感じる、と以前は書いていた。

かさねていうが、日本人になりすました中国人の席粋甫が真犯人である。だから、裁判から日本が消失するのは当然ではないか。おまけに朝日洋行、知新社、弼本氏は架空の存在だ。不満の表明は、事実および問題の核心を知らない陳大康の限界を示している。

陳大康は、以前と異なりこのたびは一歩踏み込んだ。裁判記事も知らないまま新しく彼独自の見解を提出したのである。すなわち、日本東京金港堂が海賊版作成の犯人だという（「盗版者是日本東京金港堂，運往中国代銷的是朝日洋行知新社」」166頁)。

その主張に私は驚いたというよりも、あきれたのだった。

陳大康は、よりにもよって日本金港堂が犯人だと断定した。

当時、上海商務印書館は、東京金港堂と合弁会社であった。陳大康がこの事実を認識していないことが露呈する。知識不足だ。彼は何も知らないからこそ、日本金港堂を主犯に指名した。知っていれば、できるはずがない。陳大康は広告に見える単語を組み合わせて想像をふくらませ、証拠もないのに断定しただけ。これを一般には捏造したという。

商務印書館は『繍像小説』を創刊し刊行していた。その主編が張元済に招かれた李伯元その人だ。合弁相手である金港堂が、関係者である李伯元の書く「官場現形記」(連載途中）をなぜ無断で製作販売する必要があるのだろうか。常識的に考えて、ありえない。李伯元からいえば、金港堂は彼が主編をつとめる雑誌の版元との合弁会社だ。その金港堂が海賊版を製作したことになる。そうならば、内部にいる李伯元が知らないはずがなかろう。内部で処理できる問題だ。外で裁判沙汰にしたということは、金港堂は無関係だということを意味する。

陳大康は、根拠がなく見当違いの、つまり妄想、捏造を主張している。

中国人の席粋甫が日本人に擬装して海賊版を作成販売したのだ。日本金港堂は、犯人によって宣伝材料に使われた。金港堂にしてみれば名前を無断借用された被害者である。ところが、陳大康は金港堂を逆に加害者だと証拠もなく断定し批判した。妄想、捏造を研究論文として提出した。研究者として致命的な過ちを犯し

たといわざるをえない。

読めば読むほど奇妙な主張だ。整合性が皆無である。証拠がないところに構築されている。陳大康の妄想、捏造だという理由だ。妄想、捏造ではないというのであれば、金港堂が犯人であるというその具体的な証拠を提出する責任と義務が陳大康にはある。私は何度でもいう。

陳大康は、日本という単語を目にするや脊髄反応して反日を発動させた。立論の手順はこうだ。反日の結論が先にある。日本人が犯人だと決めつける。それを示していそうな材料をさがす。あるのは新聞広告に見える日本金港堂の名前だけである。これを主犯にでっちあげた。清末小説研究会ウェブサイトにおいて以前、陳大康の立論について「独自の角度をつけて」書いていると言ったのはそういう意味だ。陳大康には反日の思い込みが存在していることを指摘しなければならない。ここにはもとから公正で緻密な思考は働いてはおらず、証拠となる資料を幅広く調査するという研究姿勢がない。立論の中身は、単なるこじつけで妄想、捏造である。

日本金港堂は、現代の中国人研究者陳大康によって濡れ衣を着せられた。新しく作られた冤罪事件が、まさに目の前にある。そればかりか彼は、「これこそが日本人の狡猾なところで（這正是日本人的狡猾之処)」などと根拠のないことを書き、貶めて中傷した。1960年代前後からの中国において見られた捏造論文作成の手法が、現代にも受け継がれている。それが再現したと私は理解した。

華東師範大学終身教授陳大康は、『中国近代小説編年史』全６冊(2014)をまとめあげて編集能力の高さを示した。彼は中国学界における第１級の研究者だ、と私は考えていた。だが、『官場現形記』海賊版に関して彼が展開した妄想、捏造はなにだろうか。陳大康は自分から研究者失格を宣言したとしか私には思えない。自ら研究者ではないと主張する。彼は大胆な決断をしたものだ。その勇気に感心した。

雑誌『文学遺産』は彼の論文を掲載することにより、陳大康が自爆するのを手助けしてしまった。

これほど興味深い話題だ。利用した文献が古くなっていることに気づかない陸譚が、詳細を見逃したのはしかたがない。『李伯元評伝』にとってはまことに惜

しいことだった。

5　改竄没書事件と盗用事件

「老残遊記」と「文明小史」のあいだにはなにか問題があるらしい。そう気づいた人がはるか昔にいた。

最初は、劉鉄雲「老残遊記」の単行本と『繍像小説』初出では内容に異なる部分がある、という指摘だった。単行本では「山中の対話」が出てくるが、雑誌初出とは異なっている。そう書いたのは、趙景深「老残遊記及其二集」(1935)だ。文章のなかで調査するようにと指名された阿英は、1941年に「老残遊記校勘記」を発表した。趙景深の指摘のとおりだと確認して異同部分を詳しく書き出した。

阿英は、さらに1955年にも言及している。李伯元『文明小史』復刻本の「叙引」において、第59回に「北拳南革（北の義和団、南の革命党)」批判が出てくると説明した。李伯元が劉鉄雲と同じく革命に反対していたと書いている。奇妙なことに阿英は、該当する箇所を『文明小史』本文から削除した。彼は両作品間に盗用の事実があると認識していたことがわかる。盗用を明記せず説明もせず該当部分を削除したのは、なぜか。中華人民共和国成立後の思想界において「北拳南革」を批判することはタブーであったからだろう*[1]。

阿英が編集した資料集には、勝手に削除する箇所がたまに出現する。文芸は政治に奉仕しなければならない。なつかしいスローガンだ。それが思考の土台にある。時の政治思潮に合わない過去の記述には、手を加えるという方針だったようだ。資料として利用するときは注意を要する。

1961年の魏紹昌は、趙景深、阿英の名前をださず自分が発見したかのようにあらためて提起した。盗用事件は、こうして研究者にとっては周知の事柄になった。

経緯を私なりに整理し簡単に説明する（詳細は別に述べる)。

『繍像小説』に連載していた「老残遊記」は、第11回の原稿が没書にされた。しかも、その前後が改竄されている。作者の劉鉄雲は原稿執筆を中止する。連夢青を通じてあらかじめ渡していた原稿第14回が雑誌では第13回として掲載された。これが改竄没書事件だ。

劉鉄雲は、友人方若（葯雨）に勧められて『天津日日新聞』に第１回から再度連載をはじめた。『繍像小説』に掲載された本文を底本にして手を入れたのだ。没書になった第11回は下書き手稿にもとづき復元し（劉鉄雲日記)、第15-20回を新しく書き足した。これが初集20回である。

問題はそこで終了しない。同じく『繍像小説』に連載していた南亭亭長（李伯元）の「文明小史」第59回が、没書にした「老残遊記」第11回原稿から「北拳南革」を含めた箇所を盗用している。これが盗用事件だ。盗用の事実を強調したのが上の魏紹昌論文である。魏紹昌はその時、疑問を３点提出したが自分では解決できないと投げ出した。魏が編集した『李伯元研究資料』(1980)にもそれを収録している(180-182頁)。

盗用事件には『繍像小説』発行遅延問題がからんでいる。趙景深、阿英、魏紹昌たちはその事実を知らない。魏紹昌がみずから疑問３点を出しながら自分で解答できなかったのは、ある意味では当たり前だった。その問題が完全に解明されるには時間がかかった（樽本「「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く」2004。本書所収)。

時間経過を考慮すれば、改竄没書事件と盗用事件では、関係する人間が入れ替わっている。

「老残遊記」第11回原稿を没書にしたのは、当時の雑誌主編李伯元である。しかし、『繍像小説』の発行が実際には遅延していた。資料にもとづけば、李伯元死後も刊行されつづけていたことがわかる。南亭亭長「文明小史」第59回は李伯元の死後に書かれて雑誌に掲載されたのが事実だ。ならば、「文明小史」を継続執筆して「老残遊記」第11回原稿から盗用したのは欧陽鉅源をおいてほかにはいない。欧陽鉅源が李伯元のあとを継いで『繍像小説』の主編であったからだ。

『李伯元評伝』は122頁で、「劉鉄雲「老残遊記」は前の13回を『繍像小説』に連載し、残りの７回は『天津日日新聞』に連載した」と説明する。誤り。該紙の連載は第１回からだし、復元が１回、新しい追加は６回でなくてはならない。没書についての説明がない。

同じく143頁だ。李伯元の小説観を説明して「文明小史」第59回に見える「北拳南革」を引用する。ここは不適切であり正しくない。

「北拳南革」は、上記のとおり劉鉄雲が「老残遊記」原稿第11回で披露した鉄

雲自身の意見である。『李伯元評伝』は、どこをどう間違ったものか「文明小史」を出典とした。これこそが「老残遊記」から盗用した部分であることを陸譚は知らないようだ。

王学鈞は、「李伯元年譜」203-207頁で当時の資料に基づいて詳しく論じている。『李伯元評伝』はそれにはまったく興味がわかなかったらしい。

李伯元死後に発表された「文明小史」を立論の根拠とし、そこから李伯元の小説観を抽出することは正しくない。なにしろ劉鉄雲の「老残遊記」原稿から盗用しそれを執筆したのが別人——欧陽鉅源であるからだ。別人の手になる部分を区別しないで李伯元の小説観を論じることは不可能かつ無意味だ。研究の基礎である[*2]。

6　李伯元と欧陽鉅源の関係

李伯元と欧陽鉅源の関係が親密なものであったことはよく知られている。作品の共同執筆者であったと私は言い続けている。友人の包天笑は、欧陽鉅源が「文明小史」の原稿に手を入れていたと証言した。だが、『李伯元評伝』は代作については判断するのが困難だ、と否定的だ(87-88頁)。陸譚は『繍像小説』が李伯元の死後にも刊行されていた事実を知らない。代作を疑う理由だろう。

『李伯元評伝』にあげられた引用文献、あるいは巻末の参考文献一覧表を見る。そこには『李伯元全集』、『李伯元研究資料』など基本文献が示されている。だが、それだけにすぎない。主として1980年代以降に刊行された比較的簡単に入手できる書籍に限られている。基本的書籍だけに依拠すれば、それ以上に深い問題に遭遇することはない。それらのなかに、上に列挙した李伯元についての注目点に言及するものは少ないからだ。

例外はある。王学鈞「李伯元年譜」だ。海外の研究成果を取り入れ、李伯元について判明している多くの問題点を指摘している。

王学鈞の説明は、1997年時点のものだ。私の見解と必ずしも一致しているわけではない。現在の研究はより深化しているからだ。しかし、問題があることを明

確にしているところを見逃してはならない。『李伯元評伝』の著者陸譚は、それらを無視した。

『李伯元評伝』には、新聞も引用して詳細に説明する部分と、通説によりかかった手抜き部分が混在している。

たとえば、上海図書館所蔵の『指南報』を確認しているのは珍しい。

李伯元は、特別に開催された科挙の一種である経済特科に推薦された。多くの研究者が言及する。『李伯元評伝』も13、272頁でそう説明する。ここまでは普通だ。しかし、同時に呉趼人も推薦されていたと書く文献は少ない。陸譚は、李伯元と呉趼人が同時に推薦されたことをいう(81頁)。ここはよろしい。

「花榜」について詳しく説明している。主たる材料は次の２種類だ。王学鈞編著「李伯元年譜」および陳无我『老上海三十年見聞録』(1997復刻)。さらに『遊戯報』、『世界繁華報』を利用し『忘山廬日記』からも引用する。

花榜とは芸妓コンクールである。ひいきの芸妓に投票する。投票券は李伯元の発行する『遊戯報』に印刷されている。新聞の販売促進拡大に利用された。明治時代の日本で同趣旨の「百美人」が1891年に開催されている。李伯元は日本人とも交流があったからそれから着想したのかもしれない。それとも人間の考えることは同じだということか。

研究者は、李伯元と花榜の関係について以前は微妙なあつかいをした。李伯元を批判する時代では、花榜開催を非難の材料に使った。李伯元を正の方向で評価する流れの時は、花榜には言及しなかった。どちらかといえば研究論文では、芸妓に言及することはタブーだった印象が私には強い。資料が不足していたからということはできる。あるいは花柳界を蔑視する時代の風潮から逃れることができなかったからだろう。いまでは『李伯元全集』があり、陳无我の著作が復刻されている。

『李伯元評伝』が詳細に花榜を紹介したのは、事実を事実として記述できる情況が生じつつあるという反映なのかもしれない。

以下のような俗説を取り入れてもいる(82-83、275頁)。

呉趼人は、病気で死にそうになっている李伯元を見舞った。李伯元は呉趼人に借金をしていたが返済できそうにない。呉趼人は債券を焼き捨てた。王学鈞が紹

介している。伝説にすぎない。その病人が李伯元である証拠はない。

小さなことをいえば、75頁で『申報』連載の「乃蘇国奇聞」訳者を李慶国とするのは不可解。

以上、いくつか気になる点を指摘した。

私は『李伯元評伝』は研究書だと考えて読み始めたのだった。だが、いくつかの不足があることに気づいた。専門書と考えるから不足が目立つ。一般読者むけの概説書、あるいは読み物だと考えればいい。だからといって間違ったことを書くのはよくない。

【注】

1）『老残遊記』北京・通俗文藝出版社1956.5にも削除がある。ただし、北京・人民文学出版社1957.10では復元している。

2）陸楠楠「清末版権意識的萌動——《老残遊記》発表与行世的版権史意義」『新聞与伝播研究』2014年第7期 2014.7.25がある。作家の著作権意識を主題にする。その１例として「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係を紹介している。

アメリカ人宣教師の暦

『清末小説から』第106号（2012.7.1）に掲載。論文「ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書館」(『清末小説』第35終刊号2012。『商務印書館研究論集（増補版)』所収）の副産物。日本と中国では旧暦から新暦に変更することが生じた。それぞれ明治６年であり中華民国元年である。それ以前は、出版物には旧暦を表示したのだ。たとえ英語で書くとしても、旧暦を機械的に翻訳しただけ。では、旧暦の時代に日本、あるいは中国に滞在したアメリカ人宣教師たちが使った暦はどちらなのか。ヘプバーン書簡を見ると、旧暦であるような部分がある。だが、確かめてみればやはり新暦だ。中国にいるアメリカ人宣教師ラウリーも同様に新暦を使用していた。旧暦で生活する日本人、中国人とは異なり、宣教師たちは新暦の時間を過ごしていた。

日本、中国、アメリカという３ヵ国の人々は、新暦旧暦のふたつをどのように使用しているのか。本稿では、これを明らかにする。

1　旧暦と新暦

ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書館について調べていたときだ。

新暦旧暦問題が生じて執筆が中断してしまった。問題は、アメリカ人宣教師が本部に送った書簡の日付に関係する。そこに書かれているのは新暦（グレゴリオ暦）なのか旧暦なのか。

暦の計算法とか、その成り立ちとか、いくつもある暦のそれぞれの違いとか、

そういった複雑な問題ではない。もっと基本的で、かつ簡単なことだ。

当時は、日本、中国ともに旧暦を使用している。

日本では、明治五年十二月二日（1872.12.31）までが旧暦だった。新暦に切り替わるのは、明治６年（1873）１月１日からとなる。

中国では、宣統三年十一月十二日（1911.12.31）までが旧暦。翌日から中華民国元年（1912）１月１日である。

改暦までは、日本でも中国でもそこに住む人々は、当然ながら旧暦のもとで生活している。

以上のことを押さえておけば、さしあたって大きな問題はないだろう。

ところが、日本に滞在する、あるいは上海にでかけるアメリカ人宣教師がそこに加わると、見通しが悪くなる。最初は、そういう気がした。

さらに、日本人、アメリカ人宣教師が上海で辞書を印刷すると、刊年を英語でどう表示したか。中国人の編纂した英漢辞典はどうか。それらが重なって、判断するのにとまどった。

2　上海の出版社のばあい

商務印書館は、英漢辞典を多数刊行している。そのなかのひとつに次がある。発行年月の表示を確認したい。

> 呉県奚若編纂『華英会話文件辞典』商務印書館　庚戌年八月初版、民国六年二月八版

初版の庚戌年は1910年である。「八月」は旧暦を意味する。ここまでは当たり前だ。

第８版にある英文の編者序は、その文末に「P. S. YIE.／August, 1910」と記入する。庚戌年八月が旧暦であるのをそのまま英語表示の1910年８月にしてしまった。表面の字面だけを機械的に変換している。西暦が新暦だという認識がないように見受けられる。

同書の別版を見る。

呉県奚若編纂、紹興馮蕃五訂正『(訂正）華英会話文件辞典』商務印書館　庚戌年八月初版、民国十四年二月十六版

こちらの『(訂正）華英会話文件辞典』奥付には、海賊版禁止の決まり文句のうしろにも記述がある。「此書有著作権翻印必究／前清宣統三年四月初三日稟部註冊五月十四日領到著字第一百四十六号執照」。この著作権登録表示に注目する。許可証著字第146号受領の日付が問題だ。「宣統三年五月十四日」は、新暦になおすと1911年６月10日に該当する。ところが、奥付の英語は「Copyright, May, 14, 1911, Certificate No. Chu 146」となっている。こちらも、宣統三年を機械的に1911年と書き換えただけ。旧暦の「五月十四日」をそのまま「May, 14」に翻訳する。まさか英語部分も旧暦だとは思わない。

以上の２例を見る限り、商務印書館は旧暦新暦の区別をつけていない。

同じ上海にあったアメリカ長老派教会の印刷所、すなわち美華書館ではどうか。商務印書館の創業者たちと深く関係していた印刷所だ。

日本人がわざわざ上海にでむき、この美華書館で辞書を印刷したことは、ひろく知られている。そのなかのひとつに、薩摩辞書というものがある。編者に薩摩学生と書いているのが俗称の由来だ。

第３版、第４版ともに、美華書館で印刷された。

第３版は、薩摩学生編『改正増補和訳英辞書』と称する。その「日本語序」には「明治二歳己巳正月」と書く*1。旧暦である。ところが、英文序には年月をそのまま「January, 1869」と翻訳している。商務印書館のやり方と同じだ。

当時の日本と中国では、それでよかった。旧暦で生活しているのだから、わざわざ計算して新暦表示をする必要も感じなかっただろう。必要がないから区別するという認識もうまれない。西暦表示が新暦だと考えた私のほうが悪いことになる。旧暦の時代は、英語表示も旧暦である。

ところが、例外といっていいかどうか、つぎの辞書がある。

（岡田）好樹堂訳『官許仏和辞典』だ。こちらも美華書館で印刷された。扉に

は「明治四年辛未正月」とある*2。旧暦だ。ところが、フランス語序文ではフランス語で「1871年２月」と記載されているではないか。たしかに、同年正月は、新暦になおせば２月19日から28日の期間に重なる。これは、旧暦と同時に新暦であるといっていい。例外的に正確な表記であると思う。

では、アメリカ人宣教師のばあいは、どうなっているのか。

3　日本滞在中のヘプバーンのばあい

アメリカ長老派教会に属する宣教医師のひとりヘプバーン（James Curtis Hepburn, 1815-1912。ヘボンで有名）は、当時日本において宣教と医療に従事していた。彼は、のちに自分の編集した辞書『和英語林集成』を印刷するために上海に赴くことになる。

彼は、派遣された現地の情況を報告するためにアメリカ本部の責任者にむけて多くの手紙を書いた。それらは、高谷道男編訳『ヘボン書簡集』（岩波書店1959.10.30／1977.10.20二刷）にまとめてある。また、岡部一興編『ヘボン在日書簡全集』（教文館2009.10.10）も刊行されている*3。以下、ヘプバーン書簡の内容を紹介するときはページ数を示し、「全集*頁」を末尾に追加する。

彼の書簡には、当時の日本でおこった事件などにも言及がある。そのなかのひとつが、生麦事件だ。

文久二（1862）年八月二十一日に事件は起こった。薩摩藩島津久光の大名行列が生麦村に入ったところ、乗馬のイギリス人４名（うち１名は女性）に遭遇する。薩摩藩士は、イギリス人が行列に乱入したことを理由に彼らを殺傷した。その負傷者２名の手当をしたのがヘプバーンだ。イギリス政府は江戸幕府に謝罪と賠償を要求する。薩摩藩にも下手人の処罰と賠償を迫る。幕府は賠償金を支払い、薩摩藩は拒否した。それが薩英戦争につながっていく。

ヘプバーン書簡は、報告であって新聞ではない。通信事情も異なるから時間差が生じる。

生麦事件に触れた手紙は、（1862年）十月四日付である（110頁、全集132頁）。そののちも何度か関連することを書いた。事件の推移を見ている。たとえば、幕府の

賠償についてはこうだ。

> （1863年）五月二十六日　わたしがお伝えできる最上のニュースは、今夕聴いた次の事柄なのです。過去数週間にわたり日本を覆っていた戦雲が、まったく除かれたことなのです。幕府はその能力の限度においてイギリスの要求に応じたのです。五、六十万ドルを支払っても、下手人を引渡すことはできないということなのです。この報道を今夕聴きました。イギリスもこれで満足することでしょうし、このように不吉な前兆に思われた事件も容易におさまってしまいました。134頁、全集152頁

ものの本によると、幕府が償金44万ドルを支払ったのは、同年旧暦五月九日（新暦６月24日）のことだ。ヘプバーン書簡の示す「五月二十六日」が新暦だとすれば、支払いの新暦６月24日は未来に属する。ありえない。もし旧暦だとすれば、五月九日にあったことを五月二十六日の手紙に書くことができる。

ここを見て、ヘプバーンは旧暦を使用している、と私はまず考えた。

また、生麦事件についての該書訳者注では、事件発生の日時を「文久二年（一八六二年）八月二十一日」（111頁、全集132頁）にしている。この「八月二十一日」は、旧暦である。ヘプバーン書簡の日付も旧暦であることを示唆しているように私には思えた。

ところが、そうではない例が多く出てくる。簡単なところをひとつ。

（1862年）十二月九日付の手紙は、数日にわたって書き継いだものらしい。文末附近に新年のあいさつが見える。

> 十二月二十七日　新年おめでとう。120頁、全集141頁

新暦でも旧暦でも年末は年末だ。「新年おめでとう」と書くのは不自然ではない。だが、それをアメリカで受け取る方ではどうか。もし「十二月二十七日」が旧暦であれば、新暦換算するとその時点ですでに２月14日なのだ。時期を失してはなはだしい。

七曜日が明らかになっているばあいは、それを手がかりにして月日を特定することができる*4。

（1872年）七月二十二日横浜で書かれた書簡である。上海で『和英語林集成』第２版を印刷し、横浜に帰ってきた。

> 上海で仕事を無事完了し、二十日の土曜日、大喜びで帰浜いたしました。
> 243頁、全集260頁

「二十日の土曜日」は、新暦の表記で間違いない。日本は旧暦であるにもかかわらず、ヘプバーンは新暦を使用している。

もう１例を示す。（1874年）一月三日付書簡につぎのような箇所がある。

> 御指示によりわたしどもは本(ママ)月二十三日、去る火曜日、江戸に集まり……
> 253頁、全集269頁

「去る火曜日」と書いている。「本月」にもかかわらず「去る」では矛盾する。ここの「本月」は「先（十二）月」の誤りだろう。

たしかに新暦で12月23日は、火曜日にあたる。

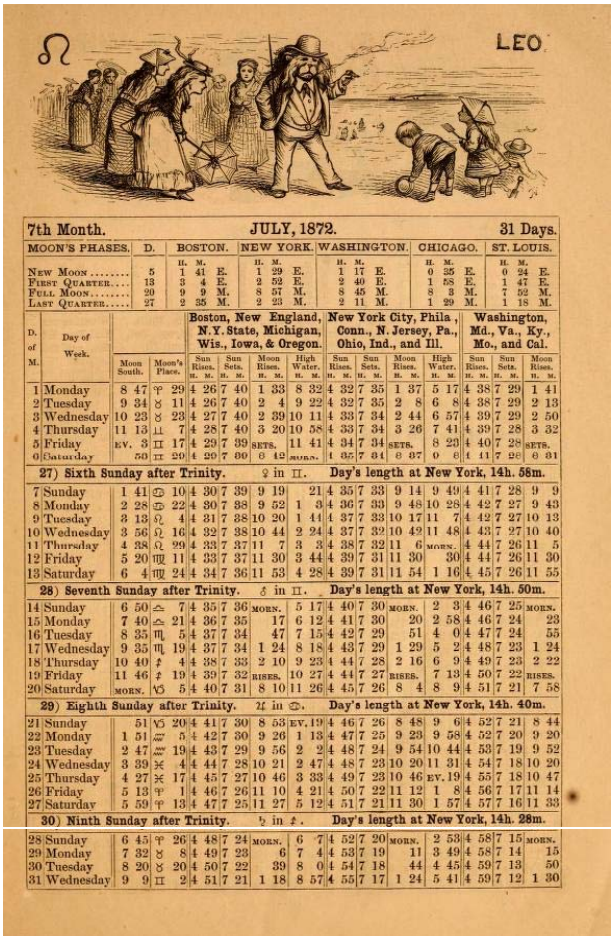
ヘプバーンのばあいは、一部に旧暦を使用したような形跡を残しながら、やはり全体は新暦なのである。

もうひとりの宣教師を例にあげる。

当時、フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeek のちに改名して Verbeck, 1830-1898）は、長崎にいて一時期上海に避難したことがある。上海到着を次のように書いている。「一六日の土曜日にわたしたちは無事当地に着きました」（高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社1978.7.1。76頁）。1863年５月16日はたしかに土曜日である。

4　ふたつのこよみ

参考のため、日本で使われていた「柱暦」のひとつを示す。



国立国会図書館ウェブサイトから
慶應二年（1866）柱暦

Internet Archive から
Nast's Illustrated Almanac,1872.7

柱に貼って見たものだという。これは複雑だ。よほど使い慣れている人でなければ読み解くのはむつかしい。旧暦だから月曜、火曜の七曜日は使用しない。その日の吉兆を知るために暦があった。そういう時間を当時の日本人は生活していた。

アメリカで使用していた暦のひとつを別に掲げた。

年月日と曜日が一目瞭然である。３地域に分けて日の出、日の入り、月の出、満潮などを細かく示す。ヘプバーンたちが使用したのがこの暦だ、というわけで

はない。アメリカでは同種の暦がいくつも発行されていた。だから、類似の暦を使っていたのではないか。アメリカ人宣教師たちが、宗教行事をおこなう時に新暦が必要となる。日本で日曜学校を開くにしても、いつが日曜日なのかを知っていなければならないのだから。

では、中国にいる宣教師はどうか。

5　中国のアメリカ人宣教師のばあい

アメリカ人宣教師のひとりが、当時の中国から発信した記録がある。

『中国への宣教師ウォルター・M・ラウリー師の思い出 *Memoirs of the Rev. Walter M. Lowrie, Missionary to China*』（NEW YORK: Robert Carter & Brothers, 1850。内容が異なる次の版本を使用する。PHILADELPHIA: Presbyterian Board of Publication, 1854。電字版）は、ラウリーの書簡集だ。彼は中国で海賊に襲われ若くして死亡した。該書は、息子を悲しみ記憶するために父親が編集刊行したもの。その父とは、ある時期、ヘプバーン書簡の宛先人であるウォルター・ラウリー（Walter Lowrie, 1784-1868）だ*5。

ラウリーが1845年に中国国内を移動したときの手記に注目する。そこから、日付と曜日を示す箇所だけを抜き出して日本語でまとめて示す。

> ３月30日土（ママ）曜日／４月１日火曜日／４月２日水曜日／４月３日木曜日／４月４日金曜日／４月10日木曜日／４月11日金曜日……以下略　251-254頁

３月30日は、日曜日が正しい。書き間違ったらしい。ついでにいえば、旧暦三月に三十日は存在しない。二十九日までだ。ラウリーが書き留めた日付は、すべて新暦表示となっていることがわかる。

ラウリー書簡集の初版には、墓石に刻んだ漢語が該書末尾に収録されている。

「耶穌教師亜美理駕花旗国人／婁礼華先生生于／嘉慶二十四年正月廿六日。卒于／道光二十七年七月初九日。（後略）」

ラウリーの漢字表記が婁礼華だ。墓石の正面には、生卒年をそれぞれ1819年２

月18日、1847年８月19日としている。漢語が刻まれているのは、その墓が中国寧波に置かれたからだ。漢語は旧暦、西暦は新暦と区別する。卒年の新暦旧暦の換算はただしい。だが、生年の新暦２月18日は旧暦の正月廿四日だ。間違った理由はわからない。ただし、ここには新暦と旧暦を区別しようとする姿勢があることを理解する。

ネビアス夫人（Helen S. Coan Nevius）著『ジョン・リビングストン・ネビアス伝 *THE LIFE OF JOHN LIVINGSTON NEVIUS: FOR FORTY YEARS A MISSIONARY IN CHINA*』（Fleming H. Revell Company, 1895。電字版）からも日付と曜日だけをいくつか抜き出す。

1850年６月２日日曜日／1855年12月８日土曜日／同年12月14日金曜日／同年12月18日火曜日

1850年はアメリカで、1855年は中国で記録された。ネビアスも同じく新暦を使用していた。これは、予想された結果でもある。

以上を見た上での結論らしきものは、こうだ。

日本と中国では旧暦を使用していた時代に、アメリカ人宣教師たちは現地に住む人々とは別の新暦によって生活していた。

もっとも、それぞれで異なることもある。たとえば、中国の小説雑誌が民国以後も発行年を旧暦で表示する例もないではない。実物に応じて判断しなければならないだろう*6。常識的なところに落ち着いた。

（本稿は、2012年１月13日清末小説研究会ウェブサイトに掲載した文章にもとづいて書き直した）

【注】

１）国立国会図書館近代デジタルアーカイブ（現在は国立国家図書館デジタルコレクション）

２）国立国会図書館近代デジタルアーカイブ（現在は国立国家図書館デジタルコレクション）

3）別に私信を集めた高谷道男編訳『ヘボンの手紙』（有隣堂（新書）1976.10.10）がある。ただし、『ヘボンの手紙』は全集には未収録。こちらは本稿では使用しない。

4）新暦旧暦の換算は次を使用した。薛仲三、欧陽頤合編『両千年中西暦対照表』三聯書店1956.2／台湾・華世出版社影印1977.3

5）父ラウリー（Walter Lowrie, 1784-1868）には、８人の子供がいた。次の３人は宣教師になった。長男ジョン（John Cameron Lowrie, 1808-1900）、三男ウォルター（前出 1819-1847）、五男ルーベン（Reuben Post Lowrie, 1827-1860）だ。『ヘボン書簡集』の44頁注２では、息子であるルーベン（Ruebenと誤る）について「北米長老ミッション本部の総主事ラウリー博士の弟（ママ）でもある」とする。ここのラウリー博士が父W・ラウリーならば、「弟」は間違いだろう。長男Ｊ・Ｃ・ラウリーであれば「弟」でよい。説明がまぎらわしい。全集51頁では、この注釈２は全文が削除されている。そう思った。しかし、全集をよく見ると、削除したと書くのは正しくないことが判明する。ルーベンに関するこの『ヘボン書簡集』44頁注２は、全集37頁注１にそのまま移動している。

6）参考までに、時代がさがって1880年代のはじめころのこと。岸田吟香が上海に薬局楽善堂を開いたとき、広告をかねて新旧暦併用のカレンダーを配布した、との紹介がある。陳祖恩「文化商人岸田吟香」『尋訪東洋人――近代上海的日本居留民』上海社会科学出版社2007.1。67-70頁。陳祖恩著、大里浩秋監訳「第５章文人商人・岸田吟香」『上海に生きた日本人――幕末から敗戦まで』大修館書店2010.7.10。81-85頁

『繍像小説』発行遅延について

——王文君氏へ

『清末小説から』第114号（2014.7.1）に掲載。表題と副題を変更した。同じ号に載った王文君「就《申報》刊《繍像小説》廣告——與樽本照雄先生商榷」への回答だ。王文君が『繍像小説』の発行遅延について調査した。その結果、樽本の示した『申報』広告の記事掲載月日に不正確な箇所がある、と批判する。その事実を部分的に認める。ただし、王文君の使用した樽本論文が古すぎる。その後、内容を更新して何度も報告している。それを知らないで批判するのはいかがなものかと思う。しかもいくつかの誤記は、『繍像小説』の発行遅延を否定するまでにはいたっていない。誤差の範囲内におさまる。王文君は目先の事実に精密であろうとして調査を行なう本来の目的を見失った、と反論する。なんのために調べるのか。樽本説を否定できる新しい発見がないではないか。「『繍像小説』刊行一覧」は論文番号23「「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く」と共通する。補記を参照のこと。

王文君は、題名に「商榷」を使用して樽本論文を批判した。私がそれに答える。

王文君が問題にするのは、『申報』に見える『繍像小説』の新聞記事、出版広告の詳細についてだ。

問題を整理しながら、説明する。

1　問題の所在

『繍像小説』の発行が遅延していた。それを資料にもとづいて証明することはできないか。私が1980年代にぶつかった問題のひとつだ。誰が見ても納得する客

観的な方法をさがした。

考えてたどりついたのが、当時の新聞類である。『繍像小説』の受贈記事がある。発行元の商務印書館が宣伝のために雑誌を新聞社に贈呈した。それを受け取ったという感謝記事だ。また、同じく新聞に掲載された商務印書館による出版広告が資料になる。

中国の新聞に利用価値があるとは、その頃、誰も気づいていなかった。無理もない。ひとつは、中国人研究者は以前の新聞広告を信用していなかった。広告とは嘘をつくものだという認識だ。

もうひとつ、清朝末期の新聞は普通に利用できる状態ではなかった。私が新聞に気づいたのは、その影印本が刊行されはじめたからだ。ゆえに、中国で注目する人が出てくるのは、ずっとあとになってからだ。

目についた新聞、雑誌に掲載された『繍像小説』に関する記事を集めて記録しはじめた。雑誌では、それ自体の刊行が不確かなばあいがある。『繍像小説』と同じ版元の商務印書館だ。これが発行する『東方雑誌』に掲載された自社刊行物の広告は、おおまかでありあくまでも参考にしかならない。

新聞は。なんといっても毎日刊行される。日付が重要だと理解した。天津『大公報』『申報』などは影印本で、『中外日報』『世界繁華報』などはマイクロフィルムを見る。それらの受贈記事、出版広告を書きとめる。

刊行一覧は、何度も作り直している。そのなかの１本が樽本「《老残遊記》和《文明小史》的関係」の中の「《繍像小説》的出版延期」部分（『清末小説研究集稿』済南・斉魯書社2006.8）「《繍像小説》刊行一覧」(48-53頁）というわけ。

中国では、これくらいしか知られていないかもしれない。だが、私は以前から何度も発言している*1。

それらの資料を総合して考察した結論は、こうだ。

『繍像小説』は、阿英がいうような半月刊を維持したわけではない。刊行は徐々に遅延していた。ゆえに、李伯元の死去と同時に『繍像小説』第72期をもって停刊したわけではない。主編者李伯元の死去後も雑誌は刊行されていた。これは、必然的に李伯元の作品であるとされてきたいくつかが、別人の手になる作品だという事実を明らかにする。

王文君は『申報』に的を絞って受贈記事、出版広告の掲載情況をくわしく調査した。私は今までこれほど精密な記載を見たことがない。王文君の努力を高く評価する理由である。

2　王文君の指摘

王文君が指摘することのひとつは、樽本が示したいくつかの例に誤認があるということだ。

『申報』に掲載されていない出版広告２件を記載している、という。新聞を精査した王文君がいうのだから、その指摘は正しいのだろう。ただし、私が説明すれば、なにもないところから記述はできない。見誤ったか。あるいは、実物で確認できない部分については、もとづく資料がある。それを引用するのが私の方法だ。引用元の間違いなのだろう。誤りだというのだから、今回は王文君の指摘によって訂正する。

もうひとつの指摘は、広告の内容を「贈書」と「専門」に区別していないこと。王文君は、「恵書致謝」という単語を使用する。『繍像小説』第〇期を贈呈いただき感謝します、という内容だ。それには作品の評価が書かれていることがある。その史料的価値のある大量の情報を取り逃がした、と批判する。

王文君が指摘する『申報』に掲載された『繍像小説』広告情報は、基本的に正しいと思う。王文君が『申報』調査に努力した点に私は高い評価をあたえる。

『繍像小説』発行遅延問題は、中国においては無視されがちである。最近でも、あいかわらず半月刊を守ったと根拠のないことを述べる著書は多い*2。それらに比較すれば、王文君論文は真摯に問題を取り上げている。

3　反論する

王文君が行なった詳細な調査は、私の研究に役立つ。それらを受け入れて「『繍像小説』刊行一覧」を作り直した。

王文君論文を読んで奇妙なことだと私が首をかしげることを指摘しよう。

まず、「恵書致謝」に含まれる貴重な情報は、別に利用すべきものである。刊年については、『繍像小説』刊行を追跡するばあい商務印書館の出稿する出版広告と比較してやや価値が落ちる。気をつけていただきたい。無関係だとはいっていない。優先順位の問題だ。参考資料として当然ながら重視する。

私が広告に注目するのは、刊行時期そのものに注目しているからだ。受贈記事の有益情報うんぬんといって樽本論文を批判すること自体が、的をはずれている。

1980年代、張純は、私とこの問題を討論したとき、新聞広告は信頼できないといった。当時の中国人研究者にはそれくらいの認識しかなかった。

出版広告にも２種類がある。

出版予告と出版報告だ。予告は変更される可能性がある。だが、すでに出版しているものについて虚偽の広告をする必要はない。日にちに差があろうとも、基本的に発行は終了している。出版資料として参考にする価値がある。この考えは今でもかわらない。

受贈記事は、広告の一種であろうとも、これによっても刊行された事実が確認できる。『繍像小説』を受け取って記事になるまで、時間差が生まれることもあるだろう。そこを考慮するにしても、基本的に利用できる資料のひとつだ。重ねてのべておく。

私が提出した『申報』の広告時期が、実際のものと一致しないものがある。そう王文君はいう。

ひとつは、光緒三十二年十月廿七（第65至67期）と光緒三十二年十二月初六（第69期）は『申報』には存在しないと指摘する。そうであれば、結果として『繍像小説』の刊行時期が大きくずれてくるのか。疑問が生じる。

だが、それはない。『中外日報』同年同月二十六日、あるいは『新聞報』同年同月二十七日に第65-67期の記録がある。第69期のほうは、『申報』十一月二十九日に繰り上がる。こちらも『新聞報』の同年同月同日に第67-69期が記録されている。

このように別の新聞を参照すれば、『申報』広告が示すのと同じことを確認することができる。

そのほかも同様だ。いくつかの齟齬があるにしても、それで刊行遅延の時期が

大幅にずれることはない。私にいわせれば、誤差の範囲内である。

王文君論文には、致命的な欠陥がある。

『申報』の記事、広告を精密に調査した。それは、すばらしい。だが、調査するために調べている。それがなにを目的にする精査であるのかを忘れている。目先の事実に拘泥するあまり（悪いといっているのではない)、本来の目標を見失った。

『繍像小説』の刊行は、はたして半月刊が維持されたのか。それを検証するための新聞調査であったはずだ。

しらみつぶしに調べて得られた情報によって、樽本の結論を覆す結果を得ることができたのか。李伯元の死去以前に『繍像小説』は全72冊を刊行して終了したのか。あるいは、まったく別の見解を提出したのであろうか。もしそうであれば、論文を書く価値がある。新しい発見につながるからだ。しかし、残念ながらそうはならなかった。樽本の結論をすこしも動かすことができないでいる。

私は、『申報』以外に、たとえば『世界繁華報』天津『大公報』『中外日報』『新聞報』『同文滬報』『時報』などを総合する一覧を作成した。それには他文献を参照した箇所がある。それらと照らし合わせて、王文君は今までとは異なる結論に到達したのだろうか。それもない。

私が見たところ、１例だけほかとは時期的に相違する広告がある。

「光緒三十二年閏四月初九日　第4版　第55、56期」の新聞記事だ。『申報』の該号以外には、掲載を見ない。

見ない、といっても刊行一覧にないだけかもしれない。ほかの新聞を丁寧に調べれば、別のものが出てくる可能性もある。

そこを除いては、王文君の詳細な『申報』調査は、他の新聞記事、広告とほぼ重なるといってよい。特別に異なる情報は、ここには見いだすことができない。

私が大きな問題だと思うのは、まさにここに存在する。書きだす。

注目すべき問題点である。

光緒三十二年三月十四日、李伯元は死去する。

この事実をとりまいて問題がふたつ存在する。

ひとつは、李伯元が自分で行なった肺病宣言だ。死去の約一ヵ月前、『世界繁華報』同年二月十五日付で李伯元の肺病が宣言された。

大清郵政局特准掛號認爲新紙類

世界繁華報

告白刊例

五日 西歷一千九百零六年三月九號 禮拜五 本館開在上海英大

租客須知

茲者翻造洋涇浜店面以及德慶里石庫門房屋于四底竣工加各寶號仍恩續租者請于二月內本帳房預定已定者亦于月內先付定銀爲定統以二月底爲限過期另租別戶恕不久待特此周咨以免後論

胡家宅定源里對門陳興昌啓

告我良朋

鄙人夙有肺疾春寒即入夜尤甚醫云非靜攝不可故自今年正月起諸公堂飲一概心領敬謝容俟賤軀全愈再當照舊追陪敬布區區伏希愛察

南亭啓

清華

香蕉一名甘露其液治烟客便難並赤白痢腸

三井洋行專售日本官造紙烟

『世界繁華報』光緒三十二年二月十五日付

刊行一覧によれば、李伯元の肺病宣言以前には、二月初六日に第49-52期が刊行されている。李伯元死後の三月二十四日に第53期が出る。李伯元の死去をはさんで約一ヵ月半の刊行空白期間がある。この明白な事実をどう考えるか。

もうひとつは、李伯元死去後に第53期から第72期までが同年年末にかけて刊行されたことだ。

李伯元は死後に原稿を書いたか、という当然すぎる問題が発生すると何度も説明している。

李伯元は原稿を書きためていた。未発表の原稿を持っていた。そういう意見が出されたことがある。その意図は、李伯元死去後の作品も彼自身の筆になるといいたいらしい。21世紀になる前後だから古い。私にいわせれば、俗説にすぎない。誰もが考えつくらしい。それにはもとから何の根拠もないのだ。

私が発掘した李伯元の肺病宣言はどうなのか。写真も掲載して説明した（2003)。だが、それに言及した研究者はいない。重要資料の存在を知らない、見逃した、あるいは無視している。そのあげくが、なんとなく李伯元は原稿を書きためていたのだろう、と誤った推測をするだけだ。

肺病宣言は、一切の社交を謝絶するほど李伯元の体力が衰えていたことを示す。

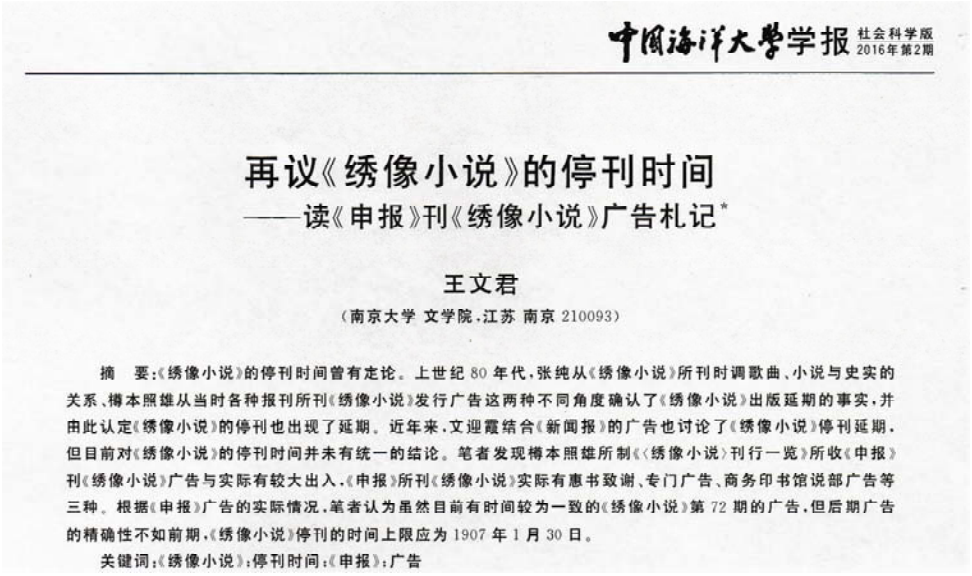
そう理解するのが普通だろう。『繍像小説』刊行に遅延が生じることになった原因のひとつではないか。もしも、李伯元に書きためた原稿があったならば、彼の肺病宣言前後、およびその死後において『繍像小説』の刊行に空白が生じることはなかったはずだ。李伯元の未発表原稿はなかった。だからこそ『繍像小説』が発行されなかった期間が生じた。素直に考えればそうなる。

『繍像小説』は李伯元の死去後しばらく、数回の空白期間をおいて第72期でようやく終刊する。推定光緒三十二年十二月末だ。李伯元の筆名南亭亭長、あるいは謳歌変俗人名で発表された作品は、李伯元のものではない。彼の協力者欧陽鉅源の代作であろう。これが私の従来からの主張だ。

私はつぎのことを王文君に期待する。『申報』以外の新聞に目を配り、以上の問題が存在することを視野に入れて、精密詳細な調査を続行してほしい。

その結果、王文君が新しい見解を提出するならば、私は大いに歓迎する。

【補記】以下の文章については、2016.9.4付清末小説研究会ウェブサイトに要点を掲載した。



中国海洋大学学报 社会科学版 2016年第2期

再议《绣像小说》的停刊时间
——读《申报》刊《绣像小说》广告札记*

王文君
（南京大学 文学院，江苏 南京 210093）

摘　要：《绣像小说》的停刊时间曾有定论。上世纪80年代，张纯从《绣像小说》所刊时调歌曲、小说与史实的关系、樽本照雄从当时各种报刊所刊《绣像小说》发行广告这两种不同角度确认了《绣像小说》出版延期的事实，并由此认定《绣像小说》的停刊也出现了延期。近年来，文迎霞结合《新闻报》的广告也讨论了《绣像小说》停刊延期，但目前对《绣像小说》的停刊时间并未有统一的结论。笔者发现樽本照雄所制《〈绣像小说〉刊行一览》所收《申报》刊《绣像小说》广告与实际有较大出入，《申报》所刊《绣像小说》实际有惠书致谢、专门广告、商务印书馆说部广告等三种。根据《申报》广告的实际情况，笔者认为虽然目前有时间较为一致的《绣像小说》第72期的广告，但后期广告的精确性不如前期，《绣像小说》停刊的时间上限应为1907年1月30日。

关键词：《绣像小说》；停刊时间；《申报》；广告

王文君「再議《繍像小説》的停刊時間——読《申報》刊《繍像小説》広告札記」(『中国海洋大学学報（社会科学版)』2016年第2期　2016.3.10）が発表された。

王文君は、『申報』に掲載された商務印書館広告および受贈書籍への謝辞を丹念に採取した。その目的は『繍像小説』の発行が遅延していたことを証明するためだ。

王文君の結論は次のとおり。

『繍像小説』の停刊時間は、阿英、畢樹棠が断言した光緒三十二年（1906）三月ではない。「1907年１月30日」が上限だ。

王文君は新暦で示したが、旧暦で表記すれば「光緒三十二年十二月十七日」になる。

その結論は、すでに私が指摘している。私は新聞広告では発行日の確定はできないと考えているから、光緒三十二年年末と書いた。おおよその発行時間を推測できるだけだ。それでも、今までの定説をくつがえし、実際の刊行が大幅に遅れている証拠を出したところに意味がある。

王文君論文には樽本の名前が引用されている。また、以前の論文とも関係がある。問題点２点を箇条書きにして説明する。

１　畢樹棠は、『繍像小説』の停刊時期を「停刊於光緒三十二年（丙午）三月」と書いている（124頁）。

間違い。畢樹棠の文章は、魏紹昌によって書き換えられている。以下に対照させる。初出と魏紹昌編『李伯元研究資料』の該当部分だ。

『文学』初出　停刊年月不明、約在光緒三十二三年之間（270頁）
魏紹昌編所収　停刊於光緒三十二年（丙午）三月（462頁）

魏紹昌は、資料の無断書き換えをやった。研究者が行なってはならない反則行為だ。

畢樹棠は、はっきりと「停刊年月は不明」と書いている。「たぶん光緒三十二年から三十三年のあいだだろう」と厳密に推測した。

王文君は、論文の初出を確認せず魏紹昌の改変した論文を引用した。研究の手続きとしては不十分だ。その結果、畢樹棠が書いていないことを証拠にしてしまった。私が、間違いであるという理由だ。

魏紹昌が犯した反則については、樽本「『繍像小説』の重版」(『清末小説から』第57号 2000.4.1)、「『繍像小説』研究の現在」(『清末小説から』第89号 2008.4.1）などに重ねて指摘し公表している。王文君を含めて知る人はいないらしい。残念なことだ。

2　1905年３月11日付『申報』受贈書籍広告には南亭亭長が『繍像小説』の主編だと明記している。1907年８月17日『神州日報』の商務印書館広告よりも早い（125頁)。

間違い。光緒三十一年二月初六に見える受贈書籍記事は、『繍像小説』25-29冊を受け取ったとある。そのなかで「南亭亭長之有功於世偉矣哉」と書かれている。社会に対して大いに功績がある。単に南亭亭長著「文明小史」がすばらしい、といっているだけ。南亭亭長が主編であるという意味ではない。王文君の勘違い。証拠にはならない。

王文君論文では、樽本論文を引用しているが『清末小説研究集稿』(2006）所収のものだ。古すぎる。王文君は私が何度も『繍像小説』の発行遅延について文章を発表していることを知っているはずだ。私はそのことを王文君に説明した。それらを含めて論じる必要がある。無視するのはよろしくない。

王文君「就《申報》刊《繍像小説》廣告——與樽本照雄先生商榷」(『清末小説から』第114号　2014.7.1）に対して私は反論した。すなわち「王文君氏へ——『繍像小説』発行遅延問題について」(注：本稿のこと）だ。彼女はこれに触れない。また、古い一覧表ではなく、同誌に掲載した最新の「『繍像小説』刊行一覧」もないかのようにあつかっている。いかがなものかと思う。

王文君は、私が行なった反論と問題の提起に対して基本的に知らん顔をしている。

李伯元は、みずから肺病宣言をした。私は反論の中で『世界繁華報』二月十五日付を引用している。その後の光緒三十二年三月十四日（1906.4.7）に李伯元は死去した。ところがそれ以後も『繍像小説』は発行継続されていた。するとそれらに掲載されている南亭亭長「文明小史」の南亭は誰なのか。「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題がからんでくる。いずれも重要問題に違いない。私は王文君にそれをわざわざ指摘したのだ。それに対して無回答というのは研究論文として不十分であるといわざるをえない。

日本で季刊誌『清末小説から』をウェブで公開していることは、中国の研究者はほとんど知らないだろう。だから、王文君の批判に樽本が反論したことについて誰も認知していないかもしれない。中国国内むけの論文では、その事情を説明しなくてもかまわないという王文君の判断なのだろう。中国だけで通用する考え方だ。しかし、ウェブが世界中に張りめぐらされている現在では、小手先の改変はすぐに露呈する。私がこの文章を書いているのがその証拠だ。

王文君もそうだが、『繍像小説』の発行が遅延していたことは文迎霞、陳大康たちも認めている。しかし、それ止まりだ。発行遅延がわかった時点で思考が完全に停止している。李伯元の死去がその発行継続途中で発生している事実とその影響について考えていない。李伯元の死去には触れるが、『繍像小説』の継続発行に関係があることに関して中国人研究者全員が沈黙している。李伯元死去が作品の著者問題、盗用問題を引き起こしている事実を誰も検討しようとはしない。私から見れば、彼ら中国人研究者は大きな問題を直視することができないという印象を持つ。

以前の文章でわたしは王文君に対して「『申報』以外の新聞に目を配り、以上の問題が存在することを視野に入れて、精密詳細な調査を続行してほしい」と希望しておいた。

ところが、今回の論文は『繍像小説』の停刊時間のみに問題を絞り込んで終わりだ。論文としては後退した。研究の広がりと前進を自ら拒否したことになるだろう。

王文君は、将来のある若い研究者だ。私は今後の研究に期待をしている。じっくりと腰を落ち着け視野を広くして研究を継続されることを願う。

【注】

1）以下の樽本論文で言及した。

「李伯元は死後も『繍像小説』を編集したか」『清末小説から』第64号　2002.1.1、1-12頁。要約：『繍像小説』全72期は、李伯元の死去と同時に停刊した。これが、中国の学界における定説である。ひとつの例外もなく、長年にわたってくりかえしそう主張されてきた。これに対して、異議を唱えたのは、中国では張純であり、日本では樽本照雄である。昨日今日、新しく異議がとなえられたというわけではない。しかし、『繍像小説』発行遅延説は、中国

の研究者が認めるものとはなっていない。研究者が認めなくとも、事実が存在する。『繍像小説』第13期より発行年月を記載しなくなる。当時の新聞『中外日報』『申報』に掲載された『繍像小説』に関する出版広告を丹念に拾っていけば、あきらかに発行が遅れていることがわかる。きわめつけは、李伯元が死去した光緒三十二年三月十四日以降も、『繍像小説』第53期よりあとの号が発行されている事実があることだ。同年十二月にようやく全72冊の刊行終了が宣言された。『繍像小説』の発行遅延は、それだけにとどまらない。李伯元の作品であるとされている「文明小史」「活地獄」「醒世縁弾詞」のおわり部分は、李伯元の死後の発表となるのだ。にわかに「偽作」説が登場する。従来の自説を、『中外日報』『申報』の出版広告を追加し、あらためて検証した。

「李伯元の肺病宣言――『繍像小説』発行遅延に関連して」『清末小説から』第69号 2003.4.1、1-13頁。要約：李伯元の死因は肺結核であることは定説になっている。主として友人の証言による。李伯元自身が、光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に広告文を掲載し、みずからが肺病であること、招宴を断わる宣言をしている事実を発見した。新出資料である。李伯元が肺病であったことの確証となるばかりか、『繍像小説』の刊行が遅れていた事実と関連するから、さらに資料的価値がます。すなわち、李伯元の肺病は、彼の死因となっていると同時に『繍像小説』の恒常的発行遅延の原因だということになるからだ。

「『繍像小説』研究の現在」『清末小説から』第89号　2008.4.1、1-8頁。要約：『繍像小説』にはみっつの問題がある。編者は誰か、また李伯元と劉鉄雲の盗用問題、および発行遅延問題である。私は、問題点３件について独自の解答を提出している。だが、中国ではそれらについて長らく放置したまま追跡調査を行なっていない。ようやく文迎霞「関於《繍像小説》的刊行、停刊和編者」（『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』第38巻第３期 2006.5.15）が公表された。編者問題については、李伯元であることを新聞の広告を示して確認している。新聞を資料として利用するという私の方法を援用すれば、同じ結論に到着するのは当然だ。おなじく発行遅延についても新聞広告を根拠にして私の解答に近い。ただし、より緻密な推測を提示する。それは、よい。残念なことに、刊行遅延から必然的に生じる盗用問題については、言及をしていない。文迎霞の今後の論考を期待する理由である。

「(『清末小説研究ガイド2008』）第１部蟻の穴から――私の清末小説研究」『清末小説研究ガイド2008』清末小説研究会2008.6.1　清末小説研究資料叢書11、7-48頁。要約：私の清末小説研究を振り返り、研究論文が成立する条件について述べる。論文には「新しい発見」がなくてはならない。それを実行したのが、私の清末小説研究だった。取り組んだ課題を例にあげ、それが定説をくつがえす結果になった経過を紹介する。同時に、中国の研究界がどのような状況にあるのかも考えることになった。小説雑誌目録の作成／天津日日新聞版『老

残遊記二集』の発掘から難問解決へ／『繍像小説』編者問題／『繍像小説』発行遅延説／「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題／『増注官場現形記』の発掘／「官場現形記」裁判／『庚子蕊宮花選』の発掘／呉趼人「電術奇談」の原作探索／細かいことをいくつか／商務印書館と金港堂の合弁問題／林紓冤罪事件

「「老残遊記」執筆経過の謎２完――書簡集『滬榕書札』に見る」『清末小説から』第94号　2009.7.1、1-12頁。要約：劉厚沢と蕙孫兄弟は、「老残遊記」初集が『天津日日新聞』に連載されたのは1904年であるという阿英の誤った断定を前提にして考えている。出発点が間違っているから「老残遊記」執筆過程がどうなっているのか正しく理解することは不可能であった。魏紹昌から提出された執筆過程についての質問に答えることができないのも当然だ。一方の魏紹昌自身も、阿英説を信じていたから解答に到達することができなかった。後年、樽本が正しい答えを提出した。魏は知らぬ顔をして阿英説に根拠がないと書いたのだった。より大きな問題とは、こうだ。「文明小史」が「老残遊記」から盗用していること。それに掲載誌である『繍像小説』の発行遅延問題がからむ。編集長だった李伯元が死去したあとも『繍像小説』は発行を継続していた。李伯元の死後に発表された「文明小史」は、李の作品ではない。彼の協力者であった欧陽鉅源が執筆したとしか考えられない。「文明小史」の著者問題に発展するのだ。

「(『商務印書館研究文献目録』)『繍像小説』問題はどう論じられているか」『商務印書館研究文献目録』清末小説研究会2010.6.1　清末小説研究資料叢書13、38-55頁。要約：『繍像小説』については編者、発行遅延、盗用の問題が存在する。研究者は、それらの問題をどのあたりまで把握しているのか。李伯元研究から、張仕英と王学鈞の著作を取り上げて検討する。『繍像小説』研究からは、王燕と郭浩帆の論文をとりあげる。さらには、文迎霞、汪家熔の論文も視野に入れて評価一覧表を作成した。

「『繍像小説』問題２」『清末小説から』第99号　2010.10.1、1-6頁。要約：『繍像小説』問題とは、編者、発行遅延、さらに「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題である。主編者が李伯元であったときに、「老残遊記」の没書事件が発生した。ところが、その没書になったはずの内容が「文明小史」に盗用されている。では、盗用したのは李伯元だったのか。これに『繍像小説』の発行遅延という事実がからむので問題が複雑になる。事実は、李伯元の死去後に問題の「文明小史」第59回が発表されているのだった。死者が原稿を書くことはできない。李伯元にかわる人物がいたはずだ。それは欧陽鉅源であるというのが従来からの私の主張である。盗用問題について、もういちどその経過を整理しなおした。

２）たとえば、以下のものがある。

○祝均宙『図鑑百年文献――晩清民国年間期刊源流特点探求』台湾・華藝学術出版社

2012.12

32頁「1906年４月停刊」とある。

○任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』北京師範大学出版社2013.3

582頁『繍像小説』の停刊時期を「1906.4」と誤まる。

○袁進主編『中国近代文学編年史：以文学広告為中心（1872-1914)』北京大学出版社2013.5

周羽「《繍像小説》的貢献」121頁「1906年停刊」とし、刊行月を明記しない。発行遅延問題を視野にいれて用心深く記述を避けた、と私は推測した。

周羽「《老残遊記》的藝術成就」(278頁）ところが、その同じ周羽が、「老残遊記」の『繍像小説』連載について説明する。開始は該誌第９期で新暦を使用し1903年９月21日とする。第12期以前には刊年が印刷されている。「八月初一日」は、９月21日でよい。ところが、つぎに奇妙なことを書く。連載が中断した第18期には、刊年は記載されない。それを周羽は、「当年旧暦十二月」と表記している。これは半月刊が維持されたばあいの推測でしかない。周羽も発行遅延説には懐疑的であることがわかる。

狄霞晨「李伯元文学創作与広告」137頁『繍像小説』第56期1905年７月と誤る。新暦旧暦混用だ。第72期1906年４月と誤る。こちらは新暦のみ。

○闞文文『晩清報刊上的翻訳小説』済南・斉魯書社2013.5

13頁「1903.5～1906.4」とする。終刊時期は、従来通りの誤り。

附：『繍像小説』刊行一覧(論文番号23「「李伯元と劉鉄雲の盗用事件」の謎を解く」と共通する)。

凡　例

青色印　第１年24期　第２年48期　第３年72期の実際の完結刊年

黄色印　注意すべき事項

*印　王文君「就《申報》刊《繍像小説》廣告――與樽本照雄先生商榷」『清末小説から』第114号　2014.7.1　王論文により『申報』部分を訂正加筆した。注：「光緒三十三年五月初一日　第4版　第72期」は未記載

**印　陳大康『中国近代小説編年史』全６冊（北京・人民文学出版社2014.1。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

3*印　劉穎慧『晩清小説広告研究』北京・人民出版社2014.9。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

4*印　文娟「附録：近代《申報》小説広告編年」『結縁与流変――申報館与中国近代小説』桂林・広西師範大学出版社2009.3。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

5*印　文娟2016.1.30付メール。ただし、先行文献に見えないものだけを追加した

『繍像小説』刊行一覧　2016.1.30

光緒年	月	日	繍像小説 期	世界繁華報	(天津)大公報	中外日報	申　報	新聞報	東方雑誌	備　考
二十九 癸卯 1903	五	初一	1			**初五　1		初五　1		初七 1 同文滬報
		十五	2		廿七　1	3*廿五　2	*十八　数冊	廿四廿五　2		(四月朔　張元済が李伯元を主編に招聘する)
	閏五	初一	3					十五創刊号再版広告		
		十五	4		**廿八　1-3	**十八　3		十八　3		
	六	初一	5		初三-十二 1-3	3*十三　4		十三　4		
		十五	6		廿三　1-4					廿四 3 游戯報
	七	初一	7							
		十五	8	廿　5	廿六　5	3*十八　5		十七　5		
	八	初一	9			**十六　6		十五十七　6		
		十五	10		廿七　6	3*廿七　7		廿六　7		
	九	初一	11	初三　7	初六　7	**十一　8		十一　8		
		十五	12		十八　8					
	十		13(推定)		十二　4続到					初一 商務印書館金港堂合弁
			14 〃			**廿五　9		廿五廿八　9		
	十一		15 〃		初十　9					初八 1-9 消閑録（×推定15 詠日俄交戦也　時期的に矛盾)
			16 〃		廿三　10	*3十六　10		十六十九　10		廿四 10 消閑録
	十二		17 〃							
			18 〃			**廿二　11		廿一廿二　11		廿三 日露開戦(1904.2.10)
三十 甲辰 1904	正		19 〃	初八　1-12	初六　11				1現出至14	初六 11 消閑録
			20 〃		三十　12	**廿三　12		廿三　12		十二 12 消閑録
	二		21 〃		初十　13	3*初四　13		初四初五　13	2　〃	
			22 〃		廿六　14	**十九　14		十九　14		
	三		23 〃						3　17	
			24 〃							
	四		25 〃	初五　15	初七　15	**初一　15		初一　15	4　〃	(15 詠日俄交戦也　時期的に矛盾しない)
			26 〃			**廿三　16		廿　16		十八 詠日俄交戦也　遊戯報　**廿九　16　時報
	五		27 〃		廿七　17			十五　17	5　18	**十六　16　時報
			28 〃		廿九　18	**十六 17 廿四18		廿二　18		18 老残遊記13回で中断（実際の原稿は14回）
	六		29 〃						6　〃	**初三　18　時報
			30 〃							
	七		31 〃						7　〃	
			32 〃		廿四　19	**十八　19		十八　19		十八 19 時報
	八		33 〃						8　〃	
			34 〃							廿九 商務印書館編訳所移転
	九		35 〃						9　〃	
			36 〃		廿八　20	**十九　20		十九　20		十九 20 時報
	十		37 〃						10　〃	
			38 〃			廿　21		廿　21		
	十一		39 〃	初十　23		初一22 初十23		初一初二22 初九十一23	11　〃	
			40 〃		十六　21,22	廿三　24		廿三廿四　24		
	十二		41 〃		初二　24	初四　24			12　〃	
			42 〃							
三十一 乙巳 1905	正		43 〃						2-1　×	十二 劉鉄雲、李伯元面会
			44 〃	廿八　25						
	二		45 〃			初六　25-29	*初六　25-29	初六　25-29	2預定25-48	初六 遅延広告(中外日報、新聞報)
			46 〃			十八　30,31	*廿一　30,31	十四　30,31		
	三		47 〃			初九　32		初九　32	3　〃	
			48 〃							
	四		49 〃						4　〃	
			50 〃			3*　十七　33,34	*廿八　32-34	十七　33,34		
	五		51 〃						5　×	
			52 〃							
	六		53 〃			初五　35	*初七　35	初六　35	6　25-48	4*初六　35 申報
			54 〃			廿一　36-38	*廿三　36-38	廿一　36-38		
	七		55 〃			初八　39,40		初六　39,40	7　〃	
			56 〃				*十六　39,40			
	八		57 〃			十一　41,42	十二　41,42	十一　41,42	8　×	
			58 〃							
	九		59 〃				5*廿三　43		9　×	初一 老残遊記『天津日日新聞』で連載開始
			60 〃			**廿五　43	廿七　43	廿三　43		
	十		61 〃			初七　44	*初七　44	初八　44	10　×	初三 老残遊記11回原稿を復元
			62 〃				5*廿七　44			初四 老残遊記15回原稿を新しく執筆
	十一		63 〃			初五　45,46	初五　45,46	初六　45,46	11　×	
			64 〃				*十一　45,46			
	十二		65 〃			初一　47,48	*初八　47,48	初三　47,48	12　×	初一 遅延広告(中外日報)
			66 〃			3*十五　49,50	十五　49,50	十六　49,50		
三十二 丙午 1906	正		67 〃			**十五　50	**十五　50	**十七 50	3-1　×	劉鉄雲日本訪問１回目
			68 〃				廿九　49-52	廿九　49-52		
	二		69 〃	十五 李伯元肺病宣言 52 遅延広告		初二　49-52	*初六　49-52		2預定49-72	初六 遅延広告(中外日報)
			70 〃			初六　52				
	三		71 〃			廿　49-52	*廿四　53,54		3　×	十四 李伯元死去
			72 〃			廿五　53,54	*三十　53,54	廿五　53,54		53　文明小史57回、活地獄27回（×李伯元作ではありえない）
	四								4　×	
	閏四						*初九　55,56		5　49-72	55　文明小史59回、活地獄29回（×李伯元作）
										56　文明小史60回、活地獄30回（×李伯元作）
	五								6　×	
	六					初二　55,56	初八　57	初三　55,56	7　49-72	57　活地獄31回（×李伯元作）
					十六-廿六 57	初八　57,58	*十一　57,58	初七 57 初九 57,58		58　活地獄32回（×李伯元作）
	七				初三-廿　57				8　現出50	59　醒世縁弾詞12回(×李伯元作)
						廿二　58,59	*十三　59,60	廿二　58,59		60　活地獄33回（×李伯元作）
	八				初五　57	初二　60,61	*初一　60,61	初一　60,61	9　〃	劉鉄雲日本訪問２回目 61　活地獄34回（×李伯元作）
						廿　62-64	*十九　62-64	十九　62-64		63,64　活地獄35,36回（×李伯元作）
							*廿八　61-64			
	九						4*初四　62-64		10　61	
	十								11　〃	初九　『文明小史』商務印書館単行本
						廿六　65-67		廿七　65-67		65　活地獄37回（×李伯元作）
	十一						*初五　65-67		12　〃	十五 呉趼人「李伯元伝」『月月小説』1年3号
							*廿九　69	廿九　67-69		68,69　活地獄38,39回　醒世縁弾詞13,14回（×李伯元作）
	十二					初二　69	*初八　68-70		13　72	初一 蒋維喬、談小蓮と相談 70,71　呉趼人「活地獄」40-42回
						十八　72	*十八　72	十七　72		十八 改良広告(中外日報)　72　欧陽鉅源「活地獄」43回
三十三 丁未 1907	正					十一 現満72	4*十三 現満72		4-1　〃	十八 現満72　時報
	二								2　現満72	
	三								3　〃	

【参照】

光緒三十三年九月初三日（1907.10.９）付『時報』『中外日報』ほかに、「商務印書館／南亭亭長／繍像小説」という商務印書館自身の広告（劉徳隆の指摘あり）

[編年③1304]『中外日報』光緒三十三年七月初六日（1907.8.14）、初八日、十四日、二十五日、八月初一日、九月初三日、初十日、十一日、十三日、十六日、二十三日。『時報』九月初三日、十三日。『神州日報』七月十三日

文迎霞「関於《繍像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』第38巻第３期2006.5.15

陳大康「晚清《新聞報》与小説相関編年（1903-1905）」『明清小説研究』2007年第２、３期（総第84、85期）　2007発行月日不記

陳大康「中国近代小説史料――《繍像小説》中小説史料編年」『文学遺産　網絡版』劉霞によると2010.4.5（未確認）　電字版　『新聞報』広告を主として採録する

劉　霞「関於《文明小史》的刊行時間」『現代語文』2012年第1期（総第454期）2012.1.5

欒偉平「夏曾佑、張元済与商務印書館的小説因縁拾遺――《繍像小説》創辦前後張元済致夏曾佑信札八封」『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期（総第174期）2014.1.15。引用して四月朔「商務館現求助於繁華報館主人李伯元，其筆墨亦平浅，然此外更無人」

文　娟「附録４：《申報》所刊雷瑨的謝贈文字」1905.8.16（陰暦七月十六日）には「第四十九、五十冊《繍像小説》」とある。送られてきた写真を見ると「第四十九五十冊繍像小説」となっている（2016.1.30受。写真参考）。前後左右の資料からたぶん誤植だろうと考える。『文学場域変革中的交融共生――掃葉山房説部及雑誌刊行研究』上海大学出版社2015.11。275頁

『申報』1905.8.16（光緒三十一年七月十六日）

↓ 雷瑨謝贈（文娟氏提供）

志謝商務書館惠贈書籍

第五冊初等小學國文教科書　是書共計英六十課文筆淺而圖繪尤極精細故有五彩圖兩張設色鮮妍頗能引兒童趣誠初等小學堂不可不備之書也

第四十九五十冊繍像小説　讀史者讀近代之史較之古史易於領會以時代近而風俗同也小説亦然雖文筆不及古人而描寫有所指而人名地名則寓言八九頗耐人尋味至此外詞曲各種亦多新奇可喜誠足開智慧而廣見聞也（缺）

本館告白

近日紙價奚約之昂風潮未息投書賒閱者日必數起爰於本月十五日始另立賒閱一門以便將惠示名書排次編錄惟一切須由現

1906.5.31(光緒三十二年閏四月初九日)

↓

志謝贈書　○昨承商務印書館贈以簡易國文課本簡易數學課本各二冊倫理歷史地理修身格致等課本各一冊語言淺顯而事實頗完備最合於半日學堂後學堂星期學堂等之用又繍像小說五十五六兩期其中文明小史已成全編以立憲猜穴頗具含蓄不盡之意新編之花神夢哀感頑艷海入心脾不堪於冷風凄雨時讀之一

中国近代小説年表の最新成果（初稿）

――陳大康『中国近代小説編年史』について

『東方』2015年2月号（第408号 2015.2.5）に掲載した書評のこちらが元原稿だ。字数制限があったので準備原稿を大幅に削除した。今回、削除箇所をもともどした。『中国近代小説編年史』全６冊(北京・人民文学出版社2014.1）の書評。清末小説年表であり貴重な資料集でもある。次の注目点（瑕瑾３件）を指摘する。『繍像小説』発行遅延説、海賊版『官場現形記』、商務印書館版「説部叢書」。小さなキズは資料集としての価値を損なわない。

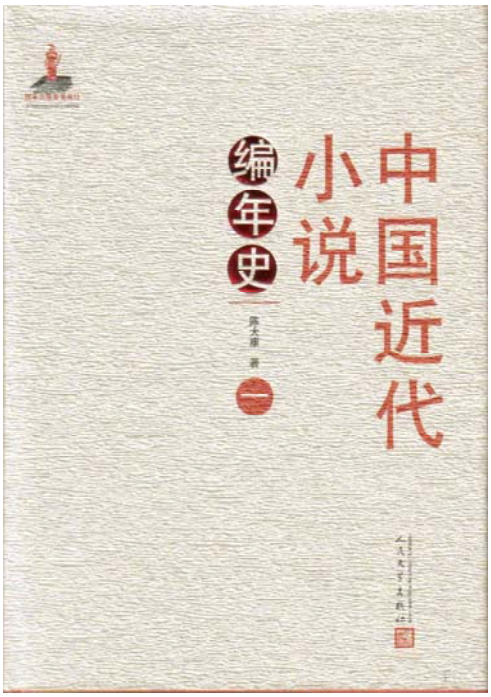
陳大康著『中国近代小説編年史』は、日本でいう小説年表である。一八四〇―一九一一年間、すなわち「近代」（私は清末と呼んでいる）に発表された創作と翻訳を収録する。全六冊（北京・人民文学出版社二〇一四。『編年史』と略す）という大著だ。

書名から、容易に推測できる。陳大康著『中国近代小説編年』（上海・華東師範大学出版社二〇〇二。『編年』と略す）を出発点とし、それから発展させた。今まで、清末小説年表でこれほどの大規模本は、見たことがない。B5判本文だけで二三四二頁、索引類を含めば三一八一頁という規模だ。序八頁、凡例二頁、導言一八一頁などは、別にしてある。

最初に、該書について私がくだした基本的評価を結論的にいう。

『編年史』が提供する材料は、信頼するに足る。その規模は、中国において空前である。資料集としても有用だ。私は、高く評価する。

編集方針の大きな変更をまず指摘しておく。該書の特色のひとつにもなっているからだ。



北京・人民文学出版社二〇一四

新聞雑誌および単行本の実物を探し出し、それらにもとづいた。つまり、先行する各種目録類は、ほとんど無視する。これが、変更点だ。自らの『編年』も捨て、陳大康は、自信をもって新しい編集方針に変更し『編年史』を送り出した。

1　全体の構成

『編年史』の全体の構成については、目次を示すことでかえる。カッコ内は樽本注。

第一冊
　序、
　凡例、
　導言：過渡形態的近代小説（陳大康による概説）、
第一冊半分より第五冊半分まで（通し番号。本稿では検索の便宜を考え①―⑥をつ

けて頁数を示す）

中国近代小説編年史（これが本文）

第五冊半分より

附録：

近代自著小説内容介紹一覧表（創作の新聞広告）

近代翻訳小説内容介紹一覧表（翻訳の新聞広告）

第六冊

近代小説著訳者及其作品一覧表（著者別作品索引）

近代小説出版状況一覧表（出版社別作品索引）

近代小説転載情況一覧表（重複作品索引）

近代小説書刊価一覧表（書籍の価格）

近代小説篇名索引（作品索引）

近代小説人名索引（著者索引）

その「凡例」を要約し、少しの注釈をつければ、全体がより詳しく見える。

道光二十年（一八四〇）から宣統三年（一九一一）までの小説（創作［陳大康は自著という］と翻訳）を、重版を含めて収録する。その対象範囲は、前の『編年』と同じだ。アヘン戦争から清朝末期までとなる。

伝奇、弾詞などは、発表時に小説と称していても収録しない。前著の編集方針を変更した。

旧暦順に配列し新暦を添える。刊年が日にちまで記載されている作品を優先する。月まで、年までと表示が大ざっぱになるほどに、ページの後部に配置する順序である。

序、目次などの関連記事を収録する。回目も明記している。実物で確認していることがわかる。

陳大康が自分で確認できない二〇〇余種の小説は、各種目録によって補ったという。ただし、ごく少数の例外をのぞいて参考資料を提示しない。

作品に関連する多くの資料を収録する。中心は、各種新聞に掲載された出版広告だ。出版社の広告であれば、出版告知、予告は当然のように収録する。それば

かりか、本社の移転、懸賞文募集とその選考結果の発表もある。さらに、当時の日記類から引用する。作者の略伝も書き込む。雑誌掲載の小説理論、小説評論を拾う。清朝政府の政策、出版機構、評論など、さらに、新聞雑誌、あるいは出版社の概略を記述する。小説と銘打たれていれば、当時流行した滋養強壮薬である「艾羅補脳汁」の宣伝文も収録する。呉趼人も「還我魂霊記」を書いて広告したことで知られる。全体のページ数が、増えるはずだ。

もうひとつ、頁数が増加する理由がある。雑誌の連載小説にまつわる。

『編年』では連載開始と終了だけを提示していた。だが、『編年史』では、その途中の掲載も基本的にすべてを収録する。変更した編集方針のひとつだといえる。

小説ではない議論文をおさめる。第六冊索引には「小説論文」の項目を設定している。伝奇、弾詞、戯曲などの実作よりも、小説にまつわる関連論文のほうが重要だ、という陳大康の判断なのだろう。

2　注目点をいくつか

陳大康が、『編年史』「序」において自ら提出した問題のなかからいくつかを紹介する。

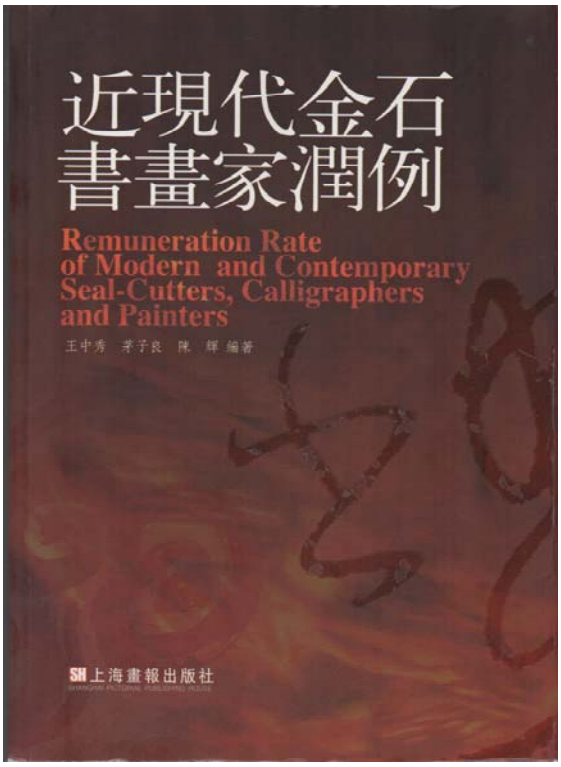
注目点１：呉檮の筆名問題

呉檮丹初は、翻訳家として有名である。チエホフ、ゴーリキー、ズーダーマン、マーク・トウェイン、尾崎紅葉、黒岩涙香など、底本には日本語訳を使用する。中華呉檮亶中などの表記も見かける。別に、天涯芳草館主という翻訳家もいた。

この呉檮と天涯芳草館主は、長い間別々の人物として扱われてきた。『編年』も同じだ。人物索引には、天涯芳草と呉檮にわけていた。

両者を結びつけたのは、王中秀、茅子良、陳輝編著『近現代金石書画家潤例』(上海画報出版社二〇〇四／二〇〇五）が最初だと思う。

該書によると、呉檮は、字が亶中、室名は天涯芳草館、別に天涯芳草館主という。翻訳家だと思っていたら書家でもあった。多彩な能力をもった人らしい。



『近現代金石書画家潤例』

『棠花怨』

該書に資料として収録された新聞を、マイクロフィルムで私も確認した。その結果得られた一部分を示す。

一九〇〇年から一九一〇年にかけていくつかの新聞に名前が見える。「天涯芳草舘主呉濤」「西湖天涯芳草館主呉濤」「海陽天涯芳草館主人呉君亶中」など。

呉亶中は呉檮だ。ゆえに、呉檮と天涯芳草館主が同一人物だと考えられる。

呉濤と呉檮は、通音するが、水と木では違う。微妙なところで異なっている。だからこそ、「天涯芳草館主と呉檮が同時に出現するものはなさそうだ」と以前に書いた。

陳大康が見つけたのは、『棠花怨』だ。『棠花怨』であれば、『編年』（二三一頁）光緒三十四年月不明の個所に収録されている。呉檮訳と書いて、阿英目録以

来の記述を踏襲した。

陳大康は、それ以後に該書を実際に見たらしい。『棠花怨』（一九〇八）に「中国天涯芳草館主海陽呉檮亶中訳」とあり、これで天涯芳草館主と呉檮が結びつくという（四一五頁）。

ウェブ上の孔夫子旧書網に写真が掲載されている。それを見て確認することができる。研究が一歩前進したのは確実だ。

別の成果を示そう。彼は、新聞紙上に掲載されている記事を読めば、問題を解決できることがわかった、というのだ。

注目点２：『繍像小説』発行遅延問題

『繍像小説』は、月二回の発行を維持していた、と今でも考えている研究者は多い。だが、実際には発行が徐々に遅延した。一九八五年以来、私はなんどか説明してきた。

問題にされていると、陳大康は知っているらしい。だが、結局のところ「一致した結論がでない、どれがよいと決められない（莫衷一是）」そうだ。陳大康が原稿を書いていた時は、そうだったのだろう。だが、上海の各新聞に掲載された出版広告を見れば、もとから問題になりようがないという（序二頁）。新聞記事を使うのは、私と同じだ。

『繍像小説』の刊行については、『編年』と比較して『編年史』では記述を大きく変更している。陳大康は、新聞広告を利用する過程で考えを変えたようだ。

『繍像小説』の刊年は、第一三期より印刷されなくなった。第一三期を含んだ連載作品をあげよう。

> 憂患余生（連夢青）述「商界第一偉人」『繍像小説』六一一四期　癸卯六・十五一刊年不記［癸卯十・十五］(一九〇三・八・七一［一九〇三・一二・三］とするは誤り)

第六期には、旧暦癸卯六月十五日と記されているが、第一四期には、刊年がない。だから「刊年不記」と私は書いている。

従来中国では、第一四期にありもしない「癸卯十月十五日」などと多くが記述し続けていたのだった。

現在、私は「［一九〇三・一二・三］とするは誤り」と念をおしている。そればかりか、先行研究の成果を取り入れて「第一四期実際の刊年は推定甲辰（一九〇四）二月」と注記するにいたっている。

『編年』の二〇〇二年時点で、陳大康は、新聞を利用する発想も機会も、ともに持ち合わせていなかったと思われる。

『編年』から『編年史』（二〇一四）のあいだに、文迎霞「関於《繍像小説》的刊行、停刊和編者」（二〇〇六）が発表された。新聞広告を手がかりに、『繍像小説』の発行遅延を追跡した。文迎霞は、『編年史』の編集に参加している。陳大康が指導する博士課程の院生だった。彼らは、二〇〇二年あたりから二〇〇六年頃まで、資料に新聞を利用しはじめたことがわかる。その成果のひとつが、文迎霞論文なのだろう。

私が長く注目している『繍像小説』発行遅延に気がついた中国人研究者が、ようやく出現した。当時、そう思ったものだ。

そうして今回の『編年史』である。「商界第一偉人」の終了部分『繍像小説』第一四期だけをとりあげる。

以前の『編年』では「光緒二十九年十月」としていた。今回の『編年史』では「光緒三十年二月」(②六九四頁）だ。変更して従来よりも四ヵ月も遅くなっている。その根拠は、「『新聞報』二月十九日広告」(②六九五頁）だという。なんだ、私の結論と同じではないか。資料として新聞の発行広告を利用すれば、誰がやってもたぶん同じ結果を得ることができる。

もうひとつ、『繍像小説』の発行遅延問題は、それだけに終わらない。光緒三十四年三月十四日、該誌を編集する李伯元が死去した。李伯元死去後も、『繍像小説』は発行が継続されている。ならば、彼の名義で発表された作品（「文明小史」「活地獄」「醒世縁弾詞」）の一部は、李伯元の作品ではなくなる。この重要な点について陳大康は、なにも説明していない。言及しない文迎霞と同じだ。問題があるとは思っていないらしい。

『繍像小説』に連載された「活地獄」の説明を見よう。

以前の『編年』では、「李宝嘉（伯元）が病没したため、第四〇一四二回を呉沃堯が続作した」(一〇〇頁）と説明している。ただし、その時期は明記していない。ただの概説にすぎない。その時点では陳大康は『繍像小説』の停刊を「光緒三十二年三月停刊」と通説にしたがっていた。その範囲内において、執筆者の変更を認めているということだ。

ところが、新しい『編年史』になると記述が奇妙なことになる。「李宝嘉は病気が重くなったため執筆することができなくなった」(③一一六〇頁)。以前の病没から、重病で執筆不能に変化させた。それが発生したのは、光緒三十二年十二月である。

ところが、『編年史』③九七〇頁ではそれより約十ヵ月（閏四月あり）以前に、「(光緒三十二年三月）十四日（4月7日）李宝嘉卒（1867-1906)」と書いている。李伯元の死後約十ヵ月後に呉趼人が代筆しているのが事実だ。すでに逝去しているのに病気が重くなったという。あきらかに矛盾する。これでは、陳大康の説明が退化したことになる。

事実にもとづけば、李伯元死後に発表された「文明小史」第五七一六〇回、「活地獄」第二七一三九回、「醒世縁弾詞」第一二一一四回は、彼の執筆ではないとわかる。

陳大康は、李伯元の死去と南亭亭長名義の作品に重要な関連があるということに気づいていないらしい。

陳大康は、『繍像小説』の発行遅延情況を新聞広告にもとづいて詳細にあとづけした。にもかかわず発行遅延と李伯元死去に無関心である。不可解だ。くり返すが文迎霞も同じだった。

資料の収集整理にあたり、電脳が便利になったのはそうだろう（序六頁)。電脳は、人間が使う道具にすぎない。問題を考えるのは、結局のところ人脳なのである

だからといって、『繍像小説』発行遅延について、『編年史』が示す功績がなくなることはない。これほどあからさまに問題を指摘したからには、中国の学界も以前のように無視はできなくなった。情況は確実に変化したといえるだろう。研究者はどのように扱うのだろうか。今後の研究動向が興味深い。

注目点３：『官場現形記』海賊版

李伯元『官場現形記』は、刊行の途中から海賊版が出てくるほど読者の評判が高かった。私は、以前に海賊版の問題を提出したが、詳細を明らかにすることができなかった。資料が不足していたからだ。

再調査するきっかけは、劉穎慧「李伯元《官場現形記》版権訴訟始末」(『華東師範大学学報（哲学社会科学版)』二〇〇六）だった。新聞を活用して、一九〇四年に行なわれた裁判の経緯を詳細に紹介した。高く評価できる。これも陳大康の指導があったのだろう。

新聞広告にもとづいた裁判の経過を簡単に紹介する。

海賊版『官場現形記』は、日商朝日洋行を経由し、日本知新社本の中国人支配人席粋甫が窓口になって販売した。それに対して、原本を刊行する世界繁華報館の李伯元が提訴する。その結果、中国人の席粋甫が、海賊版を製作販売した罪で逮捕され首かせ三日の刑に処せられた。

新聞広告を見る限り、海賊版は日本を強調していることがわかる。読者は日本人が洋装の『官場現形記』を製作販売したと思った。最初は海賊版などとは考えもしない。ところが、海賊版だという裁判になったのだ。

陳大康は、当然のように疑問を提出した。処罰されたのは、中国人「支配人席粋甫」だけである。広告に出てくる日本人の「日本知新社主人弼本氏」はなぜ無傷なのか。李伯元にとっては、裁判には勝ったもののいくらかふがいないものである（有点窩囊)、と。陳大康は、日本人が処罰されていないことに特別な不満を感じていることを隠さない。

追跡したのが新聞広告だけならば、そういう結果になるだろう。私が、自分で調査をやりなおして理解したことだった。

劉穎慧論文を読んだとき奇妙に感じたことが、ひとつある。海賊版である日本吉田太郎著『官場現形記』そのものについての説明がない。日本知新社が光緒三十年六月（一九〇四）に刊行した。該書は、私の手元にある。

日本を前面に押し出した刊行物だ。日本人が日本で印刷したものにしては、年号の明治を使用していないのがあやしい。中国で印刷製本したものだろう。それ

に気づく中国人研究者は、いないらしい。実物を見ていないのならば、しかたがない。

それにしても、阿英が彼の目録に収録していることを、劉穎慧も陳大康も知らないのだろうか。阿英目録八一頁「又光緒三十年（一九〇四）翻本。托日本知新社版，吉田太郎著」を陳大康は無視したか、忘れた。

私も、新聞のマイクロフィルムを取り寄せて、独自に調査をした。すると、新聞広告ばかりでなく、裁判を報道する記事がある。劉穎慧と陳大康は、新聞広告は見たが同じ新聞に掲載された報道記事は探さなかったらしい。残念なことだった。その結果は、意外なものだ。

『同文滬報』『中外日報』一九〇四年一一月二二日付に「席粋甫冒日本人（之）名」と明記してある。だが、陳大康らは気づかなかったから『編年史』②七六九頁の該当個所に、掲載はない。

つまり、日商朝日洋行、日本知新社および日本吉田太郎は、すべて席粋甫の自作自演だった。中国人が日本人になりすまして海賊版を製作販売した。これが『官場現形記』海賊版事件の真相なのだ。裁判に日本人がでてこない理由でもある。

陳大康は、なぜ日本人が処罰されないのかと不満げだった。真相を知ってしまえば、そう思うほうがおかしい。日本人は、もとから関係がないからだ。

陳大康は、該書「導言：過渡形態的近代小説」で、やや詳しく事件の推移を紹介している。

私が不思議に思うのは、陳大康がこの『官場現形記』海賊版を作成し販売したのは日本人だと今でも信じ込んでいることだ。

いわく、『官場現形記』の人気が非常に高いのを見た「日商朝日洋行は、分不相応な高望みの気持ちをにわかに抱き、東京で印刷した洋装本を中国に輸送し、知新社の名前で発売した」（①一五一頁）

海賊版の版元知新社が打った新聞広告の内容をそのまま信用している。これには、驚かされる。窃盗犯がいうことを、疑いもせず本当だと思っている。書いてあるものは、なんでも信頼するらしい。ここには、批判的に検討する研究姿勢が見えない。

裁判結果も新聞広告を引用して紹介する。そこには、席粋甫の名前だけがある。日商朝日洋行も、日本知新社も消失している。『編年史』において、日本吉田太郎は、最初から最後まで登場しない。

陳大康は、ここでも数年前と同じ疑問をくり返している。「処罰を受けたのは、なぜ「支配人席粋甫」だけなのか、身はフランス人の日本人［身為法人的日人］「知新社主人弼本氏」が少しも傷ついていないのはなぜか。この裁判は、勝利したとはいえいくらかふがいないものである（有点窩囊）」（①一五二頁）

「身はフランス人の日本人［身為法人的日人］「知新社主人弼本氏」」と陳大康は説明している。意味不明。根拠も示さない。

陳大康は、海賊版には日本人が関係したとどうしても思いたいらしい。同じ日付の新聞記事が裁判結果を報道しているのだが、見落としたのであればしかたがない。

注目点４：商務印書館版「説部叢書」

『編年』から『編年史』へ拡大して生じた変化のひとつは、商務印書館「説部叢書」を注記したことだ。以前は、無視していた。今回は、新しい工夫として「説部叢書」を注記する。これにも驚かされた。

外国小説翻訳シリーズ「説部叢書」は、つぎのように変化しながら形成された。

一集十編を重ねて第十集第十編まで、全一百編を「元版」と称している。成ったのは、清末の一九〇八年だ。表紙はタンポポ文様。これが中華民国成立後の一九一三年には、初集と改称された。その際、表紙をリボン文様に一新する。編数は通し番号に振り直して、全一〇〇編である。これが「初集本」だ。２集、第３集、第４集と継続発行されていく。

清末の元版と民国後の初集本を区別するところに研究の基本がある。初集本の中から、のちに林紓の翻訳だけを引き抜いて「林訳小説叢書」が編纂刊行されてもいる。

『編年史』は、『編年』とおなじく一九一一年まで、と時間を区切っている。ならば、当時の「説部叢書」は元版だ。民国後に出てくる初集本があってはならない。もし、「初集」と書くとすれば、それは誤りである。

陳大康は「説部叢書」について初集と書いて、多くが間違っている。「林訳小説叢書」も同様だ。『編年史』に記載することは、不適切である。

例をあげたほうがわかりやすい。

ヨーカイ・モール著、周作人訳『匈奴奇士録』がある。作人自身が記憶違いをしている。ロバート・ニスベット・ベイン（R. Nisbet Bain）の英訳にもとづいたと書き続けた。確認したのちの研究者はいなかったらしく、全員が作人の説明をくりかえしている。

原作は、Percy Favor Bicknell 英訳 *MANASSEH: A ROMANCE OF TRANSYLVANIA*. Boston: L. C. Page & Company, 1901である。日本語を表示すれば、パーシー・フェイヴァー・ビックネル英訳『マナセ：トランシルヴァニア物語』となる。

その作品について『編年史』は、初版を光緒三十四年九月初八日（一九〇八・一〇・二）出版だとする（④一六〇九）。わざわざ「説部叢書」二集第五十一編だと説明する。ここの「二集」は「初集本」のあとに出てくるものだ。

実をいえば、一九〇八年版は、商務印書館の「欧美名家小説」に収録された。「説部叢書」ではない。改称されて初集となったあとの「説部叢書」２集第51編に組み入れられたのは、一九一五年である。そのとき、奥付に初版として「戊申九月八日」を明記した。日にちまで明らかにしたのは、この２集本がはじめてだ。「欧美名家小説」には、月止まりで「光緒三十四年九月」とだけ表示する。つまり、陳大康は、後年に再版して「説部叢書」２集本となった実物で確認して、その奥付の記述を信じてしまった。「戊申九月初八日」を初版本に認定し、しかも当時は存在しなかった「説部叢書」２集第51編と書いて誤ったわけである。

陳大康は、「説部叢書」について研究をしていないらしい。元版と初集本の区別がついていない。まさか、その区別があることを知らないというのだろうか。彼が発表した『編年』を含むいくつかの論文を見てきたから、「説部叢書」についての基礎的知識がないなどとは思ってもみなかった。翻訳小説研究を軽視する中国学界の傾向が、こういう場所に露呈すると感じるだけだ。

気になる箇所をいくつか指摘した。誤った箇所を引用して証拠とするならば、それは引用者の責任になる。いくつかの間違いは、利用者が判断すればすむことだろう。

『編年史』は、有用な資料集だ。巨冊のなかの小さなキズは、該年表がもつ高い価値をそこなうものではない。いたって常識的な結論に落ち着く。

注目点４：『官場現形記』の海賊版

『清末小説から』第119号（2015.10.1）に掲載。『官場現形記』海賊版について陳大康が珍説を発表している。私が珍説だというのは、陳大康が海賊版を作成したのは日本金港堂だと断言したからだ。証拠は存在しない。新聞広告に出てくる単語を組み合わせて作りあげた妄想捏造である。妄想捏造だという根拠はなにか。日本金港堂は当時商務印書館との合弁会社だったからだ。商務印書館が刊行する雑誌『繍像小説』の主編が李伯元だ。李伯元が執筆刊行している『官場現形記』をなぜ商務印書館との合弁会社である金港堂が盗んで印刷するだろうか。海賊版作成の主犯が金港堂であると主張するならば、その証拠を提出する義務と責任が陳大康にはある。陳大康著『中国近代小説編年史』の書評の一部を先行発表した。ただし、残りは未発表のまま。

【前言】陳大康著『中国近代小説編年史』(2014)について原稿を準備している。注目点を抽出して番号をつけている。長くなりそうだ。整理がすんで発表するのではいつになるかわからない。そこで緊急に一部分を抜いて先行発表する。「注目点４」と奇妙に思われるであろう題名になった。

李伯元「官場現形記」は、刊行の途中から海賊版が出てくるほど読者の評判が高かった。

樽本「『官場現形記』裁判」(1982）*1では、海賊版の問題を提出したが、資料が不足しており解決することができなかった。

ひとつのきっかけは、劉穎慧「李伯元《官場現形記》版権訴訟始末」(『華東師

範大学学報（哲学社会科学版)』2006年第3期（総第185期）2006.5(.15))*2だった。新聞広告を活用して、1904年に行なわれた裁判の経緯を紹介した。高く評価できる。これも陳大康の指導があったのだろう。

新聞広告にもとづいた裁判の経過を簡単に紹介する。

海賊版『官場現形記』は、日商朝日洋行を経由し、日本知新社本の中国人支配人席粋甫が窓口になって販売した。それに対して、原本を刊行する世界繁華報館の李伯元が提訴する。その結果、中国人の席粋甫が海賊版を作成販売した罪で逮捕され首かせ三日の刑に処せられた。

海賊版は、「洋装」を売り物にしている。李伯元が主宰する世界繁華報館の原本は線装であるのを意識してのことだ。新聞広告を見る限り、日本を大いに強調していることがわかる。

陳大康も同じ主旨で文章を発表している。陳大康が劉穎慧と異なるところは、ひとつの疑問を提出したことだ。すなわち、処罰されたのは、中国人「支配人席粋甫」だけである。広告に出てくる日本人の「日本知新社主人弼本氏」はなぜ無傷なのか。李伯元にとっては、裁判には勝ったもののいくらかふがいないものである（有点窩囊)、と。陳大康は、日本人が処罰されていないことに特別な不満を感じていることを隠さない。しかも、この不満は後年まで持続した。

追跡したのが新聞広告だけならば、あるいはそういう結果になるかもしれない。私が、自分で調査をやりなおして理解したことだった。

陳大康と劉穎慧の論文を読んだとき奇妙に感じたことがある。海賊版である日本吉田太郎著『官場現形記』そのものについての説明がないことだ。発行元の日本知新社は出てくる。だが、日本吉田太郎の名前は新聞広告には出てこない。ということは、陳大康と劉穎慧の師弟は、肝心の海賊版そのものを見たことがないらしい。もの足りなく思ったものだ。

私は、新聞のマイクロフィルムを中国から取り寄せて独自に調査をした*3。

新聞広告ばかりでなく、裁判結果を報道する記事も探し当てた。陳大康と劉穎慧は、新聞広告は見たが同じ新聞に掲載された報道記事は探さなかったらしい。後で触れる。その結果は、意外なものだった。

海賊版『官場現形記』そのものは、日本吉田太郎著と名乗り日本知新社が光緒

三十年六月（1904）に刊行した。該書は、私の手元にある。

日本を前面に押し出した刊行物だ。日本人が日本で印刷したものにしては、年号の明治を使用していないのがあやしい。中国で印刷製本したものだろう。それに気づく中国人研究者は、いないらしい。実物を見ていないのならば、しかたがないか。私は、そうは思わないが。

それにしても、阿英が彼の目録に収録していることを、陳大康も劉穎慧も知らないのだろうか。阿英目録81頁に掲載されている箇所を陳大康は無視したか、忘れた。念のため書いておく（傍線省略）。

又光緒三十年（一九〇四）翻本。托日本知新社版，吉田太郎著

樽目録第３版にも当然ながら記載している。

そこで、陳大康も劉穎慧も存在に気づかなかった新聞の報道記事の要点を紹介しよう。

『同文滬報』『中外日報』1904年11月22日付に「席粋甫冒日本人（之）名」と明記してある。だが、記事そのものがあるとは知らないから『編年史』②769頁の該当個所にその記載はない。

結局のところ、日商朝日洋行、日本知新社、弼本氏および日本吉田太郎は、すべて席粋甫の自作自演だった。中国人が日本人になりすまして海賊版を作成販売した。これが『官場現形記』海賊版事件の真相なのだ。裁判に日本人が出てこない理由でもある。陳大康は、なぜ日本人が処罰されないのかと不満げだった。真相を知ってしまえば、そう思うほうがおかしい。中国人が日本の名称を悪用した。日本はもとから海賊版に関係がない。

2008年に私は論文を公表した。ウェブサイトにも掲載して発信した。そうして今回の陳大康『編年史』だ。

陳大康は『編年史』の「序」において海賊版問題を紹介し、つぎのように書いている。

時間の順序にそってその数日の新聞を読めば、事件全体の進展と判決が下る

までの過程は明白なのである。2頁

新聞広告を追跡した経験からそう書いた。陳大康は、該書「導言：過渡形態的近代小説」で、やや詳しく事件の推移を紹介している。

私が不思議に思うのは、陳大康がこの『官場現形記』海賊版を作成し販売したのは日本人だと今でもかたく信じ込んでいることだ。

いわく、『官場現形記』の人気が非常に高いのを見た「日商朝日洋行は、分不相応な高望みの気持ちをにわかに抱き、東京で印刷した洋装本を中国に輸送し、知新社の名前で発売した」(①151頁)

海賊版の版元知新社が出稿した新聞広告の内容をそのまま信用している。これには驚いた。窃盗犯がいうことを、疑いもせず本当のことだと思っている。書いてあるものは、なんでも信頼するらしい。ここには、批判的に資料を検討する研究姿勢が見えない。

裁判結果も新聞広告を引用して紹介する。裁判の報道記事ではないことを再度いっておこう。そこには、席粋甫の名前だけがある。日商朝日洋行、日本知新社、および弼本氏も消失した。くりかえすが『編年史』において日本吉田太郎は、最初から最後まで登場しない。

陳大康は、ここでも数年前と同じ疑問をくり返している。

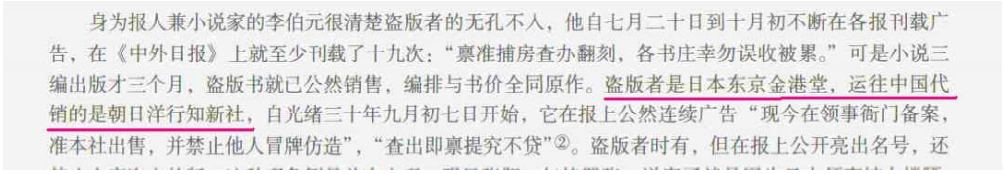
「処罰を受けたのは、なぜ「支配人席粋甫」だけなのか、身はフランス人の日本人「知新社主人弼本氏」が少しも傷ついていないのはなぜか。この裁判は、勝利したとはいえいくらかふがいないものである（有点窩囊)」(①152頁)。部分的に使う語句が以前と一致している。陳大康にしてみれば、疑問が解決されないままの状態にいる。

実在しない知新社主人弼本氏が、なぜフランス系日本人（身為法人的日人）になるのか。わけがわからない。それにしても、陳大康は海賊版には日本人が関係したとどうしても思いたいらしい。

陳大康「論近代小説伝播中的盗版問題」(『文学遺産』2015年第1期　2015.1.15）が書かれた*4。

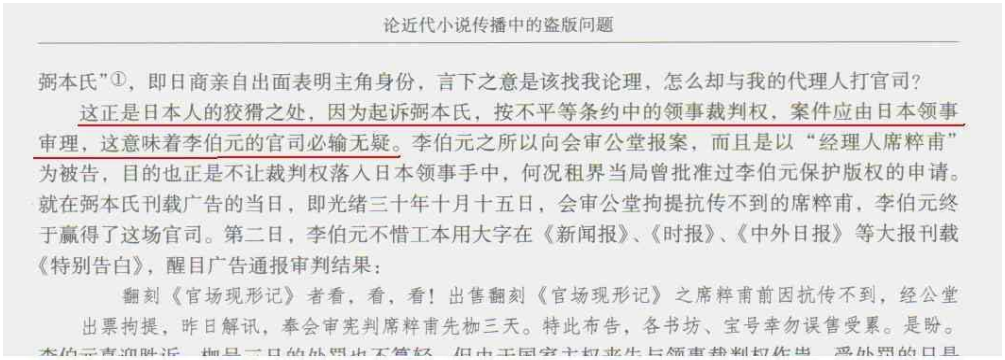
陳大康・華東師範大学中文系教授の上記論文は、『官場現形記』海賊版につい

ては以前とほとんど同じ。ただ、このたび以下のふたつの見解を新しくつけ加えた。



身为报人兼小说家的李伯元很清楚盗版者的无孔不入，他自七月二十日到十月初不断在各报刊载广告，在《中外日报》上就至少刊载了十九次："禀准捕房查办翻刻，各书庄幸勿误收被累。"可是小说三编出版才三个月，盗版书就已公然销售，编排与书价全同原作。盗版者是日本东京金港堂，运往中国代销的是朝日洋行知新社，自光绪三十年九月初七日开始，它在报上公然连续广告"现今在领事衙门备案，准本社出售，并禁止他人冒牌仿造"，"查出即禀提究不贷"②。盗版者时有，但在报上公开亮出名号，还

1　海賊版を作成した主犯を特定した。日本東京金港堂が主犯で、中国に運送し代理販売したのが朝日洋行知新社だそうだ。［写真の上を参照。盗版者是日本東京金港堂，運往中国代銷的是朝日洋行知新社，……166頁］



论近代小说传播中的盗版问题

弼本氏"①，即日商亲自出面表明主角身份，言下之意是该找我论理，怎么却与我的代理人打官司？

这正是日本人的狡猾之处，因为起诉弼本氏，按不平等条约中的领事裁判权，案件应由日本领事审理，这意味着李伯元的官司必输无疑。李伯元之所以向会审公堂报案，而且是以"经理人席粹甫"为被告，目的也正是不让裁判权落入日本领事手中，何况租界当局曾批准过李伯元保护版权的申请。就在弼本氏刊载广告的当日，即光绪三十年十月十五日，会审公堂拘提抗传不到的席粹甫，李伯元终于赢得了这场官司。第二日，李伯元不惜工本用大字在《新闻报》、《时报》、《中外日报》等大报刊载《特别告白》，醒目广告通报审判结果：

翻刻《官场现形记》者看，看，看！出售翻刻《官场现形记》之席粹甫前因抗传不到，经公堂出票拘提，昨日解讯，奉会审宪判席粹甫先枷三天。特此布告，各书坊、宝号幸勿误售受累。是盼。

2　李伯元が訴えたのは、「知新社主人弼本氏」ではなく「経理人（注：支配人、責任者）席粋甫」だ。つまり、弼本氏という名前を出したのが「日本人的狡猾之処［日本人の狡猾なところ］」で、弼本氏を訴えれば不平等条約下の領事裁判権によって事件は日本領事が審理することになる。すると李伯元の訴訟が負けるのは疑いがない。李伯元が会審公堂に届けて「経理人席粋甫」を被告にした理由は、裁判権を日本領事の手に渡さないのが目的だった、そうだ。（上の写真を参照）

どうしてこんなにグチャグチャと長くなるのかわからない。

上記新見解２点の根拠は、なにか。例の新聞広告だ。

利用する資料は、以前とまったく同じ。目を少し動かすだけで見つかるはずのそこにある報道記事を掘りおこしてもいない。陳大康なりの解釈を加えたところ

が該論文の新味だろう。その新解釈は、世界繁華報館の出した出版広告と犯人の出版広告を参照し、その中に出てくる単語を組み合わせて出てきたようだ。

検討する。

１の主犯が日本東京金港堂だというのは、ありえない。

ここになぜ日本金港堂が出てくるのか。陳大康は、まずそこを説明すべきだった。

海賊版の犯人は、出版広告において「東京金港堂」の出版物を「日商洋行知新社」が分売する契約を結んだとうたった。日商朝日洋行知新社が出したその広告の原文はこうだ。「東京金港堂与本社訂定該堂出版各書本社今為分售処」(『中外日報』1904.10.15）陳大康は明記していないが、たぶんこれが金港堂主犯説の根拠だろう。

陳大康は、広告に書いてあることをそのまま信用して来源も示さず論理を飛躍させた。すなわち海賊版の主犯は東京金港堂である。ならば、席粋甫は、どこから日本東京金港堂を引っぱってきたのかを陳大康は検討しなければならなかった。疑問に思わなかったのだろうか。疑問も感じなかったから勝手に利用したらしい。

実は、そう表現した広告文が存在する。商務印書館がそう宣伝した。

商務印書館は、日本金港堂と合弁会社になった。しかし、合弁した事実を公表しなかった。ただ、表向きは金港堂の販売代理店になったと言っただけだ。1903年12月30日付『申報』の自社広告で東京金港堂の名前を大きく掲げてそう宣言した。同時に1904年１月１日付『上海週報』では日本語でも宣伝している。

すなわち、「弊店儀今般東京金港堂書籍株式会社と特約を結び在清国代理店として同社発行の出版物を取次ぎ手広く販売仕候間……日本東京金港堂代理店　商務印書館」である。

上海租界という狭い社会だ。席粋甫は、それを知っている。だから、実在する商務印書館の宣伝文句を盗用して自分のものにした。当時の犯人は、それくらいの知識は持っていた。

ところが現代の陳大康は、そのことを知らないらしい。1904年当時、商務印書館が金港堂との合弁会社になっていた事実を把握していないとわかる。知っていれば、これほど奇妙な新見解を提出するはずがない。

説明する。

商務印書館が刊行したのが雑誌『繍像小説』だ。その編集長に李伯元を招いたのが商務印書館の張元済だった。

横道にそれる、といっても李伯元に関連があるので書いておく。鍵語は「日本」である。陳大康と深いところでつながっている。

過去において、李伯元編集長説を否定し問題提起したのが商務印書館勤務の汪家熔だ。彼がその根拠にあげたのが、張元済の存在だった。張元済が、上海の花柳界で著名な、いわば品行の悪い李伯元を自社が刊行する雑誌の編集長に招くはずがない、とずっと頑固に主張しつづけた。ところが、李伯元を招聘した、という商務印書館自身の出した新聞広告が見つかった。それを汪家熔に提示したが、彼は公には疑義と称してのらりくらりと言い逃れとうとう認めなかった。証拠の資料を目の前につきつけられても、意識から閉め出し事実を認めない。もうほとんど信仰ではないか、と思ったものだ。2014年、欒偉平によって夏曾佑あて張元済の手紙が公表された。それには、李伯元の名前を出して、この人しかいない、と書いている*5。

汪家熔説は、新聞広告の存在によってすでに否定されていた。加えて、張元済の手紙が出現したことにより完全に破綻した。

汪家熔のことを紹介したのは、いったん思いこんだらそれを自分で訂正するのはむつかしい、と考えるからだ。

特に指摘しなければならないのは、汪家熔説に対して最初に反論を出したのが日本人の私だった。1984年に天津へ長期出張したおり、全国紙『光明日報』「文学遺産」欄に汪家熔への反論を投稿した。汪家熔は、北京で職場の同僚から「日本人にやられたらしいな」と嫌味を言われたという。のちに汪家熔本人から私にあてた手紙でそう知らされた。

汪家熔が私の指摘を最後まで拒否しつづけたのは、たぶん背景に日本が存在したからだろう。陳大康も同類ではないかと思い当たる。

閑話休題。

商務印書館と合弁している金港堂が、よりにもよって身近な主編者（編集長といっても同じ)、あの李伯元の著作を盗むだろうか。その理由がない。またその必

要もない。

くりかえす。商務印書館が、小説雑誌刊行のためにわざわざ招聘したのが李伯元だ。陳大康の説明によると、その李伯元が執筆している『官場現形記』の海賊版を、彼が関係している合弁会社の相手である金港堂が作成して販売したことになる。金港堂が主犯であれば、自動的に商務印書館も共犯者になる。陳大康が日本金港堂を狙って放った矢は、結果として商務印書館を射ることになるのだ。日本人にむけたブーメランがもどってきて中国人を襲ってくる。なにかの悪い冗談にしか思えない。どこをどう押したら出てくるのか。陳大康はよくもこれほどの珍説を提出したものだ。それが学術雑誌で有名な『文学遺産』に掲載される。正常ではない。

２については、さらに理解しにくい。

李伯元は裁判に勝つために、主犯の日本金港堂ではなく末端人員の中国人席粋甫を訴えた。陳大康が言っているのは、そういうことだ。

そもそも主犯は日本金港堂ではない。金港堂に弼本氏などという奇妙な名前の社員はいない。もとから日本人の名前らしくない。おまけに本体ではなく尻尾を訴えたのでは裁判の意味がないではないか。尻尾を切っても本体を罰しなければ、海賊版は販売され続ける。陳大康が裁判というものを理解しているのかどうか怪しい。

新聞広告だけを見れば、世界繁華報館の許可を得て日本人が洋装の『官場現形記』を作成販売していると思う人もいるかもしれない。海賊版だと指摘されなければ、当時の一般読者はそう考える可能性はある。だが、上海租界内のことだ。出版人でもある李伯元は、海賊版を作成販売している主犯が中国人席粋甫だと見抜いている。だからこそ外国人が関係しない会審公堂に提訴した。そう考えるほうが無理がない。

もうひとつの注目点は、日本領事の存在だ。

日本領事は、原告である世界繁華報館の広告に出てくる。陳大康は、『新聞報』光緒三十年十月初二日（1904.11.8）を示す。私は『中外日報』光緒三十年十月初七日（1904.11.13）で確認した（一部語句の異なる箇所がある)。

関係部分はこうだ。「前有朝日洋行出售翻刻本蒙日本領事諭令停賣并函請会審

分府黄司馬将托銷之席粋甫伝案厳訊并以附聞」

日本領事は、日本の朝日洋行に海賊版を販売するのを停止するよう勧告したばかりか、委託販売している席粋甫を法廷に召喚し厳重に尋問するよう会審公堂に手紙で要請したという。ここからわかることは、原告中国人と被告であるはずの日本人が一緒になって事件を告発していることだ。陳大康には理解できない奇妙な光景に思えた。そこで陳大康は、これをペテンだ（只是騙人的話。166頁）と切り捨てる。説明することができないから罵った。日本領事がなぜ李伯元に協力しているのか。その意味を考えようとはしない。日本が悪い、という意識が出発点だからそうなる。

日本領事が中国人の李伯元と一緒になって、中国人の席粋甫を告発していることのどこがペテンか。席粋甫が日本の商社、日本の出版社、日本人をかたって海賊版を販売している行為は、日本の名誉を毀損している。日本領事から見れば、席粋甫は日本を隠れ蓑にし、日本を貶めている。そういう犯人を裁判にかけるように働きかけるのは日本領事が当然やるべき仕事のひとつだ。

陳大康の新見解は、原告と犯人の広告をつきまぜ、内容を検討もせず、日中の合弁会社という事実も知らず、独自の角度をつけて成立しているとしかいいようがない。まさか商務印書館とは合弁相手である金港堂に濡れ衣を着せるとは、私は想像もしなかった。

陳大康は、新聞広告しか材料に使用していない、と何度もいう。最大の欠陥は、裁判事件だから報道記事も掲載されたのではないか、というところまで考えが及ばなかったことだ。私は、過去にそれを指摘したことがある。

裁判報道は、1904年11月22付で『同文滬報』『中外日報』『時報』の３紙に載っている。探せばほかにもあるだろう。

「繁華報館李伯元。控席粋甫冒日本人名。翻印官場現形記」「繁華報館前控席粋甫冒日本人之名翻印官場現形記一案」などとはっきり「日本人の名前をかたる」と書いてある*6。

日商朝日洋行、日本知新社など、あるいは日本人の名前にはありそうのない弼本氏とか、すべて席粋甫がでっちあげたと考えるのが普通だし自然だ。どこにも疑問点はない。裁判結果がそれを証明している。

陳大康は、裁判報道記事という重要資料が存在することに気づかないまま、そこにある出版広告の単語だけをこねくりまわしただけ。記事を吟味してはいない。そうして新見解、いや珍説を作りあげた。

陳大康はどうしてそこまで奇妙な方向に突き進んでしまったのか。

鍵語は、汪家熔のばあいと同じ「日本」だ。

陳大康が以前に書いた文章では、広告の途中で日商朝日洋行、日本知新社の名前が消失したことを不思議がっていた。裁判が結審して日本人弼本氏が罰せられなかった点を「勝利したとはいえいくらかふがいないものである（有点窩囊)」とも表現した。ここに理由があるようだ。

つまり、陳大康は、海賊版の作成販売は日本、および日本人の犯行だと最初に思いこんでしまった。だから、それにあわせて新聞広告を理解しようと努力した。立論の出発点が誤っている。そのことに陳自身は気づかない。今も理解していない。

原告の李伯元と一緒になって海賊版の販売停止を勧告した日本領事は、犯人が日本人ではないと把握しているからそうしている。だが、陳大康から見ると日本人のペテンだということになる。

李伯元は、はじめから主犯が中国人席粋甫だと認定して直接会審公堂に提訴している。それにもかかわらず、陳大康にいわせると、弼本氏を出してきたのは、提訴先を変更させるために日本人が画策したことだ。「這正是日本人的狡猾之処」ということになる。日本人なら、ありそうもない「弼本氏」などとは名のらない。陳大康はそれにも気づかない。

陳大康は、金港堂と商務印書館、あるいは李伯元との関係について無知だからこそ立論することができた。押さえるべき資料を取りこぼしたまま、目の前の新聞広告だけをこねくりまわして珍説を開陳したと言わざるをえない。

日本東京金港堂が海賊版作成の主犯である、とどうしても主張するのなら、陳大康にはその具体的な証拠を提出する責任と義務がある。ただちに実行してもらいたい。

もうひとつ気になる点について再度指摘しておこう。

陳大康は、海賊版の著者である日本吉田太郎という名前をどこにも出していな

い。劉穎慧も同様だった。阿英目録に記載があることは、すでに触れた。にもかかわらず、言及しない。過去もそうだったし、今回もそうだ。どういうことか。言わない、あるいは言うことができないのは、日本知新社の海賊版『官場現形記』そのものを見ていないからだろう。

海賊版を論じて、海賊版そのものを見ていないということがあるのだろうか。実物を手にするのが基本だろう。中国の学界は、そういう手抜きを許すのか。疑問に思うほうがおかしいので、それが中国では当たりまえということか。

広告に「日本」という単語を見た瞬間に陳大康の思考は停止したらしい。悪いのはすべて日本だという結論が最初から下されているように見える。この時点で、研究論文ではなくなった。資料の裏付けがない立論は、一般に妄想という。資料を収集することと研究論文を書くことは、別物だという証拠だ。

汪家熔は、日本人からの指摘に立腹して目の前の現実を見失った。陳大康は、日本という単語に過剰反応を示して事実追及を放棄した。根は同じだ。

学術誌『文学遺産』は、論文審査をほんの少しだけ厳密にする必要がある。

そこで劉穎慧『晚清小説広告研究』(北京・人民出版社2014.9）が登場する。

2006年に発表された劉穎慧の論文は、新聞広告を丁寧に収録して海賊版事件の流れを最初に明らかにした。私が高く評価する理由である。

８年後の著作だ。その中の「李伯元《官場現形記》版権訴訟」(90-98頁）において展開した文章は、海賊版裁判関連についていえば以前と変化がない。まったく進展していない。使用する資料も新聞広告だけで、同じものを提示するのみ。裁判で下された判決の報道記事も探していないし、吉田太郎の海賊版そのものにも言及がない。そこは陳大康と同じだ。

以前と同様だから不十分な点はある。だが、劉穎慧は、広告から理解できる事実のみを述べて冷静である。劉の指導教授の陳大康は、同じ資料を使い、広告の字句だけを見て、主犯は日本金港堂だ、日本領事のペテンだ、日本人の狡猾なところだ、などと証拠もなく奇妙な作文をし珍説を公表した。それに比較すれば、劉穎慧の文章は、良質であるということができる。

海賊版問題についての私の論文も、ウェブサイトで公開し世界にむけてに発信している。だが、受信しなければ、役に立たない。日本では、電脳を使用した情

報収集を苦手とする人を情報弱者（略して情弱）というそうだ。そういう人たちに、私から手助けできることはなにもない。

【注】

1）樽本「『官場現形記』裁判」『中国文芸研究会会報』第33号1982.4.1、11-13頁。要旨：「官場現形記」をめぐり、李伯元の遺族と欧陽鉅源の間に裁判めいた事件が発生する。『世界繁華報』の経営から欧陽鉅源が追い出されそうになったこと。「官場現形記」の海賊版を出した出版商が訴えられたこと。裁判官は、出版商に版権を買い取らせ遺族に金を支払い、新聞の経営は欧陽鉅源に任せることにした。遺族、出版商、欧陽鉅源ともに満足する結果となったことを述べる。『清末小説閑談』所収。本論は、中国語訳された。

2）陳大康「歴史上的小説盗版案」ウェブ版。『文匯報』2007.2.27。あるいは2006.10.10、11.24。海賊版『官場現形記』について劉穎慧論文と一部分が重なる。

3）樽本「「官場現形記」裁判の真相――日本を装った海賊版」『清末小説から』第90号2008.7.1、1-19頁。要旨：『官場現形記』の海賊版については、いくつかの候補をあげたことがある。当時の新聞を調査した。ただし、私の努力と資料が不足しており特定することができなかった。その後、中国の研究者劉穎慧が新聞を調査して裁判の時期を特定した。それに触発され、再度調査を行なう。新聞のマイクロフィルムを入手できるようになったのが研究状況の大きな変化である。その結果、いくつかの新しい新聞記事を見つけることができた。先行論文では言及のなかった資料だ。「官場現形記」裁判は、日本人になりすました中国人を裁くものであった。裁判がどのような経過をたどって落着したかを新聞の広告と報道記事によって明らかする。本書所収

4）この箇所の文章は、2015.4.20付で清末小説研究会ウェブサイトに公表したものと重なる。

5）清末小説研究会ウェブサイトに掲げた文章をつぎに示す。

2014.3.14

欒偉平「夏曾佑、張元済与商務印書館的小説因縁拾遺――《繍像小説》創辦前後張元済致夏曾佑信札八封」（『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期（総第174期）2014.1.15）に興味深い手紙が収録されています。

商務印書館の張元済が、夏曾佑にあてた手紙８通を紹介して、おそらく新発見でしょう。

『繍像小説』の主編者問題に関連します。

経過をざっと説明すれば、こうです。

『繍像小説』の主編者といえば、世界繁華報館の小説家李伯元ということになっていました。

1980年代に汪家熔が、李伯元ではない、と異議をとなえます。

李伯元ではない理由のひとつが、彼の「悪い評判」でした。

李伯元は花柳界の指導者（花界領袖）だった。そういう人間を張元済が雑誌の主編者に招聘するわけがない。

それでは誰が『繍像小説』の主編者なのか。汪家熔が従来の李伯元にかわって提出したのが夏曾佑でした（汪家熔「《繍像小説》及其編輯人」『出版史料』第2輯1983.12そのほか）。

それに日本の樽本が反論し、やはり李伯元だ。こうして論争がはじまったのです。17、18年間くらい続いたでしょうか。

問題はすでに解決しています。

証拠は、1907年の新聞広告です。商務印書館が、『繍像小説』の主編者は南亭亭長（すなわち李伯元）であると自社広告で公表しているのです。

ただひとり汪家熔だけが、現在にいたるまでその資料の意味を認めていません。研究者としていかがなものか、と思いますが。

今回の新出資料によると、張元済は夏曾佑にあてた手紙のなかでつぎのように書いています。

「商務館現求助於繁華報館主人李伯元，其筆墨亦平浅，然此外更無人」

執筆の日付は、いうまでもなく旧暦の「四月朔」。欒偉平が注するように新暦1903年４月27日で間違いないと思います。

『繍像小説』の創刊が同年旧暦五月初一日ですから、それ以前の情況を書いている。

張元済自身が、李伯元の名前を出して援助を求めている。しかも、この人しかいない、とまで言っているのがわかります。

まずこれで李伯元主編者説は、より強固なものとなります。

しかも、夏曾佑あての手紙です。汪家熔が提出した、主編者は夏曾佑である、はあきらかに間違い。

６）参考までに引用する。

『中外日報』1904.11.22「抗伝枷示〇繁華報館李伯元。控席粋甫冒日本人名。翻印官場現形記。奉伝三次。席抗不到案請究。司馬判席枷示三天。以為抗伝者戒」

『同文滬報』1904.11.22「抗伝枷示〇繁華報館前控席粋甫冒日本人之名翻印官場現形記一案曾由黄司馬飭差伝訊乃被告屡伝不到司馬即飭差協探往提昨晨到案司馬以席藐視公堂抗伝不到大怒判先枷示三天期満再行訊究」

『時報』1904.11.22「翻刻書者枷号示衆　翻刻官場現形記之席粋甫前奉公堂伝訊乃竟抗不到案而又明目張胆登報出売実属藐視已極嗣経黄司馬出票拘提昨日早堂由捕房解請訊懲奉堂判先行枷号三天以為抗伝者戒至其翻刻存案書籍以及日本領事函請追究仮冒東洋人各節真行訊究（後略)」

上海のシャーロック・ホームズ（初稿）

樽本編訳『上海のシャーロック・ホームズ　ホームズ万国博覧会 中国篇』(国書刊行会 2016.1.20）の「あとがき」として書いた。実際に収録されたものには手が入っている。これが元原稿である。該書に収録する作品が決定するまえに執筆した。ゆえに収録されなかった作品にも言及している。表紙写真を掲げる。

1　はじめに

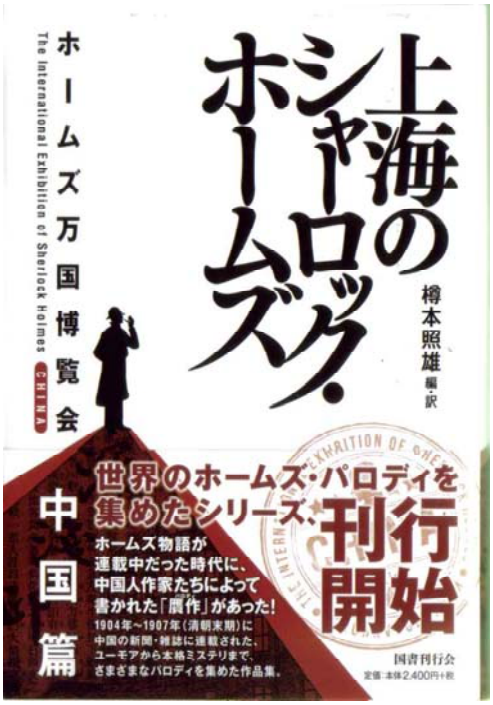
本書に翻訳収録したのは、中国人作家が漢語（中国語の意味）で書いたシャーロック・ホームズを主人公にする作品だ。

コナン・ドイルが創作したホームズ物語の漢訳では、当然ない。その証拠に、各作品には、コナン・ドイルの漢訳名である柯南道爾とか、科南達利などの表示は見られない。

中国人が漢語を使用して独自に創作し、主として中国で発表されたホームズ物語ばかりを集めた。

日本語翻訳にあたり、新聞雑誌の初出、単行本の初版を底本とした。今まで漢語による類似の作品集が編纂刊行されたことは、中国を含めて世界のどこにもないはずだ。本書だけの完全オリジナルである。くりかえせば、中国で編纂された贋作ホームズ作品集など、もとから存在していない。それには、理由がある（後述）。

本書であつかう作品の発表時間は、一九一一年辛亥革命までの清朝末期から、



『上海のシャーロック・ホームズ　ホームズ万国博覧会 中国篇』

一九一二年に成立した中華民国後の民国八（一九一九）年あたりまで（民国初期という）だ。略称して清末民初である。本書に収録した実際の作品は、一九〇四年から一九一五年までに発表された。

わざわざ「中国の」と書かないのは、清朝も中華民国も中国でしか成立しなかったからだ。台湾は、現在でも中華民国を使用している。日本に、あるいは欧米に清末民初があるわけではない。修飾語は不必要だという理由だ。

日本でいえば明治時代後半から大正時代に重なる。今まですでに一百年以上が経過した。

空間でいえば、主として上海に設置された租界、つまり外国租借地という特殊な場所において書かれて発表された。

中国人の手になるこれらの贋作ホームズが、ドイルのホームズ物語と同時代であることを指摘しておきたい。

発表媒体は、新聞雑誌が主となる。当たり前だと思われるかもしれない。だが、それまでの中国には存在していないかった。近代印刷技術が、外国から上海に導

入されてそれが可能になった。印刷所を持った新聞社、出版社が陸続と創設された。新聞雑誌の繁栄がはじまる。それまでの知識人は、科挙の試験に合格して官僚になることが目標だった。だが、新聞雑誌の出現によって筆一本によって生計を立てることが可能になる。新聞記者、専業作家の登場である。清末という時代に新しく出現した出版形態なのだ。小説は、新聞雑誌に連載されるのが通常だが、いきなり単行本で刊行されたものもある。現在普通に見られる印刷文化が、近代中国ではじまったちょうどその時期に当たる。

さらにいえば、清末に西洋から流入した探偵小説という形式は、中国に昔からある伝統的な裁判もの、訴訟事件ものとは基本的に異なる。その新しい流れの中に、贋作ホームズが誕生した。

贋作ホームズと私は書いている。

この「贋作」には、負の意味を込めない。パロディ、パスティーシュといっても同じだ。ただし、漢字だと二字ですむ。ドイルが創作した作品ではない、というだけのこと。各務三郎編『ホームズ贋作展覧会』（河出文庫一九八九）があるではないか。

「偽作」でもいいようなものの、その言葉は、私の好みではない。なぜなら、「偽書」を連想させ、うさんくさい感じがするからだ。

それらを総合して、中国においても、いわば特異な創作探偵小説である。しかも、世界のホームズ愛好家とは基本的に無関係に、中国人が独自に書いて発表したとご理解いただきたい。

どれだけ特異であるか。

贋作ホームズは、現代中国において、どのように評価されているか。そう言っても同じことだ。

現代の中国人は、自国の過去においてそういう豊富な創作探偵小説が存在していることを知らない。研究者は、知らないふりをする。あるいはまったく無視する。あたかも、中国人作家がイギリス人のドイルを模倣して中国流ホームズを創作したこと自体が、とても恥ずかしいことのように思っているかのように見受ける。あるいは、ホームズが出てくると、自動的にドイルの原作にしてしまう。検証するという考えがないようだ。つまり、区別するための基本的知識がない。

これが現実だ。ゆえに贋作ホームズを集めた作品集など、編集刊行するという発想そのものが出てこないらしい。発想がないから、刊行物になるわけがない。

2　天津図書館にて

本書に収録した「深く浅い事件（深浅印）」に関連して、思い出すことがある。どうしても、くり返して書きたくなる。

中国に長期出張していた時の話だ。文字通り中国文化を徹底的に破壊しようとした「文化大革命」後の一九八四年という昔の天津を説明している。

天津図書館にかよって午前午後と蔵書を閲覧していた。その小さい閲覧室は特別で、一九四九年以前に刊行した図書を集めている。入室には、特別の許可を必要とした。そのころ天津ではまだ珍しかった日本製の複写機が、事務所の別の場所に一台置いてあった。市内で複写機を置いているのは、外国人専用ホテル（これではまるで昔の租界だ）くらいしかなかった時代だ。

閲覧室の係員に希望の書籍をわたしておけば、翌日には複写ができる。全ページと口頭で言うだけ。複写依頼書など書いた記憶がない。一枚当たりの複写料金は、日本とかわらない。ということは、当時の天津の物価に比較するととてつもなく高価だということになる。一元が日本円で約一五〇円だった（現在は約一六円）。

そういえば、支払いは人民元ではなく外貨兌換券を使ったことを思い出した。一国で人民元とは別に、外国人専用の紙幣を特別に印刷するなど、当時の中国政府は何を考えていたのか。バスに乗っていたら中年女性の天津市民から、兌換券（漢語で外匯）というものがあるそうだな、見せろ、といわれたことがある。一般市民とは関係のない中国紙幣というのも奇妙なものだった。兌換券でしか購入できない外国製品がある、というものなんだかおかしい。旧ソ連時代にはドルショップというのがあったそうだから、それのマネだったのだろうか。十年間維持して突然廃止になった。知っている人はもう少ないか。

その頃の中国人の月給は、平均六〇元だといわれていた。中国人研究者が複写をしないのは、複写料金があまりにも高すぎたからだろう。複写依頼書がないは

ずだ。天津図書館で一日に大量に、それも中国人の平均月収を超える大金を投じるのは、日本人の私ぐらいしかいなかったらしい。

私は資料収集のために天津に滞在している。複写について、別に不思議にも思っていなかった。ある日、閲覧室の責任者が私に質問した。「商売で複写しているのか」と。中国語はわかるが、言っている意味が私にはわからない。研究のためだ、と説明したがその責任者は理解したようには見えなかった。

いつもの通り、『深浅印』を含めた書籍を数冊、複写依頼に出した。すると、「複写はできない」という。昨日までできていたのに、今日はなぜできない。理由をたずねると「規則だ」というだけ。複写を許可しないという「新しい規則」を日本人ひとりのために特別に作ったらしい。自分に都合のいいように、勝手に規則を変更する。それが末端まで浸透している彼らの原則だと実感した。その背後には、見せてやっているという意識が存在するに違いない。

しかたがない。それ以後は、必要な書籍については、閲覧室でメモをとりながら読むことになった。『深浅印』もそのなかのひとつだ。図書館側が「新しい規則」を作ったのは、商売で複写していると疑ったからだろう。彼ら自身の習慣から発した邪推にすぎない。一九八四年当時は、そんな商売が中国で成立するものなのか、と疑った。とても奇妙な気がしたものだ。

『深浅印』は、くりかえせば一九五〇年代に刊行された阿英の「晩清小説目」（晩清は中国での用語。清末と同じ）によると、ホームズ物語の翻訳である。阿英は、コナン・ドイル（英・柯南道爾）だと明記している。これに疑問を提出した研究者はいない。私も、以前はそう思っていた。ところが、実際に読んでみれば、実は贋作だった。帰国後、そういう論文を書いたことは、すでに述べた。

後年、上海図書館の所蔵本から複写を入手することができた。あの天津図書館で読んだのが、今から三〇年前のことなのか。

3　中国人研究者は無視する

これらの贋作ホームズ物語が、中国の研究者からいかに無視されているか、最近の著作から二例を示す。

あらかじめ言っておきたい。最近刊行された以下の専門書二種は、全体からいえば、高い学術水準を保持する力の入った好著である。私は、そう評価している。

ひとつは、闞文文『清末新聞雑誌の翻訳小説［晩清報刊上的翻訳小説］』（済南・斉魯書社二〇一三・五）だ。

書名どおり、新聞雑誌に掲載された翻訳小説を研究対象とする。新聞の影印が出版され、マイクロフィルムが利用できるようになった最近だからこそなし得た研究だ。ついこの前まで、中国の新聞は、ごく少数を除いて閲覧などできる情況にはなかった。研究環境が整っておらず、以前は研究者が手を出そうにも出せなかった分野だ。その証拠に、前出の先駆的目録で有名な阿英目録には、新聞掲載の小説は収録されていない。小説雑誌が、部分的に含まれているくらいだ。それだけでも、一九五〇年代当時の研究では、阿英は最先端を走っていた。先人が新聞小説を研究しなかった、といって非難する若い研究者の文章を目にすることがある。それは、事情を知らない人の言うことだ。

『申報』に連載された二作品、すなわち本書にも収録する「主婦殺害事件［殺婦奇冤］」と「アマスン事件［三捕愛姆生巨案］」（注：未収録）がホームズを主人公にしている点で、翻訳作品であることを闞文文は疑わない。ホームズが登場すると、思考の回路が自動的にドイルの作品にしてしまうらしい。つまり、贋作ホームズであることに、気づいていない。だからこそ「翻訳小説」としてあつかっている。

欒偉平『小説林社研究』上下（台湾・花木蘭文化出版社二〇一四・三）も、従来は見られなかった詳細な研究成果だ。

小説雑誌『小説林』とそれを刊行した小説林社について、関係書籍を幅広くしかも徹底的に実物で検討したすばらしい研究業績だと思う。

それほどまでに深く探求しているにもかかわらず、贋作ホームズという考えをうかがうことができない。不可解に感じる。

『黄金の骨［黄金骨］』について、次のように書いている。

> 16、馬汝賢は、江蘇元和（今の蘇州）の人。『ホームズ探偵事件黄金骨』を訳した。多くの研究者がみな該書の英文原本を探し出すことができない。偽訳

ではないかと疑う。［16、馬汝賢，江蘇元和（今蘇州）人，訳『福爾摩斯偵探案黄金骨』。很多研究者都找不到該書的英文原本，懐疑是偽訳。］

欒偉平は、『深浅印』のところで同じ語句を使って説明していた。私は、文章の「使い回し」が悪いといっているのではない。それ以外に書きようがなかったのだろう。「偽訳」とここでも書いているのに注目しておく。

『黄金骨』もホームズを表面に出しながら、実は贋作ホームズなのである。

樽本編『清末民初小説目録X』（二〇一五ウェブ公開）では、つぎのように説明した。要点のみ示す。

「華爾金剛石」と合冊。扉、本文冒頭、柱は「福爾摩斯偵探案」とする。贋作ホームズもの［阿英148］が英柯南道爾著とするのは、誤り

以上、二種の著書について、たまたま考察が不十分な部分を採り上げることになってしまった。申し訳ない。

しかし、このなんでもなさそうな箇所にこそ、研究者の意識が表出している。つまり、中国の過去において、贋作ホームズが多数生産されたという事実を知らないらしい。

どうしてそういうことになったのか。

4　中国における探偵小説研究

中国の学界では、全体の傾向として近代翻訳小説研究を軽視する。そのため、研究が遅れている。中国人研究者が、今でも論文にそう書いている。

私が中国近代小説の研究をはじめたのは一九六〇年代後半だ。当時、翻訳研究を進めていた中国人研究者は、ほとんどいなかった。当時の中国大陸では、人間を含めてすべてを破壊しそうな勢いの「文化大革命」が進行中だったこともある。研究も例にもれず全体が活動停止していたのは事実だ。

しかし、「文化大革命」終結後も翻訳小説研究の停滞状態に変化はないように

感じられた。

日本文学の方面から漢訳小説に接近していた中村忠行先生が、一九七〇年代に「清末探偵小説史稿」を日本で発表したのが、日本と中国を通じてほとんど唯一の例外ではないか。先生は、阿英目録に記載された作品名を手がかりにして慎重に説明した。「ドイル物といふが、何れも未見であるので、何とも言へない」残念ながら、生前に実物を目にすることはかなわなかった。

冷遇されている翻訳小説研究だ。なぜ研究がないのか。ながく疑問に感じていた。機会があって、私は、著名な中国人研究者蕭相愷氏に翻訳小説研究の現状について質問したことがある。翻訳に力を入れている阿英目録を増補した人だ（欧陽健、蕭相愷編次「『晩清小説目』補編」一九八九）。翻訳研究の実状にも詳しいだろうと考えた。

その人は、言下に断定した。

「翻訳文学は、中国文学ではない」

私の口からは、ハウッと息が出ただけ。まさか、そのような言葉が返ってこようとは思いもしなかった。中国学界の現実を知らないのか、と日本人の私が笑われている。同時に、中国で翻訳研究が進まない理由も判明したわけだ。

なるほど、中国文学の専門家からは外国文学に見えるらしい。自分たちの研究対象ではないという考えだ。

では、中国人の外国文学研究者はどうか。彼らにすれば外国文学を研究するのが専門であって、漢訳された作品は研究の対象にならない。彼らが漢訳小説に関する論文を発表すると、郭延礼氏はいくつかについてもっと中国文学を勉強してから書けと注意することがあった。郭氏は『中国近代翻訳文学概論』(1998）を書いている。郭氏からすると、先行研究に対する若手研究者の把握が弱いと見えるらしい。

というわけで、翻訳小説研究は誰もやりたがらないし、やらなかった。中国近代文学の両輪、すなわち創作と翻訳という考え（賈植芳による）が成立していなかったし今もあやしい。

私から見れば、中国学界の奇妙な伝統ということになる。それをいうなら、日本でも同じだろうが。

もうひとつは、中国独自の歴史的背景がある。現代中国における小説研究にそれが反映されている。

その元をたどれば、一九一七年当時の文学革命運動がある。

この文学革命運動が、評価の分かれ目だ。実際には、それ以後も贋作ホームズ物語を含めて、多くが書かれ翻訳されている。読者から歓迎されたことがわかる。しかし、文学史では言及されることは少ない。

清末民初の同時代人は、作品が公表されるとただ読むだけ。学界の評価とは、直接の関係はないといっていい。

民初の一九一七年あたりから文学革命派による批判がはじまった。劉半農のところ（「ホームズの大失敗」注：未収録）で出した林訳小説については、文学的価値のない娯楽作品を大量に翻訳したと文学革命派は大いに批判した。のちに鄭振鐸は、林紓がドイル、ハガードなどの二流の小説を漢訳したと非難してもいる。

一九二九年に曾虚白が、翻訳作品目録を編纂し刊行した。それの凡例には、ハガード、コナン・ドイル、ルブランなどの三四流作家の作品は収録しない、と明言している。これが、当時の研究者評論家たちの意識だった。

ドイルのホームズ物語は、同時代の中国人読者によって熱烈に歓迎されたのが事実だ。評論家たちが無視する、あるいは力を入れて非難しなければならなかった。そのことが、実際には盛大に読まれたことを逆に証明している。一九一六年に出た中華書局の『ホームズ探偵事件全集［福爾摩斯偵探案全集］』全一二冊は、一九三六年には二〇版を刊行した。別人の翻訳によるホームズ物語全集も、一九三〇、四〇年代に数種類が出版された。

中国大陸で問題となるのは、学界で評論の主流を占めたのが文学革命派だったことだ。各種の中国現代文学史を見れば、それが理解できる。探偵小説に触れられることは、ほとんどない。言及があったとしても、非難ばかりがなされた。

読者にしてみれば、翻訳が刊行されるだけまだマシだった。一九四八年までは。

一九四九年に中華人民共和国が成立した後は、情況が異なる。出版そのものが上から管理されるようになった。実物が、印刷物のかたちで供給されない。

評論、文学史の分野では、かたよった方向がさらに鮮明になる。文学革命派の視点だけで研究は行なわれ、評論が書かれた。いわば「勝者の文学史」である。

勝者からすれば、林紓が漢訳したホームズ物語など採り上げる価値はない。敗者に指定した人物の作品は、批判しか残されていない。ましてや、贋作となれば。言及があると思うほうが間違い。

中華人民共和国において、それ以前に読者から大いに歓迎されていた大衆小説（漢語では通俗小説）は批判されるべき存在だった。「鴛鴦蝴蝶派」あるいは「礼拝六派」という蔑称を特別に強調しておとしめた。蝶よ花よ、とくだらない内容の小説群だという意味を込めている。その中でも探偵小説と恋愛小説が特に槍玉にあげられた。資本主義を象徴し体現しているかのような扱いをうけて非難されたのだ。中国大陸における探偵小説受難の時代だった。

一九六〇年代後半から現代中国で実行された「文化大革命」は、日本で考えられるような普通の文化運動とは違う。批判の矛先を小説作品そのものに限定しなかった。その作者、さらにはその子孫親戚、研究論文とそれを書いた研究者、などの関連する多数の人々を徹底的に糾弾した。それには社会的な存在を否定し肉体への直接的実践を含んでいる。図書館は、関連書籍の図書カードをカードボックスから抜いた。閲覧禁止にしたのと同じことになる。私は、天津図書館で「採録しない」と書き込んだ図書カードを見たことがある。該当書籍は、蔵書目録に掲載されなかった。中国共産党が有害だと認定した言論や作品は、「毒草」と呼んで禁止した。作品批判はあるが、自分でその作品を読んで確認することができない。論文とはいいながら、批判文の複写をくり返すだけ。

それらの事情は、日本ではたぶん理解されないだろう。あるいは今の中国でも、その実態は隠蔽される傾向があるから知らない人は知らないと思う。

毛沢東が一九六六年に発動し主導し一九七六年彼の死去で収束した「文化大革命」から、中国の学界が立ち直るには時間がかかった。

群衆出版社から漢訳ホームズ物語の一部が刊行されたのは、目録の上から見れば一九五八年だ。そのあと空白がある。『ホームズ探偵事件集［福爾摩斯探案集］』全五冊が同じく群衆出版社から刊行されたのが一九七八年からになる。ようやく出版許可が出たのだろう。二〇年が経過しているではないか。

探偵小説についていえば、中国大陸では空白の期間が長すぎる。いったん断絶した研究を、回復させるには時間がかかるのもしかたがない。探偵小説の見なお

しも、私の記憶によれば、二一世紀前後からようやくはじまったくらいだ。それも中国におけるホームズ物語の受容と中国人作家が創作した探偵小説を研究する段階にとどまっている。

中国人作家による贋作ホームズ作品群は、いまだに研究者の視野には入っていない。そこまで研究するだけの余裕が生じていないようだ。前述のように作中にホームズが登場すれば、何も考えずにすぐさまドイル作品の翻訳だと短絡してしまう理由だろう。その間違いに研究者自身が気づいていない。それも現実だ。

翻訳小説研究が、ややもすれば軽視される傾向にあるという事実は理解できる。

では、贋作ホームズは、どうなる。もとは、贋作であって翻訳ではない。贋作は、創作の部類に分類されるべきものだ。

5　贋作ホームズ

欒偉平は、贋作ホームズを指して「偽訳」と説明した。侮蔑して吐き捨てたような語感がある。翻訳されたホームズをまねて、偽りの翻訳を作った。もともと軽視される翻訳小説研究だが、それと関連しているかのように「偽訳」とくくられて捨てられた印象を私は抱く。

どうやら、中国人研究者は、贋作ホームズを翻訳だと見なしているらしい。誤解である。翻訳研究が冷遇され、その結果探求ができていないところから発生した悪い影響を受けている。

もうひとつは、贋作だ。「偽訳」ということばから推測できるのは、恥ずべき偽作に加えて軽視される翻訳が重なっていることだ。翻訳と創作という基本的な部分で区別することができず、混同したままになっていると言わなくてはならない。

創作の一種だと認定しているらしいのは、私の知る範囲内では、孟松『清末偽訳小説研究』（重慶・西南大学碩士学位論文二〇一三）がそのひとつだ。ただし、その彼にしても「偽造訳作」などと称して侮蔑する。はなはだしくは、利益を追求するために偽訳をつくったとおとしめ、それらがもつ独創性を評価しようとはしない。

そういうわけで、中国人が創作した贋作ホームズに触れる人はいない。

本書に収録した作品は、中国の新聞雑誌に掲載されたまま終わった。単行本も多くが初版止まりだ。新聞雑誌に発表されたとき、基本的に誰も紹介（読書筆記、新聞広告は除く）しなかったし評論もしなかった。単行本についても同じこと。漢訳ホームズ物語が、版を重ねたのとは異なる。

のちの研究者も今の専門家も知らぬ顔をした。

専門家の見解をひとつ紹介する。

探偵小説の専門資料集がある。任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料（1902-2011）』（北京師範大学出版社二〇一三・三）という。探偵小説を論じた文章を収録して便利だ。附録として、探偵小説を掲載した雑誌目録、翻訳と創作の目録がある。行き届いた編集だと思う。これはこれで珍しい。ようやくこの種の刊行物が出てくるようになった。そういう意味で感慨深い。

そこで作品目録を見る。

陳景韓と包天笑のふたりが、新聞『時報』紙上で書き継いだ「上海のシャーロック物語」、あるいは劉半農、陳小蝶の「失敗物語」については、さすがに創作としている。

だが、「深浅印」「黄金骨」「福爾摩斯最後之奇案」「三捕愛姆生巨案」は、あいかわらずドイル原作の翻訳に分類する。そうだろうな、と思うだけで驚きはしない。だが、探偵小説の専門書としてはいかがなものか。理解が不十分だと思う。

さらに、本書に収録した「殺婦奇冤」「鉄宝匣」「中国之福而摩斯偵探談」「中国之福爾摩斯」については、任翔らの目録には未収録だ。

以上を見れば、贋作ホームズ物語に注目する中国人はいないといっていいだろう。中国人研究者の全員が無視して捨てた。今の多くの中国人読者は、それが存在したという知識すら持ってはいないはずだ。だから、中国においては現在にいたるまで、作品集を編んで再度掲載するとか、評論文で言及するとか、学術論文の研究対象にするとかは、ない。まったくの無視だ。中国人自身が抹殺したも同然なのである。

たとえば、以下の作品集には収録されていない。

『晩清小説大系』全三七冊　台湾・広雅出版有限公司一九八四・三
『中国近代小説大系』全八〇冊　南昌・江西人民出版社一九八八・一〇－一九八九・一二／南昌・百花洲文藝出版社一九九一・三－一〇／一九九六・一－一二
『中国近代文学大系1840-1919』全三〇冊　上海書店一九九〇・一〇－一九九六・七
蕭金林『中国現代通俗小説選評・偵探巻』上海文藝出版社一九九二・二
于潤琦主編『清末民初小説書系・偵探巻』北京・中国文聯出版公司一九九七・七・二〇
任翔主編『江南燕（百年中国偵探小説精選：1908-2011）』第一巻　北京師範大学出版社二〇一二・一〇
任翔主編『雀語（百年中国偵探小説精選：1908-2011）』第二巻　北京師範大学出版社二〇一二・一〇
任翔主編『雪獅（百年中国偵探小説精選：1908-2011）』第三巻　北京師範大学出版社二〇一二・一〇

上を見れば、中国人研究者が贋作ホームズに無関心であることがわかる。

私が提案するのは、贋作ホームズという中国人作家の手になる創作を再評価することだ。

上海で活動するホームズが、同時代の中国人からもてあそばれていることをいうだけでも独自の世界が構築されている。ある時期の中国にのみ存在した希有な創作作品群なのである。

6　おわりに

本書の刊行にこそ「意表之外」という言葉を使いたい。漢語では基本的に誤用ということになっている。「意表」はすでに意外、予想外という意味だ。「意表をつく（出人意表）」のように使う。外の外だから内になる。ゆえに間違いだという説明である。古文の達人林紓が使用した、と非難されるのが普通だ。ただし、

林紓がどこで使用したのか、具体的に指摘した文章を知らない。たぶん、これも濡れ衣のひとつだろう。私はそう疑っている。

それはさておき、予想外のそのまた外側だと考えれば超予想外でかまわない。予想外を強調する。だからこそ本書の刊行は「意表之外」だと言いたい。

中国において豊饒なホームズ受容の時代が過去に存在した。それを国書刊行会の佐藤純子氏が日本で再び発見されたことを喜ぶ。日本で、というのが重要だ。なぜなら、現代中国人読者の想像もできないことが、日本で実現したからだ。

謝辞: 資料を提供された平山雄一、劉徳隆の両氏に感謝します。

あ と が き

私の著作は『清末小説閑談』(1983）が最初だった。書名はいうまでもなく阿英『小説閑談』(1936）にちなんでいる。阿英は、清末小説研究でも著名な先行者だ。清末という研究分野を独自に切り開いた功績に対して敬意を表した。阿英が論文で展開したいくつかの論点について、私が異なる見解を主張していることとは矛盾しない。このたびも彼の『小説二談』(1958）をふまえて『清末小説二談』とする。

本書には、今までの論文集には収録していない文章を集めた。ほぼ発表年順に配列してある。収録したなかで古いものは1981年公表だ。30年以上も前の文章だとは自分でも意外に思う。

これまで本に収録しなかった理由をいえば、専門分野から少しはずれると感じたからだ。劉鉄雲が「老残遊記」で描写した済南の泉と鄭州の黄河決壊だ。現地を訪問した報告書は、多くの写真も収録している。貴重な資料であることに違いはない。しかし、紙媒体で再度印刷するには向かないと思った。印刷に写真を使用すると費用が余分にかかるからだ。あるいは、電脳に関係する文章などは違和感があるかもしれない。中国文学研究に電脳がどのようにかかわっているのか。一般には理解がむつかしいだろう。

私は、その時々に抱いた興味を追究して論文を書いている。個人電脳についての話題が続くのもそのころ電脳で清末民初小説目録を編纂することに集中していたからだ。電脳を使うといっても基本のところで清末民初小説と関係している（ワープロ専用機を導入したことも書いた。こちらは小説研究とは直接の関係がない。ゆえに収録しなかった)。

それにしても、初期MS-DOSの時代に使い始めた個人電脳によくも大きな労力をそそいだと思う。それしかなかった時代だから、使い勝手が悪いのにも気づかなかった。現在から見れば、ほとんど原始時代だ。ただし、その時作成したデータは今でも生かして利用している。

例外は本書所収の文章でいえば、最初の「茅盾の「童話」」のみだ。これは電脳を導入する前の文章だ（「「童話」叢書目」は新しく作成した）。日本語簡易タイプライタで会報の版下を作成したもの。このたび本書に収録するにあたり本文を入力しなおした。

本書に収録したのは、基本のところで清末民初小説につながる文章ばかりである。問答形式にするなど読みやすさを心がけたものもある。「閑談」の延長線上にあるのだから、余裕をもって見てほしい。

文章を集めてみて同じ話題をくり返していることがわかる。阿英目録、「老残遊記」の執筆問題、「文明小史」との盗用問題、『繍像小説』主編問題、発行遅延問題、『官場現形記』海賊版裁判、南亭亭長の正体などだ。関連して「『繍像小説』刊行一覧」は本書では同じものを２ヵ所（論文23と論文47）に収録した。いくどか更新して最新の一覧表だ。重複させた方が閲覧に便利だろうという理由である。

論題が重なるのは途中で新しい資料が出てきたのに対応したからだ。その資料を組み込んであらためて考えなおす。これをくり返せば同類の文章にならざるをえない。私にとっては必然の結果だ。

最初の問題提起から時間がだいぶ経過して中国の研究者が参加してくることもあった。問題が問題であるという認識が遅れている。ないよりもマシだが。

以前と大きく異なるのは、資料を利用できる環境が変わったことだ。その変化は主として「文化大革命」終結後に出現した。新聞、雑誌の影印、マイクロフィルム化が増えてきた。それらの多くは、以前には利用できなかった。実物とかわらない材料を活用して議論に参入するのだから資料的信頼性が高くなる。

インターネットの普及も大きな転換だといえる。学生時代から身の回りに整備されているのが現在の研究者たちだろう。彼らからすれば、それらを利用していない研究者が発表した過去の論文は不十分に見えるかもしれない。

少し説明する。

電脳の鍵盤をたたくだけで利用できる資料が出てくれば、それなりの成果をあげることが可能だ。１冊の書物を求めて遠くの図書館へ行く必要はなくなったかもしれない。ただし、簡単に入手できる資料群に振り回される恐れがないとも限らない。他人の論文を追跡するだけでは新しい発想を得ることはむつかしいと考える。ウェブ上にある論文は、すでに既知である。未知のものは掲載されない。本当に必要な資料は、ウェブ上には存在しない可能性がある。万能ではないのだ。

新しい発見をするためには、それなりの努力が必要だという当たり前の話になる。

林紓は、シェイクスピアとイプセンの戯曲を小説にかえて漢訳した。戯曲と小説の区別もつかないほど無知だった。鄭振鐸が林紓を非難した理由である。林紓が死去した1924年以来、それが定説となっている。異議をとなえた人はいない。インターネット全盛の現代において、鄭振鐸が犯した間違いだったと指摘した研究者がいただろうか。誰も言わないから、私がいう。ひとりもいない。日本を含めて研究者全員が鄭振鐸の実行した林紓批判を追認し支持し追随していた。現在もそうだ。例外がないということに私は驚く。

本書に収録した「林訳シェイクスピア冤罪事件（要旨）」は、2007年に公表した。

私の指摘は次のとおり。林訳シェイクスピアの底本は、イギリス人作家クイラー＝クーチが小説化したものである。小説を漢訳して小説になるのは当然ではないか。戯曲を小説にかえて漢訳した事実はない。林紓にとっては冤罪であった。そのことを明らかにしたはじめての文章だ。

また、イプセンについても同様であることを私は見つけた。こちらの底本はドレイコット・M・デルによって小説化されたものだ。

それらによって鄭振鐸による林訳批判は根底から崩壊した。

くり返す。林訳批判の根拠は存在しなかった。林紓は濡れ衣を着せられて非難された。鄭振鐸が引き起こした林紓冤罪事件であった。客観的に見て、中国現代文学研究史上まれに見る大事件である。

林紓が無実であることを私は証拠を提出して論じた。また単行本にしてもいる。『林紓冤罪事件簿』2008と『林紓研究論集』2009だ。２冊を統合増補して『林紓

冤罪事件簿（統合増補版）』を2017年にウェブで公表した。

しかし、それらに対する中国人研究者からの反応はないに等しい。日本語の著作だから無理もないとはいえる。

私が書いた林紓批判を覆す論文は、林紓に無実の罪を押しつけた文学革命派を批判することにつながる。すると中国ではどこかのレベルで、その種の文章を公表するのは都合が悪いと判定されるらしい（これについては『林紓冤罪事件簿（統合増補版）』の「あとがき」を参照）。残念だといっているわけではない。そうだろうな、と思うだけ。

ここは評価の問題になる。私が進めている事実の探究とは別次元のものだ。中国の学界が受け入れる入れないは別として、事実は事実なのだ。

というようなわけで機会があれば『清末小説三談』を出すことがあるかもしれない。その準備を始めている。

樽本照雄

著者略歴

樽本照雄（TARUMOTO Teruo）

1948年　広島市生まれ
1972年　大阪外国語大学大学院修士課程修了
現　在　大阪経済大学名誉教授 博士(言語文化学)
　　研究誌『清末小説から』を公開中
編著書　『清末民初小説目録Ｘ』ウェブ公開 2015
　　『上海のシャーロック・ホームズ　ホームズ万国博覧会 中国篇』
　　国書刊行会2016.1.20
　　『初期商務印書館研究(増補版)』ウェブ公開 2016
　　『商務印書館研究論集(増補版)』ウェブ公開 2016
　　『清末民初小説目録Ｘ２』ウェブ公開 2016
　　『林紓冤罪事件簿(統合増補版)』ウェブ公開 2017
　　『漢訳アラビアン・ナイト論集（増補版)』ウェブ公開 2017
　　『清末翻訳小説論集（増補版)』ウェブ公開 2017

清末小説二談（しんまつしょうせつにだん）

発　　行★2017年2月1日
著 者 兼
発 行 人★樽本照雄
発 行 所★清末小説研究会　〒520-0806
　　滋賀県大津市打出浜８番4-202
　　樽本照雄方
　　http://shinmatsu.main.jp

Printed in Japan
非 賣 品